

# 磐越自動車道関係発掘調査報告書

おお さか うえ みち  
大 坂 上 道 遺 跡  
さる びたい  
猿 額 遺 跡  
なか だな  
中 棚 遺 跡  
まき の さわ  
牧 ノ 沢 遺 跡

1 9 9 5

新 潟 県 教 育 委 員 会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

# 磐越自動車道関係発掘調査報告書

おお さか うえ みち  
大 坂 上 道 遺 跡  
さる びたい  
猿 額 遺 跡  
なか だな  
中 棚 遺 跡  
まき の さわ  
牧 ノ 沢 遺 跡

新 潟 県 教 育 委 員 会  
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団



## 序

磐越自動車道は、福島県いわき市と当県新潟市とを結ぶ高速自動車道で、現在完成に向けて着々と工事が進められています。全線が開通すると、太平洋側と日本海側が結ばれるとともに常磐・東北・北陸自動車道とも連結され、それぞれの地域の発展に多大な役割を果たすものと期待されております。

本書はこの磐越自動車道建設に伴う津川町「大坂上道遺跡」・「猿額遺跡」・「中棚遺跡」、三川村「牧ノ沢遺跡」の発掘調査報告書です。

「大坂上道遺跡」では、当県ではまれな縄文時代中期の関東系の土器が発見されています。また、縄文時代後期のアスファルトが詰まった土器は、石油産出地帯である当県でも初例のもので、非常に注目されます。「猿額遺跡」では縄文時代前期の東北系の土器がまとまって発見されています。こうしたことから、東蒲原郡の縄文時代は各地からの影響を受けて生活が営まれていたことが明らかにされました。

今回の調査成果が、今後の考古学研究に資するとともに、県民の方々の埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、多大なご協力とご援助を賜った津川町・三川村教育委員会並びに本調査に参加された地元の方々に対して厚く御礼申し上げます。また、日本道路公団新潟建設局・同津川工事事務所には格別の御配慮を賜りました。ここに深甚なる謝意を表します。

平成7年3月

新潟県教育委員会

教育長 本間 栄三郎

# 例 言

1. 本報告書は新潟県東蒲原郡津川町大字西字大坂上道西・猿額中丸・中棚および同郡三川村大字谷花字牧ノ沢乙に所存する大坂上道遺跡・猿額遺跡・中棚遺跡・牧ノ沢遺跡の発掘調査記録である。

発掘調査は磐越自動車道の建設に伴い、新潟県が日本道路公団から受託して実施したものである。

2. 発掘調査は調査主体である新潟県教育委員会（以下、県教委と略す）が財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団と略す）に調査を委託し、平成4年度・5年度に実施した。
3. 整理作業および報告書作成にかかる作業は平成4年度～6年度に実施し、埋文事業団調査課がこれにあたった。
4. 出土遺物と調査にかかる資料は、すべて県教委が保管している。遺物の注記は略記号を以下のように用いた。また注記には遺跡の名称とともに出土地点や層位、出土地点によって遺物番号を併記した。

オオ……大坂上道遺跡

ナカ……中 棚 遺 跡

サル……猿 額 遺 跡

マキ……牧ノ沢遺跡

5. 石器の材質については、新潟県教育センター地学研究室の河内一男氏にご教示を賜わった。
6. 石器の使用痕については、種類ごとに異なる網目で表示して図版の凡例に付した。
7. 各遺跡の遺物番号は土器・石器ごとに通し番号とし、図面図版と写真図版の番号は一致している。
8. 文中の註はすべて脚註とした。また引用文献は著者及び発行年（西暦）を文中 [ ] で示し、巻末に一括して掲載した。
9. 本書の作成は、滝沢規朗（埋文事業団文化財調査員）が担当した。執筆は滝沢を中心に分担し、北村亮（同主任調査員）、佐藤正知（同主任調査員）、阿部雄生（同文化財調査員）がこれにあたった。執筆分担は第II章1・2、第VI章3、第VIII章1～3が阿部、第V章1～3が佐藤、第VIII章4・5が北村、ほか滝沢である。また、第IX章は古環境研究所に委託した。
10. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大なご教示・ご助言を賜った。厚く御礼申し上げます。（敬称略、五十音順）

赤塚弘美、荒木繁雄、石田昭夫、遠藤 佐、河内一男、興野義一、小林 巖、小林謙一、小林正史  
坂井秀弥、関 雅之、田中耕作、田辺早苗、立木宏明、山内利秋、横山勝栄、吉井雅勇

# 目 次

## 第I章 調査に至る経緯

## 第II章 遺跡の位置と環境

|   |                      |   |
|---|----------------------|---|
| 1 | はじめに .....           | 2 |
| 2 | 地理的環境と沼沢火山灰層 .....   | 2 |
|   | A 地形概観 .....         | 2 |
|   | B 沼沢火山灰層 .....       | 3 |
| 3 | 歴史的環境 .....          | 7 |
|   | A 周辺の遺跡 .....        | 7 |
|   | B 文献資料からみた東蒲原郡 ..... | 9 |

## 第III章 調査の概要

|   |                |    |
|---|----------------|----|
| 1 | 第一次調査 .....    | 11 |
|   | A 大坂上道遺跡 ..... | 11 |
|   | B 猿額遺跡 .....   | 11 |
|   | C 中棚遺跡 .....   | 13 |
|   | D 牧ノ沢遺跡 .....  | 13 |
|   | E 調査体制 .....   | 14 |
| 2 | 第二次調査 .....    | 14 |
|   | A 調査方法 .....   | 14 |
|   | B 調査経過 .....   | 15 |
|   | C 調査体制 .....   | 17 |
| 3 | 整理作業 .....     | 18 |
|   | A 方法 .....     | 18 |
|   | B 経過と体制 .....  | 19 |

## 第IV章 記述方法

|   |               |    |
|---|---------------|----|
| 1 | はじめに .....    | 20 |
| 2 | 記述方法 .....    | 20 |
|   | A 図版・記述 ..... | 20 |
|   | B 遺構 .....    | 20 |
|   | C 遺物 .....    | 20 |

## 第V章 大坂上道遺跡

|   |             |    |
|---|-------------|----|
| 1 | 調査の概要 ..... | 24 |
|---|-------------|----|

|   |            |    |
|---|------------|----|
| A | 調査地の現況     | 24 |
| B | 調査方法       | 24 |
| C | グリッドの設定    | 25 |
| 2 | 層序と遺物の出土状況 | 25 |
| A | 層序         | 25 |
| B | 遺物の出土状況    | 25 |
| 3 | 遺構         | 27 |
| A | 概要         | 27 |
| B | 各説         | 27 |
| 4 | 出土遺物       | 32 |
| A | 縄文土器       | 32 |
| B | 土製品        | 37 |
| C | 石器         | 38 |
| D | 平安時代の土器    | 43 |
| E | 近世陶磁器・銭貨   | 45 |
| 5 | 小結         | 46 |

## 第VI章 猿 額 遺 跡

|   |            |    |
|---|------------|----|
| 1 | 調査の概要      | 47 |
| A | 調査地の現況     | 47 |
| B | 調査方法       | 47 |
| C | グリッドの設定    | 48 |
| 2 | 層序と遺物の出土状況 | 48 |
| A | 層序         | 48 |
| B | 遺物の出土状況    | 50 |
| 3 | 遺構         | 52 |
| A | 概要         | 52 |
| B | 各説         | 52 |
| 4 | 出土遺物       | 55 |
| A | 縄文土器       | 55 |
| B | 石器         | 60 |
| C | 中世・近世      | 64 |
| 5 | 小結         | 65 |

## 第VII章 中 棚 遺 跡

|   |            |    |
|---|------------|----|
| 1 | 調査の概要      | 66 |
| A | 調査地の現況     | 66 |
| B | 調査方法       | 66 |
| C | グリッドの設定    | 66 |
| 2 | 層序と遺物の出土状況 | 67 |
| A | 層序         | 67 |
| B | 遺物の出土状況    | 67 |

|   |              |    |
|---|--------------|----|
| 3 | 遺 構          | 68 |
|   | A 概 要        | 68 |
|   | B 各 説        | 68 |
| 4 | 出土遺物         | 69 |
|   | A 縄文土器       | 69 |
|   | B 石 器        | 70 |
|   | C 中・近世陶磁器、銭貨 | 75 |
| 5 | 小 結          | 75 |

## 第Ⅷ章 牧ノ沢遺跡

|   |            |    |
|---|------------|----|
| 1 | 調査の概要      | 76 |
|   | A 調査地の現況   | 76 |
|   | B 調査方法     | 76 |
|   | C グリッドの設定  | 76 |
| 2 | 層序と遺物の出土状況 | 77 |
|   | A 層 序      | 77 |
|   | B 遺物の出土状況  | 78 |
| 3 | 遺 構        | 78 |
|   | A 概 要      | 78 |
|   | B 各 説      | 78 |
| 4 | 出土遺物       | 79 |
| 5 | 小 結        | 80 |

## 第Ⅸ章 自然科学の分析

|   |             |    |
|---|-------------|----|
| 1 | 大坂上道遺跡の花粉分析 | 81 |
|   | A 試料と方法     | 81 |
|   | B 結 果       | 81 |
|   | C おわりに      | 83 |
| 2 | 大坂上道遺跡の珪藻分析 | 83 |
|   | A はじめに      | 83 |
|   | B 試料および処理   | 83 |
|   | C 結 果       | 85 |
| 3 | 放射性炭素年代測定結果 | 85 |

## 第Ⅹ章 ま と め

|   |                     |    |
|---|---------------------|----|
| 1 | 縄文時代における土器様相の変換について | 87 |
| 2 | 遺構について              | 88 |

|           |    |
|-----------|----|
| 〈要 約〉     | 89 |
| 〈参考・引用文献〉 | 90 |
| 〈遺物観察表〉   | 93 |

# 插图目次

|      |                          |    |
|------|--------------------------|----|
| 第1図  | 遺跡付近の段丘模式図               | 3  |
| 第2図  | 沼沢カルデラ・只見川・阿賀野川の位置図      | 4  |
| 第3図  | 大坂上道・猿額遺跡における沼沢火山灰層の堆積状況 | 5  |
| 第4図  | 第一次調査地点の沼沢火山灰層堆積状況       | 6  |
| 第5図  | 第一次調査地点における段丘模式図         | 6  |
| 第6図  | 津川町周辺の主要遺跡               | 8  |
| 第7図  | 大坂上道遺跡の第一次調査範囲           | 12 |
| 第8図  | 猿額遺跡・中棚遺跡の第一次調査範囲        | 12 |
| 第9図  | 牧ノ沢遺跡の第一次調査範囲            | 13 |
| 第10図 | 大坂上道遺跡・猿額遺跡の年度別第二次調査範囲   | 16 |
| 第11図 | 遺構断面の模式図                 | 20 |
| 第12図 | 縄文土器の部位名称模式図             | 21 |
| 第13図 | 大坂上道遺跡の土層柱状図             | 26 |
| 第14図 | 大坂上道遺跡出土の石鏃及び未製品の長幅図     | 38 |
| 第15図 | 大坂上道遺跡出土の篋状石器と打製石斧の長幅図   | 39 |
| 第16図 | 大坂上道遺跡出土の磨石類長幅図          | 41 |
| 第17図 | 猿額遺跡の土層柱状図               | 49 |
| 第18図 | 沼沢火山灰層堆積地点におけるII層出土遺物    | 50 |
| 第19図 | 猿額遺跡下段遺物集中地点の出土遺物        | 51 |
| 第20図 | 猿額遺跡第III群土器の分類図          | 56 |
| 第21図 | 猿額遺跡第III群土器の法量分布図        | 57 |
| 第22図 | 猿額遺跡出土尖頭器の長幅図            | 60 |
| 第23図 | 猿額遺跡出土の篋状石器と打製石斧の長幅図     | 61 |
| 第24図 | 猿額遺跡出土の磨石類長幅分布図          | 62 |
| 第25図 | 猿額遺跡4号土坑出土の剥片長幅図         | 64 |
| 第26図 | 猿額遺跡出土の中・近世陶磁器           | 64 |
| 第27図 | 中棚遺跡の土層柱状図               | 67 |
| 第28図 | 中棚遺跡出土の磨石類長幅図            | 73 |
| 第29図 | 中棚遺跡4号土坑出土剥片の長幅図         | 75 |
| 第30図 | 牧ノ沢遺跡位置図                 | 76 |
| 第31図 | 牧ノ沢遺跡の土層柱状図・グリッド設定図      | 77 |
| 第32図 | 大坂上道遺跡の花粉化石分布図           | 81 |
| 第33図 | 大坂上道遺跡の主要珪藻化石ダイアグラム      | 85 |

# 表 目 次

|      |                        |    |
|------|------------------------|----|
| 第1表  | 周辺の主要遺跡一覧              | 8  |
| 第2表  | 第一次調査の概要               | 13 |
| 第3表  | 調査と整理の経過               | 19 |
| 第4表  | 不定形石器の分類表              | 22 |
| 第5表  | 磨石類の分類表                | 23 |
| 第6表  | 大坂上道遺跡出土の磨石類組成表        | 42 |
| 第7表  | 猿額遺跡出土の磨石類組成表          | 63 |
| 第8表  | 中棚遺跡出土の磨石類組成表          | 73 |
| 第9表  | 大坂上道遺跡から産出した花粉化石一覧表    | 82 |
| 第10表 | 大坂上道遺跡の珪藻化石産出表         | 84 |
| 第11表 | 大坂上道遺跡出土試料の放射性炭素年代測定結果 | 86 |

# 図 版 目 次

## 図面図版

|       |   |
|-------|---|
| 図版 1  | 大坂上道遺跡・猿額遺跡・中棚遺跡位置図   |
|       | 大坂上道遺跡  |
| 図版 2  | 遺跡全体図   |
| 図版 3  | 遺構個別実測図 1 土坑(1)   |
| 図版 4  | 遺構個別実測図 2 土坑(2)   |
| 図版 5  | 遺構個別実測図 3 フラスコ状土坑、焼土坑、埋設土器  |
| 図版 6  | 遺構個別実測図 4 集石・集石土坑、不明遺構  |
| 図版 7  | 縄文土器実測図 1   |
| 図版 8  | 縄文土器実測図 2   |
| 図版 9  | 縄文土器実測図 3   |
| 図版 10 | 縄文土器実測図 4   |
| 図版 11 | 石器実測図 1 (遺構内・V層出土・II層出土) 磨製石斧・石鏃・石錐・篋状石器・打製石斧<br>不定形石器・磨石類・彫刻刀形石器・尖頭器 |
| 図版 12 | 石器実測図 2 (II層出土) 石錐・石匙・打製石斧・篋状石器                                       |
| 図版 13 | 石器実測図 3 (II層出土) 篋状石器・磨製石斧・不定形石器                                       |
| 図版 14 | 石器実測図 4 (II層出土) 不定形石器   |
| 図版 15 | 石器実測図 5 (II層出土) 不定形石器・磨石類   |
| 図版 16 | 石器実測図 6 (II層出土) 磨石類   |
| 図版 17 | 石器実測図 7 (II層出土) 石皿・台石・砥石  |
| 図版 18 | 平安時代の土器実測図 1 (遺構内・包含層出土)  |
| 図版 19 | 平安時代の土器実測図 2 (包含層出土)  |
| 図版 20 | 平安時代の土器実測図 3 (包含層出土)  |
| 図版 21 | 中・近世陶磁器、錢貨の実測図  |

### 猿額遺跡

- 図版 22 遺跡全体図  
図版 23 遺構個別実測図  
図版 24 縄文土器実測図 1 (遺構内・V層出土遺物)  
図版 25 縄文土器実測図 2 (II層出土遺物)  
図版 26 縄文土器実測図 3 (II層出土遺物)  
図版 27 石器実測図 1 (遺構内出土) 剝片・磨石類  
図版 28 石器実測図 2 (遺構内・II層出土) 磨石類・不定形石器・彫刻刀形石器・石刃・尖頭器  
図版 29 石器実測図 3 (II層出土) 石錐・楔形石器・籠状石器・打製石斧・磨製石斧  
図版 30 石器実測図 4 (II層出土) 不定形石器  
図版 31 石器実測図 5 (II層出土) 不定形石器  
図版 32 石器実測図 6 (II層出土) 磨石類  
図版 33 石器実測図 7 (II層出土) 石皿・搬入礫

### 中棚遺跡

- 図版 34 遺跡全体図  
図版 35 遺構個別実測図 土坑、フラスコ状土坑、集石土坑  
図版 36 縄文土器・石器実測図 1 剝片  
図版 37 石器実測図 2 剝片・石鏃・石匙・楔形石器・石錐  
図版 38 石器実測図 3 籠状石器・不定形石器  
図版 39 石器実測図 4 不定形石器・礫器・磨製石斧  
図版 40 石器実測図 5 磨石類  
図版 41 石器実測図 6、中・近世の遺物 磨石類・砥石・石皿、陶磁器、古銭

### 牧ノ沢遺跡

- 図版 42 遺跡全体図  
図版 43 遺構個別実測図  
図版 44 縄文土器実測図

## 写真図版

### 大坂上道遺跡

- 図版 45 1.調査前全景 2.調査前 3.調査前 4.東側北部完掘  
図版 46 1.1号土坑断面 2.2号土坑完掘 3.4号土坑完掘 4.4号土坑断面 5.5号土坑完掘  
6.5号土坑完掘 7.6号土坑完掘 8.6号土坑断面 9.8号土坑完掘 10.8号土坑断面  
図版 47 1.1号フラスコ状土坑完掘 2.1号フラスコ状土坑断面 3.1号フラスコ状土坑遺物出土  
状況  
図版 48 1.1号・2号焼土坑完掘 2.1号・2号焼土坑断面 3.4号・5号焼土坑完掘 4.4号  
・5号焼土坑断面 5.1号埋設土器検出状況 6.1号埋設土器断面  
図版 49 1.1号集石土坑検出状況 2.1号集石土坑断面 3.4ライン最北セクション 4.4ライ  
ン中央セクション 5.4ライン最南セクション 6.B3-5II層の土器出土状況  
図版 50 1.3号集石検出状況 2.3号集石断ち割り 3.2号集石検出状況 4.D3-12II層の土器  
出土状況 5.性格不明遺構完掘 6.性格不明遺構断面  
図版 51 1.東側南部完掘 2・3.東側南部のテストピット 4.東側南部のテストピット全景 5.  
E-9~10グリッドのセクション 6.10ライン最南セクション



- 図版 52 1.10号土坑遺物出土状況 2.10号土坑断面 3.10号土坑遺物出土状況 4.10号土坑完掘
- 図版 53 1.4号集石土坑検出状況 2.4号集石土坑断面 3.4号集石土坑完掘
- 図版 54 1.5号集石土坑検出状況 2.5号集石土坑完掘 3.5号集石土坑断面 4.5号集石土坑断面
- 図版 55 1.中央部北側完掘 2.中央部南側完掘 3.5号焼土坑完掘 4.5号焼土坑断面 5.2号風倒木土器出土状況
- 図版 56 1.中央部北側完掘 2.15ライン最北のセクション 3.15ラインセクションアップ 4.11号土坑完掘
- 図版 57 1.西部南側完掘 2.土偶出土状況 3.土偶出土状況アップ 4.18~20ラインセクション 5.a-a'19ラインセクション
- 図版 58 1.西部・北側完掘 2.13号土坑完掘 3.13号土坑断面 4.14・15・16号土坑完掘 5.14号土坑断面 6.15号土坑断面 7.16号土坑断面
- 図版 59 1.17号土坑遺物出土状況 2.17号土坑断面 3.17号土坑完掘 4.2号フラスコ状土坑完掘 5.2号フラスコ状土坑断面
- 図版 60 1.2号埋設土器検出状況 2.2号埋設土器断面 3.2号埋設土器完掘 4.c-c' Bグリッドラインセクション 5.6.19グリッド付近の北壁セクション
- 図版 61 遺物1 縄文土器
- 図版 62 遺物2 縄文土器
- 図版 63 遺物3 縄文土器
- 図版 64 遺物4 縄文土器・土製品
- 図版 65 遺物5 石器
- 図版 66 遺物6 石器
- 図版 67 遺物7 石器
- 図版 68 遺物8 石器
- 図版 69 遺物9 土師器・須恵器・黒色土器
- 図版 70 遺物10 土師器、須恵器、黒色土器、中・近世陶磁器
- 猿額遺跡
- 図版 71 遺物11 土師器、須恵器、中・近世陶磁器
- 図版 72 1.調査前全景 2.調査後全景 3.斜面トレンチ 4.斜面トレンチ断面
- 図版 73 1.下段中央部完掘 2.下段南側完掘 3.下段北側完掘
- 図版 74 1.1号土坑完掘 2.1号土坑断面 3.3号土坑完掘 4.3号土坑断面 5.5号土坑遺物出土状況 6.5号土坑完掘 7.6号土坑完掘 8.6号土坑断面 9.下段遺物集中地点 10.6ライン最南部セクション
- 図版 75 1.2号土坑土器出土状況 2.2号土坑完掘 3.2号土坑土器出土状況 4.2号土坑断面
- 図版 76 1.2.8号土坑遺物出土状況 3.8号土坑断面 4.8号土坑完掘 5.1号埋設土器検出状況 6.1号埋設土器断面 7.遺物集中地点
- 図版 77 1.1号フラスコ状土坑遺物出土状況 2.1号フラスコ状土坑下層の遺物出土状況 3.1号フラスコ状土坑完掘 4.1号フラスコ状土坑断面
- 図版 78 1.3号焼土坑完掘 2.3号焼土坑断面 3.2号焼土坑完掘 4.E6付近の遺物出土状況 5.6ライン南側セクション 6.D9付近の斜面セクション 7.下段最北部の調査前 8.下段最北部完掘 9.平成5年度調査分完掘
- 図版 79 1.上段西部の南側完掘 2.上段西部の北側完掘 3.上段東部の南側完掘 4.上段東部の北側完掘

図版 80 1. 2号フラスコ状土坑完掘 2. 2号フラスコ状土坑断面 3・4. 2号フラスコ状土坑土器出土状況 5・6. 遺物出土状況

図版 81 1. 4号焼土坑確認面 2. 4号焼土坑断面 3. 5号焼土坑確認面 4. 5号焼土坑断面 5. F-12・13付近の東西セクション 6. F-12ラインセクション 7～10. 遺物出土状況

図版 82 遺物1 縄文土器

図版 83 遺物2 縄文土器

図版 84 遺物3 縄文土器

図版 85 遺物4 石器

図版 86 遺物5 石器

図版 87 遺物6 石器

図版 88 遺物7 石器、中・近世陶磁器

#### 中棚遺跡

図版 89 1. 調査前全景 2・3. 完掘

図版 90 1. 調査区中央部完掘 2. Cライン最東セクションアップ 3. Cライン最東セクション 4. 1号土坑完掘 5. 1号土坑断面 6. 2号土坑完掘 7. 3号土坑完掘

図版 91 1・2. 4号土坑検出状況 3. 4号土坑断面

図版 92 1. 1号フラスコ状土坑遺物出土状況 2. 1号フラスコ状土坑断面 3. 1号フラスコ状土坑完掘

図版 93 1. 1号集石土坑検出状況 2. 1号集石土坑断面 3. 2号集石土坑検出状況 4. 2号集石土坑断面

図版 94 1. 4号集石土坑検出状況 2. 4号集石土坑断面 3. 4号集石土坑完掘 5. C4-12グリッド土器出土状況

図版 95 1. 3号集石土坑検出状況 2. 3号集石土坑断面 3. D-11付近の東西セクション 4. D-8・9付近の東西セクション 5. D-8付近の東西セクション 6. D-5付近の東西セクション

図版 96 遺物1 縄文土器・石器

図版 97 遺物2 石器

図版 98 遺物3 石器、中・近世陶磁器・古銭

#### 牧ノ沢遺跡

図版 99 1. 調査前全景 2. 完掘全景 3. 北側完掘 4. 南側完掘

図版100 1. 調査前表土剥ぎ 2. 調査風景 3. 南壁セクション① 4. 南壁セクション② 5. 南壁セクション③ 6. 南壁セクション④ 7. 南壁セクション⑤ 8. 南壁セクション⑥

図版101 1. 8号土坑完掘 2. 8号土坑断面 3. 5号土坑完掘 4. 5号土坑断面 5. 6号土坑完掘 6. 9号土坑断面 7. 7号土坑完掘 8. 11号土坑完掘 9. 4号土坑完掘

図版102 1. 13・14号土坑完掘 2. 13・14号土坑断面 3. 20号土坑完掘 4. 20号土坑断面 5. 12号土坑完掘 6. 12号土坑断面 7. 10号土坑完掘 8. 10号土坑断面 9. 13号土坑完掘 10. 13号土坑断面

図版103 1. 5号風倒木痕断面 2. 15号土坑完掘 3. 15号土坑断面 4. 14号土坑完掘 5. 14号土坑断面 6. 3号土坑完掘 7. 3号土坑断面 8. 2号土坑完掘 9. 2号土坑断面

図版104 遺物(縄文土器)、大坂上道遺跡の珪藻化石

図版105 大坂上道遺跡の花粉化石

# 第 I 章 調査に至る経緯

磐越自動車道は、福島県いわき市を起点として常磐自動車道から分岐し、郡山市で東北自動車道と連結する。更に会津若松市・新潟県東蒲原郡津川町を経て、新潟市で北陸自動車道と結ばれる総延長212kmの高速道路である。太平洋側と日本海側を直結させるこの道路は、沿線地域の産業・経済・文化の交流を促進させる重要な役割を持つと考えられる。

## 基本計画

磐越自動車道のうち、中棚遺跡・猿額遺跡・大坂上道遺跡及び牧ノ沢遺跡にかかる区間（新潟～津川間）は、昭和53年12月に基本計画が決定され、昭和57年1月には建設大臣から日本道路公団新潟建設局（以下、道路公団）に対して、調査の開始指示が出された。これを受けて道路公団は、経済・地形・文化財など、工事の施行に必要な調査を開始した。

昭和59年8月、道路公団は県教委に対して、新潟～津川間の計画路線内及びその周辺の埋蔵文化財包含地の分布調査を依頼した。県教委はこれを受けて、同年10月に周知の遺跡の分布調査を実施して、その結果を道路公団に回答した。またこれと同時に、平野部や段丘上には未周知の遺跡が存在する可能性があり、引き続き分布調査及び第一次調査を実施する必要性があることをつけ加えた。

昭和60年2月には、新潟～津川間（約46km）の工事施行命令が、建設大臣から道路公団に出された。道路公団は、県教委の行った分布調査の結果を考慮して、法線の再検討を行い、赤坂山遺跡をはずすなど、路線の計画変更をしている。同年3月には新津～安田間、11月には安田～津川間、翌年の8月には新潟～新津間の最終的な路線を発表した。

県教委は、道路公団から依頼を受けた安田～津川間の法線内全域における埋蔵文化財の分布調査を昭和62年11月に実施した。津川町大字西集落南D（猿額遺跡）・西集落南E（大坂上道遺跡）を含む29地点の第一次調査の必要性と各地点の遺跡分布面積を道路公団に回答した。

## 第一次調査

平成2年4月に行われた磐越自動車道の調査工程に関する協議決定に基づいて、県教委は西集落南E（大坂上道遺跡）は平成2年10月と翌年4月に、西集落南C（中棚遺跡）及び西集落南D（猿額遺跡）は平成3年9月に、また黒岩橋東詰（牧ノ沢遺跡）は平成4年12月にそれぞれ第一次調査を実施した。調査の結果、以上の4地点から縄文時代の遺構や遺物が検出され、第二次調査が必要であることが判明した。県教委はこのことを道路公団に伝達すると共に、新発見であるこれらの4遺跡について、西集落南Cを中棚遺跡、西集落南Dは猿額遺跡、西集落南Eを大坂上道遺跡、黒岩橋東詰を牧ノ沢遺跡と改称して文化庁に遺跡の発見通知を行った。

## 第二次調査

道路公団と県教委は調査工程についての協議を重ね、猿額遺跡・大坂上道遺跡は平成4年度に、中棚遺跡・牧ノ沢遺跡は平成5年度に、第二次調査を実施することを決定した。第二次調査の対象面積は、中棚遺跡は3,200㎡、猿額遺跡は3,000㎡、大坂上道遺跡は8,700㎡、牧ノ沢遺跡が1,200㎡である。なお、調査は、県教委から委託を受けた埋文事業団が当たった。

## 第II章 遺跡の位置と環境

### 1 はじめに

今回、報告を行う津川町大坂上道遺跡・猿額遺跡・中棚遺は、三川村牧ノ沢遺跡は新潟県の北東部、福島県との県境にあたる東蒲原郡に位置する。新潟県の県庁所在地である新潟市からは、東側に約50km、車で約1時間半のところ位置している。さらに東側に約60km、車で2時間のところには福島県会津若松市がある。

津川町・三川村は、鹿瀬町・上川村を含め2町2村で東蒲原郡を構成している。東蒲原郡全体の人口は約1万7千人（平成4年7月1日推計）、面積953km<sup>2</sup>である。1km<sup>2</sup>あたりの人口密度は17.8人であり、新潟県の郡のなかで、最も人口密度が低い。これは面積の約90%が山地となっている地理的条件が大きな要因となっている。

これまで津川町・三川村を含めた東蒲原郡は、発掘調査がそれほど行われていないことから、中世以前の歴史が不明瞭であった。今回、磐越自動車道の建設に伴う発掘調査により、東蒲原郡の歴史が少なからず明らかになりつつある。本章ではこうした理由から、歴史的環境については、三川村・津川町以外にも、上川村・鹿瀬町の遺跡から推定される「東蒲原郡」の歴史的環境について記述する。

地理的環境では、地形の概観後に福島県沼沢火山起源の火山灰層について触れることにしたい。大坂上道遺跡・猿額遺跡で確認されたこの火山灰層については、これまで地質学の見地から①分布論、②堆積要因、③堆積年代など活発な議論が行われてきた。今回の調査でも沼沢起源の火山灰層が確認されており、地質学・考古学の両面において少なからず重要な意義を持つと考える。2節の地理的環境では、これまでの研究成果を整理し、現状での問題点を提示したい。

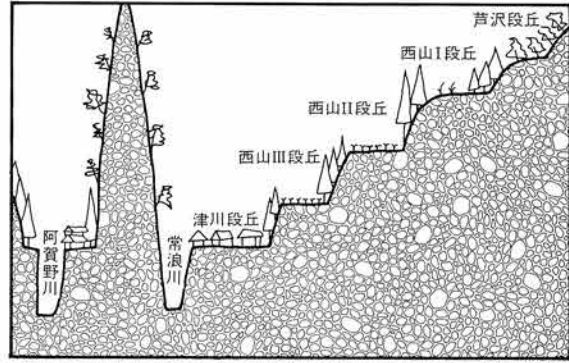
### 2 地理的環境と沼沢火山灰層

#### A 地形概観

今回報告を行う4遺跡のうち、東蒲原郡津川町に位置する大坂上道遺跡・猿額遺跡・中棚遺跡の周辺の地形について概観することにした。なお、東蒲原郡三川村牧ノ沢遺跡の地理的環境については、第VIII章で触れることにする。

津川町の3遺跡は、津川盆地西縁の阿賀野川左岸（直線距離で約750m南）に形成された河岸段丘上に立地している。現在、遺跡付近の段丘は、東を西ノ沢川に、西を赤岩川に、その間をいくつかの小谷により開析され、幅50～200m程の舌状台地として連続している。3遺跡の所在する段丘面は、小谷を挟んで隣接している。この小谷を利用して、近年まで水田が営まれていた。水田は未だ完全に埋まり切っておらず、畦畔の跡が残っている。またこれらの段丘面は、戦後の一時期、畑地として利用されてきたが、昭和30年代以降は杉の植林事業に利用されていた。調査直前には杉をはじめ、ナラなどの落葉樹におおわれた緑豊かな段丘面となっていた。

遺跡の立地する段丘面は北東に向かってゆるく傾斜しており、大坂上道遺跡で標高85～88m、猿額遺跡で標高86～99m、中棚遺跡で標高95～99mである。この地域の河岸段丘を形成した阿賀野川の現水面は、標高約50mで、現水面と遺跡の比高差は35～50m程になっている。また、阿賀野川からは直線距離にして約750m南に、阿賀野川の支流で津川町と北で接する上川村を横断して北流する常浪川とこなみがある。常浪川と阿賀野川との合流地点からは、直線距離で約2、500m東に位置している。



第1図 遺跡付近の段丘模式図

遺跡付近の段丘は、阿賀野川河床からの比高や段丘堆積物から6面に区分される〔二宮1973〕。このうち大坂上道遺跡は、上から三段目の西山II段丘面にしやま（標高85～90m）に位置する。一方の猿額遺跡は、調査区のほぼ中央で比高差約4～5mの傾斜があり、東側の上段と西側の下段とに分けられる。下段は大坂上道遺跡と同じ西山II段丘面、上段はその一段上の西山I段丘面（標高95～115m）に立地している。中棚遺跡の所在する段丘面は、猿額遺跡上段と同じ西山I段丘面に比定される〔二宮1973〕。

遺跡の位置する段丘面の下位にあたる津川段丘面（標高60～65m）には、戸数60～70戸からなる西・赤岩の集落があり、現代の人々の生活が営まれている。地質学的にみて遺跡の所在する段丘面の表層は、いずれも軟質の凝灰岩をはじめとした角礫を多く含む礫層で、層厚は4m前後である。以下には、砂・礫・粘土の互層が存在する。基盤層は大坂上道遺跡・猿額遺跡下段が凝灰岩、猿額遺跡上段・中棚遺跡が泥岩からなる第三紀層である〔新潟県1983〕。

## B 沼沢火山灰層

### (1) 研究の現状

津川町大坂上道遺跡・猿額遺跡では包含層2枚の間層として、黄褐色を呈するサラサラとした細かい砂状の層が確認された。これは、福島県大沼郡金山町の只見川右岸にある沼沢火山（現在、火口はカルデラを形成して湖沼となっている）から供給された軽石と火山灰の層である。「鹿瀬軽石質砂層」〔稲葉ほか1976〕、「沼沢浮石質砂層」〔只見川第四紀研究グループ1966a〕と呼称されているが、本報告では煩雑さを防ぐ意味から「沼沢火山灰層」と統一する。

沼沢火山灰層は、只見川と阿賀野川により運ばれた二次堆積層で、C<sup>14</sup>年代測定法では4.950±150年B.P.、5030±100年B.Pという年代が与えられている〔只見川第四紀研究グループ1966b〕。これまで沼沢火山灰層については、地質学の見地から噴出年代や流入経路などが考察されてきた〔稲葉ほか1976、柳田1981など〕。考古学的にも、堆積年代がこれまでの土器編年の理論的な拠り所として重要な意味を持つ層と認識されている〔山都町教委1983、福島県教委1988ほか〕。今回の報告にあたり大坂上道遺跡・猿額遺跡の両遺跡で確認された沼沢火山灰層も、縄文時代前期末～中期初頭の土器編年を考える場合に、少なからず重要な意味をもつ。また地質学的にも、これまでの沼沢火山灰層の認識を大きく改変するものとの指摘註1)を得た。そのため本節では、これまで考察されてきた沼沢火山灰層の地質学的評価の現状を振り返り、大

1) 荒木繁雄・小林 巖両氏のご教示による。



坂上道遺跡と猿額遺跡の意義を検討することにした。

沼沢火山灰層の流入経路が、只見川と阿賀野川を媒介としたことは前記のとおりであるが、堆積した標高が両河川の現水面より高いことは、以下のような過程が考えられてきた。すなわち①阿賀野川と只見川の合流地点から下流の峡谷部で、火山灰によって河川がせき止めらる。②そのため河川の水位は上昇し、火山灰を多量に含んだ水が、腐植土を流出させることなく静かに段丘面をひたす。③その後、水は引くものの流下によって細くなった軽石や火山灰が腐植土の上に沈積する。④火山灰が流下する過程で、幾度となくこうした

現象が起こったものと推測されている〔稲葉ほか1976〕。遺跡が所在する津川地区でも<sup>いわだに</sup>岩谷より下流の峡谷部でせき止めが起こったと推測され、火山灰層の堆積は鹿瀬から<sup>いがしま</sup>五十島にまで及ぶ。

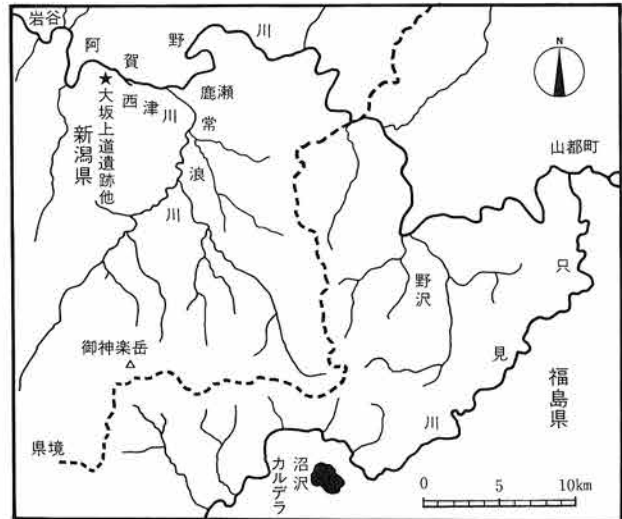
新潟県で検出される沼沢火山灰層は、上記の様に火山噴出物が阿賀野川を流下する過程で、流域の段丘面に堆積したり、あるいは海岸部でいくつかの砂丘列を形成するなどして〔坂井1980など〕、局所的な分布を示している。これに対して福島県では、津川町と同様に二次堆積層として認められる会津盆地の例もあるが〔福島県教委1989など〕、火砕流や偏西風などによって運ばれた降下火山灰も広範囲に分布している。現在、降下火山灰は会津盆地・猪苗代盆地、さらには沼沢火山から80km余り離れた三春町まで存在が確認されている〔福島県教委1989など〕。

このように広範囲に分布する沼沢火山灰層は、堆積年代と出土遺物に関する遺跡報告がいくつかなされている。山都町の上ノ原遺跡では、二次堆積の火山灰層直下から大木6式の土器が出土している。このことから、堆積開始時期を縄文時代前期末葉と推測できよう。また堆積終了の時期を明確にする上で、火山灰層の上層から出土する遺物を層位的に厳密に把握する必要性が述べられている〔山都町教委1983〕。

一方、降下火山灰が検出されている会津高田町鹿島遺跡〔福島県教委1991〕、同町下谷ヶ地平B・C遺跡〔福島県教委1986〕、同町青宮西遺跡〔福島県教委1990〕、磐梯町・猪苗代町にまたがる法正尻遺跡〔福島県教委1991〕でも、沼沢火山灰層直下から大木6式の土器が出土している。火山活動の下限を決める火山灰層の上層からは、縄文時代中期以降の遺物が多く遺跡から確認されているが、前述の法正尻遺跡では更に古い大木6式の土器が出土している。以上のことから噴火の時期は大木6式期に限定できるが、二次堆積の終了時期については明らかにしえない。二次堆積が顕著である阿賀野川中流域の考古学的な分析が大きな意味を持つてくると考える。

## (2) 大坂上道遺跡・猿額遺跡の立地と砂層の堆積状況

大坂上道遺跡、猿額遺跡は地質学上、西山段丘面と呼称されている河岸段丘上に立地している。このうち大坂上道遺跡は西山II段丘面に、猿額遺跡は調査区上段が西山I段丘面、下段が西山II段丘面に位置するのは、2節Aのとおりである。調査区内での沼沢火山灰層の堆積状況は、大坂上道遺跡で調査区東側及び、調査区中央部からやや北西部の地山が小さく沢状に落ち込んだ所から調査区北西端にかけての地点で堆積が確認されている。



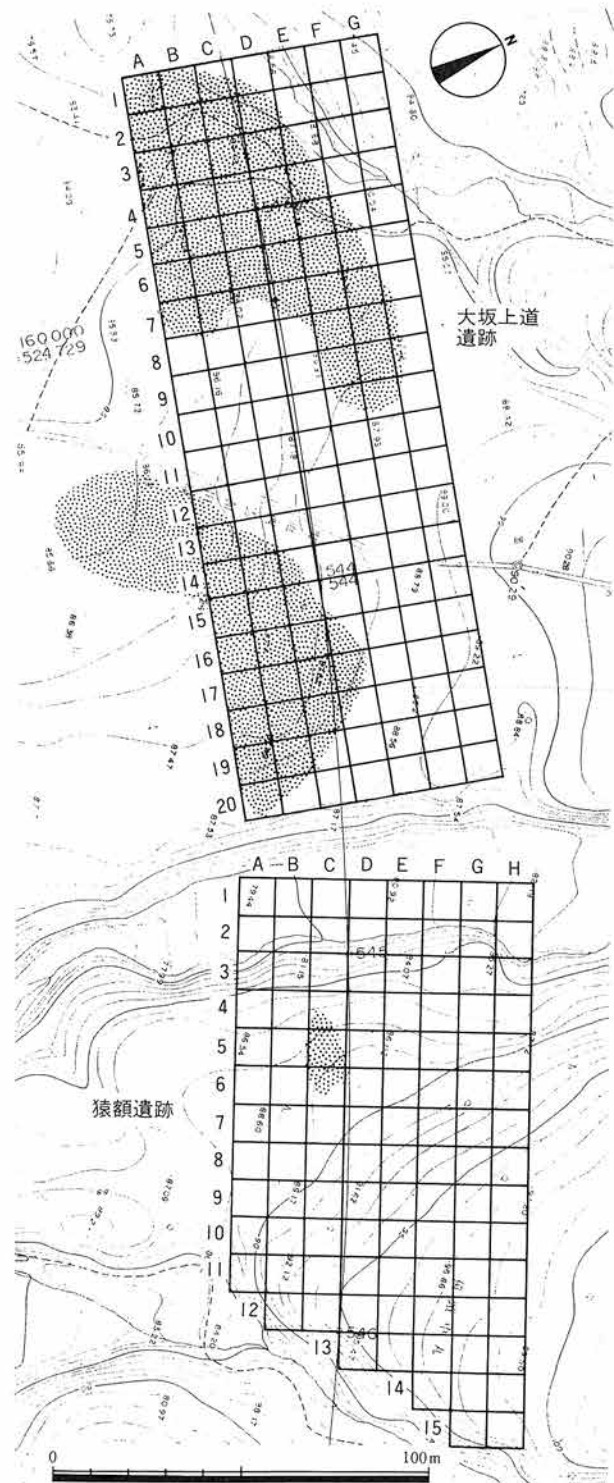
第2図 沼沢カルデラ・只見川・阿賀野川の位置図  
(稲葉ほか1976を一部改変)

一方、猿額遺跡の調査区上段（西山I段丘面・標高93m～99m）では沼沢火山灰層は全く確認されていない。これに対し、調査区下段（西山II段丘面・標高85～88m）では、調査区北東部のみという限定された範囲ではあるが、堆積が確認されている。両遺跡における堆積地点の最高位は、沼沢火山灰層直下で、大坂上道遺跡が87.7m、猿額遺跡が88.3mである。現状では両遺跡の標高が、沼沢火山灰層の堆積が確認できるか否かの境界にあたる。これまでの研究に従い、火山灰の流入によって河川が堰き止められた結果、水位が上昇して沼沢火山灰が堆積したとする。この場合に両遺跡での堆積状況から、水位の上昇は海拔90m近くにまで及んだこととなる。

### (3) 大坂上道遺跡・猿額遺跡の提起する問題

これまでの研究成果では、沼沢火山灰層によって上昇した水位は、西山II段丘面より低く、西山III段丘面より高い海拔80m付近と考えられていた〔稲葉ほか1976〕。今回、両遺跡で得られた成果から、この見解には修正を要するようである。これまで西山II段丘面上でも、腐植土の上に沼沢火山灰層らしき層の堆積は確認されていた。しかしこの層の堆積年代は今から約5,000年前よりも古く、津川段丘が段丘化する以前に堆積したものと考えられてきた〔稲葉ほか1986〕。この見解からすると、両遺跡で確認された層は約5,000年前に堆積した沼沢火山灰層ではないことになる。両遺跡の考古学的成果はV章以降で述べるが、沼沢火山灰層の堆積年代に関連する大きな成果が得られている。両遺跡では上下2枚の包含層が堆積するが、その間層として沼沢火山灰層が存在する。これは包含層の下層から出土した遺物の年代が、砂層の堆積年代の上限を意味する。また包含層の上層から出土した遺物の年代は、砂層の堆積年代の下限を意味するのである。上下2枚の包含層から、考古学的に時期の判別できる良好な土器が出土している猿額遺跡を例に考えてみたい。

猿額遺跡出土土器は、東北南部を中心に分布する縄文時代前期末の大木5式・6式の土器群である。このうち、砂層により確実に埋没した2号土



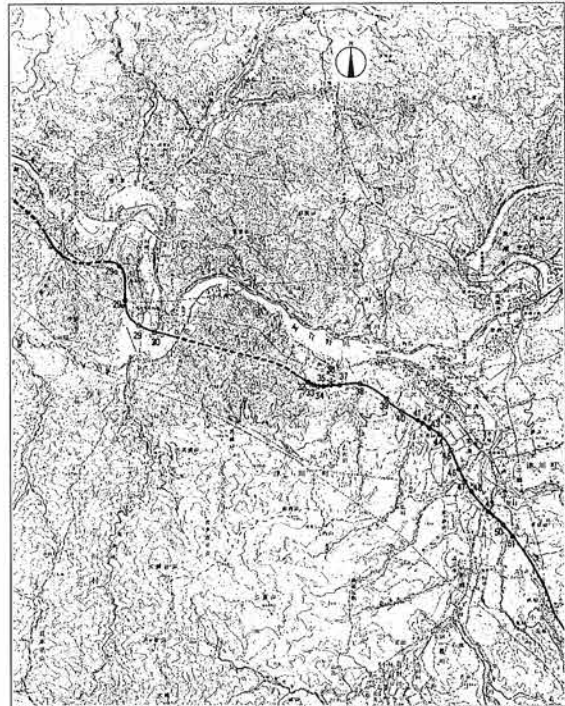
第3図 大坂上道・猿額遺跡における沼沢火山灰層の堆積状況

日本道路公団新潟県建設局 津川工事事務所作成  
1:1000 昭和63年測図を使用  
(網目が沼沢火山灰層の堆積範囲)

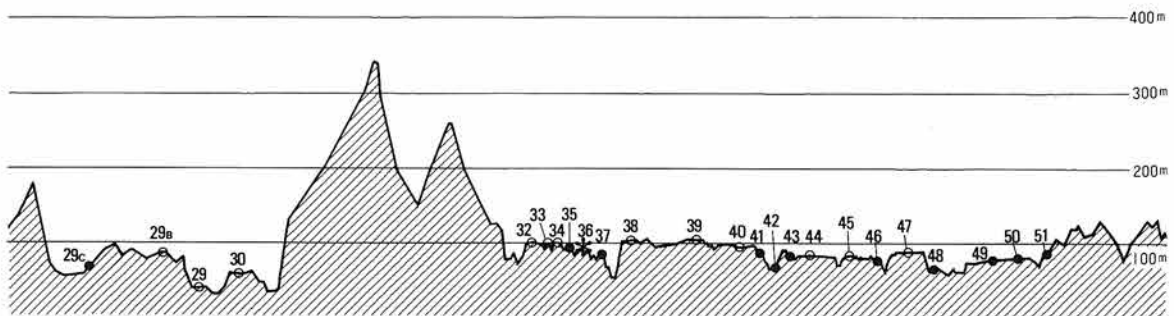
坑出土土器（図版24-1～3）は、大木6式のものである。また砂層を覆う上層の包含層から出土した土器（第18図）もおおむね大木6式のものである。大木6式の絶対年代については約5,000年前であること、また福島県下で沼沢火山灰層の直下から出土する土器が大木6式であることから、猿額遺跡の上下二面の包含層の間層として確認された層は、約5,000年前に堆積した沼沢火山灰層以外に考えられない。前述のとおり、猿額遺跡は西山II段丘面に位置し、沼沢火山灰層が堆積する最高位が海拔88.3mであることからすると、これまでの研究成果には再考を要することとなろう。沼沢火山灰層は従来の研究よりも、一段高い段丘面、高さにして8mほど高所まで達している。

(4) 津川地区の第一次調査結果

沼沢火山灰層が標高90m近くまで及んでいることは、津川盆地を巡る段丘面で行われた第一次調査の結果からも推測が可能である。第一次調査で沼沢火山灰層と思われる黄褐色の砂層が確認された遺跡は、大坂上道遺跡・猿額遺跡以外では9地点に及ぶ（第4図）。その9地点はいずれも、現地表面で海拔90mを超えることはなく、標高66～88mの範囲に位置している。沼沢火山灰層と思われる黄褐色の砂層が標高80m以上の高所で確認されたのはNo.41（厚さ25～30cm）、No.43（ブロック状に混入）、No.49（厚さ20～50cm）、No.51（厚さ15cm）などがある。各地点で遺物が検出された地点が少ないことから、これらの「サラサラした黄褐色の砂層」が、約5,000年前に堆積した沼沢火山灰層か否かは考古学の立場からは速断できない。しかし肉眼での観察や、他に想定し得る火山灰層が存在しないことからすると、これらの層は沼沢火山灰層以外の火山灰層とは考えられない。



第4図 第一次調査地点の沼沢火山灰層堆積状況  
（国土地理院発行 1：50,000「津川」「御神楽」昭和55年を使用）



第5図 第一次調査地点における段丘模式図



考古学的見地から大坂上道遺跡・猿額遺跡の一部をひたし、沼沢火山灰層を堆積させた堰き止めによる水位の上昇は、両遺跡が立地する西山II段丘面にも及び、最高水位は海拔90m程まで達していたと考えられる。また同層を挟む上下二層の包含層から出土した土器は大木6式期であり、従来の堆積年代と一致する。堰が破れ、水が流出して沼沢火山灰層の堆積が完了した時期も、大木6式期の範疇で考えられる。今ここで、大木6式期の存続年代を明らかにし得ないが、津川盆地が濁水にひたされた期間は、比較的短い期間であったと思われる。今後、地質学的見地からの分析と、他遺跡における沼沢火山灰層を間層とした上下二層から出土した遺物の検討や、類例の増加により更に補強し得ると考える。

### 3 歴史的環境

#### A 周辺の遺跡

##### (1) 旧石器時代・縄文時代

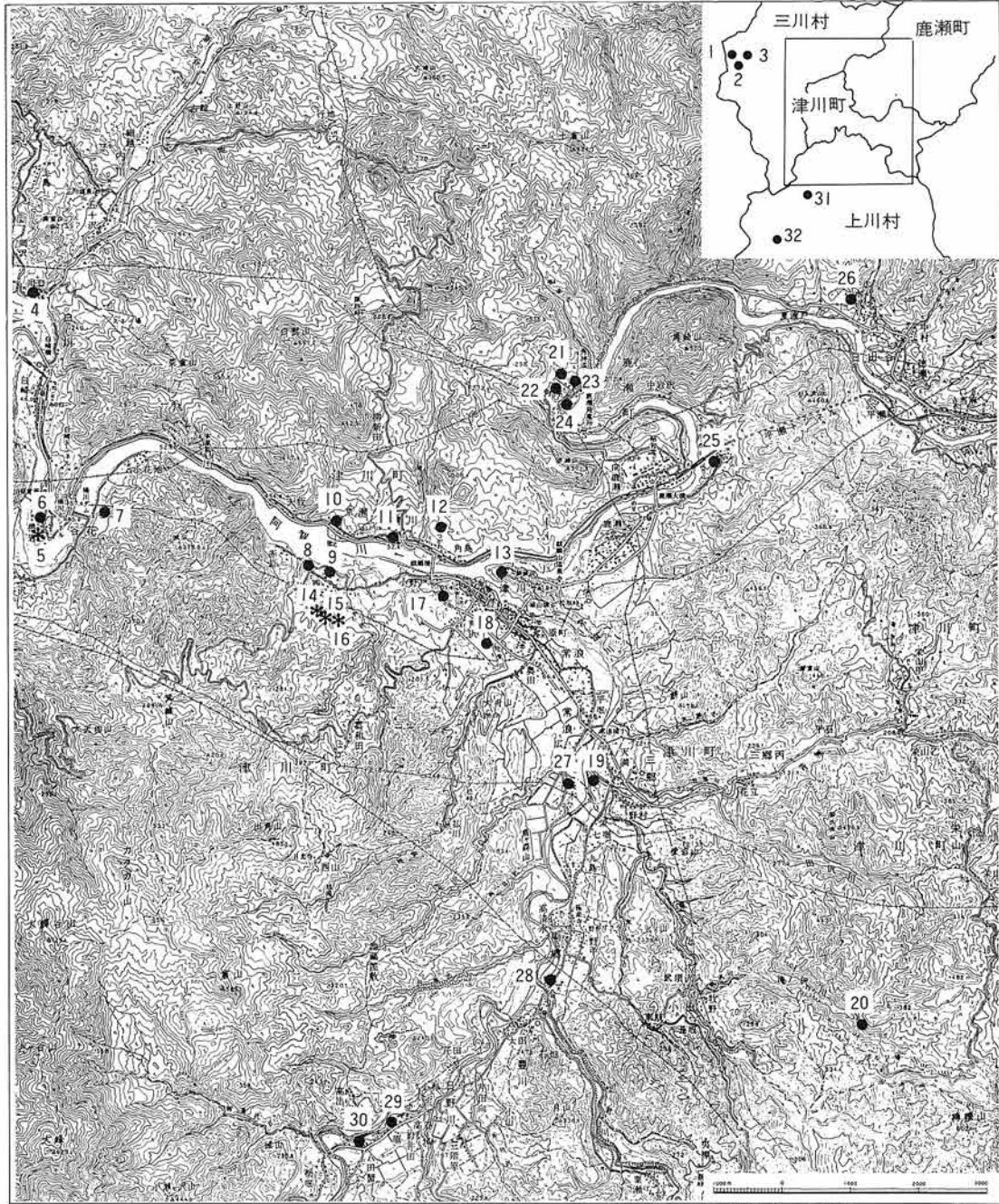
当期の遺跡はいずれも阿賀野川及び、その支流である常浪川によって形成された河岸段丘上に位置している。これまで旧石器時代の遺物は、鹿瀬町角神遺跡A(23)で確認されているのみであった〔古川1982〕。しかし、磐越自動車道建設に伴う発掘調査で三川村上ノ平遺跡(3)や吉ヶ沢遺跡(2)から多量の石器群が検出された〔沢田ほか1994〕。両遺跡とも旧石器時代の遺物は、約15,000年前と、約13,000年前との二時期に大別され、縦長剝片を基本とした杉久保型ナイフ形石器、神山型彫刻刀形石器などが確認されている。

縄文時代に入ると遺跡数は増大しており、草創期・早期の遺跡も確認されている。上川村小瀬ヶ沢洞窟遺跡(31)は日本を代表する草創期の遺跡で、洞窟内からは微隆起線文・爪形文・多縄文などが施された土器や、有舌尖頭器・植刃などの石器が大量に出土している〔中村1960、小野・鈴木1994〕。また、常浪川の更に上流に位置する室谷洞窟遺跡(32)からは、草創期から弥生時代に至る各時期の遺物が発見されている。同遺跡では、縄文時代前期初頭に位置付けられる屈葬された女性の人骨が完全な状態で発見されており〔中村1960・1962〕、小瀬ヶ沢洞窟と並び国内の洞窟遺跡として特に著名である。

前期の遺跡は、近年の磐越自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査によって、その存在が明らかになった。上川村北野遺跡(27)は、常浪川左岸の丘陵平坦部(標高約70m)に立地している。このうち2節で検討した沼沢火山灰層の下層から前期末(大木6式)の遺物が確認されている〔高橋1994b〕。沼沢火山灰層によって埋没した住居跡が十数軒確認されて、それぞれ周堤が伴うなど遺構・遺物ともに注目される。大木6式期の住居跡は三川村上ノ平遺跡でも確認されている〔沢田1994〕。近年、確認例が増加している前期末葉の土器群を考える上で、上記の発掘調査は欠くことのできないものとなる。

中期に入ると遺跡数は更に増加しており、津川町原遺跡(11)・古志王遺跡(18)・宮野遺跡(9)・角嶋岩陰遺跡(12)、三川村新瀬遺跡(7)・平野遺跡(6)・堂田遺跡(1)、鹿瀬町長者屋敷遺跡(26)・角神遺跡B(21)・角神遺跡C(22)・角神遺跡D(24)、上川村大屋敷遺跡(28)・狐窪遺跡(29)・揚城遺跡(30)などが挙げられる。このうち発掘調査が行われたのは、津川町原遺跡・古志王遺跡のみである。原遺跡は中期～晩期の複合遺跡で、土器以外にも土偶・石器が確認されている(山武考古学研究所1984)。一方の古志王遺跡は大木8式を主体とする土器群が出土しており、本報告が待たれる。

その他、発掘調査を行っていないものの、表採資料が多いことから中期以降の大集落と考えられる遺跡



第6図 津川町周辺の主要遺跡

国土地理院発行 1:50000  
「津川」「御神楽岳」「大日岳」「野沢」を使用(1/10万)

| No. | 遺跡名  | 時期           | No. | 遺跡名    | 時期                  |
|-----|------|--------------|-----|--------|---------------------|
| 1   | 堂田   | 縄文(中・晩期)     | 17  | 御小屋館跡  | 中世                  |
| 2   | 吉ヶ沢  | 旧石器、縄文(前期)   | 18  | 古志王    | 縄文(中期)              |
| 3   | 上ノ平  | 旧石器、縄文(後期)平安 | 19  | 楠川     | 縄文(後期)              |
| 4   | 若宮洞窟 | 縄文(晩期)       | 20  | 入道岩洞窟  | 縄文(晩期)、弥生           |
| 5   | 牧ノ沢  | 縄文(後・晩期)     | 21  | 角神 B   | 縄文(中期)              |
| 6   | 平野   | 縄文(中期)       | 22  | 角神 C   | 縄文(中期)              |
| 7   | 新瀬   | 縄文(中・後期)     | 23  | 角神 A   | 旧石器                 |
| 8   | 六角原  | 縄文(中期)、平安    | 24  | 角神 D   | 縄文(中期)              |
| 9   | 宮野   | 縄文(中・後期)     | 25  | 深戸     | 縄文(後期)              |
| 10  | 大師堂  | 縄文(後期)       | 26  | 長者屋敷   | 縄文(中・後・晩期)          |
| 11  | 原    | 縄文(中・晩期)     | 27  | 北野     | 縄文(前・中・後・晩期)        |
| 12  | 角嶋岩陰 | 縄文(中・後・晩期)平安 | 28  | 大屋敷    | 縄文(中・後・晩期)          |
| 13  | 津川城跡 | 中世           | 29  | 狐窪     | 縄文(中・後・晩期)          |
| 14  | 中棚   | 縄文(前・中・晩期)   | 30  | 揚城     | 縄文(中・後・晩期)          |
| 15  | 猿額   | 縄文(前・中期)     | 31  | 小瀬ヶ沢洞窟 | 縄文(草創期)             |
| 16  | 大坂上道 | 縄文(中・後期)平安   | 32  | 室谷洞窟   | 縄文(草創・早・前・中・後・晩期)弥生 |

第1表 周辺の主要遺跡一覧

で三川村堂田遺跡、鹿瀬町長者屋敷遺跡がある。このうち前者は、阿賀野川の氾濫原である傾斜地に位置しており、中期から晩期の土器以外に、石斧・石棒・小玉等が確認されている〔本間1962〕。

後期の遺跡は中期から継続しているものが多く、津川町<sup>たいしどう</sup>大師堂遺跡(10)・楠川<sup>くすがわ</sup>遺跡(19)、鹿瀬町<sup>ふかど</sup>深戸遺跡(25)、本書で報告を行う三川村牧ノ沢遺跡や前記の上川村北野遺跡がある。遺物が単独で確認される例が多く、楠川遺跡では関東の堀之内Ⅰ式に比定される注口土器が、深戸遺跡では堀之内式に比定される土器が出土している〔本間ほか1962〕。本格的な発掘調査が行われたのは上川村の北野遺跡のみである。沼沢火山灰層の上層から、中期末葉から後期初頭の遺物が多量に出土している他、複式炉や柄鏡形の敷石住居が検出されている〔高橋1994b〕。これらの遺構・遺物は、東北南部との接点に当たる東蒲原郡の様相を追求する貴重な資料となろう。

晩期の遺跡も後期と同じく中期・後期から継続しているものが多く、三川村<sup>わかみや</sup>若宮洞窟遺跡(4)や上川村<sup>ひとがたに</sup>人ヶ谷岩陰遺跡、津川町<sup>にゅうどういわ</sup>入道岩洞窟遺跡(20)などがある。このうち、唯一昭和55年に上川村教育委員会によって発掘調査が行われた人ヶ谷岩陰遺跡は、標高350mの山間部に位置する。晩期最終末の土器群や有柄式石鏃などが検出されている〔小野ほか1986〕。若宮洞窟遺跡は、阿賀野川に突出した崖端に立地しており、洞窟内の包含層上層から晩期の土器や石鏃が出土している。同遺跡は阿賀野川の現水面とは比高差が10m程であり、阿賀野川の変遷と本遺跡との自然環境を追求する上で、下層部の実態が鍵を握る〔本間ほか1962〕。一方、入道岩陰遺跡は滝沢川に南面した標高280mの傾斜地に立地する。同遺跡は崖の裂けめを利用した洞窟遺跡で、晩期以外に弥生土器・有柄石鏃などが出土している〔本間1962〕。

## (2) 弥生時代～奈良・平安時代

弥生時代～奈良・平安時代の遺跡は極くわずかである。弥生時代の遺物が津川町入道岩洞窟遺跡、三川村室谷洞窟遺跡で検出されているにすぎない。古墳時代・奈良時代の遺物は皆無である。これは単に遺跡数が減少しているのか、または詳細な分布調査が行われていないことに起因するのかは不明である。弥生時代以降は、山岳地帯ということで水稲耕作に不向きな立地条件や、政治的な要因も想定する必要がある。

## (3) 中・近世

津川城跡(13)と御小屋遺跡(17)などがある。津川城跡は<sup>きつねもどり</sup>狐尻城とも呼ばれ、現在では県指定史跡となっている。建長4(1252)年に蘆名氏の一族である藤倉盛弘により築城された。阿賀野川と常浪川の合流点である麒麟山に立地しており、会津の西境を守る城郭として重要な位置を占めていた。

## B 文献資料からみた東蒲原郡

東蒲原郡は、今なお東北南部の文化的影響を色濃く残している。これは福島県との県境に位置する以外に、廃藩置県後も長らく現在の新潟県に属せず、明治19年まで現在の福島県に属していたことにも大きな要因があろう。今回の調査で得られた考古学的な成果は第Ⅴ章以降で記述するが、ここでは文献資料から見た東蒲原郡における歴史の概略を振り返ることとする。

### (1) 古代

東蒲原郡の古代については、不明瞭な点があまりに多い。東蒲原郡は越後ではあったが、「沼垂郡」と「蒲原郡」のいずれに属していたかは不明である。「沼垂郡」と「蒲原郡」の境は阿賀野川と推定されており、阿賀野川の北側が「沼垂郡」、南側が「蒲原郡」にあたる。『和名抄』によれば「沼垂郡」は足羽、沼垂、賀地の三郷を、「蒲原郡」は日置、桜井、勇礼、青海、小伏の五郷を有している。各郷はこれまで

多くの地点が比定されてきたが、東蒲原郡内に属するものはない。

9世紀後半以降になると、当期の遺物は散在的にはあるが確認されるようになる。古代における越後の人口は5万人程と推定されている〔坂井1993〕。このうち蒲原郡には7000人強、沼垂郡には4000人強ほどの人口となろうが、人口密度は極めて低い。東蒲原郡に郷の推定地が存在しないこと、また現状では考古学的にも律令期の遺物が存在しないことから、律令期に東蒲原郡で集落を営んだ可能性は極めて低いのではなかろうか。集落が展開していたにしても、極めて小規模なものであった可能性も考えられる。

### (2) 中世

東蒲原郡の記載がある文献資料は多くないものの、『異本塔寺長帳』承安2年(1172年)は、古代末～中世における東蒲原郡の変動を現している。これによると『越後国守城四郎平長茂領地内蒲原郡小川庄七十五村ヲ会津恵日寺住僧乗丹坊寄付、是長茂伯父也』とあり、城長茂が小川庄を会津恵日寺(現福島県耶麻郡磐梯町)乗丹坊に寄進したと言う。小川庄は現在の東蒲原郡全域と、新発田市南端(赤谷地区)及び、五泉市・安田町の一部を包括した荘園である。庄名については「こがわ」・「おがわ」の両説があり、表記も「小川」・「小河」が併用されている(以下では小川庄に統一)。

上記の『異本塔寺長帳』承安2年(1172年)の条には「蒲原郡小川庄」とあり、東蒲原郡は12世紀後半には「蒲原郡」に属していたと考えられる。しかし時期は不詳ながら、「蒲原郡」は早くに「沼垂郡」を包括して一郡を形成したといわれる〔新潟県1986〕。東蒲原郡は12世紀後半に蒲原郡に属していたが、前述のとおり律令期に属していた郡は明確でない。

越後国荘園の記載がある『吾妻鏡』では、文治2(1186)年3月12日条に小川庄が見えないことや、異本塔寺長帳の成立過程から信憑性に疑問が持たれているが、『吾妻鏡』寿永元(1182)年9月28日条に「越後国城四郎永用於越後国小河庄赤谷構城郭」とあり、現新発田市上赤谷に城郭を構えたとされている。また、『玉葉』養和元年7月1日条では城助職が横田河原戦後「藍津之城」に引き籠ろうとした記事が、平家物語諸本の記事では横田河原の戦いで城氏軍に会津乗丹坊及び会津の在地武士が加わったとある。これらのことから、城氏は小川庄はもとより、会津地方にも勢力を及ぼしていたことになるという〔新潟県1986〕。

### (3) 近世～現代

東蒲原郡の中央を横断する阿賀野川は、越後と会津の交通の中継地として重要な位置を占めている。この時期、東蒲原郡の中心は津川町であった。津川町には代官所が置かれ、鹿瀬・海道・上条・下条の四組と津川町を治めている。また検断・名主が置かれたのも津川町で、船道関係の権限を有していた。阿賀野川水運による津川～新潟までは津川船道と呼ばれ、船番所が置かれ、出入り船・積み荷の点検・船手形の許可などを行っていたという〔新潟県1986〕。郡域の約9割を山地で占める当郡にとって、船道の隆盛は水田耕地の不足を大きく補うものであった。また新発田街道の宿駅が置かれ、藩主の領内巡見や新発田・村上両藩の参勤交代に利用されるなど、会津藩における水陸交通の西の要衝であった。東蒲原郡で津川町が中心的な立場である点は、現在も同様である。県総合庁舎をはじめとする行政機関、通信機関等はいずれも津川町に存在している。

1) 1郷の人口を約1,400人と推定する説〔沢田1972〕と、約1,500人とする説〔鎌田1984〕がある。両説に大きな差異が認められないことから、人口の推定は1郷を1,400人～1,500人として算出した。



## 第III章 調査の概要

今回の報告は調査が継続して2ケ年（平成4・5年度）を要した大坂上道遺跡・猿額遺跡と、単年度で終了した中棚遺跡（平成4年度）、牧ノ沢遺跡（平成5年度）の計4遺跡である。遺跡数が多いこともあり、調査方法は各遺跡の性格・立地条件により異なっている。ここでは第一次調査の概要と、第二次調査の各遺跡に共通する項目のみ列挙する。各遺跡の特徴を重視した調査の概要は、第V章～第VIII章の1節である「調査の概要」で記述することにした。

### 1 第一次調査

いずれも第一次調査以前には周知化されていなかった遺跡である。地形により遺跡が存在する可能性があることから、第一次調査を行った。調査方法の詳細は各遺跡で異なるが、調査対象範囲内において任意にトレンチを設定して、遺構・遺物の有無を確認しながら調査を進めた。掘削はバックホーを中心に行い、遺構・遺物の確認など、必要に応じて人力で掘削を行った。以下では各遺跡の調査の概略を記す。

#### A 大坂上道遺跡（平成2年10月22日～11月2日、同3年4月17日～18日）

立木の未伐採地があることから、調査は2回に分けて行った。

平成2年度は対象範囲の西側～中央の約5,300㎡に対して調査を行った。2×3～8mのトレンチを24か所設定した（第7図）。土層の堆積状況は比較的良く、遺物は計8か所のトレンチから検出された。いずれも基本層序の第II層からの出土であるが、このうち1か所のトレンチからは、福島県沼沢火山起源の火山灰層を間に挟んだ下層（基本層序の第V層）からも遺物が出土している。第V層が調査対象面積の全面に広がるか否かが問題となるが、包含層が2面存在することが明らかになった。

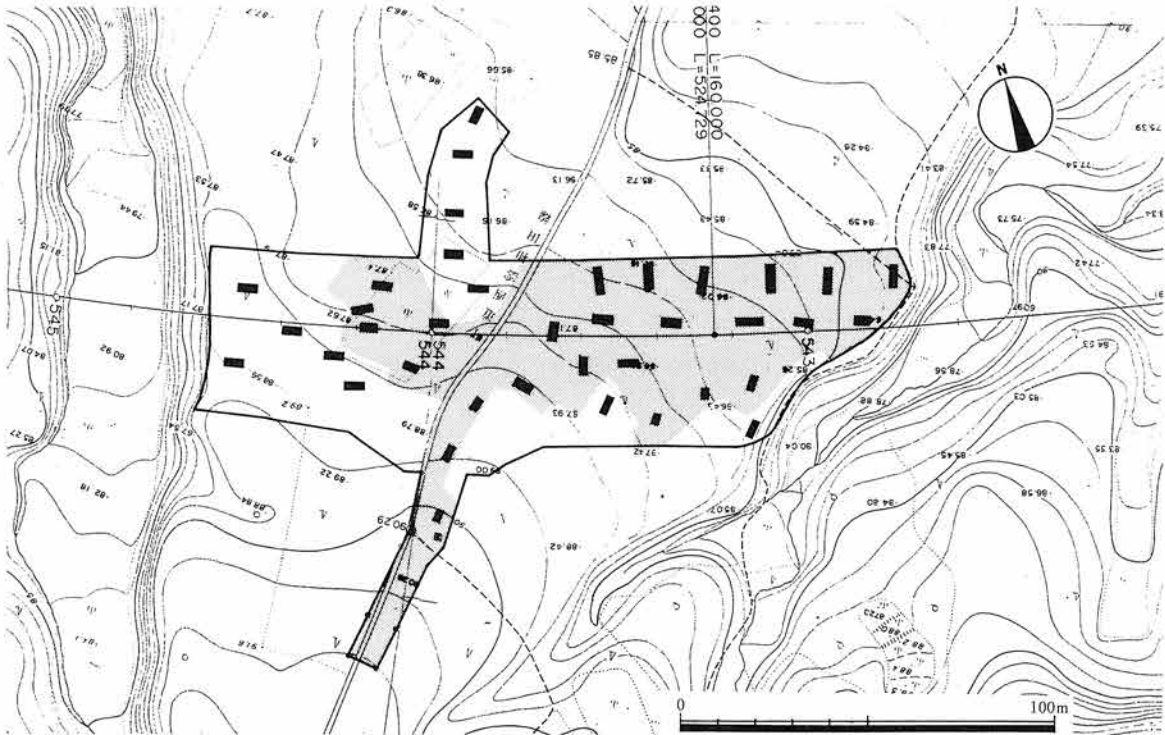
遺構は、いずれも遺物が出土したトレンチのうちの4か所で検出された。この結果、遺構・遺物が検出された対象範囲の西側、約2,945㎡については第二次調査を行うこととした。また対象範囲の中央、2,355㎡については、対象範囲の東側の結果を基に第二次調査の必要性を判断することにした。

平成3年度は対象面積の東側を中心に、前年度に行えなかった地点の4,740㎡に対して調査を行った。2×5mのトレンチを14か所設定した。このうち調査範囲東側の5か所のトレンチのうち、4か所から遺物が検出された。遺物が出土した層位は、いずれもII層である。このことから、平成2・3年度の調査対象面積である10,040㎡のうち、8,700㎡に対して第二次調査を行うこととした。なお、遺物包含層は第II層（縄文時代中期）とし、前年度に確認された第V層が調査範囲の全面に広がっていないことから、延べ面積には換算していない。

#### B 猿額遺跡（平成3年9月13日）

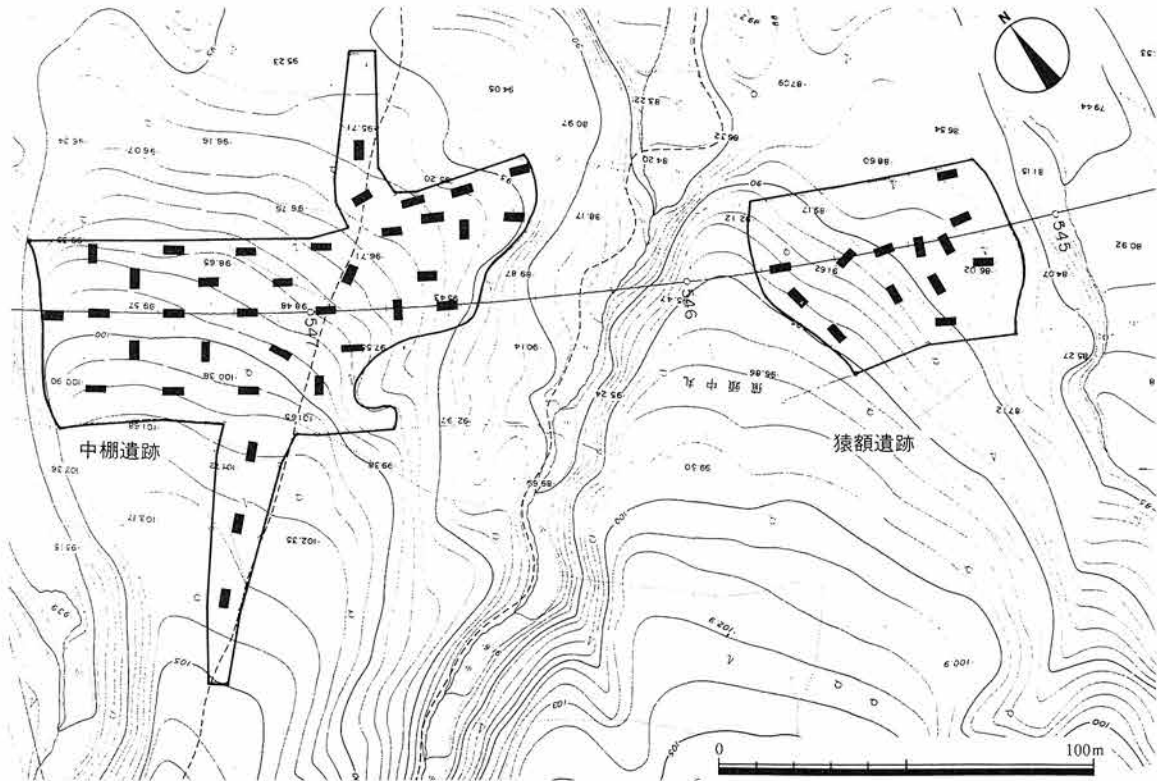
調査対象面積は5,100㎡であったが、西側の2,100㎡が未伐採地であることから、これを除く3,000㎡に対して調査を行った。2×5mのトレンチを13か所設定したが、このうち7か所で遺物が確認された。遺物は縄文土器・石器で、ほぼ対象面積の全面に分布する。また、遺物が確認された7か所のトレンチのう

1 第一次調査



第7図 大坂上道遺跡の第一次調査範囲

(日本道路公団新潟建設局 津川工事事務所作成 1:1000 昭和63年測図、網目は平成2年度の調査範囲)



第8図 猿額遺跡・中棚遺跡の第一次調査範囲

(日本道路公団新潟建設局 津川工事事務所作成 1:1000 昭和63年測図)

ち、2か所で土坑と焼土坑がそれぞれ確認された。このことから調査を行った3,100㎡については、第二次調査を行うこととした。なお、第一次調査で遺物包含層と確認されたのは、第I層・II層である。第一次調査を行えなかった対象面積の西側は、立木の伐採後に行うこととした。



## 2 第二次調査

### E 体制

〈平成2・3年度〉

|      |                       |
|------|-----------------------|
| 調査主体 | 新潟県教育委員会（教育長 堀川徹夫）    |
| 管 理  | 大島 圭己（新潟県教育庁文化行政課長）   |
|      | 吉倉 長幸（ “ “ 課長補佐）      |
| 指 導  | 横山 勝栄（ “ “ 埋蔵文化財第一係長） |
|      | 本間 信昭（ “ “ 埋蔵文化財第二係長） |
| 庶 務  | 藤田 守彦（ “ “ 主事）        |

#### ・平成2年度（大坂上道遺跡）

|     |                          |
|-----|--------------------------|
| 担 当 | 亀井 功（ “ “ 埋蔵文化財第二係文化財主事） |
| 職 員 | 鈴木 俊成（ “ “ “ 主任）         |

#### ・平成3年度（大坂上道遺跡、猿額遺跡、中棚遺跡）

|     |                       |
|-----|-----------------------|
| 担 当 | 北村 亮（ “ “ 埋蔵文化財第二係主任） |
| 職 員 | 平沢 秀昭（ “ “ “ 文化財主事）   |

#### ・平成4年度（牧ノ沢遺跡）

|      |                              |
|------|------------------------------|
| 調査主体 | 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）          |
| 調 査  | 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 本間栄三郎） |
| 管 理  | 藍原 直木（事務局長）                  |
|      | 渡辺 耕吉（総務課長）                  |
|      | 茂田井信彦（調査課長）                  |
| 指 導  | 戸根与八郎（調査課調査第一係長）             |
| 担 当  | 北村 亮（ “ 主任）                  |
| 職 員  | 阿部 雄生（ “ 専門員）                |
|      | 高橋 一功（ “ ”）                  |
| 庶 務  | 藤田 守彦（総務課主事）                 |

## 2 第二次調査

### A 調査方法

調査地の現況 今回の調査地域である津川町大字西地内の大坂上道遺跡・猿額遺跡・中棚遺跡は標高80～99m、三川村大字谷花地内の牧ノ沢遺跡は標高59～60mと、いずれも阿賀野川の河岸段丘上に位置している。それぞれ小谷に区切られた段丘で、戦後の開発により畑地として利用された箇所が多い。このため遺跡内は削平を受けた部分が存在する。また、大坂上道遺跡・中棚遺跡では調査区中央を南北に伸びる旧



道が、猿額遺跡では調査区はやや北側を東西に伸びる旧道が存在しており、若干の改変が行われていた。

戦後の開発ののち、ここ数十年は大きな開発が行われていないこともあり、遺跡は旧状をとどめる部分が多い。畑地としての開発された後は、主に植林が行われており、大坂上道遺跡・猿額遺跡下段・中棚遺跡では杉が、猿額遺跡上段では落葉樹林であるクヌギ・ナラなどが生息していた。

グリッドの設定(図版1) 大グリッドの設定方法は各遺跡で異なるが、いずれも10m方眼で調査区全域をカバーできるように設定した。また、調査の便宜上、大グリッドの中に2m方眼の小グリッドを設けた。グリッドの呼称は、調査区最北部から南部にかけての大グリッドを英大文字のA～Fに、最東部～西部にかけては算用数字で区分した。両者の組み合わせにより「A1」「B2」のように表示した。また、大グリッド内における小グリッドには1～25の番号を付した。方向は大グリッド内における最北部～南部にかけてを1～5、となりの列を6～10という方法である。前述の組み合わせにより「A1-1」、「C2-3」というふうに表示している。

調査方法 調査の基本工程は①基本層序の確認、②包含層の掘削、③遺構の検出・発掘、④実測・写真撮影である。

①基本層序の確認 確認調査の結果を基本に、本調査で基本層序を確認した。各遺跡ごとに異なるが、土層は調査区30m毎を基本にベルトを残し、確認した。また、特に層序が複雑な遺跡は、調査開始当初、土層ベルト脇に確認トレンチを入れ、基本層序を確認した。

②包含層の掘削 基本層序を確認したのち、包含層直上まで重機(バック・ホー)で除去した。包含層の掘削は人力で、排土はベルト・コンベアーで調査区域外に運搬した。

③遺構の検出・発掘 検出された遺構は番号を付し発掘した。遺構番号は時代に関係なく種別毎に分けて通し番号とした。種別は土坑・集石土坑などである。

④実測・写真 実測は平面図が簡易遣り方で1/20を基本に、対象物に応じて1/10・1/5でおこない、断面図もこれに準じた。全体図は平板で1/60である。

## B 調査経過

発掘調査は中棚遺跡が平成4年度、牧ノ沢遺跡が平成5年度で終了した。一方の大坂上道遺跡・猿額遺跡は平成4年度～5年度と複数年度にまたがる調査である。今回、報告する遺跡が多いこと、調査期間が2か年度にまたがる遺跡であることなどから、調査経過は年度当初と大きく変更があった事項のみ記すことにしたい。

### ・平成4年度(4月13日～11月27日)

年度当初の道路公団との協議では、大坂上道遺跡(8,700㎡)・猿額遺跡(3,200㎡)の調査を行う予定であった。基本的に調査員5名(このうち2名は、適宜、第一次調査を併行して行う)、作業員30名の体制をとる。工事工程の都合から、大坂上道遺跡から調査を開始した。

#### (1) 大坂上道遺跡(4月13日～6月30日)

調査区南側及び北側中央(約4,200㎡)を行った。その後、引き続き大坂上道遺跡の調査を行う予定であったが、道路公団から工事工程の都合上、猿額遺跡・中棚遺跡を優先して欲しいとの要求をうける。県教委・道路公団・埋文事業団の協議により、道路公団側の要求を受け入れ、年度当初の計画を大きく変更した。その結果、①今年度、大坂上道遺跡の調査はこれ以上行わず、残り4,500㎡は来年度(平成5年度)

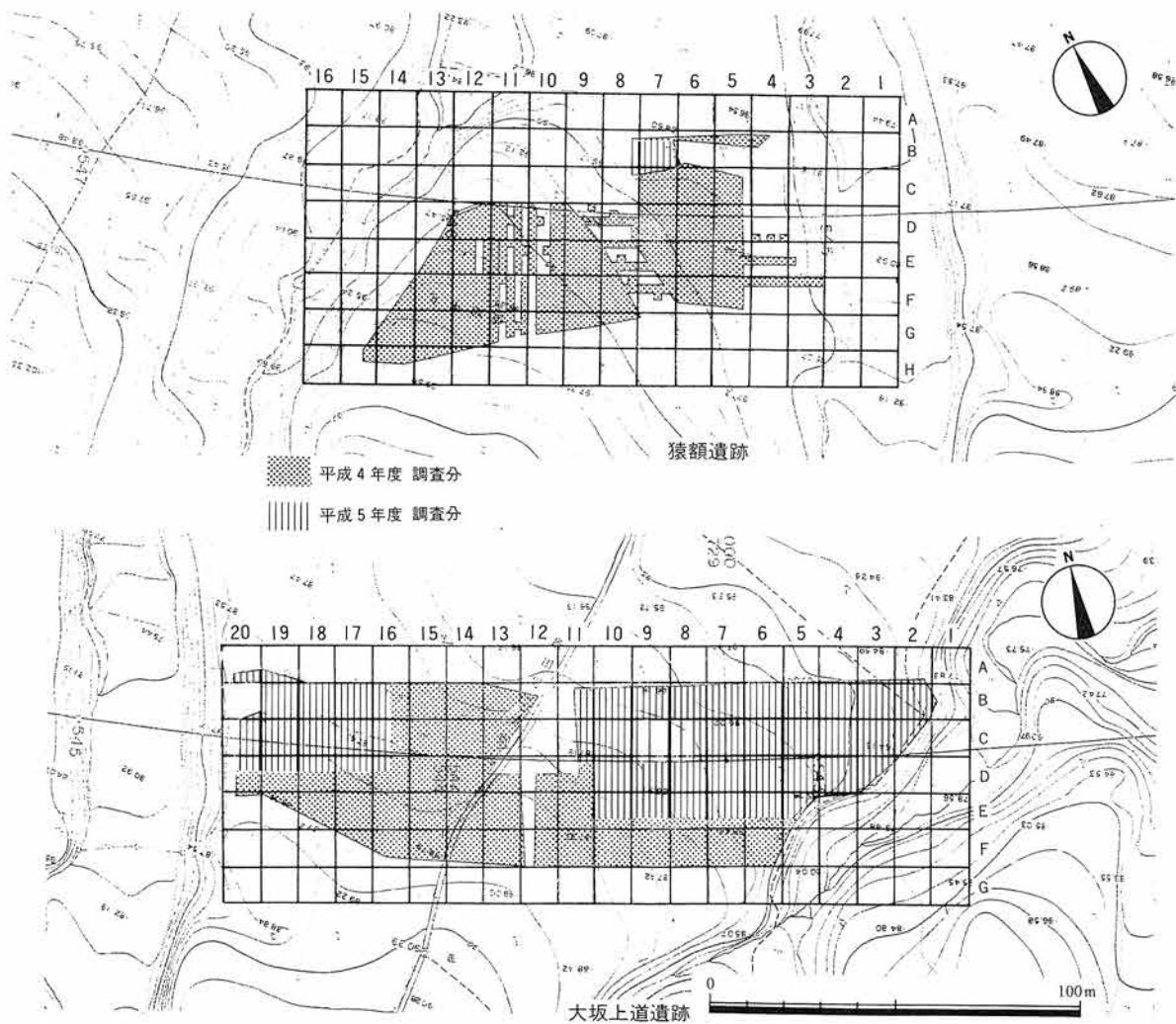
## 2 第二次調査

調査を行う、②大坂上道遺跡の今年度分の調査終了後は、猿額遺跡の調査を行う。③猿額遺跡の調査終了後は、中棚遺跡の調査を行い、今年度中に調査を終了すること。

### (2) 猿額遺跡（7月1日～9月25日、10月29日～11月27日）

大坂上道遺跡における遺構実測の一部が残っていたものの、7月1日から猿額遺跡の調査を併行して開始した。猿額遺跡は大きく①標高92m～99mの上段（調査区最西部）、②標高84m～88mの下段（調査区中央～東部）、③上段から下段にかけての斜面（調査区中央）、④下段から谷部にかけての斜面（調査区最東部）に分かれている。このうち、第一次調査が終了しているのは、②調査区下段のみである。このため表土除去のち、④下段～谷部にかけての斜面の第一次調査から開始した。対象面積の約20%（180㎡）を人力により掘削したが、遺物が希薄であることから調査を終了した。

7月7日から②の調査区下段に入る。ここでも工事工程の都合上、南半分（640㎡）を優先させ、北側の半分については、中棚遺跡の調査終了後に調査することにした。下段の調査に併行して、①の上段を人力で第一次調査を行った。③は対象面積の約12%を調査した結果、遺物が検出されなかったことから、調査を終了した。一方の①では、旧石器時代末～縄文時代草創期の尖頭器のほか、縄文土器が何点か出土した。このため、第一次調査で遺物が出土した地点を中心に包含層を掘削した。その結果、全体的に出土遺



第10図 大坂上道遺跡・猿額遺跡の年度別第二次調査範囲  
 (日本道路公団新潟建設局 津川工事事務所作成 1:1000 昭和63年測図)

物が希薄であり、特に上段内でも緩やかな傾斜地で遺物が確認されなかったことから、包含層の全面を掘削せず、9月3日から中棚遺跡の調査を開始した。猿額遺跡の下段北側は、中棚遺跡の調査終了後に再開して11月28日に終了した。なお、工事工程の都合上、猿額遺跡下段北側を東西に横断する工事用道路下の約100㎡については、来年度調査することにした。

### (3) 中棚遺跡（9月28日～11月17日）

調査区西側は第一次調査が行われていないことから、調査区9ライン以西の25%（約200㎡）で第一次調査を優先して行った。その結果、E-8グリッド付近で集石土坑が確認されたが、それ以西では遺構・遺物とも検出されなかった。第一次調査の結果をもとに、9ライン以東の包含層の全面掘削を行い、11月17日に調査を終了した。

平成4年度の調査面積は大坂上道遺跡4,200㎡、猿額遺跡3,200㎡、中棚遺跡2,300㎡の計10,000㎡である。翌年度への持ち越し分は大坂上道遺跡4,500㎡、猿額遺跡100㎡である。

### ・平成5年度（4月19日～7月23日）

大坂上道遺跡・猿額遺跡の他、別班で三川村牧ノ沢遺跡の発掘調査を行った。

#### (1) 大坂上道遺跡（4月19日～7月23日）

調査員4名（6月末から3名）、作業員30名の体制で行う。なお、今年度から作業員の雇用は(株)吉田建設に委託した。調査は工事工程の都合上、①調査区東部、②調査区西部、③調査区中央部の順で調査を行った。このうち調査区中央は遺物・遺構が極端に希薄なことから、2×10mの試掘を2m間隔で設定して、遺物の出土状況を検討した。この結果、遺構・遺物が検出されなかったことや、包含層である基本層序の第II層がほとんど存在しないことから、全面掘削を行わず、調査面積4,500㎡の調査を終了した。

#### (2) 猿額遺跡（7月12日～7月16日）

大坂上道遺跡と併行して調査を行った。昨年度行えなかった調査区北部の工事用道路下の約100㎡である。包含層の残存状況は予想していた以上に悪く、遺物は少量検出されたにとどまる。遺構も確認しえなかったことから、短期間で終了した。

#### (3) 牧ノ沢遺跡（6月3日～6月30日）

調査員2名、作業員20名の体制で行う。遺物は希薄であったものの、遺構と思われる小さな落ち込みが多数確認された。全面を地山まで掘削して、1,000㎡の調査を終了した。

## C 調査体制

平成4年度（平成4年4月15日～11月24日）

|      |   |
|------|---|
| 調査主体 | 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）                       |
| 調査   | 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 本間栄三郎）              |
| 管理   | 藍原 直木（事務局長）<br>渡辺 耕吉（総務課長）<br>茂田井信彦（調査課長） |
| 指導   | 戸根与八郎（調査課調査第一係長）                          |
| 担当   | 北村 亮（主任）                                  |
| 職員   | 大川原英智（ ）                                  |

## 2 整理作業

阿部 雄生（調査課調査第一係専門員）  
高橋 知之（ ” ）  
滝沢 規朗（ ” ）  
高橋 一功（ ” ）（4月15日～5月25日まで）  
庶務 藤田 守彦（総務課主事）

### 平成5年度

調査主体・調査・管理・庶務は平成4年度と同じ

大坂上道遺跡・猿額遺跡（4月19日～7月23日）

指 導 藤巻 正信（調査課調査第一係長）  
担 当 滝沢 規朗（ ” 専門員）  
職 員 佐藤 正知（ ” 主任）（4月19日～6月23日まで）  
横田 浩（ ” 専門員）  
上田 順二（ ” 嘱託員）

牧ノ沢遺跡（6月3日～6月30日）

担 当 北村 亮（調査課調査第一係主任）  
職 員 阿部 雄生（ ” 専門員）

## 3 整理作業

### A 方法

#### (1) 遺物

出土遺物の大半は土器と石器で、このうち縄文時代のものが主体を占める。この他、若干ではあるが鉄製品、古銭が出土している。

土器・石器 基本作業として袋ごとに①洗浄、注記、分類を行う。その後、風化の著しい土器についてはバインダーを施した。注記は素材によって白色ポスターカラー、墨汁を使い分けた。なお剥片石器や、ポスターカラーを使用した土器の場合は、注記ののち文字上にニスを塗布した。

遺物の分類は遺構とグリッド、層序により行った。接合は基本的に小グリッド毎に行い、その後、器形毎、各層序で再度試みた。実測・観察終了後、保存と写真撮影を考慮して石膏復元を行っている。

鉄滓・古銭 基本的には土器と同様の作業を行った。なお、ともに簡単なサビ取りを行ったのち、シリカゲルとともにビニール袋に入れ保管し、特に保存処理などは行っていない。

#### (2) 図面

現場で作成した遺構実測図は、A1版で約80枚にのぼる。実測図は遺構ごとの平面図・断面図（1/5、1/10、1/20）に分け、それぞれに番号を付し台帳を作成した。

遺構実測図はレイアウトの内容上1/10、1/20、1/40、1/250を作成している。

B 経過と体制

(1) 経過

出土遺物の洗浄は基本的に現場で行い、残ったものについては埋文事業団曾和分室で行った。また注記、図面・写真の整理、遺構台帳・調査カードの作成は発掘調査と並行して行い、残ったものについては現場終了後に行った。

整理作業の本格的開始は平成4年11月からである。調査員の他に調査補助員を配置した。整理期間中、人員については若干変動があったものの基本的に職員（担当・調査員）5名が当たった。

(2) 体制

整理が本格化した平成4年12月以降の体制は発掘調査と同様で、以下の通りである。

平成4年度

指導 戸根 与八郎（県埋蔵文化財調査事業団調査課調査第一係長）  
 担当 滝沢 規朗（ ” 専門員）[総括、石器・土器実測、図版、原稿]  
 職員 大川原 英智（ ” 主任）[石器実測]  
       阿部 雄生（ ” 専門員）[石器・土器実測]  
       高橋 知之（ ” ）[石器・土器実測]  
       高橋 一功（ ” ）[石器・土器実測]

平成5年度

指導 藤巻 正信（県埋蔵文化財調査事業団調査課調査第一係長）  
 担当 滝沢 規朗（ ” 専門員）[総括、石器・土器実測、図版、原稿]  
 職員 佐藤 正知（ ” 主任）[石器・土器実測、図版、原稿]  
       北村 亮（ ” ）[原稿]  
       鈴木 俊成（ ” ）[石器実測]  
       阿部 雄生（ ” 専門員）[石器・土器実測、図版、原稿]

平成6年度

指導 藤巻 正信（県埋蔵文化財調査事業団調査課調査第一係長）  
 担当 滝沢 規朗（ ” 文化財調査員）[原稿、図版、編集]

| 月<br>年度 | 4                              | 5                              | 6                           | 7 | 8                           | 9 | 10 | 11                             | 12 | 1 | 2 | 3 |
|---------|--------------------------------|--------------------------------|-----------------------------|---|-----------------------------|---|----|--------------------------------|----|---|---|---|
| 2       | 第一次調査 <input type="checkbox"/> |                                |                             |   |                             |   |    |                                |    |   |   |   |
| 3       | <input type="checkbox"/> 第一次調査 | 第一次調査 <input type="checkbox"/> |                             |   |                             |   |    |                                |    |   |   |   |
| 4       | <input type="checkbox"/> 第二次調査 |                                |                             |   |                             |   |    | <input type="checkbox"/> 第二次調査 |    |   |   |   |
| 5       | <input type="checkbox"/> 第二次調査 |                                |                             |   | <input type="checkbox"/> 整理 |   |    |                                |    |   |   |   |
| 6       | <input type="checkbox"/> 整理    |                                | <input type="checkbox"/> 整理 |   |                             |   |    |                                |    |   |   |   |

第3表 調査と整理の経過

## 第Ⅳ章 記述方法

### 1 はじめに

本書は津川町大坂上道遺跡、猿額遺跡、中棚遺跡、三川村牧ノ沢遺跡の4遺跡の報告書である。遺跡数  
が多岐に及ぶことから、記述については重複する可能性が高い。このため、各章で繰り返し凡例を記述す  
ることを避けるため、本章では遺物の記述にあたり、特に重複する項目のみ統一することにした。

### 2 記述方法

#### A 図版・記述

遺物の記述にあたって問題となるのが出土層位である。牧ノ沢遺跡、中棚遺跡では、遺物包含層が単層  
であるため問題はないが、大坂上道遺跡・猿額遺跡では遺物包含層が複数に及ぶ。一応、遺物包含層のⅡ  
層とⅤ層の間層として、沼沢火山灰層がある地点は明確に区分できる。しかし、沼沢火山灰層が堆積しな  
い地点での遺物包含層は「Ⅱ層出土遺物」としか表示できない。また遺構内からの出土遺物にしても、そ  
の遺構がどの層位を掘り込んで構築しているかにより所属年代が分かれる。これら未消化の問題を残す結  
果となるが、図版上では遺構別・出土層位ごとに分けることにした。一方、遺物の記述は煩雑さを防ぐ意  
味から、遺構出土・包含層出土を一括して分類し、記述を行うことにした。

#### B 遺構

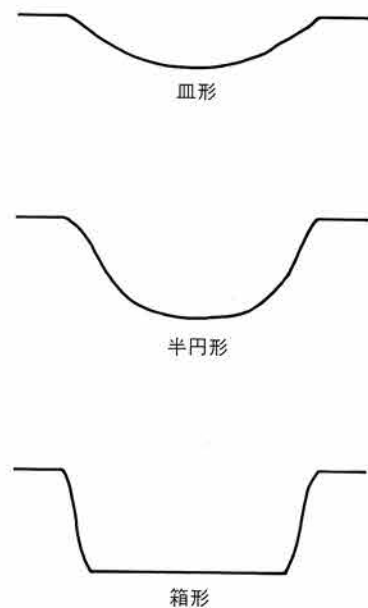
今回の調査で確認された遺構には、土坑・焼土坑・フラスコ状土坑・  
集石土坑・集石・埋設土器などがある。これらの平面形態については  
概略的に記述を行ったが、断面形については「皿形」・「半円形」・  
「箱形」に区分して記述する（第11図）。

#### C 遺物

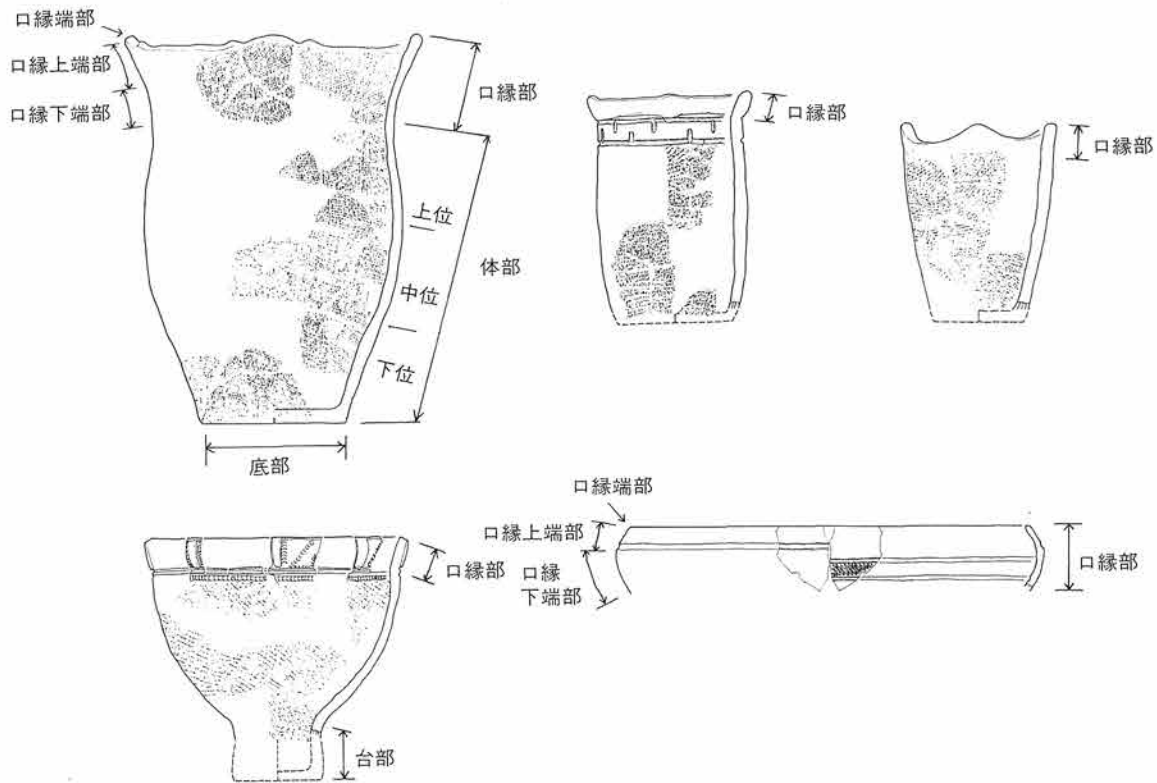
##### (1) 土器

##### 〈縄文土器の分類〉

出土土器の記述は分類毎に行ったが、大分類については帰属年代を  
重視して、第〇群土器とした。また細分に際しては、型式を重視して  
第〇群〇類土器として行っている。しかし粗製の深鉢や、文様の判断  
が行い難かった土器は、大別・細別にあたって十分な根拠を持った分  
類とは言いがたい。こうした土器については、出土地点や胎土から推  
定して、分類を行ったが、十分なものとは言いがたい。また分類図は、



第11図 遺構断面の模式図



第12図 縄文土器の部位名称模式図

出土点数が多いもののみ作成した。

#### 〈部位名称〉

平安時代の遺物については、『一之口遺跡東地区』[鈴木ほか1994]での呼称(PP.69)に準じる。また、中・近世陶磁器についても、これを参考にして行った。縄文土器については、第12図のとおりである。

#### (2) 石器

##### 〈資料の提示方法〉

基本的には、『五丁歩遺跡』[高橋保ほか1990]に準じている。詳細は両報告書に譲るが、以下で若干の概要を記す。

##### a 出土点数

完形品・ほぼ完形品・破損品・破片を問わず、1個を1点として数えた。問題となるのが接合資料である。接合資料は、同一地点(同一遺構または、同一の小グリッド)のものは接合したものを1個体として数えた。なお、本報告で行う遺跡では、接合資料は小グリッドをこえては存在しない。

##### b 実測図の図法と表現方法

基本的には『五丁歩遺跡』に準拠した。使用痕についてはスクリーントーンを用い、黒色の付着物については黒く塗りつぶしている。



2 記述方法

| 分類  | 刃部形状                             | 刃部ライン        | 素材             | 二次加工部位                      | 細分類 |
|-----|----------------------------------|--------------|----------------|-----------------------------|-----|
| A類  | スクレイパー<br>中型・急角度・連続剥離            | 外 彎 状        | 縦長             | 側縁                          | A 類 |
|     |                                  |              | 横長             | 底縁・側縁                       |     |
| B類  | スクレイパー<br>小型・急角度・連続剥離            | 外 彎 状        | 縦長             | 側縁                          | B 類 |
|     |                                  |              | 横長             | 底縁・側縁                       |     |
| C類  | 鋸歯縁石器<br>大型・急角度・鋸歯状剥離            | 直線状          | 縦長・厚手          | 側縁                          | C1類 |
|     |                                  | 外 彎 状        | 横長・厚手          | 底縁                          |     |
|     | 中型・小型・急角度・鋸歯状剥離                  | 直線状          | 縦長・薄手          | 側縁                          | C2類 |
|     |                                  | 外 彎 状        | 横長・薄手          | 底縁・側縁                       |     |
| D類  | 鋭利な尖端部を持つ石器<br>大型・急角度剥離          | 直線状<br>内 彎 状 | 厚手             | 片側面（一方の片側面は古い剥離面や折断面等を利用する） | D1類 |
|     |                                  |              |                | 両側縁                         |     |
|     | 大型・浅角度剥離                         | 直線状<br>内 彎 状 | ———            | 片側縁（D1類に同じ）                 | D2類 |
|     |                                  |              |                | 両側縁                         |     |
|     | 中型・小型剥離                          | 直線状<br>内 彎 状 | ———            | 薄手                          | D3類 |
|     |                                  |              |                | 厚手                          | D4類 |
| ——— | ———                              | ———          | 両側縁            | 石 錐                         |     |
| E類  | 抉入石器（ノッチ）<br>大型ノッチ<br>大型・中型・抉入剥離 | 内 彎 状        | 縦長・厚手          | 側縁                          | E1類 |
|     |                                  |              | 横長・厚手          | 底縁                          |     |
|     | 小型ノッチ<br>中型・小型・抉入剥離              | 内 彎 状        | 縦長・薄手          | 側縁                          | E2類 |
|     |                                  |              | 横長・薄手          | 底縁・側縁                       |     |
| F類  | 中型・小型・不連続剥離                      | ———          | 縦長             | 側縁                          | F1類 |
|     |                                  | 端部に丸味        | 縦長             | 側縁と端部                       |     |
|     |                                  | ———          | 横長             | 底部・側縁                       |     |
| G類  | 大型・中型・浅角度・不連続剥離                  | 直線状          | 縦長・厚手          | 側縁                          | G 類 |
|     |                                  | 内 彎 状        | 横長・薄手          | 底縁                          |     |
| H類  | 無加工（使用痕あり）<br>中型・小型・浅角度・不連続剥離    | 外 彎 状        | 背面は自然面         | 底縁・側縁                       | H 類 |
| I類  | 端部に小型・連続剥離                       | 端部に丸味        | 縦長・薄手<br>横長・薄手 | 端部<br>端部                    | I 類 |
| J類  | 無加工（使用痕あり）                       | ———          | 縦長             | 側縁                          | J1類 |
|     |                                  |              |                | 側縁と端部                       |     |
|     |                                  |              | 横長             | 底縁                          | J2類 |
|     |                                  |              |                | 底縁と側縁                       |     |
| K類  | 両面加工（調整）石器<br>刃部平面形は波状、側面観はジグザグ状 | 外 彎 状        | 厚手             | ほぼ全周（円形・楕円形）                | K1類 |
|     |                                  |              |                | ほぼ半周（半円形状）                  | K2類 |
|     |                                  | ———          | ———            | K1・K2類以外（不整形）               | K3類 |
| 複合  | A～K類の組み合わせ                       | ———          | ———            | ———                         | 複 合 |

第4表 不定形石器の分類表（高橋保雄 1992から）



## 〈分類・名称〉

出土点数の多い不定形石器、磨石類については、基本的に『五丁歩遺跡』[高橋保雄1992]の分類に準じている。

## a 不定形石器

礫石器・定形石器・石核・板状石器、剥片類（二次加工や使用痕の認められない剥片・碎片類）以外のものを不定形石器として扱った。不定形石器の分類は第4表の通りである。

なお、大分類であるA～Kについては「五丁歩遺跡」分類に従ったが、細分については、明確にこれに当てはまらないものや、微妙な違いがあることから、第4表には準拠していない。統一性に欠けるものの、各遺跡毎で細分は行うこととした。

## b 磨石類

礫の表面に残された痕跡のうち、「磨痕」・「凹痕」・「敲打痕」が認められるものを磨石類とした。使用痕の

組み合わせによる大分類（A～H類）、使用痕の部位の組み合わせによる細分ともに「五丁歩遺跡」の分類に準拠した（第5表）。

## c その他

定形的な石器と不定形石器の識別（例えば石錐と不定形石器D類との違い）など、基本的な事項はこれまでの通り「五丁歩」分類に準じている。しかし、東北地方で数多く確認されている「篋状石器」と「打製石斧」の違いについては、明確な識別方法が確立していないようである。ここでは、『岩原I遺跡・上林塚遺跡』[北村1990]、『上ノ平遺跡A地点』[飯坂1994]での分類案を参考にして便宜上、以下のように規定した。

- ・打製石斧 ①軟質な石材を用い、片面に自然面を残して刃部が形成されているもの。
- ②二次加工が両面に施された両刃のもの。

- ・篋状石器 ①硬質な石材が使用されている。

②基本的には片刃で、幅広な刃部を有し、形状が撥形か短冊形を呈するもの。

なお出土点数の多い篋状石器の細分については、各遺跡で行っており統一性は欠いている。

| 使用痕の組合せ           | 磨痕の位置        | 敲打痕の位置   | 分類      |
|-------------------|--------------|----------|---------|
| A 類<br>磨 痕        | 1類 正裏面       | —————    | A 1 類   |
|                   | 2類 側 面       |          | A 2 類   |
|                   | 3類 正裏面+側面    |          | A 3 類   |
| B 類<br>磨痕+凹痕      | 1類 正裏面       | —————    | B 1 類   |
|                   | 2類 側 面       |          | B 2 類   |
|                   | 3類 正裏面+側面    |          | B 3 類   |
| C 類<br>磨痕+敲打痕     | 1類<br>正裏面    | a類 端 部   | C 1 a 類 |
|                   |              | b類 側 面   | C 1 b 類 |
|                   |              | c類 端部+側面 | C 1 c 類 |
|                   | 2類<br>側 面    | a類 端 部   | C 2 a 類 |
|                   |              | b類 側 面   | C 2 b 類 |
|                   |              | c類 端部+側面 | C 2 c 類 |
|                   | 3類<br>正裏面+側面 | a類 端 部   | C 3 a 類 |
|                   |              | b類 側 面   | C 3 b 類 |
|                   |              | c類 端部+側面 | C 3 c 類 |
| D 類<br>磨痕+凹痕+敲打痕  | 1類<br>正裏面    | a類 端 部   | D 1 a 類 |
|                   |              | b類 側 面   | D 1 b 類 |
|                   |              | c類 端部+側面 | D 1 c 類 |
|                   | 2類<br>側 面    | a類 端 部   | D 2 a 類 |
|                   |              | b類 側 面   | D 2 b 類 |
|                   |              | c類 端部+側面 | D 2 c 類 |
|                   | 3類<br>正裏面+側面 | a類 端 部   | D 3 a 類 |
|                   |              | b類 側 面   | D 3 b 類 |
|                   |              | c類 端部+側面 | D 3 c 類 |
| E 類 凹 痕           | —————        | —————    | E 類     |
| F 類<br>凹 痕+敲打痕    | —————        | a類 端 部   | F a 類   |
|                   |              | b類 側 面   | F b 類   |
|                   |              | c類 端部+側面 | F c 類   |
| G 類<br>敲 打 痕      | —————        | a類 端 部   | G a 類   |
|                   |              | b類 側 面   | G b 類   |
|                   |              | c類 端部+側面 | G c 類   |
| H 類 「特殊磨石」に近似するもの |              |          | H 類     |

第5表 磨石類の分類表（高橋保雄 1992から）

## 第V章 大坂上道遺跡

### 1 調査の概要

大坂上道遺跡の調査は、工事工程の都合により2か年度にまたがって実施した。調査の進捗状況は第III章に記したが、各遺跡における調査の概要は異なる部分もある。ここでは大坂上道遺跡の調査方法・調査経過について概略を記す。

#### A 調査地の現況

阿賀野川の左岸、幅約180mの段丘上（標高84～88m）に位置している。遺跡の位置する段丘には舌状の張り出しが認められ、各段丘間は谷部となっている。その谷部は近年まで傾斜を利用した小区画の水田が営まれていた。水田が未だ完全に埋没しきっておらず、畦畔が明瞭に確認できる。

遺跡の位置する段丘は戦後の一時期、開墾され畑地として利用されていたというが、昭和30年代以降は杉の植林に切り替わったという。また、調査区のほぼ中央には、調査開始の直前まで使用されていた道が残っている。包含層の一部が削平されていたものの、遺跡の残存状況は概して良好である。

#### B 調査方法

##### (1) 基本層序の確認

第一次調査で得られた結果をもとに、基本層序の確認を行いながら層序を認識した。東西のセクションベルトはCライン、中央のDラインに、南北のセクションベルトは3ライン、7ライン、10ライン、16ラインなどにセクションベルトを残して土層の堆積状況を確認した。

##### (2) 包含層の掘削

遺物包含層は第II層と第V層の二面である。基本的に層序・小グリッド毎に人力で掘削を行ったが、遺物が多数出土した調査区最東部の第II層は、出土遺物をそのまま残し、大グリッド単位で掘削を行った。大グリッド単位で遺構が存在しないことを確認したのち、遺物を取り上げIII・IV層を人力で取り除いた。

##### (3) 遺構確認

各包含層の直下層（IV層、地山）と遺物包含層のV層で遺構確認を行った。基本は①II層の掘削、②沼沢火山灰層（IV層）での遺構確認、③沼沢火山灰層（IV層）掘削、④V層での遺構確認、⑤V層の掘削、⑥地山での遺構確認である。これらの工程を調査区北東部～南西部で行ったが、遺物の出土量が多い調査区北東部では大グリッド単位で、遺物の出土量が少ない調査区中央では小グリッド2つ分を目安に①～⑥までの工程を完結させた。

基本的には上記の手順で作業を進めたが、遺物が比較的多く出土した調査区最東部では、以下の方法で包含層であるII層で遺構を確認した。

まず、II層掘削時に検出された遺物（土器・石器、搬入礫）は取り上げずに残す。特に搬入礫の出土状態が手がかりになる。扁平な川原石が搬入されている場合、出土状態はいずれも扁平な面が層の面と平行

であり、垂直になる場合は人為的に埋められた可能性が高い。搬入礫がII層中から出土した場合のレベルはほぼ同じであり、その面を入念に精査することで遺構が確認される場合がある。この方法で性格不明遺構をII層中（黒色土）で確認できた。II層中でも、わずかに黒色の度合いが強いことから遺構と認定した。これ以外の地点では確認できなかったものの、黒色土中で遺構確認した事例として呈示しておきたい。

### C グリッドの設定

グリッドの基線は道路法線のセンター杭に基づいている。STANo.543とSTANo.544を結ぶラインを基線X軸、これに直行するラインを基線Y軸とし、これに基づいて10mの方眼を組んだ。おおよそX軸が東西方向、Y軸が南北方向である。

## 2 層序と遺物の出土状況

### A 層序（第13図）

大坂上道遺跡は平坦な丘陵上に位置しているものの、地点別の比高差は最大4mある。このためか、地山の標高が低いところでは沼沢火山灰層の堆積が認められるなど、遺跡内における層位は均一でなく、基本層序が全体の層序を表すものではない。基本層序と異なる地点の状況については、順次記すことにしたい。基本層序は以下のとおりである。

- I層 暗灰褐色の腐植土層で、粘性・しまりに欠ける。厚さ10～15cmで、平安時代～中・近世の遺物を極く少量含む。
- II層 暗褐色の腐植土層で、やや粘性を持つものの、しまりに欠ける。厚さ10～30cmである。縄文時代・平安時代の遺物包含層である。
- III層 基本層序のII層とIV層の漸移層である。暗黄褐色のシルト層で、厚さ20～40cmである。
- IV層 沼沢火山灰層である。黄褐色のシルト層で、厚さ10～25cmである。
- V層 粘性・しまりに共に富む明灰色土層である。厚さ10～15cmで、縄文時代前期末葉以前の遺物包含層である。IV層（沼沢火山灰層）が厚く堆積する地点にのみ認められる。
- VI層 黄褐色を呈する粘質土で、本遺跡の地山である。

（沼沢火山灰層堆積範囲外） 上方からI層、II層、III層、VI層に分けられる。このうちIII層は基本層序のそれとは異なっている。このIII層は、基本層序のIII層と色調は酷似するが、II層とVI層（地山）の漸移層のため、性質が異なっている。部分的にIV層の粒子を含むものの、やや粘性を帯びている。

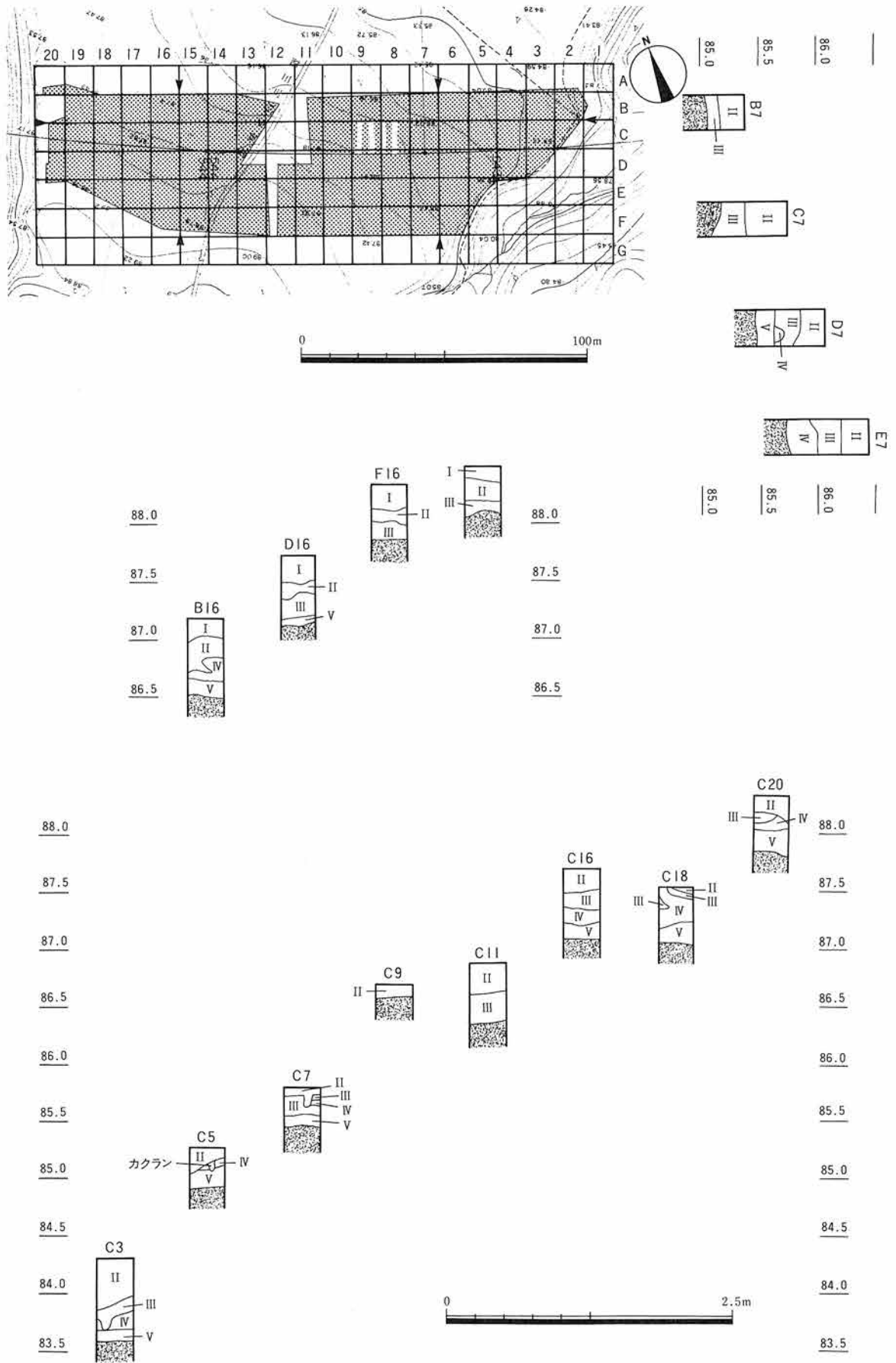
### B 遺物の出土状況

出土遺物は平箱<sup>註1)</sup>で約40箱におよび、今回報告する4遺跡の中で出土量が最も多い。上記のとおり、遺物包含層は二面存在することから、ここでは各層序ごとの遺物出土状況を記述する。

包含層上面（基本層序II層）は遺物の出土状態から大きく三地区に分かれる。遺物が最も多く確認され

註1) 各遺跡の2節Bで遺物の出土量を換算する平箱の法量は、34cm×54.5cm、深さ10cmである。平箱へ、おおよそ袋詰めした数値を提示した。

2 層序と遺物の出土状況



第13図 大坂上道遺跡の土層柱状図

たのは調査区北東部である。グリッドではB・C・Dの2～7ラインまでにあたる。この地点は沼沢火山灰層が明瞭に堆積しており、標高も84～86mと調査区の中で最も低い地点である。遺物は土器・石器とも、大坂上道遺跡の全出土量の約%を占めている。

逆に最も遺物の出土量が少なかったのは、調査区中央部、グリッド8～15ラインである。この地点は標高87m前後であるが、沼沢火山灰層の堆積が確認されていない。また遺物包含層であるII層の堆積も極めて薄く、最も薄い所では10cmほどであった。

調査区の最も西である17～20グリッドにおける遺物の出土量は、やはり北部に集中している。また沼沢火山灰層の堆積が確認されているのも、やはり北部である。このことから、大坂上道遺跡の立地する段丘上では、東西の両端、南北方向では北側に遺物が集中しており、仮に集落が存在する場合には調査区外では北側が有力であろう。なお遺物の集中地点と沼沢火山灰層の分布は、ほぼ同じような傾向がたどれる。

### 3 遺 構

#### A 概 要

土坑16基、フラスコ状土坑2基、焼土坑5基、埋設土器2基、集石及び集石土坑5基、性格不明遺構1基が検出された。遺構は調査区の中央部を除いた東部と西部に集中して分布する。遺構の集中する調査区東部や西部には沼沢火山灰層が堆積しており、遺構の構築年代を把握する手がかりになる。沼沢火山灰層の堆積年代については、第II章のとおり縄文時代前期末葉である。したがって、沼沢火山灰層の堆積によって埋没した遺構は縄文時代前期末葉以前、沼沢火山灰層上で確認された遺構は縄文時代前期末葉以降の所産といえる。

沼沢火山灰層及び遺構の覆土や層序、また出土遺物から推察した各遺構の年代は以下のとおりである。

##### <1> 縄文時代前期末葉以前

1・2・4～6・14～16号土坑、3・4号焼土坑、1号集石土坑

##### <2> 縄文時代中期前葉以降

3・8・11・13・18号土坑、1・2号フラスコ状土坑、1・2号焼土坑、2・3号集石、1・2号土坑埋設土器、性格不明遺構

##### <3> 縄文時代晩期

17号土坑

##### <4> 平安時代

10号土坑

##### <5> 中・近世

7号土坑、12号土坑

##### <6> 時期不明

4号土坑、5号土坑

#### B 各 説 (図版3～6)

##### (1) 土 坑 (図版3・4)

1号土坑 最北東部に位置し、3m南東には2号土坑がある。確認面は地山で、残存状況はおおむね良好である。平面形は円形に近く、長径72cm、短径68cm、深さ8cmである。壁は緩やかに掘り込まれており、断面形は皿形であるが、底部には部分的に凹凸が認められる。覆土は単層で、少量の炭化粒を含む。覆土中から縄文土器1片が出土しているが、細片のため時期は明確にしえない。

### 3 遺構

2号土坑 最北東部に位置し、3 m北西には1号土坑がある。確認面は地山で、残存状況は良好である。平面形は楕円形を呈し、長径48cm、短径45cm、深さ14cmである。断面形は皿形で、底部は平坦である。覆土はII層に分けられ、上層から縄文土器が出土しているが、細片のため時期は明確にしえない。

3号土坑 北東部に位置し、2 m北西には1・2号焼土坑がある。確認面はIV層（沼沢火山灰層）で、残存状況は良好である。平面形は長楕円形を呈し、長径74cm、短径50cm、深さ13cmである。断面形は皿形で、南側がやや落ち込む。覆土は4層に分けられ、1層から石器剥片と土器が1片が出土している。土器は、縄文時代中期前葉の所産と考えられる。

4号土坑 東端部に位置し、南東には隣接して1号集石土坑がある。確認面はV層で、北側の上部が削平されている。平面形は長楕円形を呈し、長径74cm、短径52cm、深さ14cmである。断面形は皿形で、底部は平坦である。覆土は2層に分けられ、このうち上層から縄文土器が出土しているが、細片のため時期は明確にしえなかった。

5号土坑 中央からやや北東部に位置し、7 m南東には1号フラスコ状土坑がある。確認面は地山で、残存状況は良好である。平面形は長楕円形を呈し、長径128cm、短径70cm、深さ21cmである。断面形は箱形に近く、南壁は急傾斜で掘り込まれており、底部は平坦である。覆土は4層に分けられ、上層から縄文土器が出土しているが、細片のため時期は明確にしえなかった。

6号土坑 中央からやや東側に位置し、北側には隣接して3号・4号焼土坑が、3 m南東には7号土坑がある。確認面は地山で、残存状況は良好である。平面形は楕円形を呈し、長径75cm、短径63cm、深さ18 cmである。断面形は皿形に近く、中央部が7 cm程落ち込む。覆土は5層に分けられ、上層から縄文土器2片が確認されたが、細片のため時期は明確にしえなかった。

7号土坑 中央からやや東側に位置し、3 m北西には6号土坑がある。確認面は地山で、残存状況は良好である。平面形は楕円形を呈し、長径80cm、短径68cm、深さ24cmである。断面形は箱形で、底部は平坦である。覆土は3層に分けられ、いずれの層にもロームブロックが混入していた。縄文時代中期前葉の土器が検出されているが、覆土から近世の所産と考える。

8号土坑 中央からやや東側にほぼ単独で位置しており、半径10m内に遺構はない。確認面はII層で、東側を半截し、断面の形態から遺構と判断した。平面形は楕円形を呈し、残存部で長径98cm、短径31cm、深さ30cmである。断面形は皿形で、中央部が10cm程くぼむ。覆土は3層に分けられ、上層から縄文土器1片が確認されたが、細片のため時期は明確にしえなかった。

10号土坑 南東部に位置し、11m北側には5号集石土坑がある。確認面はIII層であり、北側上端を除き大きく削平されている。残存部の平面形は楕円形を呈し、長径123cm、短径95cm、深さ25cmである。断面形は筒形を呈し、底部は平坦である。覆土は3層に分けられるが、土師器杯・鍋、黒色土器碗や須恵器長頸壺・広口壺、鉄滓などが出土しており、9世紀後半の所産と考えられる。

11号土坑 中央からやや西側に単独で位置している。確認面は地山で、上面が削平されていた可能性が高い。平面形は長楕円形を呈し、長径300cm、短径130cm、深さ10cmである。断面形は皿形を呈し、北側にはテラスを持つ。底部は凹凸が認められ、覆土は単層である。出土遺物には長径23cmの搬入礫の他、縄文土器片が確認されているが、細片のため時期は明確にしえない。

12号土坑 西側の南端部に位置し、隣接して4号風倒木痕がある。確認面は地山で、残存状況は良好である。平面形は隅丸方形を呈し、径100cm、深さ32cmである。断面形は箱形で、底部は平坦である。覆土は単層で、出土遺物には陶磁器片や鉄製品があり、近世の所産と考えられる。



13号土坑 北西部にはほぼ単独で存在する。確認面はⅣ層（沼沢火山灰層）で、残存状況は良好である。平面形は楕円形を呈し、長径88cm、短径68cm、深さ25cmである。断面形は西側の壁がやや急傾斜に掘り込まれているが、皿形を呈し、底部も丸みを帯びる。覆土は7層に分かれるが、1層には少量の炭化粒を、5層には微量の焼土粒を含む。

14号土坑 北西端に位置し、2.5m南側には15・16号土坑がある。確認面はⅤ層で、残存状況は良好である。平面形は楕円形を呈し、長径50cm、短径45cm、深さ12cmである。断面形は皿形を呈し、底部は平坦である。覆土は2層に分けられるが、下層には少量の沼沢火山灰を含む。

15号土坑 北西端に位置し、南側には隣接して16号土坑が、2.5m北側には14号土坑がある。確認面はⅤ層で、残存状況は良好である。平面形は楕円形を呈し、長径75cm、短径68cm、深さ17cmである。断面形は皿形で、底部は平坦である。覆土は3層に分かれるが、1・2層には沼沢火山灰が混じる。

16号土坑 北西端に位置し、北側に隣接して15号土坑がある。確認面はⅤ層で、残存状況は良好である。平面形は円形に近い楕円形を呈し、長径62cm、短径60cm、深さ16cmである。断面形は北側がやや深い箱形を呈し、底部は平坦である。覆土は3層に分けられ、いずれの層にも沼沢火山灰が含まれている。

17号土坑 西側にはほぼ単独で位置している。確認面はⅣ層で、南西側上部が削平されている。平面形は楕円形を呈し、残存部において長径44cm、短径39cm、深さ16cmである。断面形は箱形を呈し、底部は丸みを帯びる。覆土は4層に分けられるが、最下層の4層には多量の沼沢火山灰を含む。出土遺物には縄文時代晩期の深鉢形土器がある。

## (2) フラスコ状土坑（図版5）

1号フラスコ状土坑 北東部に位置し、7m北西に5号土坑、8m南には2号集石がある。西側壁の上部が崩落しているが、残存状況は良好である。確認面はⅣ層（沼沢火山灰層）で、平面形は楕円形である。確認面で102×99cm、くびれ部で75×65cm、底面は75×68cm、深さ54cmである。断面形は西側くびれ部が崩壊しているものの、いわゆるフラスコ形で、底部は平坦である。覆土は4層に分けられるが、1・2層からは縄文土器片14点と小型剥片が、4層からは縄文土器片3点が出土している。

2号フラスコ状土坑 北西側に位置しており、10m北西には16号土坑がある。半截により遺構の存在が明らかになった。確認面はⅣ層（沼沢火山灰層）で、残存部からの推定では平面形は楕円形を呈する。確認面で長径78cm、短径63cm、深さ31cmである。底部は平坦で、断面形はくびれ部が崩壊していることから箱形を呈する。覆土は5層に分けられ、1～4層には沼沢火山灰粒・小礫が多数含まれていた。

## (3) 焼土坑（図版5）

1号焼土坑 北東の平坦部に位置し、2号焼土坑に切られている。確認面はⅣ層（沼沢火山灰層）で、残存部からの推定では、平面形は楕円形を呈し、長径47cm、短径35cm、深さ9cmである。断面形は皿形で底部は平坦である。覆土は焼土の単層で、多量の焼土粒・炭化粒を含むが、明確な火床は確認されなかった。

2号焼土坑 北東部に位置し、東に切り合って1号焼土坑、2m北東にSX1がある。北側及び西側がトレンチにより削平されており、残存状況は不良である。確認面はⅣ層（沼沢火山灰層）で、残存部から平面形は楕円形、断面形は皿状と推測できるが、大きさは不明である。覆土は焼土の単層で、多量の焼土粒・炭化粒を含むが、明確な火床は確認されなかった。出土遺物には縄文土器1片があるが、細片のため時期は特定できない。1号焼土坑と同じく沼沢火山灰層を掘り込んでいるため、縄文時代中期前葉以降の所産であると考えられる。なお1号焼土坑を切っており、2号焼土坑の方が古いことが確認されている。

3号焼土坑 中央からやや東側に位置し、南側には隣接して4号焼土坑がある。確認面は地山で、残存状況は良好である。平面形は楕円形を呈し、直径40cm、短径29cm、深さ6cmである。断面形は皿形で、底部は平坦である。覆土は4層に分けられ、1・3層は赤褐色の焼土層で、2・4層には炭化粒が混じる。出土遺物には縄文土器片1片があるが、細片のため時期は明確にしえない。

4号焼土坑 中央からやや東側に位置し、北側には隣接して3号焼土坑がある。確認面は地山で、残存状況は良好である。平面形は長楕円形を呈し、長径50cm、短径20cm、深さ12cmである。断面形は皿形で、中央部に5cm程の落ち込みを持つ。覆土は4層に分けられ、1・3層は赤褐色の焼土層で、2・4層には炭化粒が混じる。明確な火床は確認されなかったが、縄文時代後期に比定される土器が検出されている。

5号焼土坑 中央のやや南東に位置し、8m南東に5号集石土坑がある。確認面は地山で、残存状況は良好である。平面形は円に近い楕円形を呈し、直径43cm、短径36cm、深さ12cmである。断面形は皿形で、中央部に5cm程の落ち込みを持つ。覆土は3層に分けられ、上面の1・2層からは多量の焼土粒が検出された。最下層の3層からは炭化粒も多量に検出されたが、明確な火床は確認されなかった。また遺物は確認されず、時期は明確にしえない。

#### (4) 埋設土器 (図版5)

##### 1号埋設土器

東側の平坦部に位置し、隣接して北側に3号集石がある。確認面はII層で、上面がかなり削平を受けており残存状況は悪い。埋設土器は口縁部から体部中半を欠く。断ち割りにより、土器の周りに長径41cm、短径34cmの楕円形をした掘形の平面プランが確認された。上部が削平を受けていることから明確でないが、掘り方の断面形は筒形を呈する。残存する最大壁高は14cmで、西側にはテラスを持つ。覆土は褐色土の単層である。埋設土器の型式や土器埋設付近のII層から同一個体の土器片が多数出土しているから、縄文時代後期の所産と考えられる。

##### 2号埋設土器

最西端の平坦部に位置し、4.5m南東に18号土坑がある。確認面は地山で、上部はかなり削平を受けている。埋設土器は口縁部が表出した段階で掘形の存在が確認された。平面形は楕円形を呈し、長径33cm、短径26cmである。断面形は皿形で、残存部の最大壁高は7cmである。覆土は2層に分層できる。遺構内からは埋設土器以外の遺物は検出されず、埋設土器の型式から縄文時代後期の所産と考えられる。

#### (5) 集石・集石土坑 (図版6)

明確な掘り込みが伴い、礫に被熱の痕跡が明瞭に残る集石土坑(1号・4号・5号)と、明確な掘り込みが伴わず、礫に被熱の痕跡が確認できない集石(2号・3号)がある。本来、両遺構は区分すべきとも考えるが、第七章で記載する中棚遺跡例のように、わずかな掘り込みしか確認しえなかったものもあることから、ここでは両者をまとめて記載することにしたい。

1号集石土坑 最東端の平坦部に位置し、北側に隣接して4号土坑がある。確認面はV層で、残存状況は良好である。平面形は楕円形を呈し、長径80cm、短径68cmである。断面形は皿状で、確認した礫の最上部から底部までの深さは27cmである。底部は丸みを帯び、覆土は5層からなる。全ての層から炭化粒が検出されており、特に確認面礫直下の3層には炭化粒や炭化材の混入が著しい。覆土上部の1・2層中に礫が集中して確認されており、割れた礫が大半である。礫以外の遺物は検出されず、構築時期は明確にしえない。

2号集石 東側の平坦部に位置し、7m北側に1号フラスコ状土坑がある。確認面はII層で、礫の散布

状況は長楕円状を呈し、長軸約120cm、短軸約90cmに及ぶ。特に中心から半径40cm以内には礫が集中し、径35cmを最大に約30点程検出された。掘り込みは確認されず、土坑を伴わない集石と考える。礫以外には、集石確認面から縄文土器片が数点出土しているが、細片のため時期は明確にしえなかった。

3号集石 東側の平坦部に位置し、9m北東に2号集石、隣接して南側には1号埋設土器がある。確認面はII層で、礫の散布状況は楕円状を呈し、長軸約230cm、短軸約190cmに及ぶ。掘り込みは確認されず、2号集石と同じく土坑を伴わない集石と考える。礫は60点程確認されたが、他の集石の礫より大型で、径30cmを超えるものも11点存在する。出土遺物は磨製石斧の他に、ほぼ中央で横臥状態で検出された長径65cm、短径40cmの搬入礫がある。礫の確認面から縄文時代中期前葉の土器が出土している。

4号集石土坑 南東の平坦部に位置し、15m西側に5号集石土坑、15m南西には10号土坑がある。確認面はIII層で、残存状況は良好である。平面形は円形に近く、長径150cm、短径142cm、深さ35cmである。断面形は皿形で、底部には地山の礫が混じり凹凸が著しい。覆土は5層に分けられ、全ての層で炭化粒が確認された。特に礫直下の2層からは多量の炭化粒・焼土粒および小砂利が検出されている。礫は1層に集中している。径20cmを超える礫も少量あるが、全体的には小さめのものが多く、200点を超える。また、これら礫の中には、火熱を受けた痕跡があるものも多数含まれている。礫以外の遺物としては、石鏃が1点出土したのみである。

5号集石土坑 中央からやや南東に位置し、8m北西に5号焼土坑、10.5m南側に10号土坑がある。確認面はIII層で、残存状況は良好である。平面形は長楕円形を呈し、長径124cm、短径80cmである。断面形はすり鉢状を呈し、確認面の最上部から底部までの深さは35cmである。底部は丸みを帯び、北東部に足場状のテラスを持つ。覆土は4層に分けられ、全ての層から炭化粒が検出されており、特に礫直下の3層に含まれる炭化粒の量が著しい。礫は径20cmのものを最大に、約60点ほど確認されている。集石には、石皿を転用したと思われる石器も含まれているが、それ以外の遺物は検出されなかった。

#### (6) 性格不明遺構 (図版6)

性格不明遺構1 東側の平坦部に位置し、1m南西に1・2号焼土坑がある。確認面はIV層(沼沢火山灰層)で、南部を大きく欠き残存状況は悪い。残存部から平面は楕円形を呈すると推測でき、東西径は280cmであるが、南北径は不明である。断面形は皿形で、深さは45cmである。底部は凹凸が著しい。覆土は5層に分けられ、上部の1・2層には少量の炭化粒・焼土粒が混じる。沼沢火山灰層を掘り込んでいることや、出土土器から縄文時代中期前葉の所産と考えられるが、その性格や詳細については不明である。

#### (7) 風倒木痕

遺物が検出されたもののみ記述する。

1号風倒木痕 東端の平坦部に位置し、5m北東に1号集石土坑がある。確認面は地山で、残存状況は良好である。平面は不整楕円形を呈し、長径370cm、短径266cmである。出土遺物には縄文時代後期前葉の土器のほかに、小型剥片5点がある。

2号風倒木痕 他の遺構とは距離をおき、調査区中央の南側に位置する。確認面は地山で、残存状況は良好である。西側半分は未調査で詳細については不明であるが、平面形は不整楕円形を呈すると推測できる。残存部では長径328cm、短径148cm、深さ46cmである。断面形は皿形で、底部は平坦である。縄文土器片が数点確認されている。

3号風倒木痕 西側の平坦部に位置し、12m北西に17号土坑、16m北東に11号土坑がある。確認面は地山で、残存状況はおおむね良好である。平面形は確認面では不整楕円形を呈し、長径490cm、短径300cm、

深さ36cmである。底面では半円形を呈し、長径200cm、短径178cmである。断面形は皿形で、北東部にテラスを持つ。覆土からは縄文時代中期前葉の土器が一括出土している。

4号風倒木痕 西側の南端部に位置し、北側に隣接して12号土坑がある。確認面は地山で、平面形は不整形円形を呈する。南側の一部が調査区外にかかり、詳細については不明であるが、残存部では長径410cm、短径326cm、深さ32cmである。断面形は皿形で、縄文土器片が少量検出された。

5号風倒木痕 中央からやや西側に位置し、17m南西に11号土坑がある。確認面は地山であり、平面形は不整形円形を呈する。長径190cm、短径140cm、深さ22cmであり、断面形は箱形を呈する。覆土からは縄文土器片が少量出土している。

## 4 出土遺物

大坂上道遺跡で出土した遺物のうち、縄文時代に属するものが最も多い。遺物のほとんどは包含層から出土したもので、遺構に伴うものは極く僅かである。このため図版上は、遺構内・V層・II層出土遺物で区分したが、記述は一括して器種毎に報告することにした。

### A 縄文土器 (図版7～10-1～150、写真図版61～64)

大きく時期により分類し報告を行う。中期・後期のものが主体で、これらは第II群・第III群土器としたが、型式や細かな時期に細別は可能である。記述にあたり、こうした項目を重視して細分を行ったが、文様が残存するものでも細片や、縄文のみの深鉢形土器などは明確な分類の根拠を欠く場合が多い。ここでは、胎土や出土地点も考慮して細分を行ったが、十分に解決しえない点もあることをつけ加えておく。

|         |       |           |
|---------|-------|-----------|
| 第I群土器   | …………… | 縄文時代前期の土器 |
| 第II群土器  | …………… | 縄文時代中期の土器 |
| 第III群土器 | …………… | 縄文時代後期の土器 |
| 第IV群土器  | …………… | 縄文時代晩期の土器 |

#### (1) 第I群土器 (図版7-22)

前期末の大木6式土器が1点のみ出土している。頸部のくびれが特に強いタイプで、口縁部は直線的に外へ開いて立ち上がる。口縁端部上端が上方につまみだされ、端部は外傾する幅広な面を持つ。粘土紐貼り付けにより文様が描かれている。口縁部端面及び、頸部付近には約1cmと幅広な、口縁部及び体部上位には幅約2mmと細い粘土紐がそれぞれ貼り付けられている。頸部付近の太い粘土紐以外には、細かな爪形文が施されている。

#### (2) 第II群土器 (図版7・8-20・21・23～65)

阿玉台式土器、五領ケ台式土器や八辺式土器など関東系土器の影響を受けた可能性の高いものもある。関東系の土器をA類(23～31)、北陸系の新保・新崎式土器の影響が強い土器をB類(21・32～44、60～66)、東北南部系の大木式土器をC類(56・64・65)、その他のD類がある。

##### ・A類(23～31)

細分が可能で、阿玉台式系の1類(23～29)、五領ケ台式の影響をうけた2類(30)、八辺式の影響を受けた可能性のある3類(31)に分かれる。

##### A1類(23～29)

同一個体の可能性が高いものを含め、7点出土している。阿玉台式土器特有の、胎土に金雲母を多量に含むもの(24~28)と、それほど多く含まないもの(23・29)がある。結節沈線文、押捺文が施された典型的な阿玉台式の土器以外にも、体部に縄文が施され様相が異なるが、口縁部の文様から可能性のあるもの(23)も、本類に含めた。

23は完形品で、円筒形の体部と内湾して外へ開く口縁部とからなる。口縁部は4単位の波状を呈し、内面上端部は肥厚する。端部は内外面ともに面を持つ。文様は簡素で、口縁部は波状部を中心に粘土紐貼り付けによる文様が、体部は無節の縄文施文後に磨消しが行われているにすぎない。口縁部文様のうち波頂部直下には中空の円形浮文が、口縁上端部~下端部には棒状の粘土紐が垂下する。ともに4単位となるのか。また口縁部外端面には、粘土紐貼り付けによる「U」字状の凹みが波状部の両側縁に施されている。

口縁部破片は結節沈線文が施されたもの(24・26~28)と、残存部には施されていないもの(25・29)がある。また口縁部は、波状口縁(25~29)が主体で、平縁のものは1点のみである(24)。

平縁の24は、渦巻状隆帯の把手を4単位有する。把手は波頂下を巻くように伸びてきた隆帯が、渦巻きとなって「S」字状を呈する。口縁部は把手により4つに区切られているが、口縁上端部は円形刺突文、口縁下端部には横位で、把手間で円形に継続する結節沈線文が施されている。体部上位には、沈線による2条の鋸歯文と指頭圧痕を一単位とする文様が連続している。

25・26は同一個体の可能性が高い。共に口縁部は、体部から大きく屈曲して「く」の字状を呈する。25は環状の把手が口縁部と体部を結ぶ。残存部には結節沈線文により長円形の区間と、その内部には山形の文様が施されている。26は双頭状の波状口縁を呈し、直下に片口が施されている。残存部には文様は施されていない。

27・28は、いずれも結節沈線文により文様が施されている。27は口縁上端部に指頭痕の残る三角形の突起が作り出され、これを軸として折り返す横位の結節沈線文が施されている。28も波状部直下で文様が折り返すのは同様に、口縁上端部は直線、下端部は鋸歯状の沈線が施されている。口縁上端部を欠くものの、波状部の直下が文様の軸になる点は、29も同様である。残存率は低いものの、波状部直下には、沈線により楕円形の区画が作り出され、その内部に刺突文が施されている。また、口縁部に平行した口縁上端部には刺突文が、その直下には1条の沈線が施されている。

#### A 2類 (30)

1個体のみ出土している。わずかに外へ開く体部から、口縁部は大きく外へ開いて立ち上がる。口縁部は4単位の波状を呈し、波状部直下には中空の円形浮文が貼付されている。頸部には沈線により鋸歯文が施された隆帯があり、その直上には2条の沈線が横位に施されている。一方、隆帯の直下には横位で、波上部で垂下する縦位の沈線が、縄文の上から施されている。

#### A 3類 (31)

同じく1点のみの出土である。円筒形の体部から口縁部はわずかに内湾して立ち上がる。4単位と思われる波状口縁を呈する。文様は簡素で、隆帯・瘤・地文のみである。瘤は、波状部下の体部に施されている。一方の隆帯は波状口縁間の中間で、体部上位から貼付されている。同じく4単位である。逆「J」字状を呈し、隆帯上は押圧縄文が施されたものと、そうでないものの2種類がある。なお地文となる縄文は瘤・隆帯の貼り付け後に施され、口縁上端部にまで及んでいる。

#### ・ B類 (21・32~44・59~63)

II群土器のうち最も出土量が多い。形態が明確なものも数点存在する。



#### 4 出土遺物

口縁部の残存状況が良好なものは、口縁上部が短く立ち上がるか又は、キャリパー状に内湾するもの(32・33・35~37)と、円筒形のもの(21・34・42・44)に細分が可能である。

前者のうち32・33は口縁部が比較的長く、口縁部がキャリパー状に内湾するタイプ、35~37は短く立ち上がるタイプと思われる。32は平縁、33は波状口縁という違いはあるが、口縁部には半隆起線文と爪形文が施されている。一方、口縁部が短く立ち上がるものは、同じく半隆起線文で文様帯を区切っているが、その間に施された文様が異なっている。35は上下・左右に区画されている。上位は蓮華文、下位は格子文の他、基軸文が施されている。36は口縁部上端に孔を有する円形の突帯を有する。上位には爪形文が、下位は縄文の後に細線文が縦位に施されており、37と同様の文様構成である。

円筒形のものうち21は、底部から外反して立ち上がり、小波状の口縁部に至る。3条の半隆起線文により口縁部と体部が区分される。口縁部は穿孔が行われた波状部の内面のみ肥厚する。また波状部外面の右側縁には瘤が貼付されている。口縁部の文様は三角形陰刻を基本とするが、波状部下では文様の崩れが認められる。体部は無文帯から短く垂下した渦巻文を中心に、縦位の半隆起線文と横位の半隆起線文で区画されている。横位の区画内は更に細かな半隆起線文で区画され、格子目文が施されている。同じく円筒形式の34は、やや細くて深い半隆起線文で上下に区画される。上位は刻印蓮華文が、下位は無文であるが、両側縁に半隆起線文が施された「し」の字隆帯が貼付されている。

42・44は残存部において上位が2条、下位が3条の半隆起線文で文様が上下に区画されている。42は小波状口縁を呈し、残存部では3区画に分けられている。上段はやや太く短い沈線、中段・下段は縄文が施されている。半隆起線文と縄文が施された隆帯が中段から垂下する。「し」の字状隆帯であろうか。44の区画には縦長の細沈線が施されている。

この他、残存率が低く口縁部形態を明確にしえないもの(38~41・43)は、いずれも半隆起線文で区画されている。区画内は38が縄文、39の上段は格子目文と三角形陰刻、43の区画内は39と同様に、格子目文と三角形陰刻が施されている。40は他に比して、細い半隆起線文で上下に区画されているが、上段は爪形文、下段は縦位の短い沈線が、更にその下に爪形文が施されている。41は孔を有する小波状口縁を呈し、上段には爪形文が施されている。

体部破片のうち59は、縦位と横位に施された半隆起線文により長方形の区画が作り出され、内部には爪形文と縄文が、上段には縄文が施されている。60の残存部は縦位の半隆起線文が施され、縦位の爪形文と格子目文が加えられている。63は木目状捺糸文が、61には他例に比して細い縦位の半隆起線文が残る。

##### ・C類(56・64・65)

口縁部破片(56)と体部破片(64・65)がある。隆帯・沈線に、棒状工具による押捺・列点を加えられたものである。56は複合口縁上端部と、口縁部上端~下端には縦位に施された隆帯に押捺が加えられ、区画内には横位の沈線が施されている。64・65は、残存部には横位の沈線間に列点文が加えられている。

##### ・D類(20・45~55・62)

20・54・55は口径約10~12cmと小型である。20は平縁で、わずかに内湾した口縁上端部及び端部には細かな刺突文が施されている。54・55は4単位の小波状口縁を呈する。残存部で55は無文であるが、54は波状部直下に円形浮文と縦位の隆帯が施されている。また隆帯の両側縁、口縁部上端部には刺突文が施されている。

45~49は半隆起線文が施されたものである。施文部位・施文法はそれぞれ異なり、45~48は横位に、49のみ横位と縦位に施されている。施文部位は45が頸部、46・47は口縁部、48は口縁上端部と頸部である。



49は口縁上端部に横位、口縁部には縦位に施されている。いずれも縄文の後に半隆起線文が加えられている。地文は縄文が多いが、このうち46は羽状縄文である。45には撚糸文が施されているが、こうした例は少なく、体部破片の62に認められるにすぎない。

50・58は沈線で区画が作られ、その内部に縄文が施されたものである。沈線は50が1条、58は2条が施されている。51・52は、沈線又は粘土紐貼り付けにより複合状となった口縁上端部に縄文が施されたものである。沈線幅は概して狭い。

(3) 第三群土器(図版7-1・2, 4~16, 18・19, 図版9-66~150)

大坂上道遺跡の出土土器中、最も出土量が多い。深鉢(精製・粗製)、浅鉢、注口土器など、器種は豊富である。以下では器種別に記述する。时期的には堀之内2式~加曾利B2式併行期の土器群で[安孫子1988]、更に細分は可能と思われる。包含層出土土器が多いことから、明確なものについてのみ、適宜、時期を記述する。

・a 精製深鉢(1・2, 4~16, 18・19, 69~91)

口縁部外面は、沈線と縄文により文様が施されたものが主体である(1・5・10・66・67・70・71・73~76)。1は沈線により口縁部に長円形の区画が作り出されている。区画内は条線が、区画の下部には縄文が施されており、本例が唯一の検出例である。5は胎土から6と同一個体の可能性もあるが、文様の構成が異なっている。2個を一組とする小波状口縁を呈し、口縁部には2条の沈線が施されて下部との区画が作り出されている。下部は縄文ののち、縦位の沈線が波状に2条加えられている。10は1条の沈線で上段と下段に分けられ、上段は無文帯が、下段には磨消し縄文が施されている。

66は口縁部が大きく外へ開いて立ち上がるもので、横位の沈線2条により文様帯が作り出されている。区画内には同じく2条の沈線により半円形が作り出されて、内部には縄文が施されている。また沈線内・半円形文内以外は、基本的に縄文は施されていないが、一部無文帯にも認められる。堀之内式の所産であろう。67は口縁部が大きく外へ開いて立ち上がる。口縁下端部は下方に突出しており、刺突文が加わる。また口縁部は沈線に区切られた区画内に縄文が施されている。

70は口縁上端部の内外面には横位の、口縁部外面には66と同様であろうか、半円形の沈線が施されている。71は口縁端部内面のみ肥厚する。外面の文様は、縄文ののち、横位の沈線が加えられる。73~76は小波状口縁を呈するものである。73は縄文ののち斜位の沈線と、円形の刺突文が施されている。74~76は横位の沈線が基本である。このうち74・75には波状の沈線が縦位に施されている。

この他のものは無文・縄文のみのものが多い。68は摩耗が著しいが無文で、口縁端部には内傾する面を持つ。69は頸部に刺突が施されて横位の隆帯を有する。77・78は口径10cm以下と小型のものである。注口土器の可能性もあろう。このうち77は口縁部が外反して立ち上がり、端部が屈曲して直立する。これに対し78は、体部から大きく内に入って立ち上がる。口縁上端部には横位の、上端部から下端部にかけては縦位の隆帯が施されている。

79~88は口縁上端部の耳部又は波状部を一括した。79は頂部が左側に偏っており、沈線・刺突文・縄文で文様が施されている。これは80・81も同様である。82~88は残存部において縄文は認められない。いずれも沈線や隆帯により円形の文様が施されている。

・b 粗製深鉢(89~115)

いずれも平縁で、内湾して立ち上がる。口径約35~40cmと大型のA類(89~93)、口径約17~20cmと中型のB類(94~96)、口径15cm未満と小型のC類(97)がある。外面には文様が施されているものと、無

文のものがある。

A類の89は、口径約40cmと特に大型である。口縁端部には面を持つが、これは大型の90・91・93にも認められる。このうち90は口縁上端部が先細りとなり、内面には凹みが認められる。93は口縁部の開きが特に著しいタイプで、端部には外傾する面を持つ。

中型のB類のうち外面に地文が残るのは94のみで、95・96は無文である。94は口縁部の内湾度はさほど大きくなく、ほぼ直線的に上方に伸びている。一方の95は、口縁端部が尖るタイプであり、内傾する面を持つ。口縁部の内湾度が最も高いのは96で、口径と胴部最大径はほぼ同じである。

小型の97は、その傾向が更に顕著に現れている。胴部中位に最大径を有し、口縁部の内湾度はそれほど大きくないが、直線的に内に入って立ち上がる。

残存部が少ないことから法量の不明なものは、縄文が施されたもの（98～102・104・105）とそうでないもの（103・106）に分かれる。縄文が施されたもののうち104は、口縁部上端に刻みが入る。また105の口縁部上端に沈線が加えられているが、それ以外はいずれも口縁部に地文が残るのみである。有節のものが多いが、103には燃糸文が施されている。

・ c 体部破片（2・7, 11～15, 107～118）

精製・粗製を含めた体部破片を一括した。体部破片には頸部片（107～110）、胴部片（2・7, 11～15, 111～118）がある。頸部破片は、いずれも頸部の屈曲が強く、沈線が施されている。横位の沈線が一条施されて上部と下部が分けられたものが主体で、縦位・斜位の沈線が施されたのは、109の1点のみである。

胴部破片は同じく沈線が施されたもの（2・11～15, 111・112, 114～116, 118）と、縄文のみのもの（117）、条線が施されたもの（7・113）に分かれる。

2・11～15・111・113～116・118は縄文ののち、沈線・条線が施されている。精製品が多く、粗製の深鉢は113・118のみである。いずれも沈線は横位であるが、2は半円形の沈線が、13・14は縦位の短い沈線が、114には波状の沈線が縦位に加えられている。残存部に横位の沈線が認められない115は、縄文施文ののち「V」字形の斜位の沈線に縦位の波状沈線が施されている。また118は横位の沈線3条を1単位として文様が施されている。各単位には縄文が施されているが、各単位間は無文帯が作り出されている。

・ d 底部破片（8・9・16・119～129・150）

粗製品の破片と精製品の破片とがあるが、網代痕が残るもの（16・122～128）が多く、また多孔底のもの（129）もある。底部外面の文様は、精製品には縄文が施されていないものが多く、無文のものも少なくない。

150は、内面に固形のアスファルトが入ったものである。底径5.0cm、底部からの残存高は約6.5cmである。アスファルトは土器の残存部までは充満していないものの、土器内面には薄く付着することから、少なくとも土器の残存部（底部から高さ約6.5cm）までは充満していたものとする。残存部におけるアスファルトの重量は58.4gである。

・ e 浅鉢（130～141）

いずれも口縁部～胴部破片である。口縁部は形態・法量により細別が可能である。身が深く、口縁部が大きく内湾して内に入り、胴部最大径が口径を上回るA類（130・131・136・143・144）、同じく身は深いですが、口縁部は上方に伸びてA類ほど内に入らず、口径と胴部最大径がほぼ等しいB類（134・135）、身が浅く口縁部はわずかに内湾して立ち上がるが、大きく外へ開いて立ち上がり、口径が最大径となるC類（137～141）、口縁上端部で屈曲して短く上方に伸び、口径と胴部最大径がほぼ等しいD類（132・133）があ

る。法量による細分が可能である。

A類のうち130は口径約38cmと特に大型である。文様は内外面の両面に施されている。外面は屈曲して内に入る口縁下端部に横位の沈線が、内面には最大径より下部に2条の沈線が施されており、その間に地文が施されている。131は口径約25cmで、130ほどではないが、大型の範疇に属するものである。口縁上端部には孔を有する円形の把手が貼付されている。更に口縁部外面には3条の平行沈線が横位に、突起が貼付された直下から口縁下端部にかけて「S」字状の沈線が施されている。

A類のうち、口径約15cmと小型の136は、内外面とも無文である。この他、細片で法量が不明な143・144は、共に外面の胴部最大径付近に縄文が施されるが、その上下は横位の沈線で区画されている。

B類のうち134は、口径約18cmである。外面には縄文施文ののち、7条の沈線が横位に施されている。なお、外面に残る沈線は4条目で「S」の字に変化しており、縦方向の区画が作り出されている。135は口径約15cmである。残存率が低いものの、残存部において文様は認められない。

C類は口径15cm～18cmと中型のものである。外面に文様が施されたもの（137～139）と無文のもの（140・141）がある。137は口縁端部に外傾する面を持つ。口縁部外面には縄文施文ののち横位の沈線が5条施されている。無文のものうち141は口径15cmと特に小型である。器壁が他に比して特に厚い。

D類の132は口径約20cmと中型のものである。外面はナデ調整され、文様が施されていない。内面には横位の沈線により区画された区間に縄文と「の」の字状の沈線が施されている。口縁端部には2個1組となる押圧が施されている。133は口径約17cmである。文様は外面のみで、縦位の沈線が口縁上端部から、横位の沈線が体部上位から2条施されて、これらにより作り出された区画間に縄文が充填されている。

#### ・f 注口土器（145～148）・小型土器（149）

注口土器には口縁部破片（145・146）と、頸部破片（147）がある。口縁部は形態による大別、法量による細別が可能である。いずれも直線的に外へ開いて立ち上がる。147は残存部において、縄文施文ののち横位の沈線が2条施されており、沈線間には楕円形の押圧が施されている。外面に沈線が施されているのは146も同様である。147に比して幅広で、沈線間に縄文が施されている。これに対し145は、残存部において沈線はなく、縄文のみ施されている。頸部破片である147は、口縁部がわずかに外反しながら内に向かって立ち上がる。沈線の上・下段には縄文が施されており、文様構成は139に類似する。

台部は1点出土している（148）。脚部径約8.5cmで、わずかに内に入って立ち上がる。端部は丸く、面を持たない。内外面とも入念なミガキが施されている。浅鉢の台部の可能性もあろう。

小型土器（149）は1点のみ出土している。口径約4.5cm、器高4.3cmで、口縁部は直線的に外へ開いて立ち上がり、上端で屈曲して内に入る。外面には沈線により文様が施されている。

#### （4）第Ⅳ群土器（図版7-3）

出土点数はごくわずかである。3は粗製の深鉢であり、口縁部から体部下位まで残存する。最大径を体部上位に有し、口縁部はわずかに内湾して折り返しとなる口縁部に至る。複合口縁部には横方向の、体部の上位から下位にかけては縦あるいはナナメ方向の条線が施されている。おおむね鳥屋2式併行期〔石川1982〕の所産と考える。

### B 土製品（図版10-151～154）

粘土塊（151～153）と土偶（154）が出土している。

粘土塊はいずれも被熱の痕跡・付着物が顕著ではなく、橙褐色を呈する。いずれも楕円形で、長さ約5.

#### 4 出土遺物

7cm、幅約5.4cmのもの(153)と、長さ約4.3~4.4cm、幅約3.0~3.5cmとさらに小形なもの(151・152)がある。いずれも、縦・横の亀裂が著しい。

土偶(154)は、1点のみ出土している。体部の破片であり、頭・手・足を欠く。中実の立像土偶で、腹部の張り・乳房の表現が施されている。残存する左肩部は上方への張りだしが強く、腹部の下端には刺突が施された隆帯が横位に巡る。

#### C 石器(図版11~17-1~95、写真図版65~68)

##### (1) ナイフ形石器(10)

表面採集で1点のみ検出された。断面三角形の縦長剥片を素材としたナイフ形石器である。基部に二次加工が施されており、打面は残存しない。背面は丁寧な二次加工が施されているが、腹面の二次加工は石器が廃棄された後に加えられたものと考えられる。石材は頁岩である。

##### (2) 尖頭器(11)

柳葉形のもので1点のみ出土している。先端部のみ残存しており、全体の中程~下端を欠く。縦長剥片を素材としており、中型で浅い角度の剥離が両面に施されて刃部を形成している。先端部の右側縁や裏面に、主要剥離面が大きく残っているのが特徴である。石材は頁岩である。

##### (3) 石鏃(2、12~15)

製品はわずか2点(2・12)である。この他、未製品と思われるものが3点出土した(13~15)。

製品はいずれも、凹基無茎鏃に属する。細かな法量は異なるものの、長さが幅の約1.6~1.7倍である(第14図)。2は完形で、側縁から頂部にかけてわずかに膨らみを持つ。一方の12は、先端部を欠くが側縁から頂部にかけては直線的に伸びる。また抉りも2に比して大きい。石材はいずれも黒耀石である。

未製品は、いずれも茎部の作り出しが行われていない。凹基無茎鏃になろうか。製作におけるどの段階かが問題となるが、13は長さ2.2cm、幅1.4cmと小型なのに対し、14・15は長さ3.2~3.5cm、幅2.1~2.4cmと大型のものに分かれる。後者は長さに対して、幅のあるタイプになろうか。

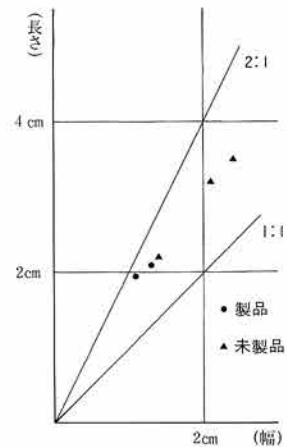
##### (4) 石錐(3・16・17)

剥片の尖頭状の端部に両側縁から中・小型剥離の二次加工が施された石器、または尖頭状の端部に折れや摩耗が認められる石器を石錐とした。3点出土しており、いずれも縦長剥片を素材とする。

丁寧な二次加工がつまみ部までの広範囲に及ぶA類(3)と、粗雑な二次加工が錐部付近に集中するB類(16・17)に分かれる。A類(3)はつまみ部に自然面を残しており、錐部との区分が明瞭である。一方、B類のうち16は、錐部とつまみ部の区分が明瞭であるのに対し、17は錐部とつまみ部の区分が不明瞭である。16は石匙の転用品であろうか。明瞭なつまみ部を持ち、抉り部の先端に簡略な二次加工を施して、錐部としている。材質はいずれも緑色凝灰岩である。

##### (5) 石匙(18~22)

5点出土している。いわゆる縦型石匙で、つまみ部に対して刃部が縦に長いA類(18・19)、いわゆる横型石匙で、つまみ部に対して刃部が横に長いB類(20・21)、縦型・横型の区分が困難なC類(22)に分かれる。



第14図 大坂上道遺跡出土の石鏃及び未製品の長幅図

A類は、つまみ部が基部の中央に位置せず斜め方向に位置することから、定形的な縦型石匙とは言いがたい。18は刃部が右側縁にしか施されていないものの、19は両側縁に作り出されている。共に刃部は正裏両面に施されている。

B類もつまみ部が斜め方向に位置しており、厳密な意味では横型石匙とは言いがたい。五丁歩分類〔高橋保雄1992〕では斜刃型石匙とされるものである。20は二次加工が側縁にも及んでいるが、21は刃部・つまみ部の作り出しが簡略化されている。このうち後者は、磨痕が残り光沢を帯びている。

C類は、全周に二次加工が施されている。つまみ部の作り出しは粗く、また刃部は中型で浅い角度で作られている。石材は18・20・21が凝灰岩、19は流紋岩、22は鉄石英に分かれる。

#### (6) 籠状石器 (4・5・25~30)

基本的には片刃で幅広い刃部を有し、形状が撥形あるいは短冊形を呈するものを本例とした。打製石斧に比して厚手であり、丁寧な剥離が施されている。長さ約10cm前後、幅約3~4cmと大型のA類(4・5、25・26)、長さ約6~8cm、幅約3~4cmと小型のB類(27~30)がある。

A類は刃部幅と基部幅の差が小さく短冊形をしたA-1類(4・26)、刃部幅と基部幅の差が大きいA-2類(5・25)に分かれる。刃部は上記のとおり、いずれも片刃であるが、4・25が裏面に細かな剥離が施されているのに対し、5・26は細かな剥離を欠く。

B類は破損したものが多い。29は基部を、30は刃部を欠く。また、27は刃部付近が厚手で、未加工の部分を含むことから未製品の可能性が高い。未製品以外では刃部形態から、剥離を加えずに自然面を残して刃部とした28と、刃部は急角度で細かな剥離が施されている29に細分が可能である。いずれも刃部とした面の裏面には、大型で浅角度の剥離が施されている。

いずれも縦長剥片を素材とするが、石材は4・25~29は頁岩、5は凝灰岩、30は鉄石英に分かれる。

#### (7) 打製石斧 (6・23・24)

籠状石器との区分は明確でないが、①二次加工が両面に施された両刃のもの、②軟質な石材を用い、片面に自然面を残して片刃に仕上げられたものを打製石斧とした。ここでは①をA類、②をB類とする。

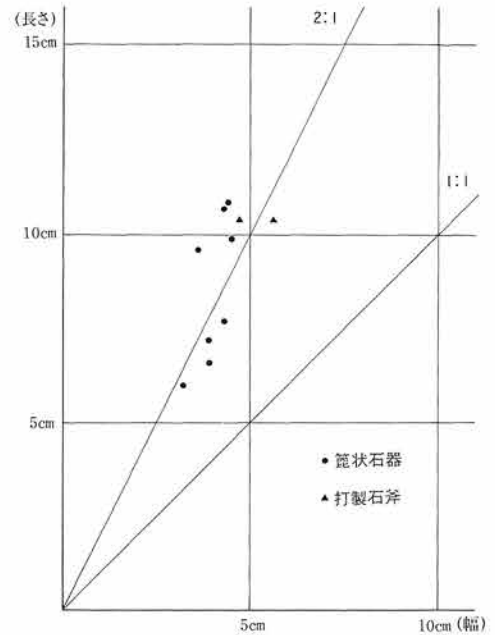
A類(6)は大型で、浅角度の剥離を不連続に施すことで、刃部を形成している。基部側が破損していること、折れ部付近の調整が十分でなく、局部的に厚手であることから、製作中に折れた可能性が高い。

B類(23・24)は二次加工の形状から細分が可能である。横長剥片を素材とし、小型で急角度の剥離が施された23と、縦長剥片を素材とし、大型で浅角度の二次加工が施された24がある。24は刃部への二次加工は明瞭でなく、使用による摩耗が顕著である。腹面の刃部は研磨した可能性もあろう。石材は6・24は頁岩ではあるが、軟質な素材が用いられている。一方の23は硬砂岩である。

#### (8) 磨製石斧 (1、31~36)

いずれも正裏面と側面に稜を持ち、基部の断面形が長方形または隅丸方形を呈する定角式磨製石斧である。略完形品(31・32・35・36)以外にも基部を欠くもの(1・33・34)も図示した。

略完形品は、長さ15cm・刃部幅5~6cm程と大型の31と、長さ7cm~9cmで、刃部幅4~5cm前後と小



第15図 大坂上道遺跡出土の籠状石器と打製石斧の長幅図



#### 4 出土遺物

型の35・36がある。基部が破損しているものは、刃部の幅から33は大型、1・34は小型のものと思われる。刃部断面形は両凸刃のもの（1、31～33、36）が最も多く、弱凹強凸片刃のもの（34・35）は小型品にのみ認められる。石材は1は凝灰岩、32は安山岩、35は閃緑岩、他は蛇紋岩である。

##### (9) 不定形石器（7・8、37～63）

##### A類（7、37～39）

縦長剥片を素材とする1類（37・38）と、横長剥片を素材とする2類（7・39）がある。1類は刃部が両面に施された37と、エンドスクレイパー状を呈し、片面にのみ刃部が作り出された38がある。一方、2類は両面に二次加工が施されている。このうち7は両面に自然面が残る。39は平面形が三角形状を呈し、22のような石匙に類似する。正面の底縁と、裏面の右側縁に入念な二次加工が施されていることから石匙と区別した。石材は7・39が凝灰岩、37・38は頁岩である。

##### B類（40～51）

縦長剥片を素材とする1類（40～47）と、横長剥片を素材とする2類（48～51）がある。

1類は大きく、長さ8cm前後、幅4cm前後で縦に長い41・42と、長さ6～7cm、幅5cm弱と丸みを帯びた45・46、長さ3.5cm～5cm、幅3cm前後と小型のc類40・43・44・47に分かれる。破損箇所が大きいものもあるが、全体の傾向として40～42・44・45の刃部は全周せず側縁に、43・45～47は上端または下端を除き全周する場合が多い。使用の痕跡が明確でないものも存在するが、45の裏面にはタール状の痕跡が残る。

2類は1類程のまともは認められない。側縁に刃部が施された48、底縁に刃部が施されており、石匙状の形態を有する49、底縁及び両側縁に刃部が施された50、二次加工が全周に及ぶ51に分かれる。このうち48は腹面に大型で浅い角度の剥離が連続しているが、背面の剥離の状況から、本類に含めた。石材は40・42・46・49が凝灰岩、41・47・48・51が頁岩、43が鉄石英、44・50が玉髓、45が緑色凝灰岩である。

##### C類（52・53）

いずれも横長剥片を素材として、刃部は大型で急角度の二次加工で作りに出されている。また刃部は側縁に作り出されているなど、共通した部分が多い。材質は52が流紋岩、53が頁岩である。

##### D類（54・55）

いずれも小型の剥離が側縁にのみ施されたものであるが、54は縦長剥片を、55は横長剥片を素材としている。54は側面に自然面を残し、折れた左側面に二次加工が加えられている。一方の55は折面を利用し、左側縁に二次加工を施すことによって鋭利な先端部が作り出されている。石材は54が緑色凝灰岩、55が玉髓である。

##### F類（8、56～59）

不定形石器の中では、最も数量が多い。縦長剥片を素材とする8、56・58と、横長剥片を素材とする57・59に分かれる。前者のうち8は二次加工が側縁に施されているが、56・58の二次加工は底縁に施されているなど、更に細分が可能である。一方、横長剥片を素材とする57・59の二次加工は、底縁に施されている。石材は8・58が凝灰岩、56・57は緑色凝灰岩、59は頁岩である。

##### G類（60・61）

縦長剥片を素材とする60と、横長剥片を素材とする61がある。二次加工部位は60が側縁から底縁、61は側縁という違いがある。共に厚手の素材を用いており、腹面には自然面が残る。石材は60が凝灰岩、61が緑色凝灰岩である。



## 分類不可 (62・63)

A～Jの分類に当てはまらない不定形石器である。62は縦長剥片を素材としており、正面は大型の剥離の後、63と同様に小型の剥離が不連続に施されている。一方の裏面は、右側縁に小型の剥離が不連続に施されている。63は背面・腹面に自然面が残る横長剥片を素材としている。背面と腹面では、二次加工の部位や加工方法に違いがあるが、背面では底縁、腹面では上縁を除き、ほぼ全周に二次加工が施されている。二次加工は大型の剥離の後、同じ箇所にも小型の剥離が施されている。石材はいずれも頁岩である。

## (10) 磨石類 (64～86)

A類～H類までの全てが出土している。

A類 (64～67) 磨痕の位置により細分が可能である。磨痕が正裏面のいずれかに位置する1類 (64)、側面に位置する2類 (65・66)、正裏面のいずれかと側面に位置する3類 (67) がある。片手でもって使用する、いわゆる磨石であることから、法量には比較的まとまりが認められ、長さ約11～14cm・幅約8～11cmの間に納まる。石材は67が凝灰岩である以外は、いずれも安山岩である。

## B類 (68)

出土量は少ない。本例は正裏面に凹痕があり、磨痕が側面に認められるもの (五丁歩分類ではB2類) である。長さ約15cm、幅約8cmとやや大型で、石材は安山岩である。

## C類 (69～74)

磨痕が正裏面のいずれかに、敲打痕が端部に位置する69・70 (1類) と、磨痕が側面に、敲打痕が端部に位置する71～74 (2類) がある。長さ約11～15cm、幅約5cm～9cmである。石材はまとまりに欠け、69・73・74は安山岩、70が砂岩、71が圧砕岩、72が花崗岩である。

## D類 (75・76)

D類はそれぞれの痕跡の位置から、幾つかに分類が可能であるが、いずれも磨痕が側面に、敲打痕が端部に認められる2a類である。長さ約11～12cm、幅約8～10cmで、石材は75が閃緑岩、76は花崗岩である。

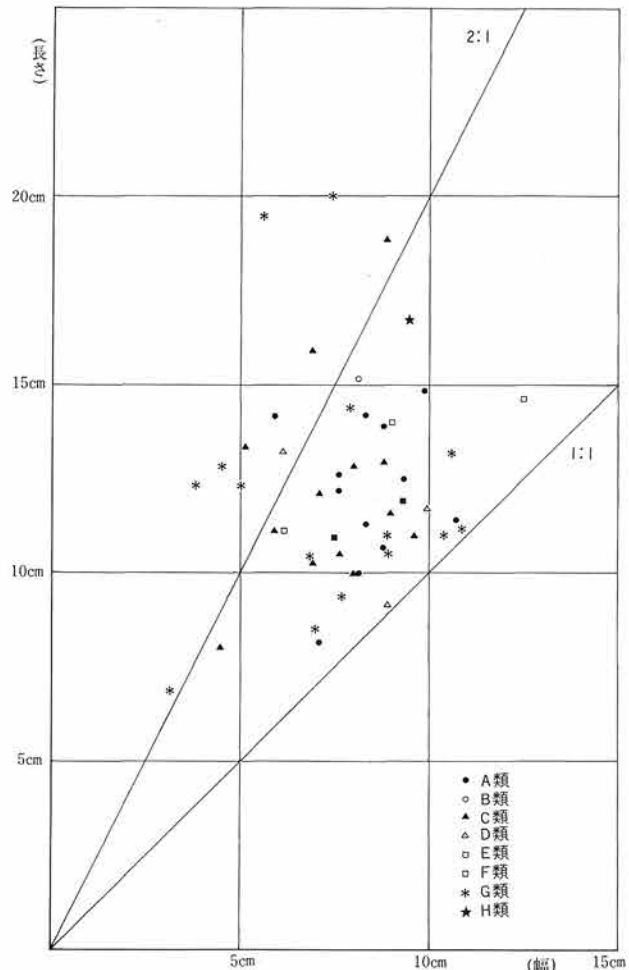
## E類 (77)

1点のみ出土している。凹痕は正裏面のいずれにも認められる。長さ13.4cm、幅9.2cm、石材は安山岩である。

## F類 (78・79)

敲打痕が側面にある78 (b類) と、端部にある79 (a類) がある。長さ約11cm～14cm、幅約6cm～9cmで、石材は78が圧砕岩、79は安山岩である。

## G類 (80～86)



第16図 大坂上道遺跡出土の磨石類長幅図

4 出土遺物

破損箇所が大きいものも含まれるが、敲打痕が端部に位置する80・81・84（a類）、側面に位置する82・83・85（b類）、端部と側面の両方にある86（c類）がある。

a類は破損箇所が大きい84を除き、いずれも上下両端に敲打痕が残る。法量は異なるものの、平面形は縦長である。これに対してb類の平面形は、円形・楕円形を呈する。側面の敲打痕は82が片面なのに対して、83・85は両側面に残る。c類の86は上半を欠くが、端部・側面の使用痕は明瞭に区別しがたい。残存する底面から両側縁全面に使用痕が残る。磨製石斧の未製品の可能性もあろうか。破損したものが多く、法量はb類が長さ約10～16cm、幅10～12cmにまとまる程度である。石材は80・83が安山岩、81が砂岩、82が花崗岩、84が圧砕岩、85が砂岩、86が粘板岩とまとまりに欠ける。

H類（9）

1点のみ出土している。断面三角形の厚みのある楕円柱状の礫の稜に磨痕を持つものである。また端部には敲打痕が残る。長さ16.8cm、幅9.4cmで、石材は安山岩である。

(1) 石 皿 (87～89)

「扁平な大型礫の片面、あるいは両面に使用の結果と考えられる磨面があるもの」を本例とした〔高橋保雄1992〕。砥石とは磨面の範囲で、磨石類とは大きさで区分した。また台石とは区分は困難な場合もあるが、敲打痕のみのものを台石とした。

いずれも使用面に敲打整形は施されていない。磨面の形状は87・88が平坦又はわずかに凹む程度であり、大きくくぼむのは89の1点のみである。また、平面形は87が三角形を呈する以外は、円・楕円形である。法量は、87が幅36.4cmと、長さに比して幅が大きい以外は、長さ約21cm～28cm、幅約22～25cmである。石材は87が砂岩、88は花崗岩、89が安山岩に分かれる。なお、被熱の痕跡は確認しえなかった。

(2) 台 石 (90)

1点のみ出土している。敲打痕のみ観察されるものを本例とした。敲打痕のある磨石類とは、大きさにより区別した。上端及び左側縁をわずかに欠くが、平面形は長楕円形を呈し、断面形は使用面が平坦である。敲打痕は両面に認められ、形状は敲打痕による凹凸で器面が荒れているものが多い。長さ26.4cm、幅22.4cm、石材は砂岩である。

(3) 砥 石 (91～95)

溝状・帯状・平面状の痕跡（砥面）が認められる石器を砥石とした。石皿・磨石類の磨痕とは、形状の違いにより区分した。近世以降の直方体状の砥石を2点含む。以下、時代別に記述する。

（縄文時代） 91～93は長さ約27～41cm、幅23cm～30cmと大型で、いずれも置き砥石と考えられるものである。砥面の形状・使用面は、91・92が帯状又は、平面状・凹面状を呈し、両面使用されているが、93は面状で片面のみ使用されている。また、砥面に使用の結果と思われる敲打痕や、被熱の痕跡を確認されなかった。

（近世以降） 厚さ1cm以下の板状砥石である。欠損部が多く、長さ・幅

|         |          |
|---------|----------|
| A 1 類   | 5 ( 8.8) |
| A 2 類   | 5 ( 8.8) |
| A 3 類   | 3 ( 5.3) |
| A 類総計   | 13(22.8) |
| B 1 類   | —        |
| B 2 類   | 1 ( 1.8) |
| B 3 類   | —        |
| B 類総計   | 1 ( 1.8) |
| C 1 a 類 | 7 (12.3) |
| C 1 b 類 | —        |
| C 1 c 類 | —        |
| C 2 a 類 | 7 (12.3) |
| C 2 b 類 | —        |
| C 2 c 類 | —        |
| C 3 a 類 | 2 ( 3.5) |
| C 3 b 類 | —        |
| C 3 c 類 | —        |
| C 類総計   | 16(28.1) |
| D 1 a 類 | —        |
| D 1 b 類 | —        |
| D 1 c 類 | —        |
| D 2 a 類 | 2 ( 3.5) |
| D 2 b 類 | —        |
| D 2 c 類 | —        |
| D 3 a 類 | —        |
| D 3 b 類 | —        |
| D 3 c 類 | —        |
| D 類総計   | 2 ( 3.5) |
| E 類     | 4 ( 7.0) |
| F a 類   | 2 ( 3.5) |
| F b 類   | 1 ( 1.8) |
| F c 類   | —        |
| F 類総計   | 3 ( 5.3) |
| G a 類   | 13(22.8) |
| G b 類   | 2 ( 3.5) |
| G c 類   | 2 ( 3.5) |
| G 類総計   | 17(29.8) |
| H 類     | 1 ( 1.8) |
| 総計      | 57       |

第6表 大坂上道遺跡出土の磨石類組成表

は明確でないが、手持ち砥石の可能性が高い。砥面は94が片面、95は両面である。石材はいずれも粘板岩である。

#### D 平安時代の土器（図版18～20—1～58、写真図版69・70）

第一次調査では未確認であったが、調査区の北東部を中心に平安時代以降の遺構・遺物が検出された。遺物には須恵器・土師器・黒色土器の他、鉄滓がある。時期的にまとまりがあり、出土土器から9世紀後半～10世紀初頭のものと考えられる。

出土土器のうち須恵器は胎土から生産地の比定が可能である。このため、①洗練された生地に、白色粒を多く含む胎土（I群）は佐渡小泊窯又は新津丘陵産、②生地の粒子密度が高く、全体的にセメント状の胎土（II群）は会津大戸窯〔石田1992〕の製品の可能性が高い。これにもとづき、判別可能なものについては産地の記述を行う。

##### （1）10号土坑出土（1～16）

黒色碗、土師器碗、須恵器小甕、土師器鍋、土師器甕、鉄滓が出土した。土器は細片がほとんどで、完形品がわずかに1点（1）あるにすぎない。

##### 〈1〉食膳具（1～7）

黒色無台碗（1～3）、土師器無台碗（4～7）がある。

黒色無台碗は完形品（1）と口縁部破片（2）、底部破片（3）がある。口縁部は、大型（1）と中型（2）に分かれるが、口縁部はいずれも内湾して立ち上がる。大型の1は口径16.0cm、底径5.0cm、器高4.1cmで、内面にはナデ、口縁部外面はロクロナデの後、下位～底部外面にかけては回転ヘラ削りが施されている。中型の2は口径約12cmで、内面にミガキの痕跡が明瞭でない点は大型品と同様である。底部片3は底径約5cmで、底部外面には回転ヘラ削りが施されるなど、黒色碗には共通の調整が施されている。胎土は比較的精良で、石英・長石をわずかに含んでいる。

土師器無台碗は、口縁部破片（4・5）と底部破片（6・7）がある。口縁部はいずれも上端部で内湾して立ち上がる。口径は約13.0cmである。底部片のうち残存する口縁部は、6が大きく外へ開いて立ち上がるのに対し、7はわずかに内湾して立ち上がる。底径は5cm前後で、ともに残存する口縁部外面及び底部外面にはヘラ削りが施されている。胎土には黒色無台碗と同様に長石・石英を含むものが多い。

##### 〈2〉煮炊具（8～13）

鍋（8～12） 10号土坑出土土器の中で、器種別には最も出土量が多い。口径40cm以上と大型品（8・9）と、口径35cm未満と中型品（10・11）がある。口縁部の屈曲が明瞭でないものが主体である。器面の摩耗が激しく調整は不明なものが多いが、ロクロナデが施されている。底部片の12は径約9.0cmで、内面にはロクロナデ、外面にはヘラ削りが施されている。胎土には径1mm程の粗砂粒を含むものが多い。

小甕（13） 底部破片が1点のみ出土している。底径約7cmで、底部外面の切り離しには回転系切りが施されている。

##### 〈3〉貯蔵具（14～16）

須恵器甕の口縁部片（14）と、体部片（15・16）がある。14は口径約14cmと小型で、端部両端が突出するタイプである。体部片には調整の痕跡として、外面には擬格子状叩き目が、内面には同心円文が残る。胎土は14・15がI群、16はII群である。

(2) 包含層出土 (17~58)

〈1〉食膳具 (17~33)

黒色土器 (17~26)、須恵器 (27・28)、土師器 (29~33) がある。口縁部破片が多く、完形品は1点のみである。口縁部内外面はいずれもロクロナデ、底部は回転糸切りを基本とする。

・黒色土器 椀 (17~25) と鉢 (26) がある。

椀は口径14cm~17cmの大型品 (17~20)、口径13cmで、器高5cmと偏平なもの (21) に分かれる。このうち前者は、器壁が薄く口縁部が直線的に上方に伸びる17・19と、器壁が厚く口縁部の稜が著しい18・20に分かれる。19・20の口縁部内外面にはロクロナデの後、ミガキが加わる。内面のみ黒色処理されたものが多いが、20は残存する外面全面にも及ぶ。

小型品 (21) は完形品で、口径13cm、底径4.1cm、器高5cmである。口縁部はわずかに内湾して立ち上がるものの、底部からの開きは大きい。内面の黒色処理は失敗品であろうか、ムラが認められる。

鉢は口径約24cm、器高約10cm、底径9cmの大型品である。口縁部は内湾して立ち上がり、上端部がわずかに肥厚する。底部は接地面がわずかな高台を有し、外面には回転ヘラ削りが施されている。胎土には海綿骨針を多く含み、黒色処理は残存する口縁部外面にも及んでいる。

・須恵器 (27・28) 2点出土しており、いずれも口縁部の破片であるが、無台杯 (27) と有台杯 (28) である。胎土はいずれもI群で、小泊産の可能性が高い。

27は口径約12cmで、直線的に外へ開いて立ち上がる。一方の有台杯は細片のため口径は不明であるが、直線的に上方に伸びるタイプで、口縁部上端が肥厚する。

・土師器 (29~33) 椀の口縁部破片 (29~32) と、底部破片 (33) がある。

口縁部が直線的に外へ開いて立ち上がり、口径に比して器高の低いもの (29・30) と、口縁部がわずかに内湾して立ち上がり、器高が高いタイプ (31・32) がある。前者は口径13cm前後、器高4cm、底径5cm程、後者は口径13cm~14cmである。

〈2〉貯蔵具 (34~41)

・壺 (34~39)

長頸壺 (34~37) と短頸壺 (38・39) がある。体部破片は区分が明瞭でないが、法量から推定した。

長頸壺 34は口縁部片で、上方で大きく外反しており、端部は上端がつまみ出されている。口径約10cmで、内外面にはロクロナデが施されている。35は頸部片で、内面のみロクロナデによる凹凸が明瞭である。36・37は胴部~底部の破片で、最大径を中位に有する。肩部の張り出しは弱く、倒卵形を呈する。外面には沈線が施され、内面にはロクロナデによる凹凸が著しい。36は底径7.6cmで、高台は低い。接地面は狭く、断面が台形を呈する。いずれも胎土はII群で、大戸窯産の製品である。

短頸壺 いずれも体部の破片である。底部まで残存するもの (38) と、体部のみの破片 (39) がある。38は最大径を胴部上位に有し、肩部の張り出しが明瞭である。これに対し39は、肩部の張り出しが明瞭でなく、倒卵形を呈する。前者の底部には断面長方形で、接地面の広い高台を有する。胎土からいずれも小泊産の製品と思われる。

・甕 (40・41・54~58)

口縁部片 (40) と体部片 (41・54~58) がある。佐渡小泊窯の製品 (40・41・55~57) と、大戸窯産の可能性のあるもの (54・58) がある。40は、口径約16cmの中型品で、外反して立ち上り、端部に垂直な面を持つ。内外面にはロクロナデが施されている。体部片の外面には平叩き目が、内面には同心円文が残るも

のの他、ハケ (57)、叩き目 (58) が残るものもある。

### 〈3〉煮炊具 (42~53)

長胴甕 (42)、小甕 (43~45)、甌 (46)、鍋 (47~53) がある。いずれも細片である。

42は胴部片で、外面には平行叩き目が残るが、内面の当て具痕は明瞭でない。小甕の口縁部片である43・44は、口径は12~13cmである。43は、口縁部が外反して上端には垂直な端面を有する。一方の44は口縁部が短く、体部から屈曲して上方に伸びる。いずれも口縁部内外面にはロクロナデが施されている。底部片である45は、底径4.6cmで、底面の厚さが約1cmと厚手である。底部の切り離しは回転系切りが施されている。46は甌と考える。底面が中空のタイプで、接地面は広く平坦である。体部は大きく屈曲して外へ開いている。

鍋 口径40cm以上の大型品 (47・48) と、30cm前後の中型品 (49~52) に分かれる。大型品はいずれも口縁端部に幅広で、内斜する面を持つ。ロクロナデが施されているが、47の内外面にはカキ目が、外面の低位にはヘラ削りが加わる。

中型品は、口縁端部の形態が豊富である。49は、端部が丸くつまみ出されており、50・52はわずかにつまみ出され垂直な端面を有する。また51は、上方に大きくつまみ出されている。口縁部はいずれもロクロナデが施されている。

## E 近世陶磁器・銭貨 (図版21-1~41、写真図版71)

陶磁器 (1~38)・土師質土器 (39) と銭貨 (40・41) がある。陶磁器には碗 (1~11・13~16・18)、小型碗 (24)、皿 (12・17・19)、蓋 (25)、香炉 (26)、瓶 (27・28)、壺 (30~32)、鉢 (33)、すり鉢 (34~39) と器種は豊富である。陶磁器は肥前系が最も多く (1~7・14~20・24・28・32・34~38)、瀬戸焼 (12・30)、京焼風 (10・11・21) などのごくわずかである。

### ・碗・皿 (1~24)

肥前系の1~7、14~20は口径約8~12cm、底径約5cm前後のものが多い。口縁部はほぼ直立して上方に伸びるもの以外に、わずかに外へ開くものもある。残存部の文様は、3・20で内面に施されているが、外面のみに残るものが多い。また文様は植物文が多く、5に雨降り文が施されているにすぎない。残存率が低いことから文様構成を明確にし得ないが、1・2・6などは唐草文、3は草花文になろうか。

肥前系陶磁の底部破片のうち、17・19は唐津焼である。いずれも口縁部内面低位に横線が施されている。内面には蛇の目釉剥ぎが、口縁部外面低位~底部外面にかけては釉が施されていない。こうした製作工程は18・22にも認められる。この他の14・15・20は、外面に横線が施されている。

8・9・22は内面に銅緑釉が施された陶器である。22の内面は蛇目釉剥ぎが、残存する口縁部低位には釉が付着しない。京焼風陶器の10・11・21のうち、11は身が深く、口縁部は直立して上方に伸びる。

23は灰釉様の釉が底部外面以外に付着する。

### ・蓋 (25)・香炉 (26)・瓶 (27・28)

25は香炉の蓋であろうか。口径約6.5cmで、内面には返りが残る。26は香炉で、内外面に鉄釉が厚く付着している。瓶は小型の26、中型の27と2法量に分かれる。肥前系の27の残存部には、横線の文様が3条残る。

### ・壺 (29~32)

29は環状の把手で、外側には花びら様のひだが施されている。瀬戸焼の30は口縁上端部が大きく屈曲し



て外に返る。口縁端部は丸い。31は短頸壺で、内外面には鉄釉が付着する。32は唐津焼きの壺である。口縁端部が肥厚し、幅広で平行な面を持つ。

・鉢・すり鉢 (33～38)

33は口縁部がわずかに内湾しながら端面にいたる。内外面には鉄釉が付着する。34～36は肥前系で、口縁部が直線的に外へ開いて立ち上がる。34は上端部が肥厚して外傾する面を有する。35は口縁上端部がわずかに肥厚し、端部上端が上方につまみ上げられている。これに比して36は口縁部の器壁が薄く、ほぼ直線的に外へ開いて立ち上がる。

すり鉢の37は複合口縁を呈し、端部下端が下方に垂下している。口縁部下位の破片である38と同様に、いずれも一本びきである。

・火 鉢 (39)

1点のみ出土している。土師質であり、口縁部は上端が肥厚して幅広で平坦な面を持つ。外面にのみミスが付着している。

上記の年代であるが、蛇の目釉剥ぎが行われている17・18・22や、35・36などは17世紀後半～18世紀前半の可能性が高い。また雨降り文が施された5は18世紀頃、型紙刷りで染付が行われている可能性が高い4などは18世紀の可能性が高い。

・銭貨 (40・41)

2点出土しており、いずれも寛永通宝である。40は径2.8cmで大型で裏に波文が鑄出された「寛永通宝四文銭」である(1786年に新設)。一方、41は裏面の施文を欠く。法量も異なり径2.5cmである。いわゆる「宝銭」(初寿1626年、1656年まで鑄造)で、40とは鑄造年代が異なる。

## 5 小 結

遺構は縄文時代・平安時代に限定されるが、出土遺物は旧石器時代、縄文時代前期～晩期、平安時代、近世と多岐に及ぶ。以下では縄文時代と平安時代についての概要を記す。

縄文時代の遺構・出土遺物のうち時期的に最も多いのは、中期と後期である。各時期はさらに細分が可能と思われるが、中期では北陸系土器群以外に、関東系の土器群が注目される。いわゆる阿玉台式、五領ヶ台式、八辺式などの土器群である。阿玉台式土器は北魚沼郡堀之内町清水上遺跡〔田海ほか1990〕や、北蒲原郡笹神村杉遺跡〔新潟県1986〕などの山間部で確認されているが、数量比からすれば本遺跡が最も高い。福島県での出土例から、阿賀野川ルートで流入してきた可能性が高い。福島県との県境に位置することから文化の融合地と評価できるが、主体は北陸系ではあるものの、東北南部系の土器よりも関東系の土器が多いことは特に重要な要素と考える。また遺物・遺構の分布は調査区の東西端の北側に集中しているようである。こうした傾向から遺跡自体は更に北側の平坦地に伸びる可能性が高い。

平安時代の遺構・遺物は調査区東南側に集中しており、更に南側に伸びる可能性が高い。遺物の時期から、律令体制が崩壊した後に広がる小集落の可能性が高い。いわゆる一郡一窯的体制〔宇野1994〕が崩れてからは、県内には佐渡小泊窯の製品が広く流通する。こうした動きのなかで、福島県境にあたる当域では、小泊産の須恵器が主体ではあるが、会津大戸窯産の製品が貯蔵具にのみ認められることは重要であろう。地域圏を考える上で特に注目される。



# 第Ⅵ章 猿 額 遺 跡

## 1 調査の概要

調査は工事工程の都合から、平成4年度と5年度の2か年にわたって実施した。このうち平成4年度の調査は、全調査面積の97%にあたる3,200㎡である。一方、平成5年度の調査は、下段北側の林道（後に工事用道路に転用）下の100㎡である。調査経過については第Ⅲ章に記したが、調査方法は他の遺跡と若干異なっている。ここでは、猿額遺跡独自の概略を記す。

### A 調査地の現況

阿賀野川左岸、幅約100mの段丘上（標高86~99m）に位置する。この段丘は、今回の調査範囲の北端から更に北へ100m程舌状に張り出しており、遺跡は法線の北側にも広がっていると考えられる。段丘東西は小谷によって開析され、東側の大坂上道遺跡、西側の中棚遺跡とに隔てられている。遺跡の立地する段丘面は前述のとおり上下二段に分かれるが、下段が大坂上道遺跡と同じく杉の植林に利用されていたのに対し、上段はナラ・クヌギなどの落葉樹からなる自然林に覆われている。調査地は東西を横断する林道によって、段丘下段の東側が一部削平されている。また、上段では北斜面が切り崩されているなど、旧状をとどめていない部分もあるが、それ以外の残存状況は良好である。

### B 調査の方法

#### (1) 基本層序の確認

第一次調査の結果を元に、基本層序を確認しながら調査を進めた。調査区下段では東西セクションベルトをEラインに、南北のセクションベルトを6ラインに設定して、土の堆積状況を確認した。一方、上段では東西のセクションベルトをFラインに、南北のセクションラインを11ラインにそれぞれ設定して、下段と同じく土層を確認して、最終的にセクションの記録・写真撮影を行った。

#### (2) 包含層の掘削

第一次調査の結果から、I・II層を遺物包含層とみなし人力で掘削した。また、沼沢火山灰の堆積が認められる地点では、暗灰褐色土であるV層からも遺物が検出されていることから、I・II層と同じく人力で掘削した。

基本的には、層序・小グリッド（2×2m）ごとに掘削を行った。特に遺物が集中して検出された地点では、下部に遺構が存在する可能性が極めて高いため、遺物にドット及びレベル値を測定したのち、各集中地点毎に一点ずつ番号を付して取り上げた。

上段は表土の除去を行うための重機が入り込めない。このため、表土剥ぎの段階から人力で掘削した。包含層（II層）の掘削は、大グリッド毎に人力でジョレンを用いて掘削した。遺物の取り上げはすぐに行わず、柱状に残して平面的な広がりを把握したのち、遺物が集中する地点は下段と同様な方法で遺物を取り上げた。これに対し、上段でも遺物が極端に少ない範囲が存在する。この範囲は2m毎に試掘を行って

## 2 層序と遺物の出土状況

全体の状況を把握し、遺物が出土しない地点については掘削範囲を広げずに調査を終了した。

### (3) 遺構の確認

基本的に包含層掘削ののち、その直下層で行った。沼沢火山灰の堆積が認められる地点では沼沢火山灰層・第Ⅴ層・地山の三面で確認を行った。一方、沼沢火山灰の堆積が認められない地点では、地山で遺構確認を行っている。確認された遺構については、時代に関係なく種別毎に分類して通し番号とした。種別は土坑・フラスコ状土坑・焼土坑・埋設土器である。

## C グリッドの設定

グリッドは10m方眼とし、調査区の全域をカバーできるように設定した。グリッドの基線は道路法線のセンター杭にもとづく。STANo.545とSTANo.546を結ぶラインを基線X軸、これに直交するラインをY軸とし、これらに基づいて10m方眼を組んだ。おおよそX軸が東西方向、Y軸が南北方向である。

## 2 層序と遺物の出土状況

### A 層序

猿額遺跡は、比高差4～5mの斜面を挟み、東側の下段と、西側の上段に分けられる。また、このうち下段では部分的に沼沢火山灰層の堆積が認められるなど、地形的・地質的にも均一ではない。このため地点によって土層の堆積状況も異なっている。ここでは遺物が比較的多く出土した沼沢火山灰層が堆積する調査区下段北側の層位を基本層序とする。一方、沼沢火山灰層の堆積が認められない下段中央部～南部、上段の層位については、基本層序と異なる点を重点的に記す。

#### 〈調査区下段〉

沼沢火山灰層の堆積が認められる北側の層位は、以下のとおりである。

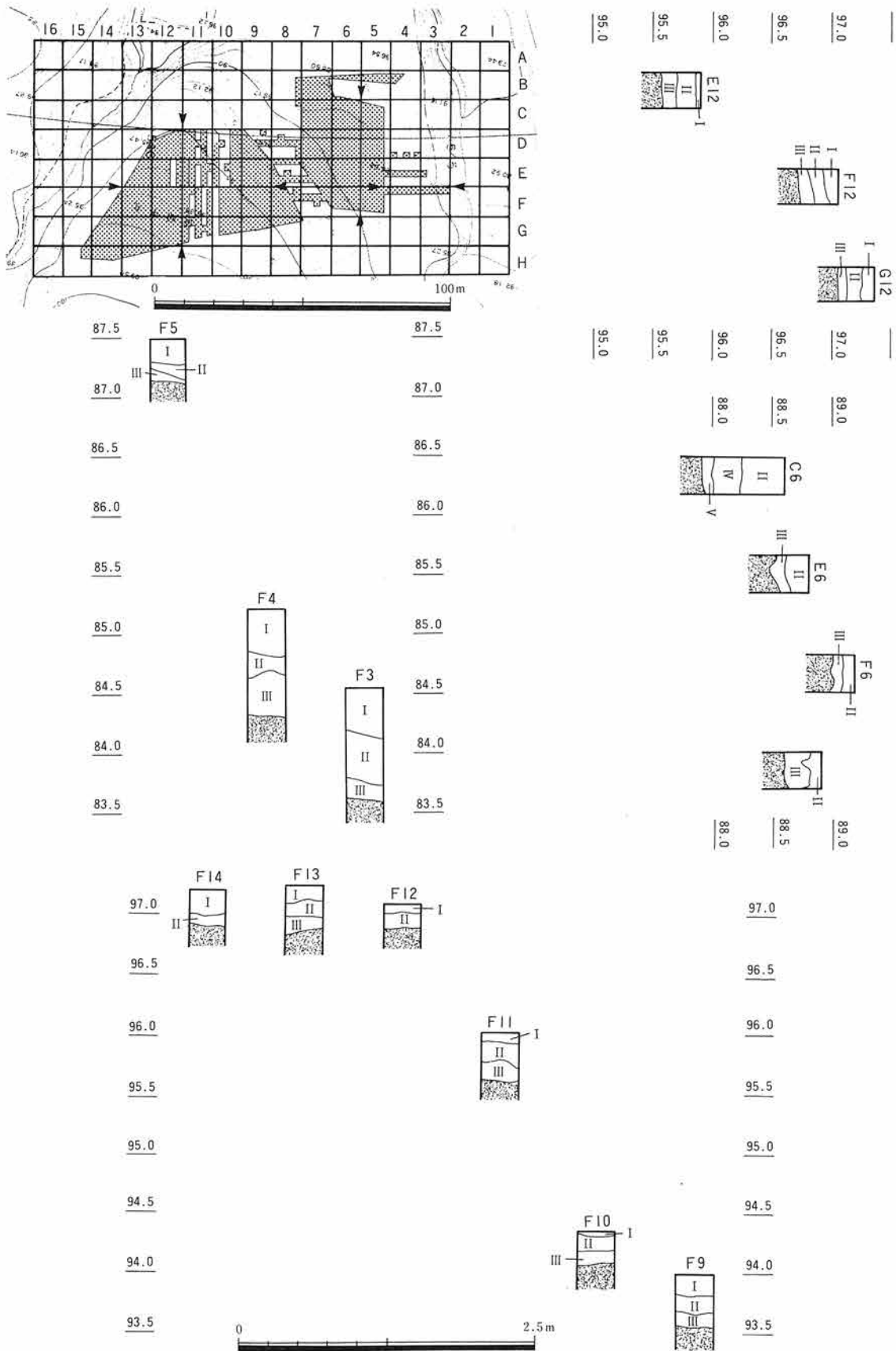
- I層 暗灰褐色の腐植土層で、粘性・しまりに欠ける。厚さ10～15cmで、縄文時代の遺物を少量含む。
- II層 暗褐色の腐植土層で、やや粘性を持つが、しまりに欠ける。厚さ10～30cmである。縄文時代の遺物包含層である。
- III層 基本層序のII層とIV層の漸移層である。暗黄褐色のシルト層で、厚さ20～40cmである。
- IV層 沼沢火山灰層である。黄褐色のシルト層で、厚さ10～25cmである。
- V層 明灰色土層で、粘性・しまりに富む。厚さ10～15cmで、縄文時代前期末以前の遺物包含層である。  
IV層（沼沢火山灰層）が厚く堆積する地点にのみ認められる。
- VI層 黄褐色を呈する粘質土で、本遺跡の地山である。

#### （調査区下段の沼沢火山灰層堆積範囲外）

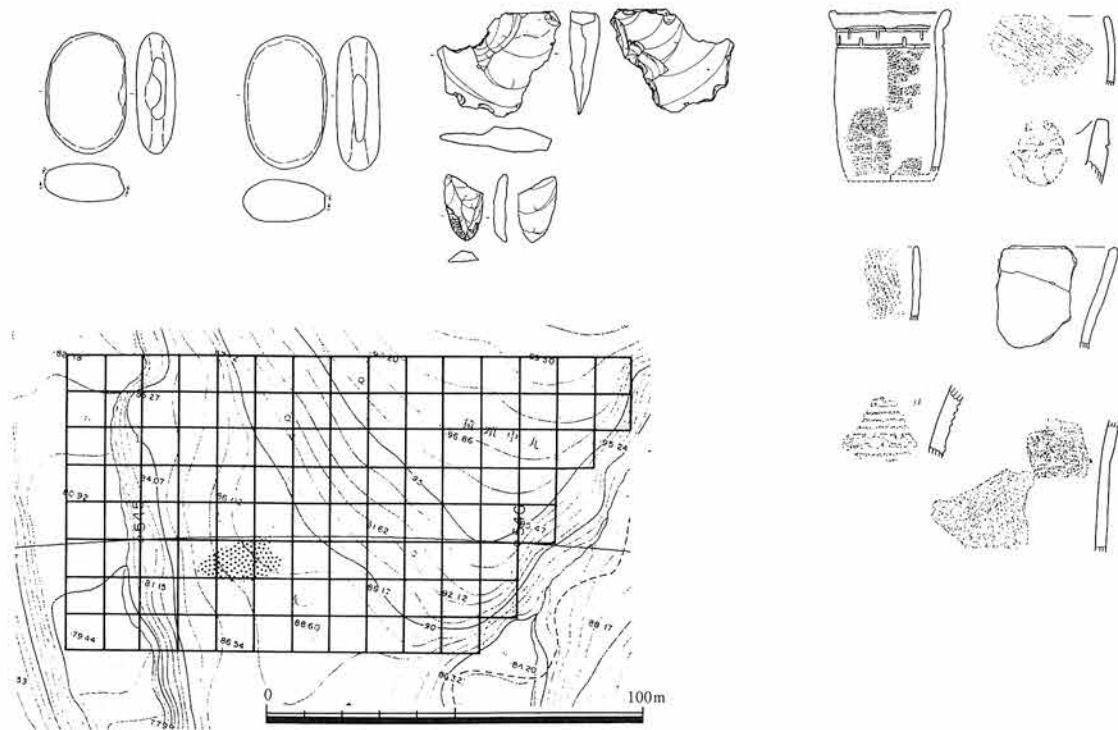
上方からI層、II層、III層、VI層に分けられる。このうちIII層のみ基本層序のそれとは異なっている。このIII層は、基本層序のIII層と色調は酷似するが、II層とVI層（地山）の漸移層のため、基本層序のそれとは性質が異なっている。部分的にIV層の粒子を含むものの、やや粘性を帯びている。

#### 〈調査区上段〉

上方からI層、II層、VI層（地山）に分けられる。いずれも下段の基本層序と対応するが、粘性・しまりに欠ける点や、I層が5～15cm、II層が10～20cmと比較的薄い点などが異なっている。また地山も下段



第17図 猿額遺跡の土層柱状図



第18図 沼沢火山灰層堆積地点におけるII層出土遺物  
(網目は沼沢火山灰層堆積範囲)

と同じく黄褐色を呈する粘質土であるが、軟質の角礫を多量に含んでいる点異なる。地山に含まれる角礫は、II層中にも若干認められる。

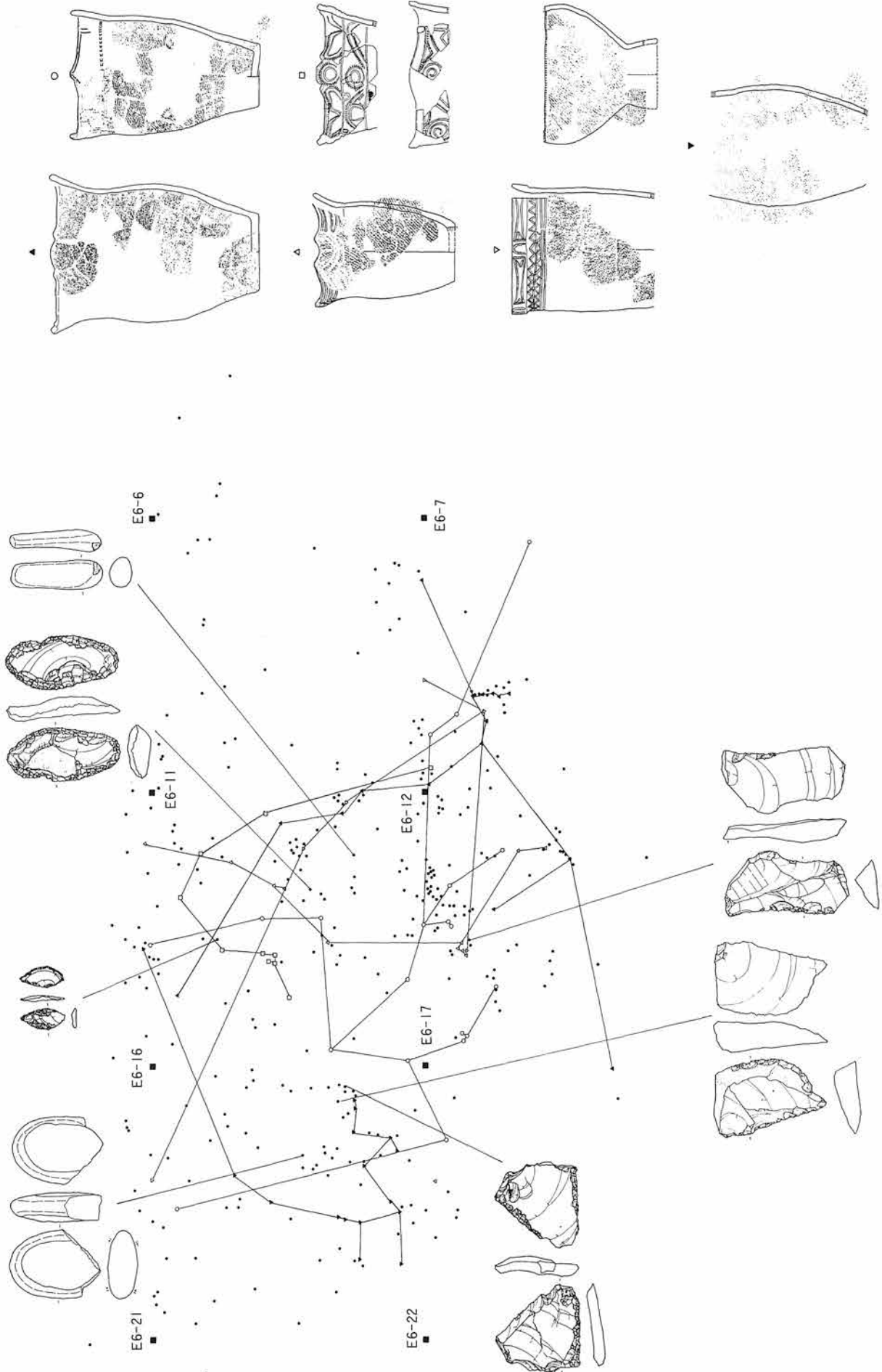
## B 遺物の出土状況

遺物が極めて希薄な調査区東側斜面と、調査区上段と下段を結ぶ斜面を除き、上段と下段の遺物出土状況を記す。遺物の多くは包含層からの出土である。埋設土器・風倒木痕を除く16か所の遺構の中で、遺物が出土した遺構は5か所にとどまる。遺物の出土量は平箱にして縄文土器は8箱、石器・剥片類は13箱である。〈調査区の下段〉

多数の遺構が検出された中央部～北部の範囲にかけて遺物の出土量が多い。特にほぼ中央に当たるE6-6・7、11・12、16・17、21・22グリッドでは、遺物が特に集中して検出されている(第19図)。このうち土器は、縄文時代前期末葉(大木6式期)のものである。一方、南側での出土量は希薄である。また平成5年度に調査した北側にあたる林道下の100㎡では、遺構は確認されておらず、遺物も縄文時代前期末葉の土器片が十数片出土したにとどまる。

〈調査区上段〉

遺物包含層が薄く、出土遺物も下段より少ない。ある程度のまとまりが認められる遺物集中地点(土器片、石器・剥片類が10~20点まとまる程度)が点在するにすぎない。一次調査で旧石器時代末~縄文時代草創期の尖頭器が出土したE12・13グリッドから、同時期の尖頭器がもう1点と旧石器時代の彫刻刀形石器や石刃などが出土した。またE12・13グリッドから約10m北東側からは、剥片を中心とした石器が集中して出土している。この他に西側では、縄文時代前期中葉の土器片が出土した2号フラスコ状土坑の周辺か



第19図 猿額遺跡下段遺物集中地点の出土遺物

### 3 遺 構

ら、比較的多くの遺物が出土した。上段東側は4か所から土器片がまとまって出土したにとどまる。

(出土層位)

II層出土の遺物が大半を占める。II層は調査区上・下段の全域で認められるが、出土遺物の少ない下段南部と上段ではII層が薄い傾向にある。またIV層(沼沢火山灰層)が堆積する地点にのみ存在するV層の出土遺物は、II層と比較して極端に少ない。V層を掘り込んで構築された2号土坑の底部近くから、縄文時代前期末葉の土器が1個体分出土しており、IV・V層の堆積年代を考える上で良い資料となっている。

## 3 遺 構

### A 概 要

土坑9基、フラスコ状土坑2基、焼土坑5基、埋設土器1基のほか、風倒木痕11基が検出された。遺跡は大きく西側の上段(標高95~99m)と下段(標高86~88m)とに分かれるが、風倒木痕を除けば、遺構の分布は下段の北東部に集中している。上段では調査区最西部に偏るが、フラスコ状土坑1基、焼土坑2基が確認されたにすぎない。

確認された遺構のうち土器・石器など遺物が出土されたのは、2号・3号土坑、1号・2号フラスコ土坑、2号焼土坑があるにすぎない。このうち出土遺物から時期が確定しえるのは、覆土中から1個体分の土器が出土した2号土坑、覆土上層から比較的大きな破片が出土した2号フラスコ状土坑だけである。各遺構の年代を明確にしたいが、下段から検出された遺構は確認面の層序から推察が可能である。

猿額遺跡では沼沢火山灰層を間層とした上下の2枚の遺物包含層が確認できた。沼沢火山灰層の堆積年代は、第II章のとおり縄文時代前期末葉である。このため沼沢火山灰の堆積によって埋没した遺構は、縄文時代前期末葉以前の所産であり、①沼沢火山灰層上(基本層序の第IV層)で確認、②沼沢火山灰層を掘り込んで構築された遺構は、縄文時代中期以降の所産と考える。これに対し、沼沢火山灰の堆積範囲外に構築された遺構の年代は明確にしえない。ここでは、これらの遺構の覆土上面の層序や遺構の上部に堆積した層序から縄文時代の所産として記述する。各遺構の年代は以下の通りである。

#### <1> 縄文時代前期末葉以前

2号土坑、1号フラスコ土坑・2号フラスコ土坑、2号焼土坑

#### <2> 縄文時代中期前葉以降

1号土坑・5号土坑・6号~8号土坑、1号焼土坑、1号埋設土器

#### <3> 時期不明

3号・4号土坑、3号焼土坑、4号・5号焼土坑

### B 各 説 (図版23)

#### <1> 調査区下段

##### (1) 土 坑

いずれも調査区下段の東部で確認されている。

1号土坑 北側の平坦部に位置し、3m東には1号埋設土器がある。北側半分が攪乱によって削平されている。確認面はIV層で、平面形は楕円形を呈する。残存部では長径73cm、短径52cm、深さ18cmである。



断面形は箱形で、底部中央には径20cm、深さ10cmの小ピットがある。覆土は5層に分けられ、中間の2・3層には沼沢火山灰層が混入している。

2号土坑 中央～北側の平坦部に位置し、3.5m北東には2号焼土坑、4.5m南には3号土坑がある。確認面はV層で、上部に沼沢火山灰層が厚く堆積していた。上部は削平された部分もあるが、残存状況は良好である。平面形は楕円形を呈し、長径128cm、短径48cm、深さ13cmである。壁は急傾斜に掘り込まれており、断面形は箱形で、底部はほぼ平坦である。覆土は4層に分けられ、1～3層には多量の沼沢火山灰を含む。底部からわずかに浮いた状態で縄文時代前期末葉の深鉢が出土している。

3号土坑 中央の平坦部に位置し、4.5m北には2号土坑、3m南東には3号焼土坑がある。確認面は地山で、上部がわずかに削平された部分もあるが、残存状況は良好である。平面形は円形に近い楕円形を呈し、長径40cm、短径29cm、深さ7cmである。断面形は皿形で、底部は平坦である。覆土は4層に分けられ、上層の1・2層から小形剥片が20点出土している。覆土の3層に沼沢火山灰層が混入していることから、土坑の構築年代は縄文時代前期末葉、小型剥片は縄文時代中期前葉の所産と思われる。

4号土坑 中央～南側の平坦部に位置し、1m南西には5号土坑がある。確認面は地山で、上部はかなり削平を受けている。平面形は楕円形を呈し、長径34cm、短径18cm、深さ12cmである。断面形は半円形で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は2層に分けられ、上層からは径約20cmの搬入礫2個が出土している。このうち1個は直立した状態で検出された。

5号土坑 中央～南側の平坦部に位置し、1m北東には4号土坑、2m東には8号土坑がある。確認面はIV層で、上部は削平を受けている。平面形は楕円形を呈し、長径64cm、短径55cm、深さ20cmである。断面形は筒形で、西側の壁が急傾斜で掘り込まれ、底部は平坦である。覆土は3層に分けられ、全層に沼沢火山灰が混入している。底部からやや浮いた状態で、直径40cmほどの搬入礫が検出されている。

6号土坑 中央部の平坦地に位置し、約5m南には5号土坑がある。確認面は地山で、上部は削平を受けている。平面形は楕円形を呈し、径83cm、深さ28cmである。断面形は皿形に近いが、南側は急傾斜に掘り込まれている。底部は平坦である。覆土は4層に分けられ、1層には沼沢火山灰が混入している。底部と、底部から浮いた状態で搬入礫が検出されている。

7号土坑 中央からわずかに南側に位置し、8号土坑の北東部を切る。確認面はIV層で、残存状況は良好である。平面形は不整楕円形を呈し、長径48cm、短径35cm、深さ13cmである。断面形は皿形で、底部は丸みを帯びる。覆土は3層に分けられ、1・2層には沼沢火山灰層が混入している。

8号土坑 中央からわずかに南側に位置し、7号土坑に北東部を切られている。確認面はIV層である。平面形は不整楕円形を呈し、長径105cm、短径95cm、深さ15cmである。断面形は皿形で、底部は凹凸が著しい。覆土は3層に分けられ、1・2層には沼沢火山灰が混入している。

## (2) フラスコ状土坑

調査区下段(1号)、調査区上段(2号)からそれぞれ検出されている。

1号フラスコ状土坑 最東部に位置し、5m北西には1号焼土坑がある。壁の一部が崩落しているが、残存状況は概して良好である。確認面は地山で、平面形は楕円形である。法量は確認面上で80×53cm、中間壁では107×98cm、底面では98×80cm、深さは50cmである。断面形は西側のくびれ部が崩落しているが、いわゆるフラスコ形で底部は丸みを持つ。覆土は8層に分けられる。このうち5・6層では被熱した搬入礫が検出されたこと、6層には多量の炭化材がレンズ状に堆積していることから、土坑としての機能が停止後に、再利用された可能性が高い。搬入礫以外の出土遺物には、5層から検出された縄文土器深鉢の底

部がある。

2号フラスコ状土坑 南西部に位置し、5m北東には4号焼土坑、2.5m東には5号焼土坑がある。くびれ部付近が崩落しているが、残存状況は概して良好である。確認面は地山で、平面形は確認面が楕円形であるが、底面は円形を呈する。法量は確認面で130cm×124cm、底面では105cm、深さは70cmである。断面形は箱形で底部は平坦である。覆土は7層に分けられ、1～3層から縄文時代後期前葉に比定される土器が13片出土している。

### (3) 焼土坑

調査区下段に位置するもの(1～3号)と、上段に位置するもの(4号・5号)がある。

1号焼土坑 北東部に位置し、5m南東には1号フラスコ状土坑がある。西側が1号風倒木痕に切られており、残存状況は不良である。確認面はⅣ層で、平面形は楕円形を呈する。残存部で長径85cm、短径65cm、深さ12cmである。断面形は皿形で、底部は凹凸が激しい。覆土は3層に分けられるが、焼土が堆積していたのは1層である。炭化物の堆積や明確な火床は確認されなかった。

2号焼土坑 中央からやや北に位置し、3.5m南西には2号土坑がある。確認面はⅤ層で、残存状況は良好である。平面形は楕円形を呈し、長径80cm、短径70cm、深さ10cmである。断面形は皿形で、底部は平坦である。覆土は焼土の単層で、多量の焼土粒・炭化粒を含むが、明確な火床は確認されなかった。出土遺物には縄文土器1片があるが、細片のため時期は明確にしえない。

3号焼土坑 中央部に位置し、3m北西に3号土坑がある。確認面は地山で、残存状況は良好である。平面形は楕円形を呈し、長径90cm、短径61cm、深さ12cmである。断面形は皿形で、底部は平坦である。覆土は4層に分けられ、上層は多量の焼土粒を含む淡赤褐色土がレンズ状に堆積する。

4号焼土坑 南西部に位置し、5m南西には2号フラスコ状土坑が、4.5m南には5号焼土坑がある。確認面は地山で、木根によって攪乱を受けており残存状況は不良である。焼土範囲の平面形は長楕円形を呈し、長径25cm、短径15cm、深さ2cmである。断面形は皿形で、底部は凹凸が激しい。覆土は焼土層の単層で少量の炭化粒を含むが、明確な火床は存在しない。

5号焼土坑 南西部に位置し、2.5m西には2号フラスコ状土坑、4.5m北には4号焼土坑がある。確認面は11号風倒木痕の覆土上層である。上部は削平を受けており、残存状況は不良である。焼土範囲の平面形は不整楕円形を呈し、長径20cm、短径18cm、深さ11cmである。断面形は皿形で、底部は平坦である。覆土は単層で、多量の炭化粒・焼土粒を含むが、明確な火床は存在しない。

### (4) 埋設土器

1基のみ検出されている。調査区下段の北側に位置し、3m西には1号土坑、6m南には2号土坑がある。確認面はⅣ層(沼沢火山灰層)で、埋設された土器は口縁部から体部中半を欠く。埋設土器の周囲には径100cm、深さ34cmで、テラスを持った箱形の落ち込みが確認されたが、攪乱の可能性が高く、掘り形は明確でない。土器型式・遺構確認面の層序から、縄文時代中期前半の所産と考える。

### (5) その他

風倒木痕が11基(調査区上段で4基、下段では7基)検出されている。このうち1号風倒木痕から磨石が検出されているが、それ以外の風倒木痕からは遺物は出土していない。

## 4 出土遺物

今回検出された遺物は、縄文時代前期末葉のものが主体である。遺物の出土状況は前説の通りであるが、包含層出土遺物中でも、II層出土のものが大半である。V層出土・遺構内出土は、きわめてわずかであった。図版上では遺構・層位ごとに区分して掲載したが、ここでは一括して分類を行い記述する。

### A 縄文土器（図版24～26-1～77、写真図版82～84）

帰属時期を重視して分類を行ったが、細片で文様構成が把握しにくいものや、縄文のみが施された粗製深鉢は、十分な根拠を欠く場合がある。ここでは出土地点・層位、胎土を考慮に入れ、分類を行った。

- 第I群土器 …… 前期中葉以前のものである。出土量は極わずかで、胎土中に繊維を含む。  
 第II群土器 …… 前期末葉のものうち、東関東地方を中心とする興津式に比定されるものである。  
 第III群土器 …… 前期末葉のものうち、東北地方を中心とする大木式に比定されるものである。  
 第IV群土器 …… 中期以降の土器である。

#### (1) 第I群土器 (10)

明確なものは1点が出土したにとどまる。10は底部を欠くものの、口縁部～体部下位まで残存する。口縁部は内湾して立ち上がり、端部はわずかに肥厚して平行な面を有する。文様は外面に横位の羽状縄文が施されている。大木2式に比定されるものである。

#### (2) 第II群土器 (37)

東関東を中心に分布する興津式に比定されるものである。波状口縁を呈し、波上部直下には円形の浮文が貼付されている。口縁に刻目が、またその直下には2本単位の櫛歯状工具で横にずらしながら連続刺突が施されている。頸部から胴部にかけては、半截竹管具と櫛歯状工具を用いて、水平ないし波状に菱形文及び三角形を連続的に構成している。

#### (3) 第III群土器 (1～9、11～36、38～48、54～62、65～68、74・75)

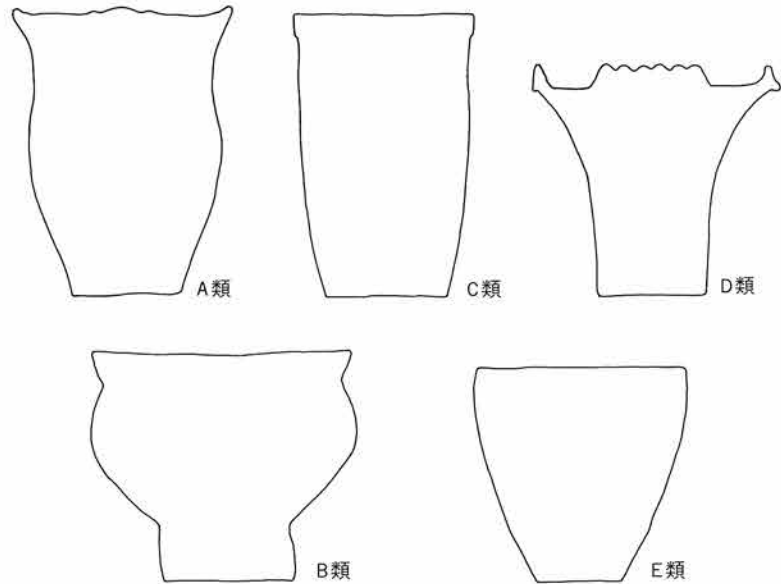
出土点数は多量とは言いがたいが、土器の残存率は高い。このため全体の器形が復元しえるものが十数点存在する。細分に際しては器形を重視して分類を行い、文様の構成・法量により更に細分を行う事としたい。細分に際しては、器形での分類が困難なものもあることから、十分でないが、土器の様式を重視する立場から、なるべく器形と文様の関連性について明確にしたい。

#### ・器形

- A … 胴部中位～上位がわずかに膨らみ、口縁部は屈曲して外へ開くものである。口縁部は概して長い。  
 B … 胴部が球形状のもの、もしくは金魚鉢形を呈するものである。口縁部は体部から屈曲して直立するものと、屈曲して大きく外へ開くものがある。  
 C … バケツ形を呈するものがある。口縁部が複合口縁となるものが多い。  
 D … 口縁部と胴部の境が明瞭でなく、胴部上位から大きく外反して口縁部に至るものである。出土点数は少ない。  
 E … いわゆる通用の粗製深鉢で、口縁部がわずかに内湾して立ち上がる。

・文 様

- 1 … 縄文圧痕が施されたもの
- 2 … 横長の円形浮文が施されたもの
- 3 … 幅の広い爪形文が施されたもの
- 4 … 爪形文を施した幅5mm程度の隆線が、横位・斜位に施されたもの
- 5 … 地文以外は、沈線文のみで文様が描かれているもの
- 6 … 沈線の側縁に爪形文が施されたもの
- 7 … 細い粘土紐を貼り付けて文様を描くもの
- 8 … 縄文のみ施されたもの



第20図 猿額遺跡第Ⅲ群土器の分類図

・ A類 (1・22~24・27)

口径約23~30cm、器高約35~40cmと大型のもの(1・22・23)、口径約24cm、器高約26cmと中型のもの(24)、器高は不明であるが、口径約19cmと小型のもの(27)がある。いずれも波状口縁を呈するが、5単位のもの1点のみで、4単位のものが多い。

大型のうち1は、5単位の波状口縁を呈しており、他とは異なる。複合となる口縁部には縦位の縄文圧痕が施されており、文様構成は1類である。体部は縄文が主体で、横位の綾線文が4条加えられている。

22は、左右に比して中央が大きな三つの波を1組とする小波状口縁を呈する。文様構成は8類である。一方の23は文様が1類で、横位の縄文圧痕は口縁上部をほぼ全周し、縦位のもの2条を一組として4単位施されている。頸部付近には幅広い爪形文が施されている。

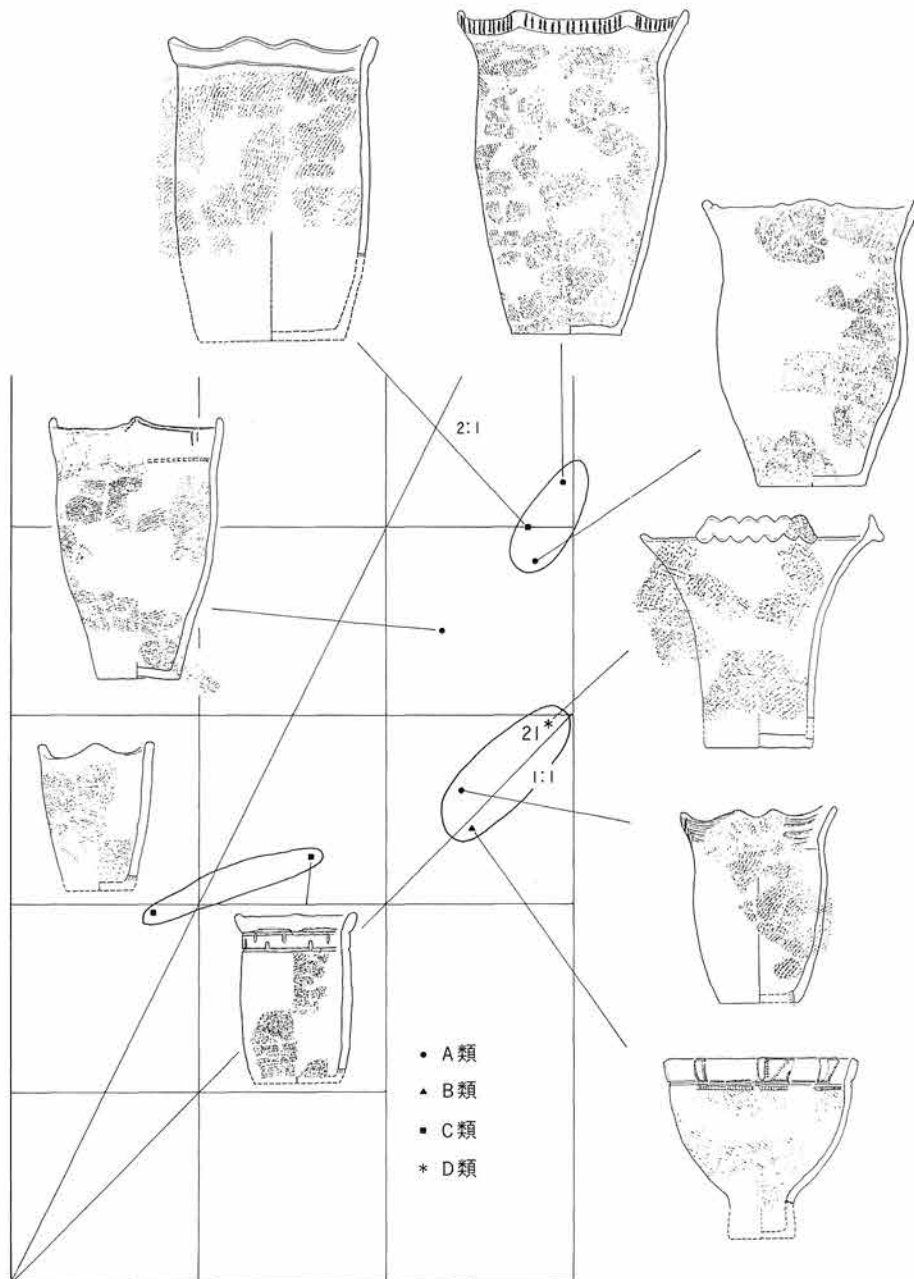
中型の24は、波頂部が双頭状の小波状を一単位とする波状口縁を呈する。文様構成は5類で、縄文施文のち口縁部から頸部にかけて5条を基本とする沈線が施されている。なお、波状部直下には3個の円形竹管文が施されており、沈線も3条と数を減じている。小型の27は胴部下半を欠くが、口縁部は無文で文様構成は8類の可能性が高い。

・ B類 (13・28・31・34・35)

口径約20~28cmと中型のもの(13・31・34・35)と、口径約13cmと小型のもの(28)がある。いずれも平縁で、波状口縁のものは認められない。

中型のものは口縁部の屈曲が強いもの(13・31)と、弱いもの(34)に分かれる。前者のうち13は、口径が胴部最大径を上回る。口縁部上端には幅広い爪形文が、下端には三角形の陰刻が認められ、文様構成は3類になろう。また体部には渦巻き状の沈線が縄文施文のちに施されるなど、装飾性は高い。

31は胴部最大径が口径を上回る。残存率は低く把握できない部分が多いが、浮文を中心に文様が施され



第21図 猿額遺跡第III群土器の法量分布図

ている。上端がつまみ上げられた幅広な口縁部端面には、中空・中実の円形浮文と幅5mmの太い粘土紐が縦位に施されている。これらの間を、爪形文が施された細い粘土紐が三角形状に配置されている。口縁部から体部上位は、細い粘土紐の貼り付けで文様が描かれている。口縁部から頸部は横位に2条施され、その間に鋸歯状に加えられている。頸部には横位に2条が施され、体部との境となる。体部には縦位に3条が施されて区画されているが、このうち左右のものは屈曲して、鋸歯状のものへと連続している。細い粘土紐は、口縁部に鋸歯状に施されたもの、体部上位に縦位に施されたもののうち中央以外は、いずれも爪形文が施されている。

34は口縁部に幅約1cmの隆帯が縦位に8単位施されている。隆帯の両側縁には縦位の爪形文が、隆帯間には三角形となる爪形文が施されている。胴部の文様は全て縄文であるが、頸部付近には二条の沈線と頸

部を全周する爪形文が加えられている。頸部に全周する爪形文が施された文様構成は、35にも認められる。

小型の28は胴部最大径が口径を上回るタイプである。残存率が低いことから明瞭でないが、体部には縄文のみが残る。口縁部には縦位の沈線が3条と、鋸歯状になるものであろうか、爪形文が斜位に2条施されている。口縁上端部から残存する体部上位内面にはオコゲが厚く付着する。

#### C類 (2・5・25・26・29・30・32)

大型のもの(5・26・29・30・32)と、小型のもの(2・25)がある。波の大小はあるが、大型・小型のものを含め、4単位の波状口縁を呈するものが主体で、平縁のものは1点のみ(32)である。

大型のうち5は、波頂部が双頭状を呈する小波状を1単位とする複合の波状口縁を呈する。文様は簡素で、体部に縄文が施されたのみの8類に属する。26は、口縁上端部に幅約1cmの粘土紐が貼り付けられている。下端部に断面三角形の隆帯が1条施され、縄文のみの体部との境界となる。口縁部には太めの粘土紐と、爪形文が施された細い粘土紐で文様を構成する。残存部において前者は逆三角形状に、後者は横位と三角形状の文様が施されている。

29は口縁部の形態が22に類似し、三単位を一組とする小波状口縁を呈する。文様は沈線と爪形文で施されている。口縁部～体部は2条の沈線で3区分されており、最下段は縄文のみ施されている。一方、上段には波状部直下に沈線による2重の同心円文が施されている。波状口縁間の文様は同心円以外は異なっており、上段は対になる平行四辺形状、下段は台形状の文様加わる。なお、上下両段とも沈線の両側縁には爪形文が施されている。30は残存率が低いものの、口縁部は無文で体部に縄文が施されたのみである。

32はC類の中で、唯一波状口縁を呈していない。体部の縄文以外は沈線による文様が施されており、5類にあたる。複合口縁を呈する幅広い口縁部には、逆U字状の文様を中心に4単位の区画が作り出されている。各区画は長方形の文様が描かれ、その内部には「く」の字が対になる。一方の口縁直下には鋸歯文—沈線—鋸歯文—沈線—沈線の順で文様が施されている。

#### ・D類 (21)

1点のみ出土している。口径約28.5cm、器高約29.5cmと大型である。口縁部には「ハート」形の突起がつくタイプである。文様は残存部位が限定されることから明確にしえないが、口縁部まで縄文が施されたのち、縦位と横位に細い粘土紐貼り付けによって鋸歯状文が作り出されている。

#### ・E類 (38～41、44・54～62)

通用の深鉢形土器で、細片でも推定が可能である。法量を明確にしえないものが多いが、口径約25～30cmと中型のもの(38～40)と、口径約19cmと小型のもの(41)に分かれる。

中型のものうち、38・39は口径が胴部最大径を上回らないものであり、口縁部の内湾度は低い。これに対して40は、胴部最大径が口径を上回るタイプであり、口縁部の内湾度が高い。小型の41の形態は前者に近い。文様は38～40・55・57～60が縄文のみ、残存部では無文のもの(61・62)に分かれる。

上記以外は、器形により分類が困難なものである。以下では文様による分類別に記述を行うが、上記の関連で可能性があるものについては、適宜分類を行うこととしたい。

#### ・1類 (14)

1点のみ出土している。断面三角形の隆帯上に縄文圧痕が施されている。残存する隆帯の上部は無文、下段は縄文が施されている。残存部からの推定では器形はC類になろうか。

#### ・5類 (18、42・43・45～48・63)

細片で、全体の文様構成が不明なことから本類に属するものも多い。分類の基準に明確さを欠くが、口



縁部が残存するものは本類の可能性が高い。口縁部破片のうち、42は直線と半円の組み合わせで文様が描かれている。43・48は波状口縁を呈し、文様も酷似する。口縁部と体部の境界は、横位の沈線により区切られており、体部には縄文が施されている。口縁部は波状部直下に2条が1組となる縦位の沈線間に、「逆U字」となる文様が施されている。44も波状口縁を呈するが、波状口縁部の端面には円形の文様が施されている。また口縁部と平行する波状の沈線が8条入る。

45・46は上端部が波状口縁を呈し、板状に肥厚する。口縁上端部には横位の沈線が、45ではその下位に楕円文が施されている。47は残存率が特に低いが、波状口縁を呈し、口縁部と平行して沈線が施されている。63は横位の沈線が施されているが、特に幅広に作り出された無文帯の上下に縦位の沈線が施されている。

・6類 (15)

15は大きく円形で波状の側縁に小さな突起が付く波状口縁を呈する。口縁上端部は大きく肥厚して複合状を呈する。幅の狭い爪形文が口縁に平行して2条、その下部には横位に爪形文が施されている。

・7類 (3)

1点のみ出土である。3は口縁端部上端に楕円形の浮文が施され、その直下には横位の沈線が施されている。口縁端部上端には刻みが加えられている。

・その他 (17)

平縁の上部から縄文が施されたものである。その他、体部破片(4・6・16・17・20)は残存部位では地文及び無文である。体部～底部にかけての破片(7～9・11・12・19・33)に残る文様はいずれも縄文である。底部外面は無文のものも多いが(7・9・19)、網代痕が残るもの(11・12)もある。

(4) 第IV群土器 (49～53・64～77)

中期・晩期のもはごく僅かで、後期の土器群が主体である。64は体部の破片であるが、縦位の沈線が3条施されており北陸系の「新保・新崎式」の範疇で考えられるものである。

後・晩期のもは、上段を中心に確認されている。深鉢(49～53・65～73)、注口土器(76・77)がある。深鉢は口縁部破片と胴部破片があるが、捺系文が施されたA類(50～52・71・72)と、横位の沈線と縄文が施されたB類(53・67・70)、条線のみC類(49・66・68・73)がある。

A類のうち、口縁部破片である50～52は、縄目がはっきりとした50・51と、はっきりとしない52がある。51は胎土中に繊維を含む。体部破片である71・72はいずれも網目状捺系が施されている。50～52は後期中葉頃、71・72は晩期の所産と考える。

B類の口縁部破片である53は縄文が施されたのち、3条の沈線が加えられている。これに対し、56は口縁上端部に一条の沈線が横位に施されているのみである。体部破片の67・70は、縦位の沈線が加えられている。67は残存部において横位の沈線を欠くが、70にはそれが入る。横位と縦位の沈線で長方形(方形)の無文帯を作り出していると考えられる。

C類のうち口縁部破片である49は、斜位の条線が施されている。条線を斜位に施すのは体部破片である66も同様である。これに対し、壺形土器の頸部から体部上位の破片である73は、縦位で細かい条線が施されている。これらはいずれも条線のみが施されたものであるが、68は縦位の沈線で区画が作り出されており、その内部に斜位の沈線が施されている。これらはいずれも後期中葉頃の所産と考える。

注口土器と思われる76は口縁部が残存しており、上端部には孔が施されている。また残存する口縁部外面には横位の沈線が2条施されており、その間に文様帯が存在する。文様は縄文施文ののち、方形で無文

の区画を作り出している。一方の内面も2条の沈線間に縄文のみが施されている。

77は、注口の体部破片である。体部から大きく内湾して頸部に至るものであり、残存する体部下位には磨り消し縄文が、上位には入り組み三叉文が施されている。縄文時代晩期の安行式の所産と考えられる。

## B 石器 (図版27～33-1～96、写真図版85～88)

土器との共伴関係から、縄文時代前期末葉～中期初頭のものが主体と考えるが、調査区の上段からは、旧石器時代のものや縄文時代草創期のものが若干出土している。また出土層位が第II層と第V層とに分かれるが、ここでは時期・出土地点での区分は行わず、一括して分類し記述する。

### (1) 彫刻刀形石器 (37)

1点のみの出土である。石刃または剥片の端部に、桶状の剥離が施された石器である。石刃または剥片を断ち割るように加えられた主要剥離面に、連続的な二次加工を加えて打面とし、左右両側辺、背面に彫刻刀面が作出されている。長さ8.0cm、幅2.6cmで石材は頁岩である。

### (2) 石 刃 (38)

彫刻刀形石器と同様に1点のみの出土である。剥離軸方向の長さが、幅のほぼ2倍以上で、両側辺と背面の稜がほぼ平行する剥片である。平面の加撃方向と直行する剥離面を含んでいる。長さ9.6cm、幅2.5cmで、石材は頁岩である。

### (3) 尖頭器 (39～42)

4点出土している。法量により細分が可能である。39は御子柴型に属する完形品で、長さ14.4cm、幅5.3cmと大形である。正面の両側縁、裏面の先端部と底縁には特に丁寧な微細剥離が施されている。40・41は、長さ8.7cm～10.2cm、幅3.0～3.5cmと中形に属する。このうち40は、左側縁中央部が破損している。一方の41は左側の底縁部分が大きく加工され、つまみ状の基部を有する。また二次加工は、39・40に比べて丁寧ではなく、微細剥離はそれほど認められない。

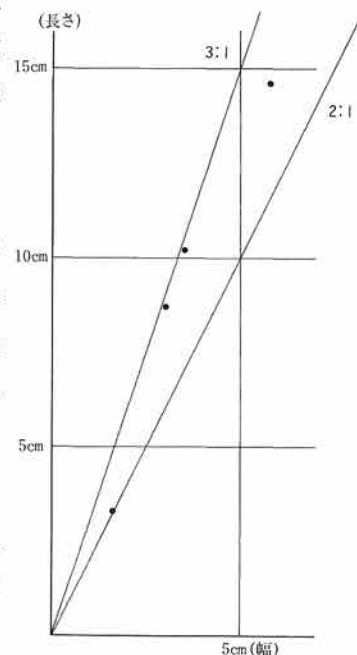
42は、長さ3.3cm、幅1.6cmと小型である。横長剥片を素材としており、正面の先端部から両側縁に、裏面は先端部～底縁にかけて二次加工が施されている。小型のためか、二次加工は微細剥離以外に施されない。石材は39が鉄石英、40～42は頁岩である。長さとの比率は、大型の39が約2.5:1、中型の40・41が約3:1、小型の42が2:1である(第22図)。

### (4) 石 錐 (43・44)

縦長剥片を素材としたものが2点出土している。いずれも二次加工は正面のみで、粗雑な剥離が錐部付近に集中している。つまみ部の作り出しは明瞭でない。錐部からつまみ部にかけての形状から細分が可能である。43は錐部からつまみ部にかけて比較的広がるのに対し、44はわずかにひろがる程度である。石材は43が流紋岩、44は緑色凝灰岩である。

### (5) ピエスエスキュー (45)

わずかに1点のみの出土である。縦長剥片を素材としており、4個二対の刃部と、両極剥離痕をもつものである。長さ4.1cm、幅3.1cmで、石材は頁岩である。



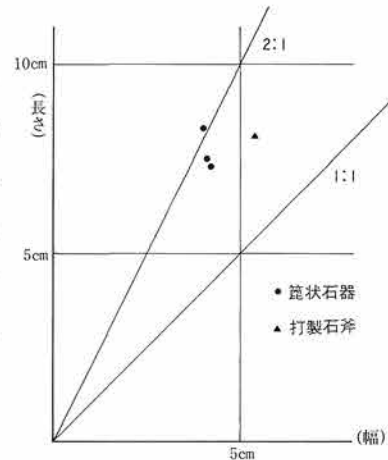
第22図 猿額遺跡出土尖頭器の長幅図

## (6) 籠状石器 (46~48)

3点出土している。縦長剥片を素材とし、基部から刃部にかけて大きく開く1類(46・47)と、横長剥片を素材とし、刃部幅と基部幅の差がほとんどなく、長楕円形に近い形状の2類(48)がある。二次加工は中・小型の連続剥離が施されているが、47は正面のみに、46は刃部・側縁に僅かに施されたのみであるが、48は両面とも二次加工が全周する。長さ7.3cm~8.3cm、幅4.0~4.2cmで、長さとの比率は1.8~2.1:1であり、打製石斧(約1.5:1)とは異なる。石材はいずれも頁岩である。

## (7) 打製石斧 (49)

1点のみの出土である。厚手の剥片を素材としており、二次加工は両面に施されているが、正面の二次加工が急角度剥離である。刃部幅が基部幅の約1.5倍ある撥形の範疇に属し、刃部は偏直刃である。石材は鉄石英で、長さ8.1cm、幅5.4cmである。



第23図 猿額遺跡出土の籠状石器と打製石斧長幅図

## (8) 磨製石斧 (50~55)

6点出土しているが、基部及び刃部を欠くものが大半である。定角式磨製石斧(51~55)の他に、正裏面と側面の稜が特に弱く、「乳棒状磨製石斧」と考えられるもの(50)がある。

前者は破損品が多く、完形品は51の1点のみである。破損品のうち52は未製品となろうか。明確な磨面が認められず、叩きの痕跡も明瞭でない。これらを含め、刃部はいずれも両凹刃と考えられる。

一方の乳棒状磨製石斧である50は、長さ21.6cm、幅7.5cm、厚さ4.5cmと特に大型なものである。正面には刃部と基部の中間に、裏面には刃部と基部に磨痕が認められる。刃部は両凹刃である。石材は50・51が安山岩、53は頁岩、54・55は頁岩、52は明確でないが、安山岩の一種であろうか。

## (9) 不定形石器 (31~35・56~76)

## A類 (32、56~59)

長さ6.2~6.9cmと大型の1類(56・57)と、長さ2.8~3.5cmと小型の2類(32・58・59)がある。1類は縦長剥片を素材とする56と、横長剥片を素材とする57に細分が可能である。56は正面の両側縁及び、裏面の片側縁に微細剥離が施されている。一方の57は石匙に類似し、底縁両面及び裏面の片側縁に二次加工が施されている。

2類は残存する両側縁全面に二次加工が施された32・58と、底縁付近にのみ二次加工が施された59に分かれる。このうち58は、端部が鋭利で石錐状に作り出されているが、32は円形でエンドスクレイパー状を呈する。一方の59は、特に急角度の二次加工が施されている。石材は32が鉄石英、57・58は頁岩、59は玉髓である。

## B類 (60~62)

いずれも縦長剥片を素材としており、二次加工は側縁にのみ施されている。二次加工が裏面にも及ぶ60・61と、正面にのみ施された62に分かれる。60は正方形を呈し、61が基部から底縁にかけて大きく開くのに対し、62は「く」の字状を呈する。石材はいずれも緑色凝灰岩である。

## C類 (31・63)

2点のみ出土である。横長剥片を素材として、底縁に大型の二次加工が施された31と、縦長剥片を素材とし、正面の底縁に鋸歯状の刃部が施されている63に分かれる。31はつまみ状の基部と鋸歯状の刃部を有

#### 4 出土遺物

する底縁とからなり、石匙状を呈する。一方の63は、正裏面の両側縁に小型で不連続な二次加工が施されている。石材はいずれも頁岩である。

##### D類 (64~66)

法量により分類した。横長剥片を素材とし、長さ6.5cm、幅4.3cmと大型の64と、縦長剥片を素材として、長さ4.0~4.5cm、幅2.1~3.1cmと小型の65・66がある。いずれも折れ面を利用して、片側縁にのみ二次加工が施されている。石材は64・65が頁岩、66は緑色凝灰岩である。

##### E類 (67・68)

2点出土している。長さ6.1cm、幅6.6cmと大型で、抉り部に急角度の剥離が不連続に施された67と、長さ3.2cm、幅2.6cmと小型で、抉り部には小型で急角度の剥離が連続的に施された68がある。石材は67が凝灰岩、68は頁岩である。

##### F類 (33~35・69~74)

長方形を呈する34・35・69・70と、先端が尖る33、長さとの幅の差がさほど無く、方形に近い71・72・74がある。33・34・69・70は縦長剥片を素材としており、側縁にのみ二次加工が施されている。一方の71~73は、同じく縦長剥片を素材とするが、大型で浅い剥離を施した後に、小型で不連続な二次加工が施されたものが多い。横長剥片を素材とした35は、底縁の両面に二次加工が施されている。石材は33が鉄石英、34・35・69・70・74が頁岩、71・72が流紋岩である。

##### 分類不可 (75・76)

上記の分類に当てはまらないものを一括した。75は、尖頭器状の鋭利な尖端部を有するものである。正面の右側縁には折れの後、二次加工が施されている。76は縦長剥片を素材とし、正面の右側縁の両面に大型で浅角度の二次加工が施されている。石材はいずれも頁岩である。

#### (10) 礫器 (77)

1点のみ出土している。幅3.2cmと薄手の礫を素材とし、両面に加工が施されている。底縁は両刃となるが、抉れ部が作り出された側縁には裏面のみ刃部が形成されている。長さ9.2cm、幅6.8cmと大型で、石材は頁岩である。

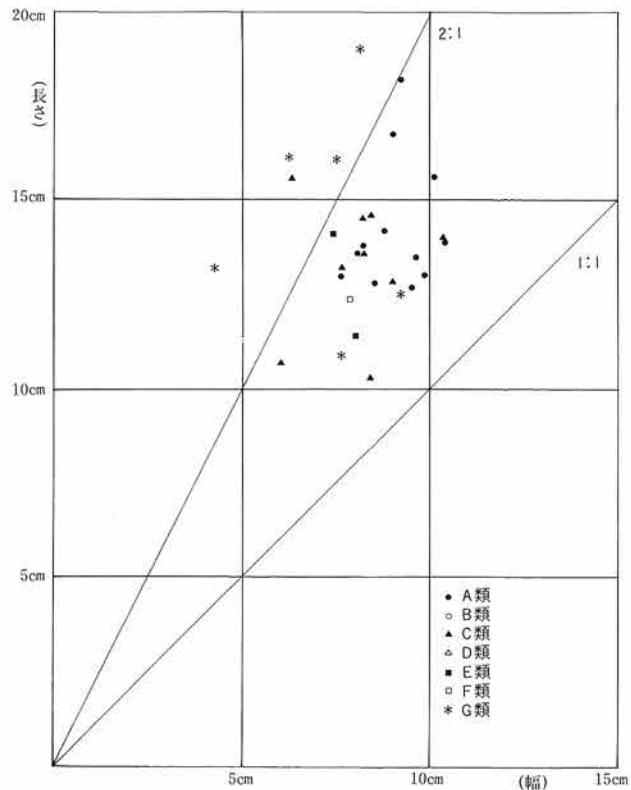
#### (11) 磨石類 (4~7、29・30、36、78~90)

A類(磨痕のみ)、C類(磨痕+凹痕)、E類(凹痕のみ)、F類(凹痕+敲打痕)、G類(敲打痕のみ)が出土している。

##### ・A類 (6・29・78~82)

磨痕が正裏面のいずれかに認められる1類(29・78・79)、側面にのみ認められる2類(6・80~82)がある。

このうち1類は、両面に磨痕が認められる29・78と、片面にのみ認められる79がある。79には、磨痕がある面にタール状の付着物が認められる。78のように破損品も含まれるが、長さ11.0~



第24図 猿額遺跡出土の磨石類長幅図

18.4cm、幅7.5~9.9cm、厚さ4.2~5.4cmである。石材はいずれも安山岩である。

・C類 (4・7・83~85)

磨痕が正裏面、敲打痕が端部に認められるC1-a類 (83・84)、磨痕が正裏面、敲打痕が側面に認められるC1-b類 (4)、磨痕が側面に、敲打痕が端部に認められるC2-a類 (7・85)がある。

このうちC1-a類は、磨痕が正裏面のうち片面に、敲打痕が下端部のみ認められる83と、磨痕が正裏の両面に、敲打痕が上下両端に認められる84に細分が可能である。一方のC1-b類である4は、正裏面の両面に磨痕が認められ、うち片面にはタール状の付着物が認められる。長さ10.3~15.6cm、幅6.3~8.4cm、厚さ3.0~5.5cmで、石材は7・81・83は安山岩、4・82・85は花崗岩、84が砂岩である。

・E類 (86・87)

2点出土しているが、いずれも正裏面の両面に凹痕が認められる。各面に凹痕が1か所認められる86と、2か所認められる87がある。石材は86が砂岩、87は花崗岩である。

・F類 (5)

わずかに1点のみの出土である。正裏面の両面に凹痕が、片側縁にのみ敲打痕が認められる。凹痕は比較的広範囲に及び、凹痕がある他の磨石類とは異なっている。長さ12.4cm、幅7.6cm、厚さ3.0cmで、石材は安山岩である。

・G類 (30・36・88~90)

端部にのみ敲打痕が残るG a類 (30、88~90)が多く、端部と側縁に敲打痕が残るG c類は1点のみ (36)である。G a類の使用痕は形状が異なっており、細分が可能である。端部の一側縁に残る88、端部の全面に残る30・89、端部中央から一側縁に残る90に分かれる。一方のG c類は、端部に残る敲打痕も中央から一側縁に残るタイプである。形態が円柱状の88・89と、厚味のない90がある。石材は30・36が安山岩、88は砂岩、89は閃緑岩、90は頁岩とバラエティーに富む。

(12) 石 皿 (91~93)

半損品を1点含むが、いずれも無加工のものであり、使用面・縁・掃き出し口の作り出しは行われていない。長さ41.4cm、幅29.5cm、厚さ8.2cmと大型の92と、半壊しているが、現状で長さ25.9cm、幅14.8cm、厚さ6.0cmと中型の93がある。この他、磨面が2か所あり、長さ67.6cm、幅48.8と特に大型の91を石皿に含めた。いずれも被熱の痕跡は認められない。石材は91・93が安山岩、92が砂岩である。

(13) 搬入礫 (96)

タール状の付着物が認められるもののみ図示した。正裏面のうち片面の右側縁に多量に付着する。長さ18.5cm、幅17.3cm、厚さ4.7cmで、石材は安山岩である。

(14) 剥 片 (1・2、8~26)

1号フラスコ状土坑 (1・2)、4号土坑 (8~26) から出土したものを図示した。

前者は2点出土しており、いずれも縦長剥片である。石材は頁岩で、接合が可能である。共に自然面が

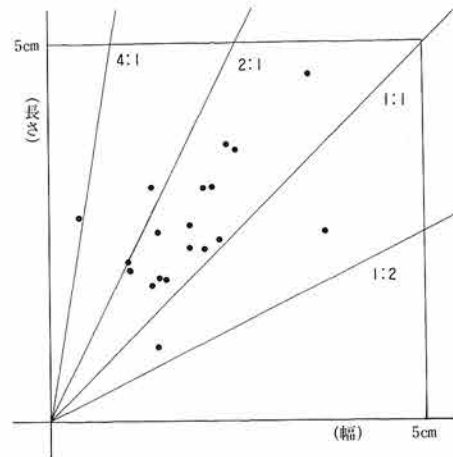
|        |          |
|--------|----------|
| A 1類   | 3 (8.8)  |
| A 2類   | 7 (20.6) |
| A 3類   | 3 (8.8)  |
| A類総計   | 13(38.2) |
| B 1類   | —        |
| B 2類   | —        |
| B 3類   | —        |
| B類総計   | —        |
| C 1 a類 | 1 (2.9)  |
| C 1 b類 | 2 (5.9)  |
| C 1 c類 | —        |
| C 2 a類 | 4 (11.7) |
| C 2 b類 | —        |
| C 2 c類 | —        |
| C 3 a類 | 2 (5.9)  |
| C 3 b類 | —        |
| C 3 c類 | —        |
| C類総計   | 9 (26.5) |
| D 1 a類 | —        |
| D 1 b類 | —        |
| D 1 c類 | —        |
| D 2 a類 | —        |
| D 2 b類 | —        |
| D 2 c類 | —        |
| D 3 a類 | —        |
| D 3 b類 | —        |
| D 3 c類 | —        |
| D類総計   | —        |
| E類     | 2 (5.9)  |
| F a類   | —        |
| F b類   | —        |
| F c類   | 1 (2.9)  |
| F類総計   | 1 (2.9)  |
| G a類   | 7 (20.6) |
| G b類   | —        |
| G c類   | 2 (5.9)  |
| G類総計   | 9 (26.5) |
| H類     | —        |
| 総計     | 34       |

第7表 猿額遺跡出土の磨石類組成表

残る。1は長さ4.7cm、幅3.1cm、2は長さ3.6cm、幅2.9cmと小型である。

一方、4号土坑出土からは22点の剥片が出土した。石材はメノウで、同一母岩と考えられるが、接合可能なものはわずかに26と27のみである。1号フラスコ状土坑出土の剥片に比して、特に小型のものが多い。

縦長剥片を素材としたもの（8～16、20・21・24～26）と、横長剥片を素材としたもの（17～19、22、23）がある。長さ・幅が5cm以上のものはない。長さが3cm以上のもの（8・9・10・12・14・15・26）が約32%、2～2.9cmのもの（11・13・16・19・21・23・25・28）が約36%、2cm未満のものが32%とほぼ同様な比率である。



第25図 猿額遺跡4号土坑出土の剥片長幅図

(15) 石核 (94～95)

五丁歩分類 [高橋保雄1992] では94が2類、95が3類に属する。94は原石の1/2以上が残存する。一方の95は原石の1/2以上しか残存していない。いずれも石材は頁岩で、自然面を残す。

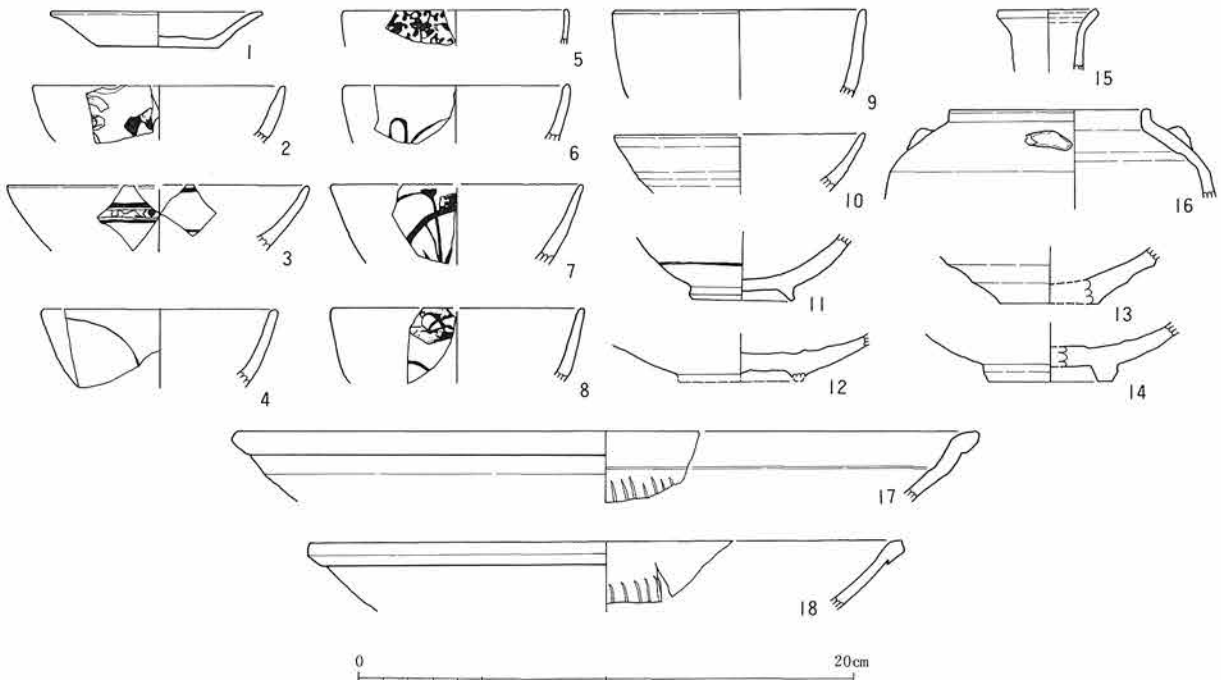
C 中・近世 (第26図-1～18、写真図版88)

出土点数は約30点であるが、細片が多い。また時期的にもまとまりに欠ける。灯明皿 (1)、碗 (2～14)、小瓶 (15)、壺 (16)、すり鉢 (17・18) がある。肥前系陶磁が最も多く (2～8・11～13)、その他には京焼風陶磁器 (9)、灯明皿 (1) などがある。

・皿 (1)

1は灯明皿である。口径約8.5cm、器高1.4cm、底径約4.8cmで内外面に油が付着する。

・碗 (2～14)



第26図 猿額遺跡出土の中・近世陶磁器



残存率が低いことから明確ではないが、口縁部はほぼ直立して立ち上がるものが多い。2～8・11・13は肥前系陶磁である。このうち2は陶器で、11と同一個体の可能性が高い。残存部には植物文様が施されている。文様は外面にのみに施されたものが多く、内面に文様が残るのは3のみである。また植物文が多く、連続文は3の外面に施されているにすぎない。なお、3の内面に残る文様は、口縁部上端と下端の横線のみである。文様は細片が多いことから明確でないが、5は菊唐草文、7は蚊屋吊草文であろうか。

京焼風陶磁器の9は身が深く、口縁部はほぼ直立して上方に伸びる。10は内面及び口縁部外面端部に銅緑釉が施されている。14の内面は蛇の目釉剥ぎが行われている。

#### ・瓶・壺 (15・16)

15は小瓶で、口径約4cmである。口縁部には鉄釉が付着する。16は短頸壺で、体部外面上位には把手が貼付されている。口径約8cmで、内外面には黒色の鉄釉が厚く付着する。

#### ・すり鉢 (17・18)

いずれも口縁部外面が折り返されて複合状を呈する。17は卸目の直上に横位の沈線が施されているが、18は横位の沈線を欠く。残存率が低いものの口径は17が約30cm、18は約24cmである。

年代の比定は困難であるが、1の灯明皿は16世紀代、底径が小さく口縁部低位に釉の付着しない11、見込み釉剥ぎが行われている12・14、5のように型紙刷りが行われている染付は18世紀初頭と思われる。また17・18は、口縁部の形態や卸目から18世紀前半、2・11などは18世紀末ころであろうか。

## 5 小 結

本遺跡の特徴として、大木5～6式の土器群が比較的まとまって出土したことがあげられる。大木5～6式土器は、これまで県内の北部の山間地を中心に数遺跡で報告例があるものの〔小野ほか1993、田辺1994〕、数量的には少ない。本遺跡出土例は残存率が高いこと、調査区下段の北側から出土している点や、沼沢火山灰を間層とした上下二面の包含層から出土している点も重要であろう。層位的に分かれることや分布にまとまりが認められることから特に貴重な例と考えられる。

遺物は、①層位的に沼沢火山灰とII層が混在した遺物集中地点からの出土土器（第19図）、②沼沢火山灰の堆積が認められる地点でのV層出土土器（図版24-1～3、13～20）、③同じく沼沢火山灰層が堆積した地点でのII層出土土器（第18図）、④沼沢火山灰層が堆積していない地点でのII層出土遺物（図版24-5、図版25-21・26・31・34・37）に分けられる。このうち③・④は保留部分を残すが、層位的には②が最も古く、③が最も新しい時期の所産となろう。②は大木6式でも古段階、③は一部大木7式に入るものもあろうが（図版26-63）、おおむね大木6式でも新段階の所産と考える。

これに対し、④の中には大木5式の範疇で理解されているもの（図版25-21）がある。また大木7式以降のものが含まれるなど、時期幅を含んでいる。また①は多少の混入は比定しえないものの、比較的時期幅がなく、一括性が高い土器群と考える。大木5式の範疇で理解できるものが存在しない点、また純粋なII層出土土器でないことから、大木6式でも古段階と考える。

土器の出土量が比較的多く、また復元率が高いにも係らず、遺構は土坑が中心であり住居跡を確認するにはいたらなかった。黒色土であるII層内で掘り込みが完結している可能性も高いが、II層中で焼土が確認できなかったことから、居住域からやや離れた地点という想定も可能である。遺物の分布が調査区下段では中央～北側に集中することからすると、遺跡は更に北側に広がる可能性が高い。

## 第Ⅶ章 中 棚 遺 跡

### 1 調査の概要

#### A 調査地の現況

阿賀野川の左岸、幅約110mの段丘上（標高95m～99m）に位置する。この段丘は更に南北に伸びており、遺跡は北側に向かって伸びると考える。東西を小谷により開析されており、この小谷の南東側に猿額遺跡が位置している。遺跡の立地する段丘は南東に向かって傾斜しているが、今回の調査範囲はこの緩傾斜の谷際に立地している。

調査以前は杉の植林地として利用されていたという。調査区中央を南北にかけて林道が築かれており、一部改変されているが、それ以外は概して旧状をとどめていた。

#### B 調査方法

##### (1) 基本層序の確認

第一次調査の結果を基に、基本層序の確認を行いながら調査を進めた。東西のセクションベルトはCラインに、南北のセクションベルトを4ラインと7ラインに設定して土層の堆積状況を確認した。

##### (2) 包含層の掘削

第二次調査対象面積は約3,200㎡であった。しかし第一次調査が実施できなかった調査区西部は、遺物の出土状況を検討しながら掘削を行い、調査範囲を再度確認した。その方法は小グリッドに合わせて調査区西側～最西端（9ライン～11ラインまで）に及ぶ30mの長さ（2m×30m）の試掘坑を設定して、人力で掘削を行う。この結果を基に、遺物・遺構が確認された9グリッドまでの約1,800㎡に対して、全面掘削を行うこととした。

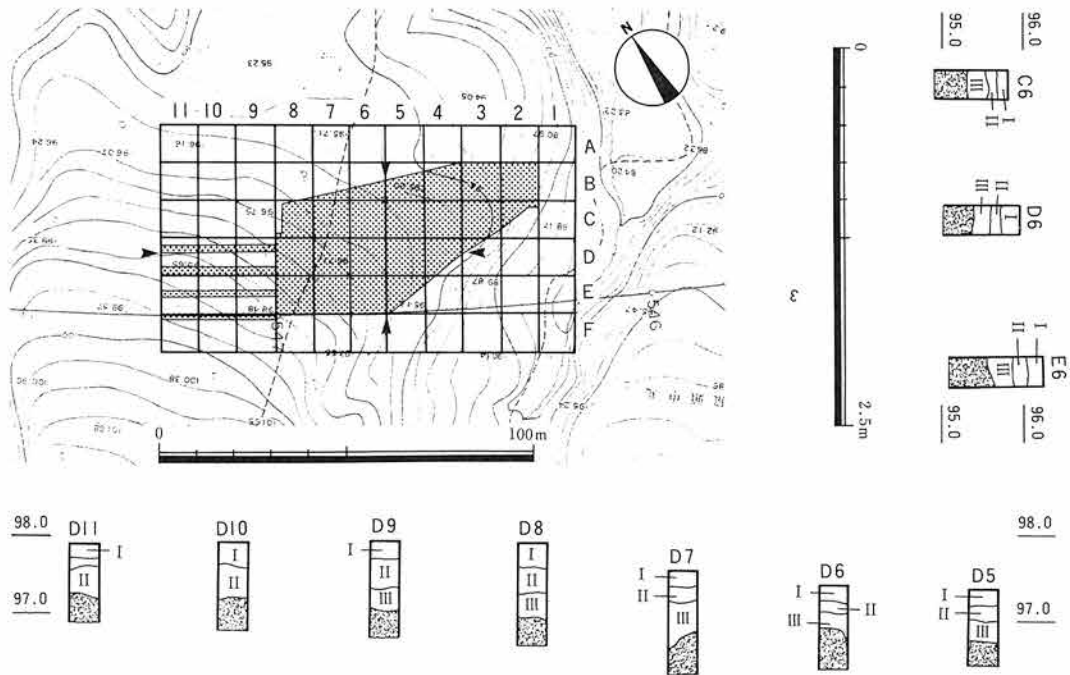
包含層の掘削は層序・小グリッド（2×2m）ごとに行ったが、遺物が特に集中して検出された地点がないことから、ドットなどは落としていない。

##### (3) 遺構の確認

基本的には包含層掘削ののち、地山（第Ⅲ層）で行った。包含層掘削中に遺物が集中して検出された5号土坑のみ、Ⅱ層中で確認している。

#### C グリッドの設定

10m方眼とし、調査区全域をカバーできるように設定した。基線は道路法線に基づくSTANo.547とSTANo.548を結ぶラインを基線X軸、これに直交するラインをY軸とし、これに基づいて10m方眼を組んだ。おおよそX軸が東西方向、Y軸が南北方向である。



第27図 中棚遺跡の土層柱状図

## 2 層序と遺物の出土状況

### A 層序 (第27図)

遺跡は同一丘陵上に位置することから、層位についてもほぼ同様の内容を呈している。基本層序は以下のとおりである。

- I層 暗褐色の腐植土層で、粘性・しまりに欠ける。厚さ15cm～30cmである。中・近世の陶磁器片・古銭が若干出土している。
- II層 暗茶褐色の腐植土層で、やや粘性を持つが、しまりに欠ける。厚さ20cm～30cmである。地点によりやや色調が異なる。縄文時代の遺物包含層である。標高95m以下と本調査区内で低い地点に、II層とIII層の間層として淡黄褐色土層が堆積している。これをII b層とした。
- III層 黄褐色を呈する粘質土で、本遺跡の地山である。同じ黄褐色土層でも標高の低い地点ではやや明るめであるが、標高の高い地点では酸化が進んでいるためか、暗黄褐色を呈している。

### B 遺物の出土状況

出土遺物は土器・石器（剥片類を含む）を合わせて平箱約10箱である。このうち遺構から検出されたものはわずかで、ほとんどが包含層からの出土である。

土器・石器ともほぼ同じような分布状態を示す。出土総数は多くないが、東側に偏る傾向にあり、第一次調査を行った西側、D・E・F-9～11グリッド付近の遺物量は極端に少ない。遺物が比較的多く出土した調査区中央～東側では、さほど集中した箇所がないものの、わずかに北側が多い傾向にある。また前述の通り遺構に伴う遺物は少ない。このうち図示しえたものとなると更に数は限定される。

## 3 遺 構

### A 概 要

風倒木痕・ピットを除いた遺構は、土坑4基・フラスコ状土坑1基、集石土坑4基である。遺構の確認面は4号土坑がII層である以外は、いずれもIII層（地山）である。時期を明確にし得るのは、覆土上層から縄文晩期の土器が出土したフラスコ状土坑のみである。その他の遺構は出土遺物から時期を推定し得ないが、縄文前期末葉の包含層が上部に堆積していること、覆土のあり方などから縄文前期末葉ほどの所産と思われる。

遺構の分布であるが、さほど規則性は認められない。大きくは調査区東部の緩傾斜地で1・3号土坑、1号集石土坑、調査区中央～東部にかけて3・4号土坑、2号集石土坑が、調査区南西部において3・4号集石土坑という傾向を指摘しえる程度である。

### B 各 説

#### (1) 土 坑 (図版35)

1号土坑 北東部の平坦部に位置し、5m南側に2号土坑、8m南東部には1号集石土坑がある。平面形は隅丸方形を呈し、長径53cm・短径40cm・深さ約25cmである。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、断面形は箱形で底部は平坦である。覆土は4層に分けられるが、遺物は検出されなかった。

2号土坑 最東部の斜面上に位置し、5m北側に1号土坑、5m東側には1号集石土坑がある。斜面上に位置することから南東部上面は大きく削平されており、旧状をとどめてはいない。平面形は円形を呈し、長径90cm・短径80cm・深さ20cmである。壁は緩やかに掘り込まれており、断面形は皿形で底部は平坦である。覆土は4層に分けられる。3層から縄文土器が出土したが、細片のため時期を明確にしえない。

3号土坑 最東部の斜面上に位置し、4m北西には4号土坑がある。2号土坑と同じく斜面上に位置していることから、上面はかなり削平されている。平面形は長楕円形を呈し、長径65cm・短径40cm・深さ12cmである。壁は特に緩やかに掘り込まれており、断面形は皿形で底部は平坦である。覆土は2層に分けられ、底部からわずかに浮いた状態で搬入礫が1点出土している。

4号土坑 中央からやや西側の平坦部に位置する。上面が大きく削平されており、残存状況は不良である。断ち割りによる平面形の確認では長楕円を呈し、長径約75cm・短径約50cm・深さ約20cmである。残存する壁は緩やかに掘り込まれており、断面形は皿形を呈する。覆土は単層で、中棚遺跡の基本層序第II層と同一である。遺物は覆土最上面から粗割状態の頁岩剥片が集中して10点出土している。いずれも同一母岩で、3点が接合可能なことから、粗割ののち埋納したものとされる。

#### (2) フラスコ状土坑

中央からやや東側の平坦部に位置し、4m南東には3号土坑がある。一部、壁が崩落しているものの、残存状況は概して良好である。平面形は確認面が円形であるのに対し、底面は長楕円形を呈している。確認面で130cm×123cm、底面では155cm×125cmで、深さ87cmである。断面形は壁上部が崩落しているものの、フラスコ状を呈し、坑底は平坦である。覆土は17層に分けられ、1～6層にかけて縄文土器片・石器剥片が出土している。覆土のあり方・出土遺物から晩期中葉頃の所産と思われる。

## (3) 集石土坑

1号集石土坑 最東部の斜面上に位置し、5m西には2号土坑がある。斜面上に位置することから、上部はかなり削平されており、旧状はとどめていない。平面形はほぼ円形を呈し、長径43cm・短径37cm・深さは13cmである。壁は比較的緩やかに掘り込まれており、断面形は皿形に近い。底部は平坦であるが、南東部にむかい緩やかに傾斜している。覆土は5層に分けられるが、特に3層で炭化物が多く確認された。上面が大きく削平されていることから明確にしえないが、礫は径10cm程のものと径5cmほどのもの2種類を基本とし、約10点強が検出された。

2号集石土坑 中央の平坦部にほぼ単独で位置しており、半径10m以内に遺構は存在しない。1号集石土坑と同じく上面は削平されているものの、残存状況は概して良好である。平面形はほぼ円形を呈し、長径80cm・短径72cmで、深さ45cmである。壁は西側が急傾斜であるのに対し、東側は比較的緩傾斜に掘り込まれている。底部は凹凸が激しく、東側に向かいわずかに傾斜する。覆土は5層に分けられるが、特に3層で炭化物が多く確認された。礫は径20cm程のものを最大にして、約150点程検出された。

3号集石土坑 西側の平坦部にほぼ単独で位置しており、半径10m以内に遺構は存在しない。礫の散布範囲は3mに及び、上面はかなり削平されている。平面形はほぼ円形を呈し、径約170cm程である。断ち割りによれば、断面形は皿形を呈し、底部は凹凸が激しい。覆土は単層であり、炭化物は確認しえなかった。礫は径25cm程のものを最大とし、約100点検出されている。礫以外の出土遺物として、集石確認面から縄文土器片が検出されたが、細片のため時期を明確にするまでには至らなかった。

4号集石土坑 西側の平坦部にほぼ単独で位置しており、半径10m以内に遺構は存在しない。上面がわずかに削平されているものの、残存状況は概して良好である。平面形は楕円形を呈し、長径92cm・短径82cm・深さ40cmである。壁は比較的緩やかに掘り込まれており、底部は平坦である。覆土は5層に分けられるが、特に3層で多量の炭化物が確認された。礫以外の出土遺物は検出されなかった。礫は最大25cmのものを使用しており、1層上面を中心に約100点強が確認されている。

この他の遺構として、小ピット・風倒木痕がある。このうち后者は調査区のほぼ全域から約10基が確認されている。遺物が確認されたものが皆無であり、時期を確定し得るものは存在しない。覆土から推定すると、北東部に倒れたものが主体となる。

## 4 出土遺物

中棚遺跡で検出された遺物は縄文時代前期末葉を中心に晩期初頭、中・近世にわたり、土器、石器・剥片類を含めた総数は平箱で10箱に及ぶ。これらの出土状況は前述（第VII章第2節）のとおり、大半が遺物包含層からの出土で、遺構に伴うと判断されるものはごくわずかであった。出土数も少ないこともあり、フレークが集中的に出土した4号土坑以外は遺構出土と包含層出土遺物を分けず、所属時期（土器）及び器種（石器）別に分類して報告する。

## A 縄文土器（図版36-1～18、写真図版96）

前期末葉～中期前半のものが主体で、前期前半の繊維土器、晩期中葉の土器がそれぞれ1点存在する。小破片が多く器形を推定しえるものはわずかである。また文様観察が不可能なものも多く、特に摩滅の著しい繊維土器は図示しえなかった。分類に際しては口縁部が残存するものを基本とし、時期により大別し

た。また、必要に応じて器形・文様構成により細分している。各群の概要は以下の通りである。

第Ⅰ群土器 …… 前期末葉～中期以前の土器（大木6式～7式又はその併行期が主体）

第Ⅱ群土器 …… 晩期前半（大洞B式）

(1) 第Ⅰ群土器（1～17）

前期末葉～中期初頭の大木6式～7式及びその併行期を一括して本群とする。出土点数は最も多い。細片が多いことから、文様により細別を行った。

a類 (1)

口縁部が複合状に肥厚し、上下幅の狭いものである。口縁部、底部のみ残存する。短い口縁部はわずかに外反して立ち上がる。文様は胴部に施された縄文のほか、口縁端部に2個1組の隆帯が付く。また頸部から体部にかけて爪形文の施された隆帯と、4条の波状沈線が施されている。

b類 (2～8)

口縁部に細い粘土紐を貼り付けて文様を描くものである。残存部では、貼り付けられた粘土紐に爪形文が施されたもの(3・5)と、そうでないもの(2・4・6～8)がある。

2・3は内湾して立ち上がった波状口縁部に、細い粘土紐が渦巻き状に貼り付けられている。4は複合状に肥厚した口縁部に粘土紐が梯子状に貼り付けられている。5は、内湾して立ち上がる口縁部に粘土紐が鋸歯状に施されている。7・8は直線的に外へ開く口縁部に粘土紐が平行して貼り付けられている。

c類 (9・10)

北陸系の範疇に属するものである。口縁部には平坦で幅広な面を持つ。わずかに内傾する口縁部に、上端部から4条の沈線が施されており、上から1・2条間には半隆起線文が残る。

体部片 (11～17)

出土点数が少ないため、分類は行わず一括して報告する。11は頸部～体部にかけての破片で、残存部には細い粘土紐が3条貼り付けられている。12は凹帯の他、細い粘土紐が3条施されている。体部最上位の破片と思われる。いずれも大木6式の所産であろうか。

13～16は体部下位の破片である。13・14は縦位に沈線が施されており、北陸系の範疇に属するものである。一方、これ以外は大木式の範疇で捉えられ、15には横位の綾線文が3条残る。一方、16には羽状縄文が施されており、他の一群とは時期的な隔りがある可能性もあろう。底部～体部中位が残存する17は底径10cm程で、残存部には1条の綾線文が残る。

(2) 第Ⅱ群土器 (18)

1号フラスコ状土坑の覆土上層から出土した注口土器1点のみである。体部上位の張り出しが強く、算盤玉状を呈する体部と、更に一段を有し内湾して立ち上がる頸部とからなる。口縁部と体部下位～底部を欠く。残存度が低いことから明確にし難いが、頸部と体部の境には1条の沈線が入る。また体部に施された文様は入組み三叉文と思われる。

## B 石器 (図版36～41-1～71、写真図版96～98)

検出された石器は製品・剥片を合わせ約229点に及ぶ。いずれ縄文時代の所産で、出土土器から前期末葉のものが主体と思われる。遺構からの検出例が少ないことから一括して分類し、記述する。

(1) 石 鏃 (12)

1点のみの出土である。凹基無茎鏃で、尖頭部側縁が直線的なタイプである。側縁・基部には二次加工



が施されているが、それ以外の加工が明瞭でないことから、未製品の可能性も考えられる。長さ2.2cm、幅2.0cmで、石材は頁岩である。

#### (2) 石 匙 (13~15)

3点出土している。いずれもつまみ部に比して、刃部の長い縦長石匙である。

13は長さ3.5cm、幅2.0cmと小型で、円形に近い刃部に、正面に大きく湾曲する先細りの小さなつまみを有する。これに対して、長さが2.2cmと特に小型の14は刃部を欠く。つまみの作り出しは13より明瞭である。15は長さ4.5cm、幅3.4cmと出土例中、最も大きい。刃部は正面・裏面共に底縁から両側縁のつまみ部にまで及んでいる。いずれも縦長剥片を素材としている。石材は、13が緑色凝灰岩、14はメノウ、15が頁岩である。

#### (3) ピエス・エスキーユ (楔形石器) (16)

1点のみの出土である。4個2対の刃部と両極剥離痕を持つタイプである。左右の剥離に対して、上下の剥離が明瞭でない。下端の片側縁が突出しており、折れの後にも使用したものとする。長さ4.5cm、幅3.6cm、長幅比5:4ほどである。石材は凝灰岩で、硬質で緻密な石材を使用している。

#### (4) 石 錐 (17・18)

2点出土している。いずれも横長剥片を素材としており、刃部からつまみ部にかけて大きく広がるものである。17は18に比して、錐部から次第に広がりつまみ部に至る。二次加工は錐部の正裏面に及ぶ。錐部には使用の痕跡が著しく残り、剥離が摩耗している。これに対して18は錐部が特に細く、つまみ部との区分が明瞭である。錐部付近は正裏面とも丁寧な二次加工が施されているが、裏面は片側縁のみ錐部まで二次加工が施されている。石材はいずれも凝灰岩である。

#### (4) 籠状石器 (19・20)

2点出土している。平面形は、基部から刃部にかけて大きく開く。19は片面にのみ刃部の形成が行われている。横長剥片を素材とし、裏面は両側縁に丁寧な二次加工が加わるものの、刃部には施されていない。20も同じく刃部への二次加工は正面のみで、裏面には施されていない。また刃部の形成が顕著でなく、厚手である。縦長剥片を素材とした点や、裏面の二次加工が片側縁のみの点など19とは異なった部分が多い。石材は19が頁岩、20が鉄石英である。

#### (5) 不定形石器 (21~44)

##### A類 (21・22)

縦長剥片を素材としたものが、2点出土している。21は鋭利な先端部が片面のみの二次加工で作られており、不定形石器D類との区分が困難である。二次加工は裏面には施されていない。22は二次加工が裏面にも施されているが、片側縁にとどまる。形態は、籠または羽子板状で、つまみ部と刃部に区分できる様にも見える。石材はいずれも頁岩である。

##### B類 (23~25)

いずれも縦長剥片を素材とする。23は正裏面とも片側縁にのみ二次加工が施されている。24は二等辺三角形の形態を呈し、二次加工が端部の正裏面に集中している。石匙の可能性もあろう。25は長さ9.5cmと大型で、正裏面とも節理面が残る。二次加工は正面が片側縁、裏面は頂部付近のみと狭い範囲に限定される。石材は23・24は頁岩、25は凝灰岩である。

##### C類 (26・27)

縦長剥片を素材としたものが2点出土している。刃部は中型で凹凸はさほど大きくはない。26は二次加工が正面にのみ施されている。鋸歯状となる片側縁以外にも、二次加工が底縁にも施されている。正面に

#### 4 出土遺物

は節裏面が残る。これに対して27は、粗い二次加工が両面の広範囲に及んでいる。鋸歯状の刃部が26ほど明瞭でない。石材は26が凝灰岩、27は鉄石英である。

##### D類 (28～31)

横長剥片を素材とするもの(28・29)と縦長剥片を素材とするもの(30・31)がある。28は二次加工が錐部状の先端部にのみ施されている。29は鋭利な先端部以外にも、二次加工は正面の片側縁から頂部にかけて、裏面はほぼ全周に近い範囲に施されている。中型の剥離が基本であるが、先端部には小型で急角度な剥離が施されている。

30・31は折れ面を加工して、鋭利な先端部が作り出されている。折れた部位の片面の片側縁にのみ急角度の二次加工が施されている。二次加工の範囲は先端部が中心で、それ以外の範囲では明瞭でない。石材は28が緑色凝灰岩、29～31は頁岩である。

##### F類 (32～34)

不定形石器の中で最も出土量が多い。横長剥片を素材としたもの(32)と、縦長剥片を素材としたもの(33・34)がある。二次加工が限定された範囲に施されたものが多い。

32は二次加工が正面の片側縁と裏面の底縁にのみ施されている。いずれの剥離も急角度である。底縁に二次加工が施された点は33も同様である。平面形態が三角形を呈しており、頂部はつまみ部状である。長さ9.5cmと特に大型の34は、正面の底縁から右側縁にかけて二次加工が施されている。石材は32・33が頁岩、34は凝灰岩である。

##### G類 (35・36)

縦長剥片を素材としたもの(35)と、横長剥片を素材としたもの(36)がある。35は長さ8.0cmと大型で、頂部に節理面が残る。二次加工は正面の右側縁に集中する。36は底縁にのみ施されており、それ以外の範囲は未調整である。刃部となる底縁から、基部にかけてはわずかにせばまり、平面形は台形を呈する。ピエスエスキューの可能性もあろう。石材はいずれも頁岩である。

##### H類 (37～39)

いずれも縦長剥片を素材としている。刃部は片側一側縁に交互に施されたものが多い。37は底縁が折れており、刃部が欠損した可能性が高い。38は正面に節理面が多く残る。39は38と同様に縦長であるが、底縁に刃部が形成されている。石材は37・38が凝灰岩、39は頁岩である。

##### 分類不可 (40～44)

不定形石器の分類(A類～J類)に当てはまらない石器を総称した。形態は豊富で、素材もまとまりに欠ける。

40は正裏面のほぼ全周に、浅角度の剥離が施されている。正面の右側縁を重視すれば、A類の範疇に属するものであろうか。41は剥離が正裏面の片側縁と、正面の頂部に集中している。頂部の剥離が急角度であるのに対し、側縁は浅角度で大型のものも認められる。側縁の形態は不定形石器のC類に類似する。42は、正面のほぼ全周に急角度の剥離が不連続に施されている。43は正面の両端部、裏面の底縁にのみ剥離が施されている。剥離の形状は統一性に欠け、大型の剥離も部分的に認められる。44は平面形が台形状で、底縁に小型の剥離が集中している。断面形は三角形を呈する。石材は40が鉄石英、41・43・44は頁岩、42は緑色凝灰岩である。

##### (7) 礫器類 (45)

1点のみ出土している。礫を素材としており、加工は両面に及ぶ。正面は底縁から両側縁にかけて、裏

面は片側縁に加工が施されている。長さとの比率はほぼ等しい。石材は凝灰岩である。

(8) 磨製石斧 (46)

定角式磨製石斧が1点のみ出土している。基部一端が欠損している以外は残存状況は良好で、正裏面と側面に稜を持ち、基部断面形が長方形または隅丸方形を呈する。刃形は片刃で裏面がやや膨らみを持つものに対し、正面が平坦な所謂弱凸強凹片刃である。長さ12.9cm、幅5.0cmで、石材は庄砕岩である。

(9) 磨石類 (47~67)

A類~D類, G類が出土した (第8表)。

A類 (47~53)

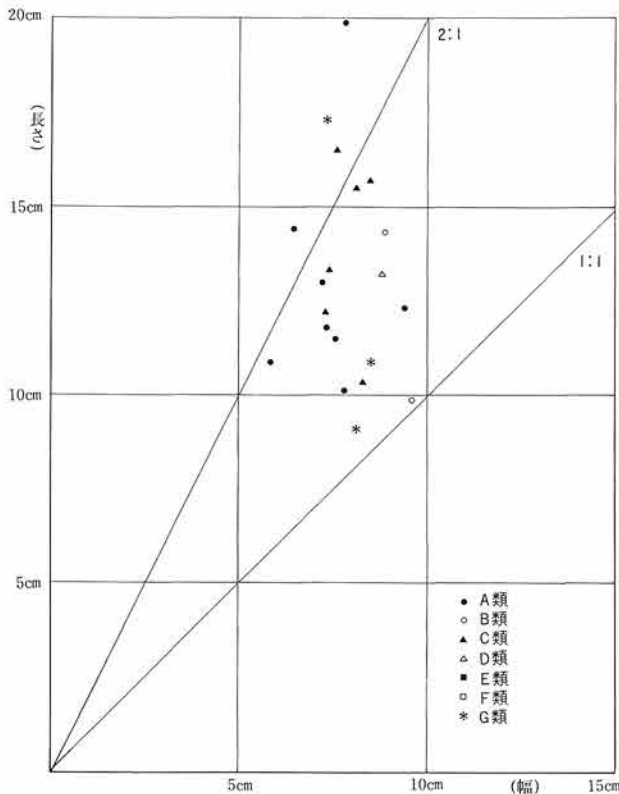
磨痕が側面に位置する2類 (47・49~51・53)、正面及び端面に位置する3類 (52) は、端部に位置する4類 (48) がある。

2類のうち47~50は、長さ約10~12cm、幅約6~8cmと円形又は長円形を呈する。これに対し53は、長さ19.9cm、幅7.8cmと細長の形状を呈する。3類の52は、長さ11.5cm、幅7.6cmと円形に近く、47~49と同様の形状である。4類の48は両端に磨痕が残る。こうした例は大坂上道遺跡・猿額遺跡・牧ノ沢遺跡では認められない。石材は47~49・52・53は安山岩、50は花崗岩、51は凝灰岩である。

B類 (54・55)

凹痕は正裏面に認められる他に、磨痕が正裏面に認められる1類 (54) と、磨痕が側面に認められる2類 (55) がある。

54の磨痕は、正裏の両面に認められる。また凹痕は中央には位置せず、



第28図 中棚遺跡出土の磨石類長幅図

|        |           |
|--------|-----------|
| A 1類   | —         |
| A 2類   | 8 (28.5)  |
| A 3類   | 2 (7.1)   |
| A 4類   | 1 (3.6)   |
| A類総計   | 11 (39.2) |
| B 1類   | 2 (7.1)   |
| B 2類   | —         |
| B 3類   | —         |
| B類総計   | 2 (7.1)   |
| C 1 a類 | —         |
| C 1 b類 | 2 (7.1)   |
| C 1 c類 | —         |
| C 2 a類 | 4 (14.3)  |
| C 2 b類 | —         |
| C 2 c類 | —         |
| C 3 a類 | 1 (3.6)   |
| C 3 b類 | —         |
| C 3 c類 | —         |
| C類総計   | 7 (25.0)  |
| D 1 a類 | —         |
| D 1 b類 | —         |
| D 1 c類 | —         |
| D 2 a類 | 1 (3.6)   |
| D 2 b類 | —         |
| D 2 c類 | —         |
| D 3 a類 | —         |
| D 3 b類 | —         |
| D 3 c類 | —         |
| D類総計   | 1 (3.6)   |
| E類     | —         |
| F a類   | —         |
| F b類   | —         |
| F c類   | —         |
| F類総計   | —         |
| G a類   | 4 (14.3)  |
| G b類   | 1 (3.6)   |
| G c類   | 2 (7.1)   |
| G類総計   | 7 (25.0)  |
| H類     | —         |
| 総計     | 28        |

第8表 中棚遺跡出土の磨石類組成表

#### 4 出土遺物

やや片側に偏る。これに対し55の磨痕は片側縁のみで、凹痕はほぼ中央に位置する。石器の形状と磨痕の位置は他類と同様に関連があり、正裏面に磨痕がある54は長さ9.9cm、幅9.7cmと円形に近く、側面に磨痕がある55は長さ14.3cm、幅8.9cmと縦に長い。石材はいずれも安山岩である。

##### C類 (56~61)

磨痕が正裏面に、敲打痕が側面に位置する1類(56・57)、磨痕が側面に、敲打痕が端部に位置する2類(58~60)、磨痕が正裏面と側面に、敲打痕が端部に位置する3類(61)がある。

1類のうち56・57の磨痕は片面にのみ認められる。一方、側面の敲打痕は、56が片側縁であるのに対し、57は両側縁に認められる。長さ約13.3~15.7cm、幅約7.4~8.5cmと縦長の形状を呈している。2類のうち58・59は磨痕が両側縁に、敲打痕は下端部にのみ施されている。60は上半を欠くことから明瞭でないが、58・59と同様に敲打痕は下端部に、磨痕は両側縁に位置するものであろうか。3類の61は、正裏面・側面の磨痕、端部の敲打痕とも片側にのみ認められる。4類は60が上半を欠くために明瞭でないが、長さとの比率はほぼ同様の傾向が現れている。石材は57・60が花崗岩である以外は、いずれも安山岩である。

##### D類 (62)

1点のみ出土している。磨痕が側面にのみ認められるD2類である。凹痕・敲打痕は正裏面・端部のそれぞれ片側にのみ認められるが、磨痕は両側面に残る。長さ15.5cm、幅8.1cmで、石材は安山岩である。

##### G類 (63~67)

残存部位が少ないものの、敲打痕が側面に位置するb類(63~66)と、側面と端部に位置するc類(67)がある。b類は敲打痕が片側縁に位置するもの(63~65)と、両側縁に位置するもの(66)がある。前者のうち上端部を欠く63は断面が三角形を呈しており、特殊磨石の可能性もある。64は敲打痕が側面の中央部に位置せず、側面中央から下端部付近に及んでいる。敲打痕が両側縁に位置する66は、敲打痕が特に広範囲に及び、正裏面にまで入り込んでいる。打製石斧・磨製石斧などの未製品の可能性もあろうか。c類の67は裏面の下端部及び、片側縁の上端を欠く。側面の敲打痕は64と同様に側面中央から下端部にまで及ぶ。略完形品は長さ9.1~17.3cm、幅7.3~9.1cmとまとまりにかける。石材は63・65が花崗岩、64・66が安山岩、67が頁岩である。

##### (11) 石 皿 (68~71)

4点出土している。いずれも縁・掃き出し口の作り出しや、彫刻などは施されていない。破損部位があるものの、大きさは3タイプある。大型品の68は半壊しているが、幅23.5cmで、使用面はわずかに凹む程度であり、被熱した痕跡が明瞭に残る。中型の69・70のうち完形の69は、長さ約30cm、幅約20cmで、使用面はおおむね平坦である。小型の71は大型・中型と異なり、楕円形もしくは円形に近い。長さ約12.7cm、幅約10.4cmで、使用面は大きく凹む。石材は68・70が花崗岩、69・71は安山岩である。

##### (12) 砥 石 (72・73)

2点出土しているものの、いずれも破損品である。このため法量については明確に示えないが、厚さから手持ち砥石と考えられる。厚く側縁に面取りされた72と、薄く扁平な73がある。石材は72は閃緑岩の可能性はあるが、明確でない。73は粘板岩である。

##### (13) 剥 片 (1~11)

4号土坑出土品を一括して報告する。石材はいずれも頁岩で、同一母岩と考える。自然面が残るもの(1・3~8・10)と、残らないものがある(2・9)がある。このうち接合しえたのは、1・4・7の3点である。接合資料はまず4を剥離し、その後1と7が切り離されている。縦長剥片(1~4・6・10)

と横長剥片（5・7～9）のものがある。これらはいずれも二次加工を欠く。

### C 中・近世陶磁、銭貨 （図版41-1～4、 写真図版98）

陶磁器はどれも細片である。1は青磁碗である。口縁部には蓮弁文をもつ。細線と剣頭とが蓮弁としての単位を意識して施されていることから、15世紀末～16世紀初頭の所産と考える。2・3は口縁部が大きく内湾して立ち上がる。2の外表面及び口縁部内面上端部には鉄釉が施されている。年代・系統は

不明である。3は伊万里焼の小型碗である。残存部では外面にのみ文様が残る。口縁上端部と下端部に横線により文様区画が作り出されている。区画内は草であろうか、植物文様が施されている。

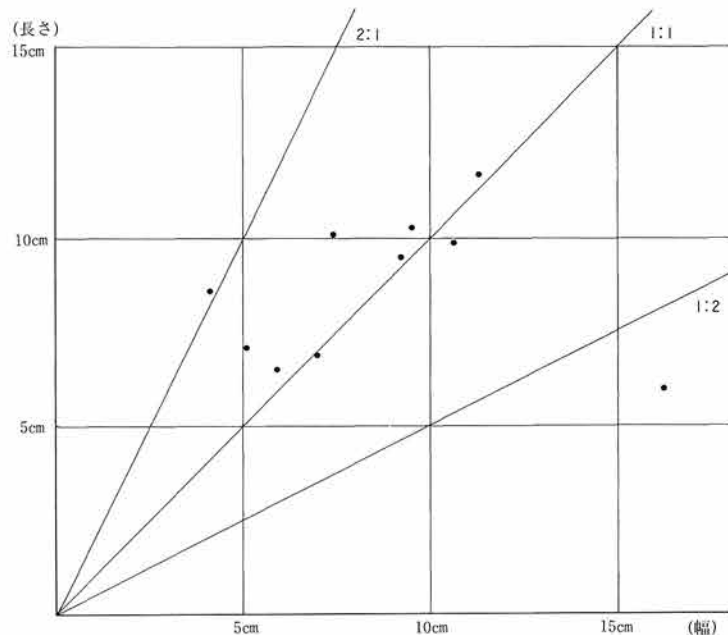
銭貨は寛永通宝が1点出土している。いわゆる「ス宝銭」で、直径2.2cmである。残存状況は良好であり、劣化は進んでいない。

## 5 小 結

調査面積の関係もあろうが、本遺跡は大坂上道遺跡・猿額遺跡に比して、遺構・遺物が希薄であった。また晩期の1号フラスコ状土坑以外は、伴出土器がなく遺構の時期が明確でないものが多い。

出土遺物のうち、土器は前期末葉～中期前半のものがごく僅か出土したにとどまる。前期末葉の土器群は東北南部系の大木式、中期前半は北陸系の新保・新崎式である。時期によって土器の系統が異なるのは大坂上道遺跡と同様である。こうした傾向は、福島県境に位置するという地理的な要因が最も大きいと考える。東蒲原郡という地域の歴史を検討する場合に、特に重要な点となろう。

土器の出土量に比して、石器は多数検出された。このうち4号土坑からは、同一母岩と思われる頁岩の剥片が10点出土しており、注目される。3点しか接合しえなかったが、大型の剥片が一括して埋納されていた点は重要であろう。石器又は未製品が一括して出土した遺跡には、南魚沼郡塩沢町十二木遺跡〔家田1988〕があり、石鏃の未製品を埋納した例として著名である〔鈴木1992〕。4号土坑出土の剥片も、単なる埋納ではなく、再び加工することを目的に一時的に埋納（保管）された可能性が高い。4号土坑出土の剥片は自然面が残りに、しかも大型の剥片である。このことから石材（原石に近い形か）の入手後、すぐに粗割され、そのまま埋納されたが、何らかの理由で廃棄された可能性が高い。10片を一単位として埋納したもののなか、埋納した後に幾つかが取り出されたのかは不明である。土坑の平面プランが明確でないことから、埋納後の掘り返しが行われた可能性も否定はしえない。いずれにせよ、石器の製作工程を検討する場合に貴重な資料となろう。



第29図 中棚遺跡4号土坑出土剥片の長幅図

註1) 報告書では「多分、袋に入れたものが放置され埋没したもの」とされている〔家田1988〕。



## 第Ⅷ章 牧ノ沢遺跡

### 1 調査の概要

#### A 調査地の現況

阿賀野川が北へ大きく蛇行する右岸の河岸段丘上に位置する。この付近の河岸段丘は4段に分けられ、本遺跡は上から2段目、幅約450mの段丘面に位置する。この段丘面はほぼ平坦で、南から北へ向かって30～40cm傾斜するのみである。遺跡付近の標高は59m前後で、阿賀野川との比高は約2mである。

調査直前まで畑地として利用されており、所々に芋の貯蔵穴が掘られているなど、後世の攪乱が多い。

#### B 調査方法

##### (1) 基本層序の確認

調査範囲が狭いこと、攪乱が多く旧状を保つ範囲が狭いと判断したことから、調査区内でセクションベルトは設定していない。層序の確認は調査区境界の壁で行った。

##### (2) 包含層の掘削

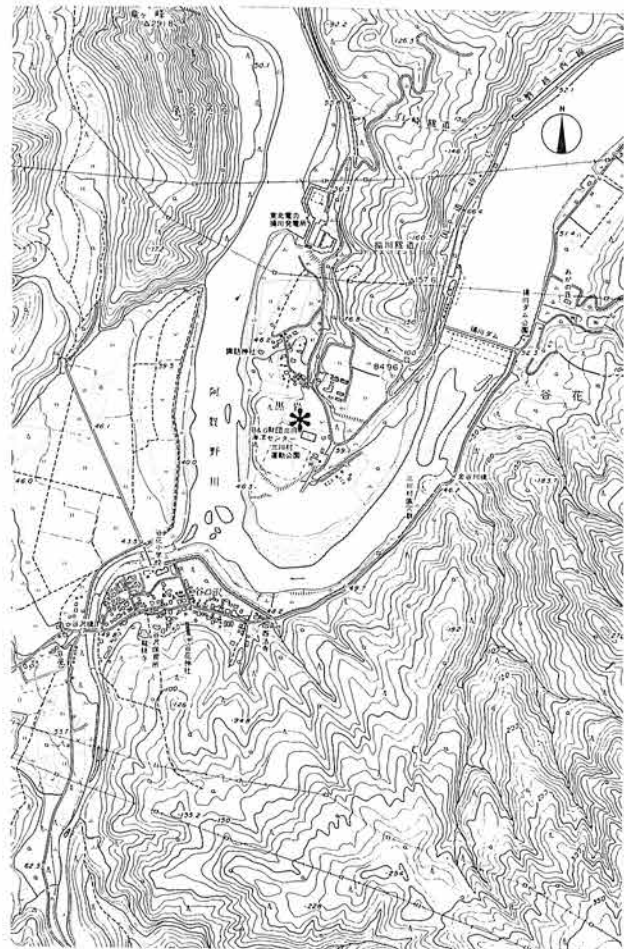
第一次調査では、地山直上層まで遺物がほとんど確認されていないことから、バックフォアにより慎重に除去した。その後、小グリッド(2×2)毎に人力によって掘削を行った。遺物の集中地点がないことから、ドットなどは落としていない。

##### (3) 遺構の確認

包含層掘削の後、地山(第Ⅳ層)でのみ行った。

#### C グリッドの設定

10mの方眼とし、調査区全域をカバーできるように設定した。グリッドの基線は道路法線のセンター杭に基づくSTANo.590+00とSTANo.590+20を結ぶラインを基線X軸、これに直交するラインをY軸とし、これらに基づいて10m方眼を組んだ。



第30図 牧ノ沢遺跡位置図  
国土地理院発行 1:25000「津川」平成2年

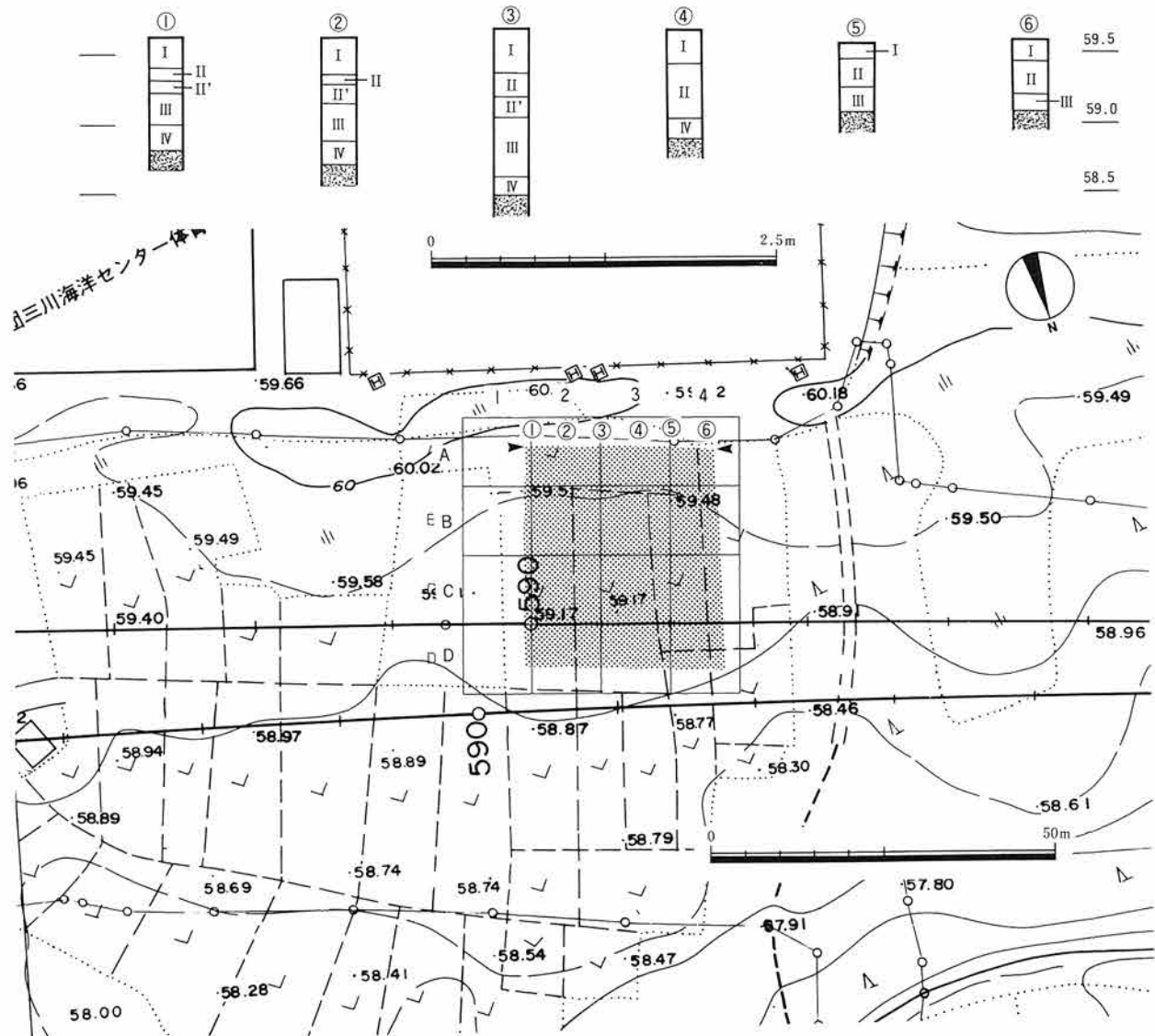


## 2 層序と遺物の出土状況

### A 層序

調査区内はほぼ平坦で、調査面積も1,000㎡と狭いこともあり、均一な土層の堆積状況を示している。調査区内の基本層序は下記のとおりである。

- I層 暗褐色の腐植土層で、やや砂質である。粘性・しまりに欠ける。ともに厚さは10~20cmである。
- II層 黒褐色の腐植土層で、I層と同じくやや砂質である。粘性・しまりに欠ける。厚さは20~80cmと幅がある。II層の特に厚いところでは、II層と同質で暗茶褐色土の層が、II層に挟まれて存在している。これはII'層と表す。南壁際中央部のA2-15、A3-11・12付近では地山が落ち込んでおり、II・II'層が厚く堆積していた。縄文時代後・晩期の遺物包含層である。
- III層 暗黄褐色の砂質土層である。粘性・しまりに欠ける。II層とIV層との漸移層で、厚さは10~20cmで



第31図 牧ノ沢遺跡の土層柱状図・グリッド設定図 (上:1/50, 下:1/1000)

日本道路公団新潟建設局 津川工事事務所作成 1:1000 昭和63年測定

### 3 遺構

ある。

Ⅳ層 河川をその成因とする、極めて均質な黄灰色の砂層で、本遺跡の地山である。

#### B 遺物の出土状況

118点の縄文土器片が検出されるにとどまった。遺構からの出土は皆無で、いずれも包含層・風倒木痕からの出土である。特にCラインからの出土が大半を占め、他ラインからの出土は散漫である。第一次調査で土器片が出土した土坑状の落ち込みは、調査の結果、2号風倒木痕であることが確認された。その他に、3・4号風倒木痕からも少量の土器片が出土している。

## 3 遺構

#### A 概要

牧ノ沢遺跡では土坑20基、風倒木痕5基が検出された。遺構別に見た分布の傾向は抽出し難いが、全体的に調査区の南東側に偏る傾向にある。各遺構の年代については、遺構からの出土遺物が皆無であることから明確にしえない。遺構確認面より上層から縄文土器が出土していることから、ここでは遺構の年代を縄文時代として、主な遺構について記述を行う。

#### B 各説（図版43）

ここでは残存状況が良好な土坑のみ記述を行う。

4号土坑 他の遺構とは距離をおき、東側に位置する。西側に少量の縄文土器片が出土した3号風倒木痕が隣接する。平面形は楕円形を呈し、長軸60cm、短軸48cm、深さ32cmで、断面形は上部が張り出した半円形である。覆土は2層に分けられ、上層から黒灰褐色砂質土、灰褐色砂質土である。

6号土坑 中央からやや南東部に位置し、北東側に少量の縄文土器片が出土した4号風倒木痕が隣接する。平面形は円形を呈し、直径56cm、深さ29cmで、断面形は西側がやや落ち込むものの断面形は半円形である。覆土は2層に分けられ、上層から黒灰褐色砂質土、灰褐色砂質土である。

7号土坑 中央からやや南東、1m程の距離をおいて6号土坑・8号土坑の中間に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸46cm、短軸30cm、深さ24cmで、断面形は半円形である。覆土は2層に分けられ、上層から黒灰褐色砂質土、灰褐色砂質土である。

8号土坑 南東側に位置し、1m北西に7号土坑、1m南西には9号土坑がある。平面形は円形に近い楕円形を呈し、長軸228cm、短軸204cm、深さ64cmで調査区内では最も大型の土坑である。断面形は皿形を呈する。覆土は3層に分けられ、上層から黒灰褐色砂質土、暗灰褐色砂質土、灰褐色砂質土である。

9号土坑 南東側に位置し、更に1m南東には8号土坑がある。平面形は楕円形を呈し、長軸38cm、短軸36cm、深さ24cmで、断面形は箱形である。覆土は2層に分けられ、上層から暗灰褐色土、灰褐色砂質土である。

10号土坑 南側に位置し、更に南側に11号土坑が隣接する。平面形は楕円形を呈し、長軸58cm、短軸40cm、深さ24cmで、断面形は箱形である。覆土は2層に分けられ、上層から暗灰褐色砂質土、灰褐色砂質土である。

11号土坑 南側に位置し、0.5m程おいて10号土坑・12号土坑の中間に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸65cm、短軸44cm、深さ28cmである。断面形は扁平な箱形で、底部は凹凸が激しい。覆土は2層に分けられ、上層から暗灰褐色砂質土、灰褐色砂質土である。

12号土坑 南側に位置し、西側には11号土坑が隣接する。平面形は楕円形を呈し、長軸50cm、短軸40cm、深さ24cmで、断面形は西側上部が張り出した半円形である。覆土は2層に分けられ、上層から暗灰褐色砂質土、灰褐色砂質土である。

13号土坑 南側に位置し、3m東には11号土坑がある。南側の一部が後世の攪乱により崩れている。平面形は楕円形を呈し、残存部において長軸56cm、短軸56cm、深さ21cmで、断面形は箱形で、底部は平坦である。覆土は2層に分けられ、上層から暗灰褐色砂質土、灰褐色砂質土である。

14号土坑 南側に位置し、1mおいて13号土坑・15号土坑の中間に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸56cm、短軸44cm、深さ23cmで、断面形は箱形である。覆土は2層に分けられ、上層から暗灰褐色砂質土、灰褐色砂質土（西側ではやや明るい色調）である。

15号土坑 南側に位置し、1m北東には14号土坑がある。平面形は楕円形を呈し、長軸76cm、短軸52cm、深さ28cmで、断面形は西側上部がやや張り出した半円形である。覆土は2層に分けられ、上層から黒灰褐色砂質土、灰褐色砂質土である。

16号土坑 東側の南壁近くに位置し、南側で17号土坑と接する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸132cm、短軸98cm、深さ21cmで、断面形は南側がやや落ち込んだ皿形である。覆土は3層に分けられ、上層から黒色砂質土、黒褐色砂質土、暗灰褐色砂質土である。

17号土坑 東側の南壁近くに位置し、北側で16号土坑と接する。平面形は楕円形を呈し、長軸44cm、短軸40cm、深さ30cmで、断面形は箱形である。覆土は3層に分けられ、上層から暗灰褐色砂質土、灰褐色砂質土、暗灰黄色砂である。

18号土坑 最南部に位置し、0.8m程おいて16号土坑と19号土坑の中間に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸46cm、短軸40cm、深さ23cm、断面形は箱形である。覆土は2層に分けられ、上層から黒灰色砂質土、暗灰褐色砂質土である。

19号土坑 調査区東の南壁近く、18号土坑と20号土坑の中間に0.8m程おいて位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸48cm・短軸38cm・深さ29cm、断面形は箱形を呈する。覆土は2層に分けられ、上層から黒灰褐色砂質土、下層が灰褐色砂質土である。

#### 4 出土遺物（図版44-1～22、写真図版104）

牧ノ沢遺跡で出土した遺物は118点と極めて少ない。また、いずれも縄文土器片で剥片を含めた石器類は1点も認められない。出土状況は第一次調査で検出された2号風倒木痕からの85点が大半を占め、他はC列を中心にI～III層から散発的に出土したものである。時期的には後・晩期が認められるが、文様から時期の詳細が判明する資料は少なく、多くは縄文施文のみや無文のものである。

1～3は縄文（LR）を地文とし、直線もしくは蛇行垂下する沈線で文様を描くもので、堀之内I式期に併行する。胎土には比較的大粒な砂粒を多量に含み、1・3の内面にはナデによる砂粒の移動が顕著である。4は口縁部が大きく開く波状口縁を有する深鉢で、三仏生式に特徴的なものである。口縁部下に無文帯をもち、以下体部にかけて数段の横位沈線を巡らし、これを縦位短沈線で区切る。体部下半から底

部と口縁部内面は、丁寧なナデ調整が施されている。胎土は細かい砂粒と海綿骨針を多く含む精良なもので、焼成も比較的堅緻である。5は短く外反する口縁部を有する鉢もしくは壺形土器であろう。口縁端部には細かいキザミを施し、頸部以下には縄文地（LR）に横位数段の沈線を巡らして1段おきに磨り消す。胎土には細かい砂粒を多く含み、焼成も堅緻である。晩期中葉（大洞C1式）の所産であろう。

6～21は縄文および櫛描文のみの粗製土器片である。6～10は口縁部で、器厚はいずれも比較的薄いものである。口縁部の形態は、やや内湾するもの（6・9・10）、直立するもの（8）、外反気味に立ち上がるもの（7）が認められる。9・10は形態や横走する縄文の特徴（細かいLR）から、同一固体と考えられる。11～18は縄文、19・20は櫛描文の体部片である。底部片の21は外傾しながら立ち上がる。底部付近まで縄文（LR）が施文されており、13と同一個体である。22は頸部片で、屈曲する小型の鉢もしくは壺形土器で、複節斜縄文を地文とし、頸部と胴部には数条の横位沈線を巡らす。頸部の沈線帯には工字文が施文される。胎土は緻密で、焼成も比較的良好である。内外面ともにタール状の付着物が認められる。晩期後葉（大洞A式）の所産であろう。

## 5 小 結

本遺跡は阿賀野川の右岸段丘上で、標高59m前後の平坦面に位置している。第一次調査結果では遺物の出土も限られたトレンチからのみで、極めて狭い範囲に限定された遺跡と考えられた。第二次調査の結果では、20基の土坑と118点の縄文土器片が検出された。遺構の分布状況を見ると、調査区南寄りのA列に比較的集中していることが分かる。しかし各遺構の規模に統一性は認められず、覆土中からの出土遺物も皆無であることから、個々の遺構の詳細な時期や性格を明確にするには至らなかった。遺物の大半はC列で出土しており、遺構分布との直接的関連性も認められない。出土遺物の時期を見ると、縄文時代後期中葉および晩期後半の土器が存在することから、遺構の構築時期もこれらの時期に求めることが可能であろう。

遺跡の範囲については、遺構分布状況から法線南側に本体が存在するとも思われるが、周辺の畑地での分布調査で採集遺物が全く認められなかった。このことから、集落跡などの大規模遺跡が存在する可能性は低く、第一次調査結果と同様に断続的に営まれた極めて小規模な遺跡であったものと判断される。

# 第IX章 自然科学の分析

古環境研究所

## 1 大坂上道遺跡の花粉分析

### A 試料と方法

花粉分析は、P地点より採取された1試料（II）について行った。試料は黒褐色粘土であり、植物遺体を多く含む。

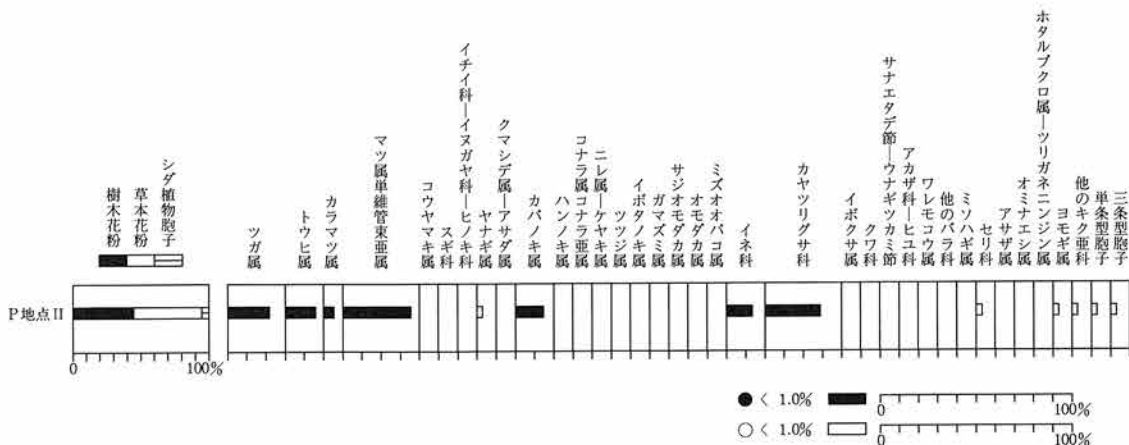
花粉化石の抽出は、試料2.64 gを10%水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離—傾斜法による粗粒砂除去とふるい選別—重液分離（臭化亜鉛を比重2.15に調整）による有機物の濃集—アセトリシス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分）の順に処理を施すことにより行った。

プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分攪はんした後スポイトで取り、グリセリンで封入した。

検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。

### B 結果

同定された分類群数は、樹木花粉が16、草本花粉が18である。これら花粉・胞子の一覧を表1及び図1に示す。図1に示された樹木花粉の出現率は、樹木花粉総数を基数とし、又、草本花粉の出現率は、花粉・胞子総数を基数として百分率で求めた。図表中で複数の分類群をハイフンで結んだものは、分類群間の区別が困難なものである。又、クワ科、バラ科は、樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。



第32図 大坂上道遺跡の花粉化石分布図

(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は総花粉・胞子数を基数として百分率で算出した)

## 1 大坂上道遺跡の花粉分析

| 和名                | 学名                                      | P地点II |
|-------------------|---|-------|
| 樹木                |   |       |
| ツガ属               | Tsuga                                   | 48    |
| トウヒ属              | Picea                                   | 36    |
| カラマツ属             | Larix                                   | 12    |
| マツ属単維管束亜属         | Pinus subgen. Haploxyton                | 76    |
| コウヤマキ属            | Sciadopitys                             | 1     |
| スギ属               | Cryptomeria                             | 1     |
| イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科   | T.-C.                                   | 2     |
| ヤナギ属              | Salix                                   | 3     |
| クマシデ属-アサダ属        | Sarpinus-Ostrya                         | 1     |
| カバノキ属             | Betula                                  | 27    |
| ハンノキ属             | Alnus                                   | 4     |
| コナラ属コナラ亜属         | Quercus subgen. Lepidobalanus           | 1     |
| ニレ属-ケヤキ属          | Ulmus-Zelkova                           | 1     |
| ツツジ科              | Ericaceae                               | 1     |
| イボタノキ属            | Ligustrum                               | 2     |
| ガマズミ属             | Viburnum                                | 1     |
| -----             |   |       |
| 草本                |   |       |
| サジオモダカ属           | Alisma                                  | 2     |
| オモダカ属             | Sagittaria                              | 2     |
| ミズオオバコ属           | Ottelia                                 | 1     |
| イネ科               | GRAMINEAE                               | 69    |
| カヤツリグサ科           | Cyperaceae                              | 138   |
| イボクサ属             | Aneilema                                | 1     |
| クワ科               | Moraceae                                | 1     |
| サナエタデ節-ウナギツカミ節    | Polygonum sect. Persicaria-Echinoeaulon | 1     |
| アカザ科-ヒユ科          | Chenopodiaceae-Amaranthaceae            | 1     |
| ワレモコウ属            | Sanguisorba                             | 2     |
| 他のバラ科             | Other Rosaceae                          | 1     |
| ミソハギ属             | Lythrum                                 | 1     |
| セリ科               | Umbrelliferae                           | 5     |
| アサザ属              | Nymphoides                              | 1     |
| オミナエシ属            | Patrinia                                | 1     |
| ホタルブクロ属-ツリガネニンジン属 | Campanula-Adenophora                    | 1     |
| ヨモギ属              | Artemisia                               | 7     |
| 他のキク亜科            | Other Tubuliflorae                      | 9     |
| -----             |   |       |
| シダ植物              |   |       |
| 単条型孢子             | Monolete spore                          | 7     |
| 三条型孢子             | Trilete spore                           | 5     |
| -----             |   |       |
| 樹木花粉              | Arboreal pollen                         | 217   |
| 草本花粉              | Nonarboreal pollen                      | 244   |
| シダ植物孢子            | Spores                                  | 12    |
| 花粉・孢子総数           | Total Pollen&Spores                     | 473   |
| -----             |   |       |
| 不明花粉              | Unknown pollen                          | 22    |

第9表 大坂上道遺跡から産出した花粉化石一覧表



同定された花粉化石のうち、樹木花粉では、マツ属単維管束亜属、トウヒ属、ツガ属といった針葉樹花粉と落葉広葉樹のカバノキ属が比較的多産する。ついで、針葉樹のカラマツ属や湿地林となりうるハンノキ属やヤナギ属を伴う。他に、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、イボタノキ属等を僅かに伴う。草本花粉では、カヤツリグサ科、イネ科が多産し、キク亜科、ヨモギ属、セリ科、ワレモコウ属等を低率ながら伴う。他に、オモダカ属、サジオモダカ属、ミズオオバコ属、イボクサ属、ミソハギ属、アサザ属等の水生植物を僅かに伴う。

### C おわりに

花粉分析の結果、樹木花粉ではマツ属単維管束亜属、ツガ属、トウヒ属が高い出現率を示した。従って当時の周辺植生は、このような冷湿地帯ないし亜寒帯性の針葉樹を主とするものであり、カバノキ属も比較的多産することから、カバノキ属を主とする落葉広葉樹も混在していたものであったと考えられる。一方、草本花粉ではカヤツリグサ科、イネ科が多産することから、これらが生育する湿地的環境があり、そこにはオモダカ属、サジオモダカ属、ミズオオバコ属、イボクサ属、ミソハギ属、アサザ属などの水生植物も生育していたであろう。更に、その周囲にはハンノキ属、ヤナギ属等からなる湿地林もあったと考えられる。

## 2 大坂上道の珪藻分析

### A はじめに

珪藻は10~500  $\mu$ m度の珪酸質の殻を持つ微小な単細胞藻類であるが、その生息範囲は海水から淡水域までと広く、更に湿った所ならば土壌、岩石あるいはコケの表面などにも生育する。珪藻は、種によってそれぞれ固有の生息域・生活形態を持っている。また、珪藻殻は珪酸質から形成されているため、堆積物中から化石として多く産する。このような珪藻の特質を利用することで、古環境特に水域での環境を復元するのに適している。ここでは、大坂上道遺跡の試料について、堆積時の環境復元を目的として、珪藻化石を検討する。

### B 試料および処理

試料はP地点の深度3.55~4.70mの黒褐色粘土層である。処理は以下の手順で行い、プレパラートを作成した。

- 〈1〉 試料から湿潤重量約200 gを取り出し、水を加えて攪拌した後上澄みを回収する。これに30%過酸化水素を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行う。
- 〈2〉 反応終了後、熱湯を加え、15分程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を3回ほど繰り返す。
- 〈3〉 ピーカーに残った残渣を、遠心分離器を使って濃縮する。
- 〈4〉 残渣から適量を取り、カバーガラスに滴下し乾燥させ、マウントメディアで封入し、プレパラートを作成する。作成したプレパラートは生物顕微鏡下1000倍で観察し、珪藻殻約200個体について同

| 分類群                       | 構造料   |      |     |     | 生活 P 地点 III | 4   |
|---------------------------|-------|------|-----|-----|-------------|-----|
|                           | 塩分    | pH   | 流水  |     |             |     |
| Coscinodiscus spp.        | M     | —    | —   | P   |             |     |
| Achnanthes lanceolata     | F-ind | Alka | Rhe | B   |             | 1   |
| A. minutissima            | F-ind | ind  | ind | B   |             | 7   |
| A. spp.                   | F-?   | ?    | ?   | B   |             | 2   |
| Anomoeoneis serians       | F-pho | Acid | ind | B   |             | 1   |
| Caloneis silicula         | F-ind | Aika | ind | B   |             | 1   |
| C. spp.                   | F-?   | ?    | ?   | B   |             | 1   |
| Cocconeis placentula      | F-ind | Aika | ind | F   |             | 3   |
| Cyclotella ocellata       | F-ind | Alka | Lim | P   |             | 16  |
| Cymbella aspeta           | F-ind | Alka | ind | R   |             | 1   |
| C. minta                  | F-ind | ind  | ind | B   |             | 5   |
| C. naviculiformis         | F-ind | ind  | B   | 2   |             |     |
| C. tumida                 | F-ind | Alka | Lim | B   |             | 1   |
| C. spp.                   | F-?   | ?    | ?   | B   |             | 6   |
| Diatoma hiemale           | F-ind | Alka | ind | B   |             | 5   |
| Diploneis ovalis          | F-ind | ind  | ind | B   |             | 2   |
| D. snbovalis              | F-ind | ind  | ind | B   |             | 1   |
| Enuotia pectinalis        | F-pho | Acid | ind | B   |             | 9   |
| E. praenpta               | F-pho | Acid | ind | T   |             | 1   |
| E. spp.                   | F-?   | ?    | ?   | B   |             | 2   |
| Fragilaria brevistriata   | F-ind | Alka | ind | P/B |             | 3   |
| F. leptostauron           | F-ind | Alka | Lim | P/B |             | 1   |
| F. pinnata                | F-ind | Ajka | ind | P/B |             | 5   |
| Frustulia rhomboides      | F-pho | Acid | Lim | B   |             | 1   |
| Gomphonema gracile        | F-ind | ind  | Lim | B   |             | 1   |
| G. parvulum               | F-ind | ind  | ind | B   |             | 4   |
| G. spp.                   | F-?   | ?    | ?   | B   |             | 5   |
| Hanerschia amphioxys      | F-ind | Alka | ind | T   |             | 15  |
| Melosira ambigua          | F-ind | Alka | Lim | P   |             | 14  |
| M. distans                | F-pho | Acid | ind | P   |             | 2   |
| M. granulata              | F-ind | Alka | Lim | P   |             | 15  |
| M. roeseana               | F-?   | ?    | ?   | T   |             | 1   |
| M. spp.                   | F-?   | ?    | ?   | P   |             | 3   |
| Navicula americana        | F-ind | ind  | Lim | B   |             | 1   |
| N. bacillum               | F-ind | Alka | ind | B   |             | 1   |
| N. contenta               | F-ind | Alka | ind | T   |             | 1   |
| N. mutica                 | F-ind | ind  | ind | T   |             | 2   |
| N. spp.                   | F-?   | ?    | ?   | B   |             | 3   |
| Naidinm iridis            | F-pho | ind  | Lim | B   |             | 1   |
| N. spp.                   | F-?   | ?    | ?   | B   |             | 1   |
| Nitxschia spp.            | F-?   | ?    | ?   | P/B |             | 1   |
| Pinnularia borealis       | F-ind | ind  | ind | T   |             | 4   |
| P. gibba                  | F-ind | Acid | ind | B   |             | 2   |
| P. globiceps              | F-ind | ind  | ?   | B   |             | 1   |
| P. viridis                | F-ind | ind  | ind | B   |             | 5   |
| P. spp.                   | F-?   | ?    | ?   | B   |             | 8   |
| Rhopalodia gibba          | F-ind | Alka | ind | P   |             | 3   |
| R. gibbenrula             | F-ind | Alka | ind | B   |             | 1   |
| Stauroneis phoenicenteron | F-ind | ind  | ind | B   |             | 1   |
| Stephanodiscus spp.       | F-?   | ?    | ?   | P   |             | 4   |
| Suriralia ovata           | F-ind | Alka | Rhe | B   |             | 1   |
| Synedra rumpens           | F-ind | ind  | ind | P   |             | 7   |
| S. varcheriae             | F-ind | Alka | ind | P   |             | 4   |
| S. spp.                   | F-?   | ?    | ?   | P   |             | 6   |
| Tabellaria fenestrata     | F-pho | Acid | Lim | P   |             | 2   |
| T. flocculosa             | F-pho | Acid | Lim | P   |             | 2   |
| 海水種                       |       |      |     |     |             | 4   |
| 海-汽水種                     |       |      |     |     |             | 0   |
| 汽水種                       |       |      |     |     |             | 0   |
| 淡水種                       |       |      |     |     |             | 199 |
| 計数した殻数                    |       |      |     |     |             | 203 |

## 凡例(適応性)

## 塩分濃度

M:海水種

M-B:海-汽水種

B:汽水種

F-phi:淡水-好塩種

F-ind:淡水-不定種

F-pho:淡水-嫌塩種

F-?:淡水-不明種

## pH

Acid:酸性種

ind:不定種

Alka:アルカリ種

?:不明種

## 流水

Lim:止水種

ind:不定種

Rhe:流水種

?:不明種

## 生活型

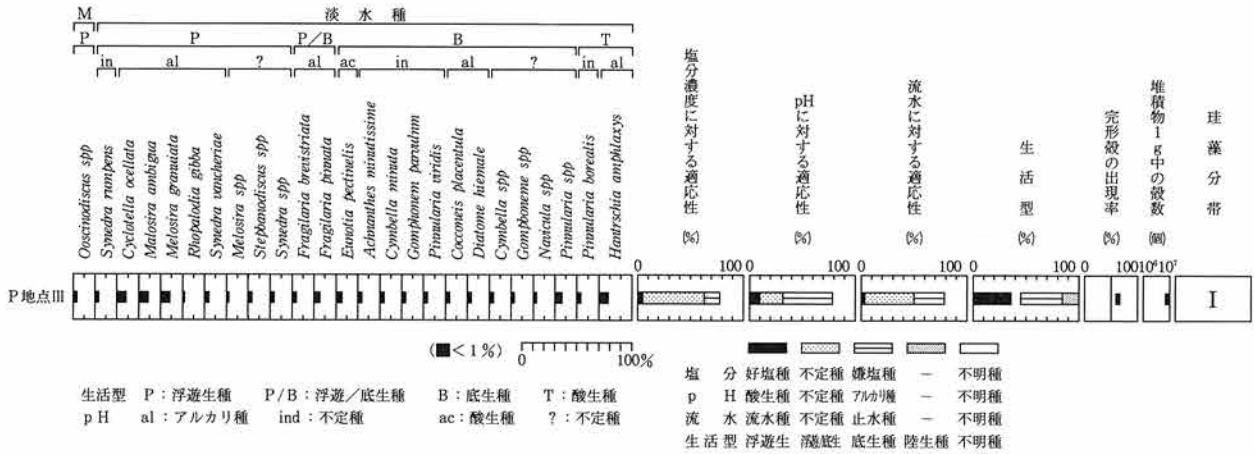
P:浮遊生種

B:底生種

P/B:浮遊生/底生種

T:陸生種

?:不明種



第33図 大坂上道遺跡の主要珪藻化石ダイアグラム  
(2%以上の分類群についての表示)

定を行った。

## C 結果

大坂上道遺跡P地点1試料から検出される珪藻化石の分類群は、56分類群25属43種である。多く出現する種を見ると、浮遊生種の*Cyclotella ocellata*が7.9%、陸生種の*Hantzschia amphioxys*および浮遊生種の*Melosira granulata*がそれぞれ7.4%、浮遊生種の*Melosira ambigua*が6.9%である。全体的に見ると、底生種が最も多く43.8%、先の*Melosira*属をはじめ浮遊生種が全体の38.4%、次いで陸生種の11.8%である。このうち陸生種(陸生珪藻)は、沼地などのように冠水した環境ではなく、ジメジメとした土壌や岩石表面あるいはコケなどに付着して生育する珪藻種群である(小杉1986)。

これらの珪藻の構成種は、安藤(1990)が設定した珪藻の環境指標種群のうち*Melosira ambigua*や*Melosira distans*を標徴種とする湖沼沼沢地指標種群や*Pinnularia viridis*や*Eunotia pectinalis*などの主要構成種からなる沼沢地付着生種群からなることから、やや水深のある沼沢地と推定される。なお、*Hantzschia amphioxys*などの主要構成種などから構成される陸域指標種群も検出されることから、陸域的な環境の影響があるものと推定される。

### 引用分献

- 安藤和夫 1990「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』p 73-88。  
小杉正人 1986「陸生珪藻による古環境の解析とその意義-わが国への導入とその展望-」『植生史研究』p 29-44

## 3 放射性炭素年代測定結果

大坂上道遺跡から出土した試料について年代測定を行った。その結果を次表に示す。なお、年代値よりの年数(B.P)である。

年代地の算出には $^{14}\text{C}$ の半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用している。また、付記した誤差は $\beta$ 線の計数値の標準偏差 $\sigma$ にもとずいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代である。また、試料の $\beta$ 線計数率と自然計数率の差が $2\sigma$ 以下の時は、 $3\sigma$ に相当する年代を下限の年代値

### 3 放射性炭素年代測定結果

| 試料No. | 出土地点   | 種類  | 年代値                    | コードNo.    |
|-------|--------|-----|------------------------|-----------|
| No.1  | 1号集石土坑 | 炭化物 | 8,850±130(B.C.6,900)   | Gak-17475 |
| No.2  | 2号集石土坑 | 炭化物 | 7,290±110(B.C.5,340)   | Gak-17476 |
| No.3  | 黒褐色粘土層 | 炭化材 | 26,810±970(B.C.24,860) | Gak-17474 |

第11表 大坂上道遺跡出土試料の放射性炭素年代測定結果

(B.P.)として表示してある。また、試料のβ線計数率と現在の標準炭素(MODERN STANDARD CARBON)についての計数率との差が2σ以下の時は、Modernと表示し、σ14C%を付記してある。

## 第X章 ま と め

牧ノ沢遺跡を除く大坂上道遺跡・猿額遺跡・中棚遺跡は小さな谷によって開析された段丘上に位置している。大坂上道遺跡の調査区最東部と、中棚遺跡の調査区最西部とでは直線距離にして約2.3kmしか離れておらず、この3遺跡は有機的な結びつきが強いものとする。各遺跡における遺跡の最盛期は異なるが、3遺跡では縄文時代前期末葉～後期までの幅広い時期の遺物を含んでいる。時期的な細分は必要と思われるが、各時期により微妙な系統の違いが見受けられ、東蒲原郡の歴史を考える上で、特に重要と思われる。各遺跡における調査成果の概要は各章の小結で記したが、ここでは牧ノ沢遺跡を除く3遺跡のまとめを記すことにしたい。

### 1 縄文時代における土器様相の変換について

猿額遺跡の上段で、前期前半の大木2式の土器が2号フラスコ状土坑から検出されている。しかし当期の遺物量は極くわずかである。これに対して、前期末葉～中期前半にかけての土器群がまとまって検出されており、それぞれ系統が異なる点が注目される。遺跡の最盛期は異なるものの、猿額遺跡では、前期末葉に入ると大木式の土器が圧倒的に多くなる。一部に東関東系の興津式土器が1点出土しているが、大半は大木式土器で占められる。大木5式の土器は県内ではそれほど多く確認されていないものの、近年、大木6式の土器は県北を中心に散在的に確認されてきている〔小野1993、田辺ほか1944など〕。前期末葉は大木6式の拡散時期となろうか。

これが中期初頭～前半段階に入ると、様相は一変する。猿額遺跡は中期の土器がわずかしか確認されていないものの、大坂上道遺跡では中期前半の土器群が圧倒的に多くなる。また系統もこれまでの大木式は極くわずかに減ってしまい、東関東系の土器群（五領ケ台式・阿玉台式・八辺式）と北陸系の土器群（新保・新崎式）が主体となり、前段階まで主体となっていた大木系の土器群は、極く少量確認されているのみである。こうした変換は、前期末葉に大木式土器分布圏に包括された地域でも認められる現象ではない。例えば、岩船郡朝日村下ゾリ遺跡〔和田ほか1990〕では、中期に入っても大木式土器分布圏に入ったままであり、東関東系・北陸系土器群は大坂上道遺跡ほど受け入れてはいない。より細かな編年案と系統性を明確にすべきとは考えるが、土器群の変換は大いに注目される。

なお大坂上道遺跡から出土した土器群については第V章の小結で記したが、様々な系統の中で中期の土器群の流入ルートは、阿賀野川以外考えられない。例えば福島県坂下町の法正尻遺跡でも、主体となる大木式土器群に混じって、阿玉台式、興津式、新保・新崎式の土器群が少量認められるようである。

新保・新崎式は日本海側に広く分布しており、拡散する土器ではあるが、内陸部の大坂上道遺跡では約半数を占めるものの、完全に主体にはなり切れない土器である。こうした傾向が東蒲原郡全域に及んだ結果であるのか否かは今後の検討課題である。また大坂上道遺跡のみの特殊性という見方も否定しえない。これまで東蒲原郡における調査例が少なかったことから明確でなかったが、当地域は特に複雑な状況を示しているようである。特に文化が複合する越後において、その傾向が最も顕著に現れているのが東蒲原郡という位置付けとなろう。

## 2 遺構について

3遺跡で確認された遺構数は概して少ない。これは集落の中心が調査区北側に位置すると考えられるからである。こうした現状で集石・集石土坑は9基確認された。このうち集石土坑は大坂上道遺跡で3基、中棚遺跡には4基存在する。中棚遺跡3号集石土坑は掘り込みが浅く、残存状況は良好でないが、その他の6基（大坂上道遺跡1号・4号・5号集石土坑、中棚遺跡1号・2号・4号集石土坑）は明確な掘り込みが確認され、残存状況も概して良好である。

集石土坑の特徴は以下の点が挙げられる。一つは土坑内の覆土のうち、下層に炭化材・炭化粒が充満している。また、礫は覆土の下層からも若干は出土するものの、多くは覆土の上層又は覆土の上面で検出されている。礫は被熱の痕跡が明瞭に残り、赤色に変化したものが多い。機能は明瞭でないが、石を熱するために、土坑を掘り、火を焚いたことは明らかであろう。

また以下の点から、土坑の使用期間・使用方法が考えられよう。出土した礫は被熱の痕跡は明瞭なものの、土坑の床面が焼けていないことから、長時間にわたって火が焚かれていたとは考えがたい。集石土坑が確認された大坂上道遺跡・中棚遺跡の地山は、ローム質の粘土で、熱によって変質しやすい土層である。使用された木材も、完全に焼けきらずに炭状を呈する。これは、火を焚いてから礫が投入されるまでの時間的な隔たりがないことを意味する〔北村1983〕。また土坑内の土の堆積状況から、複数にわたる使用の痕跡は確認しえない。現状の観察ではこのようなことが言えるが、土坑の規模と使用石材にも密接な関連がある。3遺跡で確認された集石土坑は、規模から以下の3類に区分が可能である。

- 1類 径約150 cmの掘り込みをもつもの。径10cm未満の礫が主体で、径20～30cmの礫を少量使用するもの（大坂上道遺跡4号集石土坑）
- 2類 径約80～90cmの掘り込みをもつもの。径約20～30cmの礫が主体で、径10cm未満の礫を少量使用するもの a類（大坂上道遺跡1号集石土坑、中棚遺跡2号集石土坑）と、径10cm未満の礫と径20～30cmの礫を少量使用するもの b類（中棚遺跡4号集石土坑）がある。また大坂上道遺跡5号集石土坑は、掘り込み自体は径約80cmであることから、礫の大きさから2 a類に含まれる。
- 3類 径40cm程の掘り込みをもつもの。上部が削平されており、規模・使用された礫は明確にしえないが、2類に比して規模は小さいと考える。また確認された礫は、径10cm程のものが主体である。

集石土坑は中型の2類が最も多く4基、大型の1類と小型の3類は各1基ずつである。上部が削平されている3類を除き、使用された礫と規模に関連があり、規模が大きな集石土坑は小さい礫を、規模が中型の土坑は大きめの礫が使用されている。小さな礫を使用した場合、熱の伝導は早い、熱の冷める時間も早くなる。これに対して大きな礫を使用すれば、熱の伝達は遅くなるが、冷めにくくなる。1類は小型の礫を多量に使用することで、熱の伝達を早めている。また小さい礫でも多量に使用することで、熱が逃げのを防いでいる。一方、中型の2類は大きめの礫を少量使用する。熱の伝導は遅れるものの、冷めにくいような状況を作り出している。土坑の規模と使用石材には密接な関係が指摘できる。

放射性炭素の年代測定では大坂上道遺跡4号集石土坑は早期前半（約8,850±130年前）、同5号集石土坑は早期後半（約7,290±110年前）の所産となる。それ以外のものについては判断できないが、遺跡の盛行する中期前半の所産ではないようである。集石土坑が構築された時期の遺物がほとんど存在しない点から、この遺構は居住域から離れた場所に構築され、一度しか使用されない「非日常的」な遺構の可能性が高い。



# 要 約

## 大坂上道遺跡

- 1 大坂上道遺跡は東蒲原郡津川町大字西字大坂上道西1806ほかに所在する。阿賀野川左岸段丘上（猿額遺跡・中棚遺跡も同じ）に位置し、標高は約84～88mである。
- 2 下記の3遺跡と同様に、調査原因は磐越自動車道建設である。調査は平成4・5年度に実施した。調査面積は8,700mである。
- 3 調査の結果、縄文時代中期・後期を中心とした遺跡であることが判明した。検出された遺構は、土坑16基、フラスコ状土坑2基、焼土坑5基、埋設土器2基、集石・集石土坑5基である。
- 4 出土遺物のうち、縄文時代中期の土器には北陸系の影響が強いもののほか、東関東・南関東の影響が強いものが検出されている。こうした傾向は県内の各地域では認められない。
- 5 縄文時代後期の土器は、加曽利B式併行期のものが多い。このうちアスファルトが詰まった土器が目される。こうした例は全国的にも希で、石油産出地帯である越後でも、本例が初の確認例である。
- 6 平安時代の遺物は少量検出されたが、このうち会津大戸窯産の須恵器が数点確認されている。大戸窯産の須恵器が確認されたのは、県内では初例である。

## 猿額遺跡

- 1 猿額遺跡は東蒲原郡津川町大字西字猿額中丸1938ほかに位置し、標高は約86～99mである。
- 2 調査は平成4・5年度に実施した。調査面積は3,200mである。
- 3 調査の結果、縄文時代前期末葉を中心とした遺跡であることが判明した。検出された遺構は、土坑9基、フラスコ状土坑2基、焼土坑5基、埋設土器1基である。
- 4 調査区全域ではないものの、会津沼沢火山起源の火山灰が検出されている。二次堆積ではあるが、標高88m以上の高所で沼沢火山灰が確認されたのは本遺跡が初めてである。
- 5 出土遺物のうち、主体となる縄文時代前期末葉の土器は、東北南部系の大木式土器である。大木5・6式の土器群がまとまった出土した例は、県内でも珍しい。東蒲原郡の歴史を考える上で特に重要と思われる。

## 中棚遺跡

- 1 遺跡は東蒲原郡津川町大字西字中棚2040ほかに位置し、標高は約95～99mである。
- 2 調査は平成4年度に実施した。調査面積は2,300mである。
- 3 調査の結果、縄文時代前期末葉～中期初頭を中心とした遺跡であることが判明した。検出された遺構は、土坑4基、フラスコ状土坑1基、集石・集石土坑4基である。
- 4 出土遺物は土器に比して、石器が多い。このうち、4号土坑からは同一母岩と思われる頁岩の剥片が出土している。石器の製作工程を考える上で、注目される。

## 牧ノ沢遺跡

- 1 遺跡は東蒲原郡三川村大字谷花字牧ノ沢5720ほかに位置する。阿賀野川左岸の河岸段丘上に位置し、標高は約58～60mである。
- 2 調査は平成5年度に実施した。調査面積は1,000mである。
- 3 調査の結果、縄文時代後期を中心とした遺跡であることが判明した。検出された遺構は土坑約20基である。
- 4 遺物は土器が十数片検出されたにとどまり、定型的な石器は検出されていない。

引用・参考文献

- 安孫子昭二 1982「5. 交易 アスファルト」『縄文文化の研究』8 社会・文化 雄山閣
- 安孫子昭二 1988「加曾利B様式土器の変遷と年代(上)」『東京考古』第6号
- 飯坂 盛泰 1994「B. 出土遺物 3) 石器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第64集 磐越自動車道関係発掘調査報告書 上ノ平遺跡A地点』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 家田順一郎ほか1988『塩沢町文化財調査報告書第8輯 十二木遺跡』新潟県塩沢町教育委員会
- 石川日出志 1985「鳥屋遺跡の発掘調査(遺構外の出土遺物)」『豊栄市史 資料編1 考古編』新潟県豊栄市
- 石田 明夫 1992「会津・大戸古窯跡群」『大戸窯検討のための「会津」シンポジウム 東日本における・中世窯業の諸問題』大戸古窯検討委員会・会津若松市教育委員会
- 稲葉 明・木村 広・二宮俊策・稲村裕一 1976「津川・野沢間の阿賀野川沿岸の第四系について」『新潟県教育センター研究報告』第9号 新潟県教育センター
- 上田 秀夫 1982「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会
- 宇野 隆夫 1994「一郡一窯の体制について」『北陸古代土器研究』第4号 北陸古代土器研究会
- 大塚 達朗 1983「縄文時代後期加曾利B式土器の研究(I) -最近の成果と検討と新たなる分析-」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第2号 東京大学考古学研究室
- 大橋 康二 1993『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
- 大橋 康二 1994『古伊万里の文様』理工学社
- 小笠原正明・阿部千春・前川靖明・横山 晋 1994「豊崎N遺跡出土の天然アスファルト塊」『考古学ジャーナル』373 ニュー・サイエンス社
- 小野 昭ほか1986『人ヶ谷岩陰遺跡(第一次発掘調査概要)』新潟県上川村教育委員会
- 小野 昭ほか1993『朝日村文化財調査報告書第9集 長者岩屋岩陰(第1次・2次調査報告)』新潟県朝日村教育委員会
- 小野 昭・鈴木俊成編 1994『1993年度日本考古学協会シンポジウム 環日本海地域の土器出現期の様相』雄山閣出版
- 加藤三千雄 1988「新保・新崎式土器様式」『縄文土器大観3 中期II』小学館
- 「角川日本地名大辞典」編纂委員会 1989『角川日本地名大辞典 15 新潟県』角川書店
- 瓦吹 堅 1989「浮島・興津式土器様式」『縄文土器大観1 草創期 早期 前期』小学館
- 鎌田 元一 1984「日本の人口について」『木簡研究』6
- 亀井 功・鈴木俊成・望月正樹ほか 1994『新潟県埋蔵文化財調査報告書第61集 磐越自動車道関係発掘調査報告書 萩野遺跡・官林遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 北村 亮ほか1983「V まとめ」『越路町文化財調査報告第9輯 中山遺跡発掘調査報告書』新潟県越路町教育委員会
- 北村 亮 1990『新潟県埋蔵文化財調査報告書第56集 関越自動車道関係報告書 岩原I遺跡・上林塚遺跡』新潟県教育委員会
- 興野 義一 1967「大木式の理解のために(I)」『考古学ジャーナル』13 ニュー・サイエンス社
- 興野 義一 1968「大木式の理解のために(II)」『考古学ジャーナル』16 ニュー・サイエンス社

- 興野 義一 1968「大木式の理解のために (Ⅲ)」『考古学ジャーナル』18 ニュー・サイエンス社
- 興野 義一 1968「大木式の理解のために (Ⅳ)」『考古学ジャーナル』24 ニュー・サイエンス社
- 興野 義一 1969「大木式の理解のために (Ⅴ)」『考古学ジャーナル』32 ニュー・サイエンス社
- 興野 義一 1970「大木式の理解のために (Ⅵ)」『考古学ジャーナル』48 ニュー・サイエンス社
- 小林 謙一 1995「南関東地方の五領ケ台式土器群」『第8回 縄文セミナー 中期初頭の諸様相』  
縄文セミナーの会
- 坂井 秀弥 1989「3 奈良・平安時代」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 山三賀II遺跡 新新  
バイパス関係発掘調査報告書』新潟県教育委員会
- 坂井 秀弥 1993「古代越後の環境・生産力・特性」『新潟考古学談話会会報』第12号 新潟考古学談  
話会
- 坂井 陽一 1980「新潟砂丘における腐植層と砂丘砂の鉱物組成—新潟砂丘の形成について (その1)  
—」『新潟県教育センター研究報告』第49号 新潟県教育センター
- 坂井 陽一 1985「下越地方に分布する第四紀火山堆積物」『新潟県教育月報 No.418』第36巻4 新  
潟県教育委員会
- 沢田 敦 1994「中峰遺跡・上ノ平遺跡C地点・吉ヶ沢遺跡B地点」『財団法人新潟県埋蔵文化財調  
査事業団年報 平成5年度』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 沢田 敦・飯坂 盛泰ほか1994『新潟県埋蔵文化財調査報告書第64集 磐越自動車道関係発掘調査報告  
書 上ノ平遺跡A地点』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 沢田 吾一 1972『復刻 奈良時代民生経済の数的研究』柏書房
- 山武考古学研究所 1984『原遺跡発掘調査報告書』新潟県津川町教育委員会
- 白石太郎 1988『古代を考える—古墳—』有斐閣
- 鈴木 俊成 1992「縄文時代の石鏃について」『新潟考古』第3号 新潟県考古学会
- 鈴木 俊成・春日 真実・高橋 一功 1994『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第60集 北陸自動車道  
上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅳ 一之口遺跡東地区』新潟県教育委員会・(財)  
新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋 保・高橋保雄 1992『新潟県埋蔵文化財調査報告書第57集 関越自動車道関係発掘調査報告書 五  
丁歩遺跡・十二木遺跡』新潟県教育委員会
- 高橋 保雄 1992「B 石器類」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第57集 関越自動車道関係発掘調査報告  
書 五丁歩遺跡・十二木遺跡』新潟県教育委員会
- 高橋 保雄 1994a「北野遺跡」『財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成5年度』(財)  
新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋 保雄 1994b「北野遺跡現地説明会資料」(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田辺 早苗 1994『神林村埋蔵文化財報告書第5 八幡山遺跡発掘調査報告書』新潟県神林村教育委  
員会
- 谷井 彪 1991「阿玉台式土器様式」『縄文土器大観2 中期I』小学館
- 只見川第四紀研究グループ 1966a「只見川・阿賀野川流域の第四系の編年—とくに沼沢浮石層の層位学  
的諸問題について—」『第四紀総合研究連絡紙』No.8
- 只見川第四紀研究グループ 1966b「福島県野沢盆地の浮石砂層の基底部より産出した木材の14C年代

- 田海義正・高橋 保・高橋保雄 1990『新潟県埋蔵文化財調査報告書第55集 関越自動車道関係発掘調査報告書 清水上遺跡』新潟県教育委員会
- 中村孝三郎 1960「小瀬ヶ沢洞窟」『長岡市立科学博物館調査研究報告3』長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎 1962「室谷洞窟」『新潟県文化財年報第四 阿賀－東蒲原郡学術総合調査報告書－』新潟県教育委員会
- 中村孝三郎・小片 保 1964「室谷洞窟」『長岡市立科学博物館調査研究報告6』長岡市立科学博物館
- 奈良 貴史 1988「銭貨」『増上寺子院群－港区役所新庁舎建設に伴う発掘調査報告書－』東京都港区教育委員会
- 新潟県 1983『新潟県下越地域 土地分類基本調査 津川』
- 新潟県 1986a『新潟県史 通史篇1 原始・古代』
- 新潟県 1986b『新潟県史 通史篇2 中世1』
- 新潟県 1990『新潟県のあゆみ』
- 新潟古砂丘グループ 1974「新潟砂丘と人類遺跡－新潟砂丘の形成史I－」『第四紀研究』第13巻－3号
- 西田 泰民 1991「堀之内・加曾利B式土器様式」『縄文土器大観4 後期・晩期』小学館
- 二宮 俊策 1973「新潟県東蒲原地方における阿賀野川の河岸段丘について」『新潟県教育センター研究集録』第6集（理科研究編12）新潟県教育センター
- 芳賀 英一 1983「大木6式土器と東部関東との関係」『古代』84号
- 原田 昌幸 1985「阿玉台式土器前半期の一様相－常磐道柏地区の調査成果から－」『研究紀要10－10周年記念論集－』（財）千葉県文化財センター
- 福島県教育委員会・（財）福島県文化センター 1983『福島県文化財調査報告第266集 国営総合農地開発事業母畑地区遺跡発掘調査報告13 薬師堂遺跡・蓬入遺跡・栗木内塚』
- 福島県教育委員会・（財）福島県文化センター・日本道路公団 1988『福島県文化財調査報告書第196集 東北自動車道遺跡調査報告3 登戸遺跡』
- 福島県教育委員会 1990『福島県文化財調査報告書第227集 国営会津農業水利事業団関連遺跡調査報告書Ⅷ 中冑遺跡・上冑A遺跡・冑宮西遺跡・三十刈遺跡・水上遺跡』
- 福島県教育委員会・（財）福島県文化センター・日本道路公団 1991『福島県文化財調査報告書第243集 東北横断自動車道遺跡調査報告11 法正尻遺跡』
- 福島県教育委員会 1991『福島県文化財調査報告書第266集 国営会津農業水利事業団関連遺跡調査報告書Ⅵ 鹿島遺跡・平林B遺跡・権現山下遺跡』
- 福島県山都町教育委員会 1983『福島県山都町文化財調査報告第4集 上ノ原遺跡』
- 古川 知明 1982「角神遺跡採集の石器九例」『新潟県史研究』12 新潟県
- 平凡社 1978『新潟県の地名』日本歴史地名体系
- 本間 嘉晴ほか1962『新潟県文化財年報第四 阿賀－東蒲原郡学術総合調査報告書－』新潟県教育委員会
- 柳田 誠 1979「阿賀野川中流域の地形発達史」『地理学評論』57－12
- 柳田 誠 1981「阿賀野川の河岸段丘」『駒沢地理』第17号
- 山本 典幸 1991「五領ヶ台式土器様式」『縄文土器大観3 中期Ⅱ』小学館
- 和田 寿久ほか1990『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ 下ゾリ遺跡』新潟県朝日村教育委員会

# 遺物観察表

## 凡 例

- 1 縄文土器・石器・土師器・須恵器・陶磁器についての観察表である。
- 2 法量については土器・陶磁類（以下、土器類）がcm、石器はmm単位、重量はg単位である。また土器類は「口」は口径、「底」は底径、「胴」は胴部最大径、「高」は器高を表す。
- 3 胎土は以下に分類し、記号で示す。①石英：チャートを多量に含む ②粒子が細かな粘土で、海面骨針を多量に含む ③砂状のザラザラした粘土に長石・海面骨針の他、径1mm程の粗砂粒を含む ④径1mm程の粗砂粒を特に多量に含む ⑤径5mm程の粗砂粒と焼土粒を多量に含む ⑥綿密な素地に少量の砂粒を含む ⑦径1mm程の粗砂粒と多量の金雲母を含む
- 4 須恵器の胎土については、本文中の分類を記載した。
- 5 色調は以下に分類し、記号で表した。①黄褐色 ②橙褐色 ③暗褐色 ④白灰色 ⑤赤褐色
- 6 須恵器・土師器・黒色土器の食膳具は内面及び外面がロクロナデ、底部の切り離しは須恵器が回転ヘラ削り、土師器・黒色土器は回転系切りが基本である。また、鍋はロクロナデ、須恵器甕の外面は叩き、内面は当て具痕が残る。観察表の「手法」は、これに該当しないもののみ記載した。
- 7 石器の石材は「石」・「岩」を略したものが多いが、それ以外は以下に略して記載した。緑凝（緑色凝灰岩）、鉄石（鉄石英）などである。
- 8 縄文土器の手法は、RL縄文を①、LR縄文を②とした。
- 9 断面実測以外の土器の残存率は、図示した部分までの残存率を示す。

## 大坂上道遺跡（図版7～21）

### 縄文土器

#### (1) 遺構内出土

| 図番 | 出土地点  | 種 別 | 法量                      | 胎土 | 色 | 手法 | 備考   |
|----|-------|-----|-------------------------|----|---|----|------|
| 1  | 3号土坑  | Ⅲ群  | 口15.4                   | ④  | ② | 条線 | 1/5残 |
| 2  | 7号土坑  | 〃   | —                       | ②  | ③ | ①  | 2/5残 |
| 3  | 17号土坑 | Ⅳ群  | 口30.4<br>胴33.0          | ①  | ③ | 条線 | 3/5残 |
| 4  | 4焼土坑  | Ⅲ群  | 11.0                    | ①  | ③ | 無文 | 1/5残 |
| 5  | 1号埋設  | 〃   | 口18.4                   | ①  | ① | ②  | 1/8残 |
| 6  | 1号埋設  | 〃   | 底8.6                    | ①  | ① | 無文 | 3/5残 |
| 7  | 1号埋設  | 〃   | —                       | ④  | ① | 条線 |      |
| 8  | 2号埋設  | 〃   | 底12.6                   | ⑤  | ① | 無節 | 3/5残 |
| 9  | 3号集石  | 〃   | 底11.8                   | ⑤  | ① | 無文 | 4/5残 |
| 10 | 1号フラ  | 〃   | —                       | ②  | ④ | ②  |      |
| 11 | 1号フラ  | 〃   | —                       | ②  | ③ | 無節 |      |
| 12 | 1号フラ  | 〃   | —                       | ②  | ③ | 無節 |      |
| 13 | 1号フラ  | 〃   | —                       | ⑥  | ③ | ②  |      |
| 14 | 1号フラ  | 〃   | —                       | ②  | ③ | ①  |      |
| 15 | 1号フラ  | 〃   | —                       | ②  | ② | ②  |      |
| 16 | 1号フラ  | 〃   | 底14.0                   | ⑤  | ② |    |      |
| 17 | 1号風倒  | 〃   | —                       | ④  | ③ | ①  |      |
| 18 | 1号風倒  | 〃   | —                       | ①  | ② |    |      |
| 19 | 2号風倒  | 〃   | 口30.0                   | ①  | ③ | ②  | 1/8残 |
| 20 | 3号風倒  | Ⅱ群D | 口10.8                   | ⑤  | ② |    | 4/5残 |
| 21 | 3号風倒  | Ⅱ群B | 口17.0<br>高19.6<br>底11.4 | ⑤  | ① |    | 1/8残 |

#### (2) Ⅱ層出土

|    |          |      |                         |   |   |    |      |
|----|----------|------|-------------------------|---|---|----|------|
| 22 | F7-14    | I群   | —                       | ① | ③ | ①  |      |
| 23 | E8-6     | Ⅱ群A1 | 口25.2<br>高30.0<br>底12.8 | ③ | ⑤ | 無節 | 3/5残 |
| 24 | B2-13-18 | 〃    | 口33.0                   | ⑦ | ⑤ |    | 2/5残 |
| 25 | C3-20    | 〃    | —                       | ⑦ | ⑤ |    |      |
| 26 | C3-19    | 〃    | —                       | ⑦ | ⑤ |    |      |
| 27 | B3-15    | 〃    | —                       | ⑦ | ⑤ |    |      |
| 28 | B3-15    | 〃    | —                       | ⑦ | ⑤ |    |      |
| 29 | 表 採      | 〃    | —                       | ① | ③ |    |      |
| 30 | E8-2     | Ⅱ群A2 | 口31.0                   | ⑤ | ① | ①  | 2/3残 |
| 31 | F7-16    | Ⅱ群A3 | 口24.0                   | ① | ① | ②  | 1/6残 |
| 32 | B2-24    | Ⅱ群B  | 口26.0                   | ① | ④ |    | 2/5残 |
| 33 | B3-3     | 〃    | 口24.0                   | ③ | ④ |    | 〃    |
| 34 | 表 採      | 〃    | 口17.4                   | ① | ② |    | 2/5残 |

|    |        |     |                         |   |   |              |       |
|----|--------|-----|-------------------------|---|---|--------------|-------|
| 35 | D19-12 | 〃   | —                       | ① | ① |              |       |
| 36 | 表 採    | 〃   | —                       | ① | ① | ①            |       |
| 37 | 表 採    | 〃   | —                       | ① | ① | ②            |       |
| 38 | B15-11 | 〃   | —                       | ① | ② | ②            |       |
| 39 | B6-23  | 〃   | —                       | ① | ② |              |       |
| 40 | B17-18 | 〃   | —                       | ⑤ | ① |              |       |
| 41 | D3-6   | 〃   | —                       | ⑤ | ① |              |       |
| 42 | C17-14 | 〃   | —                       | ③ | ③ | ②            |       |
| 43 | C5-24  | 〃   | —                       | ④ | ② |              |       |
| 44 | D8-21  | 〃   | —                       | ④ | ② |              |       |
| 45 | B15-24 | Ⅱ群D | 口43.6                   | ④ | ① | 燃糸 半<br>隆起線文 | 1/8残  |
| 46 | C2-24  | 〃   | 口22.8                   | ② | ③ | ① 〃          | 1/4残  |
| 47 | C3-13  | 〃   | 口                       | ④ | ③ | 〃            | 1/8残  |
| 48 | B17-9  | 〃   | —                       | ④ | ① | ① 〃          |       |
| 49 | B2-17  | 〃   | —                       | ① | ③ | ② 〃          |       |
| 50 | A19-15 | 〃   | —                       | ① | ① | ②            |       |
| 51 | B17-9  | 〃   | —                       | ④ | ③ | ①            |       |
| 52 | C3-2   | 〃   | —                       | ④ | ② |              |       |
| 53 | B3-5   | 〃   | —                       | ③ | ② | ①            |       |
| 54 | D6-18  | Ⅱ群D | 口12.0                   | ① | ① |              | 1/8残  |
| 55 | B2-14  | 〃   | 口12.0                   | ① | ② |              | 〃     |
| 56 | B6-2   | Ⅱ群C | —                       | ⑤ | ③ |              |       |
| 57 | 表 採    | Ⅱ群D | —                       | ① | ③ |              |       |
| 58 | 表 採    | 〃   | —                       | ① | ④ | ②            |       |
| 59 | B2-19  | Ⅱ群B | 口12.0                   | ③ | ③ | ②            |       |
| 60 | F10-8  | 〃   | 口12.0                   | ① | ① |              |       |
| 61 | B17-2  | 〃   | —                       | ④ | ② |              |       |
| 62 | C10-16 | 〃   | —                       | ① | ① |              |       |
| 63 | 表 採    | 〃   | —                       | ① | ① | 木目状燃糸        |       |
| 64 | 表 採    | Ⅱ群C | —                       | ① | ④ |              |       |
| 65 | F10-8  | 〃   | —                       | ① | ③ |              |       |
| 66 | D4-13  | Ⅳ群  | 口21.0<br>高20.0<br>底 6.4 | ⑤ | ④ | ②            | 2/5残  |
| 67 | F7-16  | 〃   | 口24.0                   | ① | ④ | ①            | 1/10残 |
| 68 | F7-16  | 〃   | 口25.0                   | ④ | ④ | ①            | 1/5残  |
| 69 | D3-12  | 〃   | —                       | ④ | ② | ①            |       |
| 70 | B4-9   | 〃   | —                       | ② | ② | ②            |       |
| 71 | B5-15  | 〃   | —                       | ① | ② | ②            |       |
| 72 | B17-18 | 〃   | —                       | ③ | ① | ②            |       |
| 73 | C2-25  | 〃   | —                       | ⑤ | ③ | ②            |       |



|     |        |    |       |   |   |   |       |
|-----|--------|----|-------|---|---|---|-------|
| 74  | D5-11  | 皿群 |       | ⑥ | ③ | ② |       |
| 75  | C3-13  | "  | -     | ① | ③ | ② |       |
| 76  | D3-12  | "  | -     | ② | ④ | ② |       |
| 77  | B17-10 | "  |       | ③ | ③ | ② | 1/4残  |
| 78  | 表採     | "  | □7.6  | ① | ④ |   | 1/5残  |
| 79  | 表採     | "  | -     | ② | ④ | ① |       |
| 80  | C3-3   | "  | -     | ① | ① | ① |       |
| 81  | B5-15  | "  | -     | ① | ③ | ② |       |
| 82  | C5-24  | "  | -     | ② | ① |   |       |
| 83  | C5-2   | "  | -     | ① | ② |   |       |
| 84  | D6-2   | "  | -     | ② | ③ |   |       |
| 85  | C5-24  | "  | -     | ② | ① |   |       |
| 86  | C4-15  | "  | -     | ① | ③ |   |       |
| 87  | C5-23  | "  | -     | ① | ② |   |       |
| 88  | B5-10  | "  | -     | ⑤ | ② |   |       |
| 89  | C5-17  | "  | □41.0 | ⑤ | ⑤ |   | 3/5残  |
| 90  | B5-4   | "  | □30.0 | ④ | ② | ② | 1/10残 |
| 91  | B5-17  | "  | □31.0 | ① | ② | ① | 1/10残 |
| 92  | B4-5   | "  | □32.0 | ④ | ③ | ③ | 1/8残  |
| 93  | D3-12  | "  | □36.0 | ① | ③ |   | 1/5残  |
| 94  | C3-1   | "  | □22.0 | ② | ② | ② | 1/5残  |
| 95  | B17-7  | "  | □24.0 | ⑤ | ② |   | 1/8残  |
| 96  | 表採     | "  | □20.0 | ⑤ | ⑤ |   | "     |
| 97  | D3-12  | "  | □15.0 | ① | ② |   | 1/5残  |
| 98  | C5-23  | "  |       | ① | ③ | ① |       |
| 99  | D5-15  | "  | -     | ⑤ | ⑤ | ② |       |
| 100 | C5-24  | "  | -     | ① | ② | ② |       |
| 101 | C3-1   | "  | -     | ④ | ② | ② |       |
| 102 | B4-5   | "  | -     | ② | ⑤ | ② |       |
| 103 | C16-23 | "  | -     | ③ | ③ |   |       |
| 104 | B2-19  | "  | -     | ③ | ② | ② |       |
| 105 | B3-25  | "  | -     | ① | ① | ① |       |
| 106 | B3-25  | "  | -     | ④ | ③ |   |       |
| 107 | C6-22  | "  | -     | ① | ② | ① |       |
| 108 | B2-24  | "  | -     | ① | ③ | ② |       |
| 109 | B2-19  | "  | -     | ① | ① |   |       |
| 110 | B2-9   | "  | -     | ① | ② | ① |       |
| 111 | F8-4   | "  | -     | ① | ③ | ① |       |
| 112 | F8-4   | "  | -     | ① | ① | ① |       |
| 113 | C3-23  | "  | -     | ① | ② | ② |       |
| 114 | C14-15 | "  | -     | ② | ② | ② |       |
| 115 | 表採     | "  | -     | ① | ③ | ② |       |
| 116 | B4-14  | "  | -     | ④ | ② | ② |       |
| 117 | D3-12  | "  | 胴23.0 | ① | ② | ② | 1/3残  |
| 118 | F7-24  | "  | -     | ① | ④ | ① |       |
| 119 | 表採     | "  | 底8.5  |   |   |   | 1/4   |
| 120 | "      | "  | 底11.5 |   |   |   | 2/3   |
| 121 | C4-12  | "  | 底9.8  | ② | ② | ② | 2/3   |
| 122 | E8-25  | "  | 底8.4  | ④ | ③ | ② | 2/5   |
| 123 | B5-4   | "  | 底11.8 | ③ | ③ |   | 3/5   |
| 124 | A3-10  | "  | 底15.0 | ① | ② | ① | 4/5   |
| 125 | B5-15  | "  | 底6.4  | ① | ② |   | 4/5   |
| 126 | D6-8   | "  | 底6.0  | ② | ① |   | 2/3   |
| 127 | C4-15  | "  | 底7.0  | ⑤ | ③ |   | 4/5   |
| 128 | B4-5   | "  | 底6.4  | ① | ③ |   | 2/5   |
| 129 | E6-21  | "  | 底12.0 | ① | ③ |   | 1/3残  |
| 130 | A3-10  | "  | □39.0 | ⑥ | ④ | ② | 1/10残 |
| 131 | C7-3   | "  | □24.0 | ⑤ | ⑤ |   | 1/10残 |
| 132 | B4-5   | "  | □21.0 | ① | ③ | ② | 2/3   |
| 133 | C6-23  | "  | □18.0 | ⑤ | ⑤ | ② | 1/5   |
| 134 | C2-24  | "  | □24.0 | ② | ④ | ② | 1/10  |

|     |          |   |                      |   |   |   |      |
|-----|----------|---|----------------------|---|---|---|------|
| 135 | B4-9     | " | □19.0                | ⑥ | ② |   | 1/10 |
| 136 | C3-11-16 | " | □15.0                | ② | ② |   | 1/4  |
| 137 | D3-6     | " | □18.8                | ② | ② |   | 1/4  |
| 138 | C3-24    | " | □21.0                | ② | ③ |   | 1/10 |
| 139 | C3-17    | " | □18.0                | ② | ① |   | 1/10 |
| 140 | B3-25    | " | □20.0                | ② | ② |   | 1/10 |
| 141 | D5-16    | " | □15.4                | ② | ④ |   | 1/10 |
| 142 | B3-3     | " | -                    | ① | ③ | ② |      |
| 143 | D6-1     | " | -                    | ⑥ | ② | ① |      |
| 144 | C5-17    | " | -                    | ① | ③ | ② |      |
| 145 | B5-4     | " | □16.0                | ⑥ | ③ | ② | 1/5  |
| 146 | C2-23    | " | □9.0                 | ② | ③ | ① | 1/3  |
| 147 | B3-9-14  | " | -                    | ⑤ | ① | ② |      |
| 148 | B3-25    | " | 底9.6                 | ① | ③ |   | 4/5  |
| 149 | C3-19    | " | □4.5<br>高4.3<br>底3.2 | ⑥ | ② |   | 2/3  |
| 150 | D5-22    | " | 底5.1                 | ① | ③ | ② | 3/5  |

### 土製品

|     |       |     |              |   |   |  |  |
|-----|-------|-----|--------------|---|---|--|--|
| 151 | B2-21 | 粘土塊 | 長 43<br>幅 35 | ⑤ | ② |  |  |
| 152 | B2-21 | "   | 長 44<br>幅 30 | ⑤ | ② |  |  |
| 153 | C3-1  | "   | 長 57<br>幅 54 | ⑤ | ② |  |  |
| 154 | D20-3 | 土偶  | 長 88<br>幅 74 | ① | ① |  |  |

### 石器

#### (1) 遺構内出土

| 番 | 出土地点 | 種別 | 長さ | 幅  | 厚さ  | 重量  | 石材 | 剥片 | 備考    |
|---|------|----|----|----|-----|-----|----|----|-------|
| 1 | 3集石  | 磨斧 | 79 | 46 | 26  | 148 | 凝灰 |    | 基部を欠く |
| 2 | 4集石  | 石鏃 | 21 | 13 | 3.5 | 0.8 | 黒耀 |    |       |

#### (2) V層出土

|   |        |    |     |    |    |      |    |   |  |
|---|--------|----|-----|----|----|------|----|---|--|
| 3 | C2-25  | 石錐 | 40  | 18 | 8  | 2.9  | 緑凝 | 縦 |  |
| 4 | D5-4   | 籠  | 96  | 36 | 23 | 52.3 | 頁岩 |   |  |
| 5 | D5-17  | "  | 107 | 43 | 26 | 92.2 | 凝灰 |   |  |
| 6 | D19-6  | 打斧 | 67  | 49 | 24 | 70.3 | 頁岩 |   |  |
| 7 | D19-11 | 不A | 52  | 86 | 15 | 50.2 | 凝灰 | 横 |  |
| 8 | C2-23  | 不F | 56  | 32 | 10 | 10.4 | "  | 縦 |  |
| 9 | B3-5   | 磨H | 168 | 94 | 60 | 1215 | 安山 |   |  |

#### (3) II層出土

|    |        |     |     |    |    |      |    |   |       |
|----|--------|-----|-----|----|----|------|----|---|-------|
| 10 | F11-8  | ナイフ | 38  | 13 | 8  | 2.6  | 頁岩 | 縦 |       |
| 11 | C19-1  | 尖頭器 | 32  | 15 | 5  | 2.0  | "  | " | 基部を欠く |
| 12 | B3-13  | 石鏃  | 19  | 11 | 4  | 0.6  | 黒耀 |   | 先端を欠く |
| 13 | B4-5   | "未  | 22  | 14 | 5  | 1.5  | 緑凝 |   |       |
| 14 | F7-4   | "   | 35  | 24 | 7  | 6.1  | 頁岩 |   |       |
| 15 | B19-22 | "   | 32  | 21 | 6  | 2.1  | 緑凝 | 縦 | 先端を欠く |
| 16 | B5-6   | 石錐  | 62  | 30 | 14 | 11.5 | "  | " |       |
| 17 | G7-11  | "   | 43  | 20 | 8  | 5.2  | "  | " |       |
| 18 | B2-18  | 石匙  | 55  | 41 | 18 | 31.6 | 凝灰 | 横 |       |
| 19 | F11-4  | "   | 56  | 37 | 16 | 18.5 | 流紋 | " |       |
| 20 | D4-11  | "   | 55  | 70 | 15 | 35.3 | 凝灰 | " |       |
| 21 | C19-6  | "   | 71  | 76 | 28 | 88.5 | "  | " | 刃部に磨痕 |
| 22 | 表採     | "   | 35  | 27 | 10 | 8.5  | 鉄英 |   |       |
| 23 | B4-9   | 打斧  | 104 | 56 | 12 | 55.9 | 硬砂 |   |       |
| 24 | B4-14  | "   | 104 | 47 | 17 | 95.6 | 頁岩 |   |       |
| 25 | B4-20  | 籠   | 99  | 45 | 22 | 94.8 | "  |   |       |
| 26 | A19-25 | "   | 109 | 44 | 22 | 86.9 | "  |   | 刃部に磨痕 |
| 27 | B4-5   | "   | 22  | 14 | 5  | 1.5  | "  |   |       |



|    |        |       |     |     |     |        |    |  |       |
|----|--------|-------|-----|-----|-----|--------|----|--|-------|
| 28 | C4-1   | "     | 72  | 39  | 17  | 42.1   | 頁岩 |  |       |
| 29 | C10-9  | "     | 66  | 39  | 17  | 42.7   | "  |  |       |
| 30 | F7-22  | "     | 77  | 43  | 16  | 41.8   | 鉄石 |  |       |
| 31 | A20-5  | 磨 斧   | 144 | 59  | 24  | 340    | 蛇紋 |  | 刃部端欠  |
| 32 | C4-19  | "     | 111 | 51  | 30  | 264    | 安山 |  | "     |
| 33 | 中央表採   | "     | 93  | 57  | 30  | 268    | 蛇紋 |  | 基部を欠く |
| 34 | C19-24 | "     | 61  | 42  | 13  | 478    | "  |  | 基部を欠く |
| 35 | B6-8   | "     | 70  | 38  | 19  | 782    | 閃緑 |  | 再加工   |
| 36 | C3-17  | "     | 84  | 40  | 20  | 130    | 蛇紋 |  | 刃部端欠  |
| 37 | C19-24 | 不 A   | 63  | 47  | 16  | 23.3   | 頁岩 |  |       |
| 38 | C4-12  | "     | 61  | 38  | 28  | 42.3   | "  |  |       |
| 39 | C17-4  | "     | 42  | 30  | 12  | 12.4   | 凝灰 |  |       |
| 40 | B6-21  | 不 B   | 38  | 34  | 14  | 13.5   | "  |  | 基部を欠く |
| 41 | C3-23  | "     | 87  | 46  | 20  | 48.7   | 頁岩 |  |       |
| 42 | F6-19  | "     | 79  | 36  | 17  | 28.5   | 凝灰 |  |       |
| 43 | D5-11  | "     | 47  | 31  | 9   | 9.4    | 鉄石 |  |       |
| 44 | B16-22 | "     | 36  | 27  | 11  | 6.9    | 玉髓 |  |       |
| 45 | B17-11 | "     | 60  | 48  | 18  | 44.2   | 緑凝 |  |       |
| 46 | F7-6   | "     | 70  | 48  | 15  | 35.8   | 凝灰 |  |       |
| 47 | C3-17  | "     | 35  | 24  | 9   | 6.4    | 頁岩 |  |       |
| 48 | B3-4   | "     | 45  | 48  | 9   | 14.9   | "  |  |       |
| 49 | D19-23 | "     | 53  | 95  | 18  | 66.6   | 凝灰 |  |       |
| 50 | B5-17  | "     | 58  | 58  | 16  | 41.7   | 玉髓 |  |       |
| 51 | 中央表採   | "     | 57  | 65  | 18  | 57.4   | 頁岩 |  |       |
| 52 | B17-17 | 不 C   | 45  | 61  | 17  | 33.2   | 流紋 |  |       |
| 53 | C4-25  | "     | 48  | 50  | 14  | 28.8   | 頁岩 |  |       |
| 54 | B7-7   | 不 D   | 41  | 38  | 10  | 10.8   | 緑凝 |  |       |
| 55 | D18-2  | "     | 36  | 22  | 8   | 3.8    | 玉髓 |  |       |
| 56 | D9-13  | 不 F   | 40  | 36  | 12  | 10.7   | 緑凝 |  |       |
| 57 | B16-22 | "     | 32  | 30  | 14  | 10.9   | "  |  |       |
| 58 | C19-24 | "     | 33  | 40  | 11  | 10.4   | 凝灰 |  |       |
| 59 | 東側表採   | "     | 23  | 39  | 9   | 4.8    | 頁岩 |  |       |
| 60 | A20-5  | 不 G   | 99  | 67  | 25  | 123.3  | 凝灰 |  |       |
| 61 | B19-3  | "     | 89  | 36  | 21  | 62.8   | 緑凝 |  |       |
| 62 | B17-23 | 不 ?   | 82  | 56  | 18  | 89.3   | 頁岩 |  |       |
| 63 | C6-5   | 不 ?   | 38  | 14  | 0.9 | 24.6   | "  |  |       |
| 64 | E8-7   | 磨 A 1 | 114 | 107 | 43  | 760.5  | 安山 |  |       |
| 65 | C3-10  | 磨 A 2 | 142 | 83  | 34  | 633.6  | "  |  |       |
| 66 | E8-20  | 磨 A 3 | 126 | 76  | 23  | 240.9  | 凝灰 |  |       |
| 67 | C15-14 | 磨 A 2 | 149 | 98  | 40  | 874.8  | 安山 |  |       |
| 68 | C16-22 | 磨 B 2 | 152 | 81  | 38  | 729.9  | "  |  |       |
| 69 | 1号風倒   | 磨 C1a | 149 | 95  | 44  | 957.9  | "  |  |       |
| 70 | C3-20  | 磨 C1a | 107 | 60  | 30  | 264.8  | 砂岩 |  |       |
| 71 | F6-18  | 磨 C2a | 129 | 88  | 46  | 740    | 圧砕 |  |       |
| 72 | C20-8  | 磨 C2a | 133 | 51  | 38  | 463.5  | 花崗 |  |       |
| 73 | B17-4  | 磨 C2a | 155 | 69  | 36  | 600.5  | 安山 |  |       |
| 74 | C17-15 | 磨 C2a | 130 | 80  | 38  | 673.6  | "  |  |       |
| 75 | B6-22  | 磨 D2a | 134 | 60  | 44  | 491.3  | 安山 |  |       |
| 76 | D20-3  | 磨 D2a | 120 | 98  | 46  | 740.0  | 花崗 |  |       |
| 77 | B17-4  | 磨 E   | 110 | 76  | 34  | 460.3  | 閃緑 |  |       |
| 78 | E16-1  | 磨 Fb  | 138 | 92  | 50  | 876.0  | 圧砕 |  |       |
| 79 | C2-23  | 磨 Fa  | 111 | 62  | 41  | 343.5  | 安山 |  |       |
| 80 | A2-20  | 磨 Ga  | 203 | 75  | 57  | 1320.0 | "  |  |       |
| 81 | B4-14  | 磨 Ga  | 70  | 32  | 16  | 47.2   | 砂岩 |  |       |
| 82 | 中央表採   | 磨 Gb  | 132 | 106 | 52  | 965.4  | 花崗 |  | 半損    |
| 83 | E9-25  | 磨 Gb  | 94  | 76  | 38  | 621.8  | 安山 |  |       |
| 84 | B2-7   | 磨 Ga  | 104 | 70  | 44  | 193.9  | 圧砕 |  |       |
| 85 | C5-20  | 磨 Gb  | 94  | 76  | 38  | 389.4  | 砂岩 |  |       |
| 86 | H2-7   | 磨 Gc  | 104 | 70  | 44  | 503.2  | 粘板 |  | 半損    |
| 87 | C16-9  | 石 皿   | 289 | 364 | 110 | 6350   | 砂岩 |  |       |
| 88 | B2-24  | 石 皿   | 278 | 250 | 85  | 7550   | 花崗 |  |       |

|    |        |    |     |     |    |       |    |  |      |
|----|--------|----|-----|-----|----|-------|----|--|------|
| 89 | B2-24  | 石皿 | 212 | 224 | 50 | 4350  | 安山 |  |      |
| 90 | B2-3   | 台石 | 264 | 224 | 55 | 6150  | 花崗 |  |      |
| 91 | B17-3  | 砥石 | 405 | 295 | 75 | 12900 | 砂岩 |  |      |
| 92 | C6-19  | 砥石 | 266 | 232 | 69 | 6540  | "  |  |      |
| 93 | C20-13 | 砥石 | 150 | 145 | 55 | 2450  | 閃緑 |  |      |
| 94 | B16-24 | 砥石 | 53  | 48  | 4  | 12.9  | 粘板 |  | 中世以降 |
| 95 | E6-33  | 砥石 | 85  | 42  | 4  | 30.0  | "  |  | 中世以降 |

平安時代

(1) 10号土坑出土

| 出土地点 | 種別    | 法量    | 胎土                      | 手法 | 備考                         |          |
|------|-------|-------|-------------------------|----|----------------------------|----------|
| 1    | 10号土坑 | 黒色 碗  | 口16.0<br>高 5.6<br>底 6.3 | ①  | 口縁部低位外面<br>～底部外面<br>回転ヘラ削り | 2/3残     |
| 2    | "     | 黒色 碗  | 口13.0                   | ①  |                            | 1/10残    |
| 3    | "     | 黒色 碗  | 底5.0                    | ①  | 口低位～回転<br>ヘラ削り             | 1/3残     |
| 4    | "     | 土師器 碗 | 口12.6                   | ①  |                            | 1/10残    |
| 5    | "     | 土師器 碗 | 口13.0                   | ①  |                            | 1/10残    |
| 6    | "     | 土師器 碗 | 底 5.0                   | ①  |                            | 2/3残     |
| 7    | "     | 土師器 碗 | 底 5.2                   | ①  | 底～回転ヘラ<br>削り               | 2/3残     |
| 8    | "     | 鍋     | 口40.4                   | ①  |                            | 外～スリ1/3残 |
| 9    | "     | 鍋     | 口40.6                   | ①  |                            | 1/10残    |
| 10   | "     | 鍋     | 口33.2                   | ①  |                            | 1/10残    |
| 11   | "     | 鍋     | 口40.6                   | ①  |                            | 1/10残    |
| 12   | "     | 鍋     | 底 8.6                   | ①  | 外面ヘラ削り                     | 2/5残     |
| 13   | "     | 小 壺   | 底 7.0                   | ④  |                            | 4/5残     |
| 14   | "     | 須恵器 壺 | 口14.0                   | I  |                            | 1/4残     |
| 15   | "     | 須恵器 壺 | —                       | I  |                            |          |
| 16   | "     | 須恵器 壺 | —                       | II |                            |          |

(2) II層出土

|    |        |        |                         |    |                  |                           |
|----|--------|--------|-------------------------|----|------------------|---------------------------|
| 17 | D6-1   | 黒色 碗   | 口15.0                   | ①  |                  | 1/10                      |
| 18 | F7-9   | 黒色 碗   | 口14.0                   | ①  |                  | 1/10                      |
| 19 | F7-8   | 黒色 碗   | 口17.0                   | ①  |                  | 1/10                      |
| 20 | F8-4   | 黒色 碗   | 口14.0                   | ①  |                  | 内外面黒色1/10残                |
| 21 | B3-5   | 黒色 碗   | 口13.0<br>高 5.0<br>底 4.1 | ①  |                  | 内面の黒色処理<br>は完全でない<br>4/5残 |
| 22 | D20-11 | 黒色 碗   | 底 6.8                   | ①  | 外低位～底部<br>回転ヘラ削り | 4/5残                      |
| 23 | C7-3   | 黒色 碗   | 底6.0                    | ①  |                  | 調整不明3/5残                  |
| 24 | D6-2   | 黒色 碗   | 底 6.2                   | ①  | 口低位～外<br>回転ヘラ削り  | 2/5残                      |
| 25 | F9-25  | 黒色 碗   | 底5.0                    |    |                  | 4/5残                      |
| 26 | C5-5   | 黒色 鉢   | 口24.0<br>高(10)<br>底9.0  | ②  | 底部～ヘラ削<br>り      | 1/6残                      |
| 27 | F9-18  | 須恵器無台杯 | 口12.0                   | I  |                  | 1/4残                      |
| 28 | 6-11   | 須恵器有台杯 | 口14.0                   | I  |                  | 1/10残                     |
| 29 | F9-8   | 土師器 碗  | 口13.0                   | ①  |                  | 白灰色1/10残                  |
| 30 | C4-25  | 土師器 碗  | 口12.6                   | ①  |                  | 1/4残                      |
| 31 | E9-24  | 土師器 碗  | 口14.0                   | ①  |                  | 白灰色1/10残                  |
| 32 | B2-11  | 土師器 碗  | 口14.0                   | ①  |                  | 1/10残                     |
| 33 | C5-18  | 土師器 碗  | 底5.2                    | ①  |                  | 2/5残                      |
| 34 | F9-4   | 長 頸 壺  | 口10.0                   | II |                  | 外面～自然釉1/4残                |
| 35 | F7-9   | 長 頸 壺  | —                       | II |                  | 内外面～自然釉1/3残               |
| 36 | F8-4   | 長 頸 壺  | 胴15.5<br>底 7.6          | II |                  | 外面～自然釉<br>4/5残            |
| 37 | E10-9  | 長 頸 壺  | —                       | II |                  | 外面～自然釉1/5残                |
| 38 | F8-4   | 短 頸 壺  | 胴21.0<br>底11.3          | I  |                  | 外面～自然釉<br>1/4残            |
| 39 | F7-9   | 短 頸 壺  | 胴17.4                   | I  |                  | 2/3残                      |

|    |        |      |       |     |                  |              |
|----|--------|------|-------|-----|------------------|--------------|
| 40 | F10-5  | 甕    | 口     | I   |                  | 1/10残        |
| 41 | F9-4   | 甕    | -     | I   |                  | 1/4残         |
| 42 | 表採     | 長胴甕  | -     | ⑤   |                  | 1/4残         |
| 43 | F10-20 | 小甕   | 口13.0 | ①   |                  | 1/4残         |
| 44 | C5-5   | 小甕   | 口12.0 | ①   |                  | 1/10残        |
| 45 | C3-1   | 小甕   | 底4.6  | ①   |                  | 1/3残         |
| 46 | F7-14  | 甕    | 底7.8  | ①   |                  | 1/3残         |
| 47 | C3-1   | 鍋?   | 口45.8 | ⑥   | 内外面カキ目<br>外低へラ削り | 1/5残         |
| 48 | C3-1   | 鍋    | 口46.0 | ⑤   | 外面ナデ             | 1/10残        |
| 49 | F10-10 | 鍋    | 口32.8 | ④   |                  | 〃            |
| 50 | F7-9   | 鍋    | 口33.0 | ④   |                  | 〃            |
| 51 | F10-10 | 鍋    | 口32.0 | ④   |                  | 粗いロクロナデ1/10残 |
| 52 | D6-11  | 鍋    | 口26.6 | ⑥   |                  | 1/10残        |
| 53 | F10-9  | 鍋    | -     | ⑤   | 外一叩き             | 1/10残        |
| 54 | F7-23  | 須恵器甕 | -     | II? | 叩き後カキ目           |              |
| 55 | 東側表採   | 須恵器甕 | -     | I   | 内一叩き             |              |
| 56 | F7-9   | 須恵器甕 | -     | I   |                  |              |
| 57 | 東側表採   | 須恵器甕 | -     | I   |                  |              |
| 58 | F10-13 | 須恵器甕 | -     | II? | 内一叩き?            |              |

中・近世陶磁

| 番  | 出土地点   | 器種     | 法量    | 残存   | 文様     | 備考           |
|----|--------|--------|-------|------|--------|--------------|
| 1  | D9-13  | 碗(肥前系) | 口12.0 | 1/10 | 植物     |              |
| 2  | F9-11  | 碗(肥前系) | 口9.0  | 1/5  | 唐草文?   |              |
| 3  | D9-21  | 碗(肥前系) | 口12.0 | 1/10 | 植物     |              |
| 4  | F8-21  | 碗(肥前系) |       | 1/10 | 植物     | 型紙刷り         |
| 5  | E9-9   | 碗(肥前系) | 口11.0 | 1/10 | 雨降り文   |              |
| 6  | F11-5  | 碗(肥前系) | -     | 1/10 | 唐草文?   |              |
| 7  | D19-6  | 碗(肥前系) | 口11.0 | 1/6  |        |              |
| 8  | B2-19  | 碗(銅緑釉) | 口12.0 | 1/10 |        |              |
| 9  | B3-6   | 碗(銅緑釉) | 口12.0 | 1/10 |        |              |
| 10 | C3-4   | 碗(京焼風) | 口12.0 | 1/8  |        |              |
| 11 | D12-8  | 碗(京焼風) | 口11.0 | 1/10 |        |              |
| 12 | F9-11  | 皿(瀬戸焼) | 口15.0 | 1/6  |        |              |
| 13 | C5-17  | 碗      | -     | 1/10 |        |              |
| 14 | C5-14  | 碗(肥前系) | 底     | 1/5  | 横線     |              |
| 15 | F9-11  | 碗(肥前系) | 底5.0  | 1/3  | 横線     |              |
| 16 | 表採     | 碗(肥前系) | 底4.8  | 1/3  | 横線     |              |
| 17 | F6-10  | 皿(肥前系) | 底4.6  | 1/4  | 横線     | 絵唐津<br>蛇目釉剥ぎ |
| 18 | B17-16 | 碗(絵唐津) | 底4.8  | 3/4  |        | 絵唐津<br>蛇目釉剥ぎ |
| 19 | F8-4   | 皿(肥前系) | 底5.4  | 3/4  | 横線     | 蛇目釉剥ぎ        |
| 20 | C4-22  | 碗(肥前系) | 底5.4  | 1/3  | 植物文・横線 |              |
| 21 | D6-19  | 碗(京焼風) | -     | 1/4  |        |              |
| 22 | C19-7  | 碗(銅緑釉) | 底4.4  | 2/3  |        | 蛇目釉剥ぎ        |
| 23 | C4-5   | 碗      | 底5.4  | 1/3  |        |              |
| 24 | B16-23 | 碗(肥前系) | 底3.0  | 4/5  |        |              |
| 25 | F8-21  | 甕      | 口6.6  | 1/10 |        |              |
| 26 | D6-22  | 香炉     | 口5.0  | 1/5  |        |              |
| 27 | D5-23  | 小瓶     | 口3.4  | 1/4  |        | 鉄釉付着         |
| 28 | D7-6   | 小瓶     | -     | 1/4  | 横線     |              |
| 29 | B5-23  | 壺(把手部) | -     | 1/1  |        |              |
| 30 | E9-14  | 壺(瀬戸焼) | 口10.0 | 1/10 |        |              |
| 31 | D6-3   | 短頸壺    | 口8.0  | 1/8  |        | 黒色鉄釉付着       |
| 32 | D17-21 | 壺(肥前系) | 口10.8 | 1/5  |        |              |

|    |        |         |       |      |  |       |
|----|--------|---------|-------|------|--|-------|
| 33 | C17-1  | 鉢       | 口13.0 | 1/10 |  |       |
| 34 | F9-10  | 鉢(肥前系)  | 口24.0 | 1/10 |  |       |
| 35 | F9-20  | 鉢(肥前系)  | -     | 1/10 |  |       |
| 36 | B16-20 | 鉢(肥前系)  | -     | 1/10 |  |       |
| 37 | E16-18 | 摺鉢(肥前系) | 口29.6 | 1/10 |  |       |
| 38 | 表採     | 摺鉢(肥前系) | -     | 1/10 |  |       |
| 39 | C19-1  | 火鉢(土器質) | 口15.0 | 1/10 |  | 外面にスス |

猿額遺跡(図版24~33、第26図)

縄文土器

(1) 遺構内出土

| 番  | 出土地点 | 種別    | 法量                               | 胎土 | 色 | 手法・文様 | 備考   |
|----|------|-------|----------------------------------|----|---|-------|------|
| 1  | 2土坑  | III群A | 口30.5<br>胴25.0<br>底14.5<br>高42.5 | ⑤  | ① | 1類②   | 4/5残 |
| 2  | 2土坑  | III群C | 口7.6<br>底(9.0)<br>高(19.5)        | ⑤  | ④ | 8類②   | 4/5残 |
| 3  | 2土坑  | III群7 | -                                | ①  | ① |       |      |
| 4  | 6土坑  | III群  | -                                | ⑤  | ② |       |      |
| 5  | 3号焼土 | III群C | 口27.5<br>胴25.5                   | ④  | ③ | ①羽状   | 4/5残 |
| 6  | 2号焼土 | III群  | -                                | ④  | ② | ①     |      |
| 7  | 1フラ  | 〃     | 底16.4                            | ⑤  | ② |       | 4/5残 |
| 8  | 1フラ  | 〃     | 底10.6                            | ③  | ② | ②     | 2/5残 |
| 9  | 1フラ  | 〃     | 底9.4                             | ④  | ② |       | 4/5残 |
| 10 | 2フラ  | I群    | 口48.0<br>胴48.6                   | ⑤  | ② | ②     | 2/5残 |
| 11 | 1号埋設 | IV群   | 底9.6                             | ⑤  | ③ | 不明    | 3/5残 |
| 12 | 1号埋設 | 〃     | 底13.0                            | ①  | ① | -     | 4/5残 |

(2) V層出土

|    |                |       |                |   |   |       |      |
|----|----------------|-------|----------------|---|---|-------|------|
| 13 | C6-16          | III群B | 口28.0<br>胴27.6 | ① | ③ | ②2・3類 | 2/5残 |
| 14 | B6-10<br>C6-11 | III群1 | -              | ⑤ | ③ | ①     | 1/5残 |
| 15 | C6-16          | III群6 | -              | ① | ① |       |      |
| 16 | E6-16          | III群  | -              | ④ | ② |       | 繊維含む |
| 17 | C6-16          | III群  | -              | ④ | ③ |       | 繊維含む |
| 18 | C6-16          | III群1 | -              | ① | ① | ②     |      |
| 19 | C6-7           | III群  | 底12.4          | ① | ② | ①     | 3/5残 |
| 20 | C6-7           | III群  | -              | ④ | ② | ①     | 繊維含む |

(3) II層出土

|    |                |       |                                      |   |   |      |      |
|----|----------------|-------|--------------------------------------|---|---|------|------|
| 21 | D7-12          | III群D | 口28.5<br>高29.5<br>底14.0              | ④ | ① | ②7類  | 3/5残 |
| 22 | 下集中            | III群A | 口29.0<br>高38.1<br>胴35.0<br>底14.0     | ④ | ① | ②8類  | 4/5残 |
| 23 | 下集中            | 〃     | 口23.0<br>高34.5<br>胴21.0<br>底11.0     | ⑤ | ② | ②1類  | 3/5残 |
| 24 | E6-1<br>下集中    | 〃     | 口24.0<br>高26.0<br>胴17.5<br>底10.2     | ④ | ④ | ②5類  | 3/5残 |
| 25 | C5-12<br>C6-11 | III群C | 口16.0<br>高(22.5)<br>胴14.6<br>底(11.0) | ④ | ③ | ①    | 3/5残 |
| 26 | C7-1・2         | 〃     | 口21.0                                | ① | ② | ②4類  | 2/5残 |
| 27 | F7-9           | III群A | 口19.0<br>胴15.8                       | ④ | ③ | 不明8類 | 1/5残 |

|    |                |     |                |   |   |       |      |
|----|----------------|-----|----------------|---|---|-------|------|
| 28 | C6-21          | Ⅲ群B | 口12.6          | ⑤ | ③ | ②5類   | 1/5残 |
| 29 | 下集中            | Ⅲ群C | 口25.0          |   |   | 4類    | 2/5残 |
| 30 | 下集中<br>E6-6    | Ⅲ群C | 口25.4          | ① | ③ | ②8類   | 2/5残 |
| 31 | E6-6           | Ⅲ群B | 口20.0          | ⑤ | ③ | 4類    | 1/5残 |
| 32 | E6-6、<br>下集中   | Ⅲ群C | 口23.0<br>肩22.4 | ⑤ | ① | ②5類   | 3/5残 |
| 33 | G9-21          | Ⅲ群  | 底15.4          | ⑤ | ② | ②     | 2/5残 |
| 34 | E5-19          | Ⅲ群B | 口              | ⑤ | ① | ①4類   | 2/5残 |
| 35 | E6-6<br>E5-1   | Ⅲ群B |                | ⑤ | ① | ①4類   | 2/5残 |
| 36 | 上-13・17・<br>20 | Ⅲ群  | 胴20.0          | ① | ③ | ②     | 4/5残 |
| 37 | E6-1           | Ⅱ群  | 口23.0          | ① | ② |       | 1/8残 |
| 38 | B7-2           | Ⅲ群E | 口30.0          | ⑤ | ② | ①     |      |
| 39 | B7-7           | "   | 口28.0          | ① | ③ | ②     |      |
| 40 | B6-3           | "   | 口25.0          | ⑤ | ② | 無節    |      |
| 41 | C6-16          | "   | 口19.0          | ⑤ | ② | ②     |      |
| 42 | 表採             | Ⅲ群5 | -              | ① | ③ |       |      |
| 43 | F5-13          | "   | -              | ① | ② | ②     |      |
| 44 | C6-16          | Ⅲ群E | -              | ① | ③ |       |      |
| 45 | C5-18          | Ⅲ群5 | -              | ⑤ | ② |       |      |
| 46 | F7-9           | "   | -              | ⑤ | ③ |       |      |
| 47 | C6-21          | "   | -              | ① | ② |       |      |
| 48 | E5-22          | "   | -              | ① | ② |       |      |
| 49 | C6-8           | Ⅳ群  | -              | ⑤ | ② | 無節    |      |
| 50 | F9-14          | "   | -              | ① | ③ | 燃糸    |      |
| 51 | C6-21          | "   | -              | ① | ② | 燃糸    | 繊維含む |
| 52 | E6-1           | "   | -              | ① | ③ | 燃糸    |      |
| 53 | C6-16          | "   | -              | ① | ② | ②     |      |
| 54 | 下集中            | Ⅲ群  | -              | ④ | ③ | 無節    |      |
| 55 | B7-2           | "   | -              | ④ | ① | 無節    |      |
| 56 | 表採             | "   | -              | ① | ① | ①     |      |
| 57 | 表採             | "   | -              | ⑤ | ② | ①     |      |
| 58 | B6-4           | "   | -              | ④ | ② | ①     |      |
| 59 | C6-8           | "   | -              | ① | ② | ①     |      |
| 60 | B7-2           | "   | -              | ④ | ① | ①     |      |
| 61 | F6-11          | "   | -              | ④ | ③ | 無文    |      |
| 62 | C6-7           | "   | -              | ⑤ | ② | "     |      |
| 63 | C6-8           | "   | -              | ④ | ① | ②     |      |
| 64 | C6-8           | Ⅳ群  | -              | ④ | ① | ②     |      |
| 65 | 上26            | "   | -              | ④ | ③ |       |      |
| 66 | 表採             | "   | -              | ① | ② | 条線    |      |
| 67 | B7-7           | "   | -              | ⑤ | ② |       |      |
| 68 | B6-13          | "   | -              | ① | ② | 条線    |      |
| 69 | C6-12          | "   | -              | ④ | ① |       |      |
| 70 | G14-17         | "   | -              | ⑤ | ③ |       |      |
| 71 | F10-7          | "   | -              | ⑤ | ① | 網目状燃糸 |      |
| 72 | 上集中3           | "   | -              | ⑤ | ② | "     |      |
| 73 | 上集中            | "   | -              | ④ | ② | 条線    |      |
| 74 | D7-17          | "   | 底6.6           | ① | ② |       | 4/5残 |
| 75 | 下集中            | "   | 底7.4           | ④ | ⑤ |       | 4/5残 |
| 76 | C6-7           | "   | -              | ② | ② |       |      |
| 77 | E6-3           | "   | -              | ⑥ | ③ |       |      |

## 石器

### (1) 遺構内出土

| 番  | 出土地点 | 種別   | 長さ  | 幅   | 厚さ  | 重量    | 石材  | 割片 | 備考      |
|----|------|------|-----|-----|-----|-------|-----|----|---------|
| 1  | I フラ | 剥片   | 47  | 31  | 18  | 15.6  | 頁岩  | 縦  |         |
| 2  | I フラ | 剥片   | 36  | 29  | 21  | 9.8   | "   | 縦  |         |
| 3  | I フラ | 剥片   | 124 | 76  | 30  | 450.0 | "   | 縦  | 1・2接合   |
| 4  | I フラ | 磨C1b | 140 | 102 | 40  | 96    | 花崗  |    |         |
| 5  | I フラ | 磨F   | 124 | 76  | 30  | 45.0  | 安山  |    |         |
| 6  | I フラ | 磨A2  | 184 | 43  | 94  | 184   | 花崗  |    |         |
| 7  | I フラ | 磨C2a | 55  | 82  | 136 | 91.0  | 安山  |    |         |
| 8  | 4土坑  | 剥片   | 46  | 35  | 18  | 19.7  | メノウ | 縦  |         |
| 9  | "    | "    | 37  | 24  | 9   | 5.9   | "   | 縦  |         |
| 10 | "    | "    | 31  | 22  | 6   | 2.9   | "   | 縦  |         |
| 11 | "    | "    | 23  | 21  | 15  | 6.6   | "   | 縦  |         |
| 12 | "    | "    | 36  | 25  | 10  | 8.4   | "   | 縦  |         |
| 13 | "    | "    | 24  | 19  | 9   | 2.8   | "   | 縦  |         |
| 14 | "    | "    | 31  | 14  | 7   | 2.3   | "   | 縦  |         |
| 15 | "    | "    | 31  | 14  | 7   | 2.0   | "   | 縦  |         |
| 16 | "    | "    | 24  | 23  | 8   | 3.1   | "   | 縦  |         |
| 17 | "    | "    | 19  | 15  | 6   | 1.9   | "   | 縦  |         |
| 18 | "    | "    | 19  | 16  | 10  | 2.5   | "   | 縦  |         |
| 19 | "    | "    | 25  | 15  | 7   | 1.3   | "   | 縦  |         |
| 20 | "    | "    | 18  | 14  | 8   | 0.2   | "   | 縦  |         |
| 21 | "    | "    | 20  | 11  | 5   | 1.0   | "   | 縦  |         |
| 22 | "    | "    | 10  | 15  | 5   | 0.2   | "   | 縦  |         |
| 23 | "    | "    | 21  | 11  | 4   | 0.8   | "   | 縦  |         |
| 24 | "    | "    | 18  | 14  | 8   | 0.8   | "   | 縦  |         |
| 25 | "    | "    | 27  | 4   | 6   | 0.4   | "   | 縦  |         |
| 26 | "    | "    | 37  | 21  | 11  | 6.7   | "   | 縦  |         |
| 27 | "    | "    | 19  | 13  | 8   | 11.4  | "   | 縦  |         |
| 28 | "    | "    | 21  | 19  | 12  | 18.1  | "   | 縦  | 26・27接合 |
| 29 | I 風倒 | 磨A1  | 135 | 96  | 46  | 870   | 安山  | 縦  |         |
| 30 | "    | 磨Ga  | 161 | 75  | 41  | 760   | 安山  | 縦  |         |
| 31 | 2 風倒 | 不C   | 65  | 51  | 20  | 36.1  | 頁岩  | 縦  |         |

### (2) V層出土

|    |       |     |    |    |    |      |    |   |  |
|----|-------|-----|----|----|----|------|----|---|--|
| 32 | C6-16 | 不A  | 30 | 31 | 14 | 9.3  | 鉄石 | 横 |  |
| 33 | D5-19 | 不F  | 38 | 41 | 10 | 7.3  | "  | 縦 |  |
| 34 | C6-16 | 不F  | 41 | 26 | 6  | 3.7  | 頁岩 | 縦 |  |
| 35 | C6-16 | 不F  | 35 | 58 | 17 | 22.6 | "  | 横 |  |
| 36 | D2-12 | 磨Gc | 63 | 45 | 22 | 64.0 | 安山 | 縦 |  |

### (3) II層出土

|    |        |     |     |    |    |      |    |   |  |
|----|--------|-----|-----|----|----|------|----|---|--|
| 37 | D6-7   | 彫刻刀 | 80  | 26 | 12 | 7.8  | 頁岩 | 縦 |  |
| 38 | 上⑥11   | 石刃  | 96  | 25 | 11 | 16.7 | "  | 縦 |  |
| 39 | E13-13 | 尖頭器 | 144 | 53 | 21 | 60.3 | 鉄石 | 縦 |  |
| 40 | 上⑥2    | "   | 102 | 35 | 10 | 30.4 | 頁岩 | 縦 |  |
| 41 | B6-4   | "   | 87  | 30 | 16 | 28.9 | "  | 縦 |  |
| 42 | 下集中    | "   | 33  | 16 | 5  | 17.0 | "  | 縦 |  |
| 43 | 下集中    | 石錐  | 82  | 55 | 22 | 86.0 | 流紋 | 縦 |  |
| 44 | C6-16  | "   | 57  | 26 | 10 | 10.5 | 緑凝 | 縦 |  |
| 45 | G13-17 | ピエス | 41  | 31 | 16 | 14.5 | 頁岩 | 縦 |  |
| 46 | F7-2   | 籠   | 73  | 42 | 18 | 54.3 | "  | 縦 |  |
| 47 | D5-6   | "   | 75  | 41 | 18 | 47.6 | "  | 縦 |  |
| 48 | 下274   | "   | 83  | 40 | 18 | 45.5 | "  | 縦 |  |
| 49 | G14-16 | 打斧  | 81  | 54 | 22 | 71.6 | 鉄石 | 縦 |  |

|    |        |      |     |     |     |        |    |         |  |
|----|--------|------|-----|-----|-----|--------|----|---------|--|
| 50 | D7-21  | 磨斧   | 216 | 75  | 45  | 1048.3 | 安山 |         |  |
| 51 | G13-25 | "    | 137 | 62  | 34  | 49.0   | "  | 刃部欠く    |  |
| 52 | 上集中    | "    | 106 | 49  | 32  | 24.0   | ?  | 未製品     |  |
| 53 | G13-10 | "    | 119 | 48  | 24  | 30.0   | 凝灰 | 刃部欠く    |  |
| 54 | G11-2  | "    | 58  | 53  | 26  | 10.6   | 頁岩 | 基部欠く    |  |
| 55 | 上集中    | "    | 62  | 47  | 25  | 99.5   | "  | 基部欠く    |  |
| 56 | G12-13 | 不A   | 69  | 49  | 23  | 58.7   | "  | 縦       |  |
| 57 | 下集中    | 不A   | 62  | 60  | 15  | 39.6   | "  | 縦       |  |
| 58 | 下段表採   | "    | 28  | 25  | 8   | 3.4    | "  | 縦       |  |
| 59 | C6-12  | "    | 35  | 20  | 7   | 4.9    | 玉髓 | 縦       |  |
| 60 | D6-19  | 不B   | 55  | 40  | 10  | 17.2   | 緑凝 | 縦       |  |
| 61 | 2風倒    | "    | 75  | 45  | 12  | 27.4   | "  | 縦       |  |
| 62 | 上集中    | "    | 127 | 71  | 19  | 98.0   | "  | 縦       |  |
| 63 | B7-2   | 不C   | 47  | 38  | 11  | 15.5   | 頁岩 | 縦       |  |
| 64 | F6-1   | 不D   | 65  | 43  | 12  | 14.9   | "  | 縦       |  |
| 65 | G13-23 | "    | 45  | 31  | 8   | 7.4    | "  | 縦       |  |
| 66 | D6-20  | "    | 40  | 21  | 10  | 5.5    | 緑凝 | 縦       |  |
| 67 | C6-6   | 不E   | 61  | 66  | 17  | 34.6   | 凝灰 | 横       |  |
| 68 | D6-2   | "    | 32  | 26  | 10  | 7.8    | 頁岩 | 縦       |  |
| 69 | D6-6   | 不F   | 50  | 33  | 21  | 20.7   | "  | 縦       |  |
| 70 | 下集中    | "    | 90  | 48  | 17  | 60.3   | "  | 縦       |  |
| 71 | D7-4   | "    | 101 | 71  | 37  | 253.9  | 流紋 | 縦       |  |
| 72 | D7-4   | "    | 76  | 77  | 30  | 161.6  | "  | 縦       |  |
| 73 | D7-4   | "    | 134 | 74  | 58  | 415.5  | "  | 71・72接合 |  |
| 74 | E6-1   | "    | 78  | 83  | 40  | 218.1  | 頁岩 | 縦       |  |
| 75 | 下段表採   | 不?   | 77  | 27  | 15  | 27.1   | "  | 縦       |  |
| 76 | D5-14  | "    | 45  | 30  | 7   | 7.7    | "  | 縦       |  |
| 77 | F3-8   | 礫器   | 92  | 68  | 16  | 591.2  | "  |         |  |
| 78 | 下集中    | 磨A1  | 132 | 99  | 43  | 720.0  | 安山 | 底縁欠損    |  |
| 79 | F6-1   | 磨A1  | 110 | 75  | 45  | 420.0  | "  | タール付着   |  |
| 80 | C6-15  | 磨A2  | 168 | 90  | 54  | 1010.0 | "  |         |  |
| 81 | C6-10  | 磨A2  | 128 | 85  | 42  | 700.0  | "  |         |  |
| 82 | D6-7   | 磨A2  | 142 | 88  | 46  | 880.0  | "  |         |  |
| 83 | F12-8  | 磨C1a | 103 | 84  | 40  | 480    | 花崗 |         |  |
| 84 | E7-13  | 磨C1a | 145 | 74  | 45  | 700    | 砂岩 |         |  |
| 85 | 斜面トレ   | 磨C2a | 156 | 63  | 55  | 670    | 花崗 |         |  |
| 86 | II層一括  | 磨E   | 141 | 74  | 45  | 700    | 砂岩 |         |  |
| 87 | E6-2   | 磨E   | 114 | 80  | 53  | 590    | 花崗 |         |  |
| 88 | 下集中    | 磨Ga  | 133 | 42  | 33  | 240    | 砂岩 |         |  |
| 89 | F3-8   | 磨Ga  | 161 | 62  | 51  | 710    | 閃緑 |         |  |
| 90 | F4-23  | 磨Ga  | 190 | 81  | 29  | 560    | 頁岩 |         |  |
| 91 | D5-13  | 石皿   | 676 | 488 | 105 | 40500  | 安山 |         |  |
| 92 | 下段表採   | "    | 414 | 295 | 82  | 13600  | 砂岩 |         |  |
| 93 | 上集中    | "    | 259 | 148 | 60  | 3710   | 安山 |         |  |
| 94 | F3-8   | 石核   | 66  | 78  | 42  | 205.9  | 頁岩 |         |  |
| 95 | E4-23  | 石核   | 52  | 52  | 31  | 95.9   | "  |         |  |
| 96 | F3-13  | 搬入礫  | 185 | 173 | 47  | 2000   | 閃緑 | タール付着   |  |

中・近世陶磁

| 出土地点    | 器種     | 法量                   | 残存   | 文様     | 備考   |
|---------|--------|----------------------|------|--------|------|
| 1 F7-17 | 灯明皿    | 口8.4<br>高1.4<br>底4.8 | 1/2  |        | 油付着  |
| 2 D5-15 | 碗(肥前系) | 口10.0                | 1/10 | 植物文    |      |
| 3 D5-18 | 碗(肥前系) |                      | 1/10 | 植物文    |      |
| 4 表採    | 碗(肥前系) | 口9.5                 | 1/5  | 植物文    |      |
| 5 表採    | 碗(肥前系) | 口9.0                 | 1/10 | 菊唐草文?  | 型紙刷り |
| 6 D5-18 | 碗(肥前系) | 口9.0                 | 1/10 | 植物文    |      |
| 7 B7-7  | 碗(肥前系) |                      | 1/10 | 蚊屋吊草文? |      |
| 8 F6-16 | 碗(肥前系) |                      | 1/10 | 植物文    |      |

|    |        |         |       |      |        |       |
|----|--------|---------|-------|------|--------|-------|
| 9  | D5-24  | 碗(京風焼)  | 口10.0 | 1/10 |        |       |
| 10 | D5-15  | 碗       | -     | 1/10 | 銅緑釉    |       |
| 11 | D5-15  | 碗(肥前系)  | 底4.0  | 1/4  | 横線     |       |
| 12 | F5-16  | 碗(肥前系)  | 底5.0  | 1/5  |        | 蛇目釉剥ぎ |
| 13 | 表採     | 碗(肥前系)  | 底4.0  | 1/5  |        |       |
| 14 | D7-23  | 碗       | 底5.0  | 1/3  |        | 蛇目釉剥ぎ |
| 15 | 表採     | 小瓶      | 口4.0  | 1/4  | 内外面黒鉄釉 |       |
| 16 | F5-15  | 短頸壺     | 口8.0  | 1/10 | 内外面黒鉄釉 |       |
| 17 | D6-21  | 播鉢(肥前系) | 口30.0 | 1/10 | 内面に沈線  |       |
| 18 | D7-231 | 播鉢(肥前系) | 口24.0 | 1/10 |        |       |

中棚遺跡(図版36~41)

縄文土器

| 出土地点     | 種別   | 法量             | 胎土 | 色 | 手法 | 備考   |
|----------|------|----------------|----|---|----|------|
| 1 C4-12  | I群 a | 口35.0<br>底14.0 | ③  | ⑤ | ①  | 1/5残 |
| 2 B4-3   | I群 b |                | ④  | ③ |    |      |
| 3 B4-18  | "    |                | ⑤  | ③ |    |      |
| 4 B4-21  | "    |                | ④  | ③ |    |      |
| 5 D4-21  | "    |                | ④  | ① |    |      |
| 6 B4-24  | "    |                | ⑤  | ② |    |      |
| 7 B4-3   | "    |                | ⑤  | ① |    |      |
| 8 D4-17  | "    |                | ⑤  | ① |    |      |
| 9 C4-19  | I群 c |                | ⑤  | ② |    |      |
| 10 D4-21 | "    |                | ⑤  | ① |    |      |
| 11 B4-2  | I群   |                | ④  | ① |    |      |
| 12 C4-2  | "    |                | ⑤  | ① | ①  |      |
| 13 B4-2  | "    |                | ⑤  | ③ | ①  |      |
| 14 B3-3  |      |                | ⑥  | ① |    |      |
| 15 D8-23 | "    |                | ⑤  | ① |    |      |
| 16 D5-2  | "?   |                | ⑤  | ② |    |      |
| 17 B3-19 | "    | 底10.0          | ⑤  | ① | 無節 | 1/5残 |
| 18 Iフラ   | II群  |                | ⑤  | ① |    | 1/4残 |

石器

(1) 遺構内出土

| 出土地点  | 種別 | 長さ  | 幅   | 厚さ | 重量    | 石材 | 割片 | 備考      |
|-------|----|-----|-----|----|-------|----|----|---------|
| 1 5土坑 | 剥片 | 57  | 41  | 15 | 32.3  | 頁岩 | 縦  | 4・7と接合  |
| 2 "   | "  | 68  | 60  | 18 | 38.3  | "  | "  |         |
| 3 "   | "  | 70  | 69  | 23 | 62.4  | "  | "  |         |
| 4 "   | "  | 102 | 72  | 30 | 107.2 | "  | "  | 1・7と接合  |
| 5 "   | "  | 36  | 72  | 15 | 39.2  | "  | 横  |         |
| 6 "   | "  | 130 | 118 | 31 | 286.6 | "  | 縦  |         |
| 7 "   | "  | 97  | 104 | 36 | 183.5 | "  | 横  | 1・4と接合  |
| 8 "   | "  | 95  | 105 | 26 | 154.6 | "  | "  |         |
| 9 "   | "  | 62  | 110 | 20 | 98.6  | "  | "  |         |
| 10 "  | "  | 97  | 95  | 28 | 162.3 | "  | 縦  |         |
| 11 "  | "  | 111 | 174 | 38 | 353.1 | "  | "  | 1・4・7接合 |

(2) II層出土

|    |       |     |    |    |    |      |     |   |
|----|-------|-----|----|----|----|------|-----|---|
| 12 | C6-18 | 石鎌  | 22 | 20 | 4  | 1.3  | 頁岩  | 縦 |
| 13 | B2-5  | 石匙  | 35 | 20 | 8  | 2.3  | 緑凝  | 縦 |
| 14 | C3-21 | 石匙  | 22 | 16 | 5  | 1.0  | メノウ | 縦 |
| 15 | C3-21 | 石匙  | 45 | 34 | 13 | 16.9 | 頁岩  | 縦 |
| 16 | C4-21 | ピエス | 45 | 36 | 11 | 14.9 | 凝灰  | 縦 |
| 17 | C5-12 | 石錐  | 64 | 56 | 15 | 32.7 | 凝灰  | 縦 |
| 18 | C6-17 | 石錐  | 68 | 82 | 30 | 86.7 | 凝灰  | 横 |
| 19 | B2-19 | 籠   | 76 | 42 | 16 | 40.2 | 頁岩  | 縦 |
| 20 | B3-6  | 籠   | 41 | 66 | 18 | 45.8 | 鉄石  | 縦 |

|    |       |      |   |     |     |    |        |    |   |       |
|----|-------|------|---|-----|-----|----|--------|----|---|-------|
| 21 | D4-7  | 不    | A | 46  | 44  | 13 | 17.0   | 頁岩 | 縦 |       |
| 22 | E5-11 | 不    | A | 73  | 42  | 23 | 60.7   | 〃  | 縦 |       |
| 23 | B3-15 | 不    | B | 43  | 39  | 10 | 12.3   | 〃  | 縦 |       |
| 24 | 表採    | 不    | B | 43  | 39  | 10 | 5.1    | 〃  | 縦 |       |
| 25 | C3-11 | 不    | B | 95  | 54  | 26 | 63.8   | 凝灰 | 縦 |       |
| 26 | E5-12 | 不    | C | 67  | 37  | 16 | 27.8   | 頁岩 | 縦 |       |
| 27 | D4-18 | 不    | C | 54  | 23  | 11 | 53.8   | 〃  | 縦 |       |
| 28 | B2-18 | 不    | D | 47  | 99  | 12 | 34.0   | 凝灰 | 横 |       |
| 29 | D8-3  | 不    | D | 43  | 71  | 17 | 40.4   | 頁岩 | 横 |       |
| 30 | D4-23 | 不    | D | 44  | 54  | 11 | 23.1   | 〃  | 縦 |       |
| 31 | C6-17 | 不    | D | 42  | 42  | 16 | 19.9   | 〃  | 縦 |       |
| 32 | D4-24 | 不    | F | 49  | 78  | 19 | 47.2   | 〃  | 横 |       |
| 33 | D4-13 | 不    | F | 53  | 47  | 18 | 31.5   | 〃  | 縦 |       |
| 34 | E9-18 | 不    | F | 95  | 78  | 28 | 168.7  | 凝灰 | 縦 |       |
| 35 | D8-8  | 不    | G | 80  | 47  | 24 | 91.0   | 頁岩 | 縦 |       |
| 36 | C5-3  | 不    | G | 46  | 36  | 12 | 21.3   | 〃  | 縦 |       |
| 37 | D5-21 | 不    | H | 45  | 34  | 10 | 8.5    | 凝灰 | 縦 |       |
| 38 | B3-17 | 不    | H | 62  | 37  | 8  | 12.2   | 〃  | 縦 |       |
| 39 | 表採    | 不    | H | 70  | 33  | 21 | 16.2   | 頁岩 | 縦 |       |
| 40 | B3-17 | 不    | ? | 70  | 51  | 22 | 78.7   | 鉄石 | 縦 |       |
| 41 | E7-11 | 不    | ? | 68  | 41  | 15 | 42.2   | 頁岩 | 縦 |       |
| 42 | B4-9  | 不    | ? | 56  | 43  | 13 | 27.8   | 凝灰 | 縦 |       |
| 43 | B3-17 | 不    | ? | 52  | 41  | 11 | 13.7   | 頁岩 | 縦 |       |
| 44 | C6-21 | 不    | ? | 42  | 38  | 17 | 22.3   | 〃  | 縦 |       |
| 45 | B2-21 | 礫器   |   | 97  | 122 | 40 | 429.2  | 凝灰 | - |       |
| 46 | E8-9  | 磨斧   |   | 129 | 57  | 25 | 291.5  | 瓦碎 | - |       |
| 47 | C3-11 | 磨A2  |   | 118 | 73  | 27 | 407.8  | 安山 | - |       |
| 48 | B3-1  | 磨A4  |   | 109 | 58  | 42 | 400.0  | 〃  | - |       |
| 49 | C5-9  | 磨A2  |   | 101 | 78  | 53 | 538.6  | 〃  | - |       |
| 50 | C3-7  | 磨A2  |   | 123 | 94  | 53 | 850.3  | 花崗 | - |       |
| 51 | 表採    | 磨A2  |   | 64  | 59  | 53 | 154.7  | 凝灰 | - | 半損    |
| 52 | B3-3  | 磨A3  |   | 115 | 76  | 44 | 541.2  | 安山 | - |       |
| 53 | C4-2  | 磨A2  |   | 199 | 78  | 45 | 776.3  | 〃  | - |       |
| 54 | C5-2  | 磨B1  |   | 99  | 96  | 43 | 590.0  | 〃  | - |       |
| 55 | C5-4  | 磨B2  |   | 143 | 86  | 52 | 940.0  | 安山 | - |       |
| 56 | 表採    | 磨C1b |   | 133 | 74  | 38 | 586.3  | 安山 | - |       |
| 57 | 表採    | 磨C1b |   | 157 | 85  | 56 | 1191.0 | 花崗 | - |       |
| 58 | B3-13 | 磨C2a |   | 165 | 76  | 50 | 943.1  | 安山 | - |       |
| 59 | C5-9  | 磨C2a |   | 122 | 73  | 38 | 478.5  | 〃  | - |       |
| 60 | B2-18 | 磨C2a |   | 104 | 83  | 46 | 628.1  | 花崗 | - | 基部を欠く |
| 61 | B3-18 | 磨C3a |   | 155 | 81  | 45 | 815.9  | 安山 | - |       |
| 62 | C4-22 | 磨D2  |   | 132 | 88  | 43 | 764.1  | 〃  | - |       |
| 63 | C4-20 | 磨Gb  |   | 109 | 85  | 60 | 715.1  | 花崗 | - | 基部を欠く |
| 64 | 表採    | 磨Gb  |   | 91  | 81  | 44 | 454.1  | 安山 | - |       |
| 65 | B3-3  | 磨Gb  |   | 79  | 70  | 50 | 381.2  | 花崗 | - | 両端欠く  |
| 66 | C4-22 | 磨Gb  |   | 145 | 91  | 42 | 783.9  | 安山 | - |       |
| 67 | B3-6  | 磨Gc  |   | 173 | 73  | 45 | 714.4  | 頁岩 | - | 基部半損  |
| 68 | E5-19 | 石皿   |   | 312 | 214 | 82 | 9950   | 花崗 | - |       |
| 69 | 表採    | 石皿   |   | 256 | 142 | 66 | 54000  | 安山 | - | 半損    |
| 70 | C6-25 | 石皿   |   | 191 | 176 | 69 | 3500   | 花崗 | - | 被熱    |
| 71 | D6-2  | 石皿   |   | 127 | 104 | 55 | 746.0  | 安山 | - |       |
| 72 | B2-15 | 砥石   |   | 45  | 38  | 30 | 95.3   | ?  | - | 半損    |
| 73 | C8-17 | 砥石   |   | 46  | 34  | 8  | 18.0   | 粘板 | - | 半損    |

中・近世陶磁

| 番 | 出土地点  | 種別     | 法量   | 残存   | 文様 | 備考   |
|---|-------|--------|------|------|----|------|
| 1 | D5-1  | 青磁碗    | -    | 1/10 |    |      |
| 2 | C6-18 | 碗      | 口7.6 | 1/6  |    | 鉄釉付着 |
| 3 | 表採    | 碗(肥前系) | 口8.6 | 1/6  | 植物 |      |



牧ノ沢遺跡 (図版44)

縄文土器

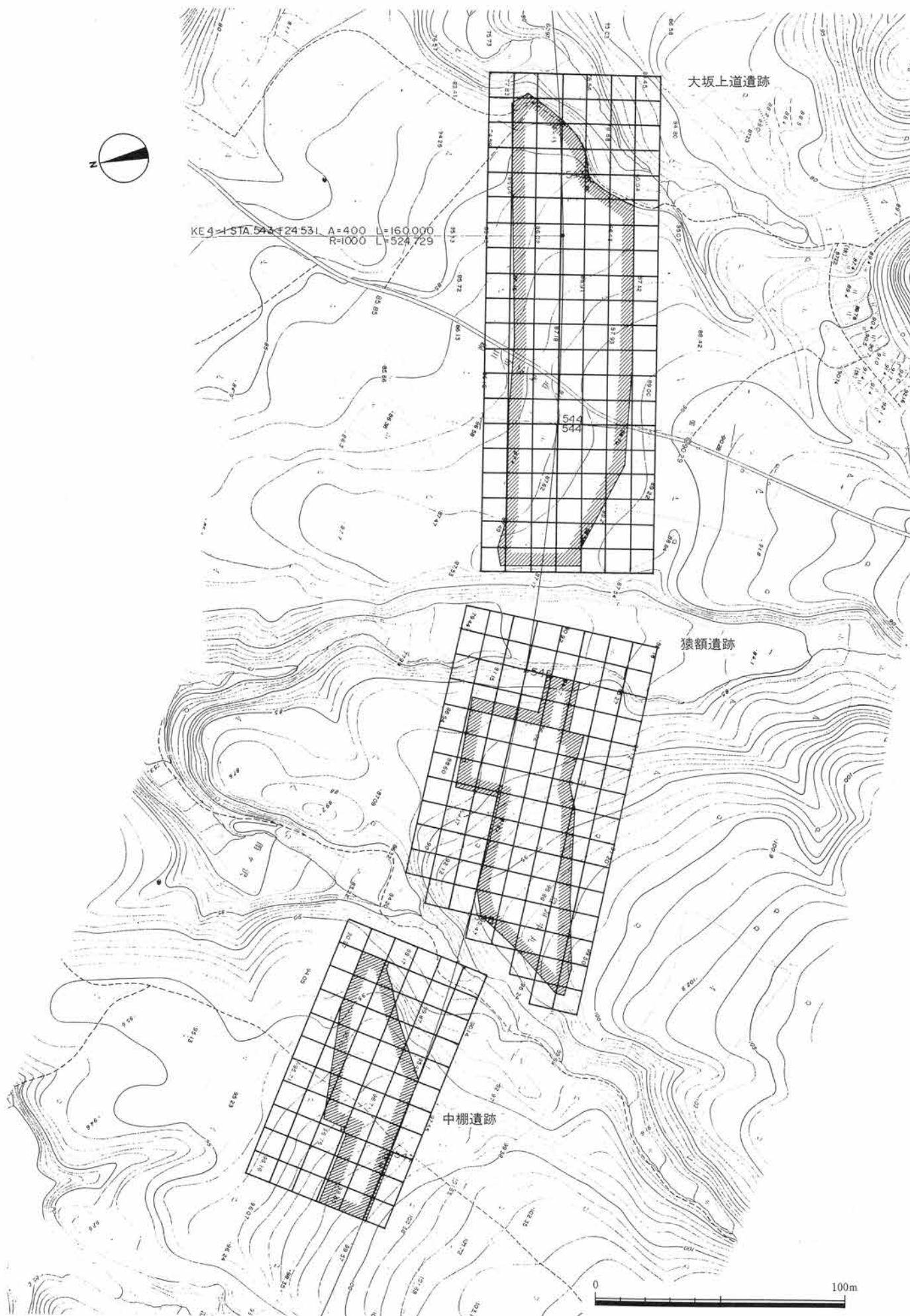
|    | 出土地点  | 種別 | 法量    | 胎土 | 色 | 手法 | 備考 |
|----|-------|----|-------|----|---|----|----|
| 1  | C 3   |    |       | ⑤  | ③ | ②  |    |
| 2  | B 3   |    |       | ③  | ③ | ②  |    |
| 3  | B4-22 |    |       | ④  | ③ | ②  |    |
| 4  | C 1   |    | 底8.8  | ②  | ② | ②  |    |
| 5  | C4-21 |    |       | ④  | ④ | ②  |    |
|    | C3-5  |    |       |    |   |    |    |
| 6  | C4-21 |    | 口20.0 | ③  | ② | ②  |    |
| 7  | C 3   |    |       | ④  | ② |    |    |
| 8  | 2 風倒  |    |       | ④  | ② |    |    |
| 9  | 2 風倒  |    |       | ①  | ② | ②  |    |
| 10 | C 2   |    |       | ①  | ② | ②  |    |
| 11 | 2-3風倒 |    |       | ④  | ③ |    |    |
| 12 | 2 風倒  |    |       | ④  | ② |    |    |
| 13 | 2 風倒  |    |       | ④  | ② |    |    |
| 14 | 2 風倒  |    |       | ①  | ③ |    |    |
| 15 | B 3   |    |       | ④  | ② |    |    |
| 16 | D4-18 |    |       | ⑤  | ③ |    |    |
| 17 | A 2   |    |       | ④  | ② |    |    |
| 18 | C 3   |    |       | ①  | ② |    |    |
| 19 | C1-2  |    |       | ①  | ① |    |    |
| 20 | C 2   |    |       | ④  | ① |    |    |
| 21 | 2 風倒  |    | 底10.6 | ⑤  | ② | ②  |    |
| 22 | C 2   |    |       | ①  | ① |    |    |

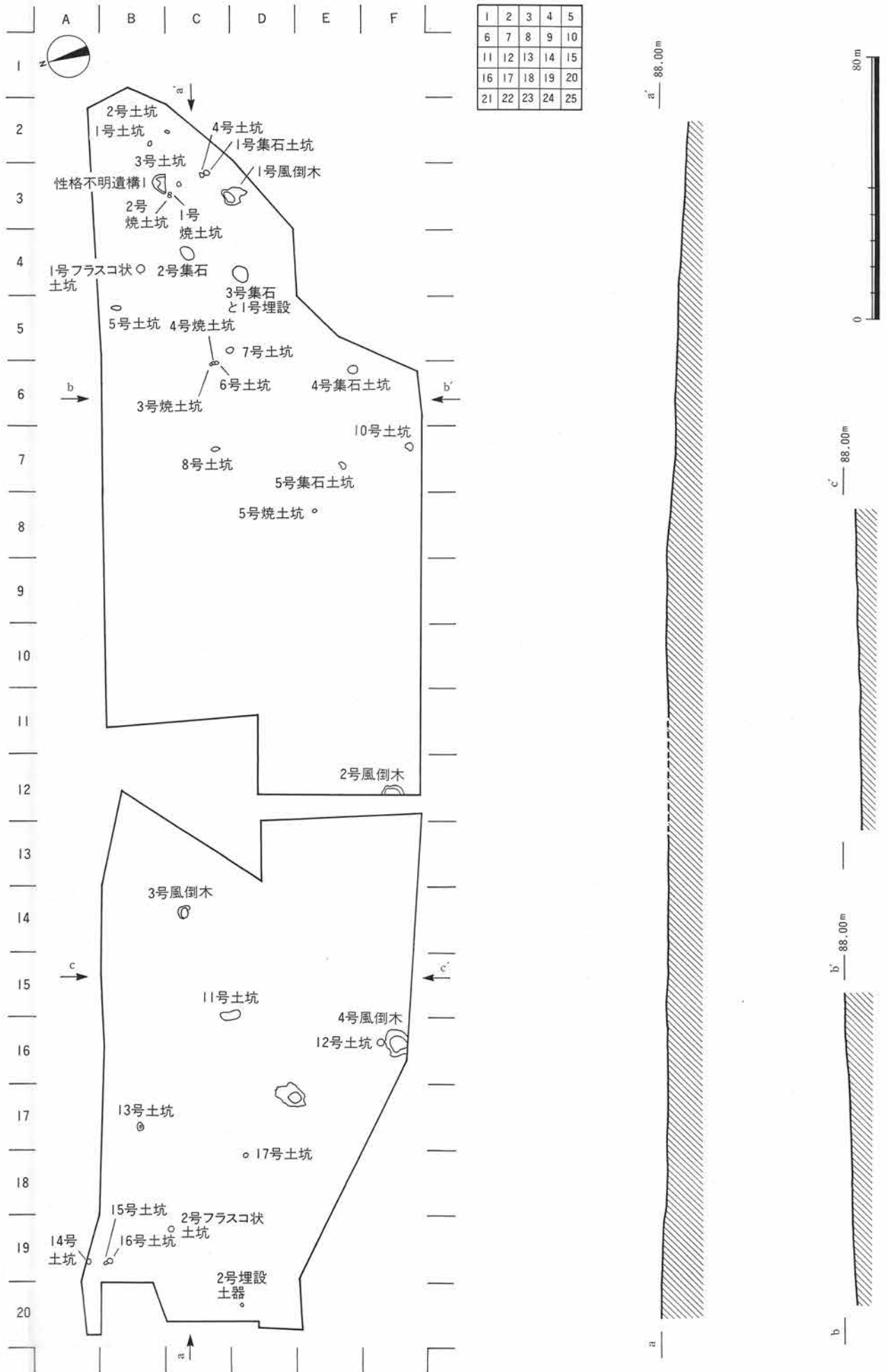
## 図 版

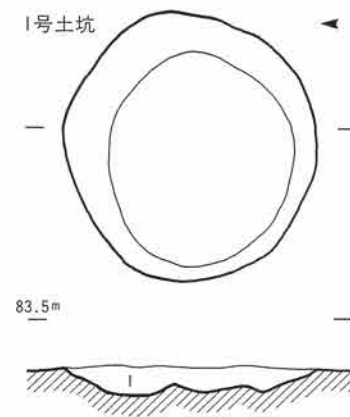
### 凡 例

- 1 ここにはおもな遺構・遺物の実測図と写真をおさめる。
- 2 遺構は種別毎に一連番号を付し、土坑、集石土坑、埋設土器などで分類した。
- 3 遺物は、遺跡毎に一連番号を付し、写真もこれにしたがった。
- 4 遺物実測図において、口径復元が困難なものは、中心線と外形線を離すか、断面と外形線のみ表示した。
- 5 実測図・写真の縮尺は各図版に示した。
- 6 石器の使用痕跡である磨痕はで、敲打痕はで表示した。

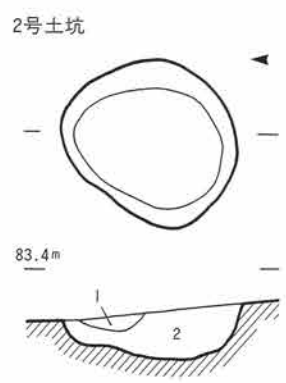




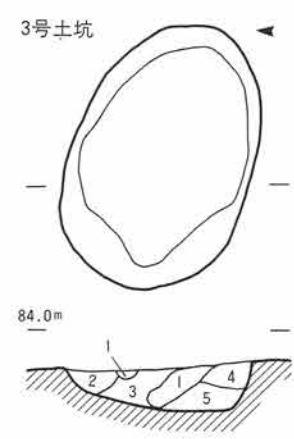




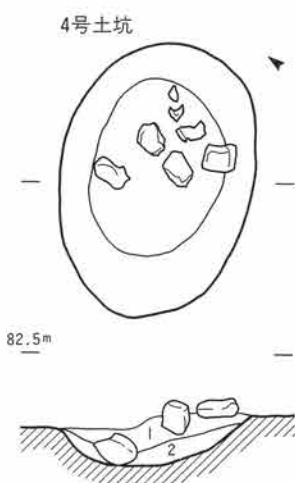
1 灰褐色土 粘性・しまり共になし。少量の炭化物を含む。



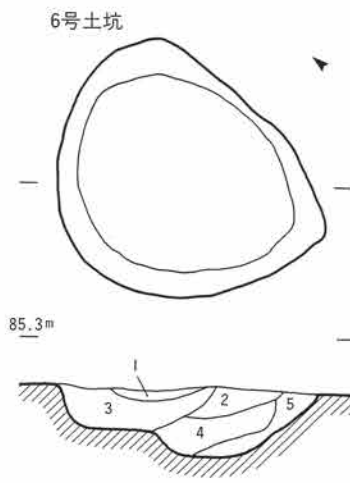
1 黒褐色土 粘性・しまり共に欠ける。少量の炭化物を含む。  
2 暗褐色土 粘性・しまり共に欠ける。



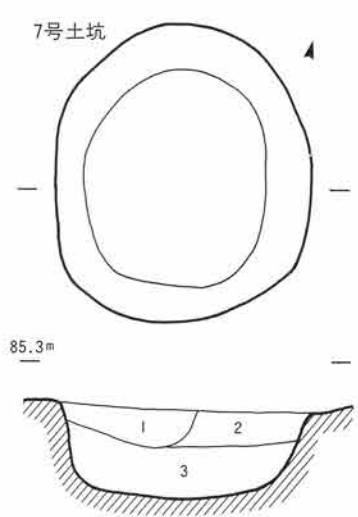
1 赤褐色土 粘性・しまり共になし。多量の焼土粒を含む。  
2 暗褐色土 粘性をもち、しまる。微量の炭化粒・焼土粒を含む。  
3 暗褐色土 粘性をもち、しまる。少量の焼土粒を含む。  
4 褐色土 粘性・しまり共に欠く。  
5 暗褐色土 粘性をもち、しまる。微量の焼土粒を含む。



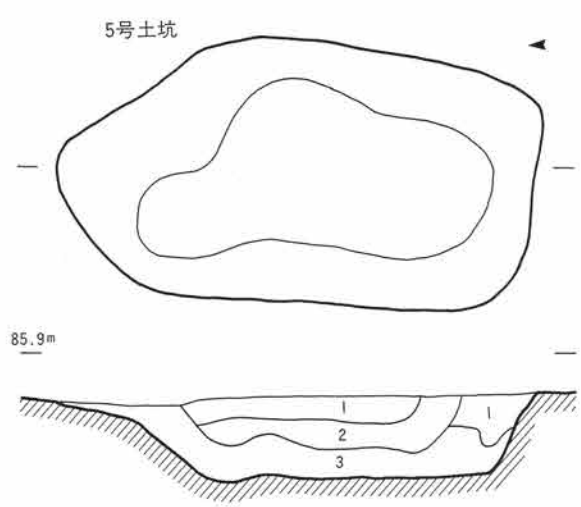
1 黒褐色土 粘性をもち、しまる。多量の焼礫・炭化材を含む。  
2 暗褐色土 粘性をもち、しまる。微量の炭化粒(φ1mm)を含む。



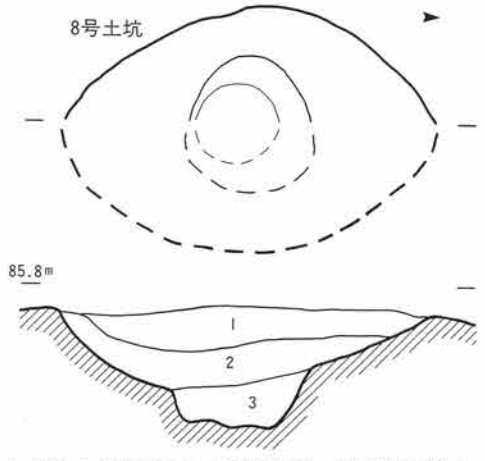
1 暗褐色土 粘性に欠け、しまりなし。微量の炭化粒・焼土粒を含む。  
2 暗褐色土 粘性に欠け、しまりなし。少量の炭化粒・焼土粒を含む。  
3 暗褐色土 粘性に欠け、しまりなし。少量の炭化粒・焼土粒を含む。2層よりやや暗い。  
4 暗褐色土 粘性に欠け、しまりなし。多量の炭化粒を含む。  
5 暗黄褐色土 粘性に欠け、しまりなし。多量のローム粒・微量の焼土粒を含む。



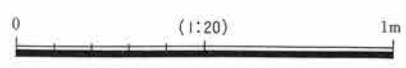
1 暗黄褐色土 粘性・しまり共に欠ける。多量のロームブロックを含む。  
2 暗黄褐色土 やや粘性に欠けるが、しまる。多量のロームブロックを含む。  
3 暗黄褐色土 粘性をもち、しまる。多量のロームブロックを含む。



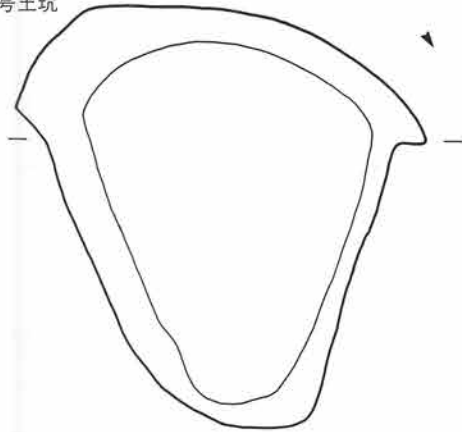
1 黄褐色土 粘性に欠けるが、しまる。  
2 暗褐色土 粘性に欠けるが、硬くしまる。基本層序Ⅳ層とⅤ層の混合層。  
3 灰褐色土 粘性に富み、硬くしまる。基本層序Ⅴ層に相当。



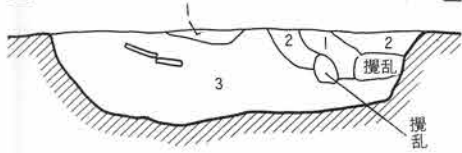
1 黒褐色土 粘性をもつが、しまりに欠ける。少量の炭化材を含む。  
2 黒褐色土 粘性に富み、しまる。多量の炭化材。微量のローム粒を含む。  
3 暗褐色土 粘性・しまり共に欠ける。少量のローム粒を含む。



10号土坑

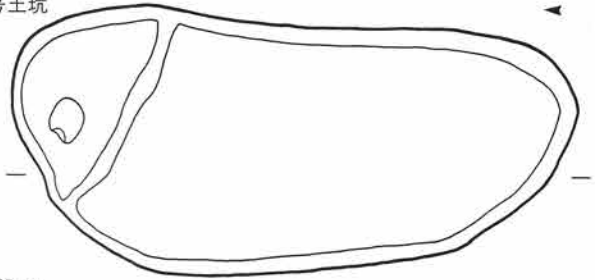


86.7m



- 1 暗褐色土 粘性・しまり共やや欠ける。少量の礫(小)を含む。
- 2 黒褐色土 粘性・しまり共に欠ける。木根の可能性有り。
- 3 暗褐色土 粘性・しまり共やや欠ける。少量の木炭粒・木炭片を含む。

11号土坑

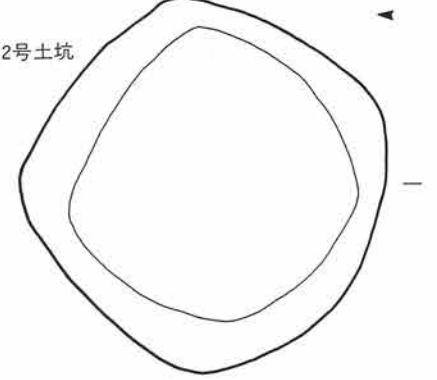


87.0m

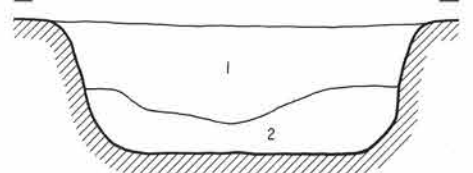


- 1 黒褐色土 粘性・しまりにやや欠ける。

12号土坑

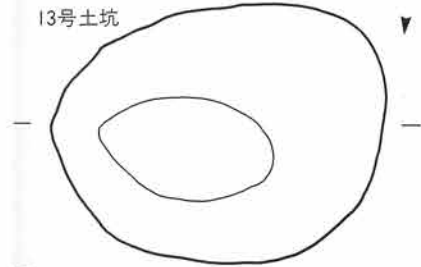


87.9m

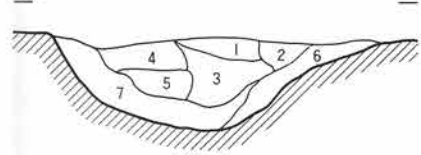


- 1 黒褐色土 粘性・しまり共に欠ける。多量のロームブロックを含む。
- 2 褐色土 粘性・しまり共に欠ける。多量のローム粒を含む。

13号土坑

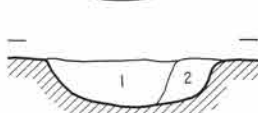
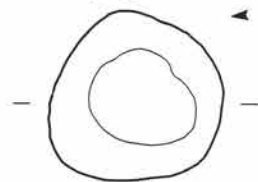


88.2m



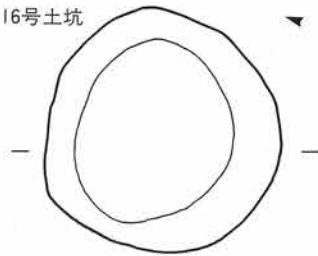
- 1 黒褐色土 粘性・しまり共になし。少量の炭化物を含む。
- 2 黒褐色土 粘性をもつが、ややしまりに欠ける。
- 3 黒褐色土 粘性をもつが、しまりに欠く。
- 4 暗褐色土 粘性をもつが、ややしまりに欠く。
- 5 暗褐色土 粘性をもつが、ややしまりに欠く。微量の焼土粒を含む。
- 6 暗褐色土 粘性をもつが、ややしまりに欠く。少量の沼沢火山灰層を含む。
- 7 灰黄褐色土 粘性・しまり共になし。沼沢火山灰層と基本層序V層の混合層。

14号土坑



- 1 黒褐色土 粘性をもち、しまる。微量の焼土粒を含む。
- 2 暗褐色土 粘性をもち、しまる。少量のローム粒を含む。

16号土坑

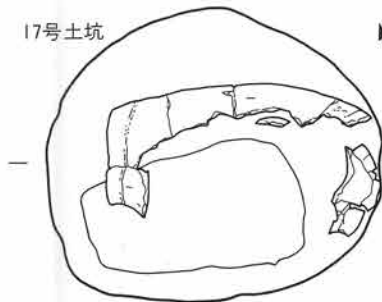


87.4m

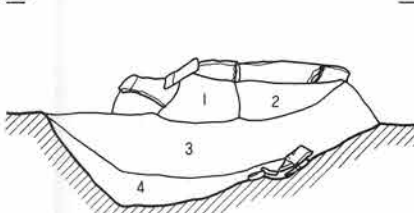


- 1 黄褐色土 粘性・しまり共になし。
- 2 暗褐色土 粘性をもち、しまる。少量の沼沢火山灰層を含む。
- 3 灰褐色土 粘性をもち、しまる。少量のローム粒、微量の沼沢火山灰層を含む。

17号土坑

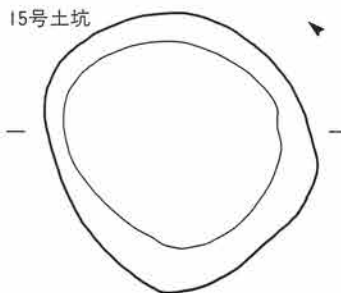


87.8m

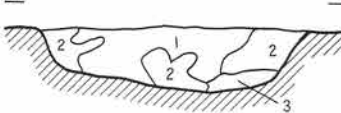


- 1 暗褐色土 粘性・しまり共になし。少量の沼沢火山灰粒を含む。
- 2 暗黄褐色土 粘性をもつが、ややしまりに欠ける。少量の黒色粒子を含む。
- 3 黒褐色土 粘性をもち、しまる。
- 4 黄褐色土 粘性をもち、しまる。多量の沼沢火山灰粒を含む。

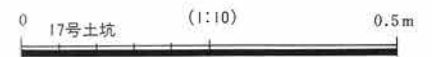
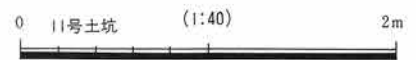
15号土坑



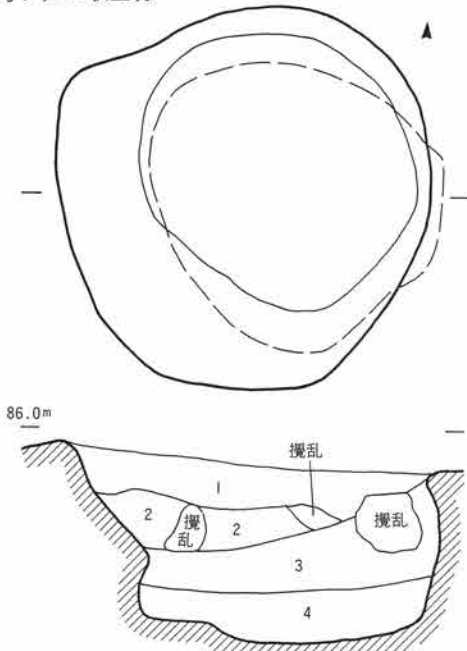
87.4m



- 1 黄褐色土 粘性・しまり共になし。
- 2 暗褐色土 粘性をもち、しまる。微量の沼沢火山灰層を含む。
- 3 暗黄褐色土 粘性をもち、しまる。地山に酷似。

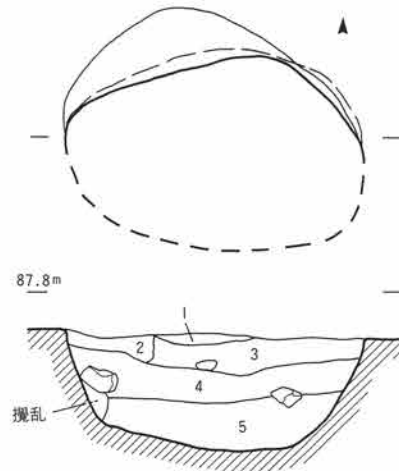


1号フラスコ状土坑



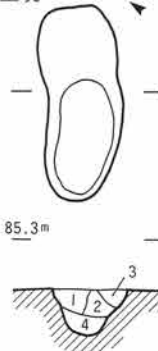
- 1 黒褐色土 粘性・しまり共に欠ける。
- 2 暗黄褐色土 やや粘性をもち、しまる。
- 3 暗褐色土 粘性をもち、しまる。少量のローム粒を含む。
- 4 暗灰褐色土 粘性をもち、しまる。多量の小砂粒を含む。

2号フラスコ状土坑



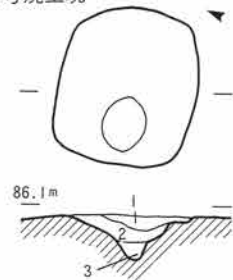
- 1 黄褐色土 粘性・しまり共になし。
- 2 暗黄褐色土 粘性・しまり共になし。沼沢火山灰層とIV層の混合層。
- 3 暗黄褐色土 粘性をもち、しまる。少量のローム粒・砂粒・礫を含む。
- 4 暗褐色土 粘性をもち、しまる。少量のローム粒・砂粒・礫を含む。
- 5 暗灰褐色土 粘性をもち、しまる。多量の小砂粒を含む。基本層序V層に酷似。

4号焼土坑



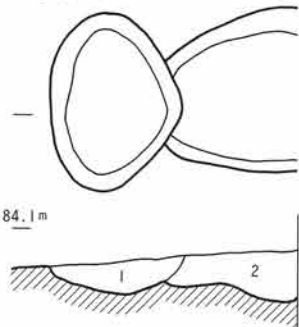
- 1 赤褐色土 粘性・しまり共に欠ける。
- 2 暗褐色土 粘性・しまり共に欠ける。多量の炭化粒を含む。
- 3 赤褐色土 粘性・しまり共に欠ける。
- 4 暗褐色土 粘性をもち、しまる。少量の炭化粒・焼土粒を含む。

5号焼土坑



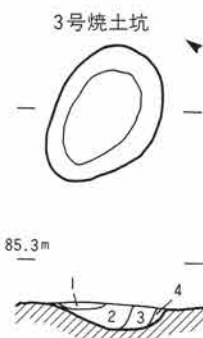
- 1 暗褐色土 粘性に欠くがしまる。多
- 2 赤褐色土 粘性に欠くが硬くしまる。全て焼土粒。少量の炭化粒を含む。
- 3 暗灰褐色土 粘性をもち、しまる。少量の焼土粒、多量の炭化粒を含む。

1号焼土坑



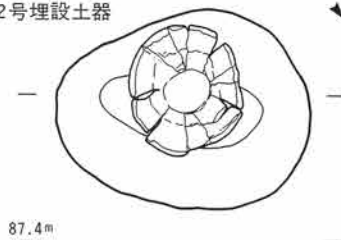
- 1 赤褐色土 粘性・しまり共に欠ける。
- 2 赤褐色土 粘性・しまり共に欠ける。が混じり、1層より暗い。

2号焼土坑



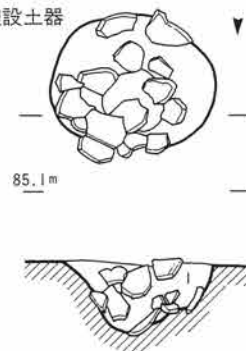
- 1 赤褐色土 粘性・しまり共に欠ける。
- 2 暗褐色土 粘性・しまり共に欠ける。多量の炭化粒を含む。
- 3 赤褐色土 粘性・しまり共に欠ける。
- 4 暗褐色土 粘性をもち、しまる。少量の炭化粒・焼土粒を含む。

2号埋設土器

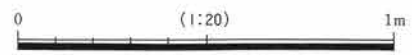


- 1 暗褐色土 粘性にやや欠けるが、しまる。
- 2 暗黄褐色土 粘性に富み、硬くしまる。

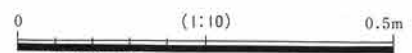
1号埋設土器



- 1 暗褐色土 粘性にやや欠けるが、硬くしまる。

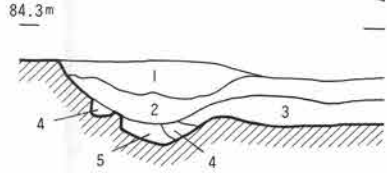
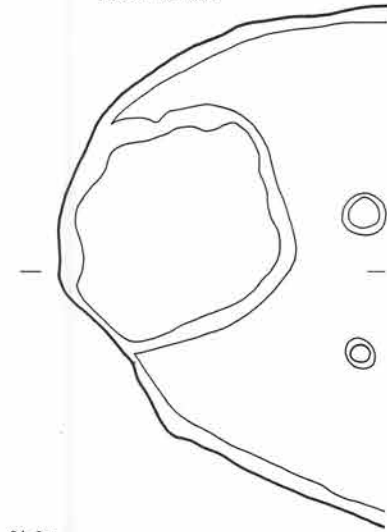


1-2号フラスコ状土坑 1-5号焼土坑



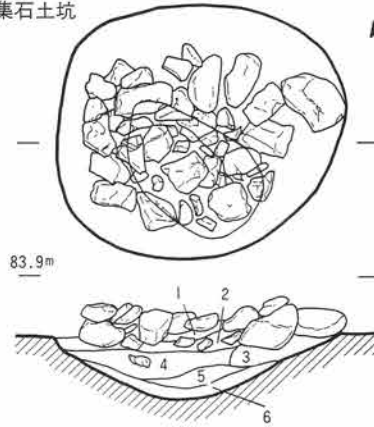
1-2号埋設土器

性格不明遺構



- 1 黒褐色土 粘性・しまり共に欠ける。少量の炭化粒を含む。
- 2 暗褐色土 粘性・しまり共に欠ける。少量の焼土粒を含む。
- 3 暗黄褐色土 やや粘性をもち、しまる。
- 4 黄褐色土 粘性をもつが、ややしまりに欠く。地山粒を含む。
- 5 暗黄褐色土 粘性をもち、しまる。少量の炭化粒を含む。

1号集石土坑

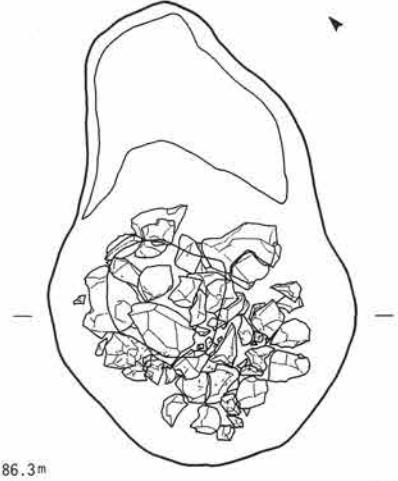


- 1 暗灰褐色土 基本層序V層に相当。
- 2 褐色土 粘性に欠けるが、しまる。少量の炭化粒を含む。
- 3 暗褐色土 1層と2層の混合層。
- 4 暗黒褐色土 粘性にやや欠けるが、しまる。多量の炭化粒・炭化材、少量の焼土粒を含む。
- 5 暗黄褐色土 粘性に富み、しまる。少量の炭化粒を含む。
- 6 黄褐色土 粘性に富み、硬くしまる。微量の炭化粒を含む。

2号集石



5号集石土坑

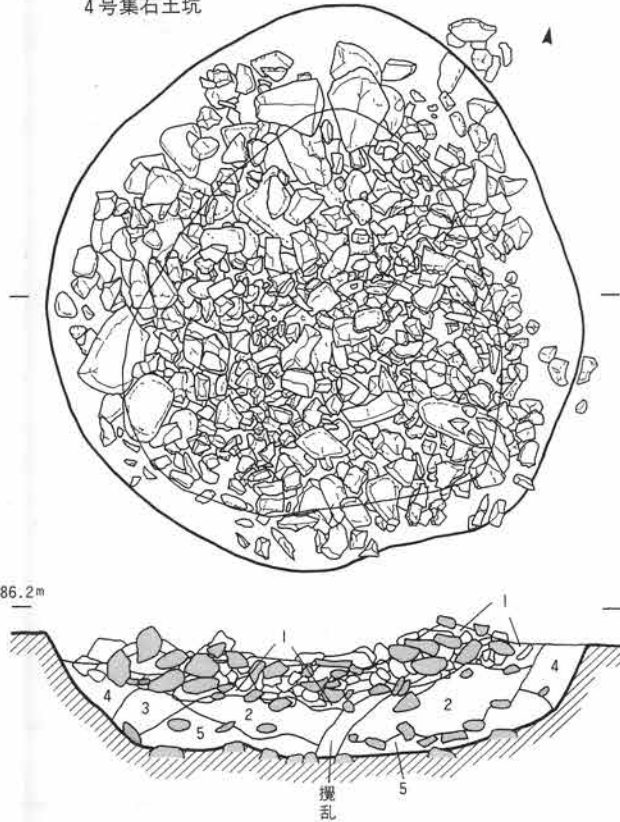


- 1 暗褐色土 粘性・しまり共やや欠く。少量の炭化粒を含む。
- 2 暗黄褐色土 やや粘性に欠けるが、しまる。少量の炭化粒・焼土粒を含む。
- 3 黒褐色土 やや粘性に欠けるが、しまる。多量の炭化粒(φ1mm)を含む。
- 4 黄褐色土 粘性に富み、しまる。微量の炭化粒・焼土粒を含む。

3号集石



4号集石土坑



- 1 茶褐色土 やや粘性に欠けるが、しまる。少量の炭化粒を含む。
- 2 黒褐色土 やや粘性に欠けるが、しまる。多量の炭化粒・焼土粒・小砂利を含む。
- 3 黒茶褐色土 粘性をもつが、ややしまりに欠ける。炭化粒・焼土粒をやや多く含む。
- 4 暗茶褐色土 粘性をもち、しまる。少量の炭化粒・焼土粒を含む。
- 5 暗灰褐色土 粘性をもち、硬くしまる。少量の炭化粒・焼土粒を含む。

(1:40)  
0 性格不明遺構I 2・3号集石 2m

(1:20)  
0 1・4・5号集石土坑 1m



3号土坑出土



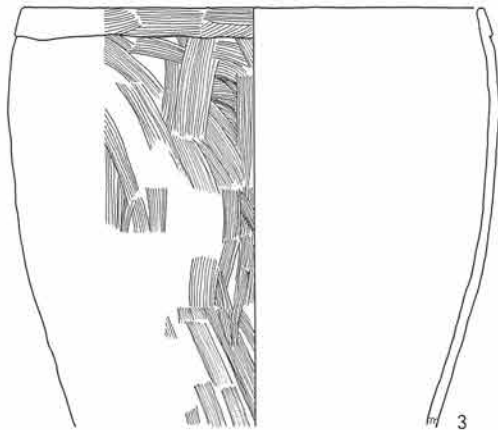
7号土坑出土



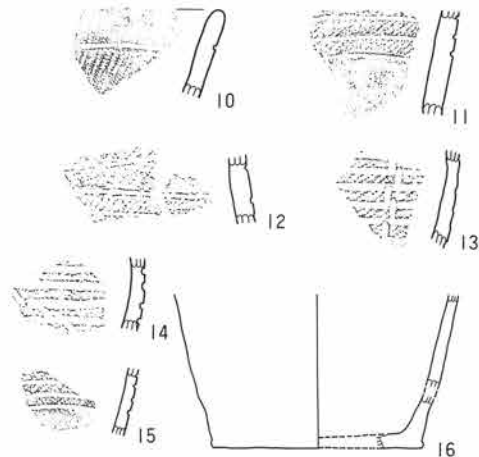
4号焼土坑出土



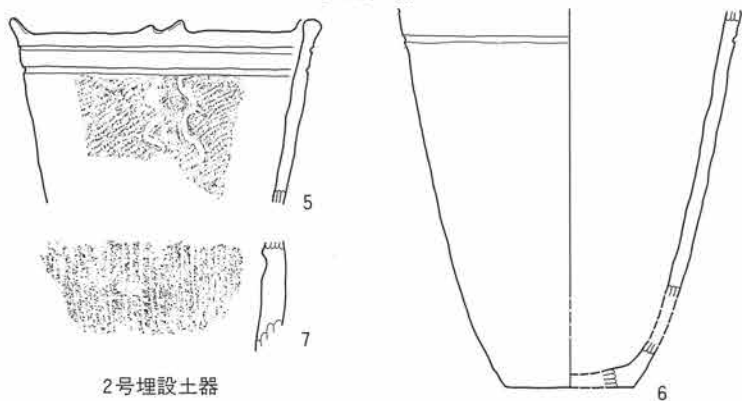
17号土坑出土



1号フラスコ状土坑出土



1号埋設土器



1号風倒木痕出土



2号埋設土器



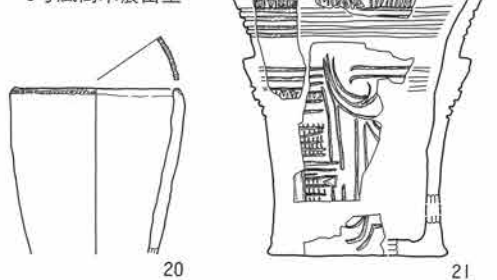
2号風倒木痕出土



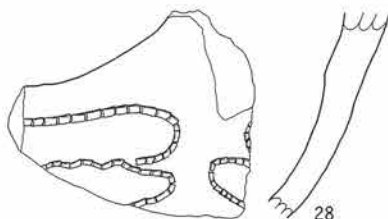
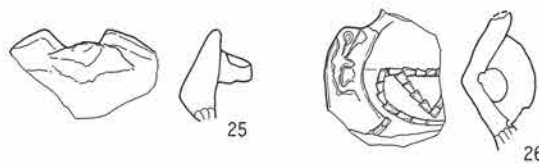
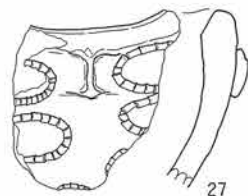
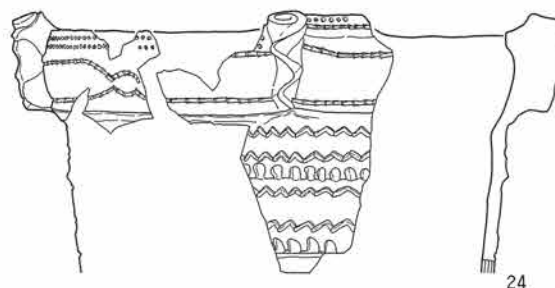
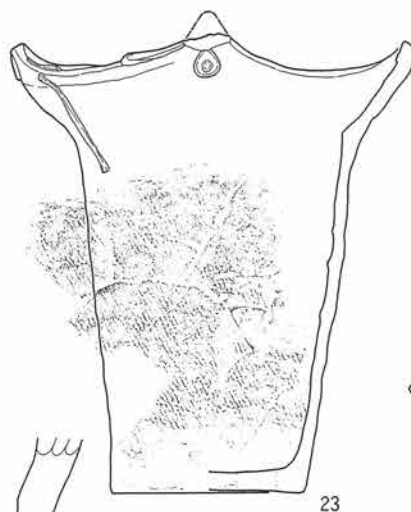
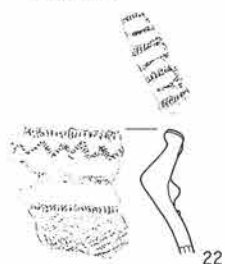
3号集石土坑出土



3号風倒木痕出土



II層出土

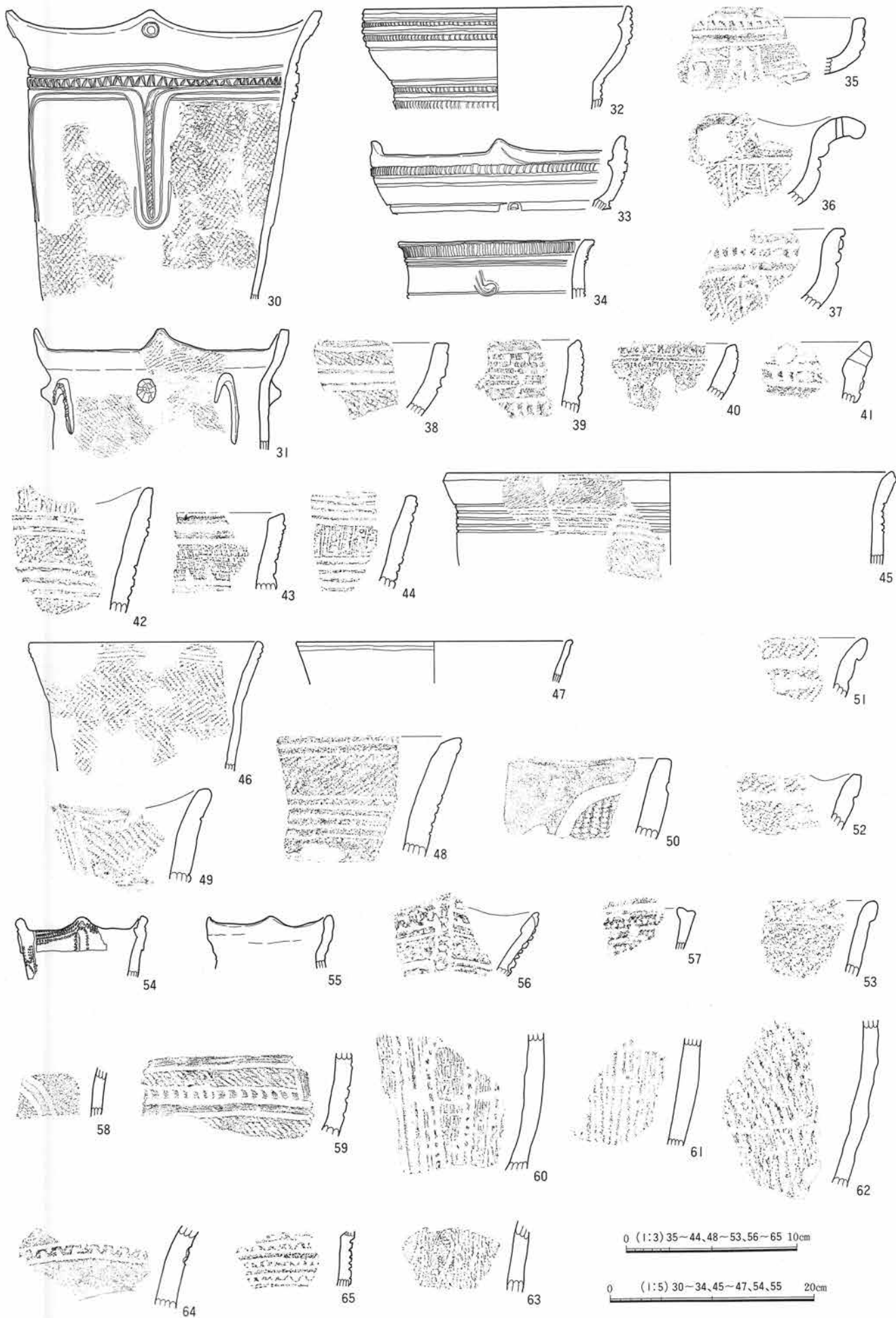


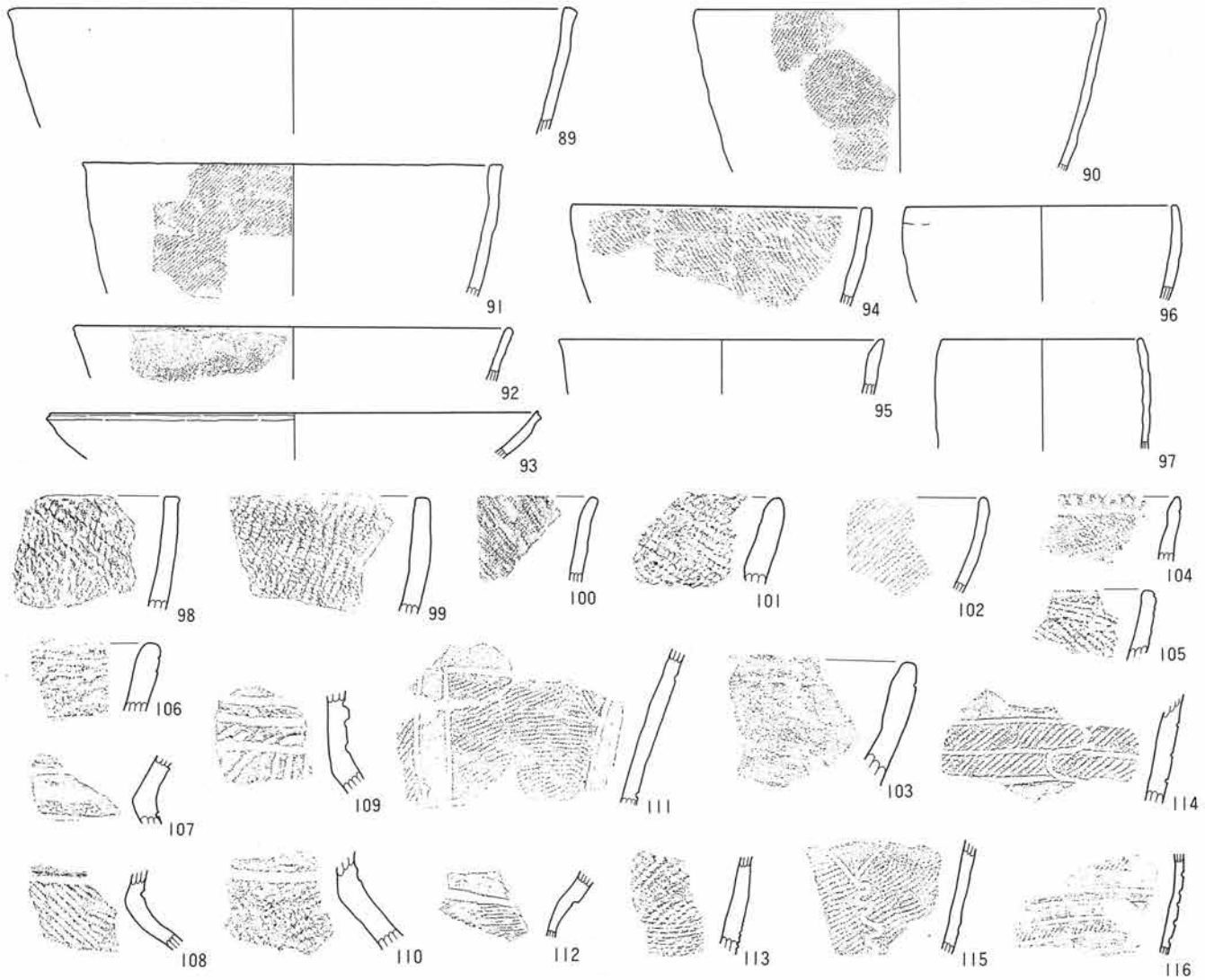
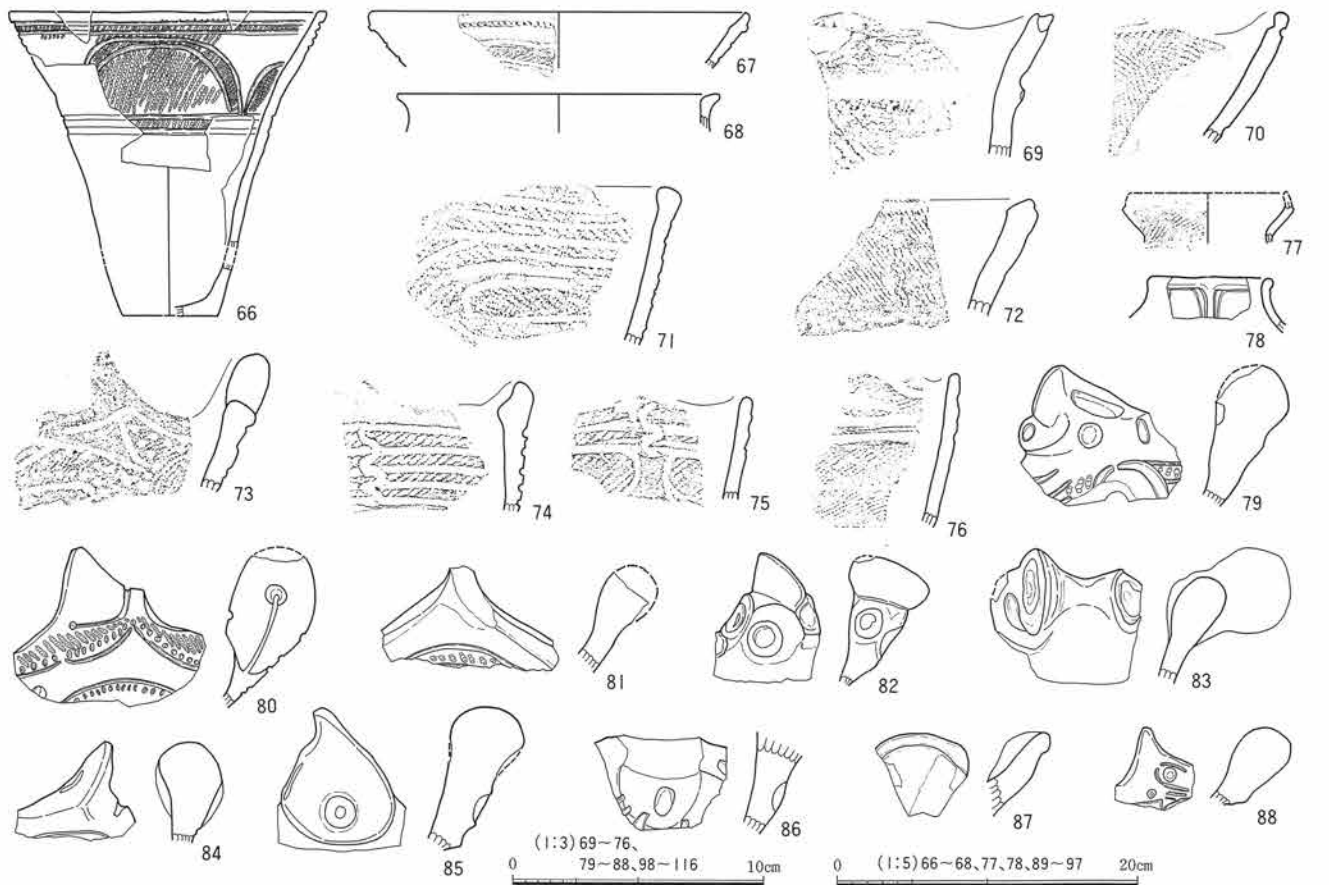
(1:3) 7, 10-15, 17, 22,

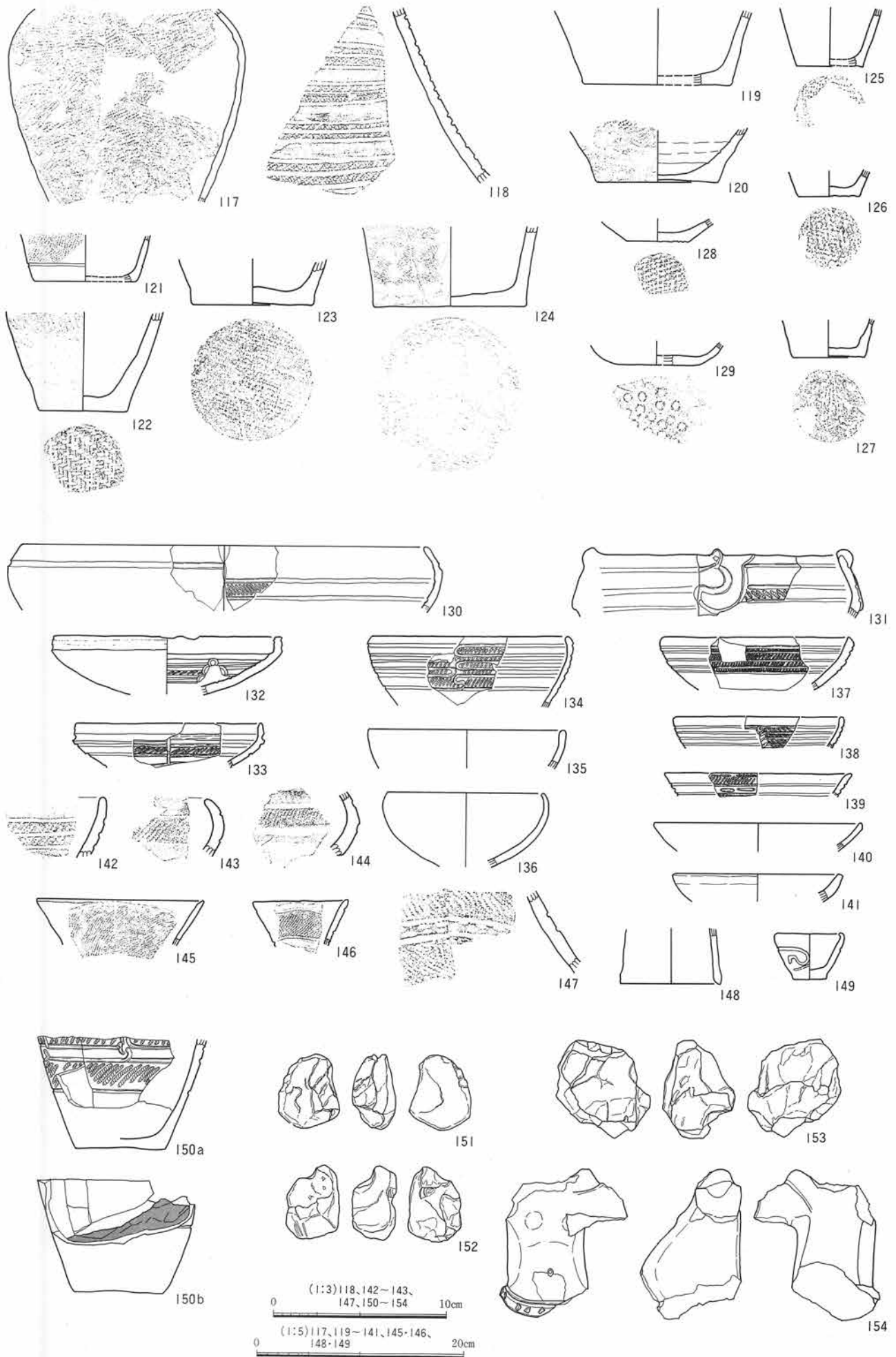
25-29 10cm

(1:5) 1-6, 8, 9, 16, 18-21,

23, 24 20cm



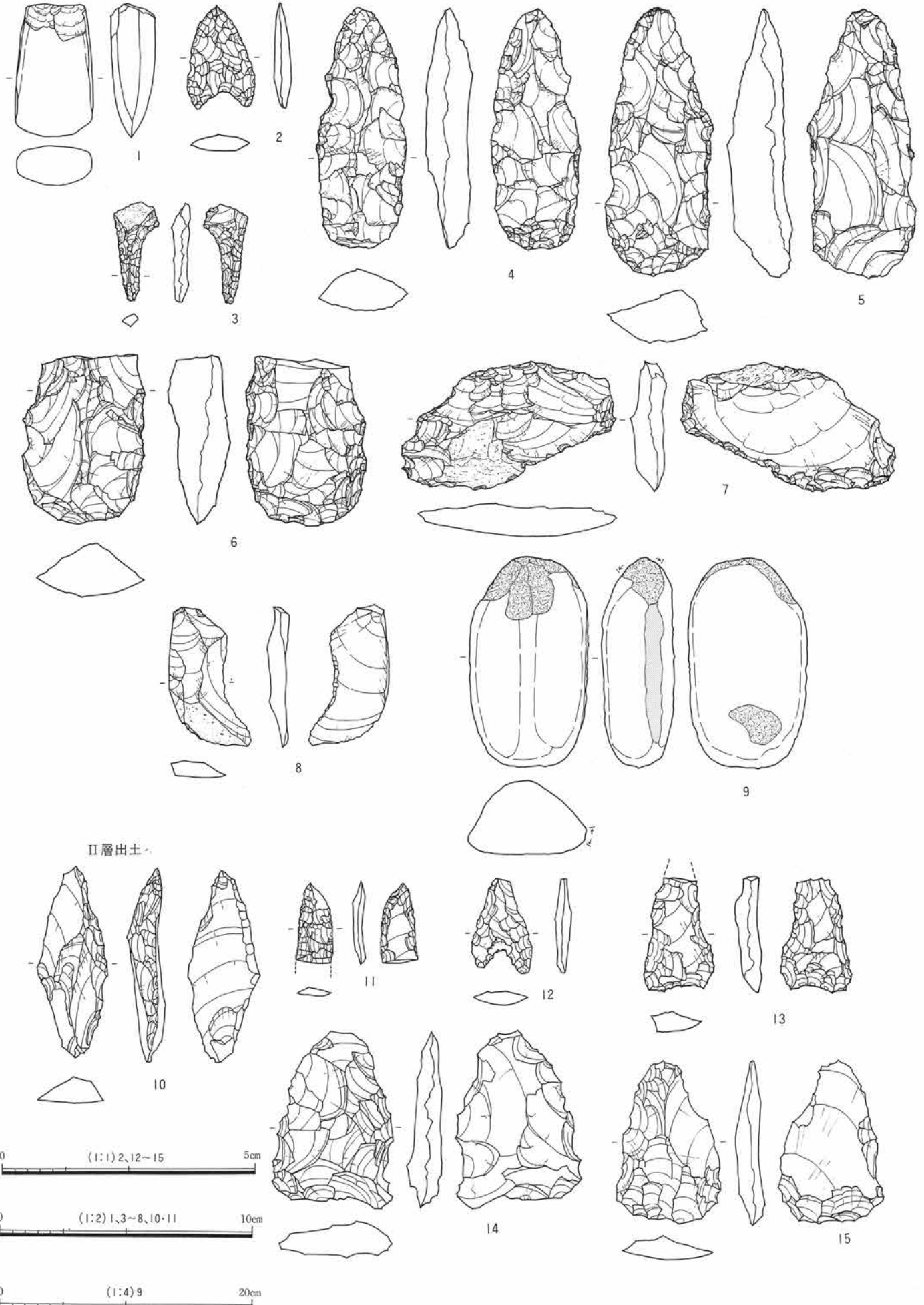




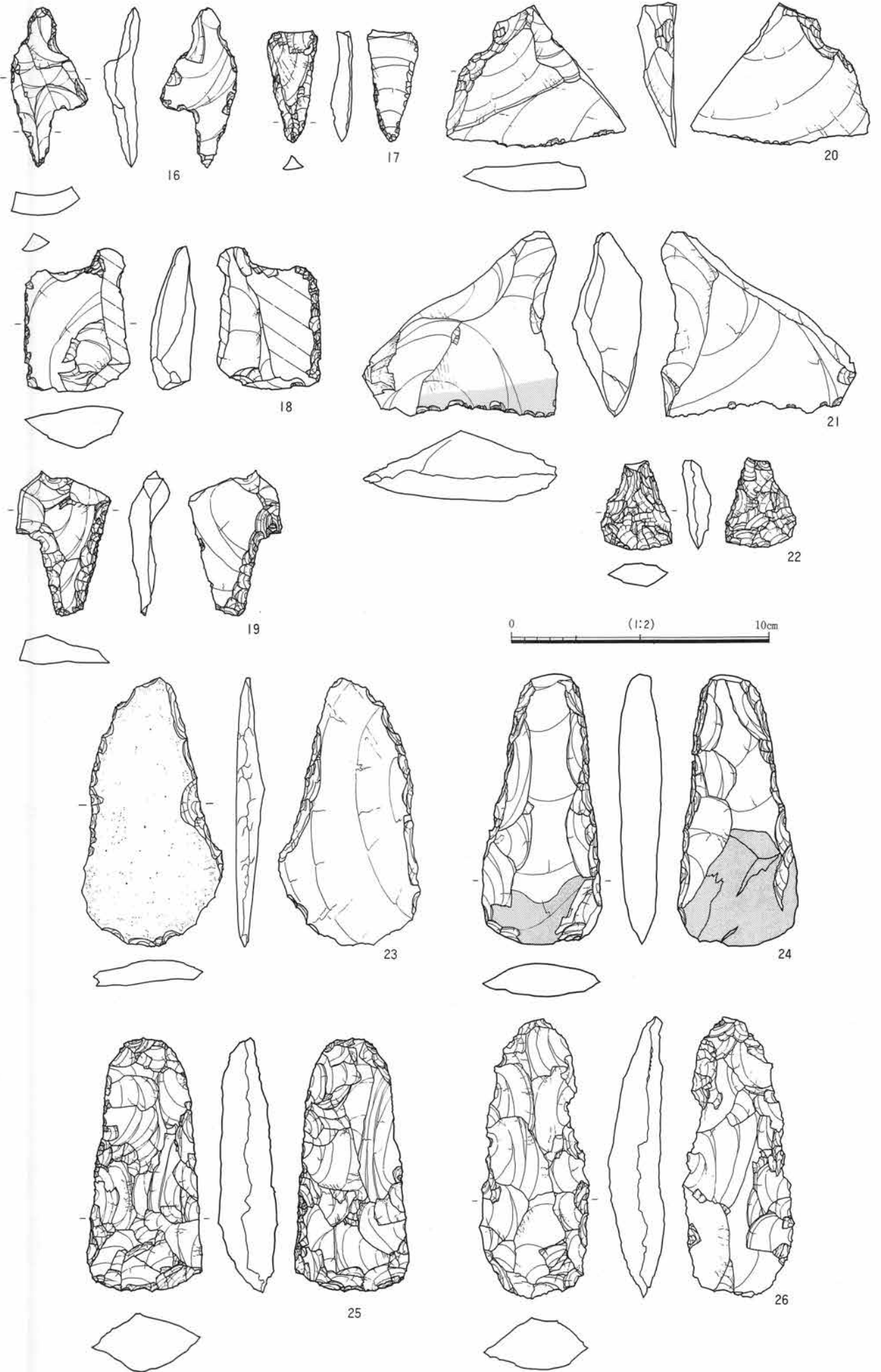
3号集石出土

4号集石土坑出土

V層出土

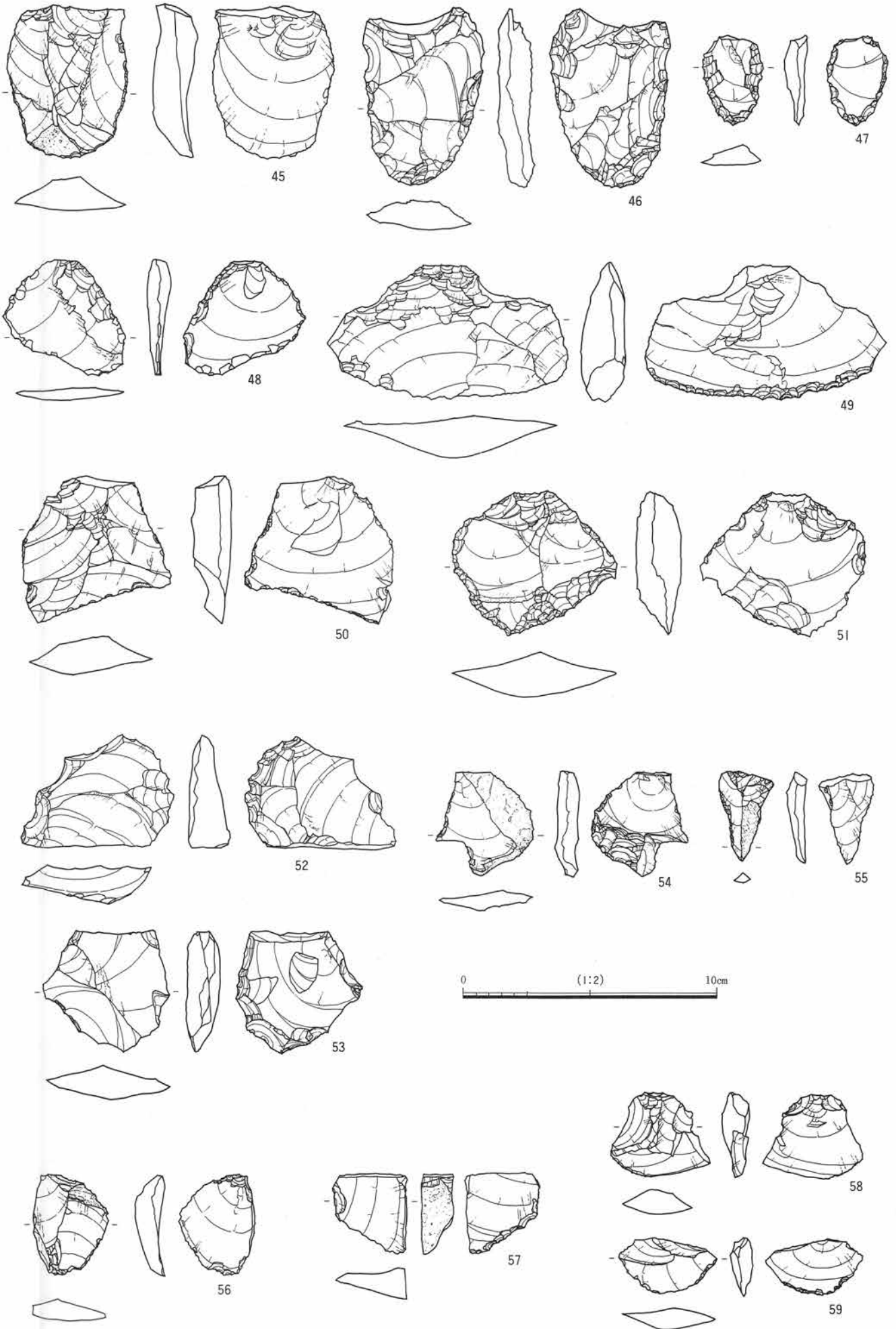


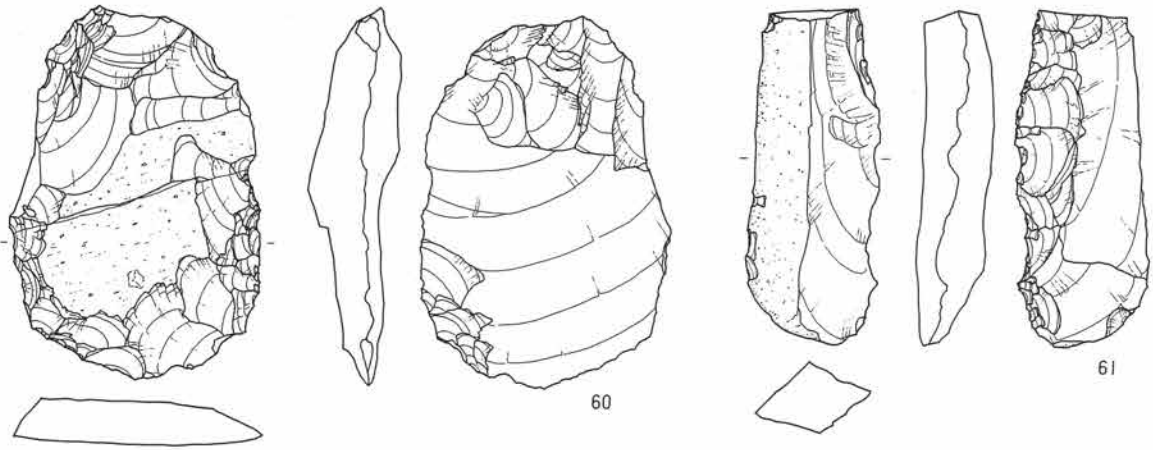






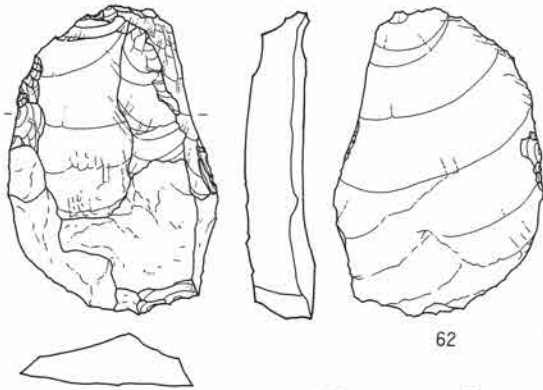




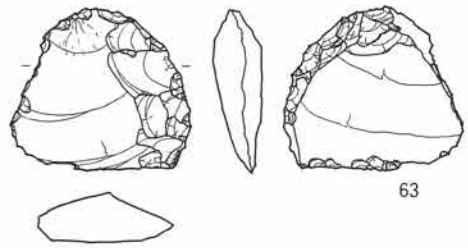


60

61



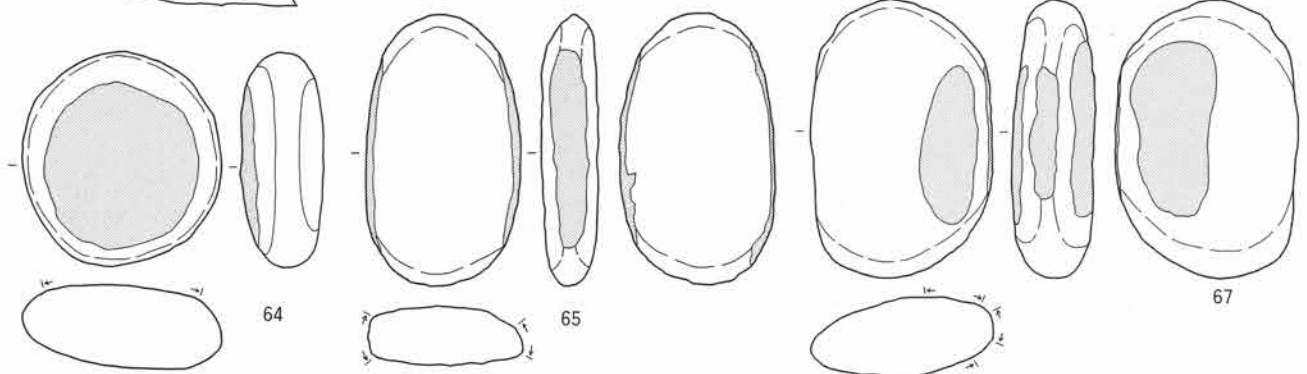
62



63

0 (1:2) 60~63 10cm

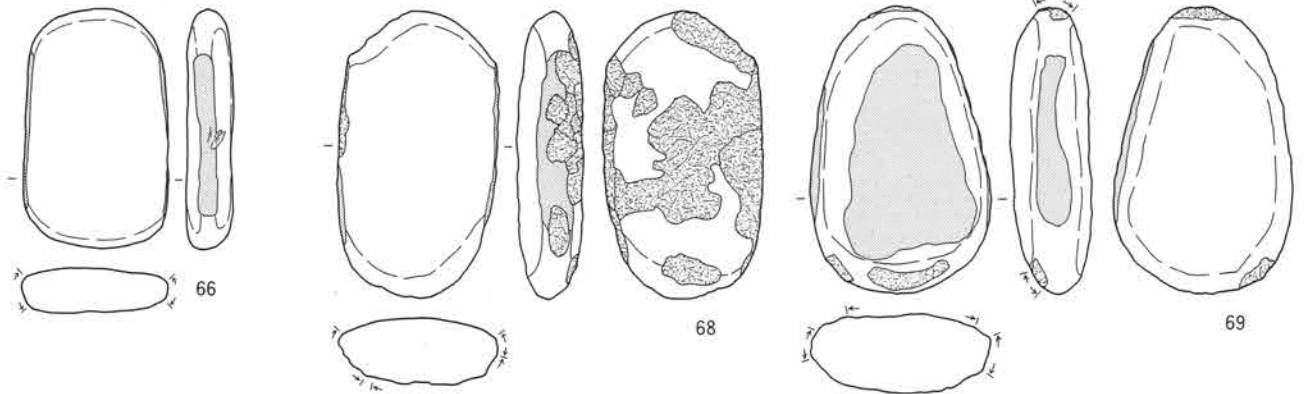
0 (1:4) 64~72 20cm



64

65

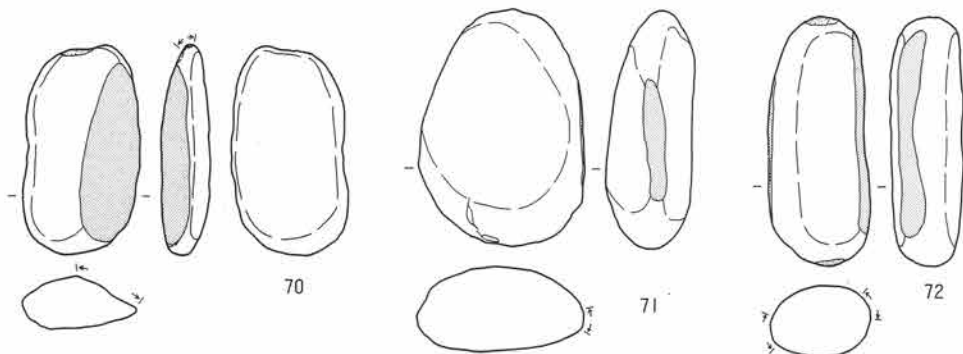
67



66

68

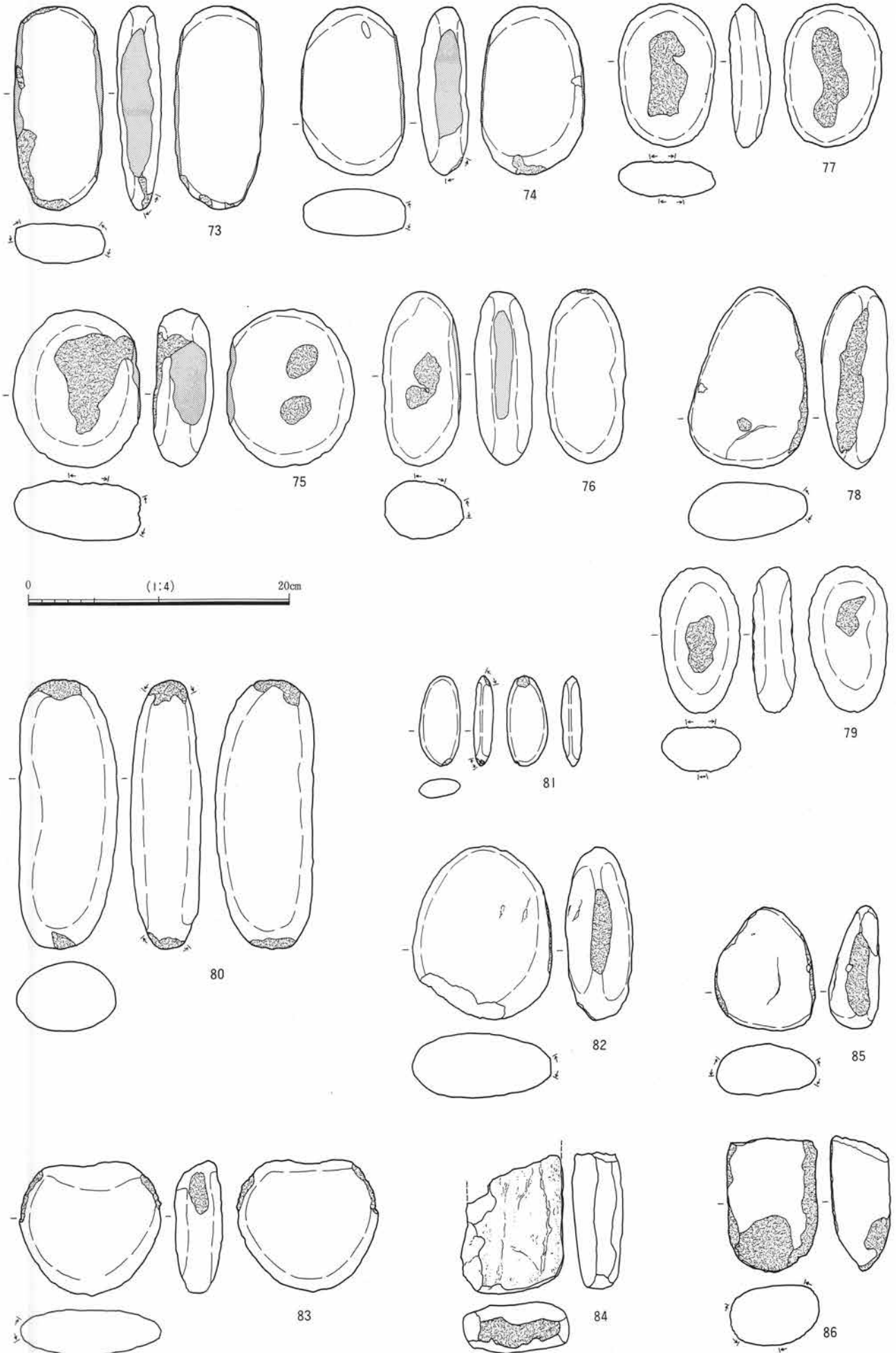
69

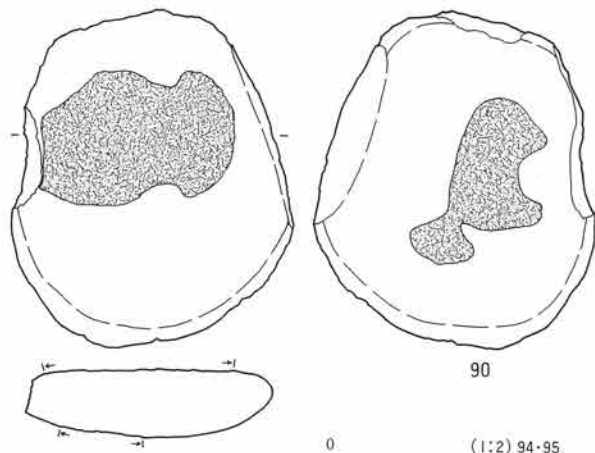
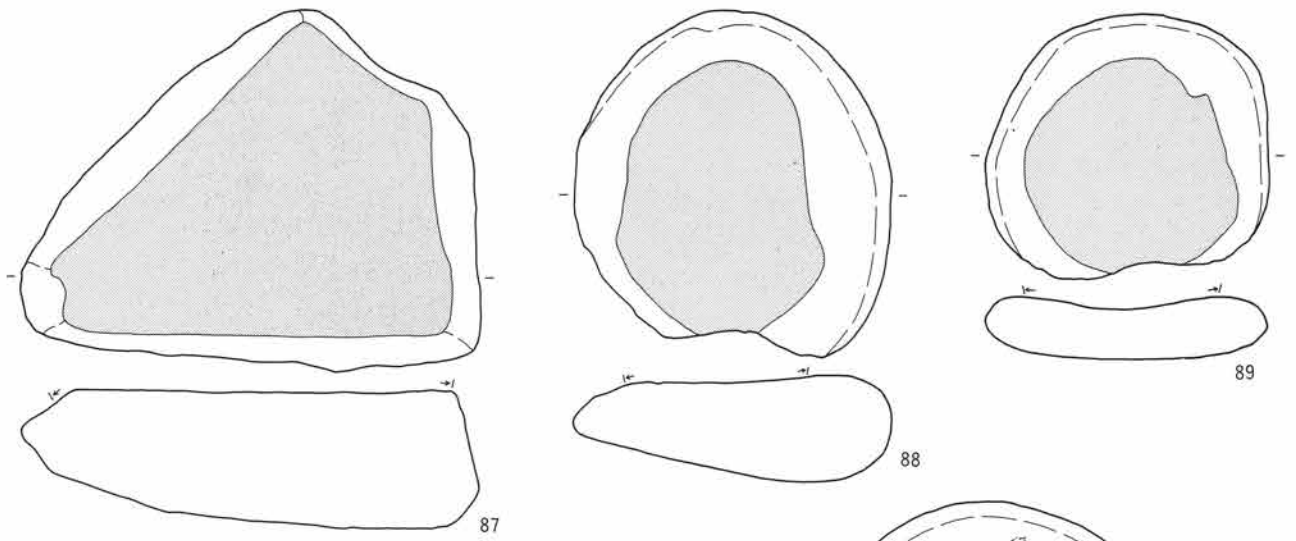


70

71

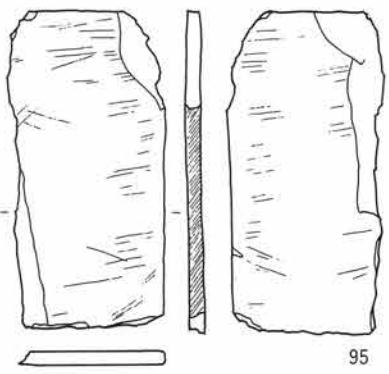
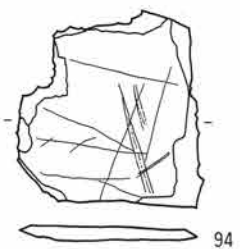
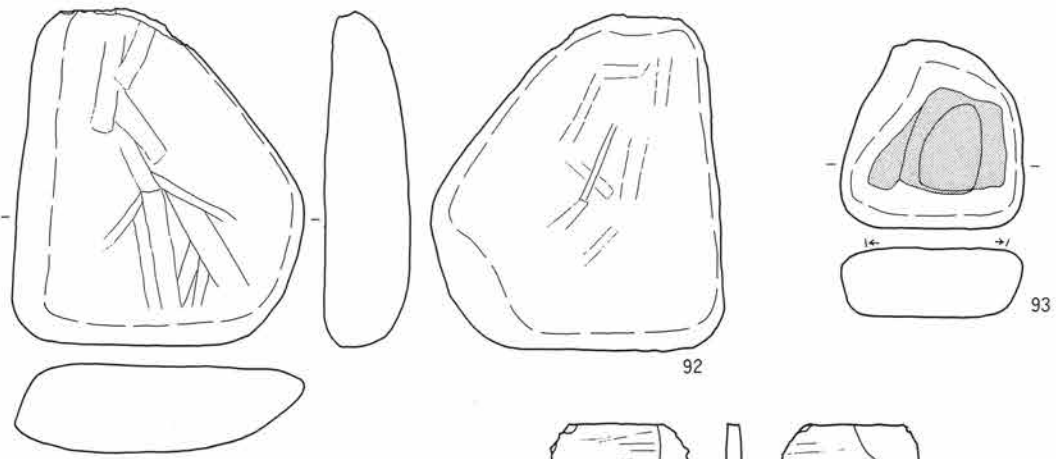
72



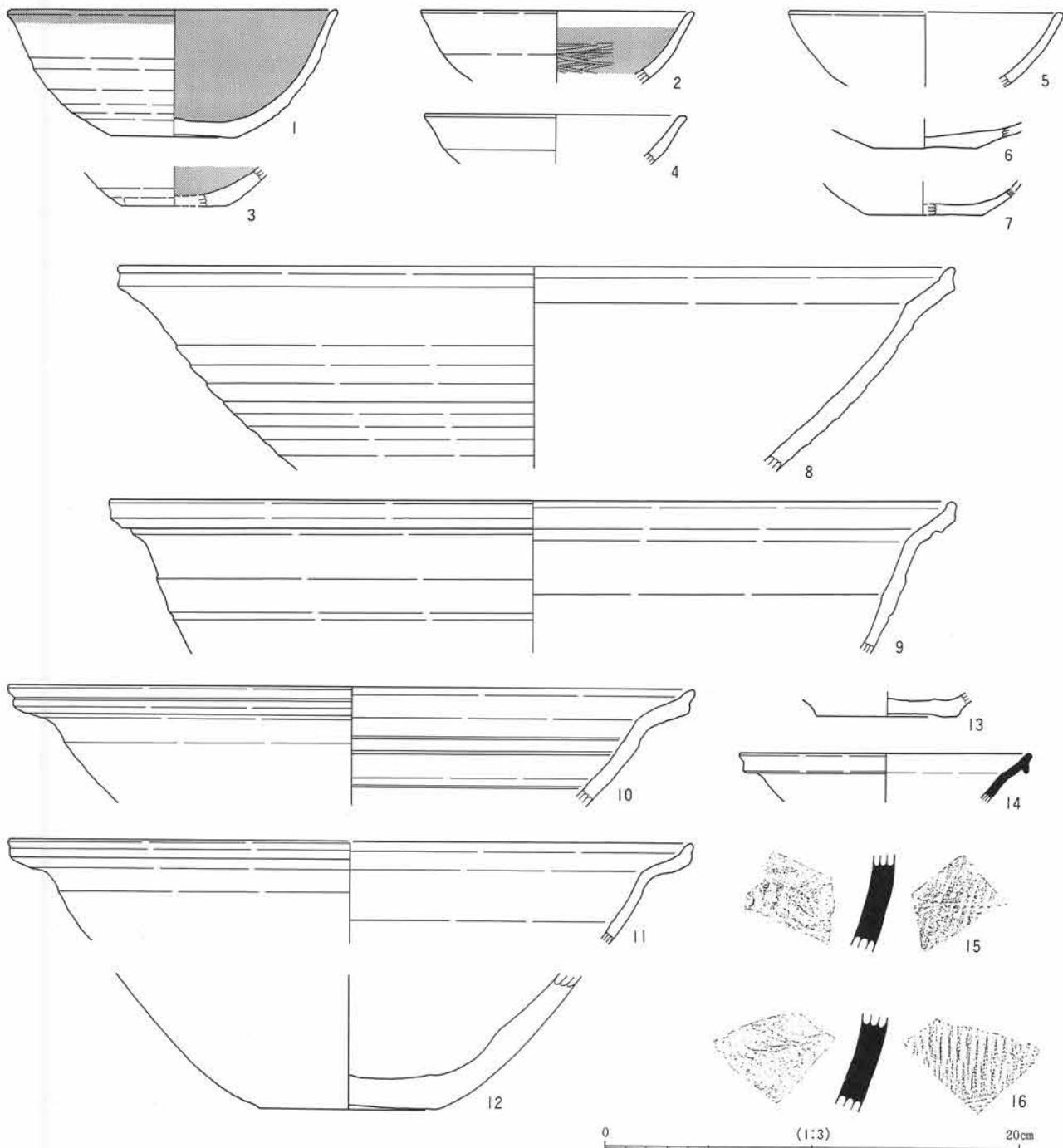


0 (1:2) 94-95 10cm

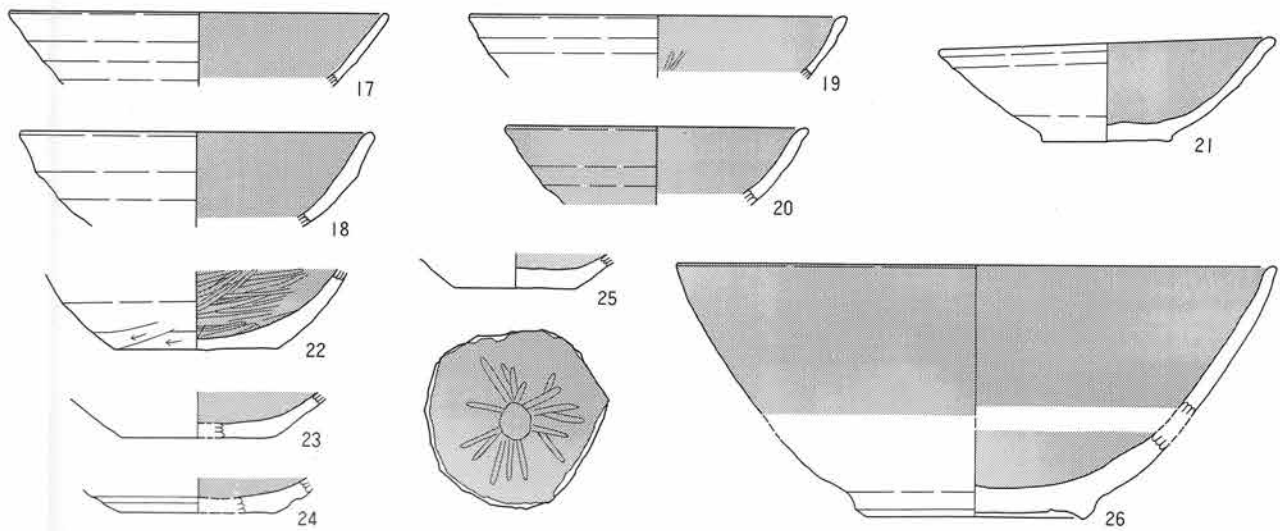
0 (1:6) 87-93 60cm



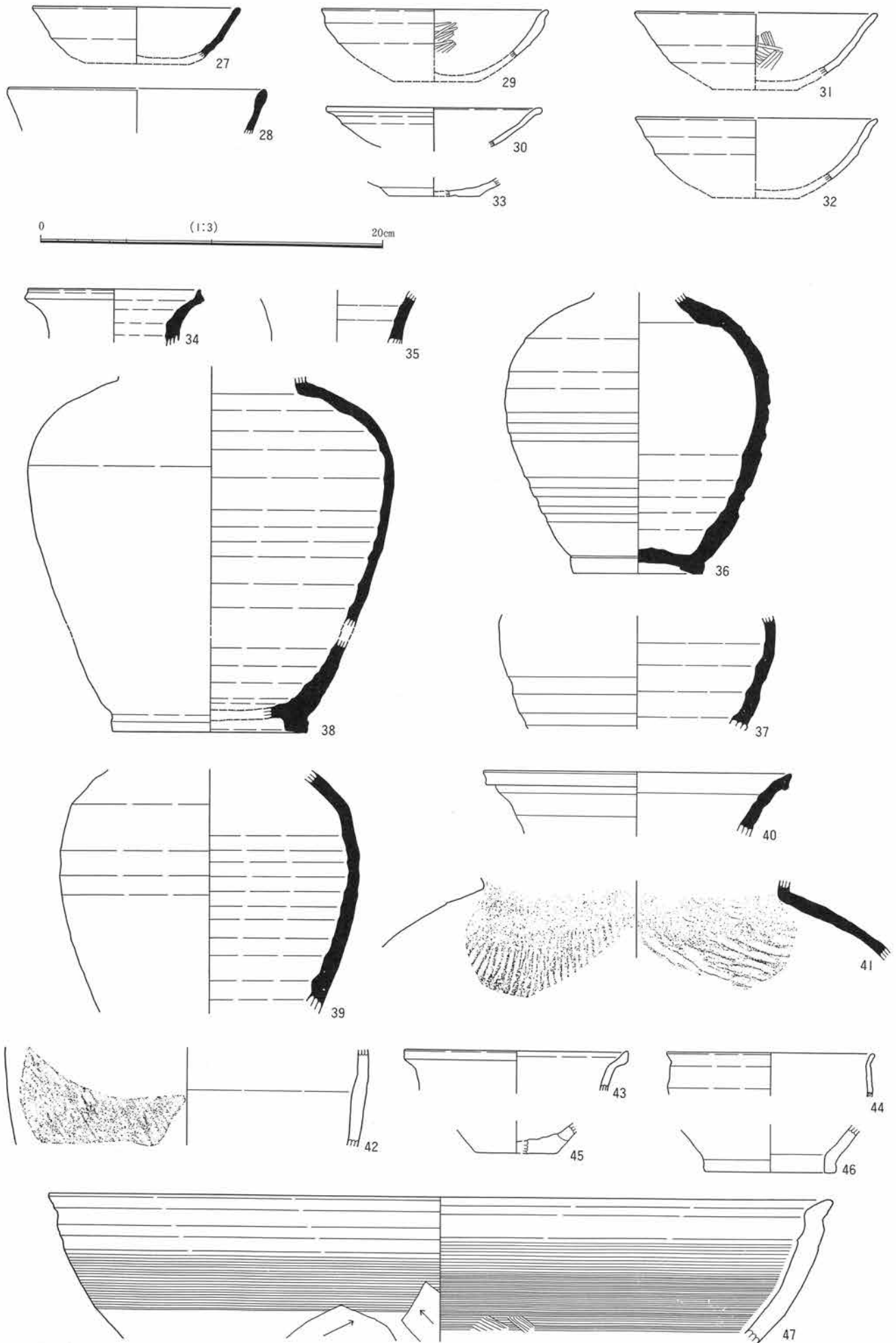
10号土坑出土

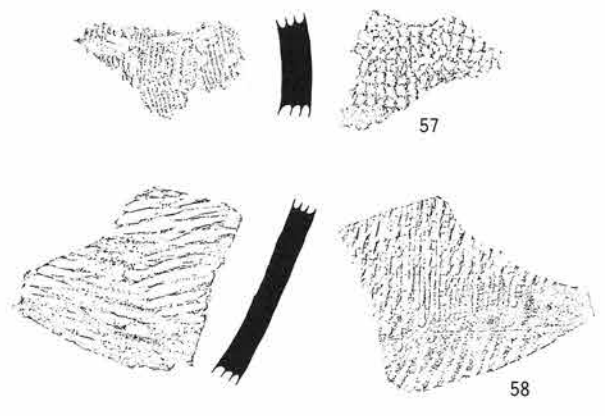
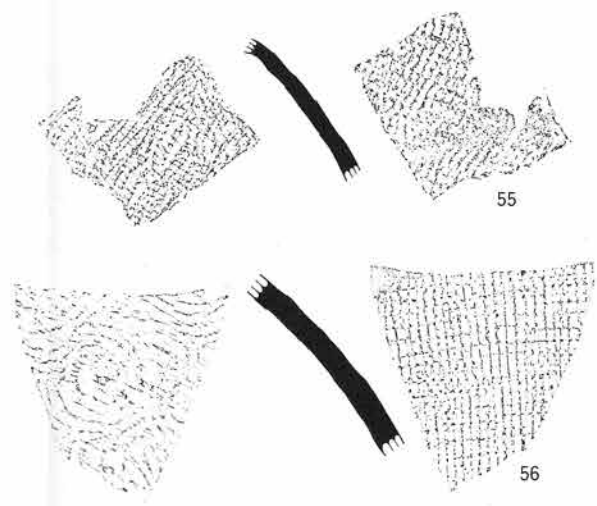
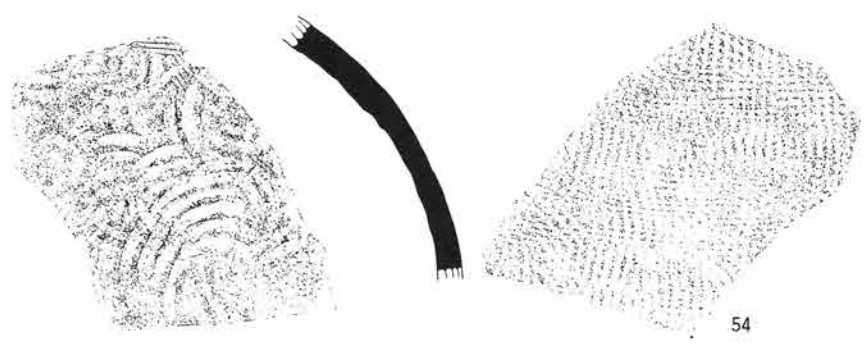
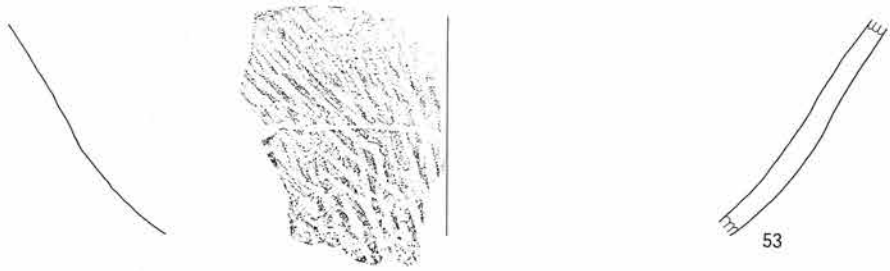
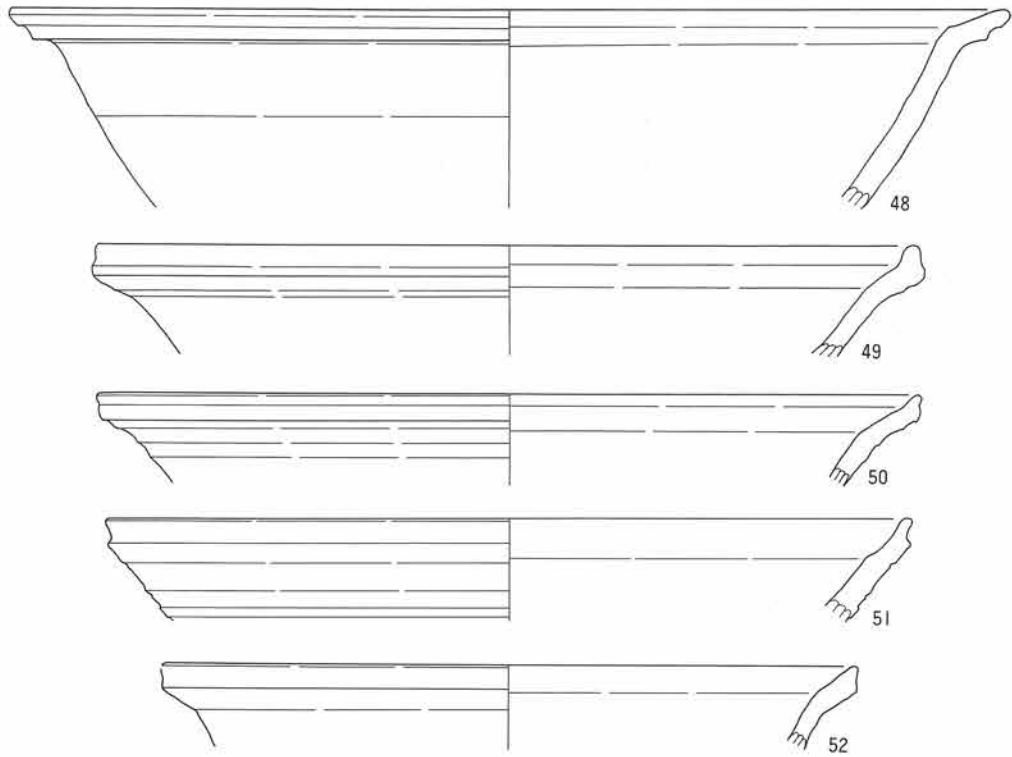


包含層出土

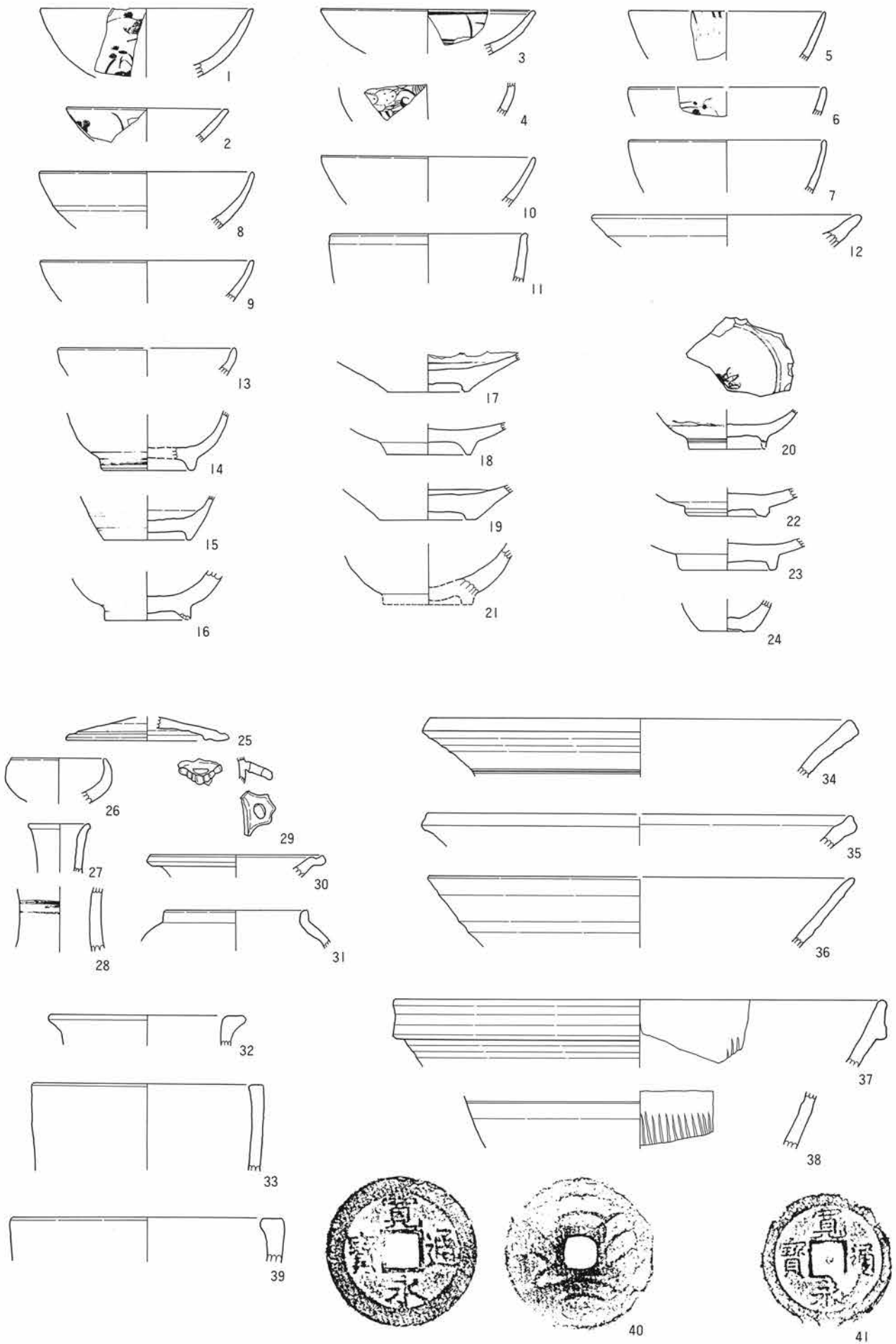






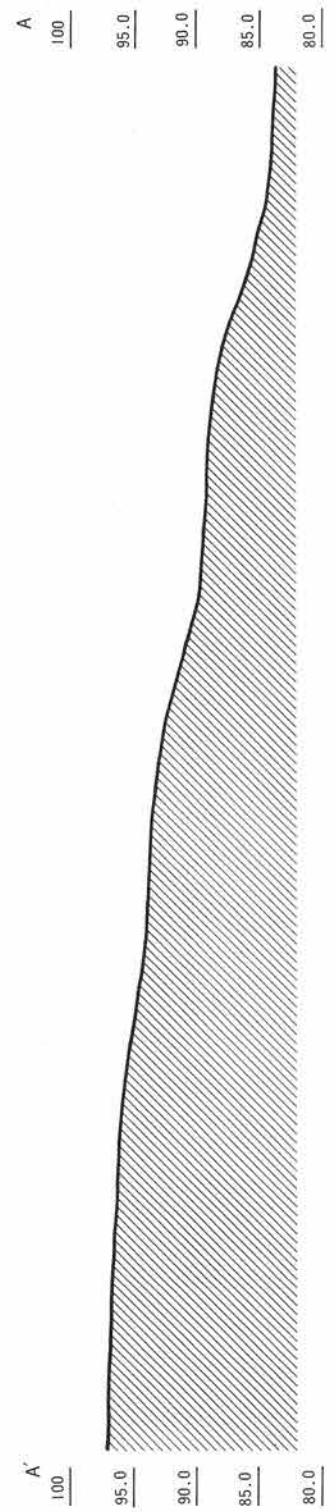
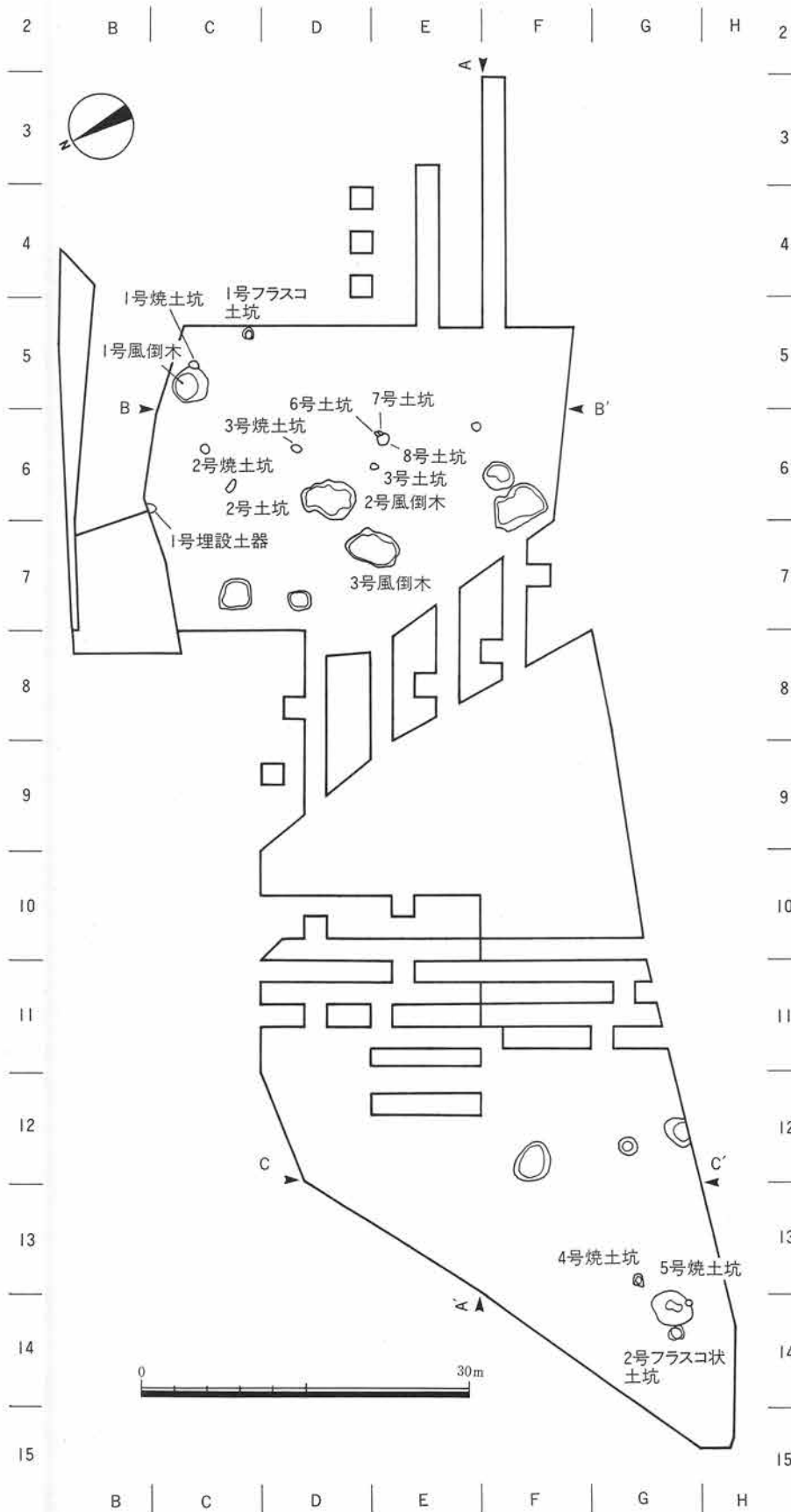


0 (1:3) 20cm

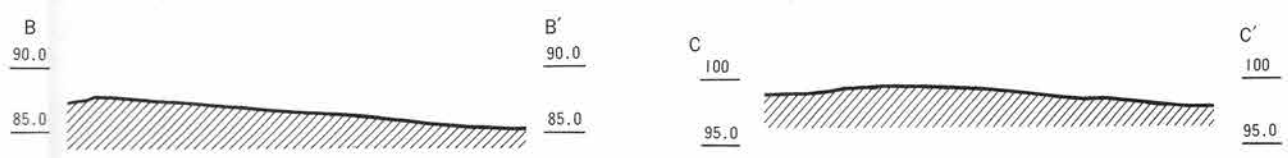


0 (1:3) 20cm

0 (1:1) 5cm

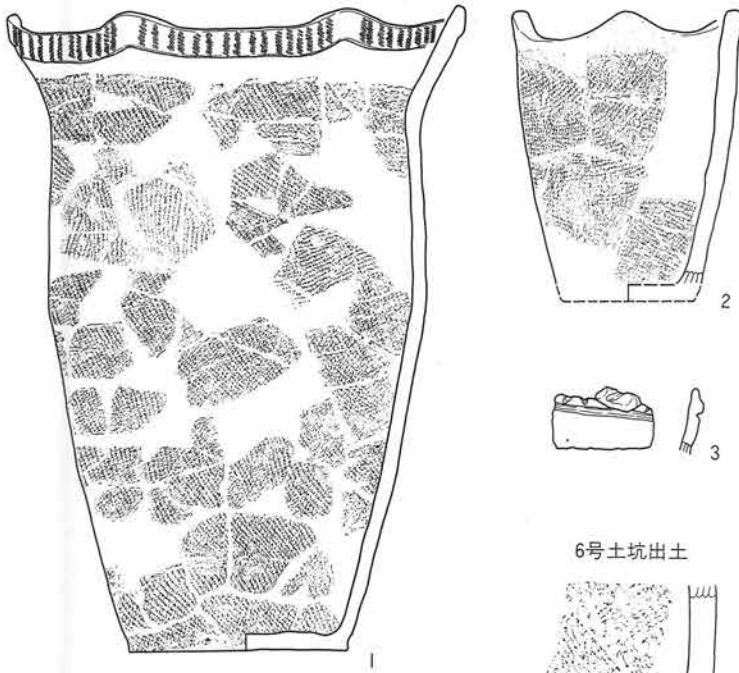


|    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|
| 1  | 2  | 3  | 4  | 5  |
| 6  | 7  | 8  | 9  | 10 |
| 11 | 12 | 13 | 14 | 15 |
| 16 | 17 | 18 | 19 | 20 |
| 21 | 22 | 23 | 24 | 25 |

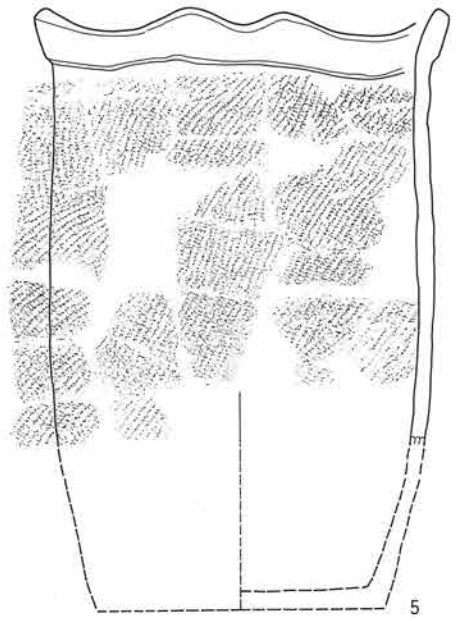




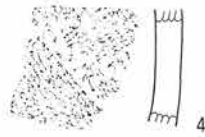
2号土坑出土



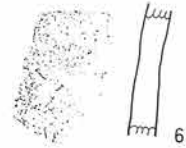
3号焼土坑出土



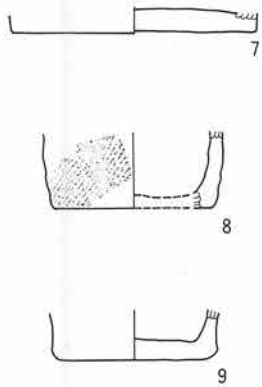
6号土坑出土



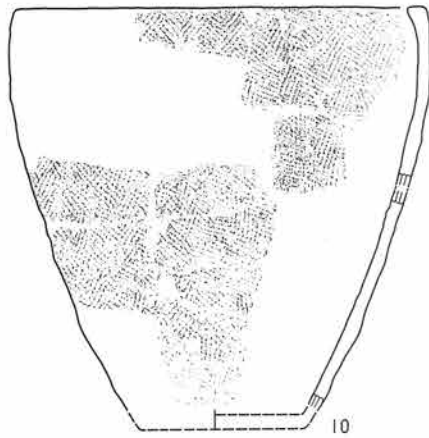
2号焼土坑出土



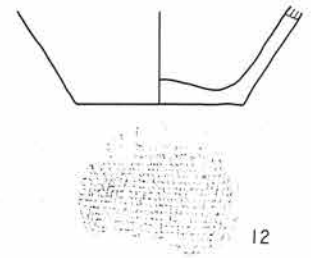
1号フラスコ状土坑出土



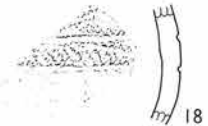
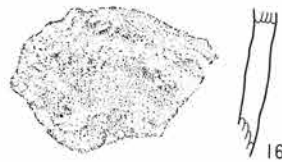
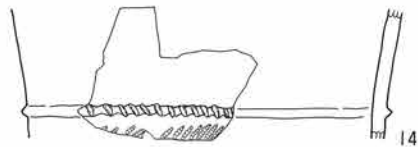
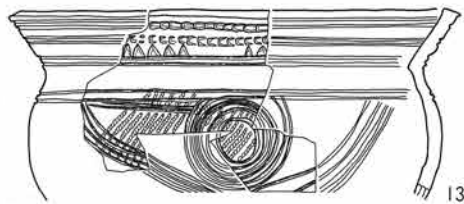
2号フラスコ状土坑出土



1号埋設土器



V層出土

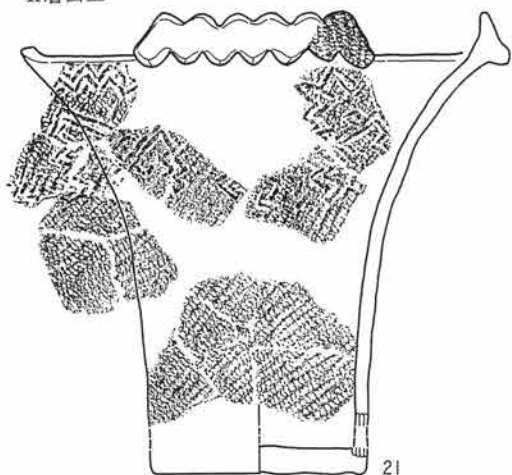


0 (1:3) 3・4・6・15~18・20 10cm

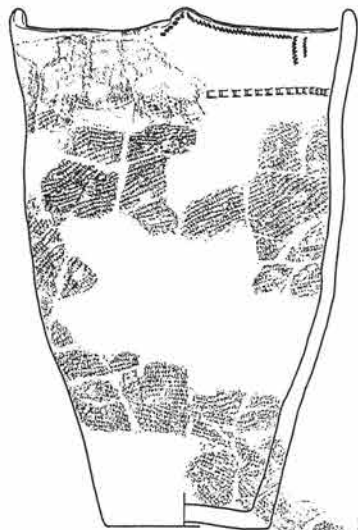
0 (1:5) 1・2・5・7~14・19 20cm



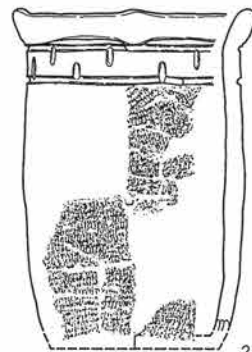
II層出土



21



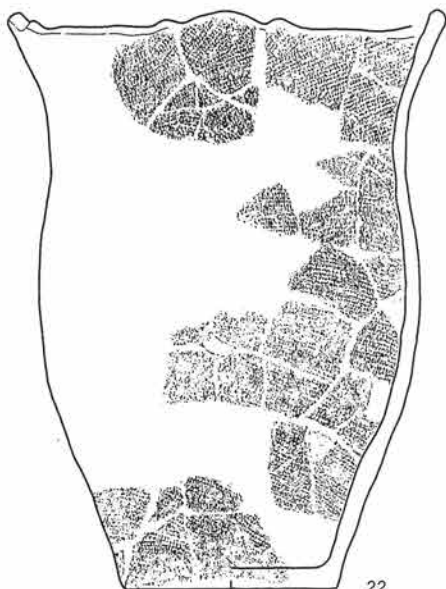
23



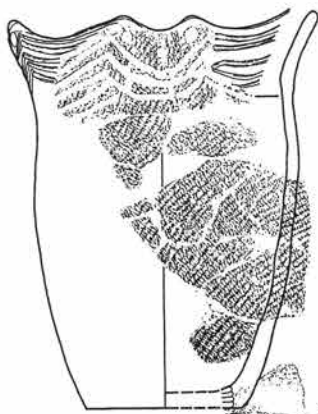
25



26



22



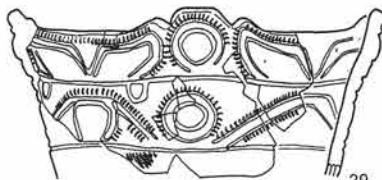
24



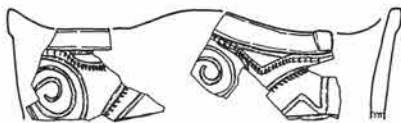
27



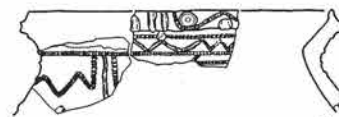
28



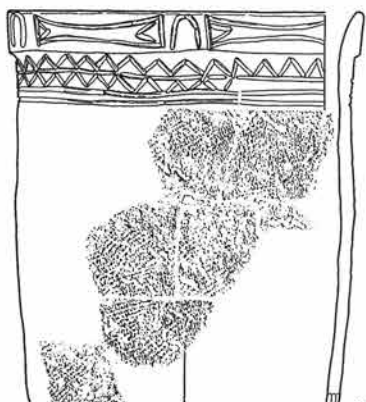
29



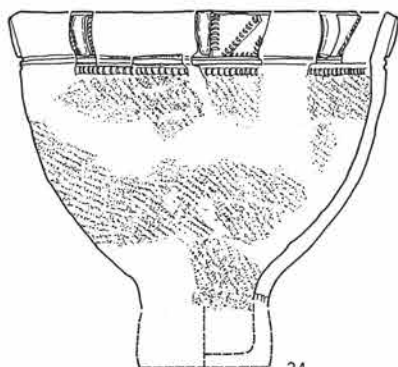
30



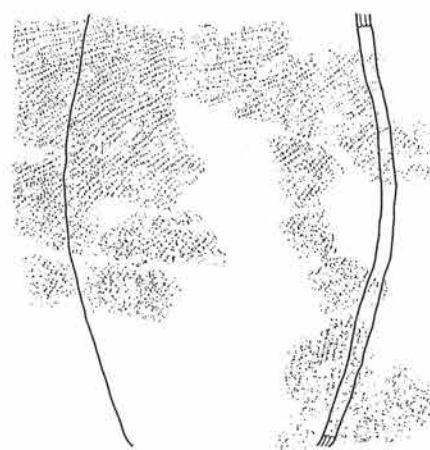
31



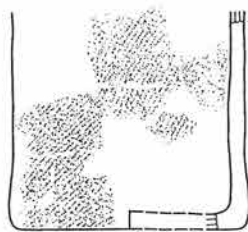
32



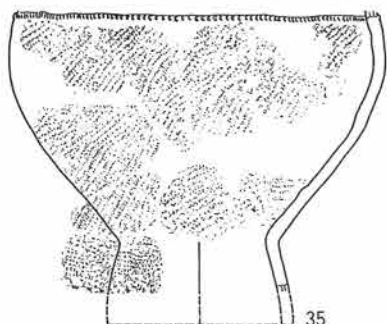
34



36



33

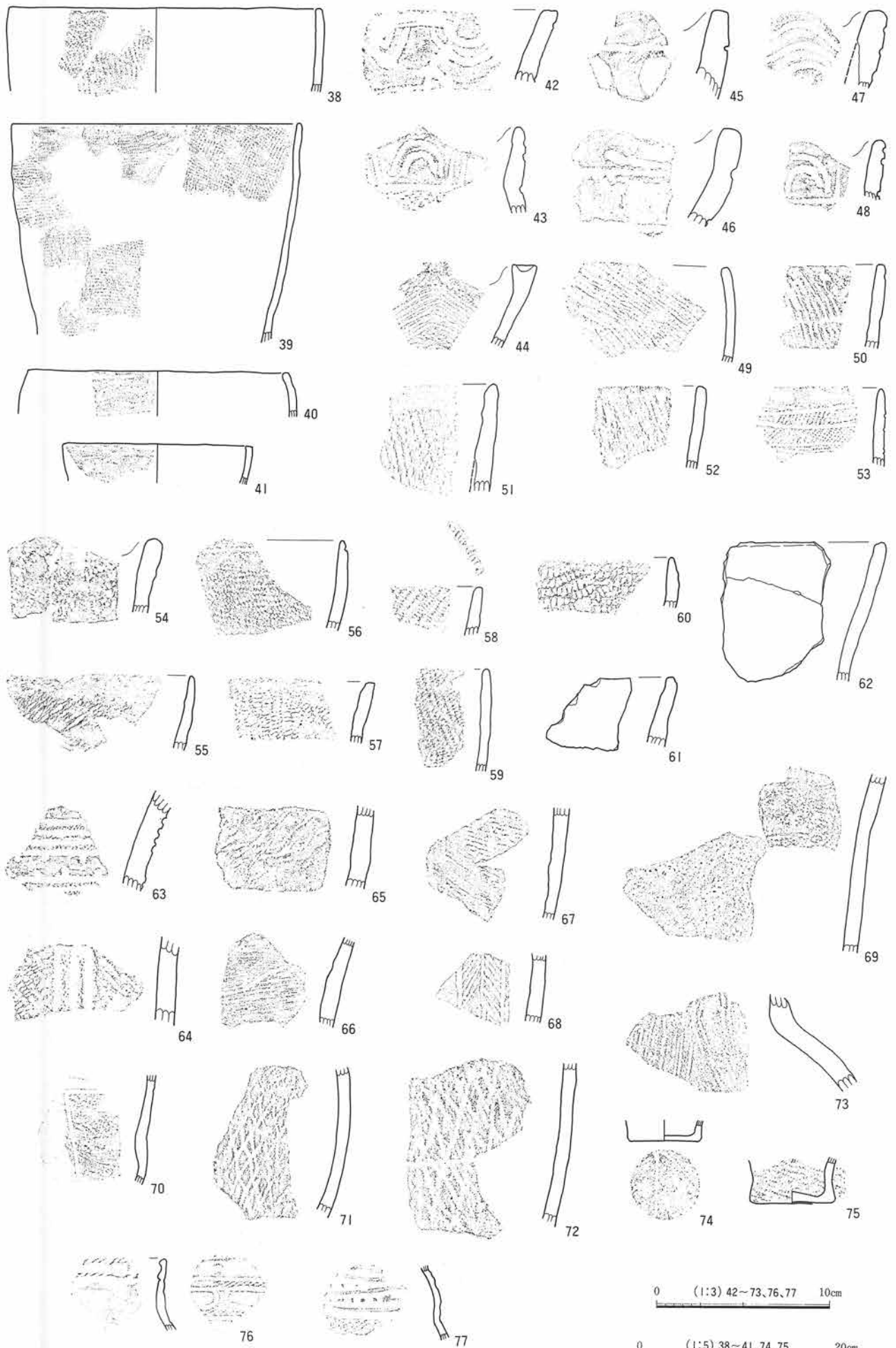


35



37

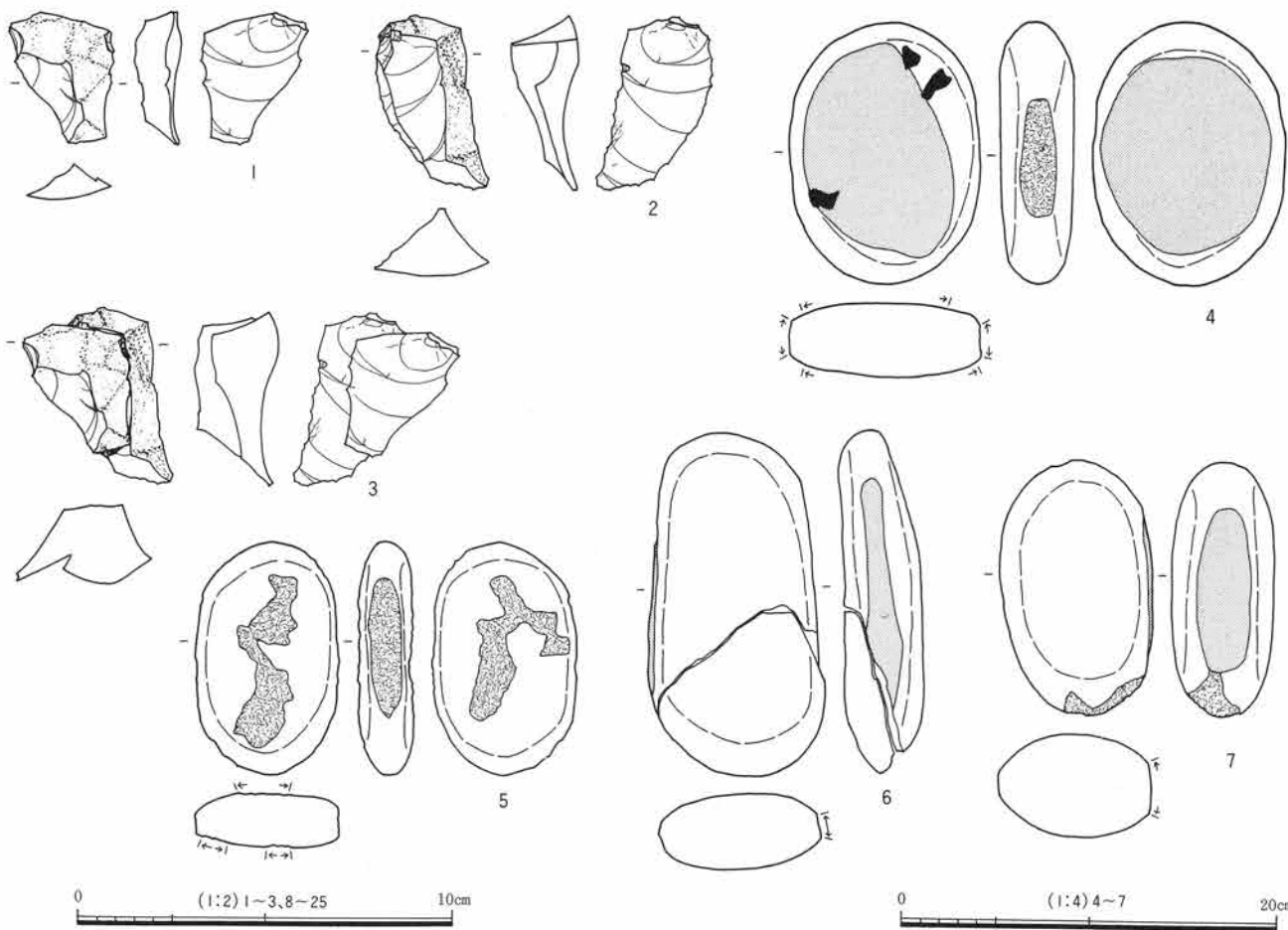
0 (1:5) 20cm



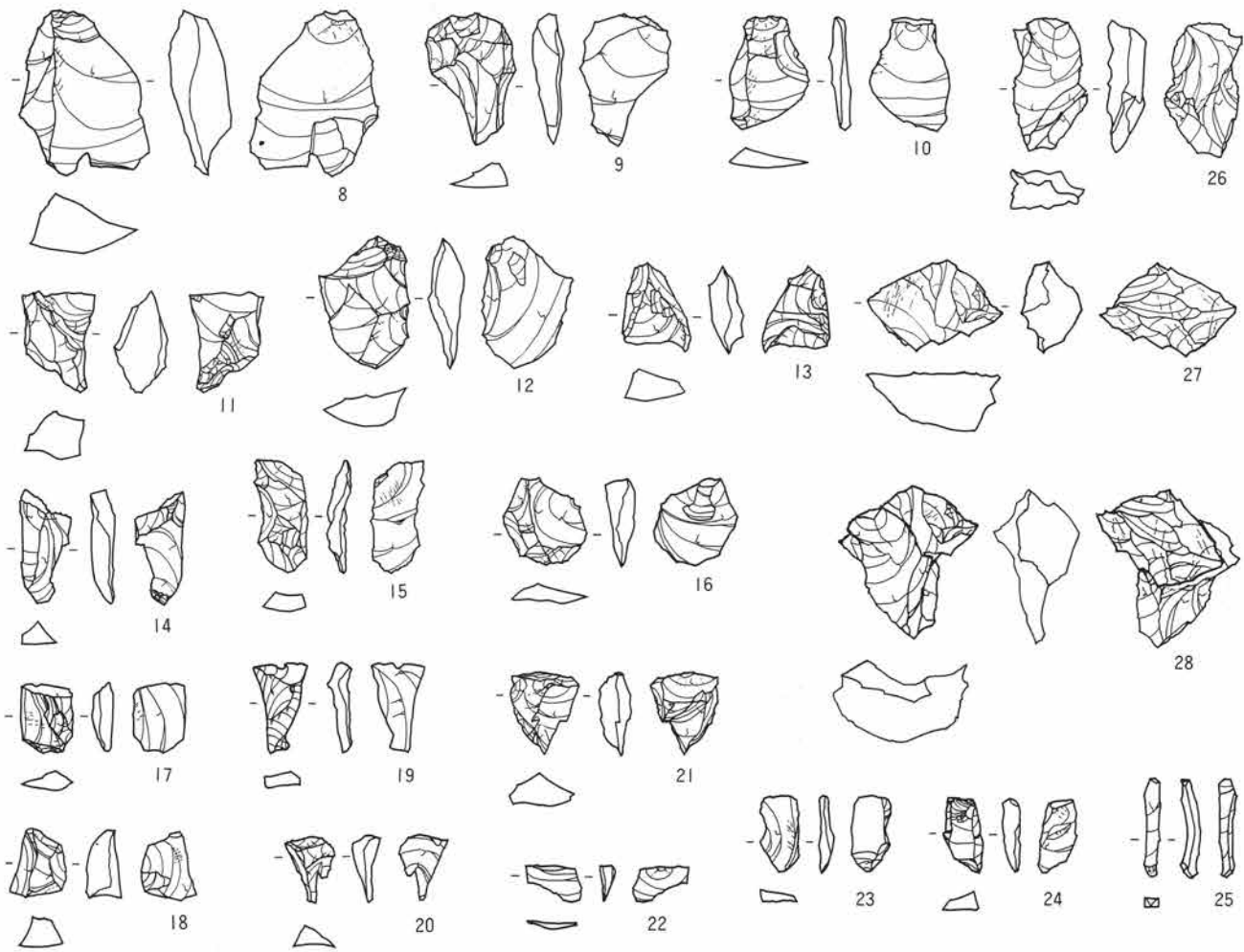
0 (1:3) 42~73, 76, 77 10cm

0 (1:5) 38~41, 74, 75 20cm

1号フラスコ状土坑出土

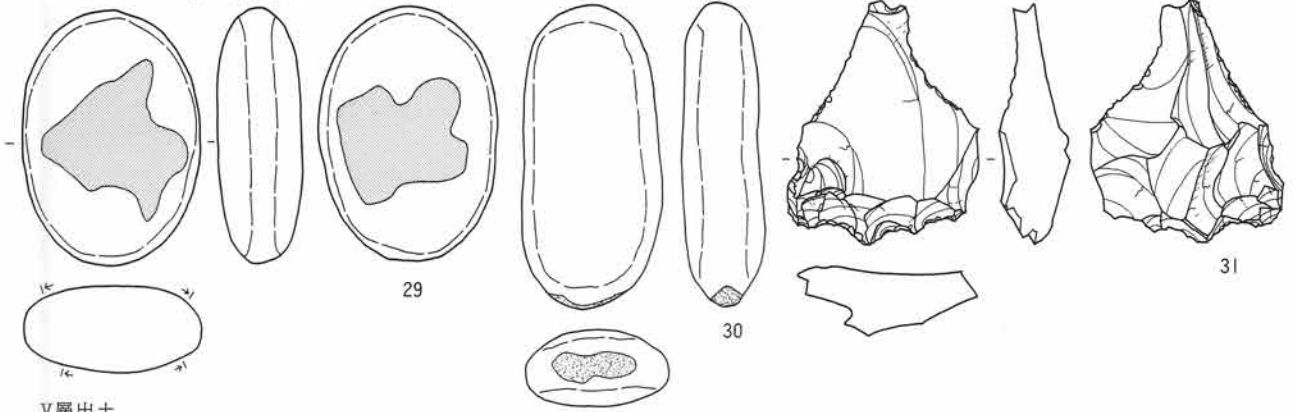


4号土坑出土

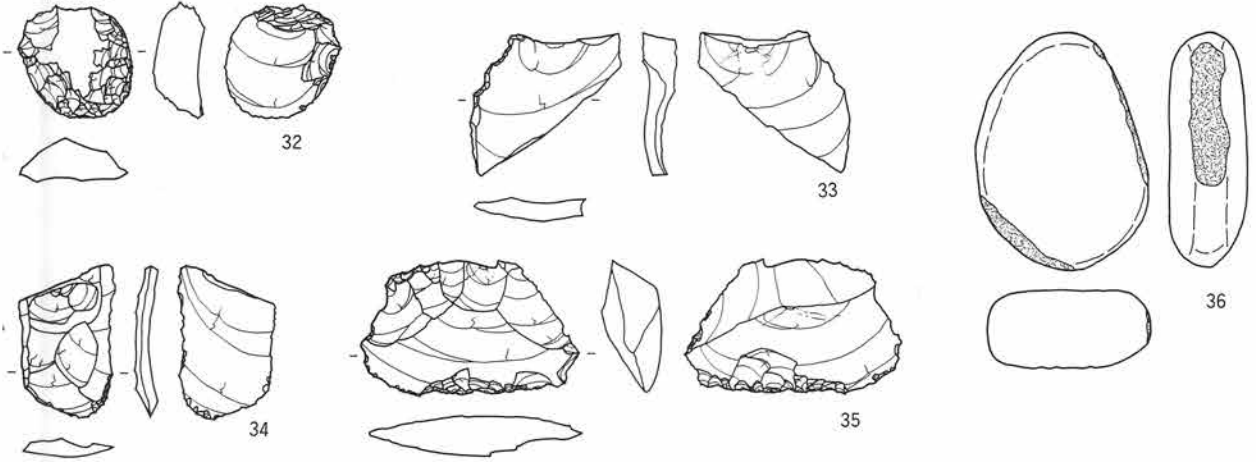


I号風倒木痕出土

2号風倒木痕出土



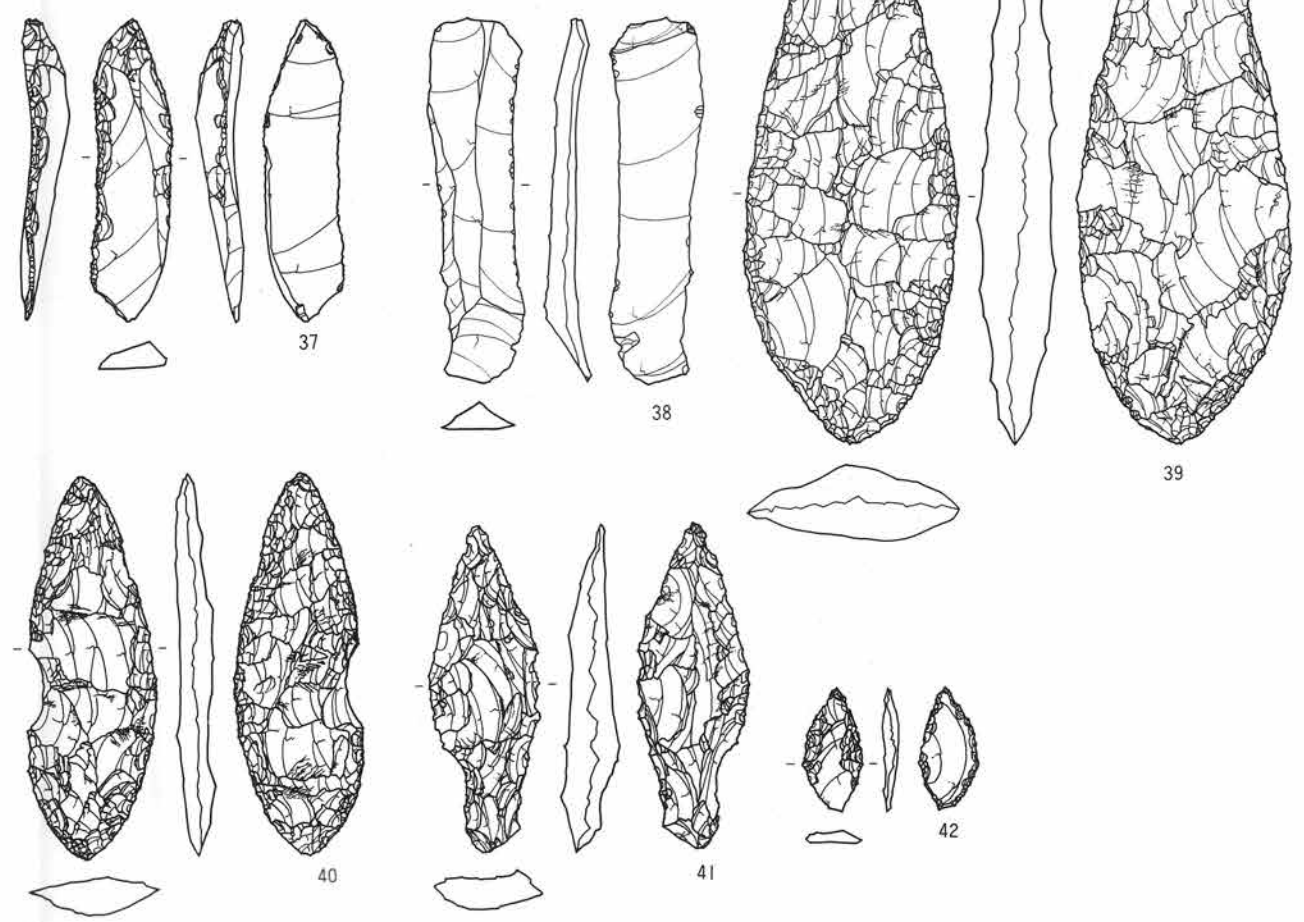
V層出土

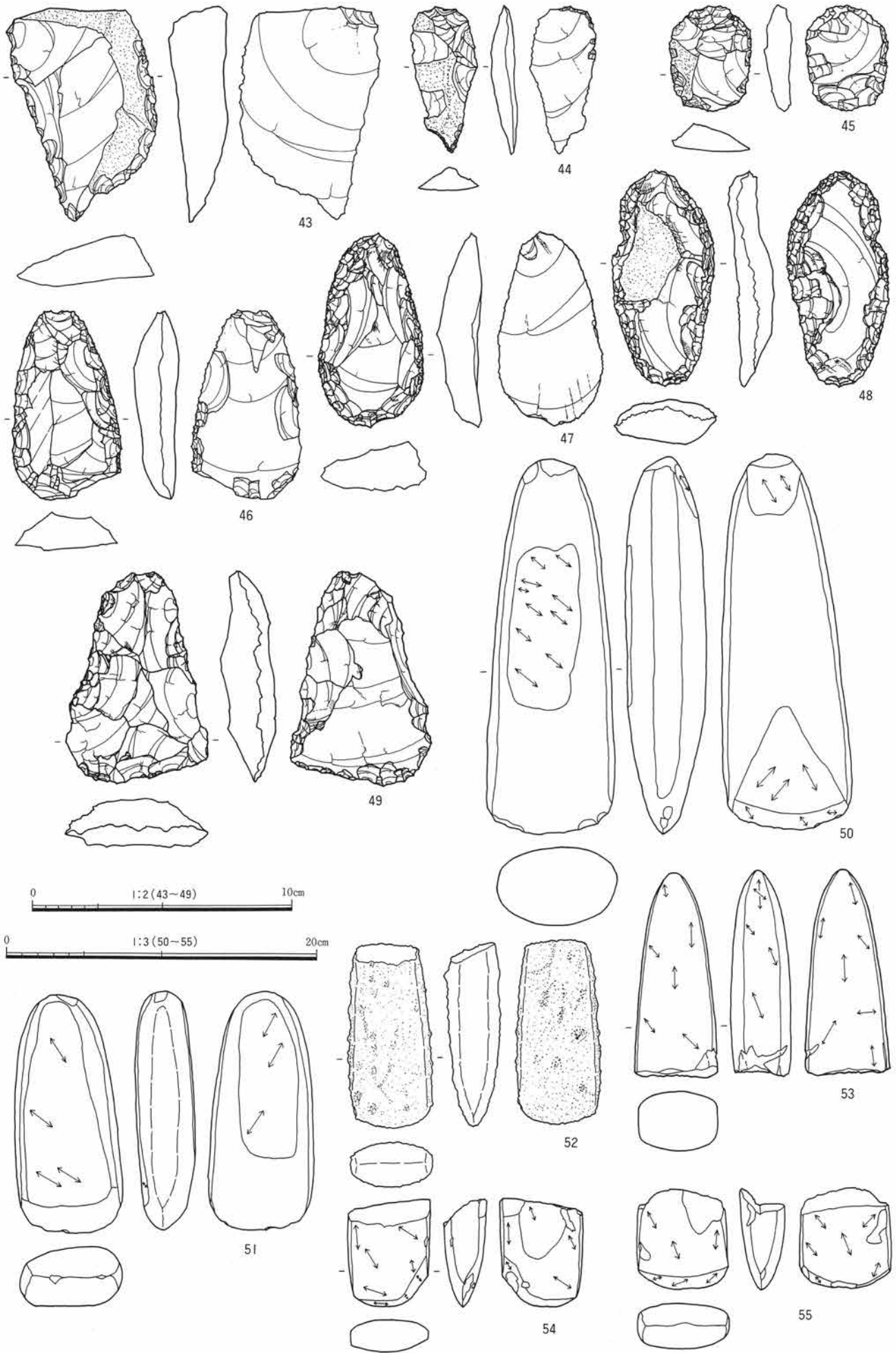


0 (1:2) 31-35, 37-42 10cm

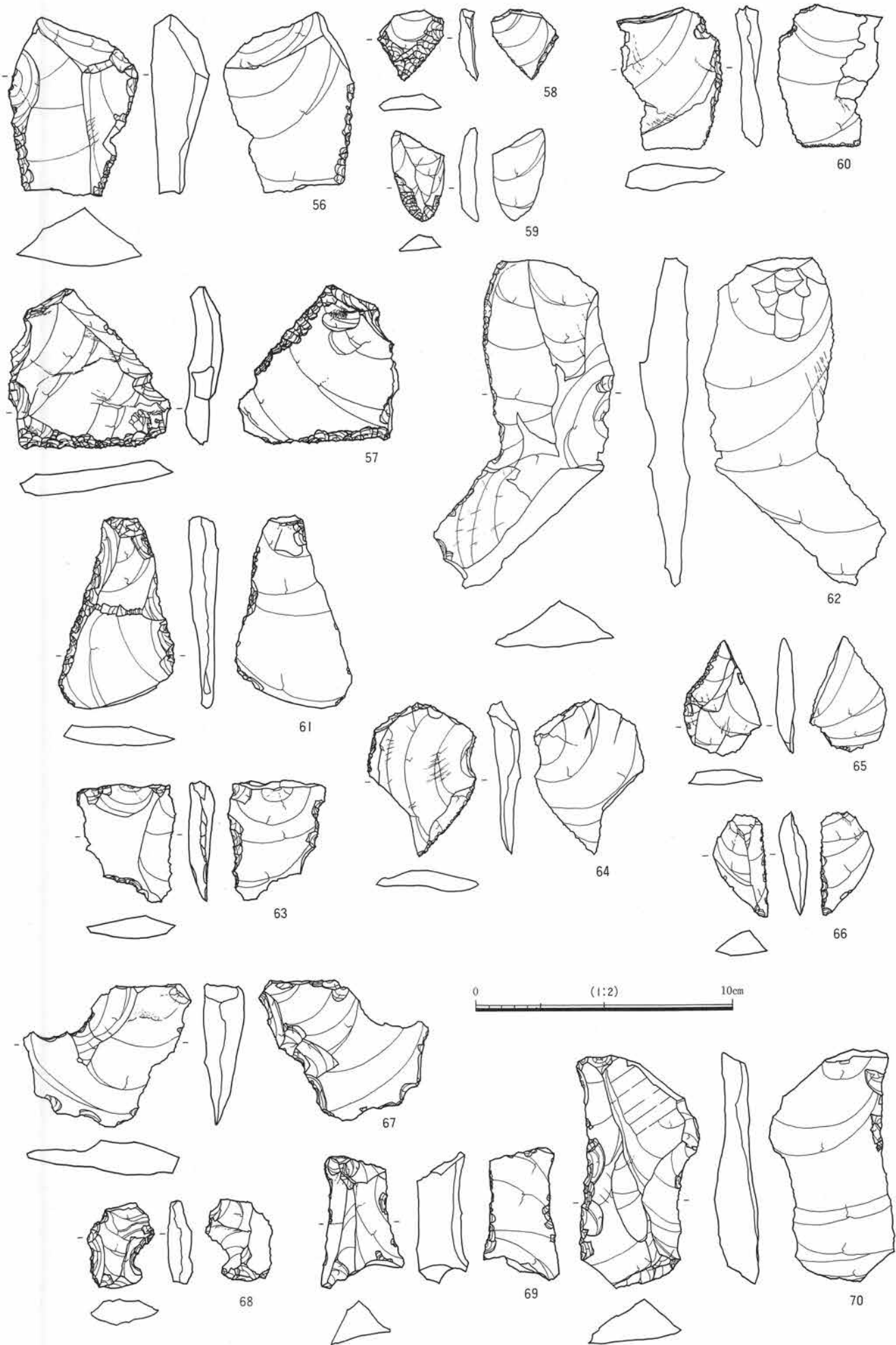
0 (1:4) 29-30-36 20cm

II層出土

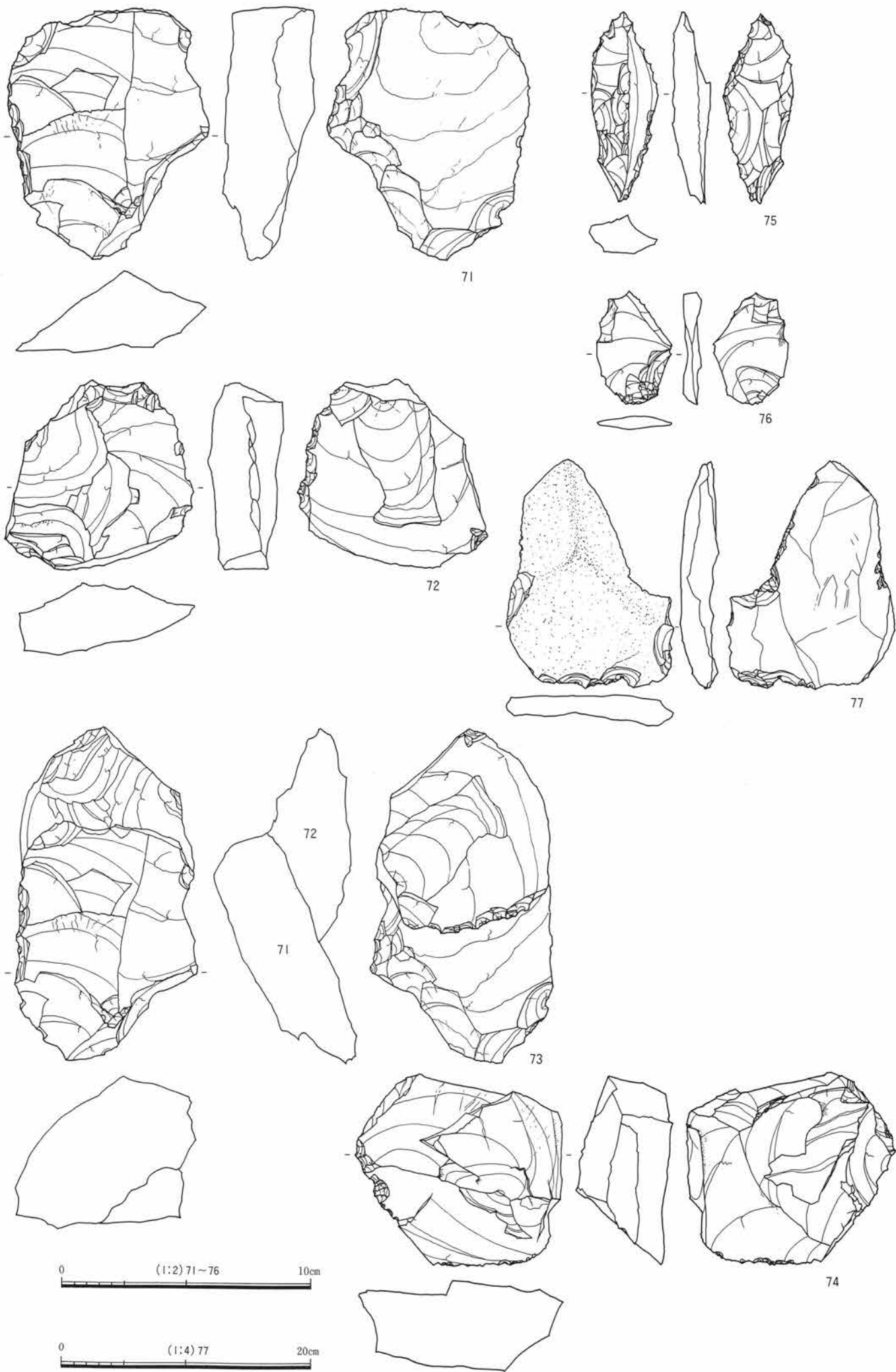


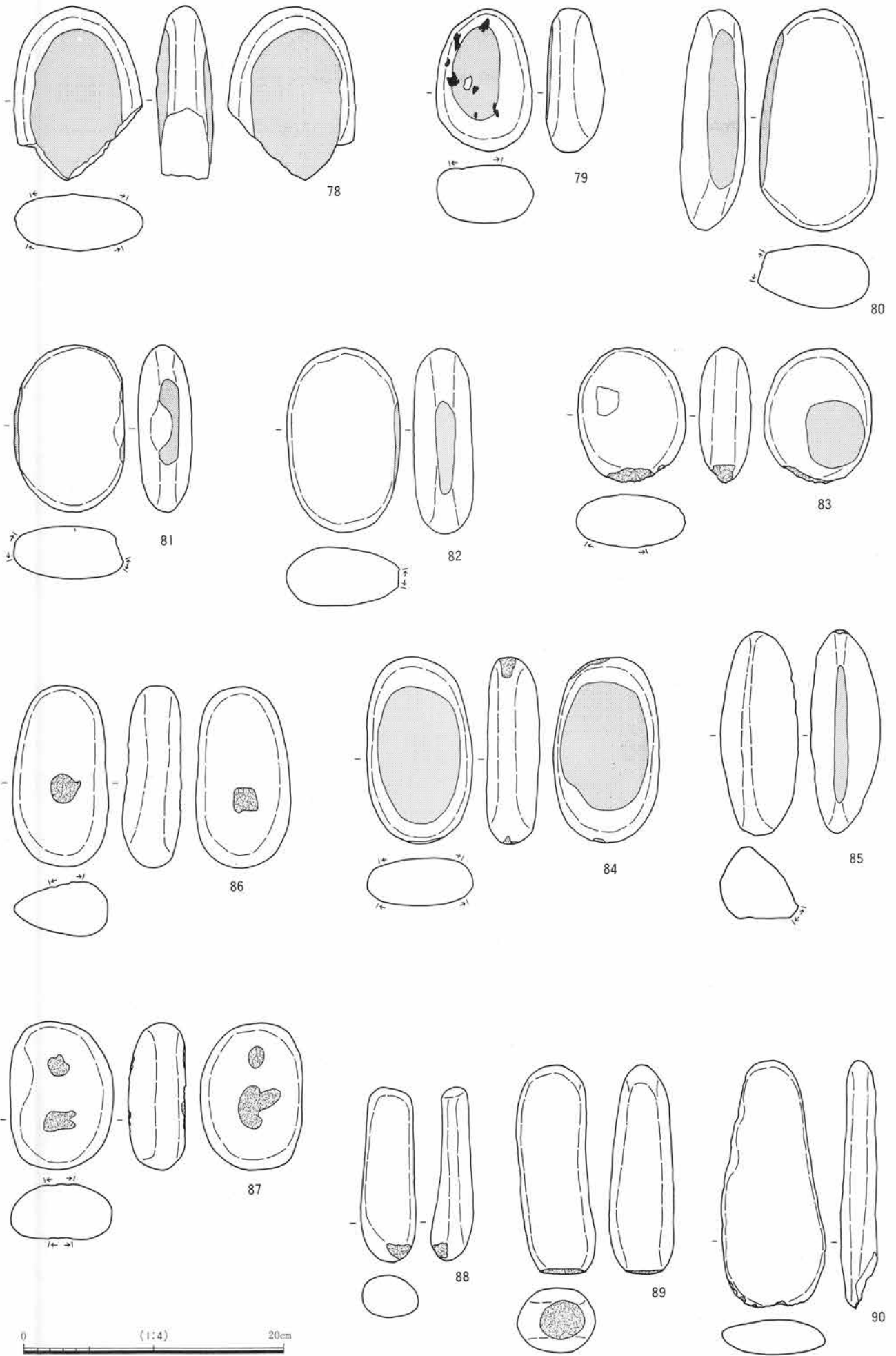




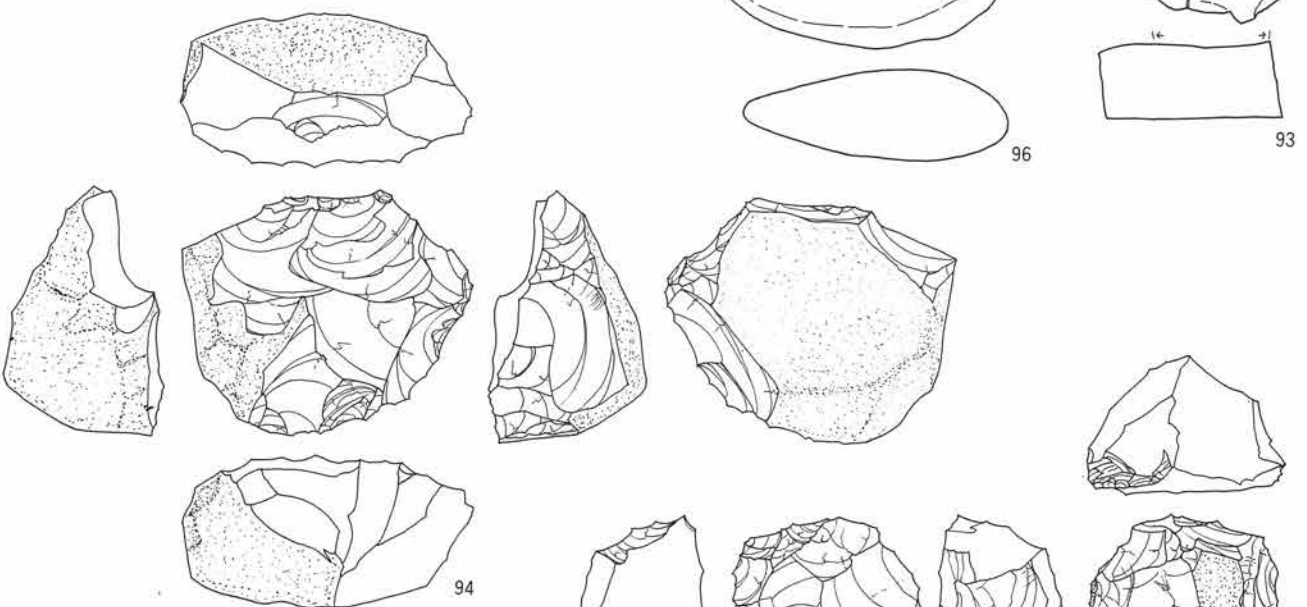
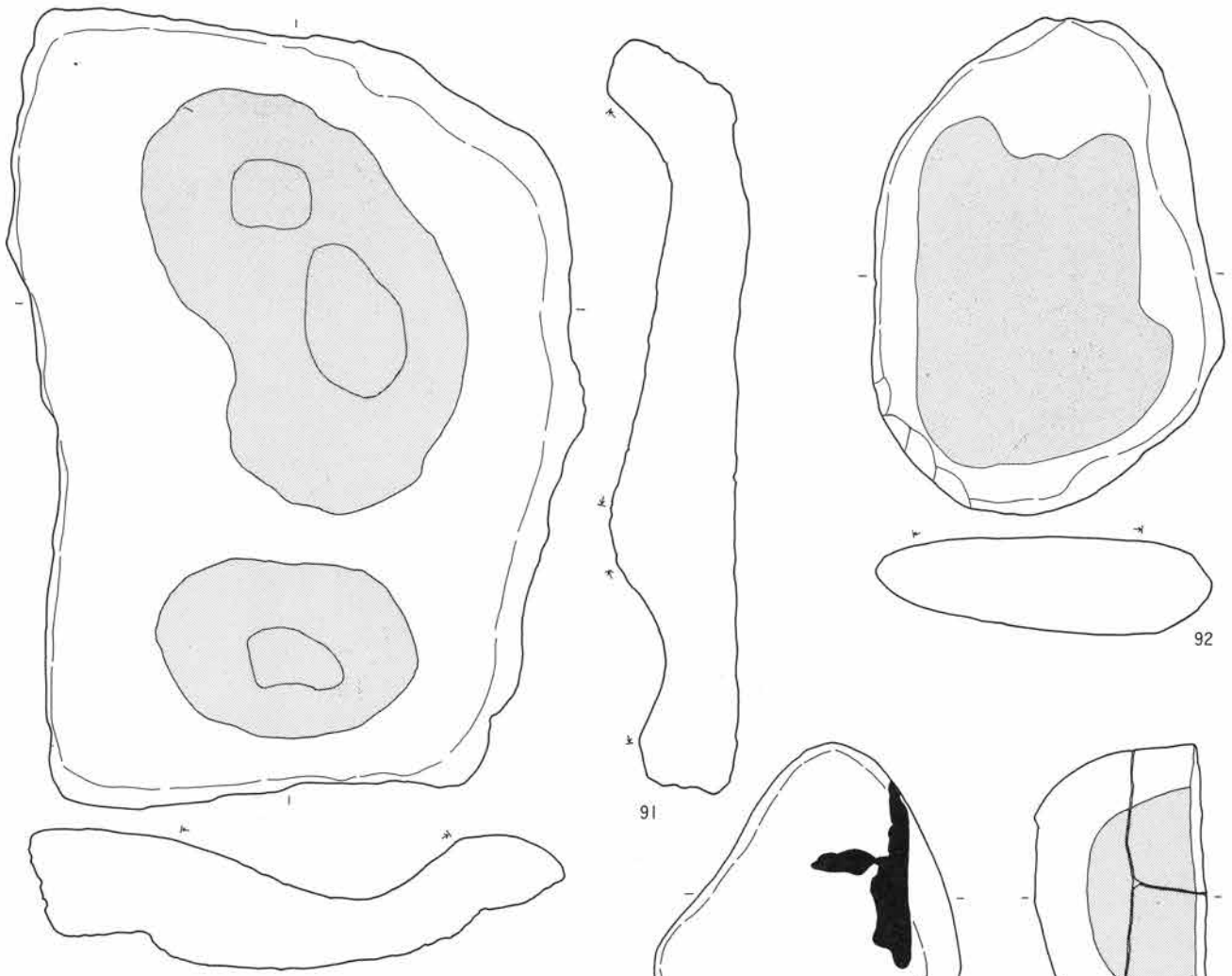








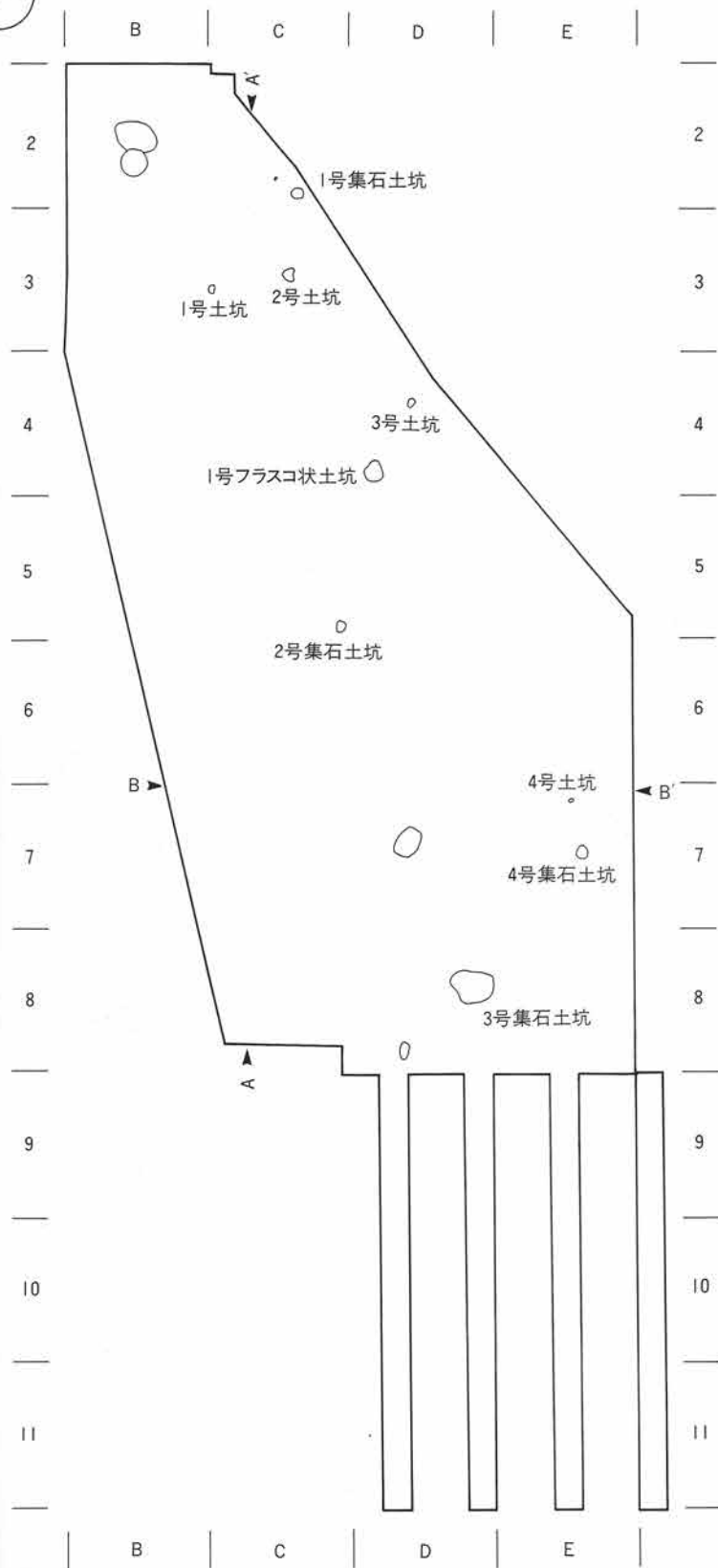
0 (1:4) 20cm



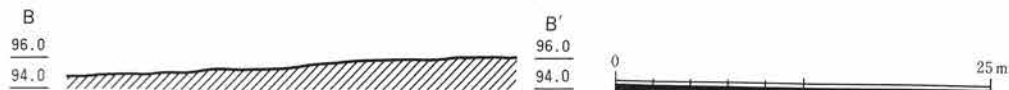
0 (1:2) 94-95 10cm

0 (1:4) 96 20cm

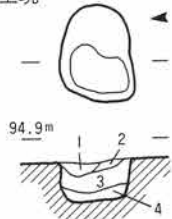
0 (1:6) 91-93 60cm



|    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|
| 1  | 2  | 3  | 4  | 5  |
| 6  | 7  | 8  | 9  | 10 |
| 11 | 12 | 13 | 14 | 15 |
| 16 | 17 | 18 | 19 | 20 |
| 21 | 22 | 23 | 24 | 25 |

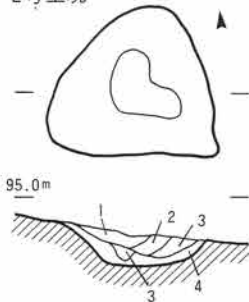


1号土坑



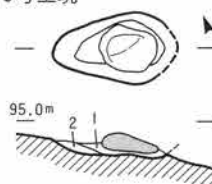
- 1 暗褐色土 粘性・しまり共に欠ける。少量の炭化物(φ2mm)を含む。
- 2 漆褐色土 粘性に富み、よくしまる。
- 3 茶褐色土 粘性に富み、よくしまる。微量の礫を含む。
- 4 黄褐色土 粘性に富み、よくしまる。少量の礫を含む。

2号土坑



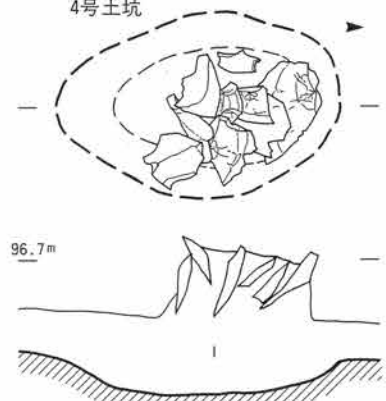
- 1 暗褐色土 粘性・しまり共に欠く。少量の炭化物(φ2mm)を含む。
- 2 1層と4層の混合層。粘性・しまり共に欠く。
- 3 1層と4層の混合層。粘性に富み、硬くしまる。少量の礫・ローム粒を含む。
- 4 黄褐色土 粘性に富み、よくしまる。少量のローム粒・礫を含む。

3号土坑



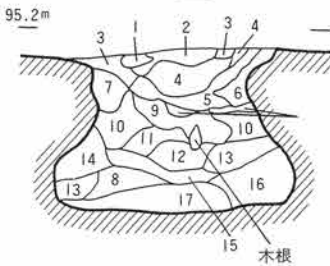
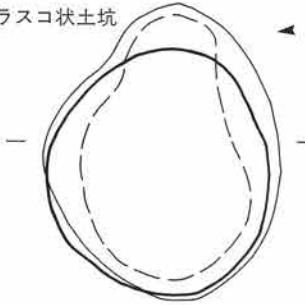
- 1 暗褐色土 粘性・しまり共に欠く。
- 2 黄褐色土 粘性に富み、よくしまる。少量の礫(φ5mm)を含む。

4号土坑



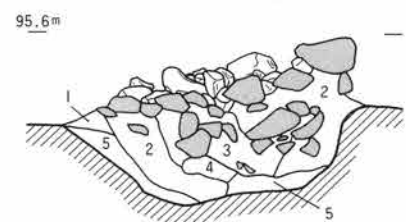
- 1 暗茶褐色土 基本層序のII層に相当。

1号プラスチック状土坑



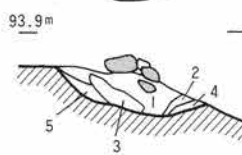
- 1 黒色土 よくしまる。ごく少量のローム粒を含む。
  - 2 暗褐色土 よくしまる。多量のローム粒。硬質の黒色土粒。ごく少量のカーボン粒を含む。
  - 3 暗黄褐色土 ややしみに欠ける。少量のローム粒を含む。
  - 4 暗黄褐色土 しまりに欠ける。粒子の細かなローム粒を含む。
  - 5 黒色土 よくしまる。1層と同質。
  - 6 暗黄褐色土 よくしまる。ローム粒・暗褐色土を含む。
  - 7 暗黄褐色土 しまりに欠ける。多量のロームブロックを含む。
  - 8 黄褐色土 堅崩壊土。
  - 9 暗褐色土 硬くしまる。少量の黒褐色ブロックを含む。
  - 10 暗褐色土 よくしまる。少量の黒褐色ブロックを含む。
  - 11 暗褐色土 よくしまる。9層と同質だがやや色調が暗い。
  - 12 暗褐色土 10層と同質。少量のローム粒を含む。
  - 13 暗黄褐色土 しまりに欠けるが、粘性に富む。大・小ロームブロックを含む。
  - 14 暗黄褐色土 13層と同質。やや色調が暗い。少量のロームブロックを含む。
  - 15 暗褐色土 9層と同質だが、粘性に富む。
  - 16 暗黄褐色土 14層と同質。
  - 17 黒褐色土 ややしみに欠けるが、粘性をもつ。
- ※ 8層以外は、ごく少量の炭化粒(小)を含む。

2号集石土坑



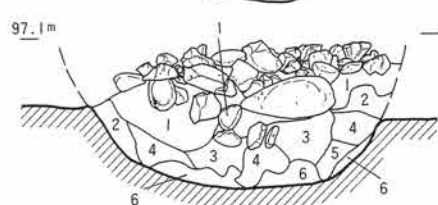
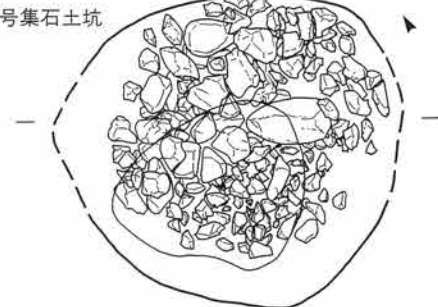
- 1 暗茶褐色土 基本層序のII層に相当。
- 2 暗褐色土 粘性に富み、よくしまる。少量の炭化物を含む。
- 3 黒褐色土 粘性に欠けるが、よくしまる。多量の炭化材を含む。
- 4 黄褐色土 粘性に富むが、しまりに欠ける。
- 5 暗黄褐色土 地山と2層の混合層。

1号集石土坑



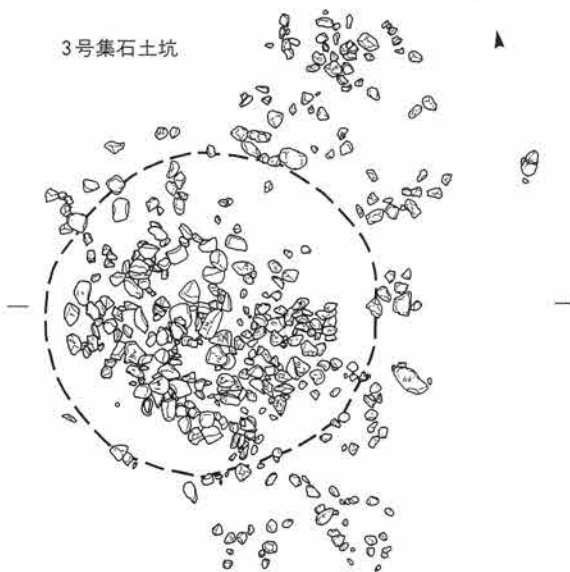
- 1 暗褐色土 粘性・しまり共に欠ける。微量の炭化物(φ2mm)を含む。
- 2 暗黄褐色土 粘性・しまり共に欠ける。1層と地山の混合層。少量の炭化物を含む。
- 3 黒褐色土 よくしまるが、粘性に欠く。多量の炭化物(φ2mm)を含む。
- 4 黄褐色土 粘性・しまり共にやや欠ける。2層と地山の混合層。
- 5 黄褐色土 やや粘性に欠けるが、しまる。3層と地山の混合層。

4号集石土坑

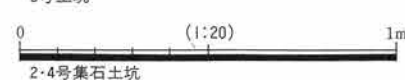
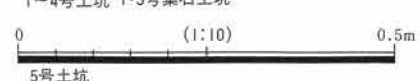
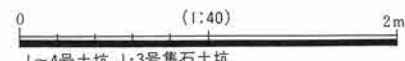


- 1 暗茶褐色土 基本層序のII層に相当。
- 2 暗黄茶褐色土 粘性に富む。微量の炭化粒を含む。
- 3 黒褐色土 ややしみに欠く。多量の炭化粒。少量の焼土粒を含む。割れた石材有り。
- 4 暗黄灰褐色土 やや粘性をもつ。少量の炭化粒を含む。
- 5 暗黄灰褐色土 やや粘性をもつ。4層に比べて明るい。
- 6 黄褐色土 地山に相当。

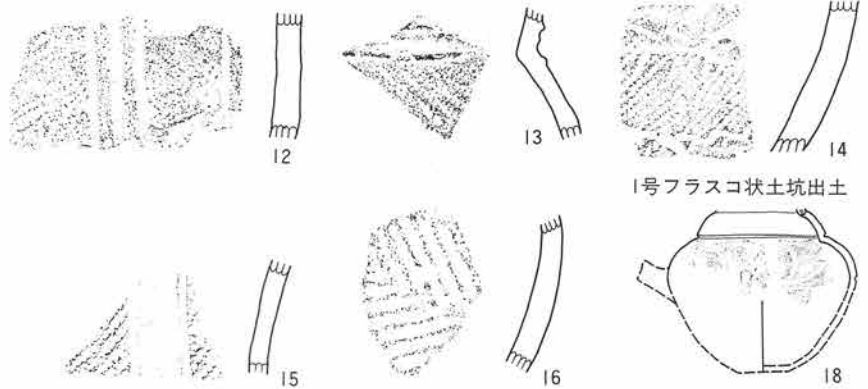
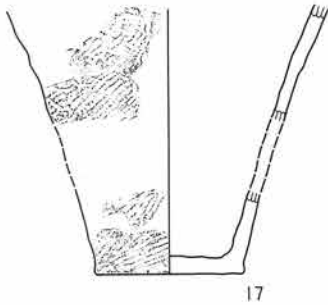
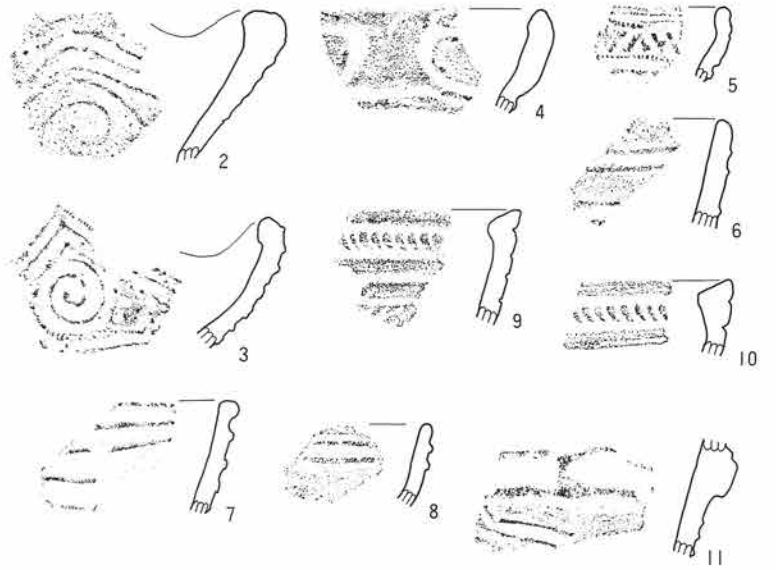
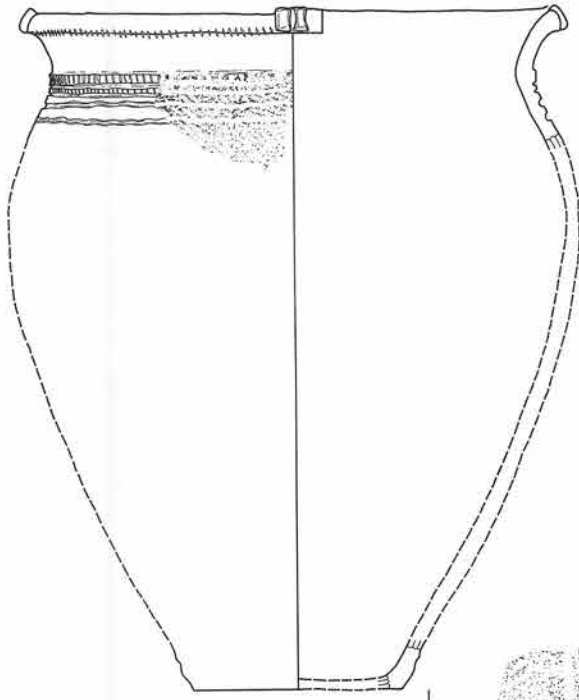
3号集石土坑



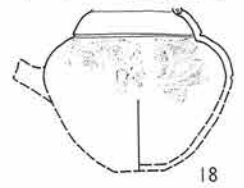
- 1 暗褐色土 粘性・しまり共に欠く。



II層出土



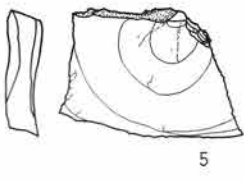
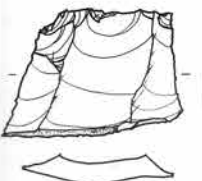
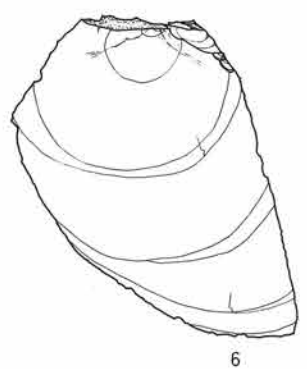
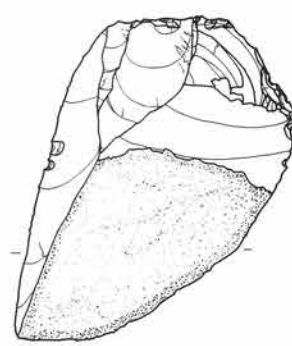
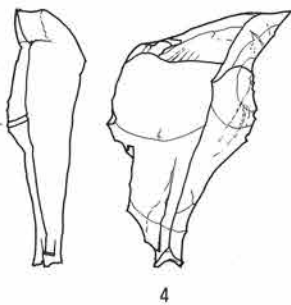
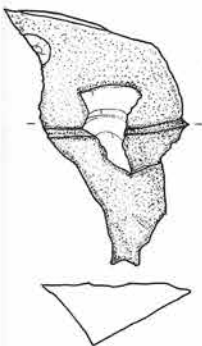
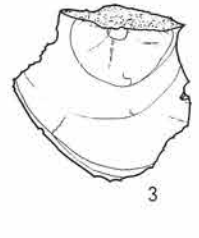
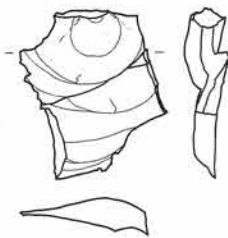
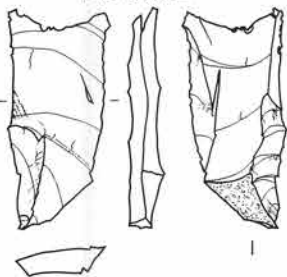
I号フラスコ状土坑出土



0 (1:3) 2-15-16 10cm

0 (1:5) 1-17-18 20cm

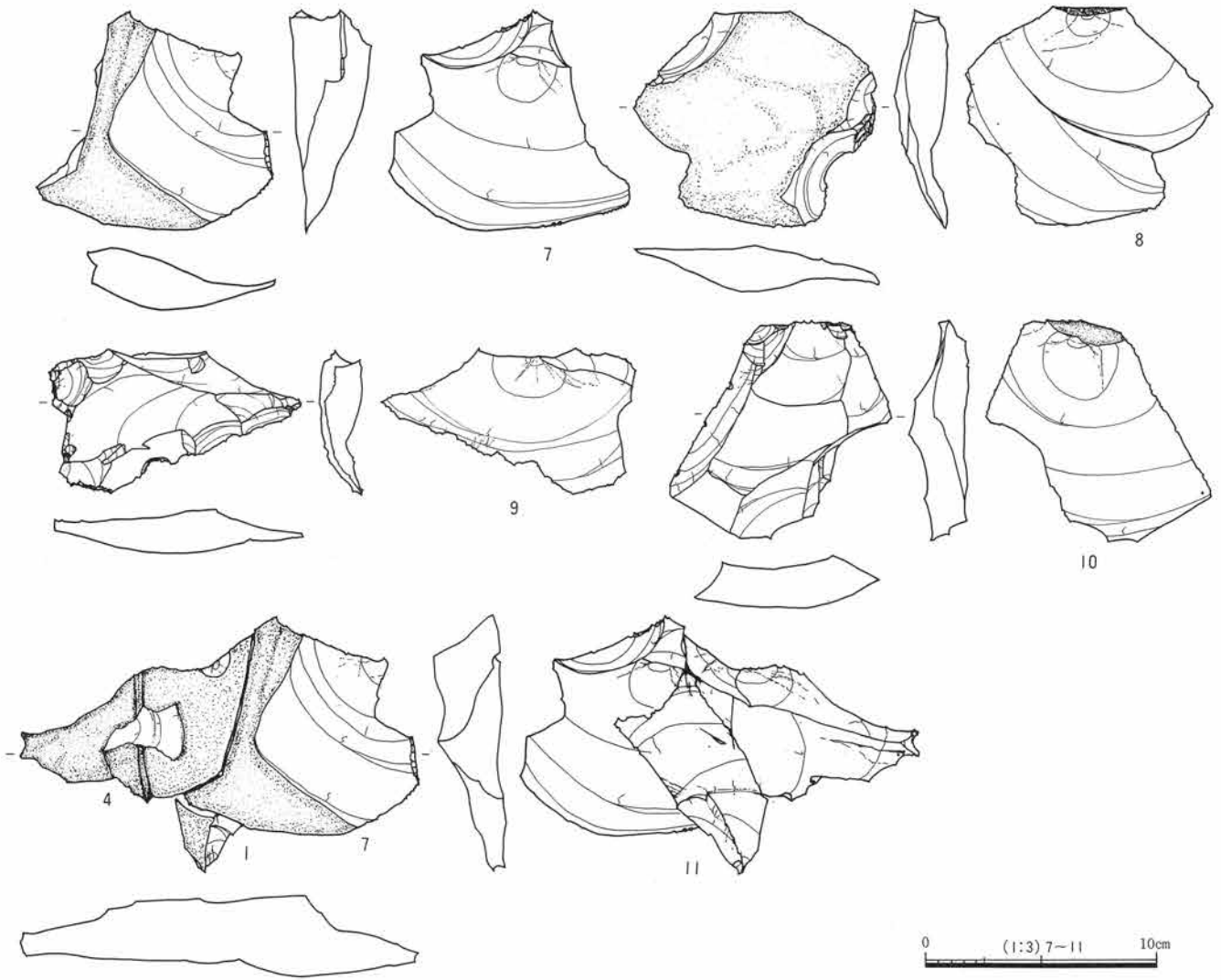
4号土坑出土



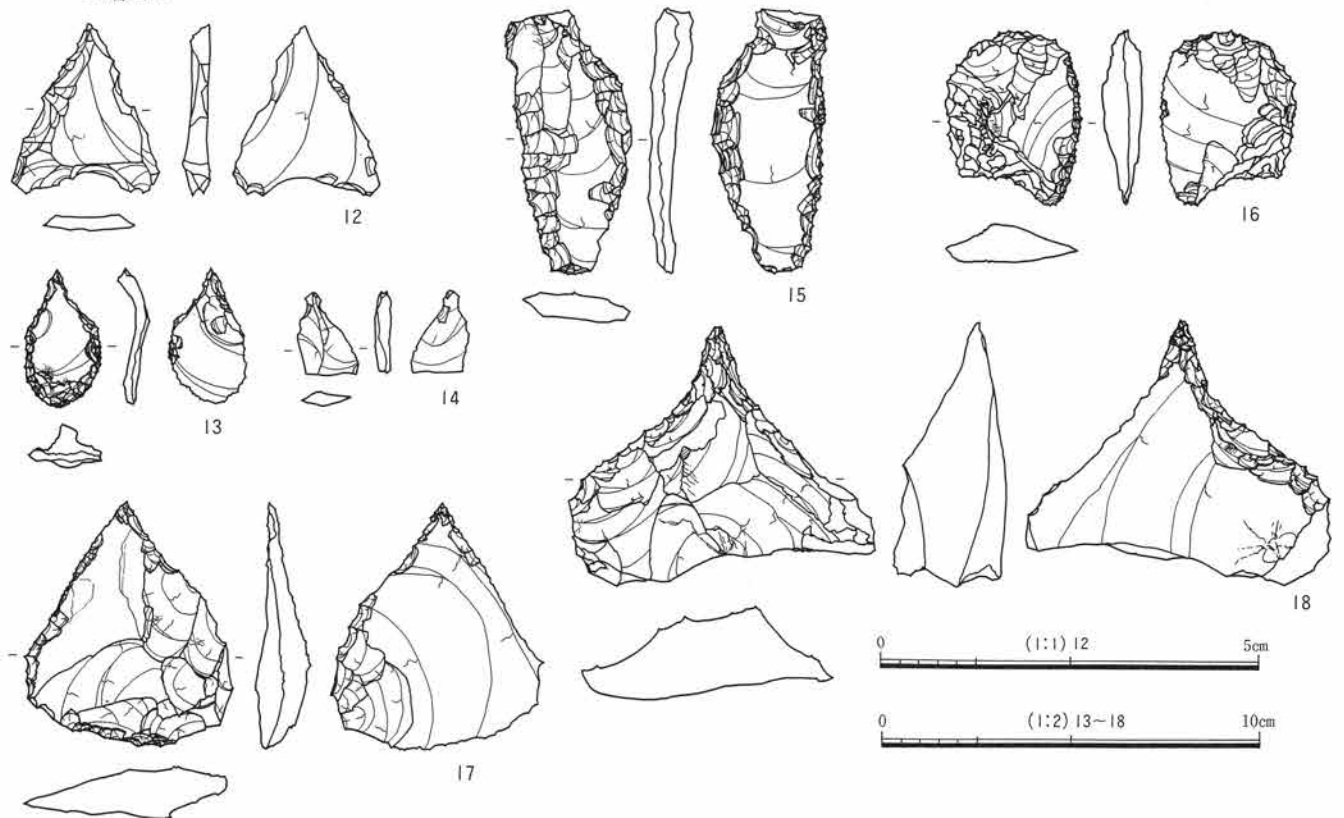
0 (1:3) 10cm



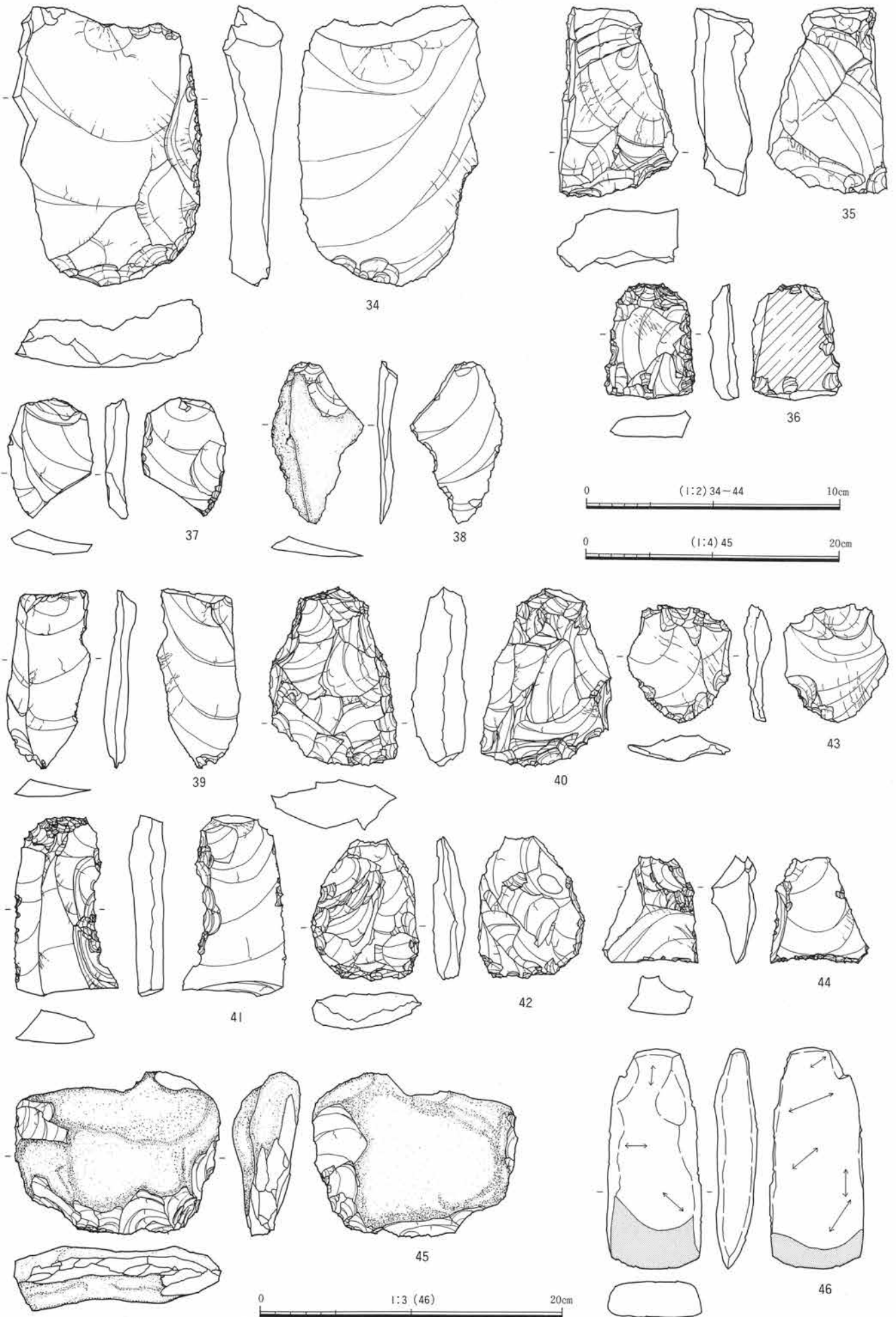
4号土坑出土



II層出土







34

35

36

37

38

(1:2) 34-44

10cm

(1:4) 45

20cm

39

40

43

41

42

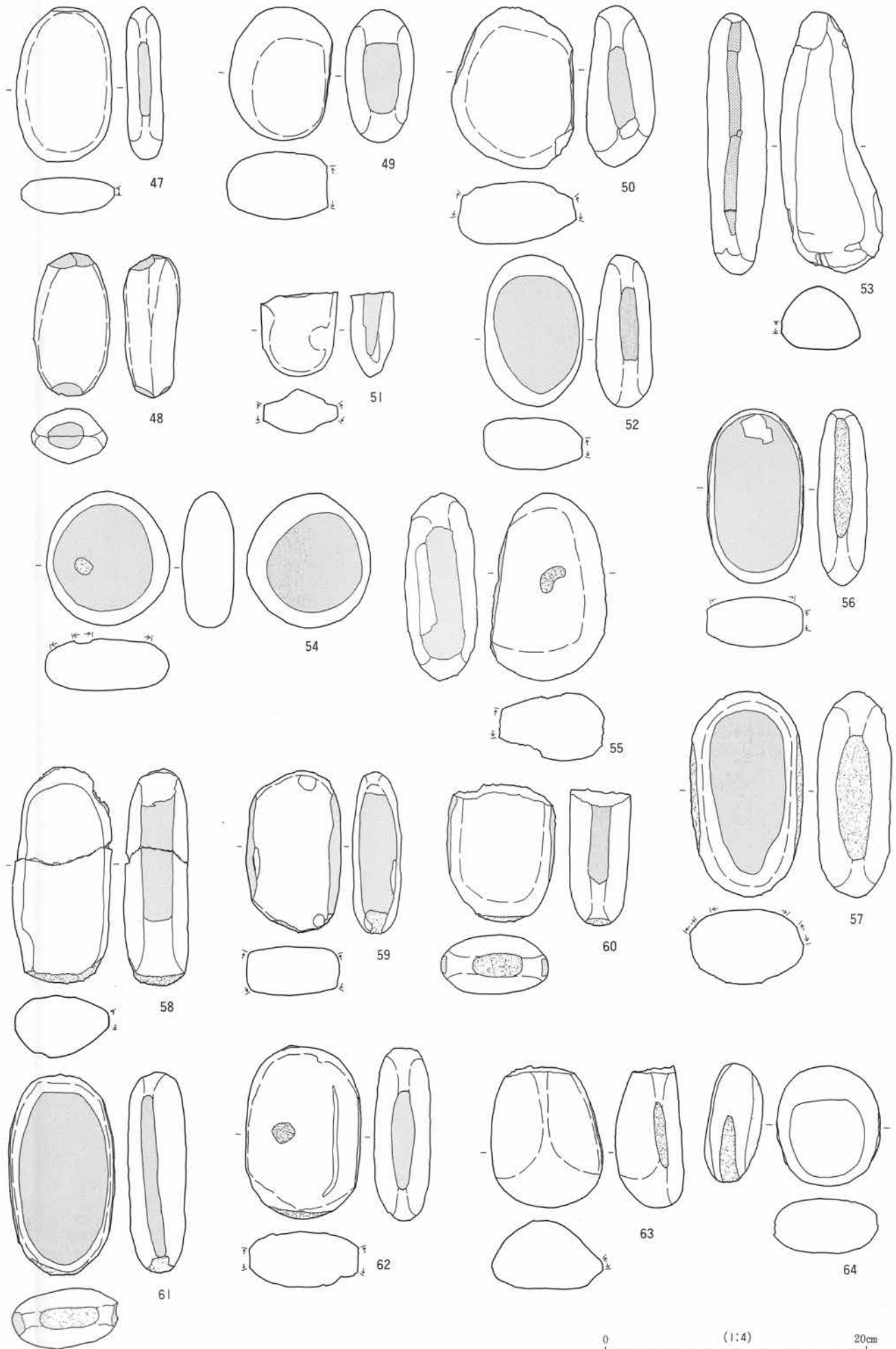
44

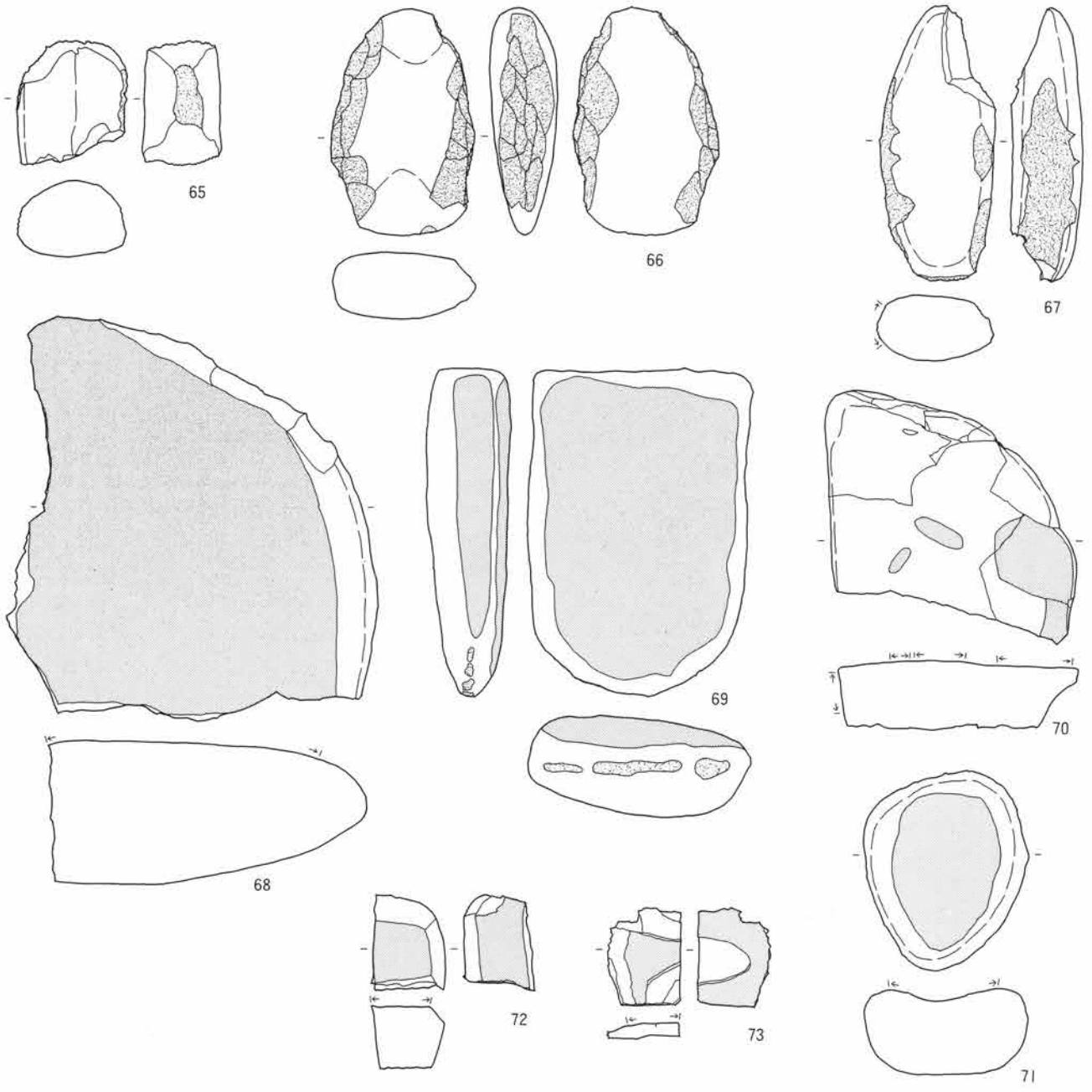
45

46

1:3 (46)

20cm

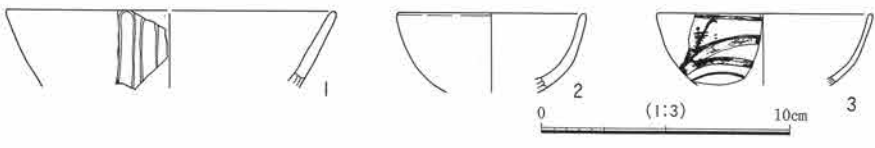




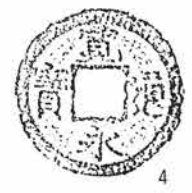
0 (1:2) 72, 73 10cm

0 (1:4) 65~67, 20cm

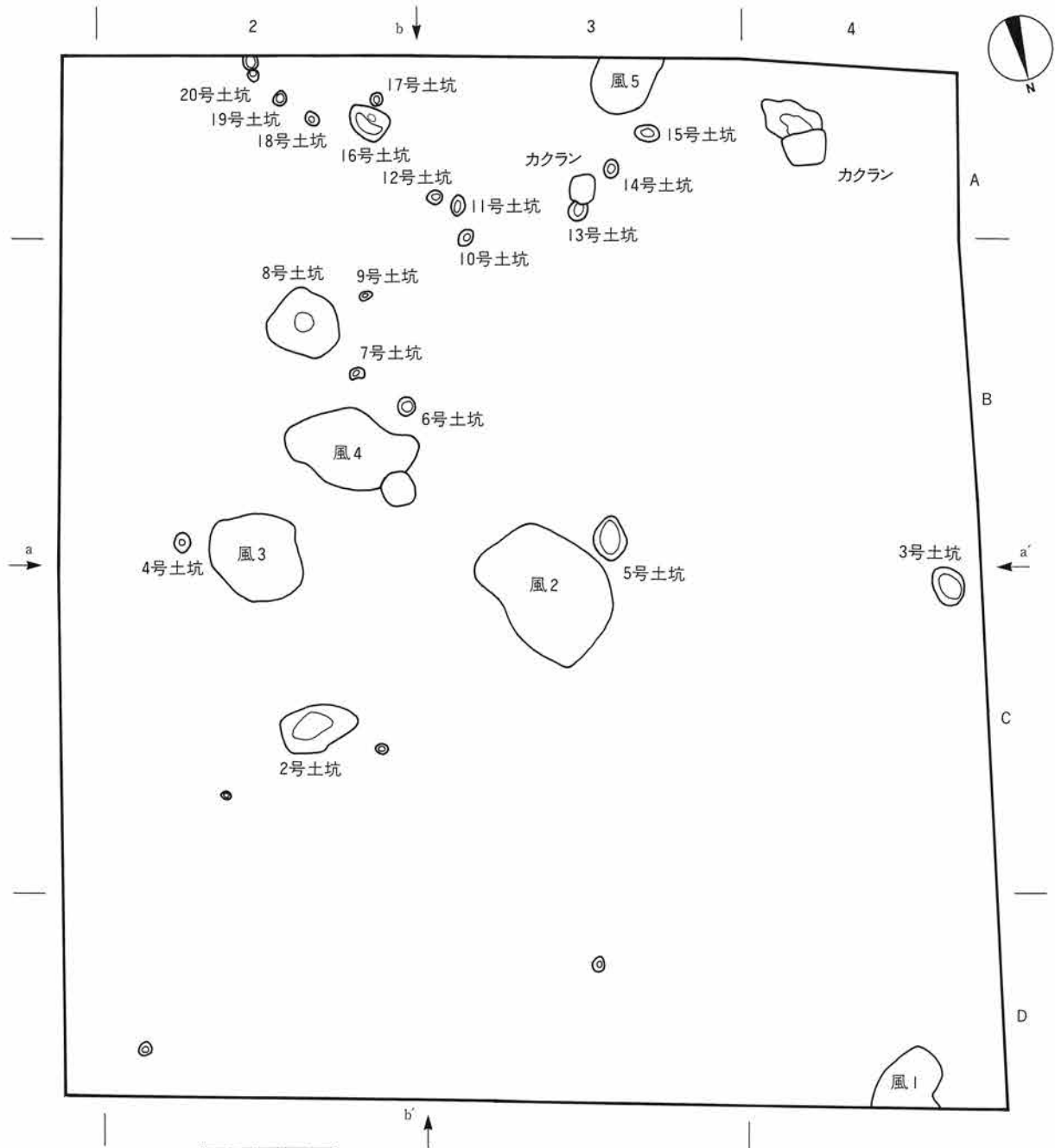
0 (1:6) 68~71 60cm



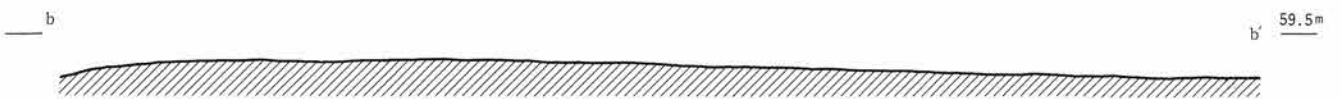
0 (1:3) 10cm



0 (1:1) 5cm

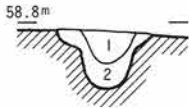


|    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|
| 1  | 2  | 3  | 4  | 5  |
| 6  | 7  | 8  | 9  | 10 |
| 11 | 12 | 13 | 14 | 15 |
| 16 | 17 | 18 | 19 | 20 |
| 21 | 22 | 23 | 24 | 25 |



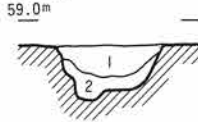


4号土坑



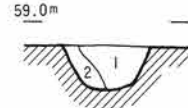
- 1 黒灰褐色砂質土 非常に硬くしまる。粒子は細かく均一。灰褐色砂ブロックがわずかに混じる。
- 2 灰褐色砂質土 1より、やや軟らかい。2と地山がブロック状に混じる。

6号土坑



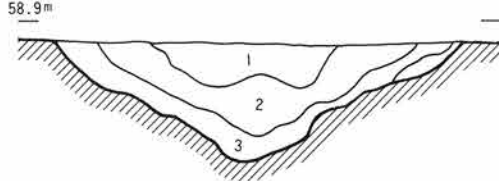
- 1 暗灰褐色砂質土 ややしりに欠く。地山ブロックが少量混じる。
- 2 灰褐色砂質土 ややしりに欠く。地山ブロックが少量混じる。

7号土坑



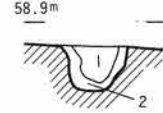
- 1 暗灰褐色砂質土 ややしりに欠く。地山ブロックが少量混じる。
- 2 灰褐色砂質土 ややしりに欠く。

8号土坑



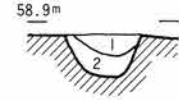
- 1 黒灰褐色砂質土 非常に硬くしまる。粒子は細かく均一。灰褐色砂ブロックがわずかに混じる。
- 2 暗灰褐色砂質土 非常に硬くしまる。硬くしまった1のブロックが混入。1と3の中間的性質。
- 3 灰褐色砂質土 1、2に比べ、やや軟らかい。3と4がブロック状に混じる。
- 4 暗黄灰色砂 やや汚れた地山。

9号土坑



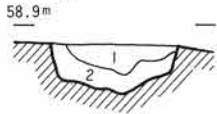
- 1 暗灰褐色砂質土 ややしりに欠く。地山ブロックが少量混じる。
- 2 灰褐色砂質土 //

10号土坑



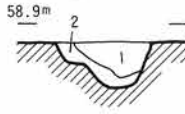
- 1 暗灰褐色砂質土 ややしりに欠く。地山ブロックが少量混じる。
- 2 灰褐色砂質土 //

11号土坑



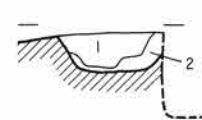
- 1 暗灰褐色砂質土 ややしりに欠く。地山ブロックが少量混じる。
- 2 灰褐色砂質土 //

12号土坑



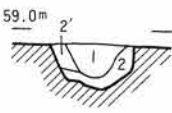
- 1 暗灰褐色砂質土 ややしりに欠く。地山ブロックが少量混じる。
- 2 灰褐色砂質土 //

13号土坑



- 1 暗灰褐色砂質土 ややしりに欠く。地山ブロックが少量混じる。
- 2 灰褐色砂質土 //

14号土坑



- 1 暗灰褐色砂質土 ややしりに欠く。地山ブロックが少量混じる。
- 2 灰褐色砂質土 //
- 2' " 2よりやや明るい色調。

15号土坑



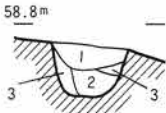
- 1 黒灰褐色砂質土 非常に硬くしまる。粒子は細かく均一。灰褐色砂ブロックがわずかに混じる。
- 2 灰褐色砂質土 1よりやや軟らかい。2と地山がブロック状に混じる。

16号土坑



- 1 黒色砂質土 硬くしまる。地山ブロックが少量混じる。
- 2 黒褐色砂質土 ややしりに欠く。地山ブロックが多量に混じる。
- 3 暗灰褐色砂質土 ややしりに欠く。地山ブロックがまだら状に混じる。

17号土坑



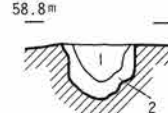
- 1 暗灰褐色砂質土 ややしりに欠く。地山ブロックが少量混じる。
- 2 灰褐色砂質土 //
- 3 暗黄灰色砂 やや汚れた地山。黄色が濃い。

18号土坑



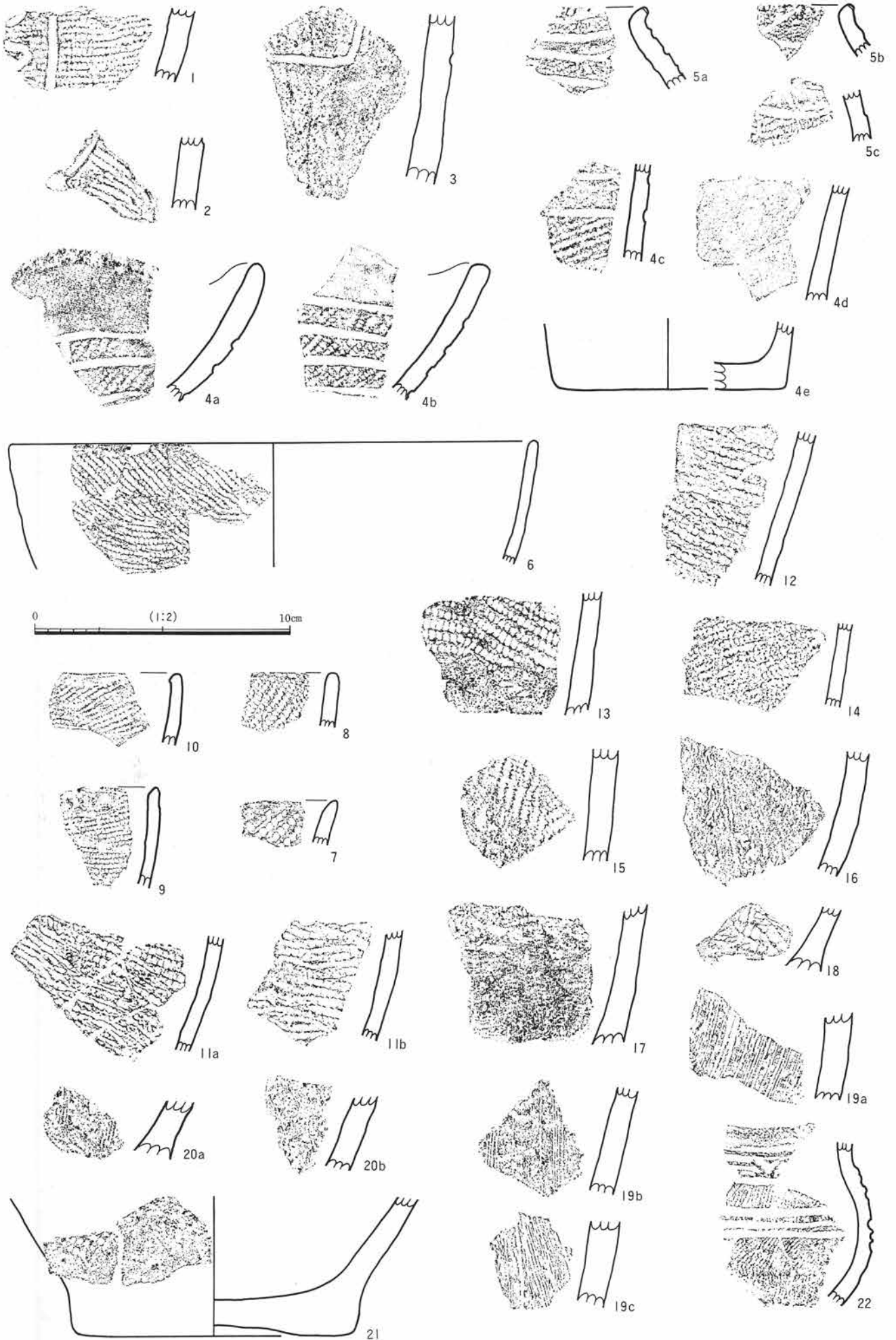
- 1 黒灰褐色砂質土 硬くしまる。2のブロックが下部に混じる。
- 2 暗灰褐色砂質土 ややしりに欠く。地山ブロックが下部に混じる。

19号土坑



- 1 黒灰褐色砂質土 非常に硬くしまる。粒子は細かく均一。灰褐色砂ブロックが、わずかに混じる。
- 2 灰褐色砂質土 1よりやや軟らかい。2と地山がブロック状に混じる。





1 調査前全景  
(東から)



2 調査前  
(西から)



3 調査前  
(東から)



4 東側北部完掘  
(西から)

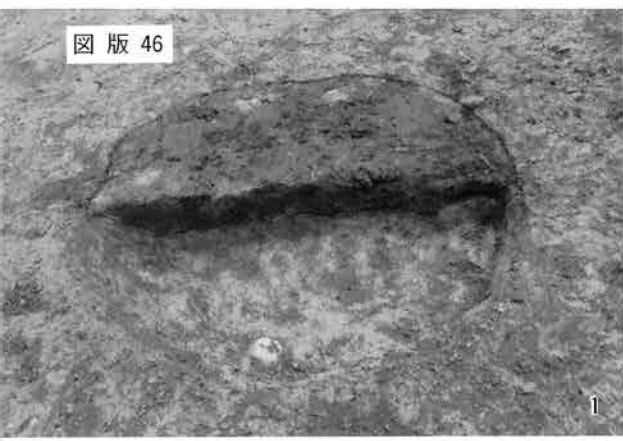


1

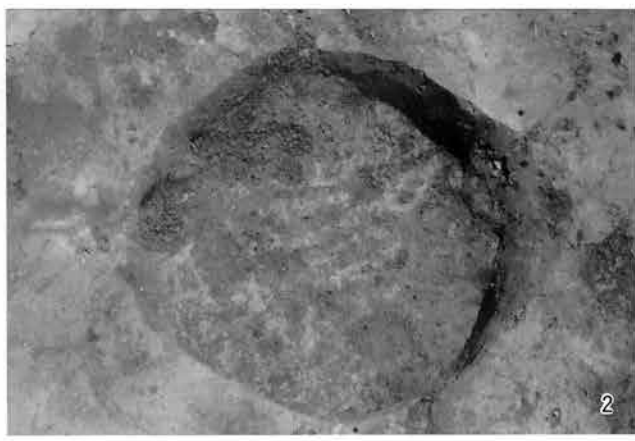
2

3

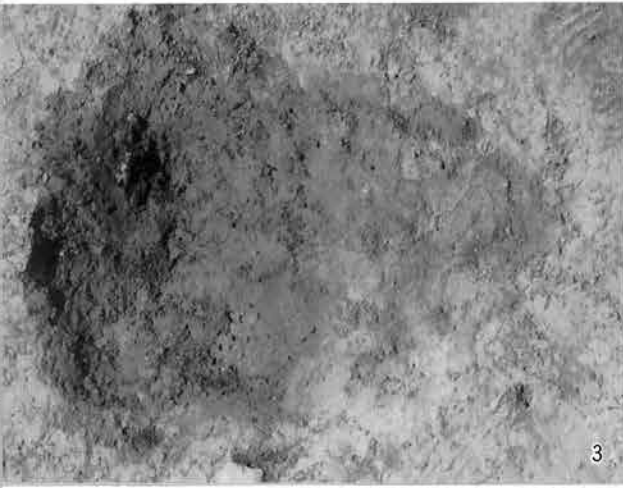
4



1



2



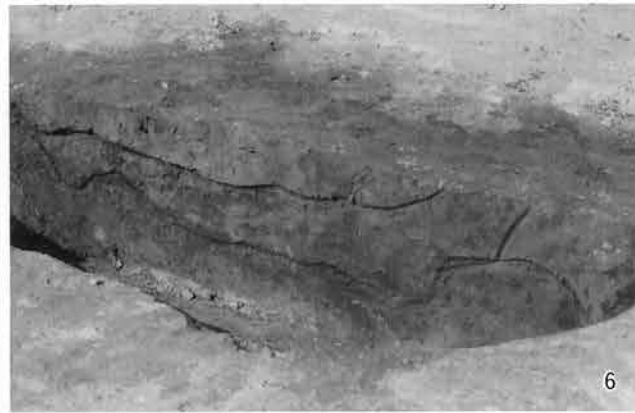
3



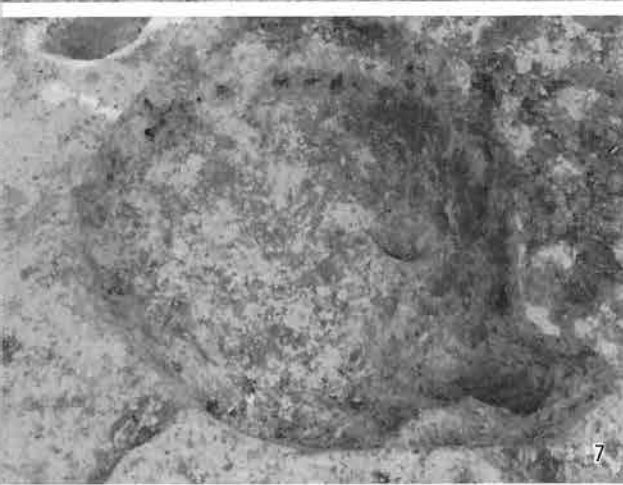
5



4



6



7



9



8



10

1 1号土坑断面  
(西から)

2 2号土坑完掘  
(西から)

3 4号土坑完掘  
(東から)

4 4号土坑断面  
(南から)

5 5号土坑完掘  
(西から)

6 5号土坑完掘  
(南西から)

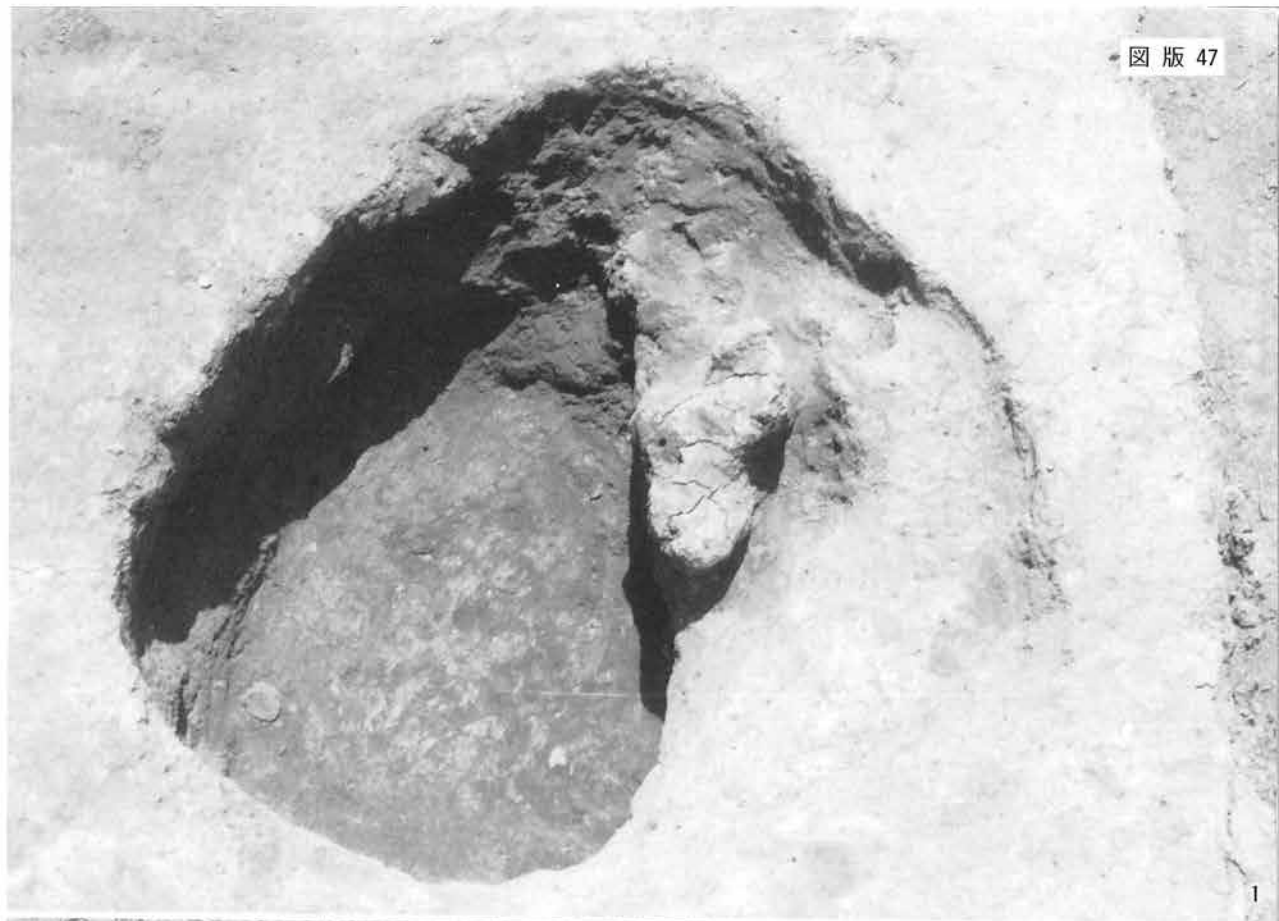
7 6号土坑完掘  
(南から)

8 6号土坑断面  
(南西から)

9 8号土坑完掘  
(南から)

10 8号土坑断面  
(東から)





1 1号フラスコ状土坑  
完掘  
(北から)

1



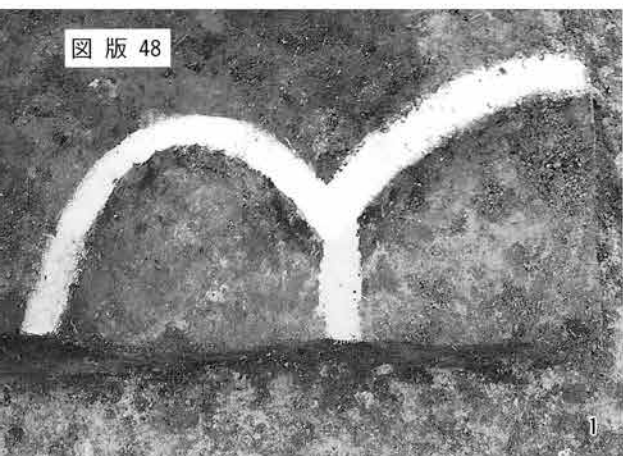
2 1号フラスコ状土坑  
断面  
(西から)

2



3 1号フラスコ状土坑  
遺物出土状況  
(西から)

3



1 1号・2号焼土坑  
完掘（北から）

2 1号・2号焼土坑  
断面（北から）

3 4号・5号焼土坑  
完掘（東から）

4 4号・5号焼土坑  
断面（東から）



5 1号埋設土器  
検出状況  
（北から）



6 1号埋設土器  
断面  
（北から）



1 1号集石土坑  
検出状況  
(北東から)



2 1号集石土坑  
断面  
(南から)



3 4ライン最北  
セクション  
(西から)



4 4ライン中央  
セクション  
(西から)



5 4ライン最南  
セクション  
(北東から)



6 B3-5 II層  
の土器出土  
状況 (南から)





1 3号集石検出状況  
(南から)



2 3号集石断ち割り  
(西から)



3 2号集石検出状況  
(南から)



5 性格不明遺構完掘  
(南から)



4 D3-12II層の  
土器出土状況  
(南から)



6 性格不明遺構断面  
(北から)



1 東側南部  
完掘 (西から)



2 東側南部の  
テストピット  
(西から)



3 東側南部の  
テストピット  
(北から)



4 東側南部の  
テストピット全景  
(西から)



5 Eライン  
9~10グリッド  
のセクション  
(南西から)



6 10ライン  
最南セクション  
(南西から)





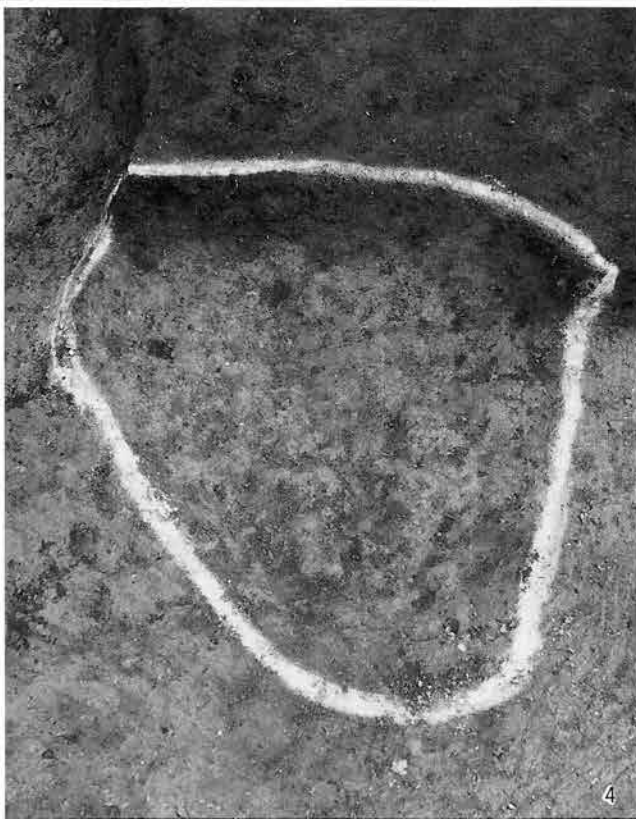
1 10号土坑遺物  
出土状況  
(北東から)



2 10号土坑断面  
(北東から)



3



4

3 10号土坑遺物  
出土状況  
(東から)

4 10号土坑完掘  
(北東から)





1 4号集石土坑  
検出状況  
(西から)



2 4号集石土坑  
断面  
(南から)



3 4号集石土坑  
完掘 (西から)

1

2

3



1 5号集石土坑  
検出状況  
(南西から)

2 5号集石土坑  
完掘(西から)



3 5号集石土坑  
断面  
(南西から)



4 5号集石土坑  
断面(南西から)





1 中央部北側  
完掘 (東から)



2 中央部南側  
完掘 (北東から)



3 5号焼土坑  
完掘 (南から)



4 5号焼土坑  
断面  
(西から)



5 2号風倒木  
土器出土状況  
(東から)



1 中央部  
北側完掘  
(西から)



2 15ライン最北の  
セクション  
(北東から)



3



4

3 15ライン  
セクションアップ  
(東から)

4 11号土坑完掘  
(南から)





1 西部南側  
完掘 (西から)

1



2 土偶出土状況  
(西から)

2



3 土偶出土状況アップ  
(北から)



4 18~20ライン  
セクション  
(南西から)

4

5 a-a' 19ライン  
セクション  
(南から)

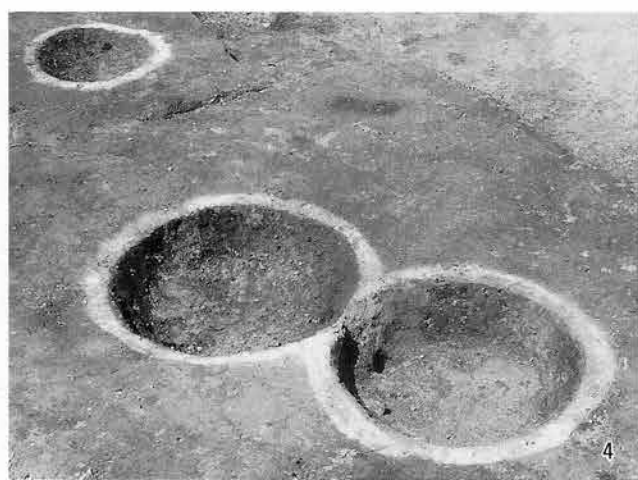
5



1 西部北側  
完掘 (南から)



2



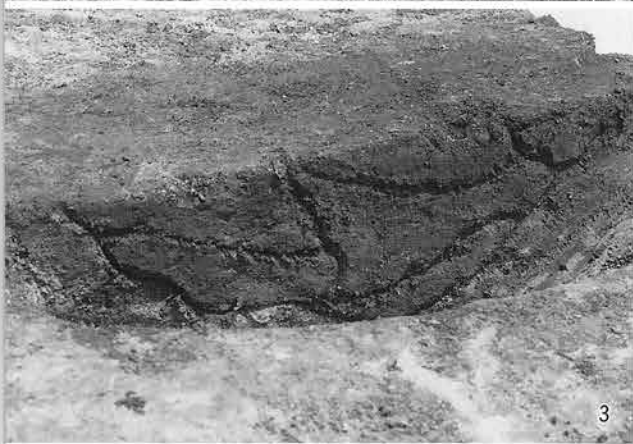
4

2 13号土坑完掘  
(西から)

3 13号土坑断面  
(南から)

4 14・15・16号土坑  
完掘  
(南から)

5 14号土坑断面  
(南から)



3



5

6 15号土坑断面  
(北から)



6

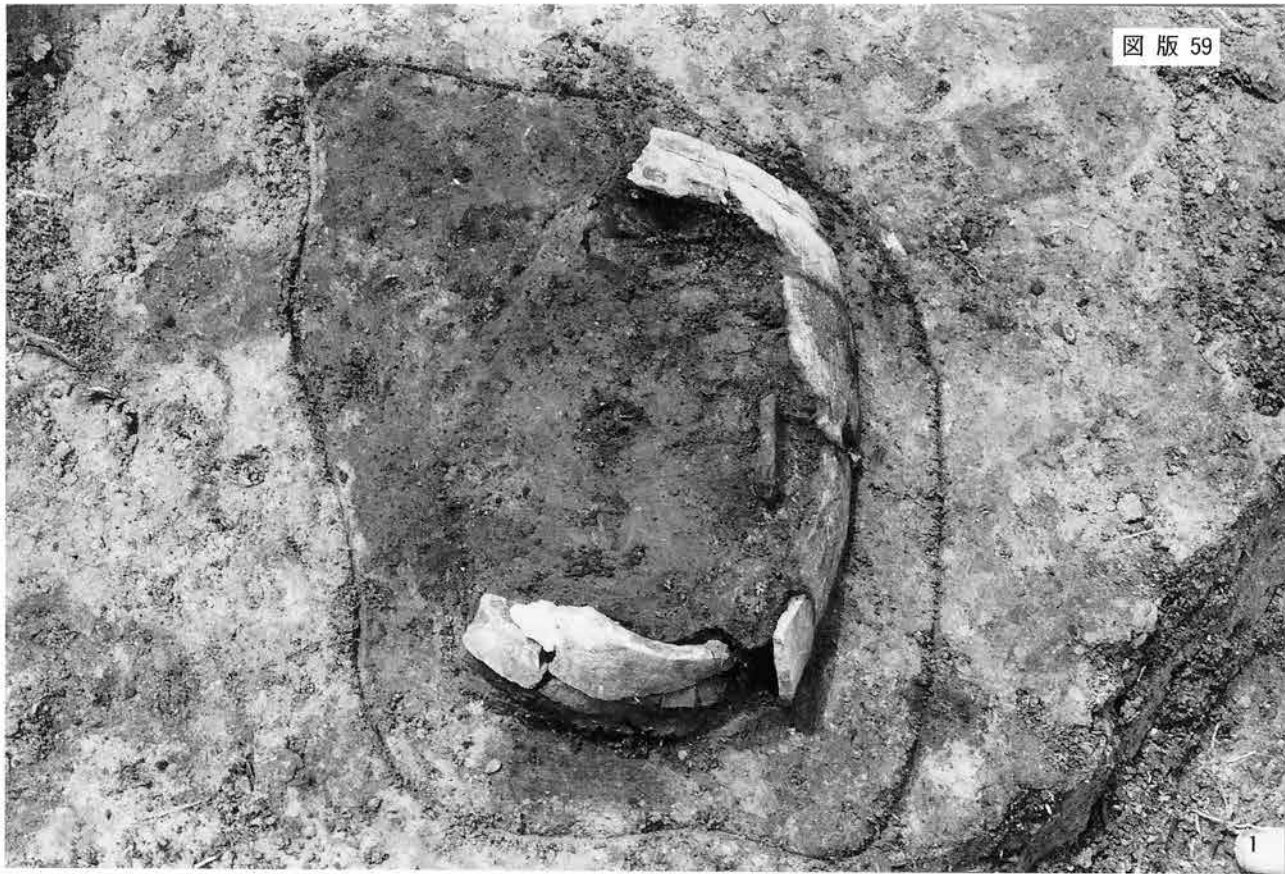


7

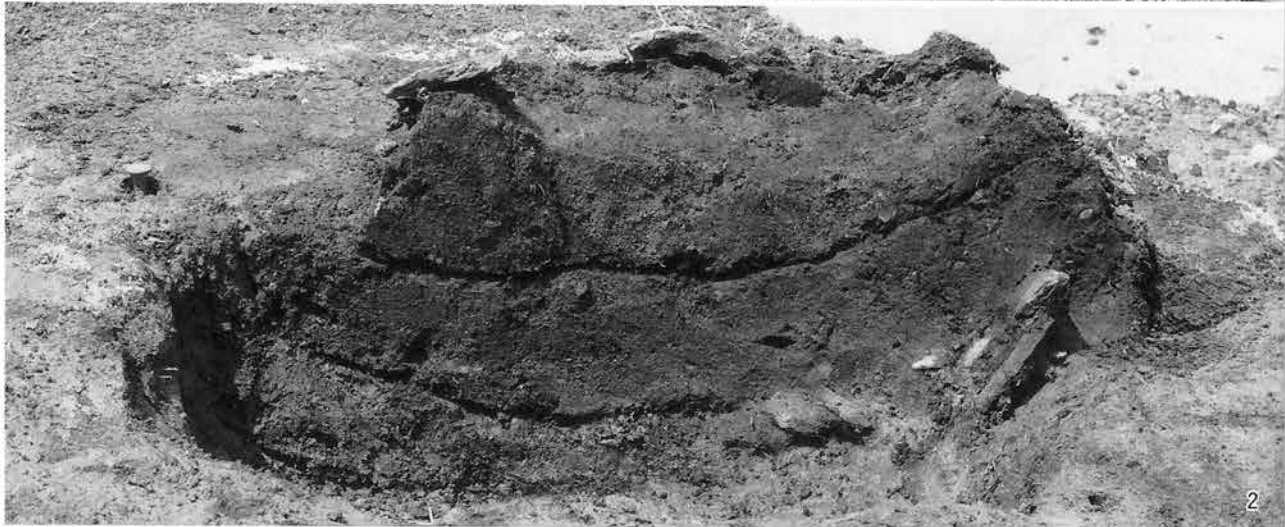
7 16号土坑断面  
(南から)



1 17号土坑  
遺物出土状況  
(東から)



2 17号土坑  
断面  
(南から)



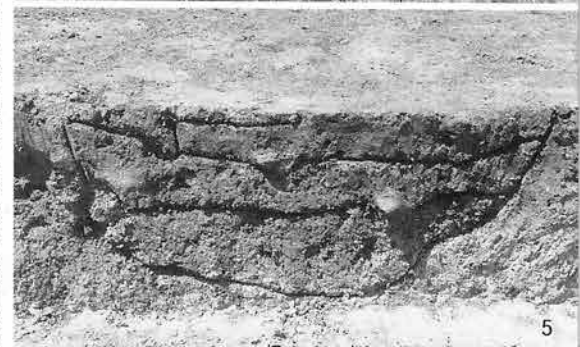
3 17号土坑完掘  
(東から)



4 2号フラスコ状  
土坑完掘  
(西から)



5 2号フラスコ状  
土坑断面  
(南から)



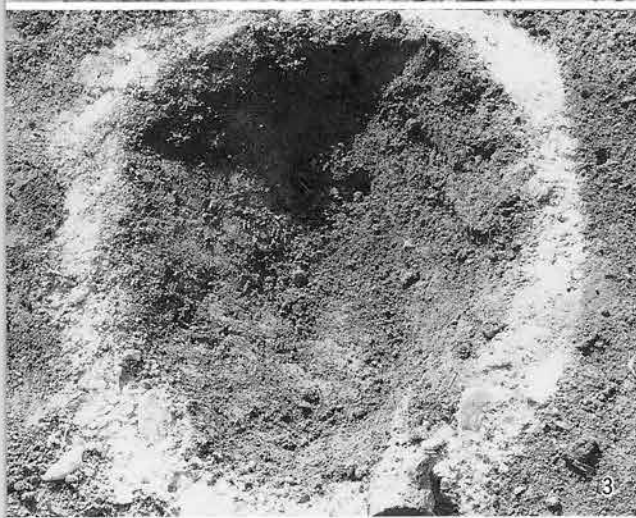




1 2号埋設土器  
検出状況  
(西から)



2 2号埋設土器  
断面  
(北東から)



3



4

3 2号埋設土器  
完掘  
(西から)

4 C-C' Bグリッド  
ラインセクション  
(西から)

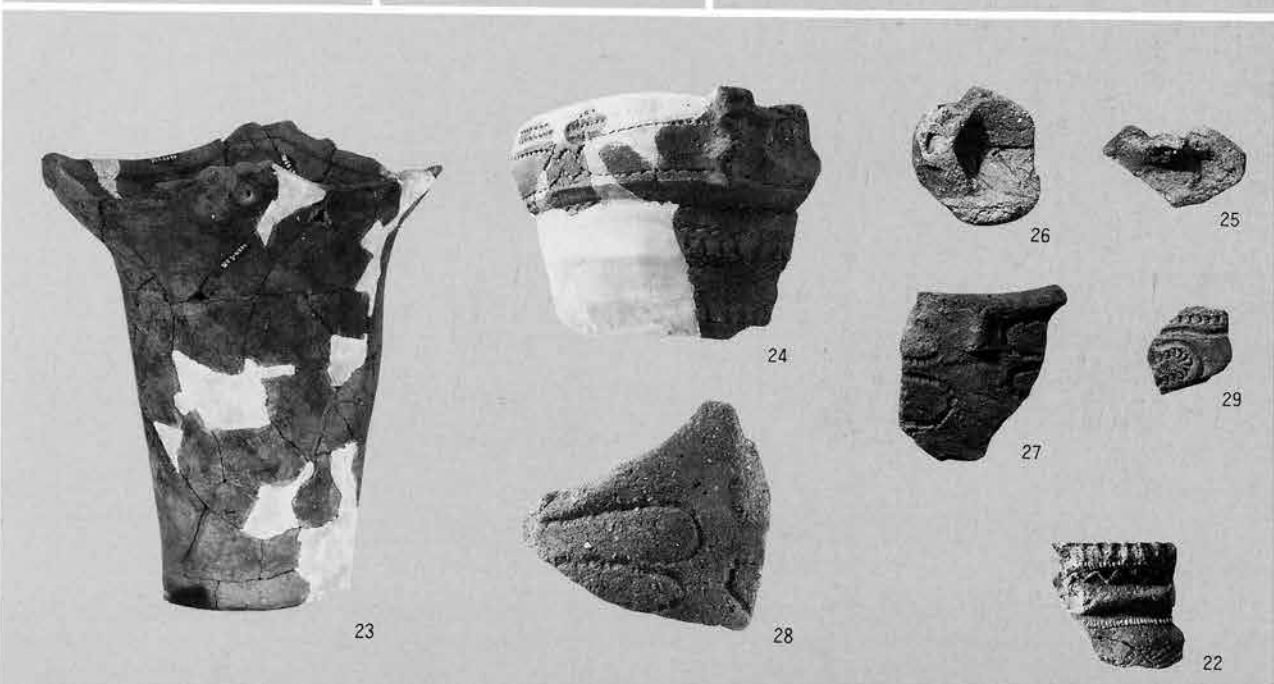
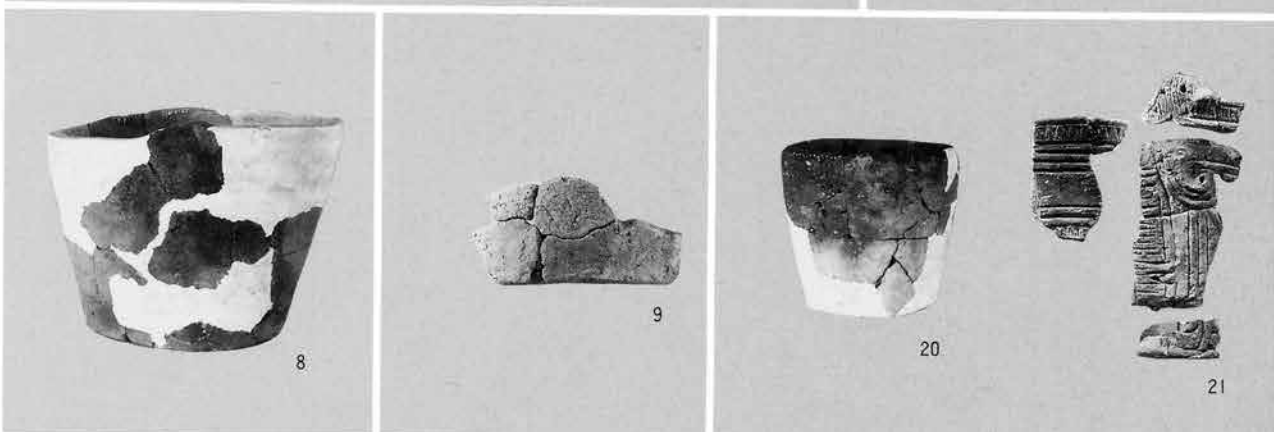
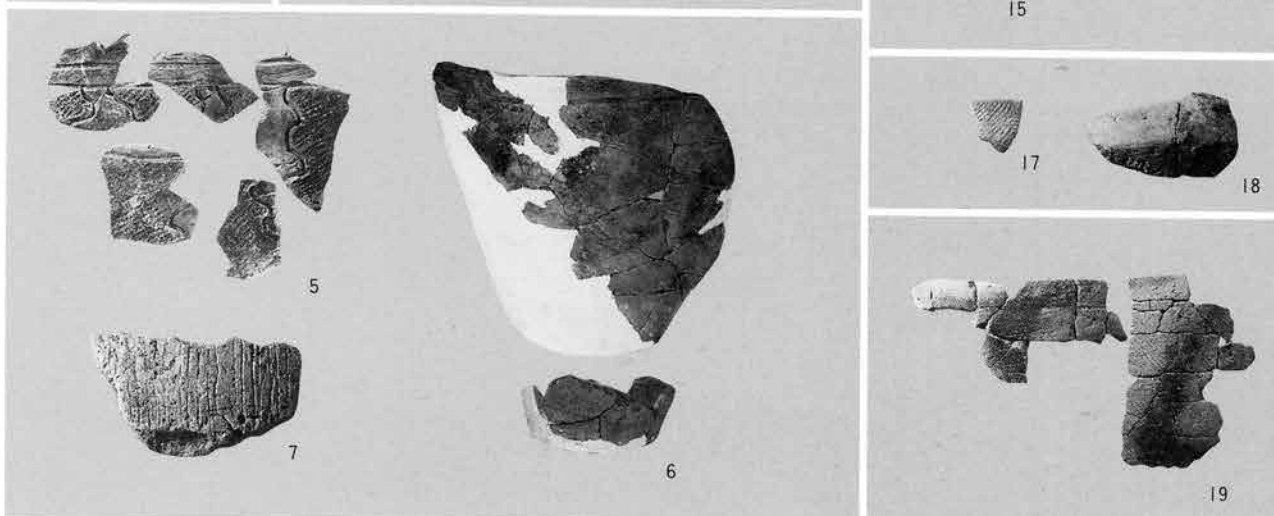
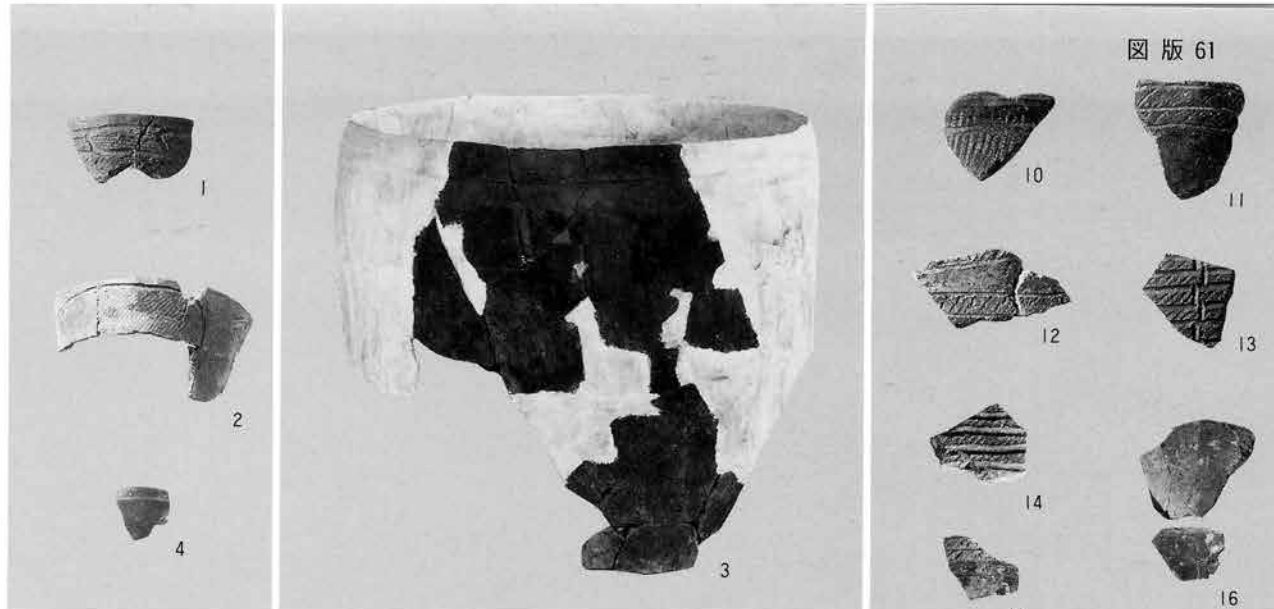


5



6

5・6 19グリッド付  
近の北壁セクショ  
ン (南東から)



(1 : 5)  
3・5・6・8・9  
16・19~21・23・24  
(1 : 3)  
その他

23

28

22



30



31



32



35



33



36



34



38



39



40



41



42



43



44



46



45



49



48



50



53



54



55



56



57



52



51



58



59



63



64



65



60



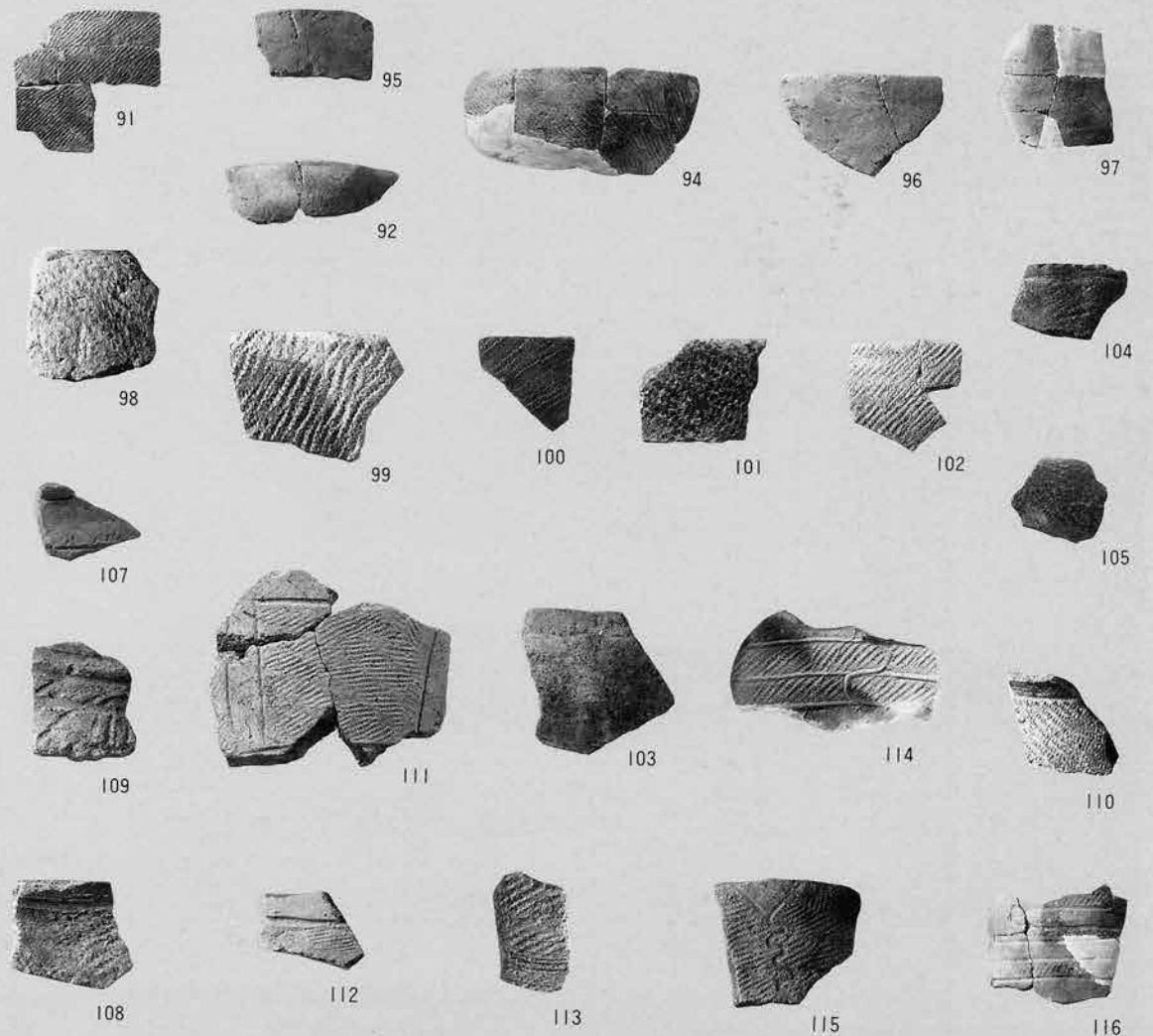
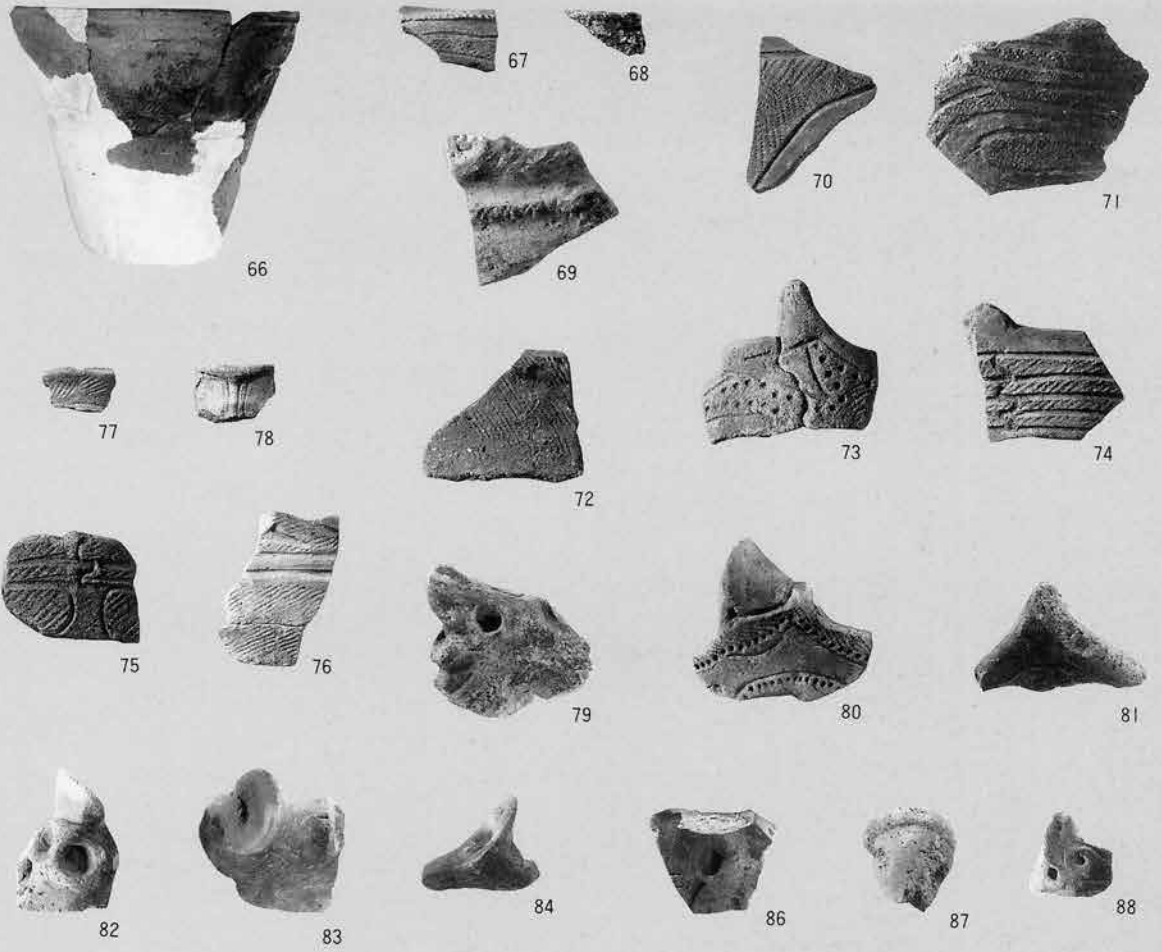
61



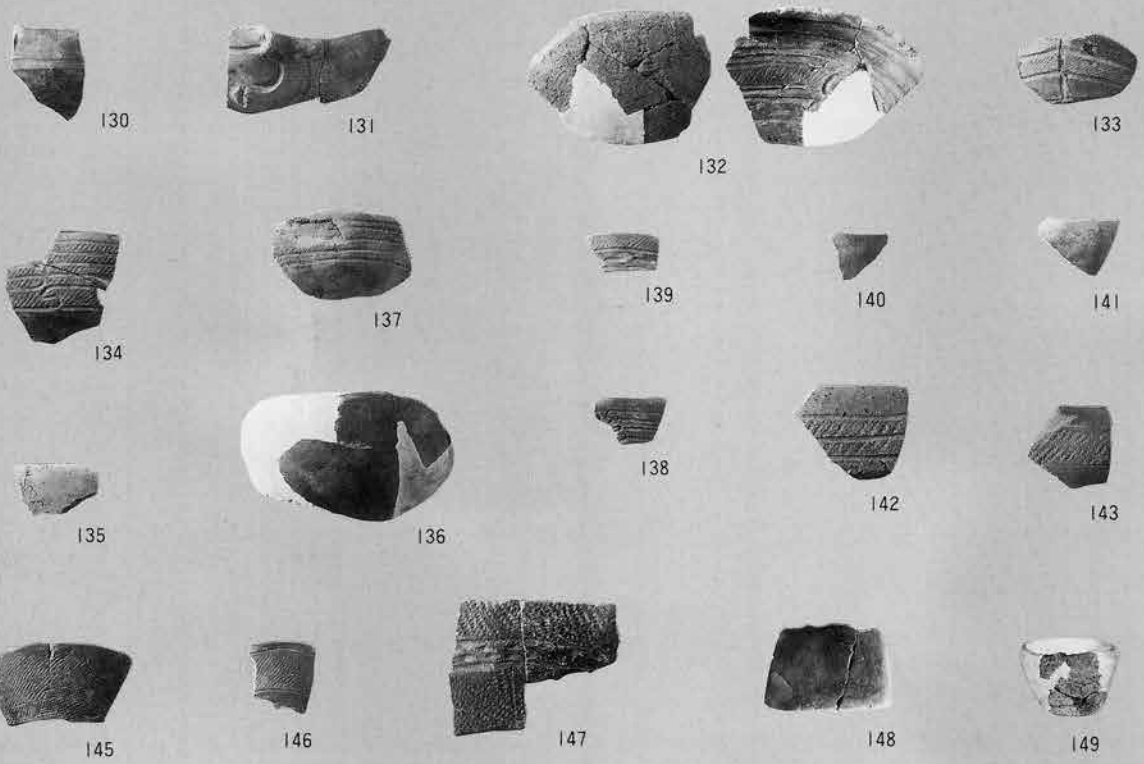
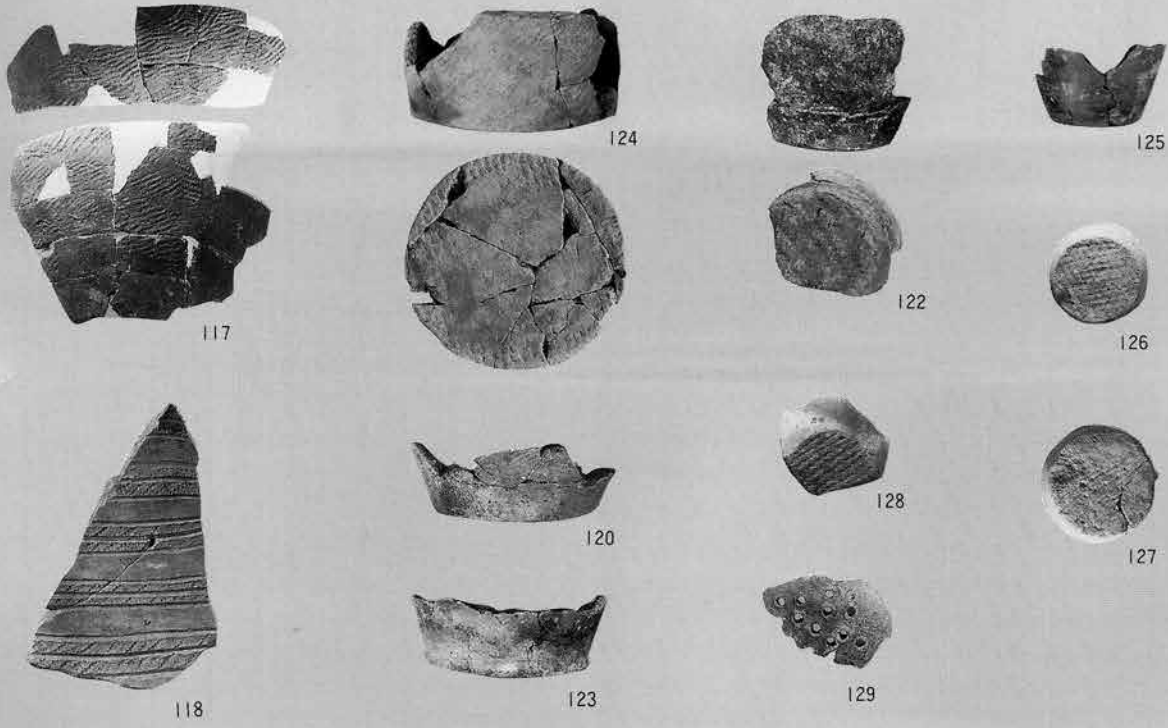
62

(1 : 5)  
30~34  
45~47  
54・55  
(1 : 3)  
その他

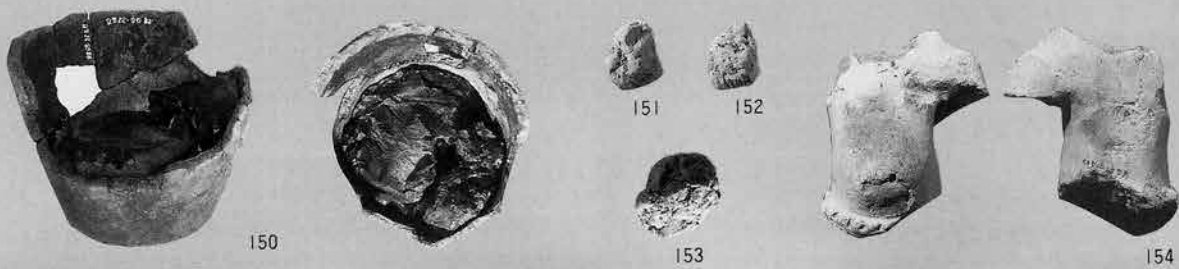




(1 : 5)  
66~68  
77・78  
91・92・94~97  
(1 : 3)  
その他

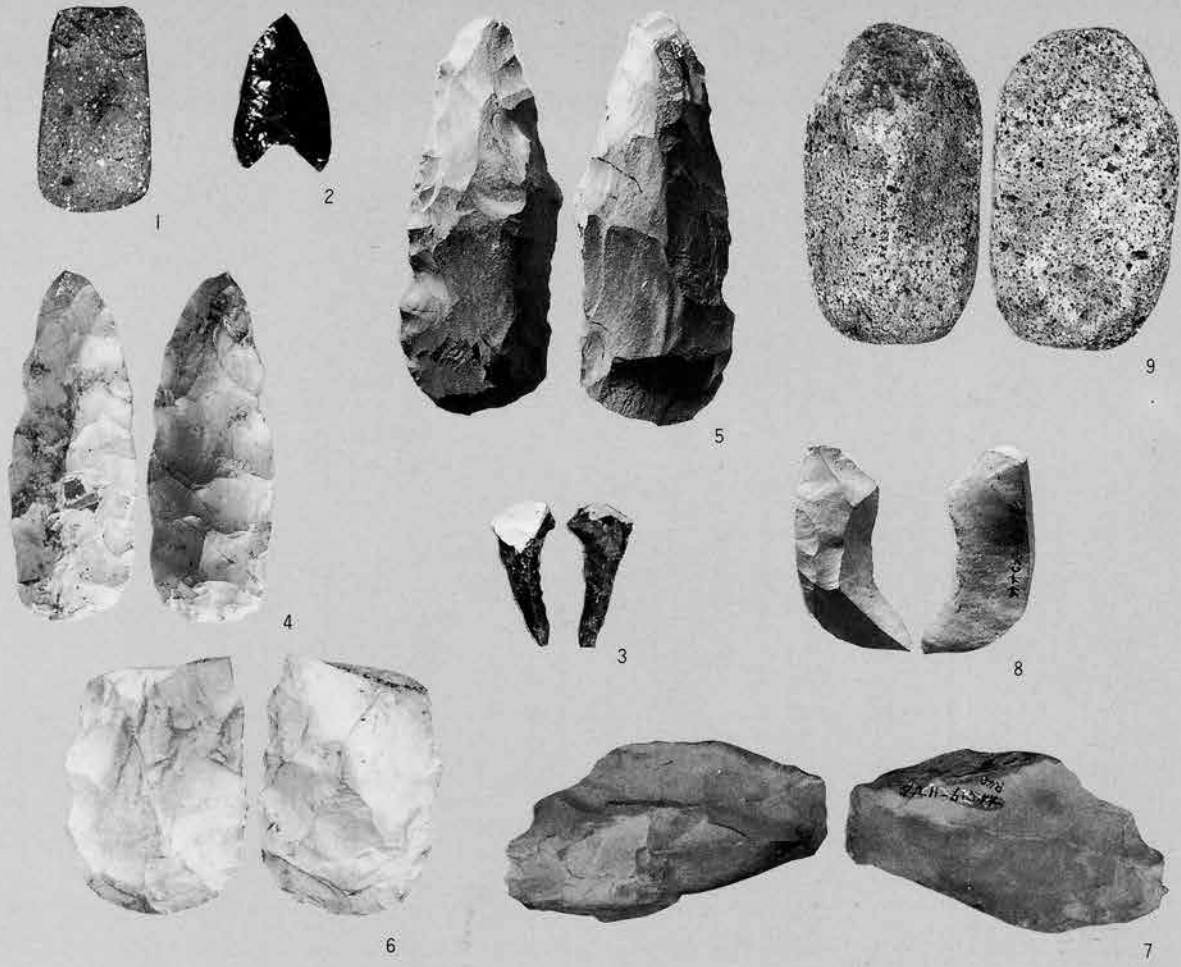


(1 : 5)  
117・120・122~141  
145・146・148・149

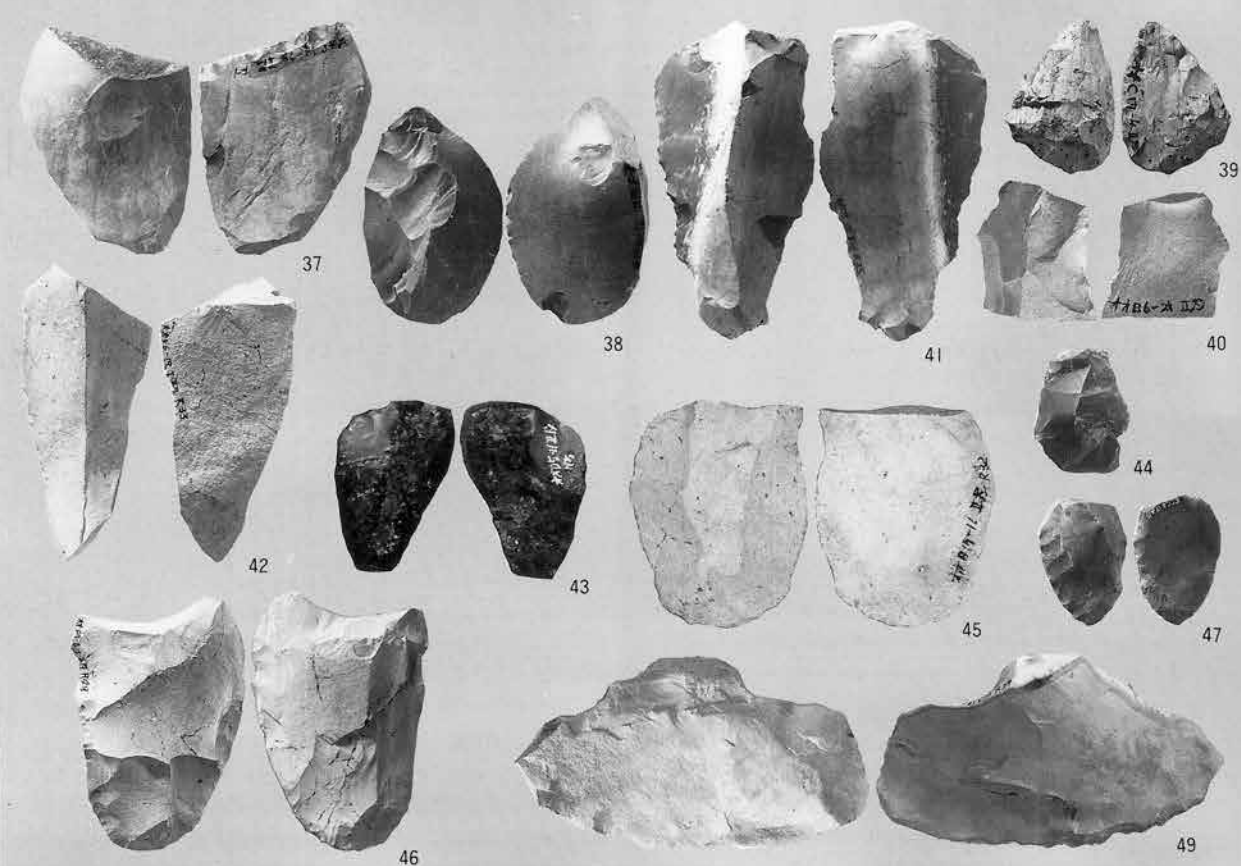
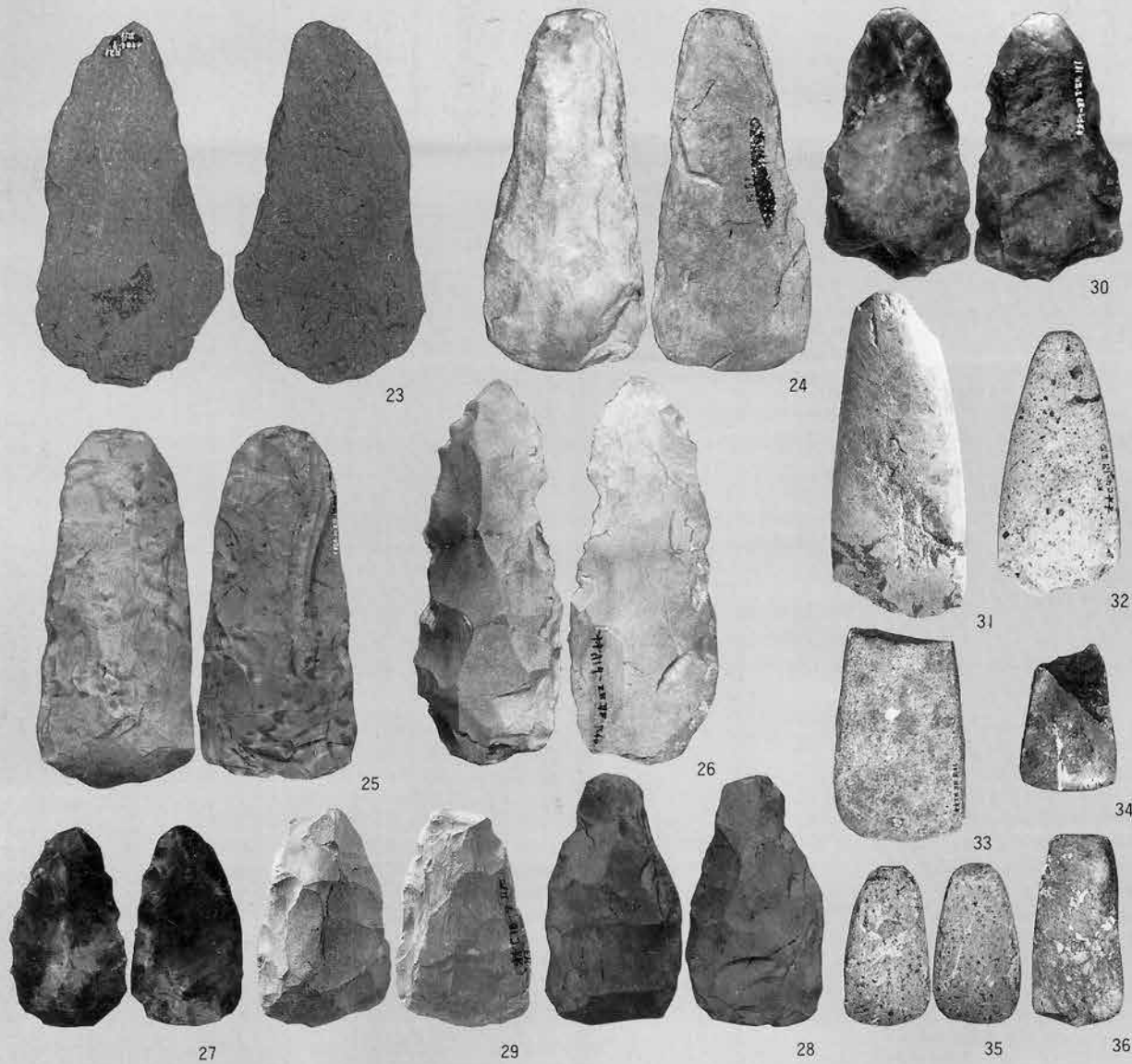


(1 : 3)  
118・142・143・147  
150~154



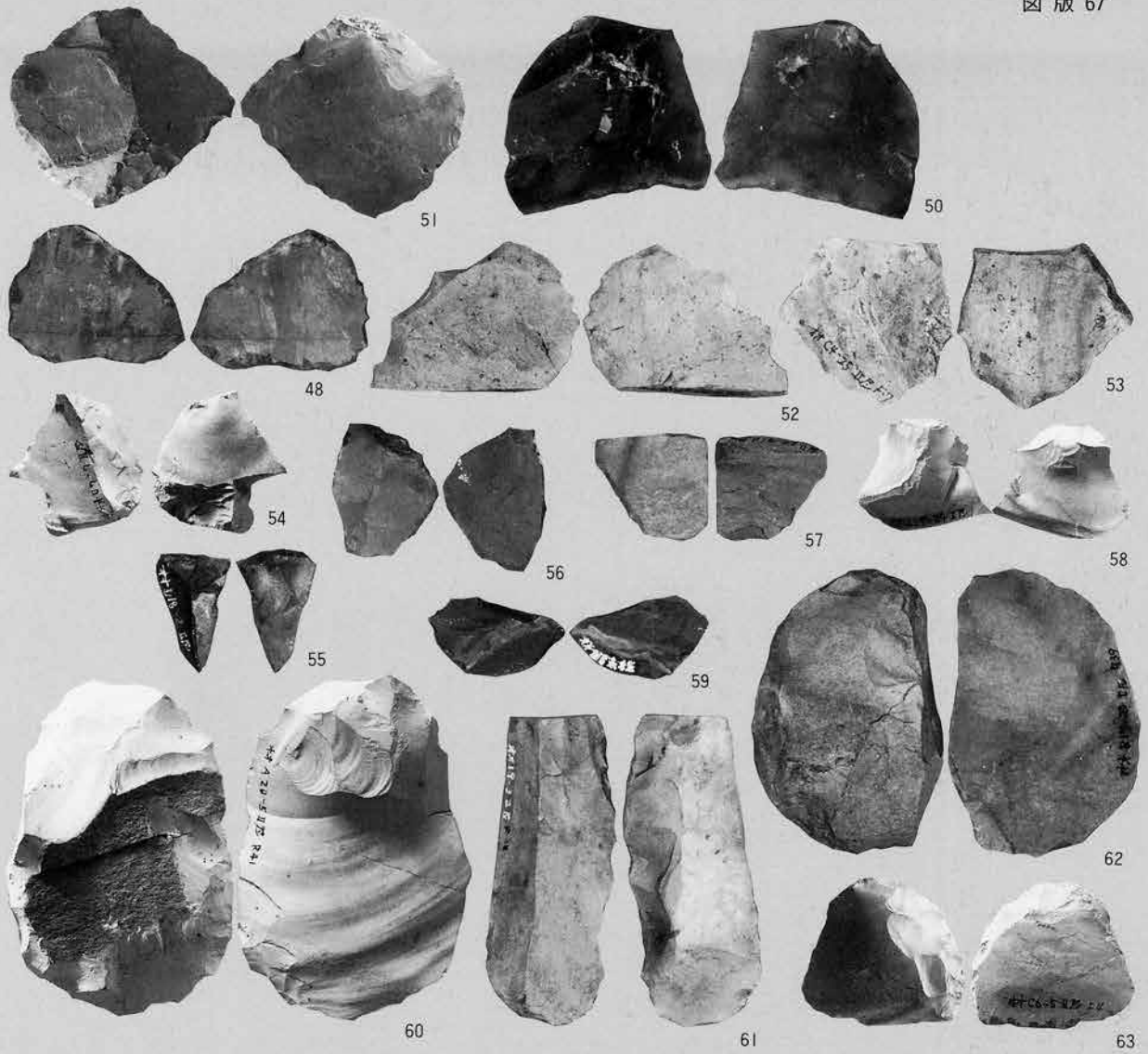


(1 : 1)  
2・12~15  
(1 : 2)  
その他  
(1 : 4)  
9



(1 : 3)  
31~36

(1 : 2)  
その他

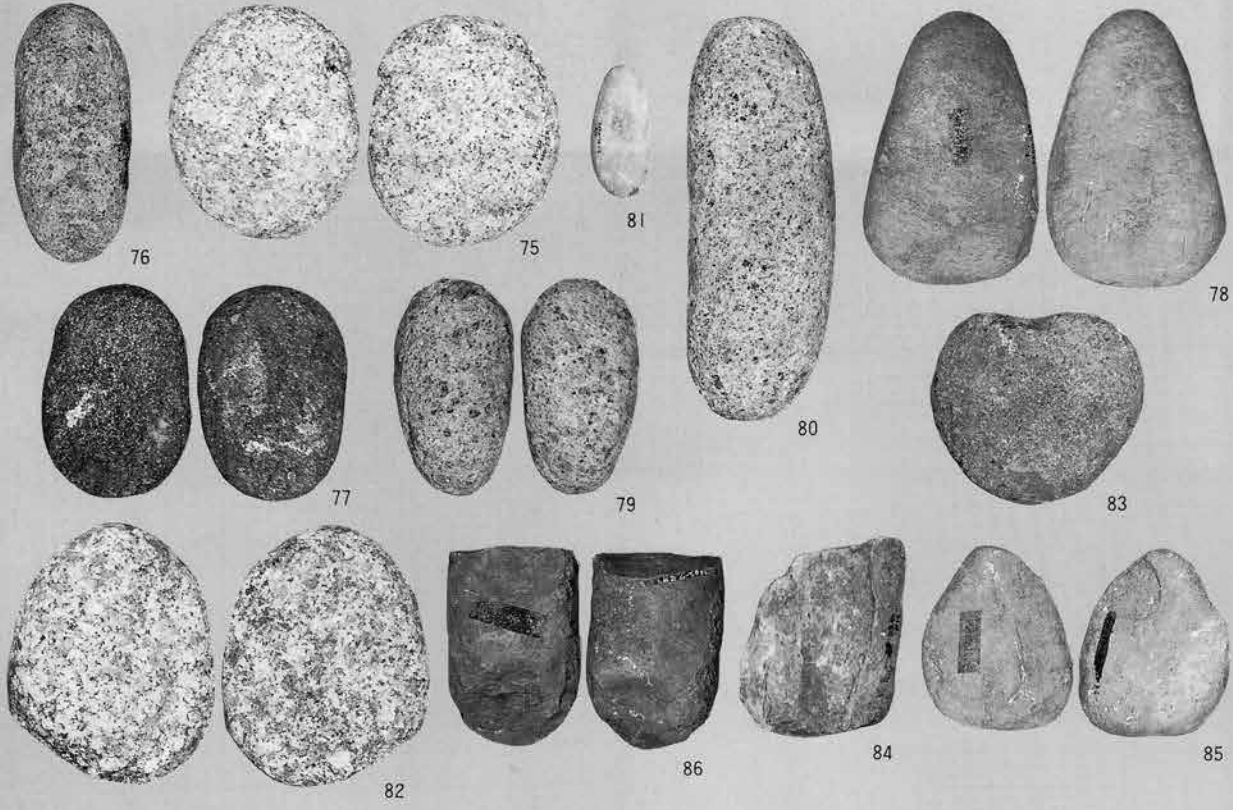


(1 : 2)

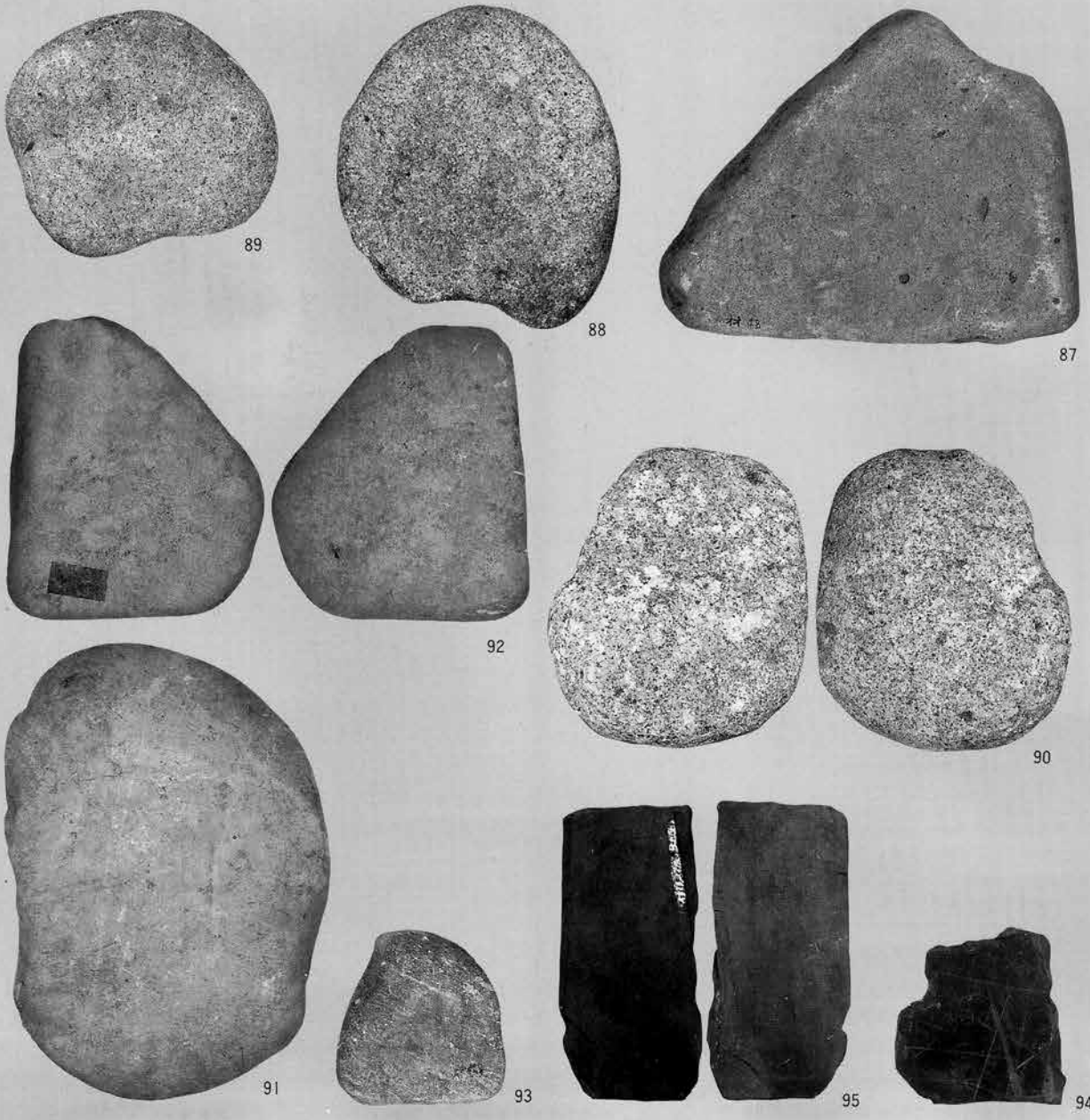


(1 : 4)  
64~74



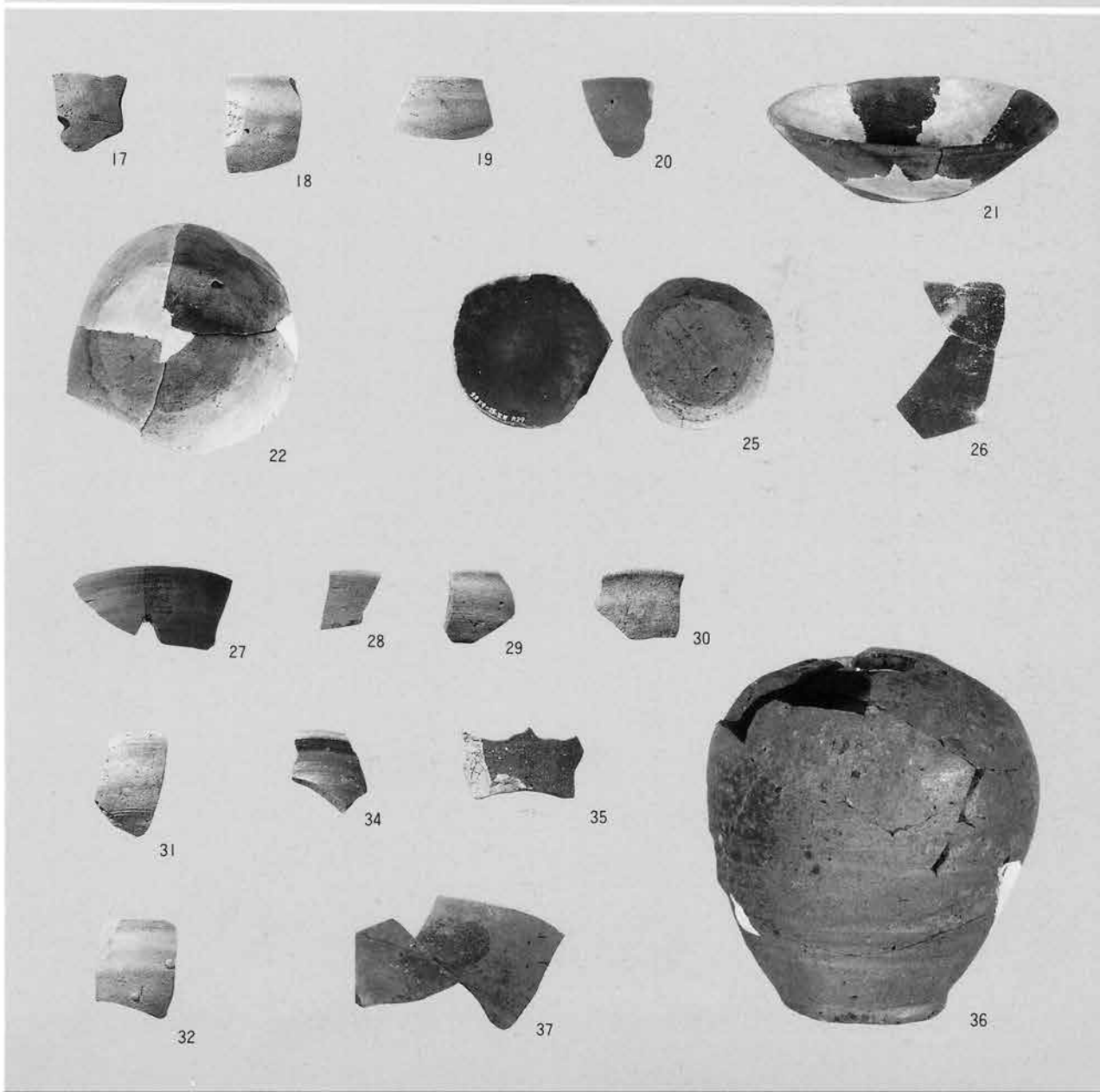
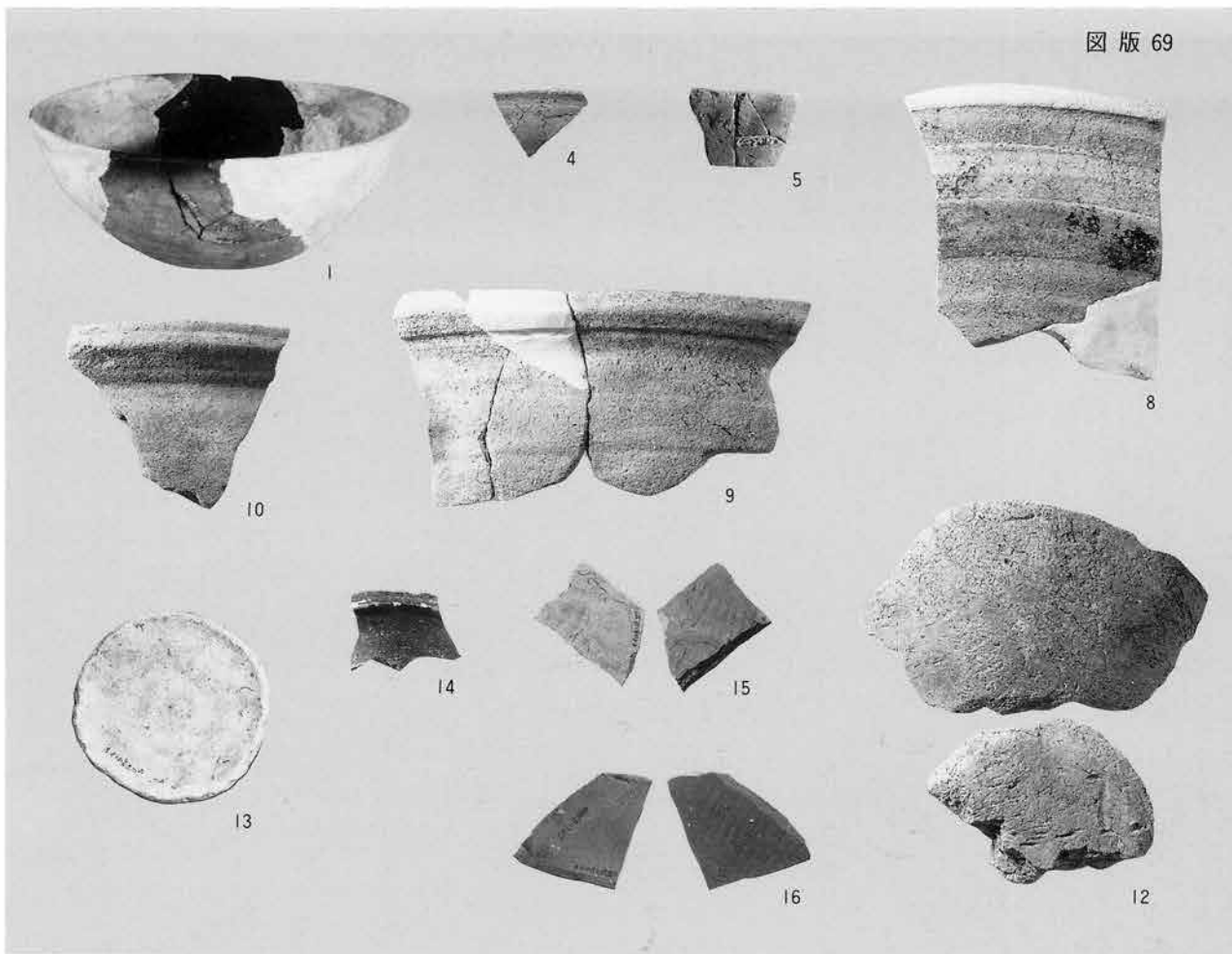


(1 : 4)

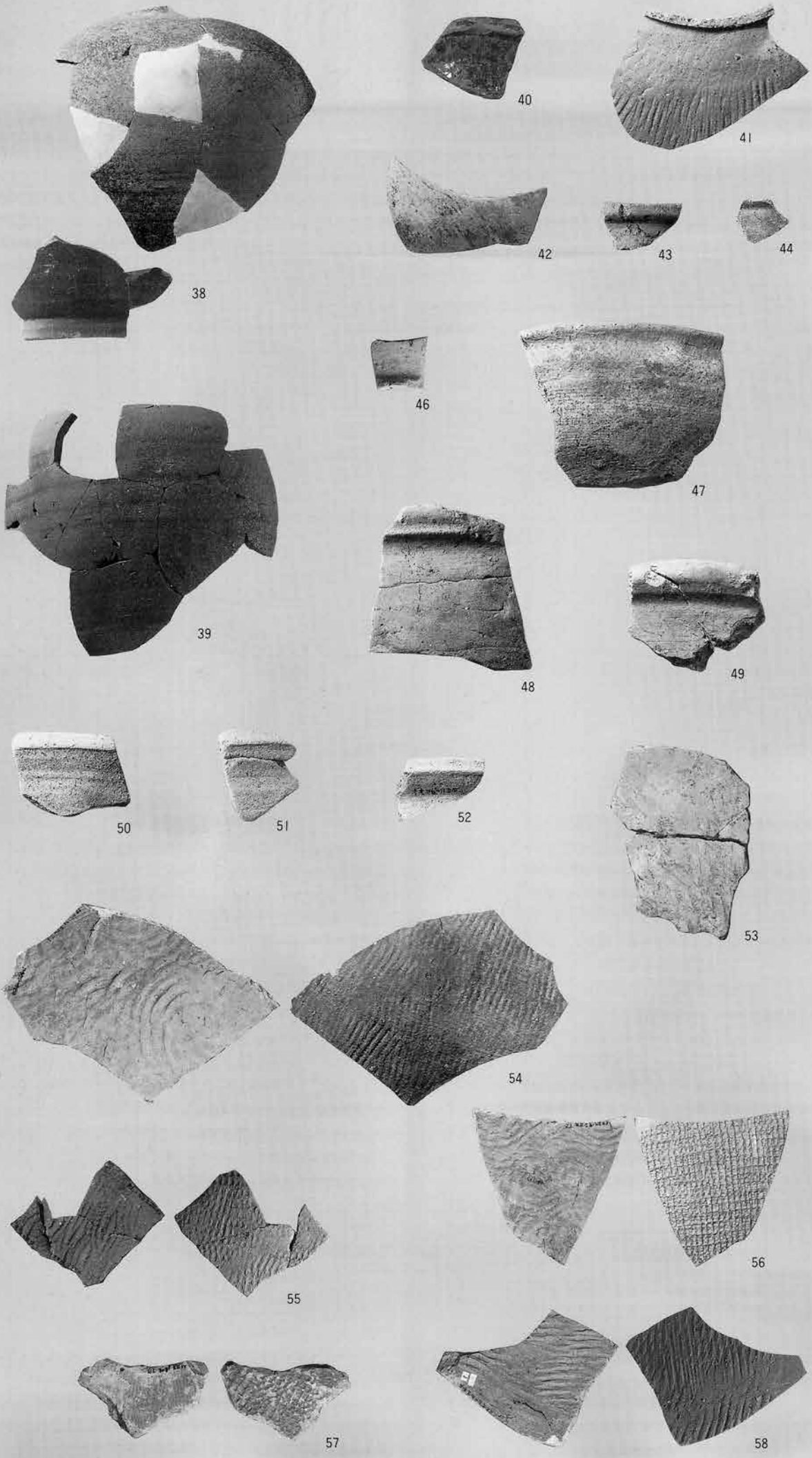


(1 : 2)  
94・95

(1 : 6)  
87~93









(1 : 1)  
40~41  
(1 : 3)  
その他



1 調査前全景  
(東から)



2 調査後全景  
(東から)



3



4

3 斜面トレンチ  
(西から)

4 斜面トレンチ  
断面  
(西から)





1 下段中央部完掘  
(東から)



2 下段南側完掘  
(西から)

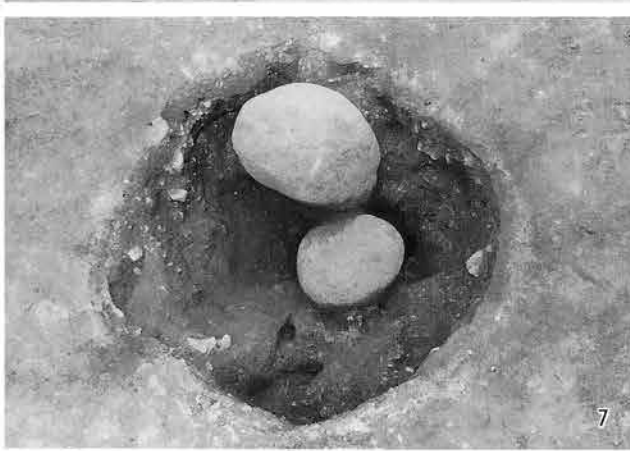


3 下段北側完掘  
(東から)

1

2

3



1 1号土坑完掘  
(北から)

2 1号土坑断面  
(西から)

3 3号土坑完掘  
(南東から)

4 3号土坑断面  
(西から)

5 5号土坑遺物出土  
状況 (南東から)

6 5号土坑完掘  
(南西から)

7 6号土坑完掘  
(南から)

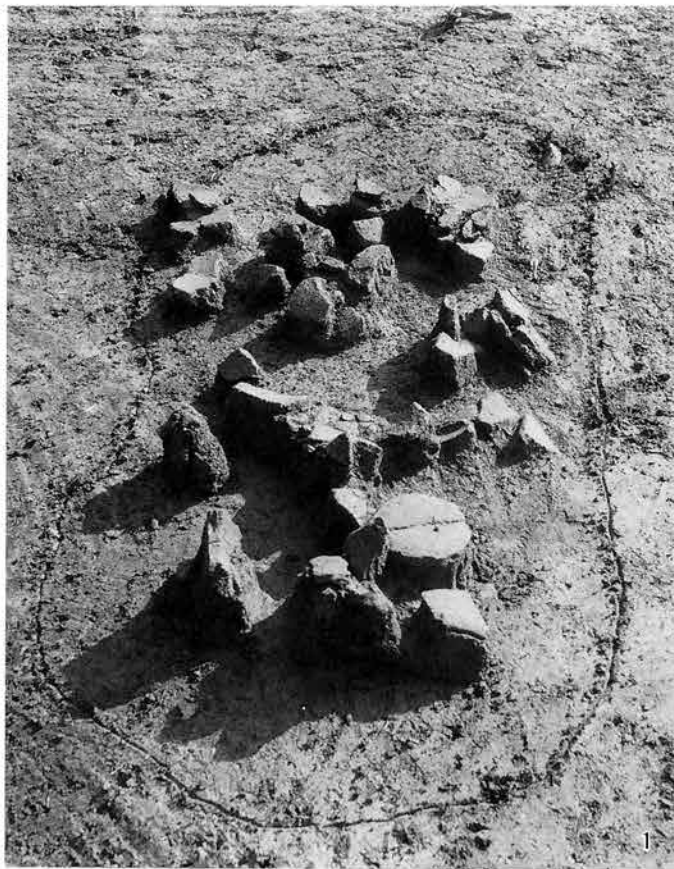
8 6号土坑断面  
(北西から)

9 下段遺物  
集中地点  
(南から)

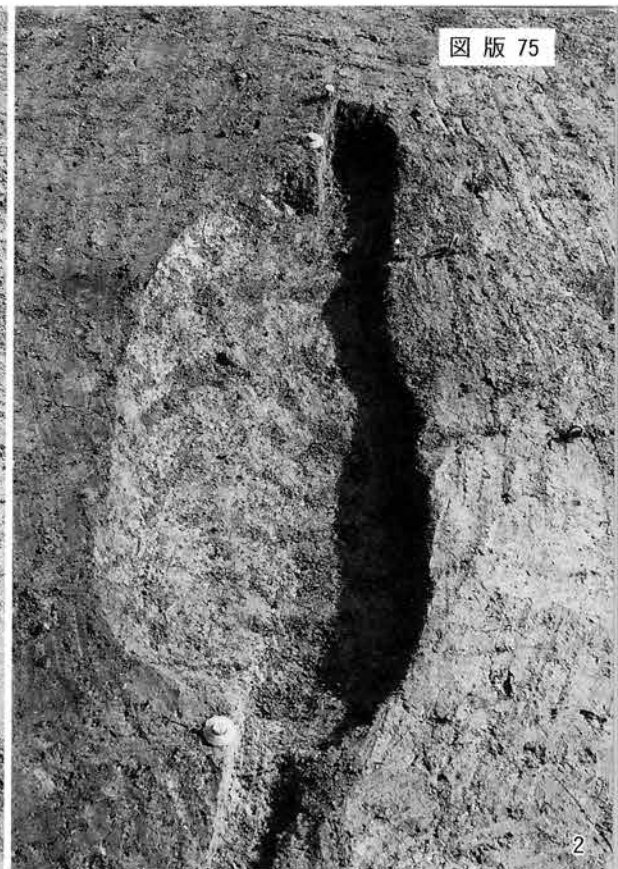
10 6ライン最南部  
セクション  
(北南から)



1 2号土坑土器  
出土状況（西から）



2 2号土坑完掘  
（西から）



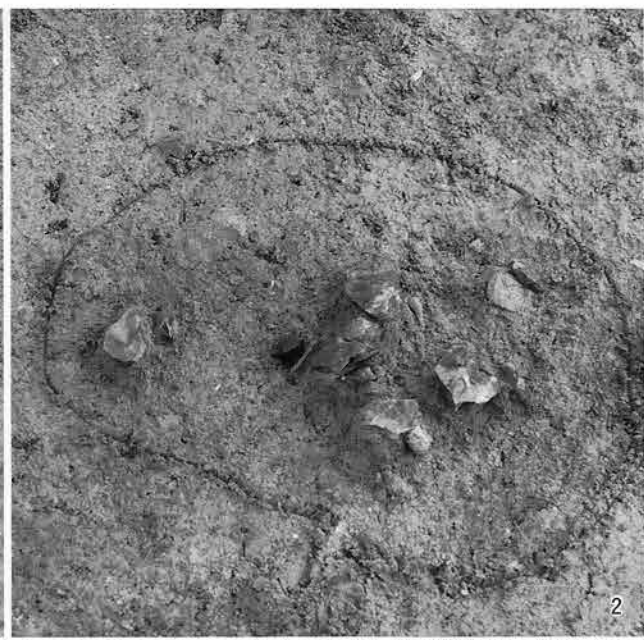
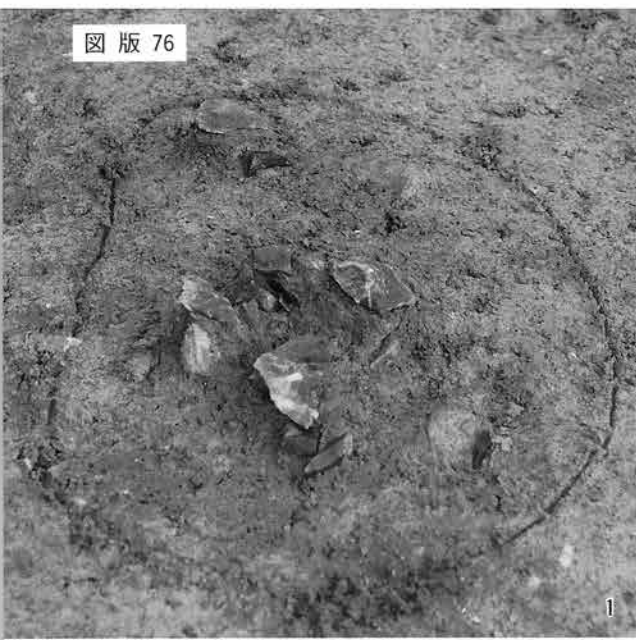
3 2号土坑土器  
出土状況（南から）



4 2号土坑断面  
（南から）

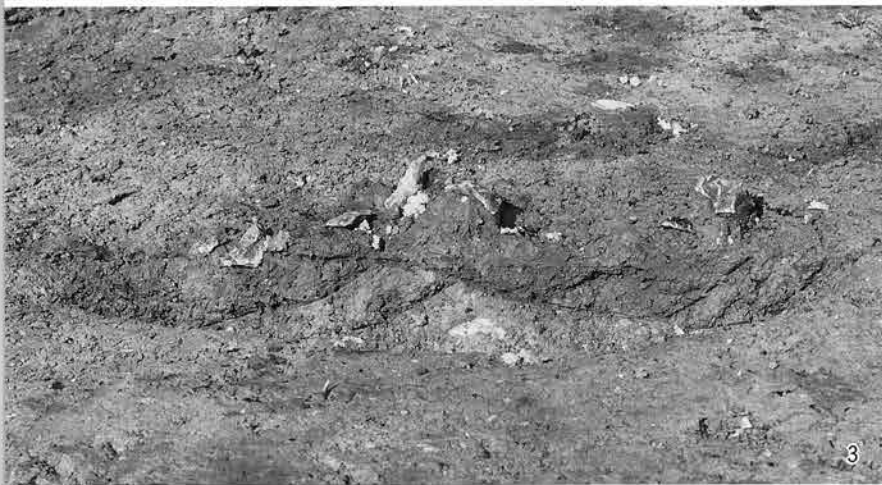






1 8号土坑遺物出土状況(北から)

2 8号土坑遺物出土状況(東から)



3 8号土坑断面(南から)

4 8号土坑完掘(東から)



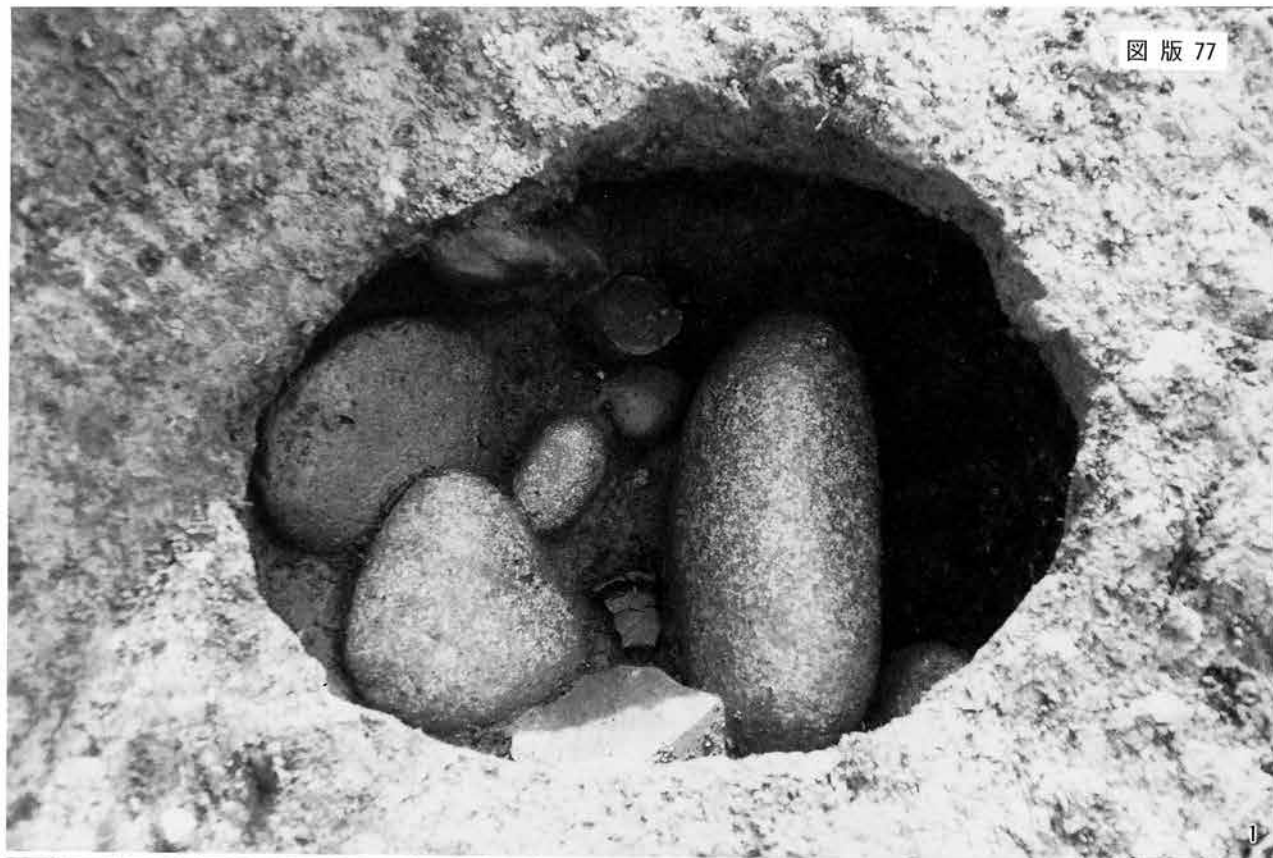
5 1号埋設土器検出状況(北から)

6 1号埋設土器断面(南から)



7 遺物集中地点(南西から)

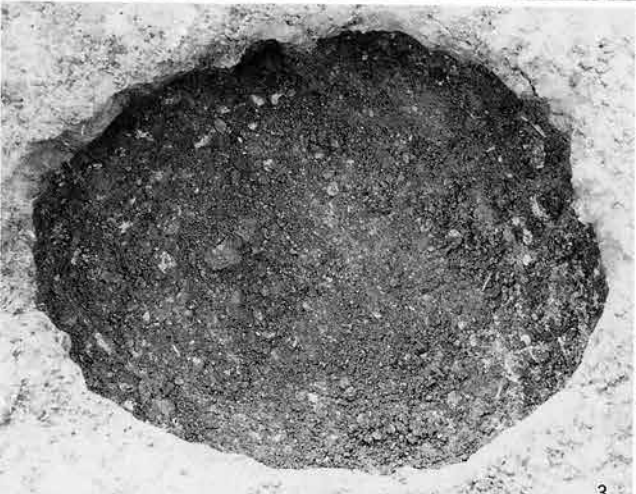
1 1号フラスコ状  
土坑遺物出土状況  
(西から)



2 1号フラスコ状土坑  
下層の遺物出土状況  
(西から)



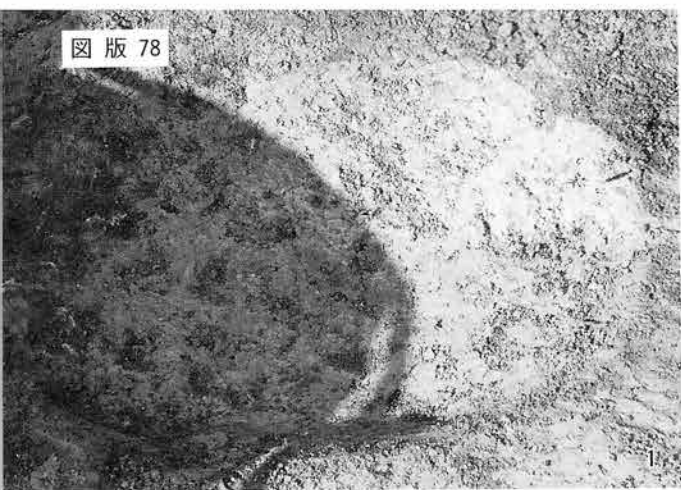
3 1号フラスコ状  
土坑完掘 (西から)



4 1号フラスコ状  
土坑断面  
(西から)





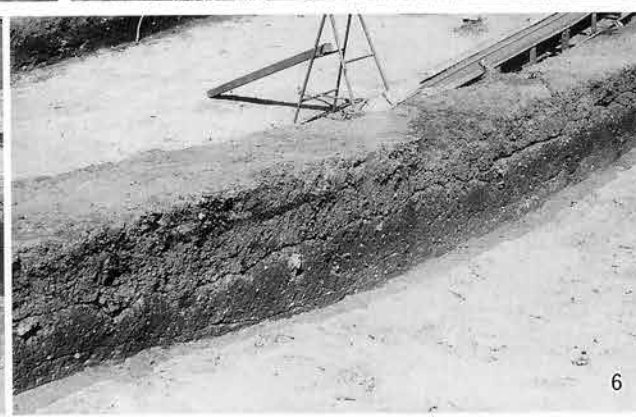


1 3号焼土坑完掘  
(南東から)

2 3号焼土坑  
断面  
(西から)

3 2号焼土坑完掘  
(東から)

4 E 6 付近の遺物  
出土状況  
(南から)



5 6ライン  
南側セクション  
(南西から)

6 D 9 付近の  
斜面セクション  
(南西から)



7 下段最北部  
の調査前  
(南西から)

8 下段最北部  
完掘 (西から)



9 平成5年度調査分  
完掘  
(西から)

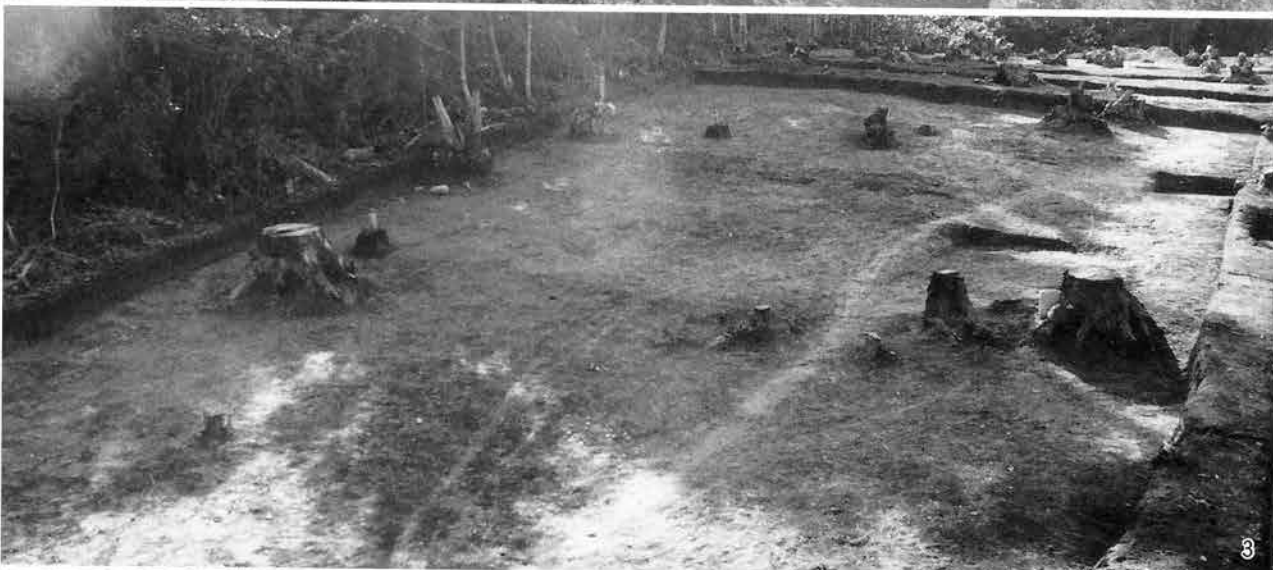
1 上段西部の南側  
完掘 (東から)



2 上段西部の北側  
完掘 (南東から)



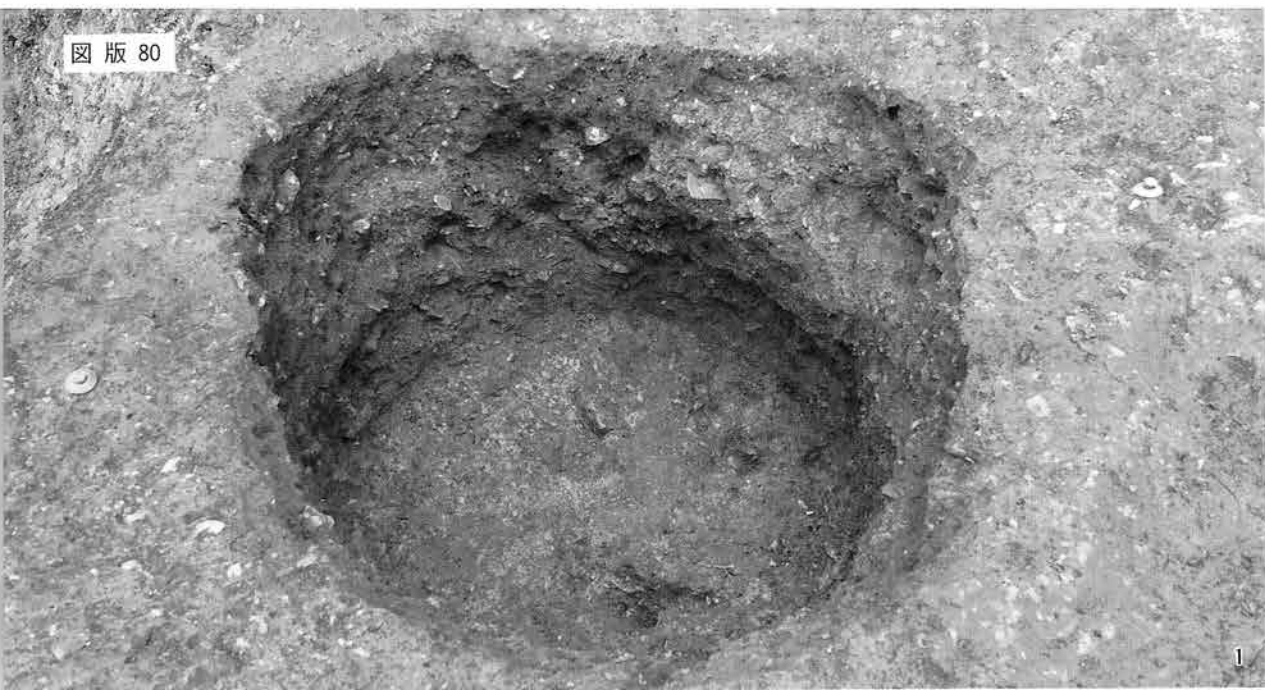
3 上段東部の南側  
完掘 (東から)



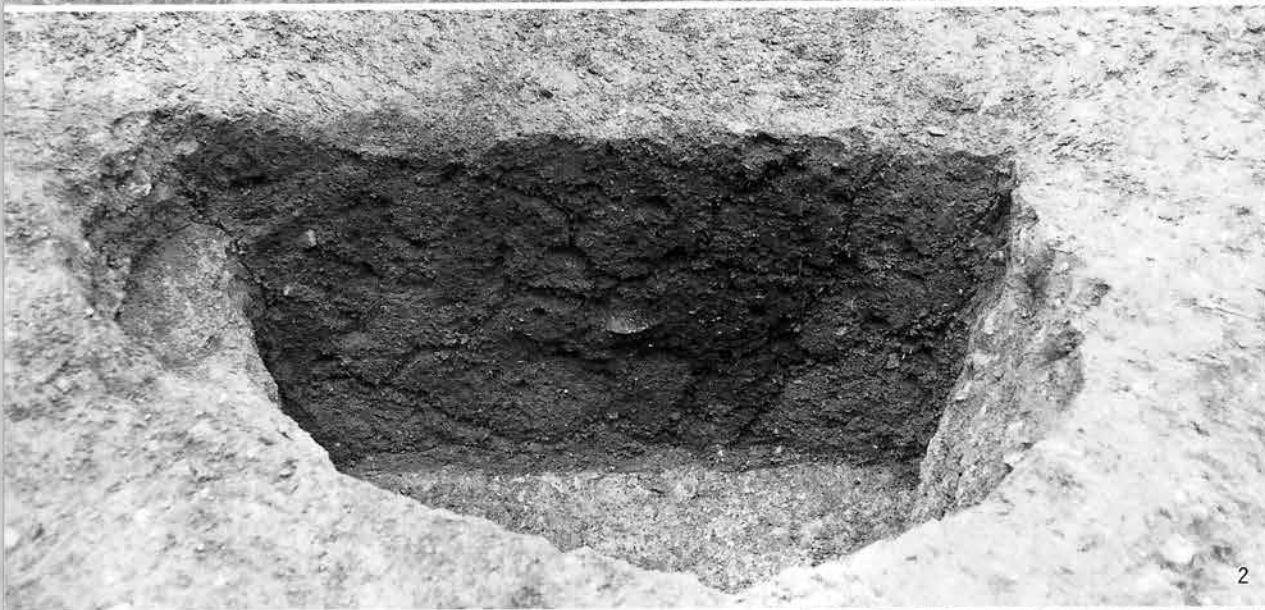
4 上段東部の北側  
完掘 (南東から)







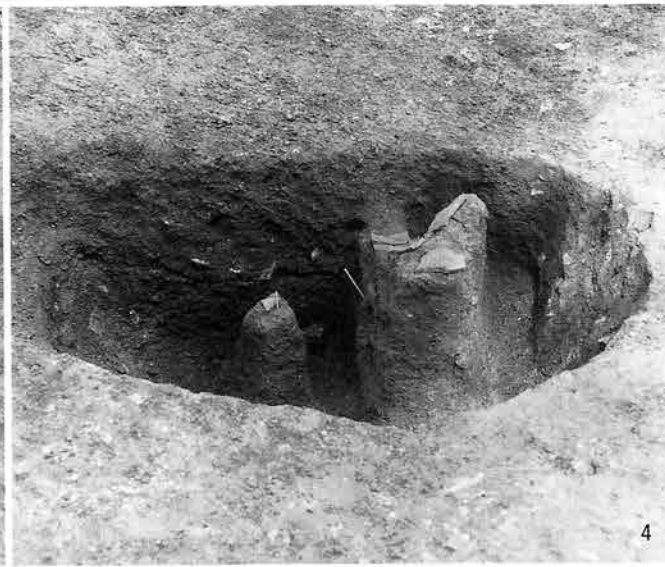
1 2号フラスコ状土坑完掘（北から）



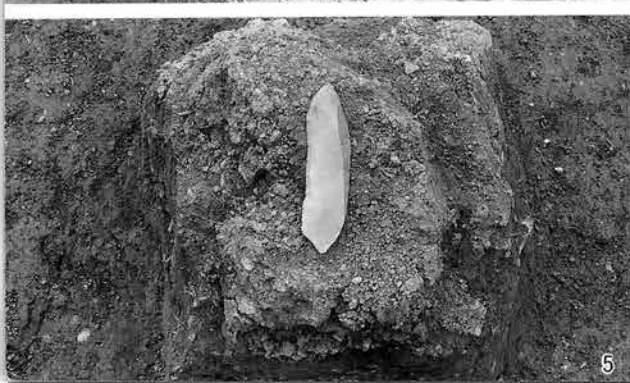
2 2号フラスコ状土坑断面（北から）



3 2号フラスコ状土坑土器出土状況（南から）



4 2号フラスコ状土坑土器出土状況（西から）

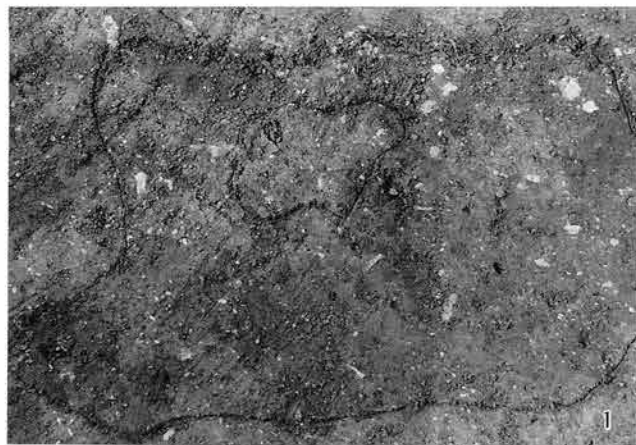


5 遺物出土状況（南から）

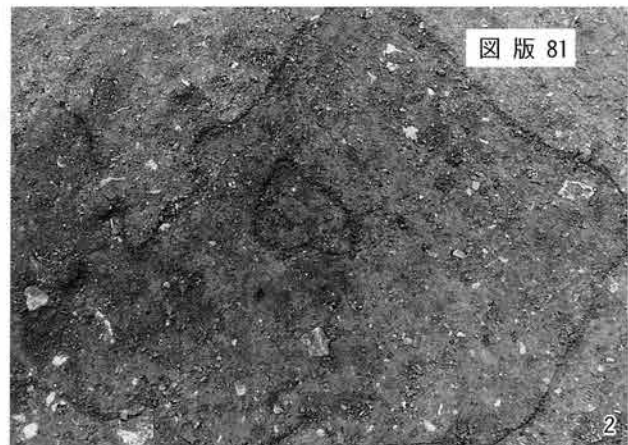


6 遺物出土状況（西から）

1 4号焼土坑  
確認面 (南から)



2 4号焼土坑  
断面  
(東から)



3 5号焼土坑  
確認面 (南から)



4 5号焼土坑  
断面  
(南から)



5 F-12・13付近の  
東西セクション  
(南西から)



6 F-12ライン  
セクション  
(北西から)



7 遺物出土状況  
(南から)



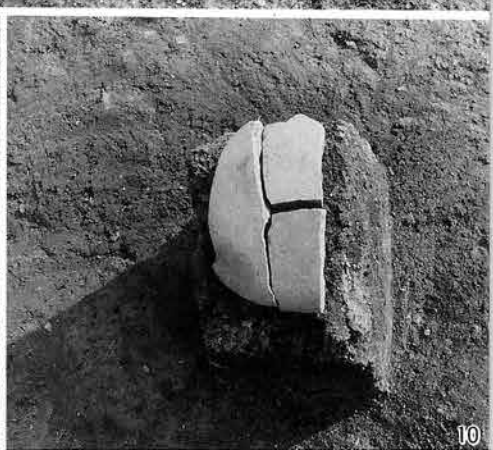
8 遺物出土状況  
(東から)



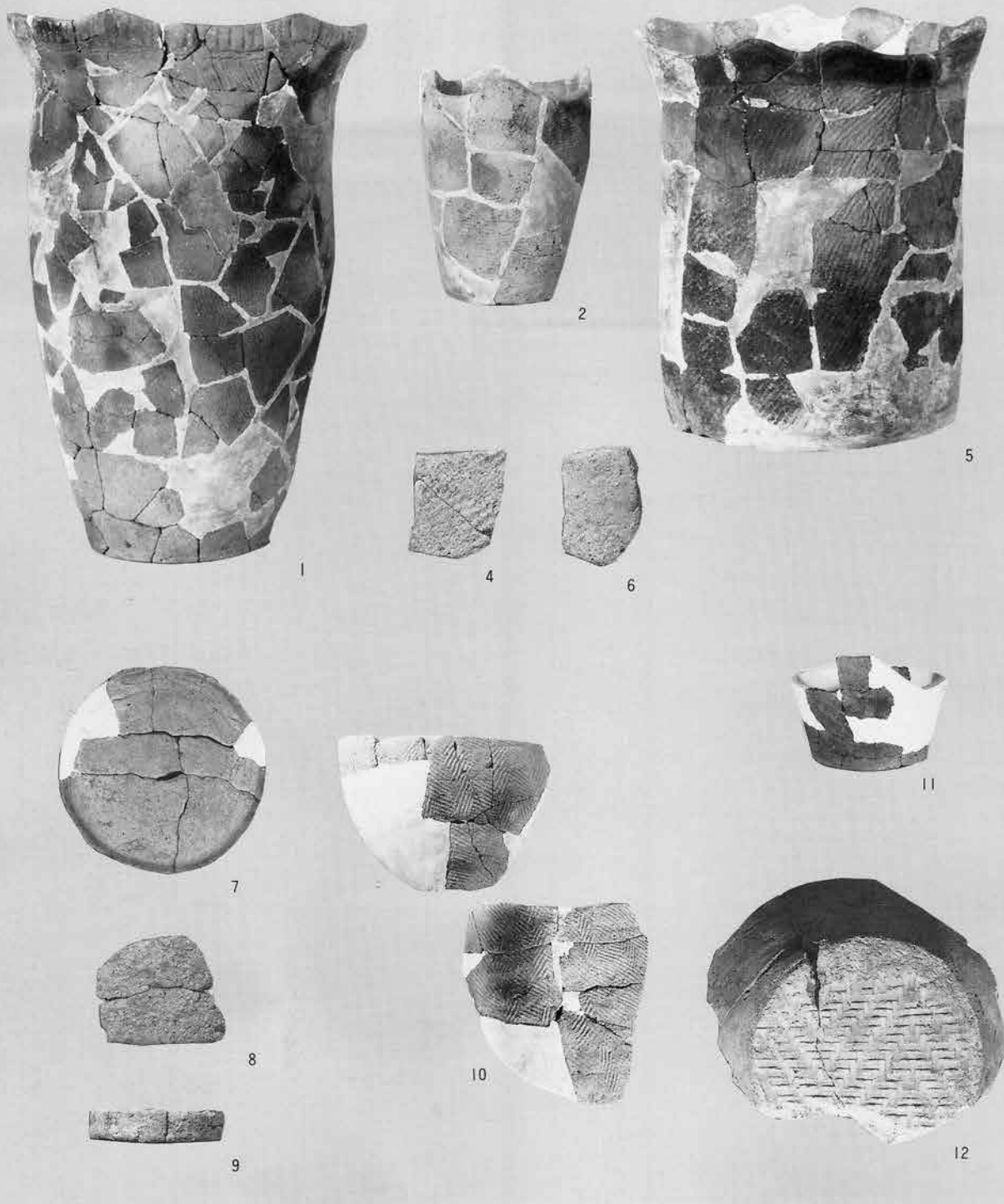
9 遺物出土状況  
(西から)



10 遺物出土状況  
(北から)







(1 : 3)  
4 · 6 · 12  
15 ~ 18 · 20

(1 : 5)  
1 · 2 · 5  
7 ~ 11  
13 · 14 · 19



21



24



23



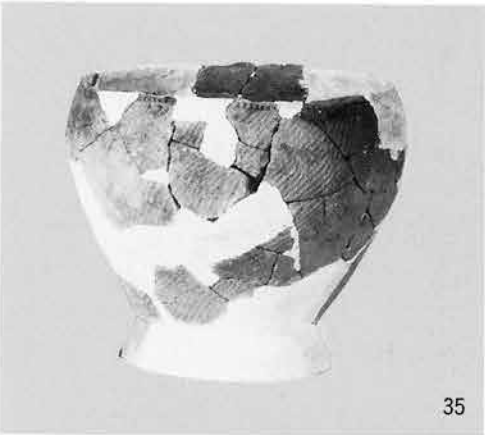
22



32



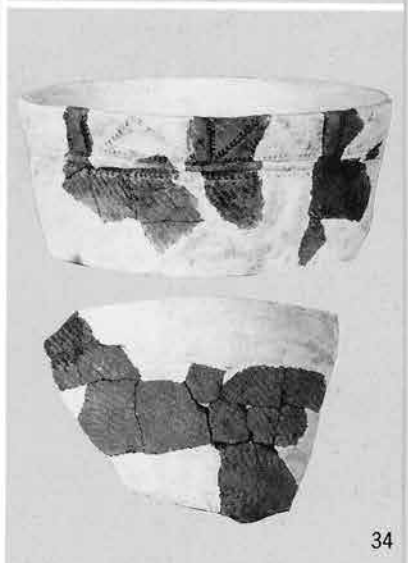
25



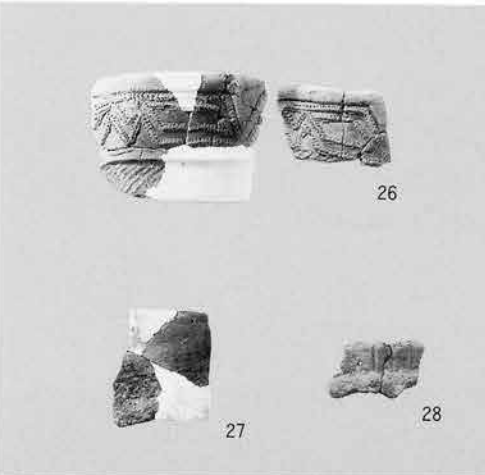
35



36

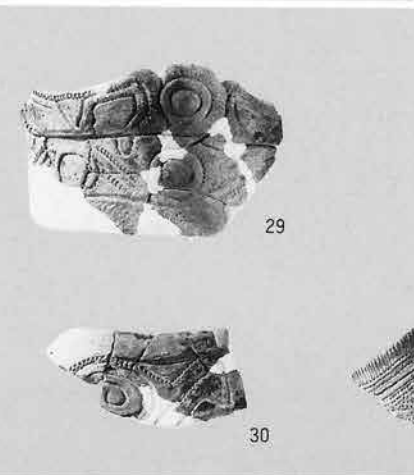


34



26

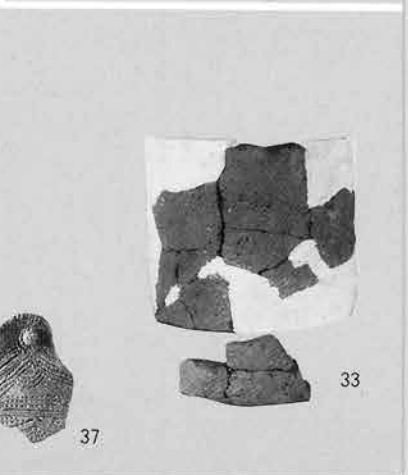
27



28

29

30



37

33



38



42



45



47



39



46



43



48



44



49



50



40



41



51



52



53



54



56



58



60



62



55



57



59



61



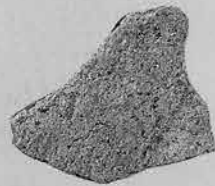
63



65



67



69



64



66



68



70



71



72



76

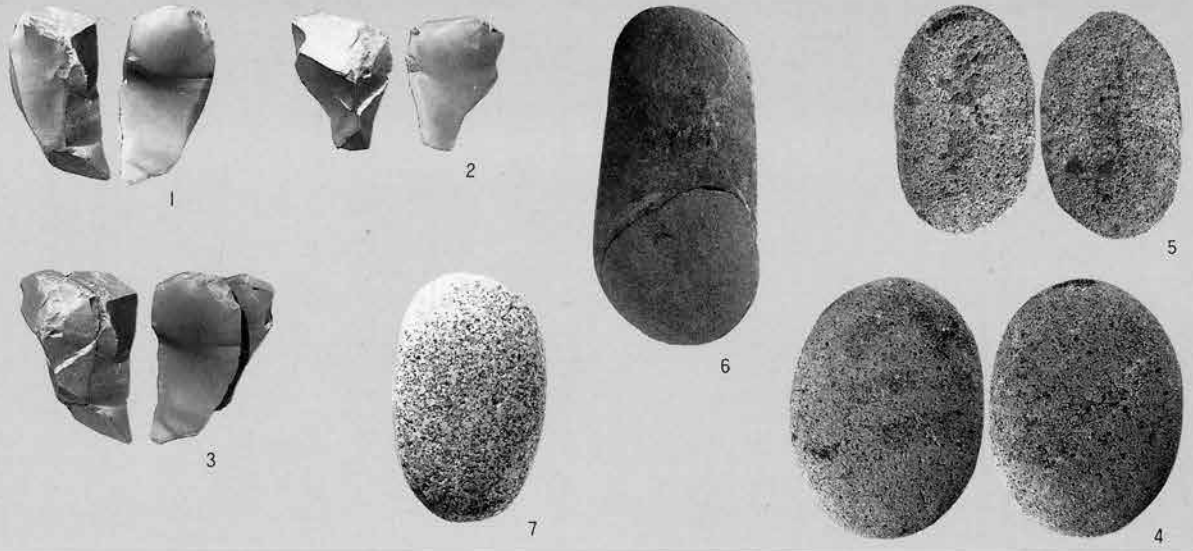


77

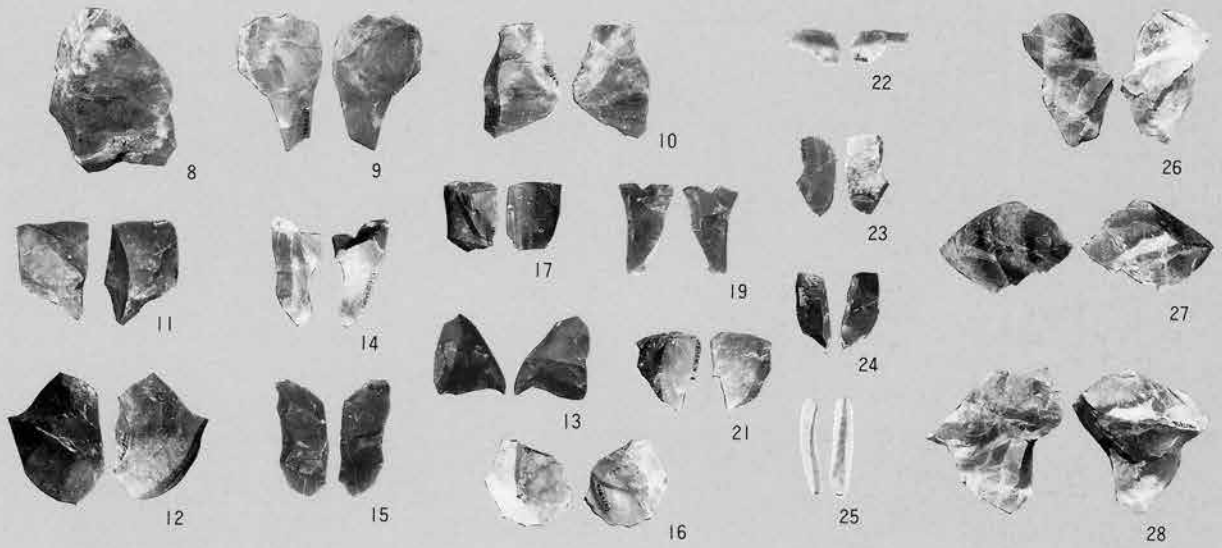
(1 : 5)  
38~41

(1 : 3)  
その他

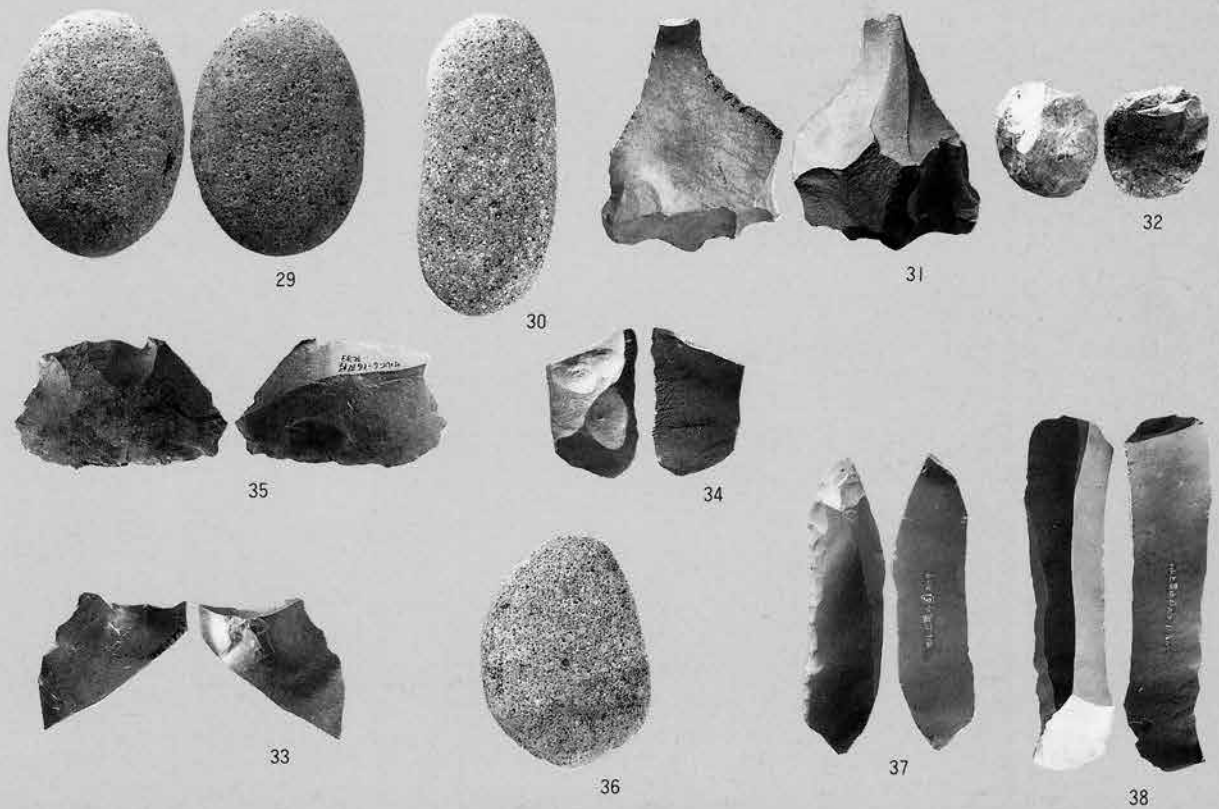




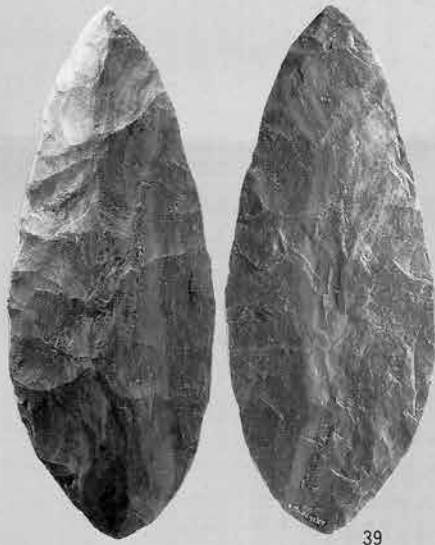
(1 : 2)  
1 ~ 3  
(1 : 4)  
4 ~ 7



(1 : 2)



(1 : 2)  
31 ~ 35 • 37 • 38  
(1 : 4)  
29 • 30 • 36



39



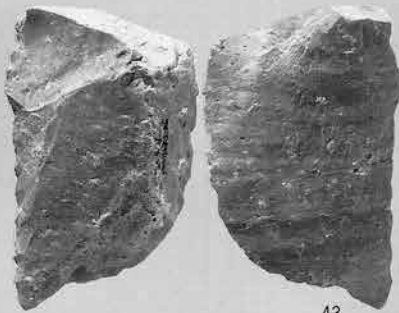
40



41



42



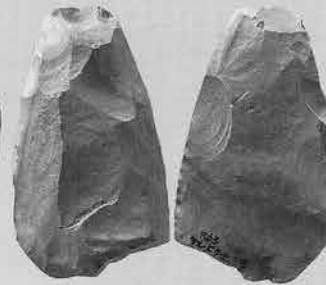
43



44



45



46



47



48



49



50



51



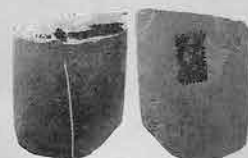
52



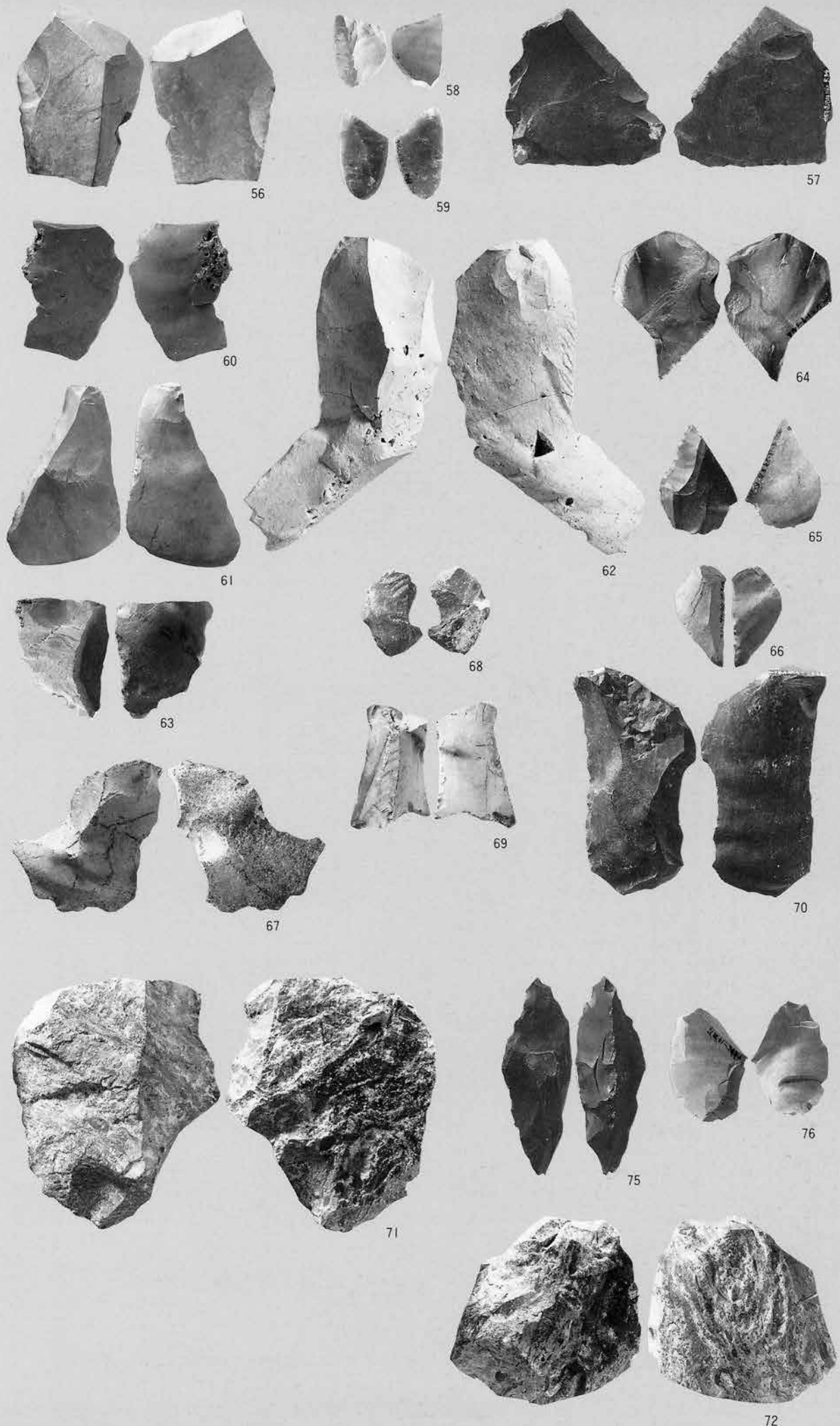
55

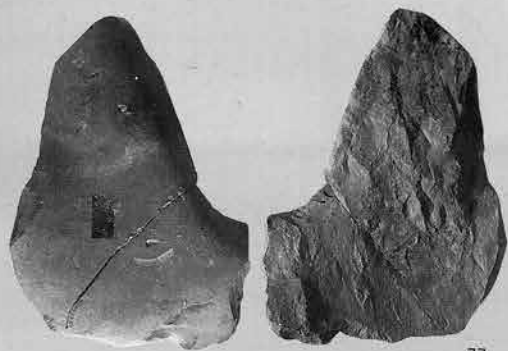


53



54

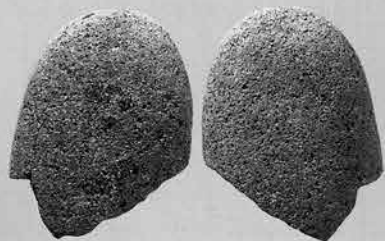




77



74



78



79



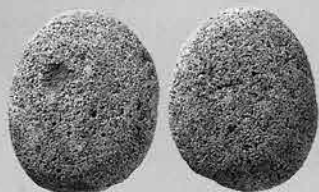
80



81



82



83



86



88



89



90



87



93



96



92

(1 : 2)

74

(1 : 4)

77~90

(1 : 6)

92・93・96



1



2



3



5



6



7



8



9



10



11



13



14



17



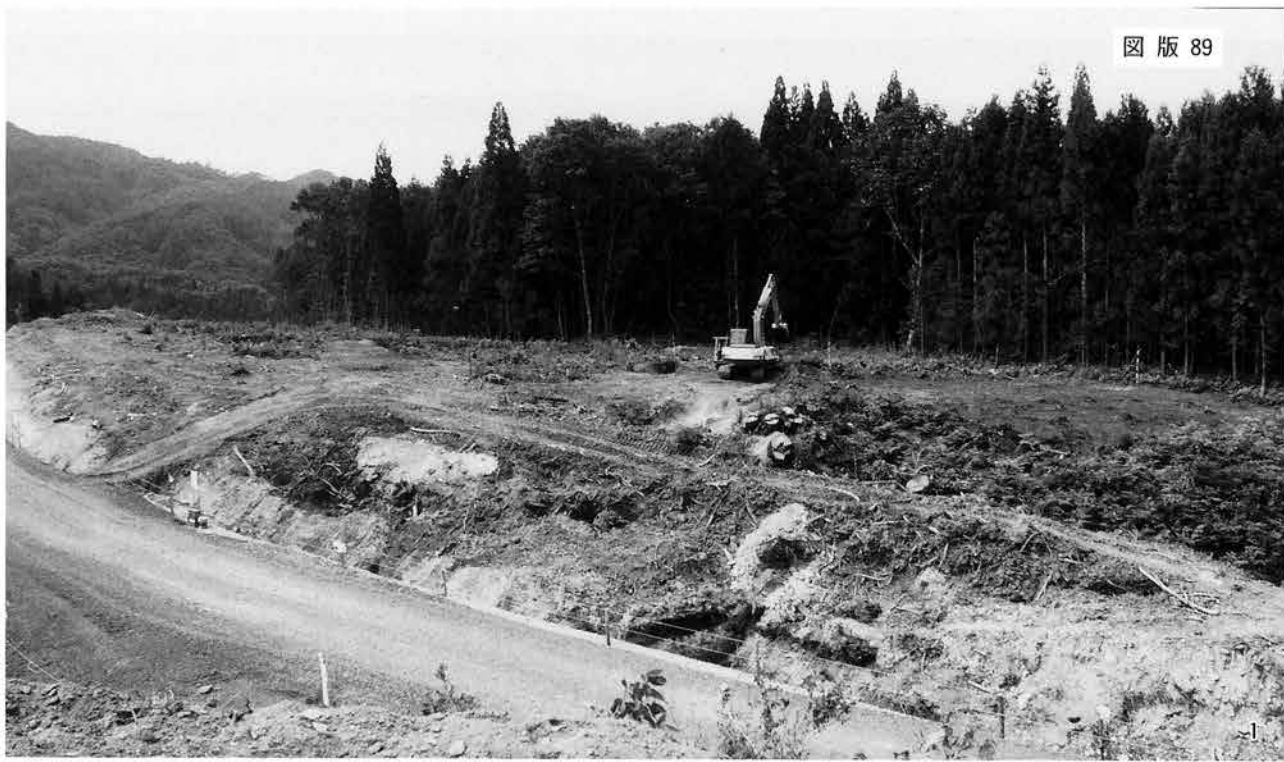
18

(1 : 3)

1~18



1 調査前全景  
(南から)



2 完掘  
(東から)



3 完掘  
(西から)



1

2

3





1 調査区中央  
完掘 (南から)



2



3

2 Cライン最東  
セクションアップ  
(南西から)

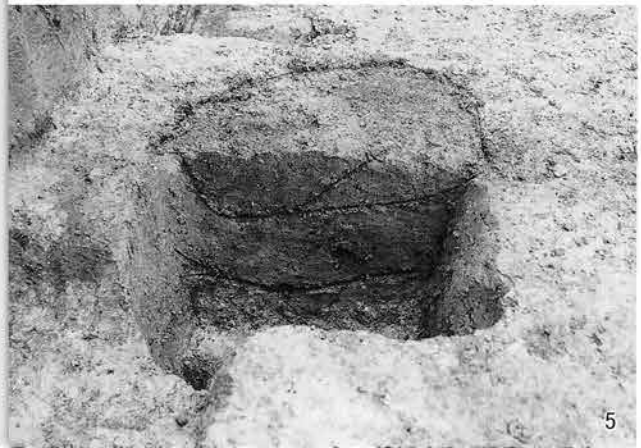


4



6

3 Cライン最東  
セクション  
(南西から)



5



7

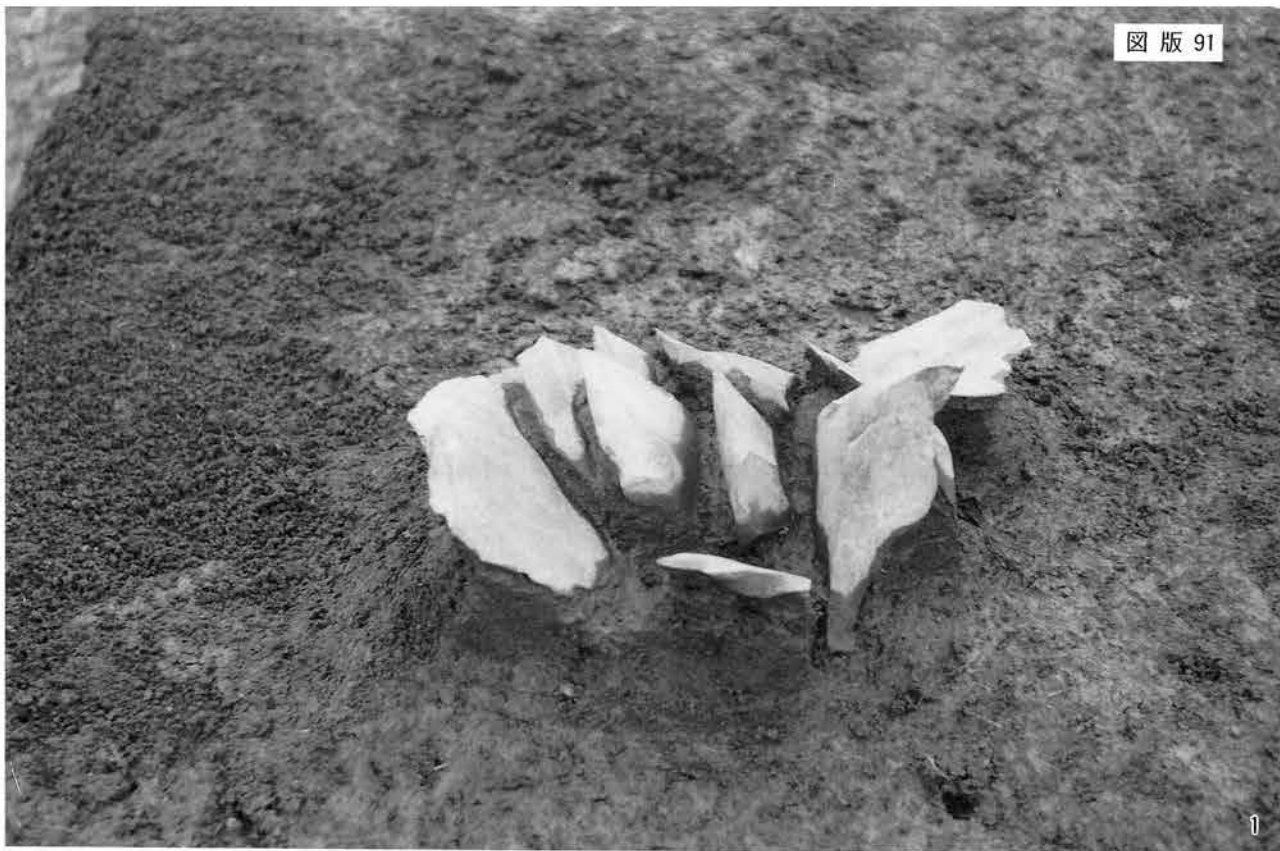
4 1号土坑完掘  
(南から)

5 1号土坑断面  
(西から)

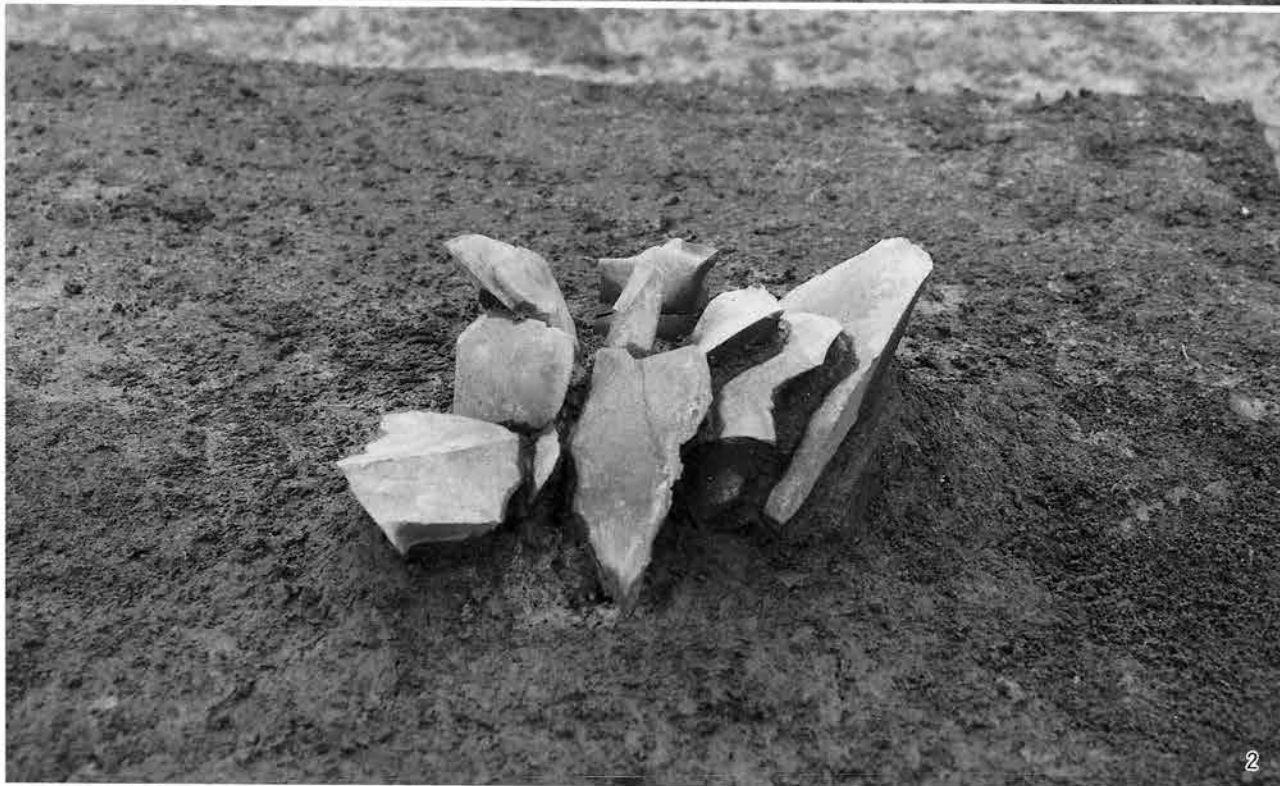
6 2号土坑完掘  
(東から)

7 3号土坑完掘  
(西西から)

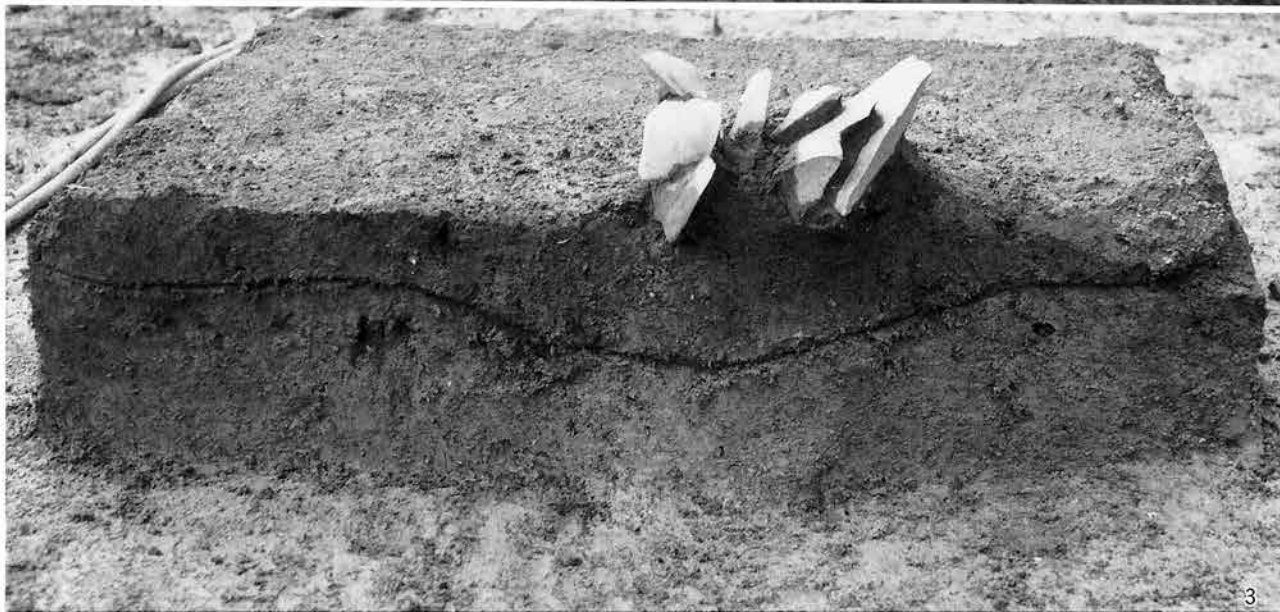
1 4号土坑検出状況  
(南から)



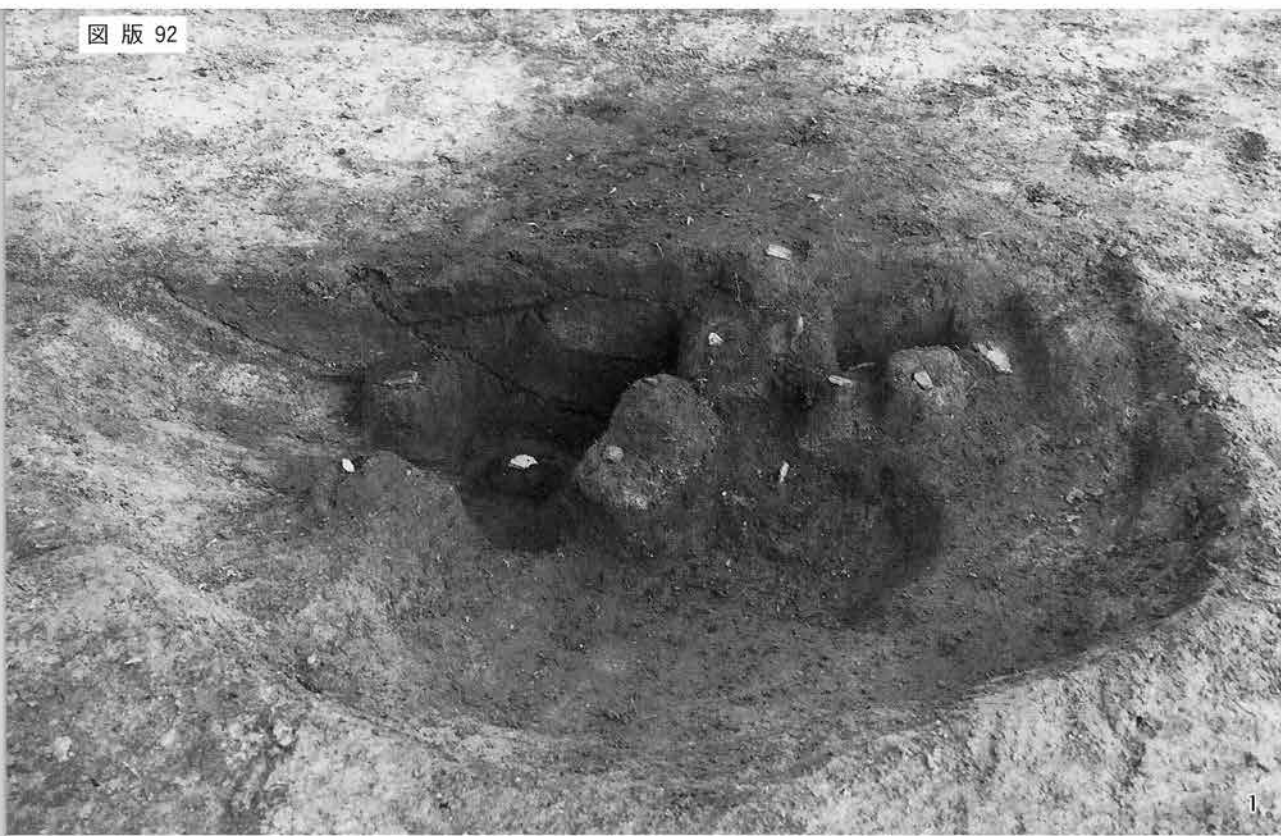
2 4号土坑検出状況  
(東から)



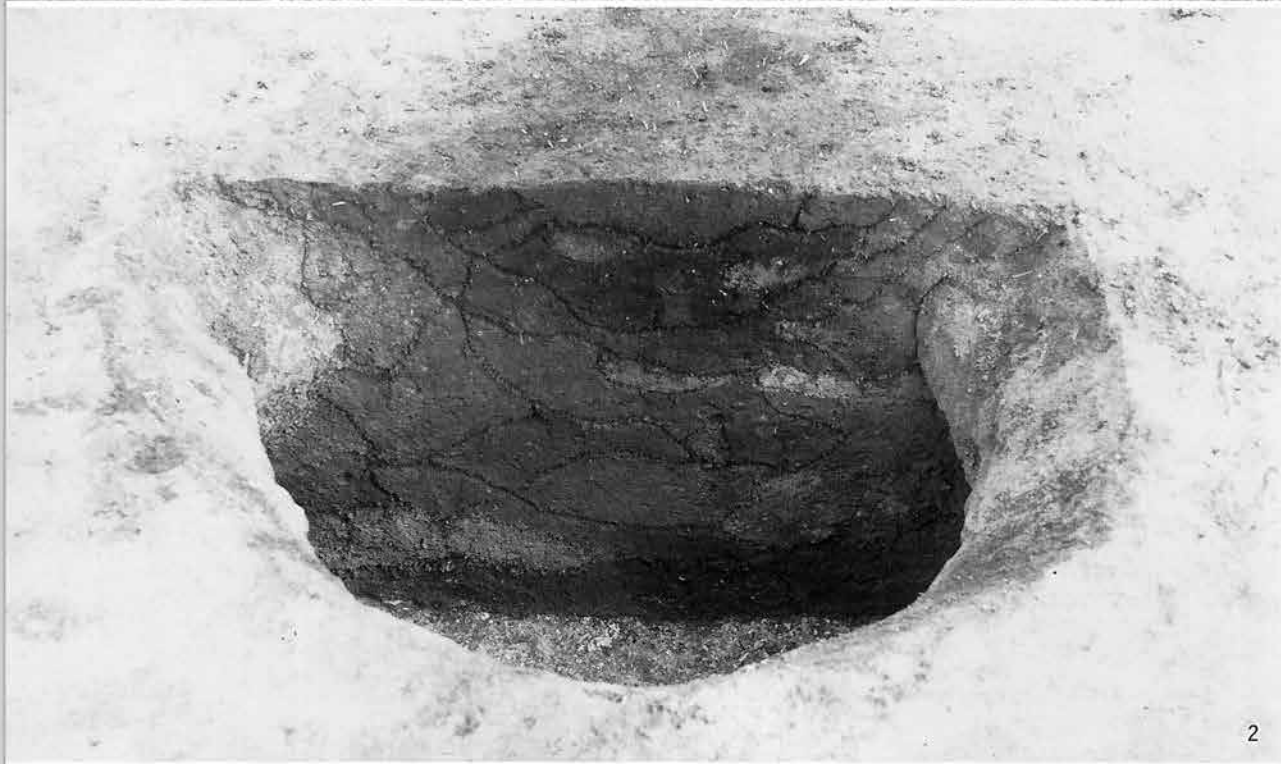
3 4号土坑断面  
(東から)







1 1号フラスコ状土坑  
遺物出土状況  
(西から)

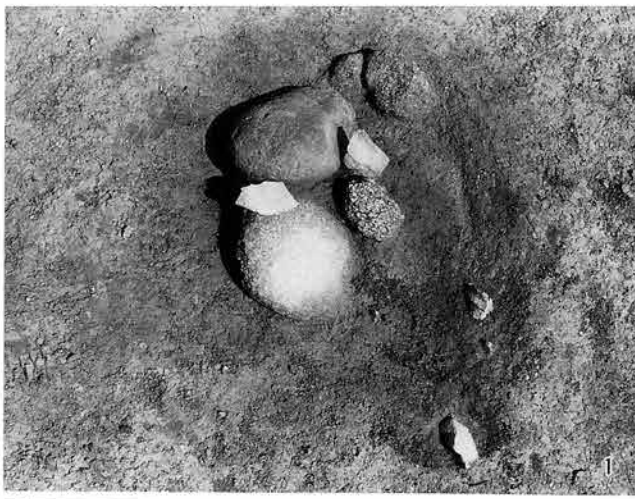


2 1号フラスコ状土坑  
断面  
(西から)



3 1号フラスコ状土坑  
完掘(南から)

- 1 1号集石土坑  
検出状況  
(南から)
- 2 1号集石土坑  
断面  
(南西から)



- 3 1号集石土坑  
検出状況  
(西から)



- 4 2号集石土坑  
断面  
(南西から)



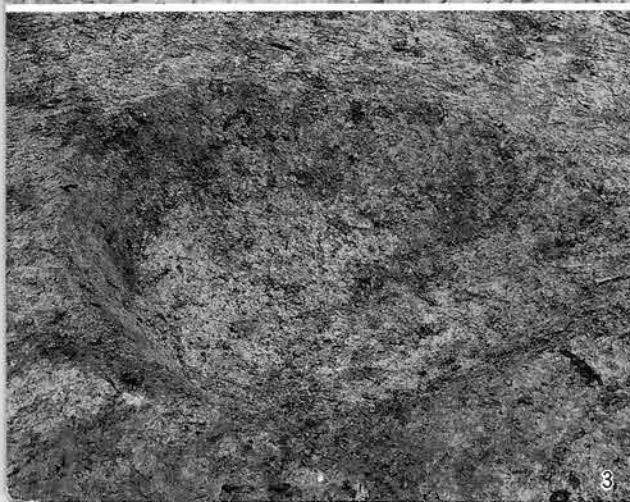




1 4号集石土坑  
検出状況  
(南西から)



2 4号集石土坑  
断面  
(南西から)

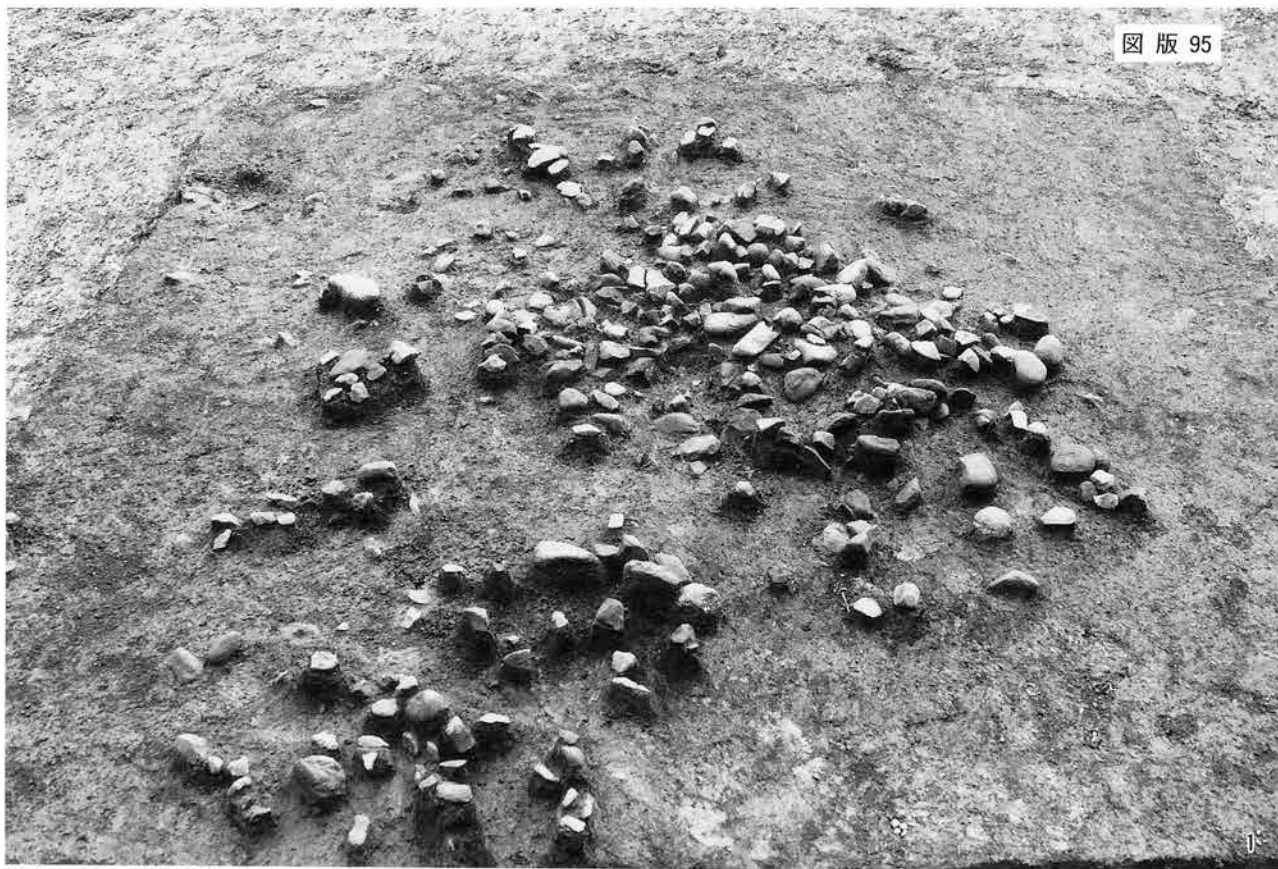


3 4号集石土坑  
完掘 (南西から)



4 C4-12グリッド  
土器出土状況  
(北から)





1 3号集石土坑  
検出状況（北から）



2 3号集石土坑  
断面（南から）



3 D-11付近の東西  
セクション  
（南東から）



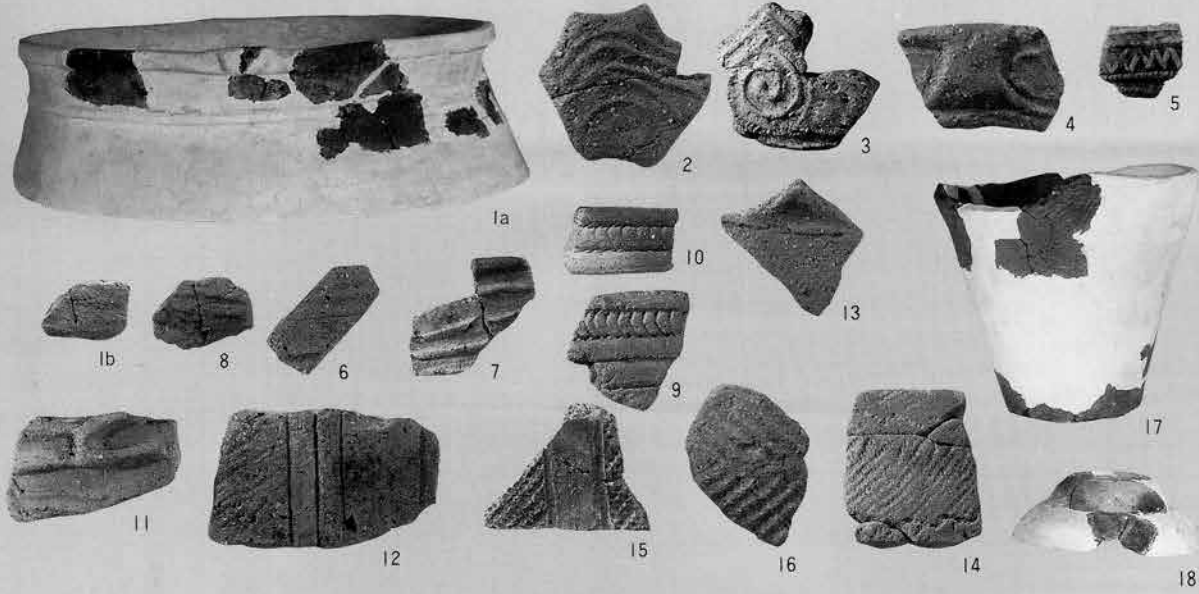
4 D-8・9付近の  
東西セクション  
（南東から）



5 D-8付近の  
東西セクション  
（南東から）



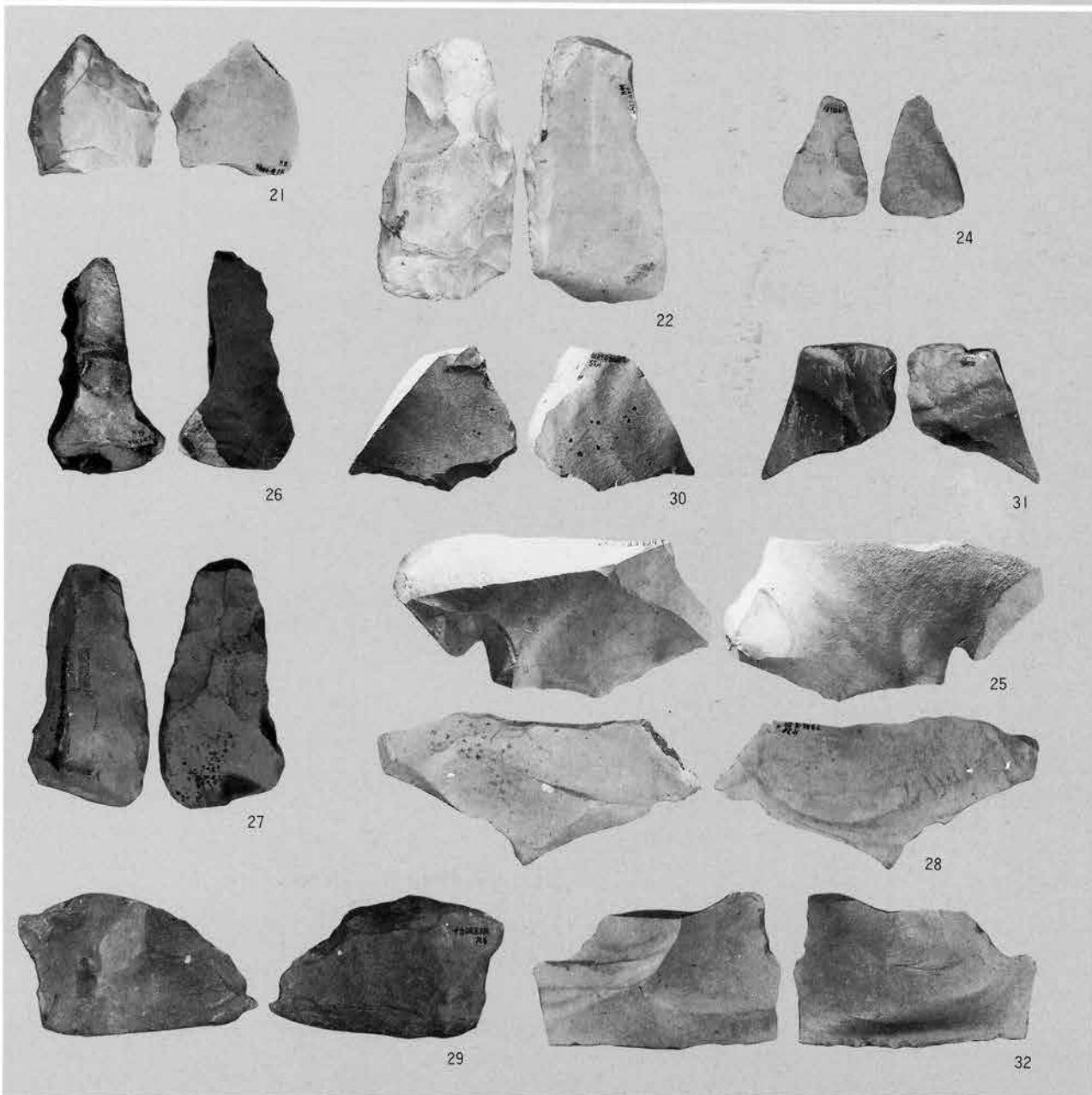
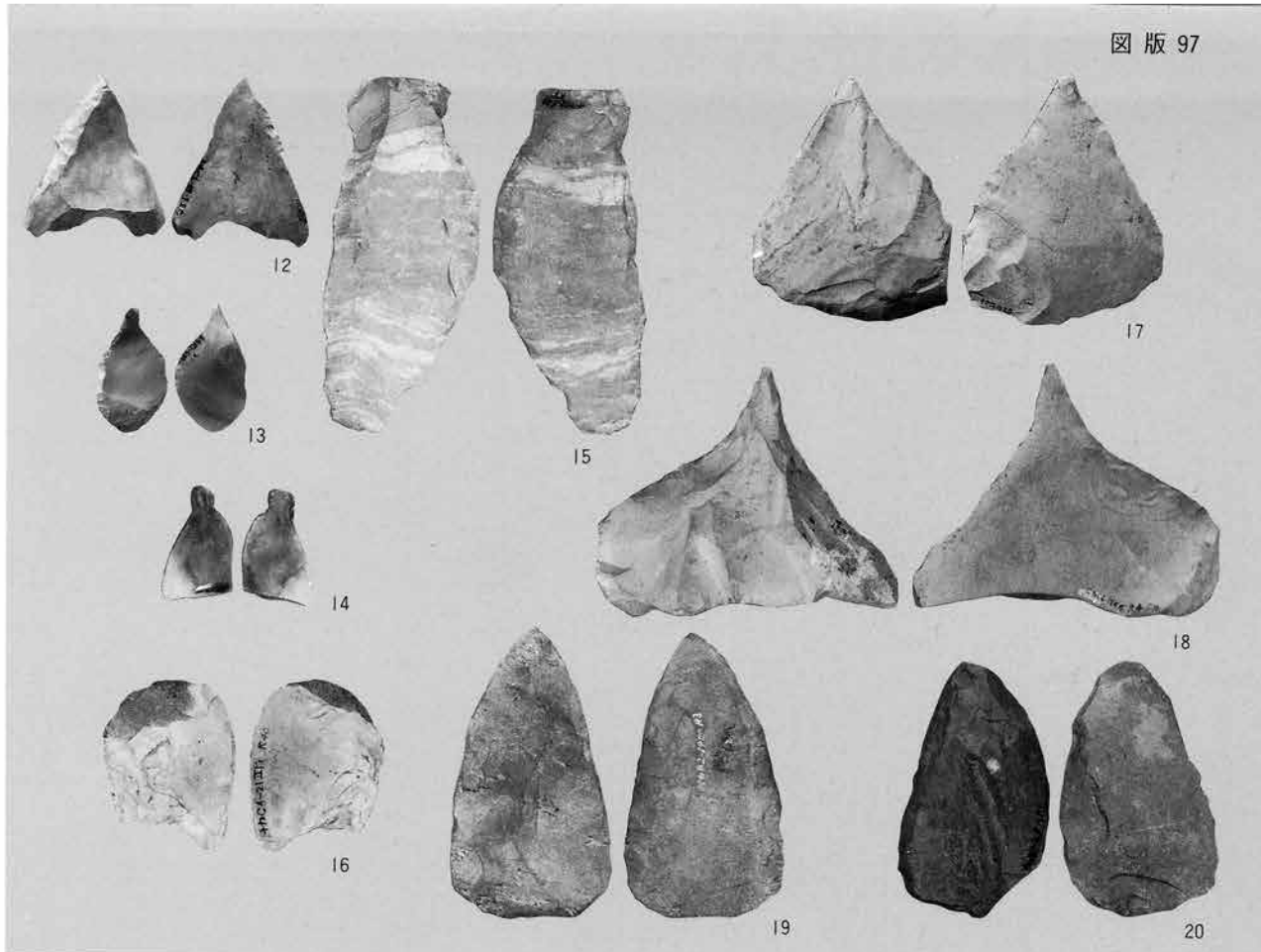
6 D-5付近の  
東西セクション  
（南東から）



(1 : 3)  
(1 : 5)  
1 · 7 · 18

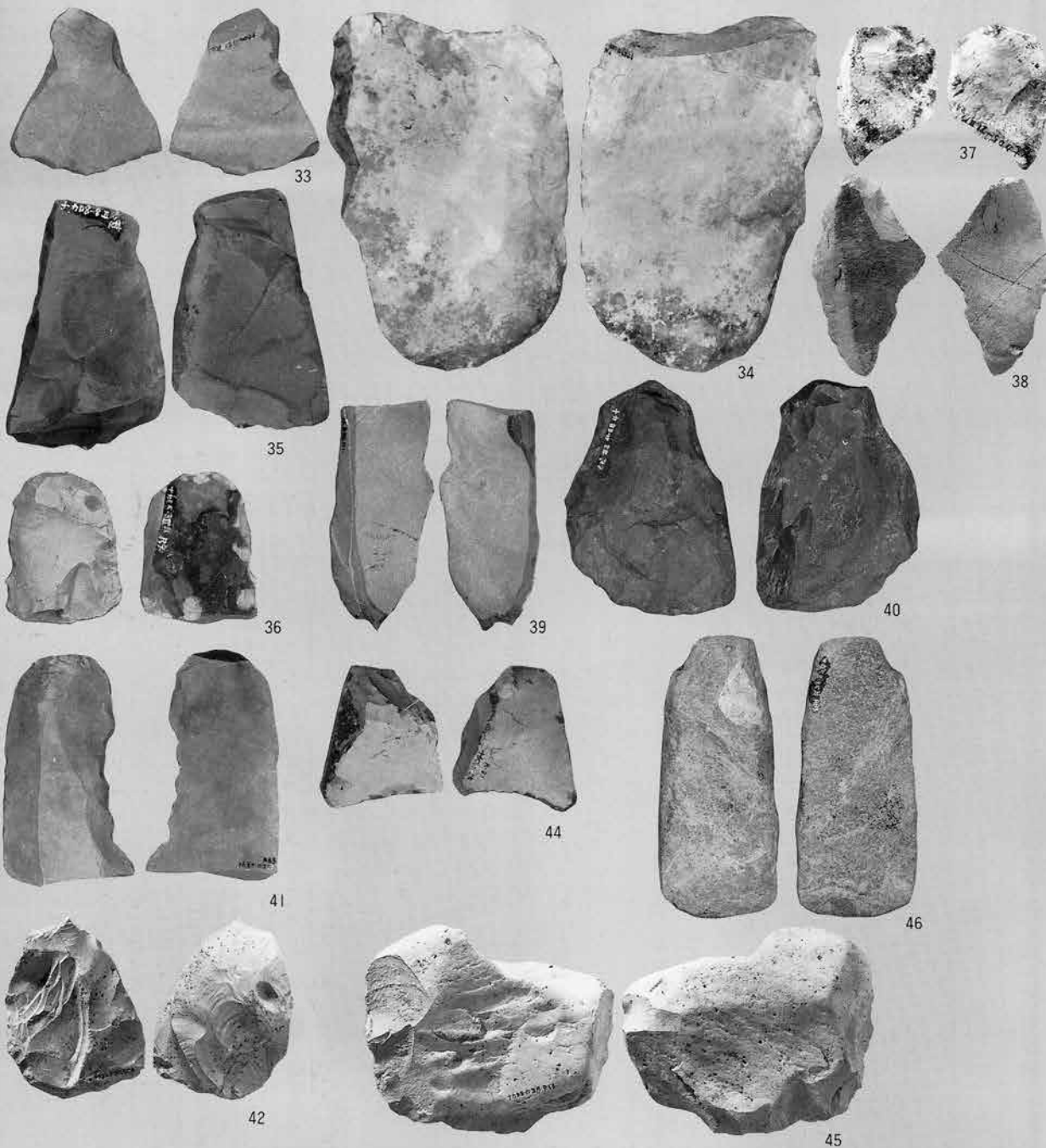


(1 : 3)

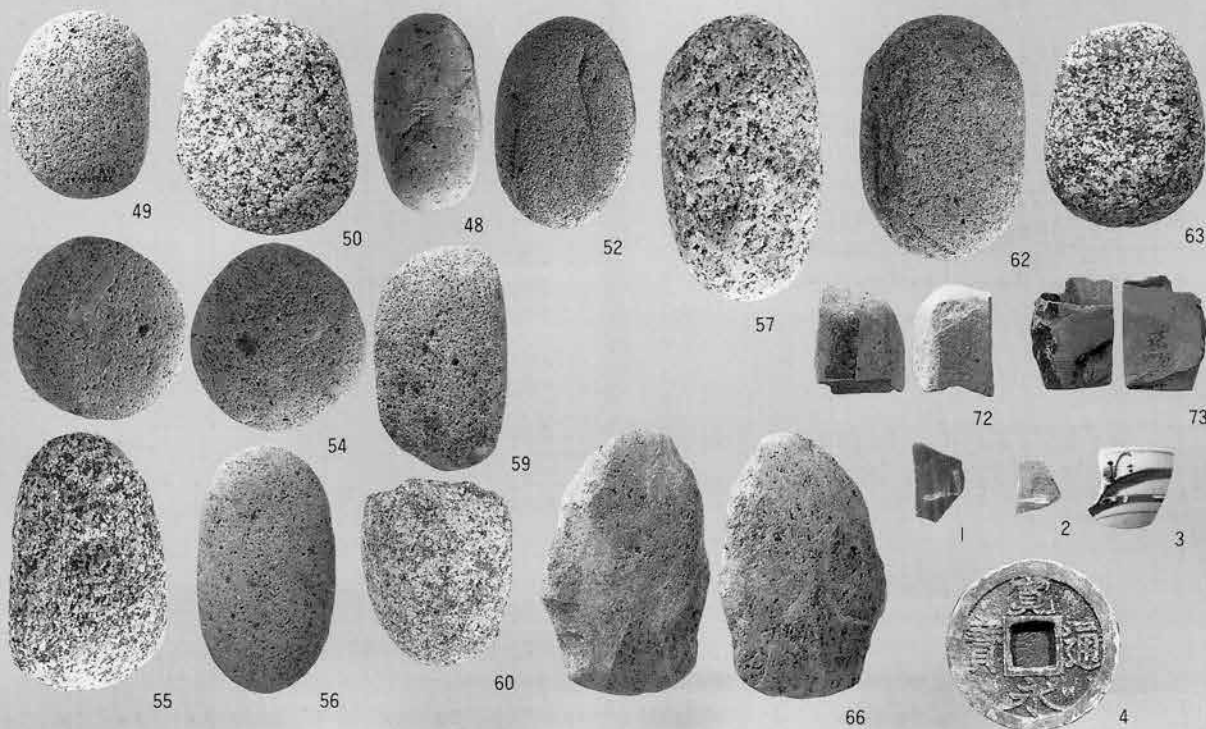


(1:1)  
12  
(1:2)  
その他





(1 : 2)  
33~42・44  
(1 : 3)  
46  
(1 : 4)  
45



(1 : 1)  
4  
(1 : 2)  
72・73  
(1 : 3)  
1~3  
(1 : 4)  
その他



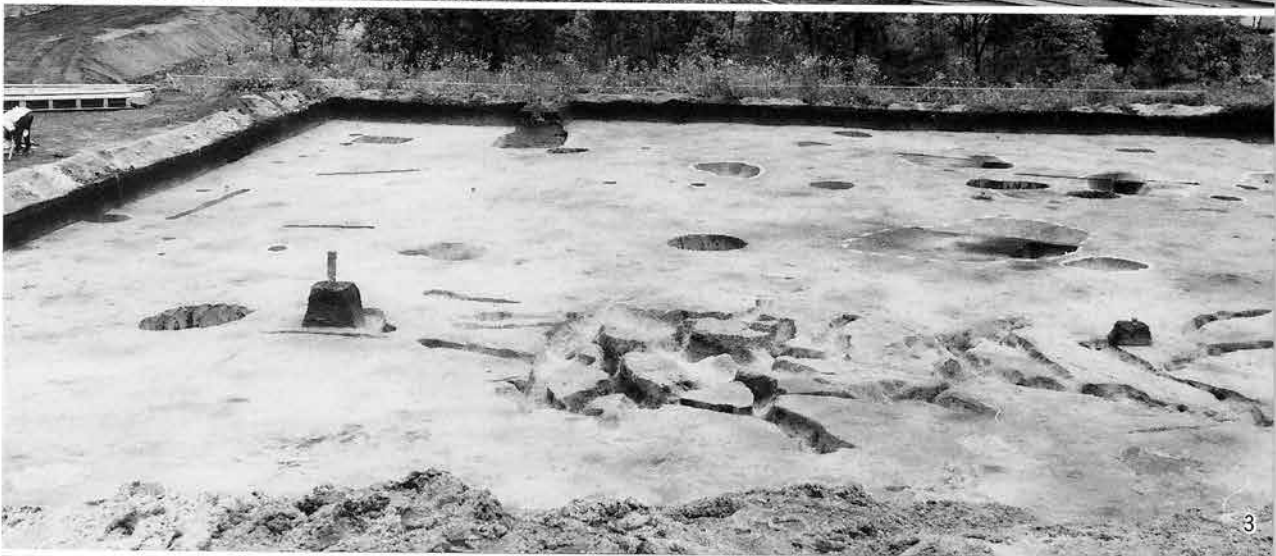
1 調査前全景  
(東から)



2 完掘全景  
(東から)



3 北側完掘  
(西から)



4 南側完掘  
(東から)



1

2

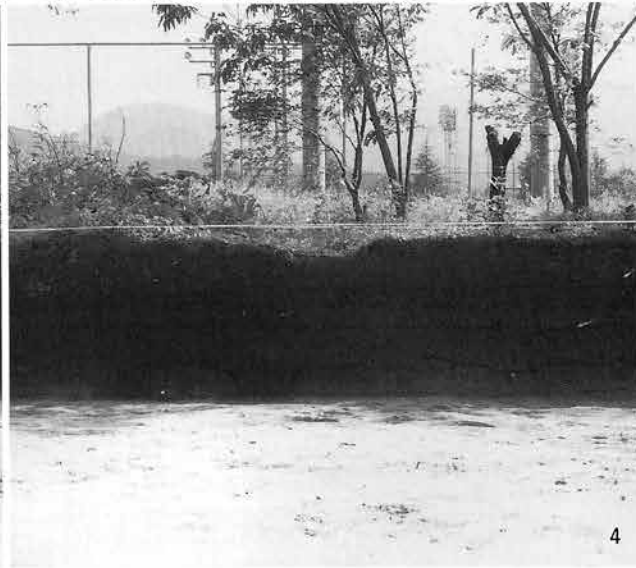
3

4



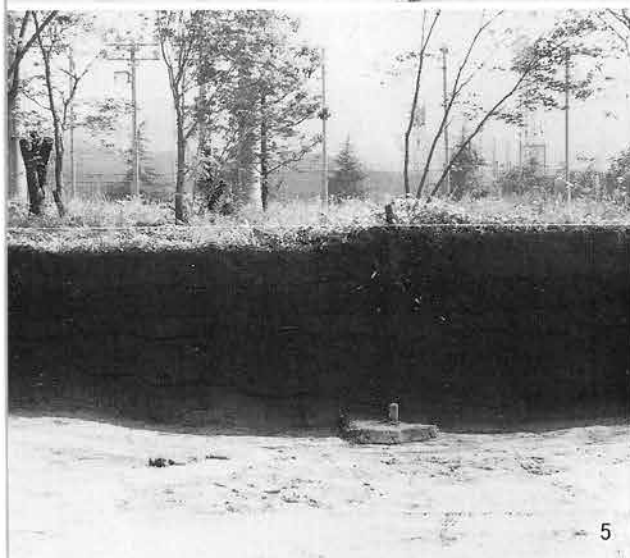
1 調査前表土剥ぎ  
(西から)

2 調査風景  
(西から)



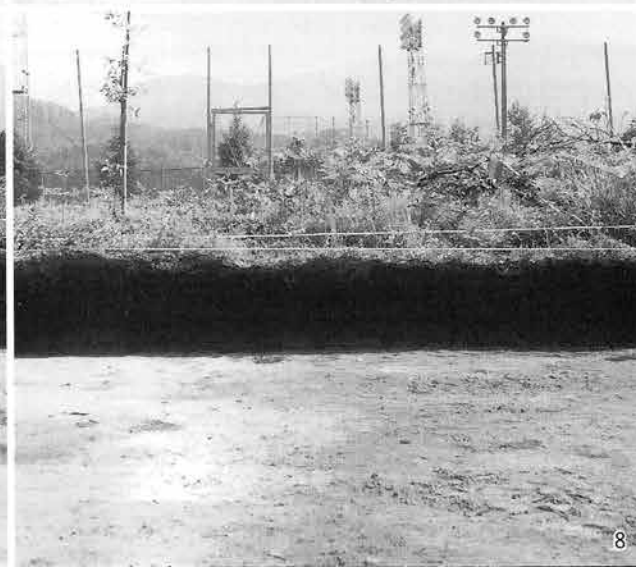
3 南壁セクション①  
(北から)

4 南壁セクション②  
(北から)



5 南壁セクション③  
(北から)

6 南壁セクション④  
(北から)

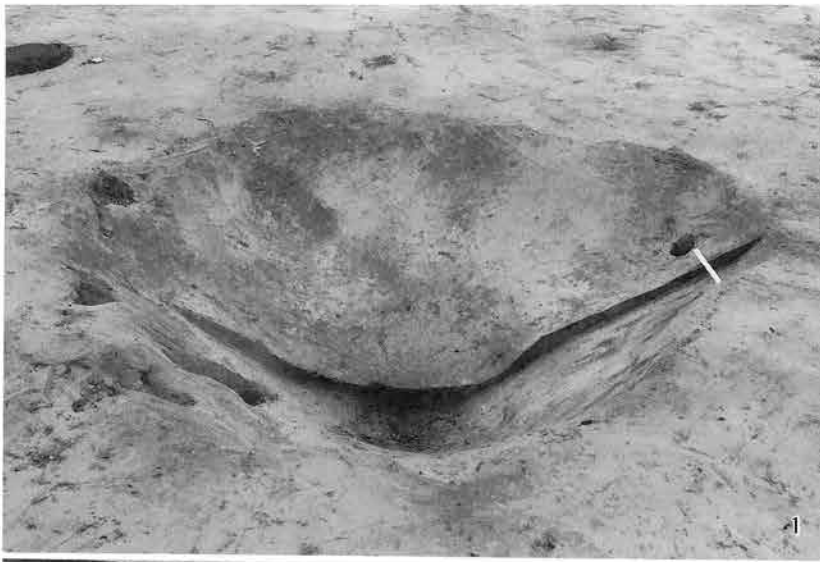


7 南壁セクション⑤  
(北から)

8 南壁セクション⑥  
(北から)



1 8号土坑完掘  
(南から)



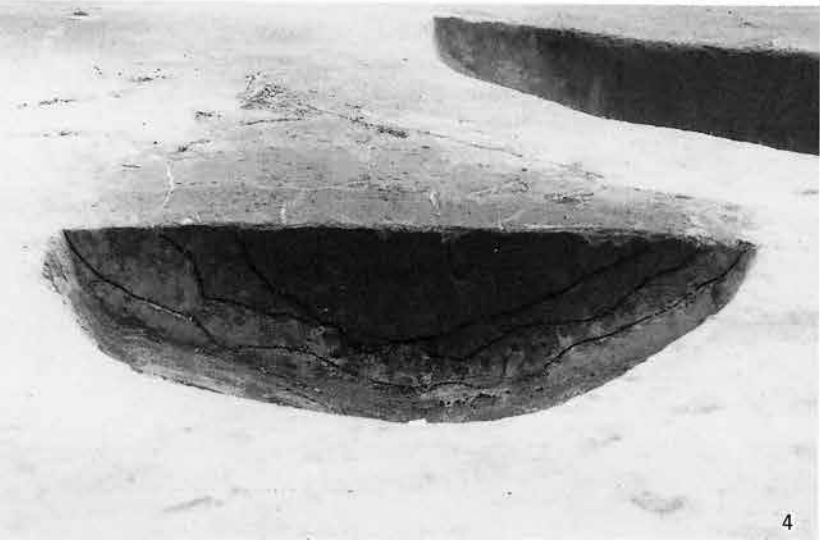
2 8号土坑断面  
(南から)



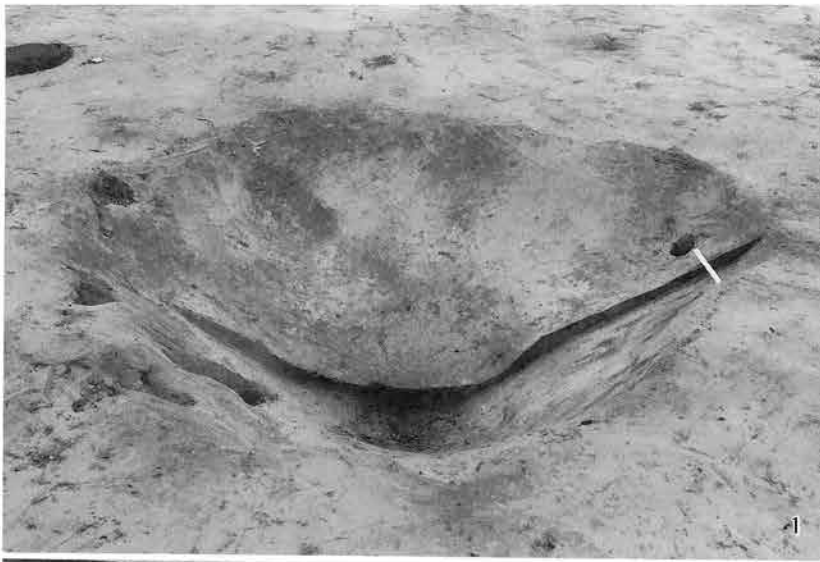
3 5号土坑完掘  
(西から)



4 5号土坑完掘  
(南から)



5 6号土坑完掘  
(南から)



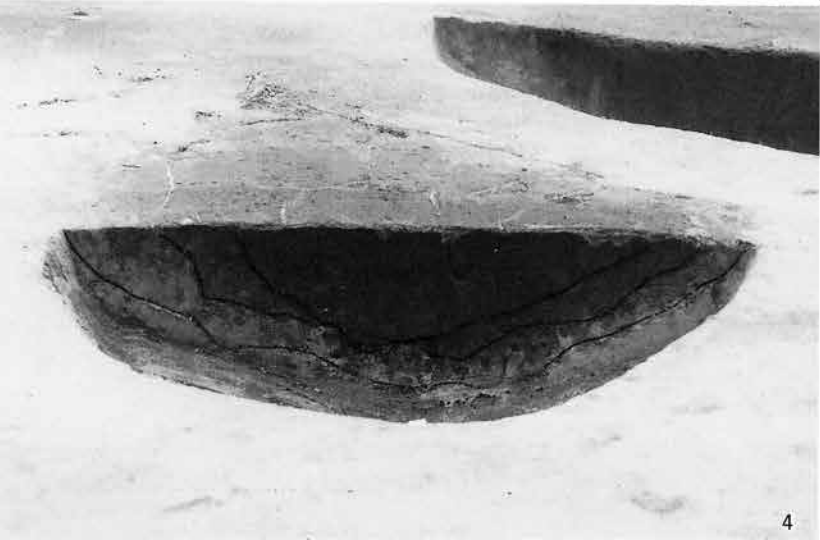
6 9号土坑完掘  
(南から)



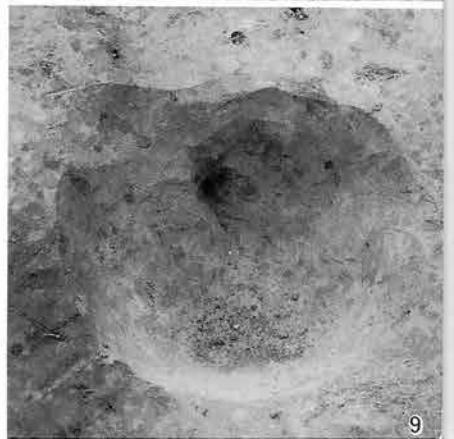
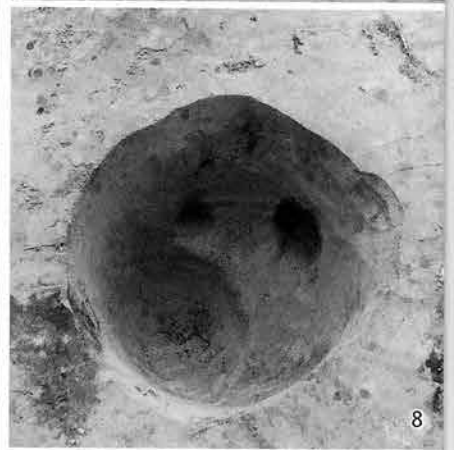
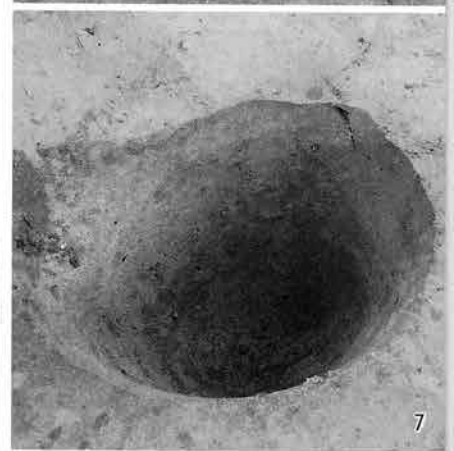
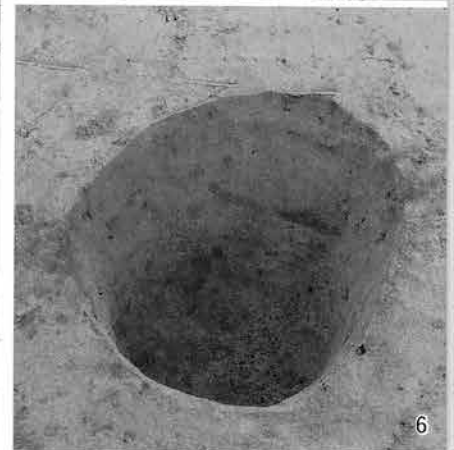
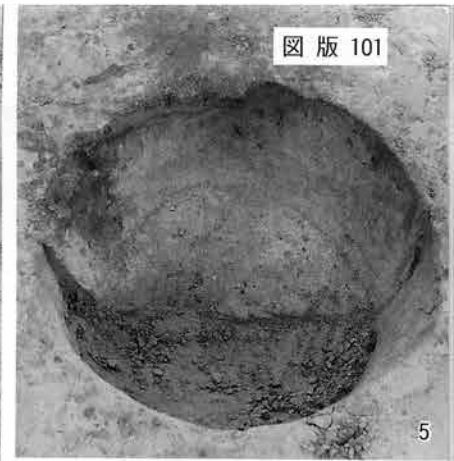
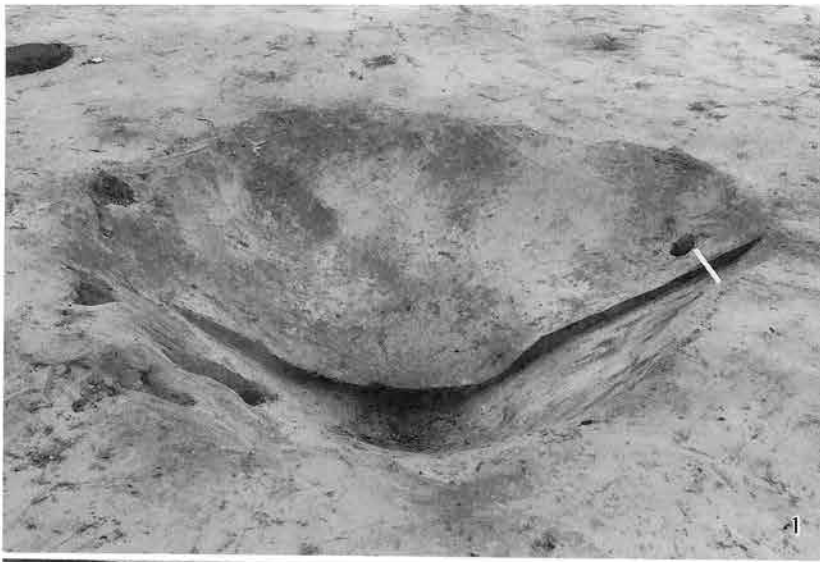
7 7号土坑完掘  
(南から)



8 11号土坑完掘  
(南から)



9 4号土坑完掘  
(南から)



1

2

3

4

5

6

7

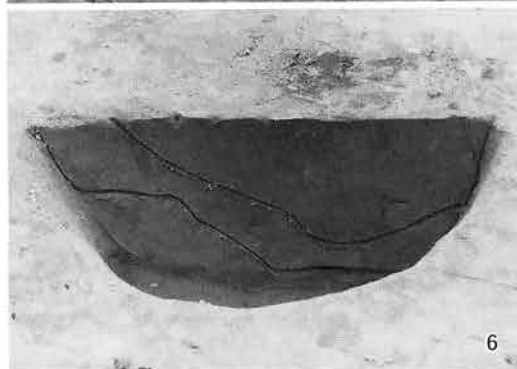
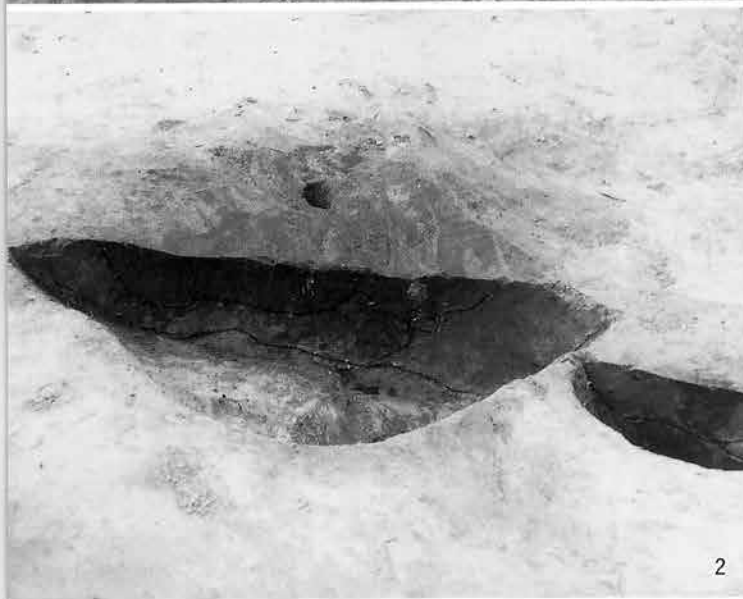
8

9



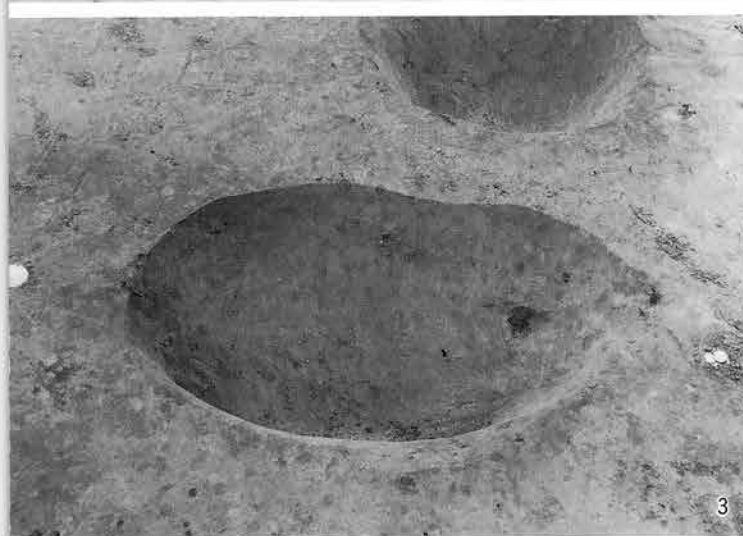
1 13・14号土坑完掘  
(西から)

2 13・14号土坑断面  
(西から)



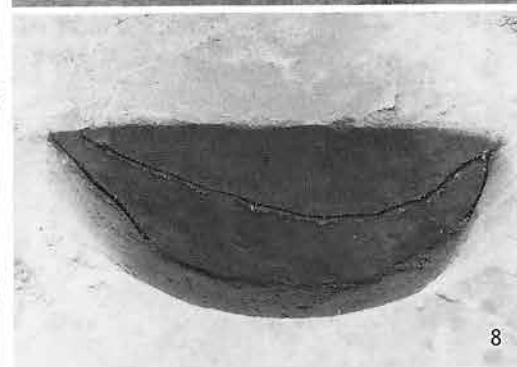
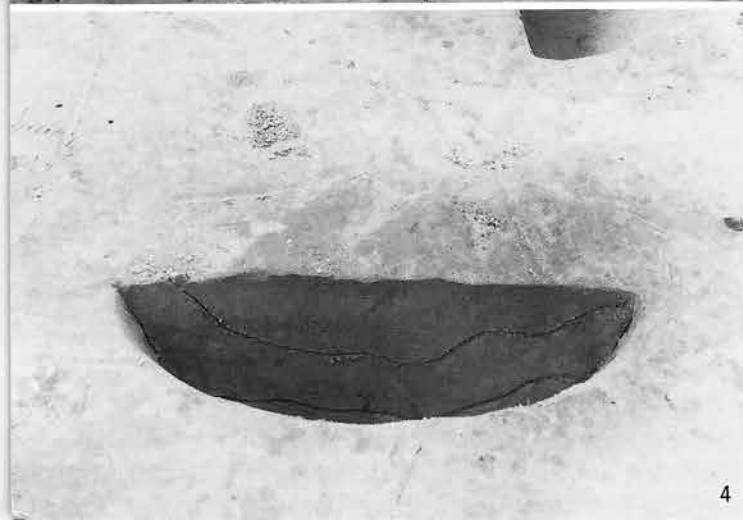
3 20号土坑完掘  
(西から)

4 20号土坑断面  
(西から)



5 12号土坑完掘  
(南から)

6 12号土坑断面  
(南から)



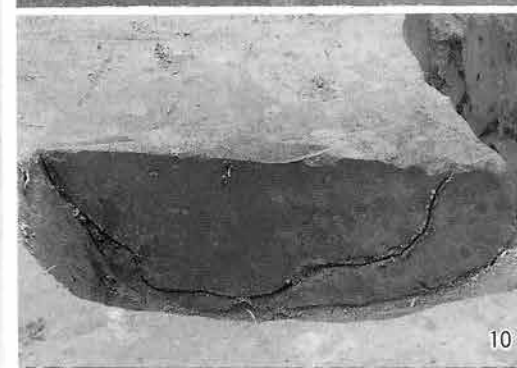
7 10号土坑完掘  
(西から)

8 10号土坑断面  
(南から)



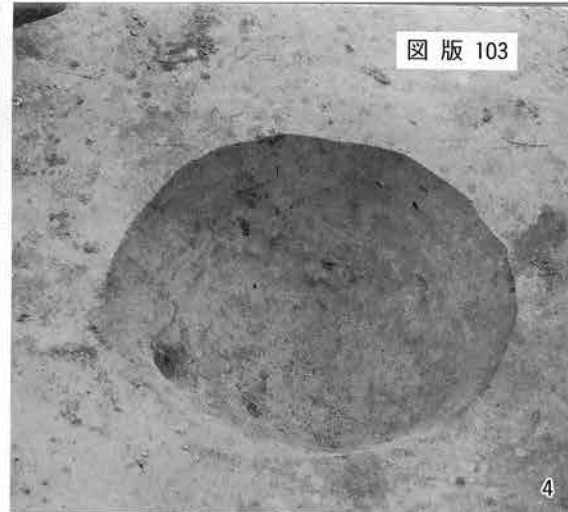
9 13号土坑完掘  
(西から)

10 13号土坑断面  
(西から)

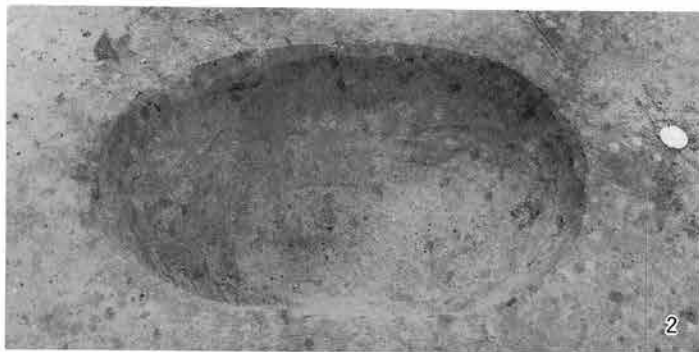




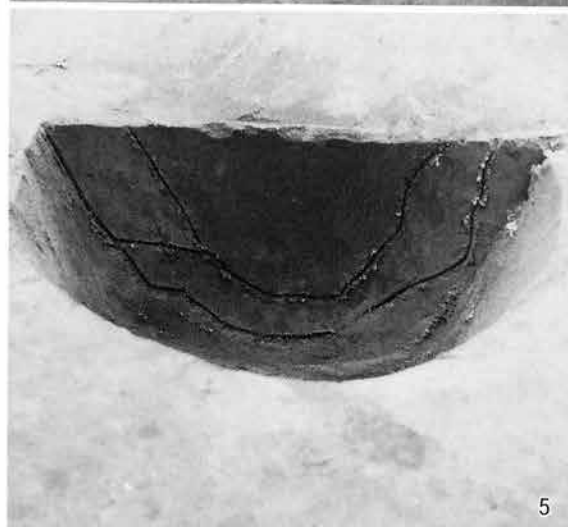
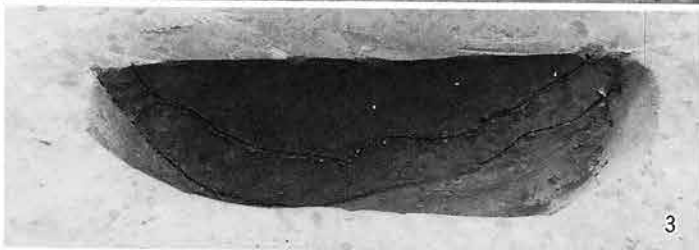
1 5号風倒木痕断面  
(北から)



2 15号土坑完掘  
(南から)



3 15号土坑断面  
(南から)



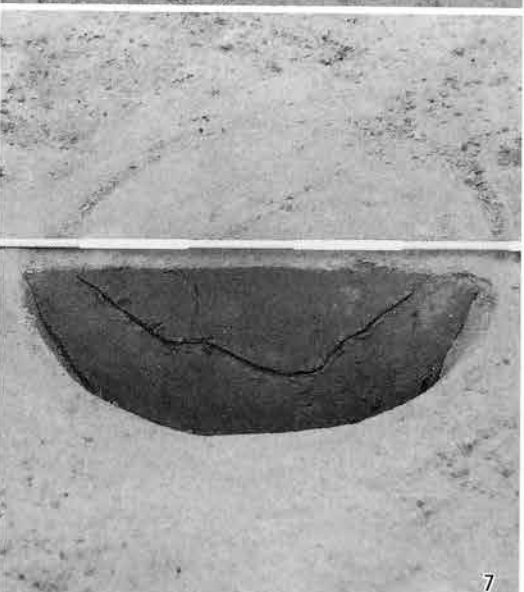
4 14号土坑完掘  
(西から)



5 14号土坑断面  
(南から)



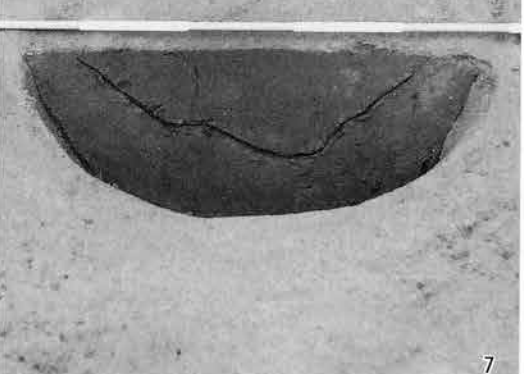
6 3号土坑完掘  
(南から)



7 3号土坑断面  
(南から)

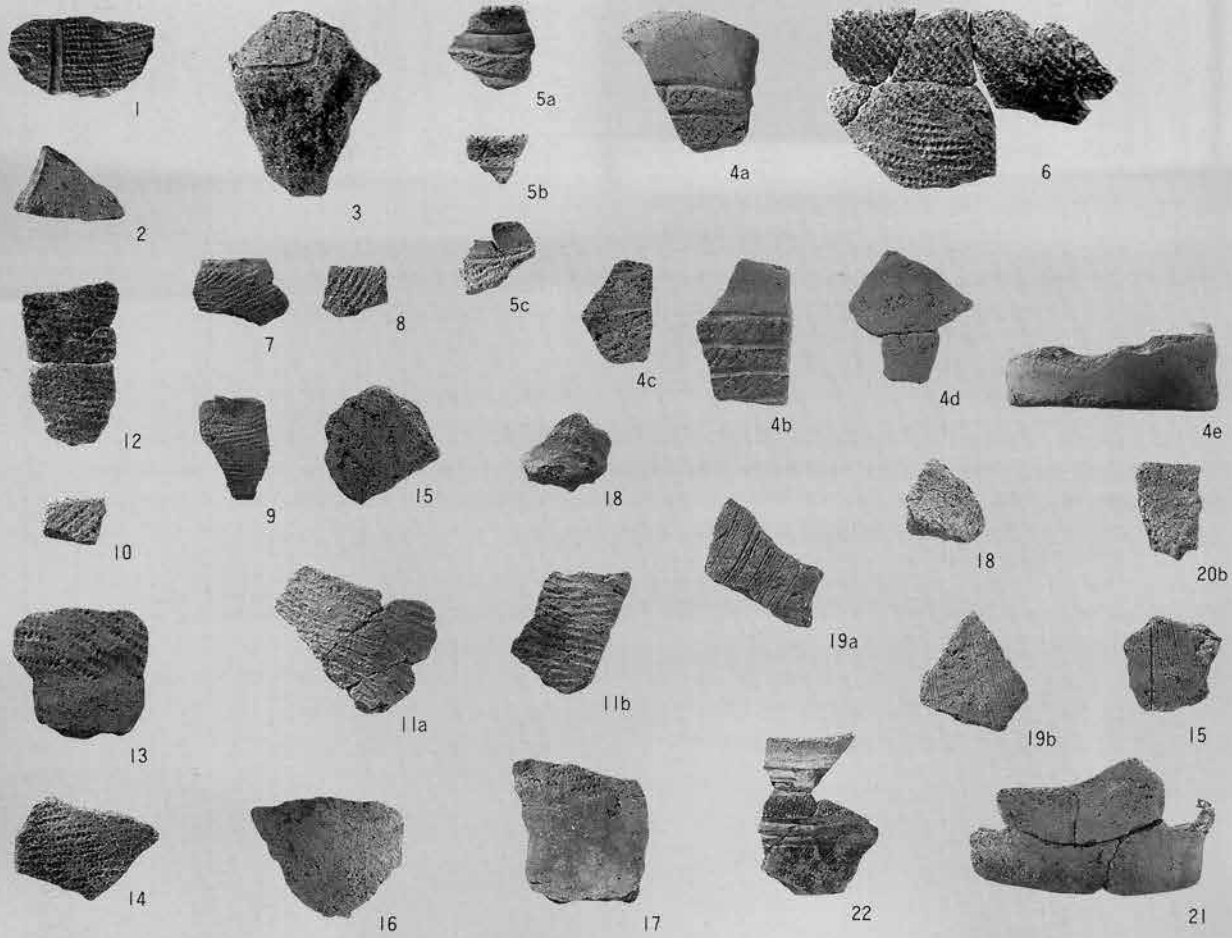


8 2号土坑完掘  
(東から)

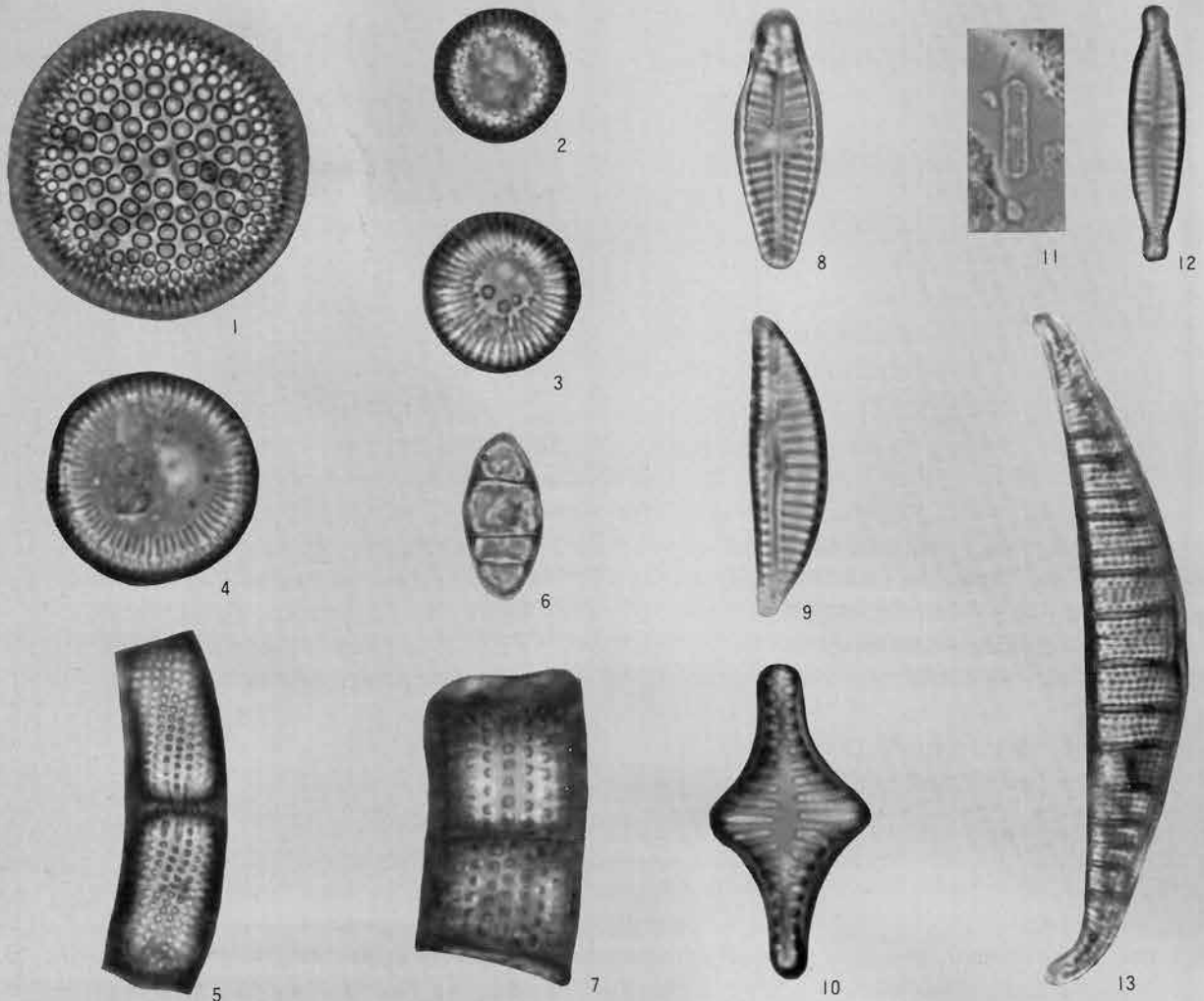


9 2号土坑断面  
(東から)





(1 : 3)  
1 ~ 21



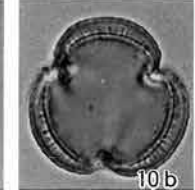
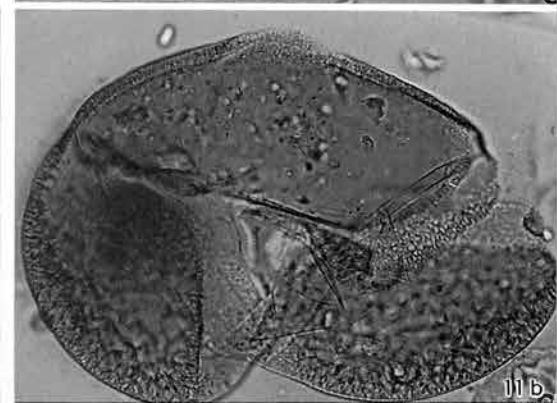
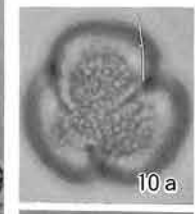
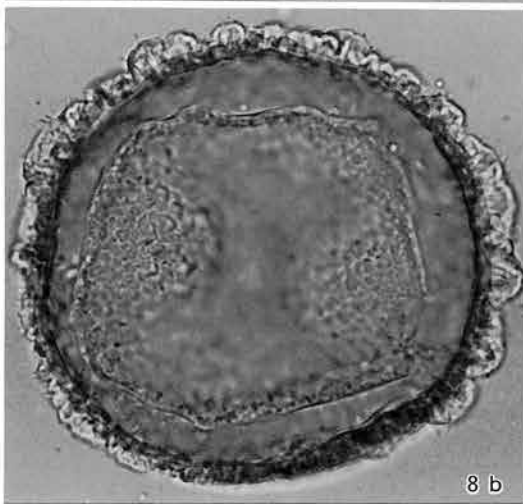
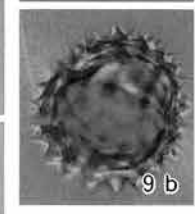
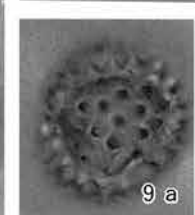
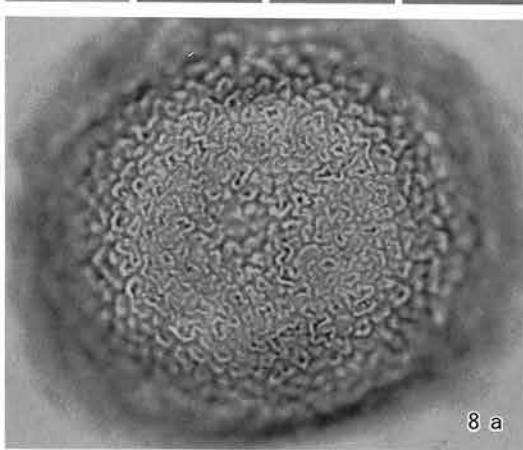
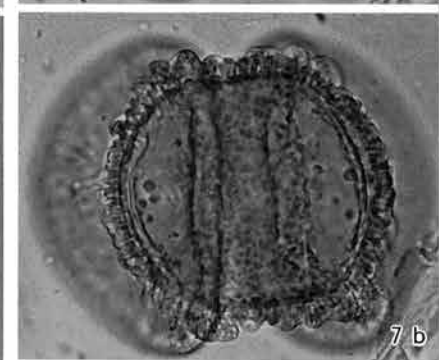
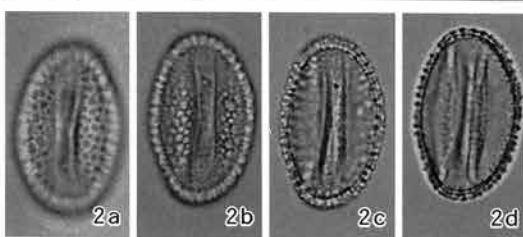
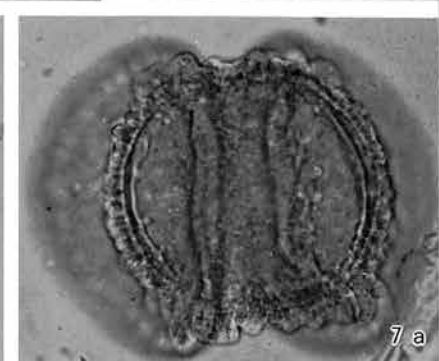
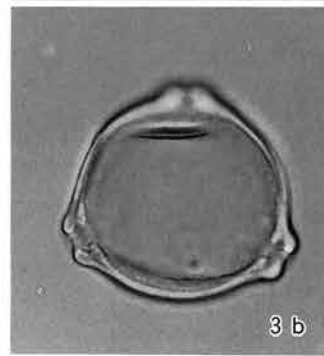
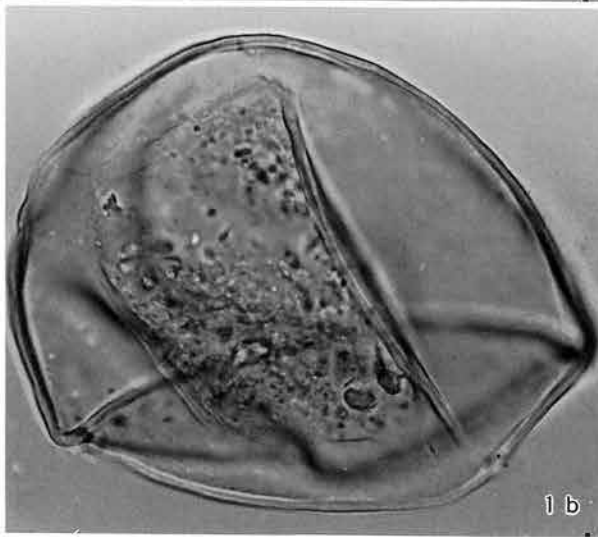
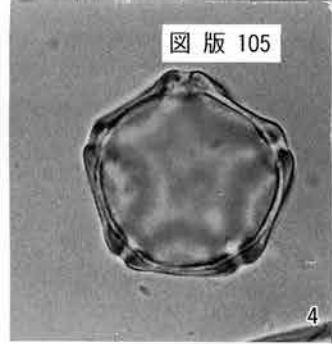
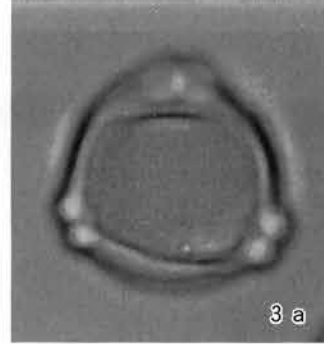
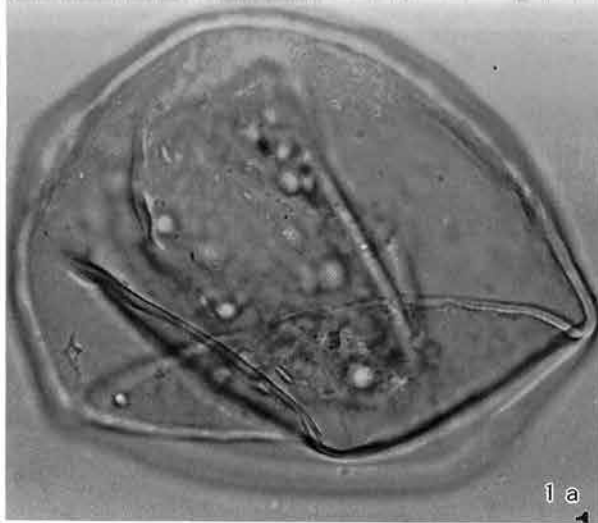
大坂上道遺跡の  
珪藻化石

- 1 *Coscindiscus* Spp
- 2 *Melosira dislans*
- 3 *Cyclolella ocellata*
- 4 *Cyclolella ocellata*
- 5 *Melosira ambigua*
- 6 *Dialtna heimala*
- 7 *Melosira granulata*
- 8 *Navicula* spp
- 9 *Cymbella minuta*
- 10 *Fragilarie laptostsuron*
- 11 *Navicula contenta*
- 12 *Gomphonema parvulum*
- 13 *Rhopalodia gibberula*

- 1 カラマツ属
- 2 ヤナギ属
- 3 カバノキ属
- 4 ハンノキ属
- 5 イネ科
- 6 カヤツリグ科
- 7 マツ属  
単維管束亜属
- 8 ツガ属
- 9 キク亜科
- 10 ヨモギ属
- 11 トウヒ属

10 μm  
(1~10)

10 μm  
(11)





報告書抄録

| 書名     | おおさかうえみち さるびたい なかだな まきの さわ<br>大坂上道遺跡・猿額遺跡・中棚遺跡・牧ノ沢遺跡 |                |                     |                   |                                   |  |        |                             |
|--------|--|----------------|---------------------|-------------------|-----------------------------------|--|--------|-----------------------------|
| 副書名    | 磐越自動車道関係発掘調査報告書                                      |                |                     |                   |                                   |  |        |                             |
| シリーズ名  | 新潟県埋蔵文化財調査報告書  |                |                     |                   |                                   |  |        |                             |
| シリーズ番号 | 第68集   |                |                     |                   |                                   |  |        |                             |
| 編著者名   | 滝沢規朗・北村 亮・佐藤正知・阿部雄生                                  |                |                     |                   |                                   |  |        |                             |
| 編集機関   | 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団                                   |                |                     |                   |                                   |  |        |                             |
| 所在地    | 〒951 新潟県新潟市一番堀通町5923-46 TEL025-223-5642              |                |                     |                   |                                   |  |        |                             |
| 発行年月日  | 西暦1995年3月31日   |                |                     |                   |                                   |  |        |                             |
| 所収遺跡   |  | コード            |                     | 北緯                | 東経                                | 調査期間   | 調査面積   | 調査要因                        |
|        |  | 市町村            | 遺跡番号                |                   |                                   |  |        |                             |
| 大坂上道遺跡 | 新潟県東蒲原郡津川町大字西字大坂上道ほか                                 | 15-381         | 36                  | 37度<br>40分<br>34秒 | 139度<br>26分<br>3秒                 | 第一次調査<br>19901022~19901102<br>19910417~19910418<br>第二次調査<br>19920413~19920630<br>19930419~19930723 | 8,700㎡ | 道路（磐越自動車道いわき～新潟線）の建設に伴う事前調査 |
| 猿額遺跡   | 新潟県東蒲原郡津川町大字西字猿額中丸ほか                                 | 15-381         | 35                  | 37度<br>40分<br>33秒 | 139度<br>25分<br>55秒                | 第一次調査<br>19910913<br>第二次調査<br>199207・199307  | 3,200㎡ | 道路（磐越自動車道いわき～新潟線）の建設に伴う事前調査 |
| 中棚遺跡   | 新潟県東蒲原郡津川町大字西字中棚ほか                                   | 15-381         | 34                  | 37度<br>40分<br>34秒 | 139度<br>25分<br>46秒                | 第一次調査<br>19910911~19910912<br>第二次調査<br>19920928~19921117   | 2,200㎡ | 道路（磐越自動車道いわき～新潟線）の建設に伴う事前調査 |
| 牧ノ沢遺跡  | 新潟県東蒲原郡三川村大字谷花字牧ノ沢乙                                  | 15-384         | 30                  | 37度<br>41分<br>16秒 | 139度<br>23分<br>1秒                 | 第一次調査<br>19921209~19921216<br>第二次調査<br>19920603~19920630   | 1,000㎡ | 道路（磐越自動車道いわき～新潟線）の建設に伴う事前調査 |
| 所収遺跡名  | 種別   | 主な時代           | 主な遺構                |                   | 主な遺物                              |  | 特記事項   |                             |
| 大坂上道遺跡 | 遺物包含地  | 縄文時代中期・後期、平安時代 | 土坑・集石土坑・フラスコ状土坑・焼土坑 |                   | 縄文土器・土製品・石器・（石鏃・石錐・石匙・篋状石器・磨製石斧他） |  |        |                             |
| 猿額遺跡   | 遺物包含地  | 縄文時代草創期・前期     | 土坑・フラスコ状土坑・焼土坑      |                   | 縄文土器・石器（尖頭器・篋状石器・石錐・磨製石斧他）        |  |        |                             |
| 中棚遺跡   | 遺物包含地  | 縄文時代前期         | 土坑・集石土坑・フラスコ状土坑     |                   | 縄文土器・石器（石鏃・石匙・石錐・篋状石器・磨製石斧他）      |  |        |                             |
| 牧ノ沢遺跡  | 遺物包含地  | 縄文時代後期         | 土坑                  |                   | 縄文土器                              |  |        |                             |

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第68集  
磐越自動車道関係発掘調査報告書

おおさかうえみち さるびたい なかだな まきの さわ  
大坂上道遺跡・猿額遺跡・中棚遺跡・牧ノ沢遺跡

平成7年3月31日印刷 編集・発行 新潟県教育委員会  
平成7年3月31日発行 〒950 新潟市新光町4-1  
電話 025(285)5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団  
〒950 新潟市一番堀通町5923-46  
電話 025(223)5642  
FAX 025(228)1762

印刷・製本 北越印刷株式会社  
〒940 長岡市福住1丁目6-27  
電話 0258(33)0306



新潟県埋蔵文化財調査報告書 第68集 『大坂上道遺跡 猿額遺跡 中棚遺跡

牧ノ沢遺跡』 正誤表 2021年11月追加

| 頁     | 位置      | 誤      | 正            |
|-------|---------|--------|--------------|
| 図版62  | 右上から3段目 | (番号なし) | 37<br>(同一個体) |
| 図版62  | 下から4段目  | 53     | 52           |
| 図版62  | 下から3段目  | 52     | 53           |
| 図版63  | 上から5段目  | 95     | 93           |
| 図版63  | 上から5段目  | 96     | 95           |
| 図版63  | 下から2段目  | 110    | 108          |
| 図版63  | 下から1段目  | 108    | 110          |
| 図版64  | 下から4段目  | 140    | 141          |
| 図版64  | 下から4段目  | 141    | 135          |
| 図版64  | 下から3段目  | 135    | 140          |
| 図版104 | 上から2段目  | 7      | 10           |
| 図版104 | 上から4段目  | 10     | 7            |